

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第170集

湊
遺
跡
他
Ⅲ

泉佐野市

湊 遺 跡 他 Ⅲ

南海本線（泉佐野市）連続立体化事業に伴う発掘調査報告書

二〇〇八年二月

財団法人
大阪府文化財センター

2008年2月

財団法人 大阪府文化財センター

泉佐野市

湊遺跡他Ⅲ

南海本線（泉佐野市）連続立体化事業に伴う発掘調査報告書



1. 調査地遠景（北西から）



2. 湊遺跡 土器群 4 製塩土器

卷頭図版 2



3. 湊遺跡 326 流路一括出土遺物 (土器群 6)



4. 湊遺跡・上町東遺跡 漁撈具 (弥生時代後期～近世)



5. 上町東遺跡 097 井戸出土遺物



6. 上町東遺跡 104 溝出土遺物

序 文

『日本書紀』に“茅渟の海”と記された海洋を西方に望む泉佐野市は、古来より交通の要衝として、あるいは中世荘園の舞台として発展を遂げ、歴史にその名を刻んでまいりました。

本書にて報告致します湊遺跡は、製塩土器や蛸壺、土錘といった漁撈関連の遺物がこれまでも数多く見つかっていますが、今回の調査で出土した未使用品と考えられる製塩土器は、塩作りという生業の具体的な様相を考える上での貴重な発見となりました。また上町東遺跡は、中世に展開した集落遺跡であることは従来知られておりましたが、今回の調査でもおびただしい量の瓦器が発見され、既往の調査成果と併せると、その集落跡は比較的広範囲に広がることもわかってまいりました。

いずれの遺跡も、時代を超えて、この地域に生きた人々の生活の痕跡を色濃く残すものであったと言えましょう。

今回の調査にあたりまして、南海電気鉄道株式会社をはじめ、大阪府岸和田土木事務所、大阪府教育委員会、泉佐野市教育委員会の関係各位の方々、そして地元の皆様からは多大なご指導・ご協力を得ましたこと、ここに深く感謝致します。

今後とも文化財保護に一層のご理解を頂きますよう、お願い申し上げます。

平成 20 年 2 月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

- 1 本書は大阪府泉佐野市湊1丁目他に計画された、南海本線連続立体交差事業に伴う、上町東遺跡および湊遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査地は、泉佐野市旭町（上町東遺跡）、泉佐野市湊1丁目（湊遺跡）に所在する。南海本線の高架線路部分の調査のため、調査区は狭長となっている。
- 3 本調査は、大阪府都市整備部岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。調査期間および調査体制については以下のとおりである。

湊遺跡他（その3）発掘調査に伴う工事〔上町東遺跡〕

受託契約名 南海本線連続立体化事業に伴う湊遺跡他発掘調査（その2）

調査契約期間 平成17年7月21日～平成18年3月24日

工事請負期間 平成17年8月1日～平成18年3月15日

調査体制 調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘 南部調査事務所所長 藤田憲司
同所調査第二係長 江浦洋 主任技師 三宮昌弘 専門調査員 関本優美子

湊遺跡他（その4）発掘調査に伴う工事〔湊遺跡〕・遺物整理

受託契約名 南海本線（泉佐野市）連続立体化事業に伴う湊遺跡他発掘調査（その3）

調査契約期間 平成18年5月1日～平成19年3月23日

工事請負期間 平成18年5月19日～同年12月22日

調査体制 調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘 南部調査事務所所長 大野 薫
同所調査第一係長 岡本敏行 副主査 三宮昌弘 専門調査員 関本優美子

湊遺跡他 遺物整理

受託契約名 南海本線（泉佐野市）連続立体化事業に伴う湊遺跡他発掘調査（その6）

調査契約期間 平成19年6月1日～平成20年2月29日

調査体制 調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘 南部調査事務所所長 大野 薫
同所調査第一係長 藤澤真依 副主査 三宮昌弘 専門調査員 関本優美子

- 4 本書で用いた現地写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影に関しては、南部調査事務所副主査 立花正治が担当した。
- 5 本書の編集・執筆は三宮および関本・奈良拓弥（調査第一係専門調査員）が行った。製塩土器等の観察については積山 洋（財団法人大阪市文化財協会）、大久保徹也（徳島文理大学）、森岡秀人（芦屋市教育委員会）、富加見泰彦・土井孝之（財団法人和歌山県文化財センター）、陶器・磁器の観察については渡辺晴香（当センター非常勤職員）、土質の観察については小倉徹也（財団法人大阪市文化財協会）の御教示を得た。

また、調査の実施にあたっては、岸和田土木事務所をはじめ、関係諸機関や下記の方々の援助を賜った。記して謝意を表したい（敬称略）。

泉佐野市教育委員会・石田成年（柏原市教育委員会）・新谷三郎（泉佐野市土地改良区湊水利組合長）

- 6 本調査に係わる写真・実測図などの各種記録類は、財団法人大阪府文化財センターで保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

- 1 本書中のレベルはすべて T.P. (東京湾平均潮位) を用いている。O.P. (大阪湾最低潮位) = T.P. + 1.3m である。また、座標値はすべて世界測地系に基づいており、単位はキロメートルとする。
- 2 本書中の方位は、国土座標 (第VI座標系) の座標北を示している。
- 3 現地調査・遺物整理は当センター作成の「遺跡調査基本マニュアル」に従って行った。なお、今回の調査は狭長なトレンチであったことから、地区割りは適さないと判断したため用いていない。
- 4 土色の記述は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修 (2003) に則っている。
- 5 報文中において、トレンチの名称は「tr.」と表記する。
- 6 湊遺跡の3トレンチについては、2005年度と2006年度調査時のトレンチの2種類が存在する。これらの混同を回避するため、2005年度調査分には05 - 1を付し、「05 - 1 - 3tr.」という表記を行う。また、遺構名についても同様に「05 - 1 - ○」とする。
例)「05 - 1 - 283 後背湿地1」
- 7 実測図の縮尺は、各トレンチ平面図は40分の1と200分の1、基本層序断面図は高さ40分の1、幅200分の1であらわしている。遺構図は20分の1である。
- 8 遺物実測図は、原則として石器・木製品・土錘は2分の1、弥生土器・製塩土器・庄内式土器は3分の1、その他は4分の1で掲載している。断面着色については、須恵器は黒、瓦器は灰色とした。陶磁器類のトーンは施釉範囲を示し、硯のトーンは欠損を示す。
- 9 写真図版の遺物写真の左下の数字は、挿図番号を示している。
- 10 遺構図、遺物実測図はすべてデジタルトレースである。
- 11 写真の縮尺は任意である。

目次

巻頭写真

序文

例言・凡例

目次

第1章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査にいたる経緯と経過	9
第3章 調査の方法	10
第4章 上町東遺跡の調査成果	13
第1節 基本層序	13
第2節 第1面・中位段丘崖	17
第3節 第3面	44
第4節 第5面	47
第5節 総括	79
第5章 湊遺跡の調査成果	90
第1節 基本層序	90
第2節 1tr. 北東部低位段丘上の調査	107
第3節 第0面	110
第4節 第1面	115
第5節 第2面	117
第6節 第3面	131
第7節 第4面	139
第8節 第5面	166
第9節 総括	191
第6章 上町東遺跡 05-1 出土茶道具について	196

写真図版

報告書抄録

図15 上町東 4tr. 第1層相当段丘崖斜面堆積層 出土遺物(その2)	35
図16 上町東 2tr. 201 井戸出土状況図・断面図	37
図17 上町東 2tr. 201 井戸出土遺物	38
図18 上町東 2tr. 185 溜井出土状況図	40
図19 上町東 2tr. 185 溜井出土状況エレベーション図・ 土層断面図	41
図20 185 溜井出土遺物	43
図21 上町東 1tr. 第3面	45
図22 上町東第3層出土遺物	46
図23 上町東 1tr. 第5面	49
図24 上町東 2tr. 第5面	51
図25 上町東 1tr. 第5面 097 井戸出土状況図・断面図	53
図26 097 井戸出土遺物(その1) 瓦器椀	57
図27 097 井戸出土遺物(その2)	59
図28 上町東 1tr. 第5面 105・108 溝断面、101 落込・ 104～106 溝・107 落込・132 畦畔断面図	62
図29 上町東 1tr. 第5面 104 溝全体図および 104 溝土器群 1 出土状況図	64
図30 上町東 1tr. 第5面 104 溝土器群 2 出土状況図	66
図31 上町東 1tr. 第5面 104 溝土器群 3 出土状況図	67
図32 104 溝出土遺物(その1) 瓦器椀	69
図33 104 溝出土遺物(その2)	71
図34 上町東 1tr. 第5面 123 溝土器 1 出土状況図	74
図35 上町東 2tr. 第5面建物 1 平面図・柱穴断面図	76
図36 上町東 2tr. 第5面建物 2 平面図・柱穴断面図	77
図37 上町東 2tr. 第5面柵列 1 平面図・柱穴断面図	78
図38 包含層(第2層以上) 出土土錘	86
図39 小型管状土錘質量分布	88
図40 小型管上土錘質量×全長相関図	89
図41 トレンチ北西壁断面図(その1)	91～92
図42 トレンチ北西壁断面図(その2)	93～94
図43 湊トレンチ断面図	95
図44 湊 1tr. 段丘上	111
図45 湊 05-1-3tr. 第0・1面	112
図46 第0～2層出土遺物(土錘除く)	116
図47 湊 1tr. 第2面	120
図48 湊 2tr. 第2面	121
図49 湊 3tr. 第2面	122
図50 湊 3tr. 第3・2面古	123
図51 湊 05-1-3tr. 第2面	124
図52 湊 中近世遺構出土遺物	125
図53 湊 3tr. 第2面古～新段差部分断面図	128
図54 湊 3tr. 第2面古 大型土坑群	129
図55 湊 05-1-3tr. 第2面 262 石詰暗渠全体図	130
図56 湊 1tr. 第3面	133
図57 湊 1tr. 第3・4(空測)面	135
図58 湊 2tr. 第3面	136
図59 湊 1tr. 第3面土坑群全体図・断面図・出土状況	137
図60 湊 05-1-3tr. 第3-2層出土遺物	138
図61 湊 2tr. 第4面	140
図62 湊 3tr. 第4面新	141
図63 湊 3tr. 第4面古(浸蝕痕完掘状況)	142
図64 147 流路出土遺物	142

挿図目次

図1 調査地位置図	1
図2 遺跡範囲図	2
図3 遺跡分布図	5
図4 トレンチ位置図	11
図5 上町東トレンチ断面図	14
図6 上町東 1tr. 第1面	18
図7 上町東 2tr. 第1面	19
図8 上町東 4tr. 第0層相当段丘崖肩部検出状況・ 段丘崖斜面堆積完掘状況・段丘崖下第1面 検出状況図	20
図9 上町東 4tr. 第1層相当段丘崖斜面堆積層内土器 1・ 陶器 1 出土状況図	21
図10 各遺構出土遺物	24
図11 表採・攪乱内出土遺物	25
図12 上町東第0層出土遺物	27
図13 上町東第1・2層出土遺物	31
図14 上町東 4tr. 第1層相当段丘崖斜面堆積層出土遺物 (その1)	32

図 65	湊 2tr. 第 4 面 196 土坑全体図・土層断面図	144
図 66	324 流路出土遺物	147
図 67	湊 3tr. 第 4 面古土器群 4 出土状況図	149
図 68	324 流路肩部土器群 4 出土遺物	151
図 69	湊 3tr. 第 4 面古 325 浸蝕痕内土器群 5 出土状況	152
図 70	325 浸蝕痕内土器群 5 出土遺物	152
図 71	290 浸蝕痕出土遺物	153
図 72	326 流路出土遺物 (その 1) 上層・下層出土遺物	155
図 73	326 流路内出土遺物 (その 2) 中層出土遺物	157
図 74	湊 3tr. 第 4 面古 326 流路中層内土器群 6 出土状況図	159
図 75	326 流路内中層土器群 6 出土遺物 (その 1)	161
図 76	326 流路内中層土器群 6 出土遺物 (その 2)	164
図 77	326 流路内中層土器群 6 出土遺物 (その 3)	165
図 78	湊 2tr. 第 5 面	168
図 79	湊 05-1-3tr. 第 5 面	169
図 80	湊 05-1-3tr. 第 5 面 (シュートバー裾部除去面)	170
図 81	湊 05-1-3tr. 第 5 面 283 後背湿地 1 全体・土層断面	171
図 82	湊 05-1-3tr. 第 5 面 283 後背湿地 1 内土器出土状況	172
図 83	05-1-283 後背湿地 1 内出土遺物 (その 1)	173
図 84	05-1-283 後背湿地 1 内出土遺物 (その 2)	174
図 85	05-1-283 後背湿地 1 内出土遺物 (その 3)	176
図 86	05-1-283 後背湿地 1 内出土遺物 (その 4) その他	177
図 87	湊 05-1-3tr. 第 5 面 284 後背湿地 2 全体図・ 土層断面図・土器 1 出土状況図	179
図 88	湊 05-1-3tr. 284 後背湿地 2 出土土器 1	180
図 89	湊 05-1-3tr. 第 5 面 285 後背湿地 3 全体図・ 土器 1 出土状況図	181
図 90	湊 05-1-3tr. 285 後背湿地 3 出土遺物	182
図 91	湊 第 4 層内 1tr. 土器群 1・2tr. 土器群 2 出土状況図	184
図 92	湊 1tr. 101 土器群 1 出土遺物	185
図 93	湊 2tr. 335 土器群 2 出土遺物	186
図 94	湊 2tr. 第 4 層内土器群 3 出土状況図	187
図 95	336 土器群 3 出土遺物	188
図 96	湊 3tr. 第 4 面古直下青灰色砂層内土器 1 出土状況	188
図 97	湊 1～3tr. 第 4 面古以下出土遺物	189
図 98	基本層序模式図	193
図 99	包含層 (第 2 層以上) 出土土錘	195
図 100	上町東遺跡 出土茶道具	197

表目次

上町東遺跡

表 1	1tr. 第 0 層 遺物破片数集計表	22
表 2	4tr. 表採遺物	23
表 3	1tr. 第 1・2 層 遺物破片数集計表	29
表 4	4tr. 第 1 層相当 遺物破片数集計表	30
表 5	201 井戸 遺物破片数集計表	36
表 6	185 溜井 遺物破片数集計表	39
表 7	1tr. 第 3 層 遺物破片数集計表	47
表 8	097 井戸 遺物破片数集計表	54

表 9	104 溝 遺物破片数集計表	65
表 10	出土土錘計測可能品	84

湊遺跡

表 11	05-1-3tr. 第 0 層遺物破片数集計表	114
表 12	05-1-3tr. 第 1 層遺物破片集計表	117
表 13	第 2 層新遺物破片数集計表	127
表 14	324 流路内上層遺物破片数集計表	145
表 15	326 流路内中層遺物破片数集計表	154
表 16	339 土器群 6 遺物破片数集計表	160
表 17	05-1-3tr. 283 後背湿地 1 遺物破片数集計表	178
表 18	05-1-3tr. 285 後背湿地 3 遺物破片数集計表	181

写真図版目次

【遺構写真】

上町東遺跡

図版 1

1. 1 トレンチ第 1 面
2. 1 トレンチ第 1 面
3. 2 トレンチ第 1 面南西半
4. 1 トレンチ第 5 面

図版 2

1. 1 トレンチ断面 No.3
2. 1 トレンチ第 5 面 123 溝土器 1 出土状況
3. 1 トレンチ第 5 面 105・108 溝断面
4. 104 溝土器群 2 (手前)・3 (奥) 出土状況
5. 104 溝土器群 1 出土状況

図版 3

1. 104 溝土器群 3 出土状況
2. 104 溝土器群 2 出土状況

図版 4

1. 097 井戸半截状況および遺物出土状況 (1 回目)
2. 097 井戸断面上半

図版 5

1. 097 井戸 礫集中部分直下 (3 回目)
2. 097 井戸 底部付近 (4 回目)

図版 6

1. 2 トレンチ第 5 面
2. 201 井戸半截状況
3. 185 溜井

図版 7

1. 4 トレンチ第 0 層相当段丘崖 肩部検出状況
2. 4 トレンチ第 1 層相当段丘崖
斜面堆積層内土器 1・陶器 1 出土状況
3. 4 トレンチ段丘崖 斜面南西部完掘状況
4. 4 トレンチ段丘崖 斜面堆積完掘状況
5. 4 トレンチ段丘崖 斜面裾部検出状況
6. サブトレンチ断面

湊遺跡

図版 8

1. 1 トレンチ第 2 面
2. 2 トレンチ第 2 面全景
3. 2 トレンチ第 2 面全景
4. 128 畦畔検出状況および土留杭出土状況
5. 2 トレンチ 河岸段丘由来の段差

図版 9

1. 3 トレンチ第 2 面検出状況（左が第 2 面新）
2. 2 トレンチ第 2 面新 貼り床検出状況
3. 3 トレンチ第 2 面 段差断面
4. 3 トレンチ第 3・2 面（古） 大型土坑群検出状況
5. 3 トレンチ第 3・2 面（古） 全景

図版 10

1. 3 トレンチ第 2 面古 大型土坑群完掘状況
2. 3 トレンチ第 2 面古 大型土坑群完掘状況

図版 11

1. 05-1-3 トレンチ第 0 面全景
2. 05-1-3 トレンチ第 1 面全景
3. 05-1-3 トレンチ第 2 面 05-1-262 石詰暗渠および土留杭

図版 12

1. 05-1-3 トレンチ第 2 面
2. 1 トレンチ第 3 面
3. 1 トレンチ第 3・4（空測）面
4. 2 トレンチ第 2 面

図版 13

1. 1 トレンチ第 3 面土坑群検出状況
2. 029（奥）～031（手前）土坑断面
3. 1 トレンチ北西壁断面（第 3 面土坑群断面）
4. 071 土坑瓦器出土状況
5. 067 土坑瓦器出土状況
6. 1 トレンチ第 4 面 噴砂脈検出状況
7. 1 トレンチ 噴差脈断面

図版 14

1. 2 トレンチ第 4 面北東半
2. 196 土坑断面
3. 3 トレンチ第 4 面新 全景
4. 3 トレンチ第 4 面古 浸蝕痕完掘状況

図版 15

1. 338 土器群 5 出土状況（左：土器 1、右：土器 2）
2. 326 流路上層遺物（土器 1）出土状況
3. 3 トレンチ第 4 面古 326 流路完掘状況
4. 3 トレンチ北西壁断面

図版 16

1. 337 土器群 4 出土状況
2. 337 土器群 4 出土状況

図版 17

1. 339 土器群 6 出土状況
2. 339 土器群 6 出土状況

図版 18

1. 05-1-3 トレンチ第 4 面 後背湿地検出状況
2. 05-1-3 トレンチ第 5 面
3. 05-1-3 トレンチ第 5 面 シュートバー裾部除去後
4. 05-1-284 後背湿地 2 断面

5. 05-1-285 後背湿地 3 土器 1 出土状況

図版 19 05-1-3 トレンチ第 5 面 05-1-283 後背湿地 1 内

1. 土器 1 出土状況
2. 土器 2・5 出土状況
3. 土器 3（左）・土器 4（右）出土状況
4. 土器 7（手前）・土器 8（左上）出土状況
5. セクション断面

図版 20 05-1-3 トレンチ第 5 面 05-1-283 後背湿地 1 内

1. 土器群 2 出土状況
2. 土器群 3 出土状況

図版 21

1. 05-1-3tr. 第 5 面 05-1-284 後背湿地 2 土器 1 出土状況
2. 2 トレンチ第 5 面全景
3. 147 流路完掘状況

図版 22

1. 1 トレンチ 101 土器群 1 土器出土状況
2. 1 トレンチ 336 土器群 3 土器 1 出土状況
3. 1 トレンチ 336 土器群 3 土器 2 出土状況
4. 3 トレンチ第 4 面直下青灰色砂層内土器 1 出土状況

図版 23

1. 2 トレンチ 335 土器群 2 土器 1・2 出土状況
2. 2 トレンチ 335 土器群 2 土器 3 出土状況

図版 24

1. 1 トレンチ段丘上第 6 面
2. 1 トレンチ北西壁 北東端
3. 1 トレンチ北西壁 低位段丘崖
4. 1 トレンチ北西壁 低位段丘崖
5. 1 トレンチ北西壁 第 4 層内黒色層堆積状況
6. 1 トレンチ北西壁 第 4 層内黒色層堆積状況
7. 1 トレンチ北西壁 147 流路肩部

図版 25 3 トレンチ北西壁

1. 全景
2. 246 流路肩部（土器群 4・5 出土附近）
3. 330 流路（最下の砂礫層）
4. 326 流路肩部
5. 326 流路肩部（最下の砂礫層は流路下層）

図版 26 05-1-3 トレンチ北西壁

1. 全景
2. シュートバー 1（中央の砂礫層）
3. 05-1-283 後背湿地 1 肩部
4. シュートバー 3（最下層の砂礫層）

図版 27 05-1-3 トレンチ北西壁

1. 全景
2. 地震痕跡？斜めのクラック
3. 地震痕跡？断層？

【遺物写真】

上町東遺跡

図版 28 1：079 土坑、2・8・9：108 溝、3・4：096 落込、5：190 土坑、6：123 溝、7：090 落込

図版 29 表採・攪乱

図版 30 1：表採、2～8：第 0 層

図版 31 1～6：第 0 層、7～9：第 1 層

図版 32 1～4：第 1・2 層、5～8：4 トレンチ第 1 層相当

段丘崖斜面堆積層

- 図版 33 4 トレンチ第 1 層相当段丘崖斜面堆積層
図版 34 201 井戸
図版 35 1：201 井戸、2～10：185 溜井
図版 36 1～3：4 トレンチ段丘崖下第 1 層、4・5：第 3 層、
6：097 井戸
図版 37 097 井戸
図版 38 097 井戸
図版 39 1～4：097 井戸、5～8：104 溝
図版 40 104 溝
図版 41 104 溝
図版 42 104 溝
図版 43 1・3～6：104 溝、2：098 鋤溝、7：第 3 層

湊遺跡

- 図版 44 1～5・8：第 0 層、6：第 1・2 層、7：第 2 層新
図版 45 1・4：第 0・1 層、2・3：第 1 層、5：第 2 層古、
6・7：第 2 層新
図版 46 第 3 層
図版 47 第 3 層
図版 48 1：第 2 層新、2：271・272 土坑、3：071 土坑、
4：158 溝、5：067 土坑、6：第 3 面土坑群？、
7：287 溝
図版 49 1・2：147 流路、3～9：324 流路上層

- 図版 50 1～3：324 流路上層、4～7：324 流路下層
図版 51 土器群 4
図版 52 土器群 4
図版 53 1～5：土器群 4、6：209 浸蝕痕、7：土器群 5
図版 54 1・2：土器群 5、3～5：326 流路下層
図版 55 1：326 流路上層、2～5：326 流路中層
図版 56 326 流路中層
図版 57 1～3：326 流路中層、4・5：土器群 6
図版 58 土器群 6
図版 59 土器群 6
図版 60 土器群 6
図版 61 05-1-283 後背湿地 1 内（1～3：土器群 1、4～6：
土器群 2）
図版 62 05-1-283 後背湿地 1 内土器群 2
図版 63 05-1-283 後背湿地 1 内
図版 64 1：05-1-284 後背湿地 2 内土器 1、2～8：05-1-285
後背湿地 3 内
図版 65 1～3：土器群 1、4～6：土器群 2
図版 66 1：土器群 2、2～4：土器群 3、5～8：第 4 層
図版 67 1～3：第 4 層、4～8：06-1-3 トレンチ第 4 面直
下青灰色砂層
図版 68 1：3 トレンチ第 4 面直下青灰色砂層、2・3：330 流路、
4：326 流路中層、5：06-1-3 トレンチ側溝

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

1、和泉地域の地質・地勢

大阪府の南西部を占める和泉地域は、その南側を和歌山県との境を成す和泉山脈によって画されている。和泉山脈は和泉層群によって成る。和泉山脈の北側には、主に領家複合岩類によって構成される低山帯が帯状に連なり、さらにその北側には大阪層群の丘陵地帯が広がる。

和泉地域で最も広い平坦地は中位・低位段丘の平坦面で、丘陵地帯から北西の海へ向けて扇形に広がる単位が並ぶが、これらの段丘平坦面も開析谷により分断されている。

河川はおおむね北西に流れるが小規模である。源流を山地に持つものは現在でも河川の呈を保つものが多いが、丘陵地帯に源流を持つものは人為的な改変を受け水路化し、溜池とつながっている。

海岸にはわずかに沖積平野が広がる。段丘先端から海岸までは概して1 kmを切る幅しかない。その中でも海岸沿いは砂堆が1列発達している。

2、遺跡周辺の地質・地形

泉佐野市（図1）周辺の主要な河川と言えば、北東から、見出川、佐野川、樫井川が挙げられる。

樫井川は源流域が、和泉山脈の和泉層群帯に広がるが、見出川と佐野川は低山帯までにとどまる。

和泉層群は主に礫岩・砂岩・泥岩の互層で、低山帯の領家複合岩類はこの付近では花崗閃緑岩・黒雲母花崗岩・石英斑岩からなる領家花崗岩類と、凝灰岩・溶結凝灰岩からなる泉南流紋岩が分布する。

1) 湊遺跡の立地（図2）

湊遺跡は佐野川の下流部の左岸に広がる遺跡で、佐野川をその北東限とする。南西は上町東遺跡の立地する中位段丘の段丘崖を限りとし、北西海側は府道63号線（旧の国道26号線）を限りに近世の湊

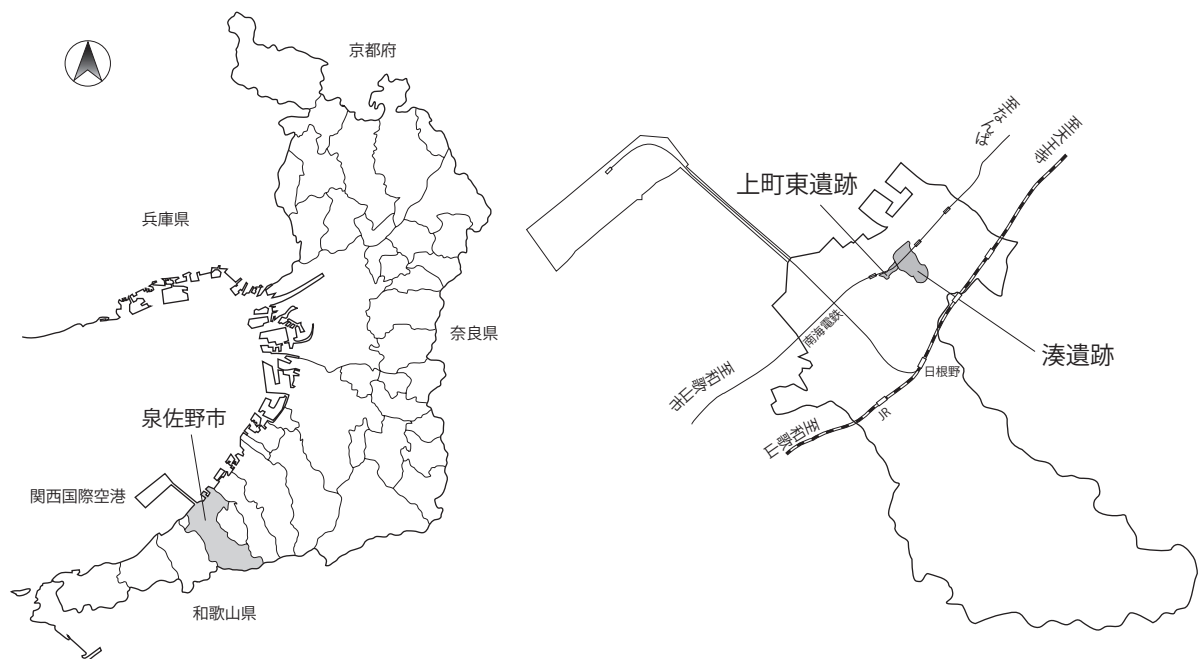


図1 調査地位置図

村の集落に接し、南東山側は丘陵地帯先端の溜池、七ノ池の手前付近を端とする。

遺跡内では、南西半に開析谷が、北東半に微高地が存在する事は知られていたが、微高地の性格は判然としていなかった。1999年発行の「新修泉佐野市史」でも、地質図では遺跡全体が沖積層の分布範囲として、地形分類図では南西の開析谷を分けずに遺跡の大部分を「下位段丘Ⅰ面」としている。

しかし、今回の調査で、北東部の微高地が低位段丘である事と、その南西側の段丘崖も確認された。また、南西部の開析谷内では、沖積平野的な堆積を経て、弥生時代後期までに狭小な谷底平野が形成され、低位段丘寄りに完新世段丘としての河岸段丘崖が形成されている事も分かった。

この低位段丘は、佐野川右岸の低位段丘と、本来一体のものが佐野川により分断されたと考えられる。

南西部の開析谷は、今回の調査区内では3本の河川が流路変更を重ねながら、堆積が進行していった状況がつかめた。河川のうち2本は、各々七ノ池・矢畑池が上流にある開析谷から来ており、一番南西側の河川は、中位段丘を開析した小さな枝谷から流下している。3本の流路は中世段階で流路の固定化が行われ縮小・水路化し、おおむね現代の水路に継続していく。現在では湊川と呼称されている。

2) 上町東遺跡の立地 (図2)

湊遺跡の南西端には明確な段丘崖が認められ、そこから南西が上町東遺跡の立地する中位段丘である。

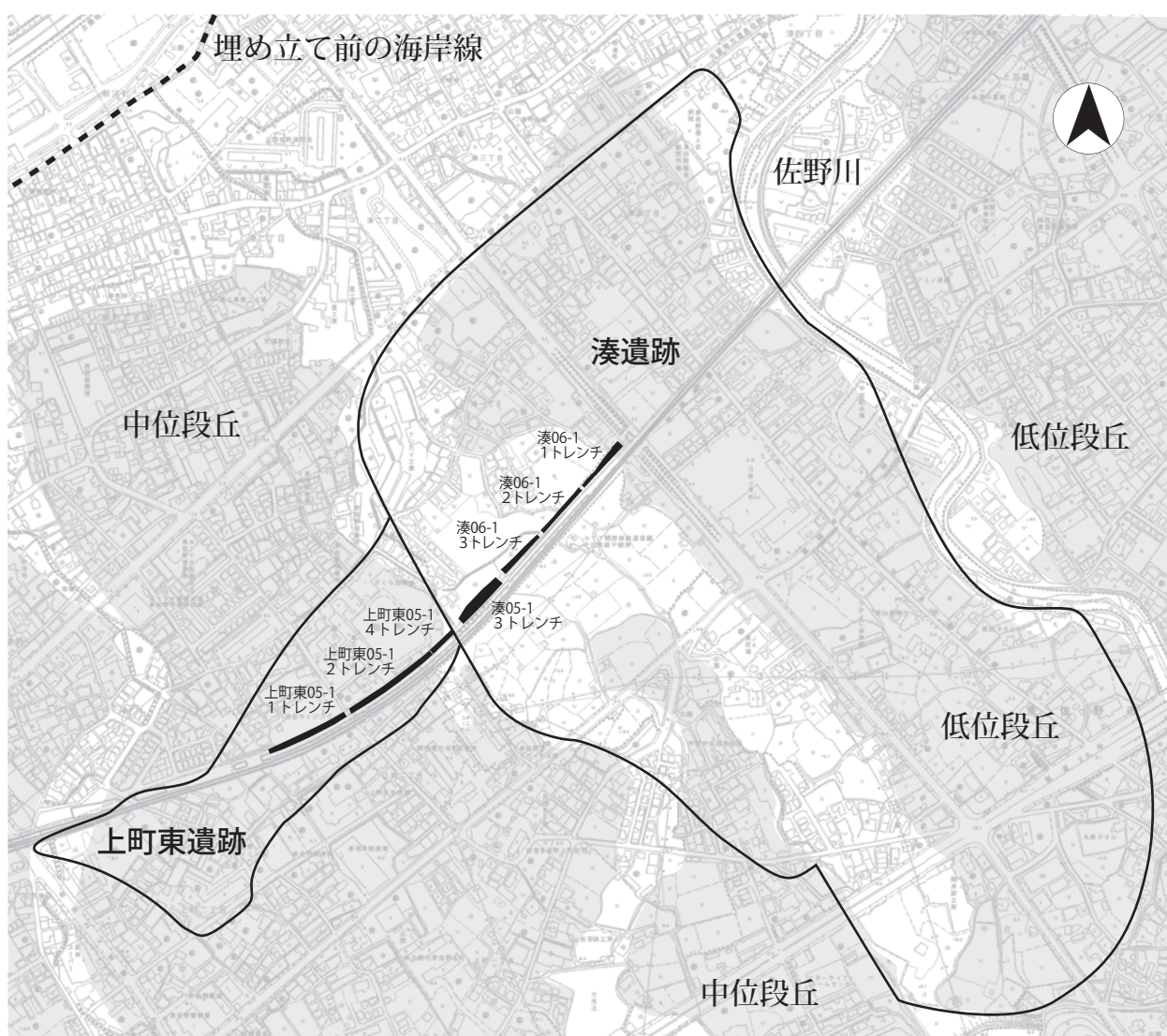


図2 遺跡範囲図 (トーン部分は段丘)

泉佐野市域で最大の平坦地形で、元々は樫井川水系の扇状地的な堆積で形成されたと考えられる。

上町東遺跡の遺跡範囲は南海本線を軸とした幅 100m ほどの範囲で、湊遺跡の南西の段丘崖から、南西端部分は円田川という小河川が段丘を開析し、これが地形的な境界と考えられる。円田川は現在、下流側では近世佐野村集落の主要な入口である春日神社の立地する部分で、明確な段丘崖を見せている。

遺跡範囲内では中央の、現在第三小学校の南西を通る道の付近の標高が最も高い。しかし、比高差は遺跡内では最大でも 1m 前後である。その道は南東では熊野街道と交差する部分に佐野王子跡があり、北西では江戸時代に佐野村の北東側に新たに開かれた佐野新町に、段丘崖を下って達する。

第 2 節 歴史的環境（図 3）

1、旧石器時代

泉南地域では後期旧石器時代の石器が散発的に出土しているが、明確な遺構は検出されていない。

出土するのは主にナイフ形石器である。湊遺跡にも出土例がある。泉佐野市長滝遺跡ではナイフ形石器の他、彫器・楔形石器・縦長剥片・横長剥片も出土し、石器製作址が存在した可能性も考えられる。

多様な石器が出土する遺跡や典型的な国府型ナイフ型石器の分布は泉北地域に偏り、泉南地域の泉佐野市三軒家遺跡、貝塚市の脇浜遺跡・地藏堂遺跡等で小型のナイフ形石器が見られる。

有舌尖頭器や木葉形尖頭器は貝塚市王子遺跡、泉南市新家遺跡・海宮宮池遺跡・滑瀬遺跡等に出土を見るが、他の遺物と共伴する例が少なく、ナイフ形石器との共伴例もない。

2、縄文時代

和泉地域最古の土器は貝塚市畠中遺跡の神宮寺式（早期）で、早期末は和泉市仏並遺跡の鶴ヶ島式系、泉南市岡田東遺跡の高山寺式土器等がある。

前期は泉南地域では唯一、泉南市フキアゲ山東遺跡で前期初頭の羽島下層Ⅱ式の出土が知られる。

岸和田市春木八幡山遺跡は後期後半を中心とするが、加曾利 E 式並行の中期後半の遺物もある。この遺跡の立地は海岸砂堆上である。その砂層は中期のものは砂粒が粗く、海が近い事を示し、後期の層は細かく海域が後退している事を示す。それ以降はまた砂粒が粗くなる。

泉佐野市では後期の三軒屋遺跡が最古の縄文遺跡である。土器や各種打製石器、石皿や敲き石も出土し、石器加工址らしき土坑などもある。樫井川の右岸低位段丘上に立地し、樫井川流域における、中心的集落と言える。下流側左岸の泉南市岡田東遺跡でも後期後半の土器が出土している。

なお、後期の特徴的な遺物としては、和泉市仏並遺跡から出土した土面を忘れる事はできない。

晩期では突帯文土器は泉南地域へはほとんど波及しない。向出遺跡では環状土坑列のような規則性のある墓域が形成される。石棒も出土したが、泉佐野市域でも三軒屋遺跡や上之郷遺跡にも見られ、和歌山県産石材が多い。三軒屋遺跡ではこの時期の住居址も確認されている。

3、弥生時代

樫井川流域の泉佐野市域では、弥生時代前期中段階に、海岸付近の船岡山遺跡と内陸部の三軒屋遺跡に集落が成立する。三軒屋遺跡が後期まで継続し、住居跡・貯蔵穴・方形周溝墓等も検出されている。中期には諸目遺跡・樫井西遺跡・道ノ池遺跡・岡ノ崎遺跡・泉南市向山遺跡に方形周溝墓が見られる。中期後半には柵原遺跡で、短期間の小規模な高地性集落が存在するが、樫井川と支流新家川間の丘陵上の泉南市新家オドリ山遺跡では同時期の 16 棟の住居が検出されている。

湊遺跡の特色である大量の製塩土器の出土は北東の岸和田市土生遺跡、貝塚市脇浜遺跡や南西の泉佐野市松原遺跡でも見られる。これらの遺跡では、弥生時代後期に製塩が始まったとされているが、幾つかは古墳時代まで下る可能性もある。

銅鐸は、和泉地域では 11 個の出土が報告されている。最も古い型式のものは岸和田市神於山おぐら谷出土の外縁付鈕流水文銅鐸である。泉佐野市近辺では他に、岸和田市流木出土の扁平鈕四区袈裟禪文銅鐸と無文小型銅鐸、泉南市岡中出土林昌寺所蔵の扁平鈕四区袈裟禪文銅鐸がある。

4、古墳時代

泉佐野市域では三軒屋遺跡・諸目遺跡・樫井西遺跡で弥生時代後期の集落が庄内式併行期まで継続する。その 3 遺跡において古墳時代中期の集落は遺跡内で位置を変え、やや断絶がある。三軒屋遺跡の中期の集落は 5 世紀前葉から始まり、後期の末まで存続する。

湊遺跡では庄内式併行期に製塩土器脚台 I～II 式による製塩が行われていたと思われる。遺跡での製塩は弥生時代後期まで遡らず、庄内式併行期に始まり、古墳時代前期内で断絶している。

湊遺跡から佐野川上流の熊取町大久保 E 遺跡からも同時期の製塩土器が出土している。

岸和田市土生遺跡は、海岸線から 1.2 km ほど離れ、製塩炉は未発見だが大量の製塩土器が出土するという、湊遺跡と似た遺跡である。時期的な中心は布留式期で、5 世紀前半までに製塩は終息か。

古墳は、中期初頭前後には、各小地域に前方後円墳が出現する。近木川流域には貝塚市地蔵堂丸山古墳が、淡輪には西陵古墳が出現するが、その両者の間の樫井川・男里川流域付近には古墳が 1 基もない。

古墳の空白地帯であった樫井川・男里川流域では、5 世紀後半にようやく古墳の築造が始まる。

樫井川と支流の新家川の間の泉南市域の丘陵上に後期を中心とした古墳群が集中するが、その中のフキアゲ山 1 号墳が 5 世紀末頃、新家 3 号墳が 5 世紀後半と考えられる。どちらも直径約 10m の円墳で、フキアゲ山古墳群は後期に東隣の尾根の兎田古墳群が後続すると考えられている。

これに対し、樫井川右岸段丘上の泉佐野市三軒屋遺跡・諸目遺跡内の長滝古墳群は、墳形の分かるものは全て方墳である。墳丘辺 20m の 1 号墳は女性人物埴輪や、須恵器は甕や器台等が出土し、5 世紀後葉～末葉、また、2 号墳も方墳で円筒埴輪が出土し、墳丘辺 18m、5 世紀末葉～6 世紀前葉と考えられる。しかし、小型竪穴式石室が主体部の 4 号墳や、横穴式石室と思われる 7 号墳もあり、7 号墳の須恵器は 6 世紀後葉まで下る。

後期の樫井川流域では先述の新家古墳群で主体部に小型竪穴式石室が多く、兎田古墳群で横穴式石室が多い対照性を見せながら並立し、周辺丘陵上にも古墳群が派生していく。最後の古墳は、三軒屋遺跡内の石ノ子古墳である。方墳で横穴式石室、7 世紀中頃の築造時期は近くの禅興寺の創建時期に近い。

5、古代

飛鳥時代、7 世紀代に、泉佐野市禅興寺・泉南市海会寺などの寺院が創建される。

禅興寺と海会寺は樫井川の右岸と左岸に位置するが、この頃の地域認識としては既に前者が日根郡の賀美郷の地域に、後者が呼嚙郷の地域とに分かれていると見た方が良いだろう。

禅興寺の伽藍配置は未確認である。最古期の瓦は、山田寺式・川原寺式・紀寺式の軒丸瓦が出土。日根造の氏寺とも推測され、郡寺的要素も指摘される。

海会寺は、最古の瓦は山田寺式・川原寺式で、伽藍配置は法隆寺式。礎石に紀ノ川流域の結晶片岩製のものがある。東隣の平坦地から、7 世紀初頭～9 世紀前葉の 29 棟もの掘立柱建物が検出され、海会寺を氏寺とした氏の邸宅であろうと考えられている。



- | | | | |
|------------|-----------|------------|-------------|
| 1. 湊遺跡 | 12. 檀波羅遺跡 | 23. 中ノ池遺跡 | 34. 岡口遺跡 |
| 2. 上町東遺跡 | 13. 市場東遺跡 | 24. 中町遺跡 | 35. 中嶋遺跡 |
| 3. 若宮遺跡 | 14. 井原池遺跡 | 25. 末廣遺跡 | 36. 白水池遺跡 |
| 4. 井原の里遺跡 | 15. 市場南遺跡 | 26. 安松遺跡 | 37. 日根野駅東遺跡 |
| 5. 森山遺跡 | 16. 市場西遺跡 | 27. 長滝遺跡 | 38. 北尻遺跡 |
| 6. 貝田遺跡 | 17. 上町遺跡 | 28. 南中安松遺跡 | 39. 俵屋遺跡 |
| 7. 上瓦屋遺跡 | 18. 若宮南遺跡 | 29. 岸ノ下遺跡 | 40. 降井家屋敷跡 |
| 8. 上瓦屋南遺跡 | 19. 大西遺跡 | 30. 岡ノ崎遺跡 | 41. 大久保E遺跡 |
| 9. 山出遺跡 | 20. 大場遺跡 | 31. 中菖蒲遺跡 | 42. 大久保B遺跡 |
| 10. 佐野王子跡 | 21. 松原遺跡 | 32. 十二谷遺跡 | 43. 大久保D遺跡 |
| 11. 檀波羅密寺跡 | 22. 中開遺跡 | 33. 小塚遺跡 | |

図3 遺跡分布図(S=1/25000)

賀美郷では泉佐野市三軒屋遺跡・諸目遺跡に7世紀代の集落が確認されている。

湊遺跡でも遺構の発見される位置に限られるが、集落が成立している可能性が高い。

奈良時代にも三軒屋遺跡は存続し、緑釉陶器や須恵器の円面硯、石帯等が出土している。

三軒屋遺跡の北側、禅興寺東隣の泉佐野市植田池遺跡からは瓦窯が発見され、奈良時代まで遡る可能性が指摘されている。また蔵骨器らしき須恵器短頸壺が土坑から出土し、墓域の存在も想定できる。

三軒屋遺跡と湊遺跡の間にある泉佐野市長滝遺跡では掘立柱の覆屋が付く木組み井戸が検出されており、井戸内からは斎申も出土した。その作りから何らかの特別な性格を持った井戸と思われる。

湊遺跡では、奈良時代の集落が確認できる。低位段丘上で熊野街道に接する。飯蛸壺や土錘が出土。

平安時代には泉佐野市域だけでも、井原の里遺跡・日根野遺跡など、中世に継続する集落が急増し、熊野街道沿いにも集落が増加する。また、泉佐野市檀波羅密寺・犬鳴山七宝瀧寺などの寺院も成立する。

湊遺跡の平安時代の集落は、低位段丘の端部から海岸の砂堆にかけ遺構が集中し、蛸壺窯や漁撈関係の遺物がある。また、遺跡内の山側南東部にも集落が成立するが、これは南に隣接する檀波羅密寺に関係する集落か。奈良時代の集落から、海側と山側に集落が分かれたようにも見える。

泉佐野市の条里制地割は、樫井川右岸段丘上に現存する。しかし、その段丘平坦面を分断する開析谷が埋積して耕地化するのが13世紀以降の例が多く、条里制地割の施行をその後だと考える説もある。

6、中世

中世荘園としては前関白九条政基が1501年～1504年(文亀元年～永正元年)の4年間、九条家領の当地に居住した記録、「政基公旅引付」が残る日根荘(泉佐野市日根野)が有名だが、鎌倉時代の日根荘では、中原氏(後の日根野氏)が預所職となっており、御家人以外に荘官としての武士も存在が知られる。

鎌倉時代の集落としては、泉佐野市域では上町東遺跡と湊遺跡が挙げられる。

上町東遺跡は溝で区画された屋敷地が密集した集落で、櫛の未成品・坩堝・鞆の羽口・鉄滓等が出土する事が知られている。この集落は、工人が集住する中世都市的な集落と言える。

湊遺跡では平安時代の海側と山側の集落が室町時代まで存続する。どちらも蛸壺・土錘が出土する。山側の集落では作業用土坑・粘土取り穴や櫛の未成品が見られ、工人集落的な様相もあった。「檀波羅密寺」銘瓦が出土している。この集落は南西に檀波羅密寺址が隣接する。

檀波羅密寺は平安時代の創建とされ、発掘調査により中心伽藍の範囲が判明している。1399年(応永6年)の応永の乱で焼亡し江戸時代に再建された。泉佐野市若宮遺跡で檀波羅密寺銘の瓦が多い。

泉佐野市周辺の集落様相が変化するのは14世紀代である。鎌倉時代末期～室町時代の館が泉佐野市日根野遺跡・机場遺跡で連なって作られた。上之郷遺跡でも環濠に土橋のある館跡が検出されている。上町東遺跡の、屋敷地が密集する集落は南西の上町遺跡に移動し、ここも工人関係の遺物が多い。

また、樫井城、土丸城、雨山城等の泉佐野市域の中世城郭も、南北朝争乱期に文献に現れる。

南北朝争乱期の日根郡の武士は複雑に争うが、応永の乱を経て、和泉国が細川氏嫡流と傍流の両守護制となっても皆存続し、結局、争乱で荘園に勢力を拡大したようである。

しかし、1467年(応仁元年)に応仁の乱が始まり、畠山氏の跡目争いや細川氏の内訌等の争乱が続き、その過程で地侍の中に根来寺衆となるものが現れ、しだいに根来寺の影響が強くなる。

16世紀中頃に泉南地域はほぼ根来寺の勢力圏に入る。だが、惣村の信仰は一向宗であり、本願寺と根来寺の協力体制の下、一向宗徒でもあり、根来寺衆でもある惣村の連合のような体制となった。

7、近世

1576年(天正4年)からの信長の石山本願寺攻めが始まると、本願寺救援のため、紀泉の一向宗徒・根来寺衆は毛利と協力し、貝塚から海路で木津へ物資を搬送している。翌年、信長は雑賀を目指し進軍、貝塚の一向宗道場を焼き払う。石山合戦は1580年(天正8年)の顕如の石山退去により終息する。翌々年、信長は本能寺の変で倒れ、羽柴秀吉が後を継ぐ。

秀吉は1585年(天正13年)根来攻めを行い、この年、秀吉は関白となり、翌年豊臣の姓を賜う。

朝鮮へ出兵した文禄・慶長の役(1592・1597年)に、その水先案内・輸送等に佐野漁民が活躍した故に対馬諸浦の漁業権を認められ、それが「佐野網方」の起源だと後世の由緒書にある。

そして、1615年(元和元年)大坂夏の陣の榊井合戦が泉南最後の合戦となり、江戸時代を迎える。江戸時代には泉佐野市周辺はほとんどが岸和田藩領であり、岸和田藩主は最初松井氏であったが、1640年(寛永17)以降岡部氏が入部し、幕末まで続いた。

しかし、中庄村と瓦屋村は、小堀遠州を初代として小堀家領であった。

岡部家の支配は、熊取の中家・降井家、佐野の藤田家・吉田家等の大庄屋七人衆を介して行われ、小堀家領の中庄村では新川家が代官庄屋を勤めた。これらの家は中世以来の有力農民層である。

佐野には、井原西鶴の日本永代蔵のモデルになった食野家・唐金家や奥家等の豪商が勃興した。主に廻船業により全国規模の商売を展開し、金融面では大名貸も行い、農地を兼併して豪農的性格もあった。

産業としては漁業が盛んで、農業では棉作が盛んになり、岸和田藩の政策として甘蔗栽培も奨励された。それらを原料として綿織物・製油・製糖等の産業も興る。鏡や櫛も特産品として知られた。

佐野は瓦葺の民家が密集する町場を形成し、都市的景観であったが、行政上は佐野村と呼ばれていた。後に俵屋新田の開発に伴い佐野新町が作られた。主要な分村として熊野街道沿いの佐野市場村がある。

湊村は中庄村に属し、村領内で上出村と二大中心を成す。紀州街道より海側の砂堆上の佐野川と湊川の間にかがみ家が集中していた。佐野新町から連続する湊村新屋敷という小分村も見える。

泉佐野市山出遺跡では近世の小家屋の様相が検出された。各地の陶磁器が出土、中国製青花も2片のみだが出土した。瓦も多く出土している。17世紀後半～18世紀代のもので、当時は瓦屋村の分村の山出村の範囲と考えられる。小規模な家でも瓦葺で、日常に使う器も貧弱でないのは注目できる。

泉佐野市大場遺跡は佐野町場の南西端付近で調査され、護岸設備を持つ「溜池状」遺構と後背湿地が検出された。付近に豪商食野家の屋敷があった。陶磁器類は中国製品も多く、優品もある。18世紀前後のもの。刷毛や鉋台等の工具類も見られる。当時の佐野の町の様相がうかがえる貴重な調査であろう。

幕末になると、佐野の豪商や岸和田藩の庄屋階級から文人や国学者が多く出てくるが、かたや廻船業の衰退や大名貸しの焦げ付きから食野家や唐金家等の豪商の没落も始まる。

8、近現代

明治維新を迎え、廃藩置県、村々の合併統合等があり、1881年(明治14年)堺県の大阪府への統合、1888年(明治21年)の市町村制施行でようやく地方行政区画も安定する。

1897年(明治30年)には南海鉄道が難波から佐野までの路線を開通させ、翌年には和歌山までの路線を開通させる。昭和5年に阪和電鉄が開通させた現JR阪和線よりはるかに早い時期である。

第二次世界大戦は泉南地域にも大きな被害をもたらしたが、その他、大戦中に建設が進められ、結局利用されないまま終戦を迎えた佐野飛行場が、広大な面積の歴史的景観を破壊した事が惜まれる。

昭和23年に泉佐野市が誕生し、昭和29年には現在の市域に拡大したが、地場産業の「タオルの町」

の基礎は江戸時代の棉栽培の伝統を引き、泉州たまねぎや水茄子といった農産物は中世以来の水利体系に支えられたものである。また、大阪湾有数の漁港として知られる佐野漁港の賑わいは、いにしえからの茅渟の海の恵みである事は言うまでもない。

参考文献

- 八幡一郎・大場磐雄・内藤政恒 1984年『新版考古学講座第3巻 先史文化—無土器から縄文』雄山閣
- 堅田直 1965年『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』岸和田市教育委員会・(財)古代学協会
- 2000年『向出遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 森浩一他 1991年『大阪府史別巻 第1巻(古代編I)』大阪府史編纂専門委員会
- 1992年『貝塚市の歴史と文化』貝塚市教育委員会
- 石部正志・鈴木重治 1979年『岸和田市史第1巻 自然・考古編』岸和田市史編纂委員
- 1996年『下田遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 1986年『仏並遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会
- 2007年『大阪府埋蔵文化財調査報告書2006-2 大町遺跡』大阪府教育委員会
- 1989年『山田海岸遺跡 発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会
- 1980年『和泉市史(復刻版)』和泉市史編纂委員会
- 1993年『泉佐野の歴史と文化財第2集 泉佐野の遺跡—原始・古代編—』泉佐野市教育委員会
- 1995年『泉佐野の歴史と文化財第3集 泉佐野の遺跡—中世編—』泉佐野市教育委員会
- 1991年『中世の都市と農村』泉南市教育委員会
- 1986年『脇浜遺跡 発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会
- 1986年『山出遺跡発掘調査報告書 —85-1の調査—』泉佐野市教育委員会
- 1987年『泉南市史 通史編』泉南市史編纂委員会
- 1997年『大久保E遺跡発掘調査概要報告書I』熊取町教育委員会
- 2007年『大西遺跡、若宮遺跡』(財)大阪府文化財センター
- 2006年『新修 泉佐野市史 第9巻 別巻考古編』泉佐野市史編さん委員会
- 1980年『泉佐野市史(復刻版)』泉佐野市役所
- 2005年『タイムスリップ! いずみの国の弥生時代』貝塚市教育委員会
- 2005年『地蔵堂丸山古墳と大阪の前期古墳』貝塚市教育委員会
- 1999年『新修 泉佐野市史 第13巻 絵図地図編』泉佐野市史編さん委員会

第2章 調査にいたる経緯と経過

関西国際空港建設に関連したアクセス道路や鉄道の建設に伴う調査は、昭和60年2月からの大阪府教育委員会による分布調査から始まった。

その後、平成2年から平成6年までの(財)大阪府埋蔵文化財協会による調査がJR、南海本線、府道関連の空港へのアクセス部分で行われ、平成6年には関西国際空港が開港したが、関連事業は継続し、南海本線の泉佐野市域での高架化と、泉佐野駅前再開発を原因とする泉佐野市教育委員会の調査が平成7年から平成9年度にかけて行われた。また、平成7年度に(財)大阪府埋蔵文化財協会は(財)大阪文化財センターと統合し、(財)大阪府文化財調査研究センターが発足した。

平成9年度にこれら一連の事業の締めくくりとなる、南海本線(泉佐野市)連続立体交差事業の本線高架化工事の計画が具体化したことから、平成10年11月に大阪府教育委員会と大阪府、泉佐野市、南海電気鉄道株式会社、(財)大阪府文化財調査研究センターの5者間で、「南海本線(泉佐野市)連続立体交差事業における埋蔵文化財調査に関する協定」が締結された。

これに基づき、平成10年12月に南海電気鉄道株式会社との委託契約を交わし、(財)大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を実施する事になった。平成10年12月から平成11年11月までと、平成12年8月から平成12年12月までの期間で、南海本線上り線路部分の調査を行い、平成13年度に遺物整理事業、14年度に印刷製本を経て、平成15年2月に「(財)大阪府文化財センター調査報告書第87集 泉佐野市湊・旭町・大宮町所在 湊遺跡他 一南海本線(泉佐野市)連続立体化工事(第1工区)に伴う発掘調査報告書一」が刊行された。なお、(財)大阪府文化財調査研究センターは、平成14年度に(財)大阪府文化財センターと改称している。

さらに、平成14年4月から平成15年2月にかけて、旧線路、旧駅舎部分の調査を行い、平成15年3月から平成16年3月までの遺物整理事業を経て、「(財)大阪府文化財センター調査報告書第111集 泉佐野市湊・旭町・大宮町・若宮町・大西町所在 湊遺跡他Ⅱ 一南海本線(泉佐野市)連続立体交差事業(第1～3工区)に伴う発掘調査報告書一」として平成16年3月に刊行した。

今回の調査は南海本線(泉佐野市)連続立体交差事業に伴う調査としては最後になる。一連の工事の工用仮設道路として使用されていた、現在の高架の北西沿いに当たる部分の調査である。

平成17年8月～平成18年3月は南海本線連続立体化事業に伴う湊遺跡他発掘調査(その2)として事業契約され、湊遺跡他(その3)を工事名として、調査名は上町東遺跡05-1・湊遺跡05-1として行った調査と、平成18年5月から同年11月にかけて、南海本線(泉佐野市)連続立体交差化事業に伴う湊遺跡他発掘調査(その3)として事業契約され、湊遺跡他(その3)を工事名として行われた調査のうち、調査名、湊遺跡06-1として行った調査を、平成18年12月から平成19年3月までと、平成19年6月から11月にかけて遺物整理事業を行ったものの成果である。

なお、平成18年度に行われた、南海本線泉佐野駅敷地から南西の線路沿いにかけての、若宮遺跡・大西遺跡の調査の成果は、「(財)大阪府文化財センター調査報告書第153集 泉佐野市大西遺跡、若宮遺跡 南海本線(泉佐野市)連続立体化事業(その4)に伴う調査報告書」、「(財)大阪府文化財センター調査報告書第157集 泉佐野市若宮遺跡 南海本線(泉佐野市)連続立体化事業(その5)に伴う発掘調査報告書」として、既に平成19年3月に刊行されている。

第3章 調査の方法

今回の調査区は南海本線の線路敷地内で、高架化前の旧線路盛土の北西裾部分に当たる。長さは約550mあるものの、幅は平均的に10m以下であり非常に狭長な調査区となっている。

今回の調査は2003年8月に施行された(財)大阪府文化財センターの「遺跡調査基本マニュアル(暫定版)」にのっとり行った。そのため、当センターの既往の調査で使用していたA区からP区に至るトレンチ設定を踏襲していない。

2005年度の調査は当初「上町東05-1」の調査として進められたが、上町東05-1-1～4トレンチのうち、05-1-3トレンチは実際には湊遺跡の範囲にある。原図・写真・遺物等はそのままの名称で登録・保管されているが、当報告書では湊遺跡05-1-3トレンチとし、湊遺跡に含めて報告する。従って、上町東遺跡の報告ではトレンチが「1tr.・2tr.・4tr.」の3トレンチとなる(図4)。2006年度の調査区は、湊遺跡06-1-1～3トレンチとなっているため、報告書内、湊遺跡の成果報告の部分では2006年度のトレンチを「1～3tr.」と表記し、05-1-3トレンチを「05-1-3tr.」と表記する。御理解願いたい。

また、既往の調査のトレンチとの位置関係については、南海本線の路線内で並ぶ関係にあるが、湊遺跡の1tr.がA地区より北東側、2tr.がA地区と並び、3tr.がB地区、05-1-3tr.がC地区、上町東遺跡の4tr.がD-1地区、2tr.がD-2地区、1tr.がE地区の横にほぼ対応する。

南東側の長辺は過去の調査から残置されていた矢板を利用し、上町東遺跡1・2・4tr.は北西長辺に矢板を打設した。湊遺跡の1・2tr.の北西長辺は工事用仮設道路の土留めの矢板を利用、湊遺跡3tr.と05-1-3tr.は掘削深度が深く工事用仮設道路の矢板の強度に不安があるため北西長辺は1割勾配のオープンカットとした。

上町東遺跡4tr.は中位段丘崖部分であるので、段丘崖肩部上の調査の後、その部分を削平し支保工を施してから段丘崖下部の調査を行った。このトレンチは厳密には上町東遺跡と湊遺跡の境にかかり、段丘崖下は湊遺跡であるが、段丘崖下は第1面で掘削限界に達し、サブトレンチで下部の土層を確認するまでで終了したことと、出土遺物のほとんどが段丘崖上から段丘崖斜面に堆積したものであったので上町東遺跡に含め報告する。

工事用仮設道路として、60cm厚のバラス盛土とアスファルト舗装がなされていたが、その分は本体工事の作業として除去してもらい、その下の盛土から発掘調査として機械掘削を行った。機械掘削に関しては地盤改良が行われていた部分に関してはクラッシャーを使用し、小割りしてから除去した。盛土直下の耕作土から人力掘削で調査を行い、上町東遺跡においては中位段丘構成層に達した事が確認できた深度で調査を終わり、湊遺跡は1tr.の一部は低位段丘構成層にかかった深度で、他は開析谷内の堆積であったため、安全が確保できる深度までで調査を打ち切った。

上町東遺跡05-1の調査は、地元調整などを経て、2005年9月5日に矢板打設開始、9月21日に1tr.の機械掘削を開始し、実質的に調査に入った。トレンチ番号順に調査を進め、2006年3月10日に4tr.の埋め戻しを終り、3月15日を以って調査を終了した。

湊遺跡06-1の調査は2006年7月3日から1tr.の機械掘削開始、これもトレンチ番号順に調査を進め、12月10日に3tr.を埋め戻し、12月28日で調査を終了した。

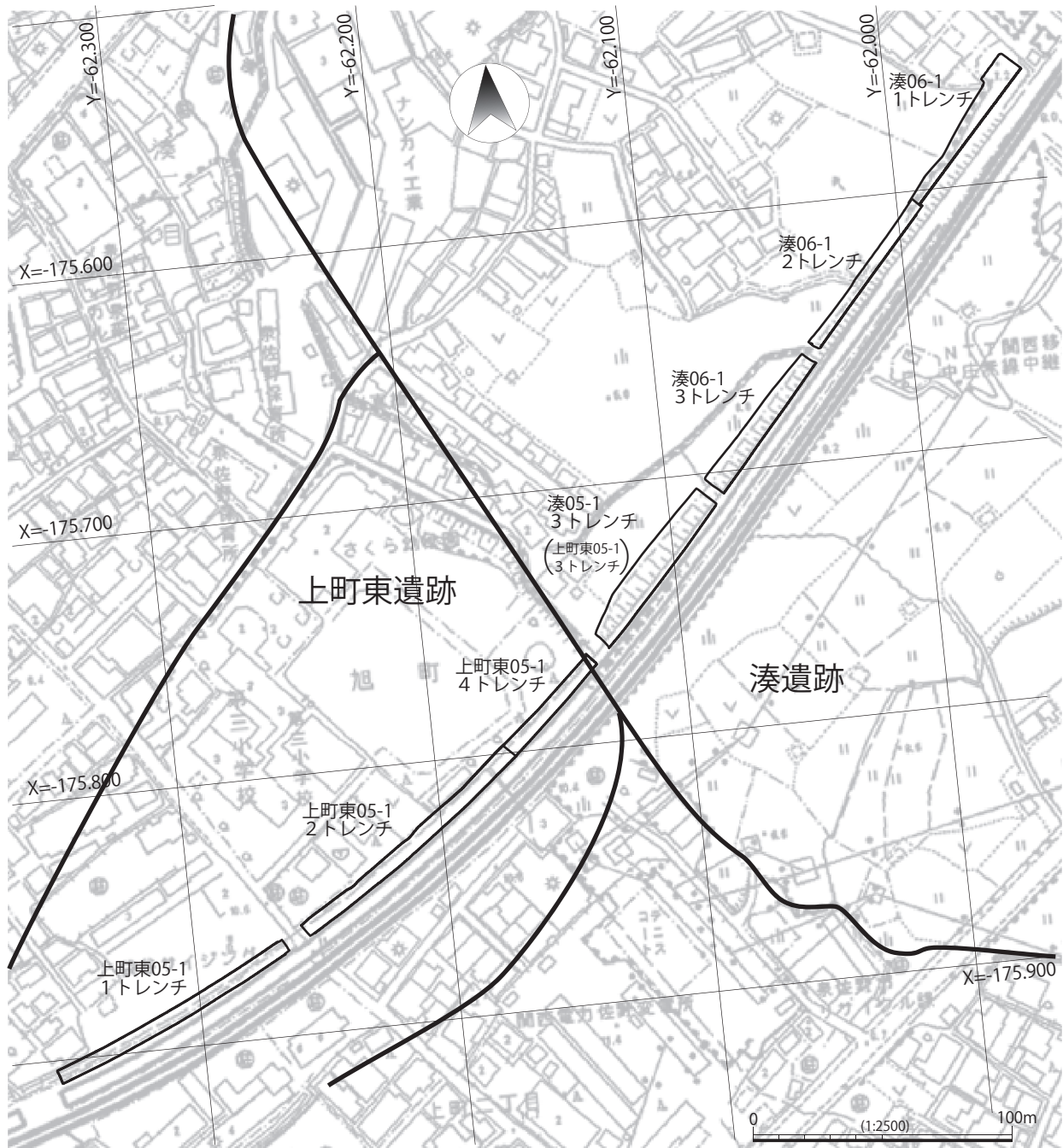


図4 トレンチ位置図 (S=1/2500)

基本的に位置的な記録は国土座標（第Ⅵ座標系）を用いているが、世界測地系を使用するようになっているので、過去の調査の国土座標とは異なり、注意が必要である。方位は座標北を使用している。当センターのマニュアルでは国土座標による 10m メッシュで遺物を取り上げるのを基本としているが、トレンチが幅 10m 以下で座標と斜行する形状であるので、それは行っていない。

標高は東京湾平均潮位 (T.P.) を基準としている。大阪湾最低潮位 (O.P.) との関係は $T.P.0m = O.P. + 1.3m$ である。

遺構名は調査毎に通し番号をつけ、番号末尾に遺構種別を付加する。「123 溝」等のようにである。ただし、同種別の遺構に番号を振った方が理解しやすい場合は「263 後背湿地 1」等、種別の後に番号を振る事もある。湊遺跡 05 - 1 - 3tr. の遺構番号は上町東遺跡 05 - 1 の調査の中での通し番号となっ

ているので、報告書内では「05 - 1 - 345 溝」等と表記する。

遺構面の名称に関しては、基本層序の層の上面をその層と同じ番号の面とする。つまり第3層の上面が第3面である。ただし、遺構が存在しないため、平面的に調査をしていない面もある。また、トレンチ断面図に記載した番号は基本層序の番号ではない。その土色・土質の一覧で相当する層には基本層序を付記してあるのでそれを参照されたい。

基本層序はトレンチごとではなく、遺跡単位で共通している。上町東遺跡では中位段丘平坦面の基本層序として汎用性のあるものになっている。湊遺跡では遺跡内の南西半を占める開析谷を横断する調査となり、部分的には堆積の同時期性に幅を持たせなければならないところはあるが、遺物時期から見ても整合性のあるものとなっている。

遺構面の実測に関しては各トレンチで1回、ヘリコプターによる写真測量を測量業者に委託して行っている。他の面はトレンチ毎に仮設の測量杭を設け、それを基準に50分の1または100分の1の平板測量を行い、仮設杭の国土地座標から座標を復元する方式をとった。主要な遺構や遺物の出土状況に関しては、同じ仮設杭から割付を行い、20分の1または10分の1で実測し、必要な標高を記録し、それを元に整理段階でエレベーション図を作成した。

土層断面図はトレンチ北西壁を基本に20分の1で実測したが、上町東遺跡は攪乱が多く、ほとんどの部分で実測できていない。

出土遺物は洗浄・注記後、全て種別や器種毎の破片数を数え、復元し、図化可能なものから必要なものを実測した。近世遺物と土錘はかなり点数を絞り込んだが、他は図化可能なもののほとんどを図化、掲載した。小型の遺物は1分の1または2分の1、弥生土器と製塩土器・庄内式土器は3分の1、その他の遺物は4分の1で掲載している。

記録写真に関しては、現場のものは35mmの白黒とカラーズライド、6×7の白黒で撮影し、台帳登録用にデジタルカメラでも撮影した。撮影は現場調査担当者が行った。遺物に関しては南部調査事務所写真室が行った。

写真・図面・遺物等は登録の上、当センターが保管している。

第4章 上町東遺跡の調査成果

第1節 基本層序

1、土層の残存状況

今回上町東遺跡として報告する調査区は 05 - 1 - 1・2・4 tr. である。05 - 1 - 3 tr. は湊遺跡の範囲内で、そちらに含め報告する。各トレンチは 1 tr.・2 tr.・4 tr. と呼称する。

調査区の南東側長辺は以前の矢板打設の際に攪乱を受けていたので、トレンチの土層断面図は北西側長辺で取る事にしたが、そこもまた、攪乱が多く、残りが悪かった。

また、第1層まで残存していたのは 1 tr. から 2 tr. 南西側までで、それより北東側は次第に削平が強くなり、2 tr. の中ほどで盛土直下に直接中位段丘構成層が露出し、残存する遺構も本来の切り込み面が不明となっていた。さらに北東側では残存する遺構もほとんどない状態となっていた。4 tr. の段丘崖肩部で一番削平が強く、本来の中位段丘の高さをかなり失っていると思われる。

それらの理由で、土層断面を実測できたのは 1 tr. の一部分にすぎない。しかし、平面的に土層を追い、遺物も分別し検討した結果、中位段丘平坦面上の広い範囲で適用できそうな基本層序が把握できた。

2、各層の様相（図5の土色・土質に基本層序を付記）

風化を受けた砂岩等の礫が多い中位段丘構成層上で、古土壌を利用して中世に開墾がなされ、それ以降、耕土が積み重なるような状況である。時代が下るにつれ、耕地の段差が解消され、耕地区画が大型化し、旧段差下段側に古い耕土が残存していく。今回は、中世と近世の耕土が分別できた事が層序的な大きな成果である。

なお、土質の表記で、耕土等、生物擾乱を受け堆積当初の構造を失った層や、混濁状態で堆積した層には「砂質土・粘質土」の用語を使うが、岩屑性堆積物に関しては、例えば「砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり。」が地質学的な記載法の「粗砂混じりシルト質細砂」に読み替えられるようになっている。

第0層 盛土直下の耕土である。盛土は上下2層に分かれ、下の層は上面が北西側に下がっていくので、これが旧の線路敷地内の盛土と思われる。したがって第0層は明治30年開通の南海鉄道敷設前まで耕作されていた耕土と考えられるので、その上面は調査せず包含遺物のみ取り上げた。

灰色 5Y4/1 砂質土、細砂主体、シルト・粗砂若干あり、斑状 Fe あり、下部に薄いシルト層はさむ。薄く堆積したシルトは耕作の繰り返しで耕土下に形成された「鋤床」である。

第1層 第0層より幾分有機分が溶脱して明色化している。耕土として機能している期間で段差が解消された部分では2層に分かれる。その場合も下層が上層より明色で粗砂の多い傾向にある。平均的な層厚 8 cm ほど。包含遺物には江戸時代中・後期頃のものが見られる。

灰～黄灰色 7.5Y4/1～2.5Y5/1 砂質土、細砂主体、シルト・粗砂～小礫若干あり、斑状 Fe 若干あり、Fe が多い部分では明褐～にぶい黄橙色 7.5YR5/6～10YR6/3 を呈す。

第2層 鉄分の沈着が多いが、これは第1層が耕土として機能していた期間が長く、その直下層であったためと思われる。基本的には良く攪拌された砂質の旧耕土である。層厚は 10 cm ほど。染付け等の近世遺物が包含されており、江戸時代頃の耕土と考えられる。この層までは土錘と蛸壺の破片も多く包含されている。第1層より砂粒多く、有機分の溶脱も進行している。

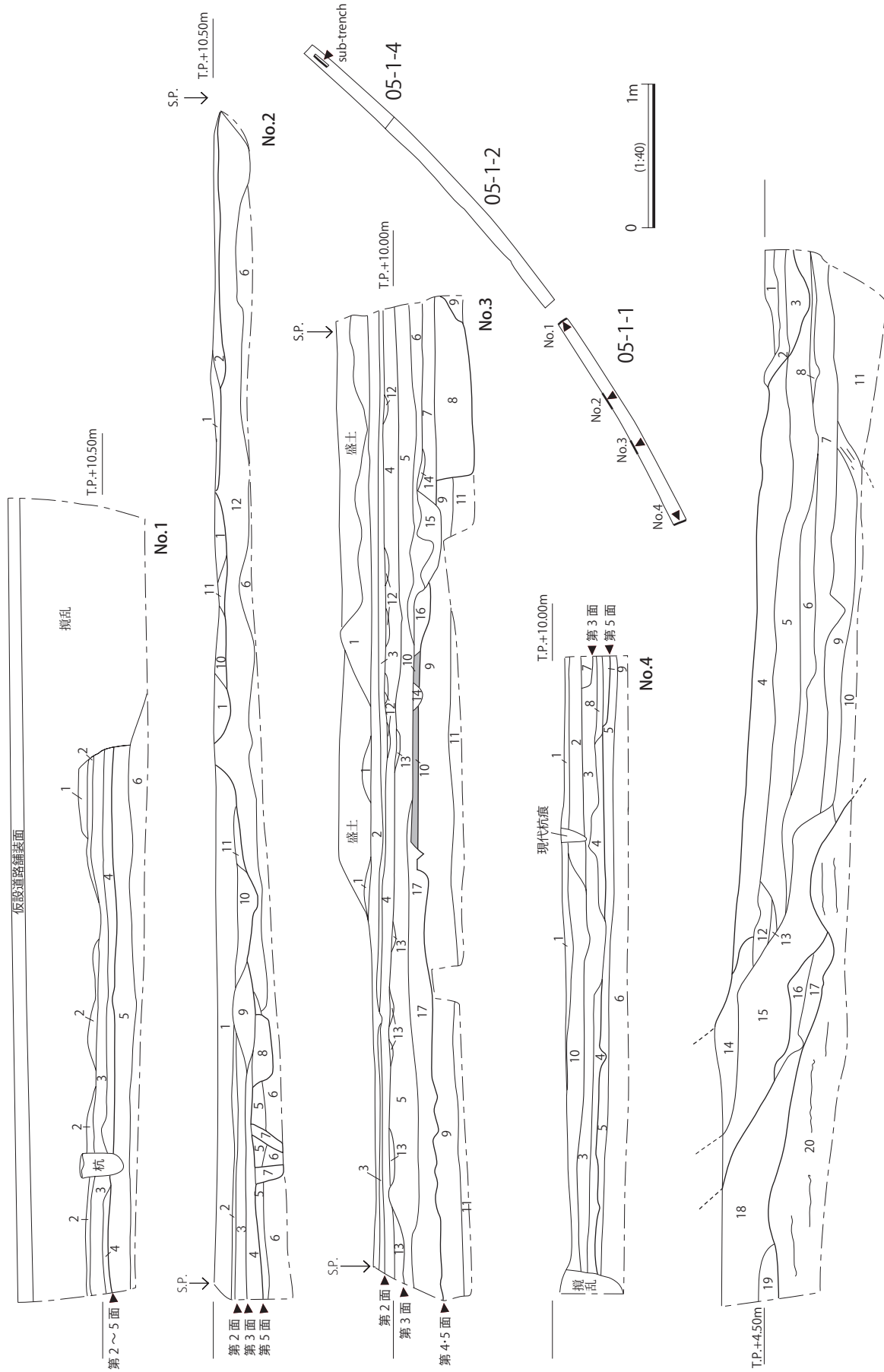


図5 上町東遺跡 トレンチ断面図(S=1/40)

上町東遺跡トレンチ壁断面(図5)土色・土質

1 tr.断面No.1(北東側短壁)	
1	「黄橙～黄褐色10YR7/8・5/6シルト～粘土、Feあり」のブロック間に「灰色5Y6/1細砂」上面Mn沈着、黒褐色7.5YR3/1を呈す。盛土(中位段丘構成層起源)
2	灰色5Y5/1砂質土、細砂主体、粗砂若干あり、斑状Feあり、下部に灰色5Y6/1シルトの沈殿あり。第0層。
3	灰色5Y4/1砂質土、細砂主体、粗砂～極粗砂若干あり、シルトのブロックあり、斑状Feあり。第1層。
4	上部にぶい黄褐色10YR5/4、他黄灰色2.5Y6/1砂質土、上部のFe以外はほぼ3に同じ。第1層。
5	ぶい黄橙～黄褐色10YR7/4・7.5YR6/6粘質土、シルト主体、細砂～粗砂わずかにあり、Feあり、Mn粒多し。土壌化した中位段丘構成層上部。第5層。
6	明黄褐色10YR6/6粘質土、シルト主体、風化礫起源の粗砂～細砂あり、Fe・Mn粒あり。中位段丘構成層。
1 tr.断面No.2(北西壁北東寄り)	
1	黄灰色2.5Y5/1砂質土、細砂主体、シルト若干あり、粗砂～小礫若干あり、斑状Feあり。第1層。
2	明褐～ぶい黄褐色7.5YR5/6・10YR6/3質は1に同じ、Fe多し。第1層。
3	灰黄褐色10YR4/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、小礫わずかにあり、Fe・Mnあり。第2層。
4	暗灰黄色2.5Y5/2粘質土、シルト主体、シルトの小ブロックあり、細砂～粗砂若干多し、小礫あり(風化礫)、Mn粒若干Feわずかにあり。盛土系第3層。
5	明黄褐色10YR6/6シルトのブロック間に暗灰黄色2.5Y5/2シルトあり、粗砂～小礫あり。第4面整地土?
6	褐色10YR4/6ブロック上の細砂～シルトのブロック(風化礫の痕跡)間に黄褐～暗灰黄色2.5Y5/6・5/2シルト・粗砂～小礫あり。中位段丘構成層上部。
7	5・6の混濁。遺構埋土(杭痕?)
8	灰黄褐色10YR4/2粘質土、シルト主体、細砂わずかにあり、小礫～粗砂あり。第4層起源遺構埋土。
9	黄灰色2.5Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂若干あり、斑状Feあり。第2層系畦畔。
10	9とほぼ同じ。第2面遺構埋土。
11	灰色5Y4/1質は9とほぼ同じ。第2層。
12	ぶい黄褐～灰黄褐色10YR5/4・4/2粘質土、シルト～粘土主体、小礫多し、粗砂若干あり、Feあり、Mn粒わずかにあり。中位段丘構成層上部の二次堆積。第5層。
1 tr.断面No.3(北西壁南西寄り)	
1	灰色5Y6/1砂質土、細砂主体、シルト若干あり、粗砂・斑状Feあり、下端に薄いシルト層あり。第0層。
2	灰色7.5Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂あり、小礫わずかにあり、斑状Fe若干あり。第1層。
3	黄褐色2.5Y5/4砂質土、Fe多い以外2と同質。第1層。
4	黄褐～暗灰黄色2.5Y5/4・5/2砂質土、細砂～シルト主体、中砂多し、小礫若干あり、Feあり、Mn粒わずかにあり。第2層。
5	暗灰黄～黄褐色2.5Y5/2・5/4粘質土、シルト～細砂主体、シルトの小ブロックあり、中砂～粗砂若干あり、小礫わずかにあり。盛土系第3層。
6	黄褐色2.5Y5/4シルトのブロックと、その間に黄灰色2.5Y5/1細砂、中砂～粗砂あり、小礫若干あり、Feまだらにあり、耕土系第3層。
7	「黄褐色2.5Y5/4・5/6シルト」・「黄灰色2.5Y5/1砂質土、細砂主体、シルト・粗砂あり。」・「褐色10YR4/1シルト」のブロック。108溝埋土(人為的か)
8	灰黄褐色10YR4/2粘質土、シルト主体、粗砂～小礫若干あり、細砂・中礫わずかにあり。108溝埋土。
9	明黄褐色10YR6/8シルト、細砂～粗砂・風化小礫わずかにあり、Fe多し。中位段丘構成層上部。第5層。
10	黄褐色2.5Y5/3シルト、細砂若干あり、粗砂わずかにあり、Fe・Mn粒あり。第4層。
11	明黄褐色2.5Y6/6シルト～細砂、斑状Feあり、小礫わずかにあり。中位段丘構成層上部。
12	黄褐色2.5Y5/3砂質土、Mn粒あり、ややFe少ない他は3に同じ。第1層床面鋤溝埋土。
13	黄褐色2.5Y5/4砂質土、ほぼ4に同質。第2層床面鋤溝埋土。
14	6と同質。耕土系第3層床面遺構。
15	暗灰黄色2.5Y4/2シルト、細砂若干あり、9のブロックわずかにあり、Mnあり、有機分多し。105溝埋土。
16	15と9のブロック。
17	黄灰色2.5Y4/1粘質土、シルト～細砂主体、シルトの小ブロック多し、粗砂あり、小礫～中礫わずかにあり、斑状Fe若干あり、Mn粒あり。耕土系第3層。
1 tr.断面No.4(南西側短壁)	
1	灰色7.5Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂若干・斑状Feあり、炭化物わずかにあり。第1層。
2	暗灰黄色2.5Y5/3砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂あり、小礫若干あり、Feあり上部に多し。第2層。
3	灰オリーブ色5Y5/3粘質土、シルト～細砂主体、シルトの小ブロック・粗砂～小礫若干あり。盛土系第3層。
4	灰オリーブ色5Y5/3・5/2粘質土、シルト～細砂主体、シルトの小ブロックあり、5のブロックわずかにあり、粗砂～小礫若干あり。耕土系第3層。
5	明黄褐色2.5Y6/6・6/8シルト、細砂～粗砂若干あり、小礫(風化礫)わずかにあり、Fe多し。第5層。
6	「明黄褐～黄灰色2.5Y6/6・6/1細砂～シルト」の間に中礫～小礫(風化礫)多し、それ起源の粗砂あり、斑状Feあり。中位段丘構成層上部。
7	灰褐～黄灰色7.5Y4/2・2.5Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、中砂若干あり、網目状Feあり。遺構埋土か。
8	4に5のブロック多く入る。耕土系第3層上面遺構埋土か。
9	ほぼ4と同質。8の下層埋土。
10	黄灰色2.5Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、中砂～小礫あり、炭化物わずかにあり、管状Feあり、粒状構造顕著。第2層か。
4 tr.サブトレンチ北西壁断面(浸遺跡の基本層序の第1層以下)	
1	黒～オリーブ灰色2.5GY2/1・3/1粘質土、シルト主体、細砂～粗砂あり。第1面遺構埋土。
2	「灰色7.5Y4/1シルト」のブロック間に1が入る。1と同じ遺構の埋土。
3	オリーブ黒色10Y3/1中砂～小礫、シルト若干あり。1と同じ遺構の埋土。
4	オリーブ黒色5Y3/1粘質土、シルト主体、細砂と微小な植物遺体多し、炭化物若干あり。第1層。
5	灰色5Y4/1粘質土、シルト～細砂主体、植物遺体多し。第1層?
6	灰オリーブ～灰色5Y5/2・5/1砂質土、中砂～シルト主体、植物遺体若干あり、小礫わずかにあり。第1層?
7	灰色10Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、中砂多し、粗砂若干あり、小礫わずかにあり。第1層?
8	中礫～粗砂、部分的な堆積か。
9	灰色10Y4/1砂質土、細砂～粗砂主体、わずかにシルトあり、小礫～中礫あり。砂礫層の二次堆積か。
10	灰色N5/0大礫～細砂、図右側のみ細砂、ラミナあり、流路内堆積層か。
11	大礫～小礫間に灰色N5/0粗砂。流路内堆積層か。
12	5にやや細砂多し、中礫若干あり。溝埋土?
13	オリーブ灰色2.5GY5/1シルト、ラミナあり。溝埋土?
14	4の中に中礫(風化礫)多し。第1層相当段丘崖斜面堆積。
15	オリーブ黒色7.5GY3/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂多し、中礫～小礫あり、大礫わずかにあり、植物遺体あり。第1層相当段丘崖斜面堆積。
16	灰色7.5Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂多し、中礫～小礫あり、大礫わずかにあり。
17	「灰色7.5Y5/1細砂」のブロック間に「灰色7.5Y4/1シルト」と植物遺体あり。
18	「灰色7.5Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり」内に風化大礫～小礫多し。第1層以前斜面堆積。
19	黄灰色2.5Y4/1粘質土、シルト主体、細砂・微小な植物遺体あり、粗砂若干あり。段丘崖斜面の土壌か?
20	中礫主体の大礫～小礫(風化礫)間に、それら起源の灰色N4/0粗砂、しまり良し。中位段丘構成層。

黄褐色 2.5Y5/3~5/4 砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂あり、Fe あり上部が濃い、Mn 粒あり。

第3層 基本的に上下2層に分かれる。上層の上面は平坦な第2層の床面だが、下層の上面は凹凸があり、耕土床面として削平された痕跡がない。どちらもブロック土を含むが、下層のブロックは直下層起源の小ブロックが下部に多い。上層は締りが良く、この層で幾つかの耕地境の段差が解消されている。

それらの事から上層を整地盛土と考え、盛土系第3層とし、下層を耕土系第3層とした。ただし、質が近似しているため両層の層境を面的に正確に追う事はできなかった。

染付け等の近世遺物が包含されず、身が浅く内面の暗文もまばらな瓦器椀・瓦質の羽釜等があるので、耕土系第3層が13世紀中葉～15世紀頃の耕土で、盛土系第3層がその後の盛土と考えられる。この層からは1点も土錘が出土しない。その事から第2層以上に包含される土錘はほとんど近世に生産されたものと言える。なお、蛸壺は少数ながら破片が包含されている。

盛土系第3層は暗黄灰～黄褐色 2.5Y5/2~5/4 粘質土、シルト～細砂主体、シルトの小ブロックあり、粗砂～小礫若干あり、Fe あり。層厚10～20cmほど。

耕土系第3層は黄褐色 2.5Y5/4 粘質土、シルト～細砂主体、シルト・第5層のブロック若干あり、粗砂～小礫あり、Fe まだらにあり。層厚5～15cmほど。

第4層 残りは悪く、第5面の落込み等、自然地形の凹部にわずかに残存する暗色層である。しかし、第5面検出の遺構の中で、第3層系埋土の新しい遺構以外、ほとんどの遺構埋土に含まれる暗色土の起源と思われる。耕地開発以前に中位段丘上に形成されていた古土壌と考えられたので、基本層序に組み入れた。

耕土系第3層が第1・2層に比べ粘質で有機分に富むのは、この層を攪拌した耕土だからと思われる。第5面で検出された13世紀前半頃の集落の遺構は、本来はこの第4層の上面から切り込まれ、埋土にも第4層が二次堆積したと考えられる。層厚は厚い所で10cmほど。

黒褐～灰黄褐色 10YR3/1~4/2 粘質土、シルト主体、細砂わずかにあり、小礫～粗砂あり。

第5層 中位段丘構成層の最上部。ただし、風化礫を含むものだけでなく、粒子の淘汰の良い部分もあるので、二次堆積したものもあるか。含まれる砂粒は石英など風化しにくい粒子が残ったものと思われる。

明黄褐～にぶい黄褐色 10YR6/8~5/4 粘質土、シルト～極細シルト主体、小礫～粗砂若干あり、Fe あり、Mn 粒わずかにあり。無遺物である。

第5層より下は、基本的には強く風化を受けた中礫～小礫の礫層で、礫の間には礫を起源の砂粒・シルトが詰まる。砂層も存在するが締りが良い。風化礫は砂岩が多く、手で握れば崩れるほどである。鉄分の沈着は激しいが有機分はほとんど含まれない。扇状地的な環境で堆積した中位段丘構成層である。

3、段丘崖の堆積

4 tr. の中位段丘崖は、その上部は削平され、第1～5層は失われていたものの、段丘崖斜面に堆積層が存在し、削平された肩部で、一部では4層ほどの層の重なりが見られた。

それらを埋める盛土は粗いブロック土の下に、細かいブロック土の盛土があり、上が工事中仮設道路のもの、下が、明治期の南海本線敷設時のものと思われた。これらの盛土からは大量の瓦と陶磁器類が出土した。近代のものもあるが、多くは江戸時代のもののように、おそらく段丘上に存在した屋敷地に由来するものと思われる。若干の遺物を「第0層以上」として取り上げた。

盛土直下の斜面堆積層は生えていた草が腐食しきらずに遺存し、第0層に対応すると思われる。

その下には第0層相当層よりは明色化しているがオリーブ黒色砂質土層が2層ある。上の層は段丘崖下の第1層にかぶり、下の層はそれに切られる(図5 下端断面図の14・15)。下の層が段丘崖下第1層の成立時に存在した層で、上の層が第1層成立後に徐々に斜面堆積した層と思われる。この二つの層を「第1層相当段丘崖斜面堆積」とした。染付け・湊焼きなどの近世遺物が出土している。

さらにその下に、段丘崖で中位段丘構成層が露出するまでに「灰色7.5Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂あり、大量の大～小礫の風化礫含む。」の層があり、これが近世以前の斜面堆積と思われる。ただし、包含遺物は非常に少なく、瓦質羽釜片等はあるが、堆積時期を限定するには至らなかった。

段丘崖直下からは本来は湊遺跡の範囲になるが、その部分の堆積層について簡単に触れておく。

この部分は非常に湧水が激しく、排水を試みるうちに第0層は失われ、湊遺跡の基本層序の第1面のみを面的に調査するに留まり、後はそこにサブトレンチを設け、下層の断面のみを確認した。

第1層と思われる層が2層に分かれ存在したが、その中には木の根などの大きな植物遺体が多かったのが疑問な点である。耕地ではなく雑木林として存在していた時期があったのかもしれない。

さらにその下に2層、旧耕土と思われる層が存在したが、第1層相当段丘崖斜面堆積層の下層の方がこれらの下にまで入り込んでいるので、基本的には第1層の耕土が重なっているものと思われる。

その下にはラミナのある砂層・礫層を確認した。ただし、含まれる礫にはあまり風化礫が認められない。この部分には現存水路の前身となる流路が、すぐ上流側の小規模な枝谷から流れてきていたのが確実であるので、この砂層・礫層がその流路の埋積層の一部であると考えられる。

第2節 第1面・中位段丘崖

1、面の状況(図6・7)

第1層は近世の耕土であるが、2 tr. の途中から北東に向かって後世の削平がきつくなっていくため、1 tr. から2 tr. の南西側25mほどまでしか残存していなかった。

現地地形でも1 tr. と2 tr. の境を通る道路がこの中位段丘平坦面の最高所であるが、それは第1面でも変わらず、1 tr. では022段差より北東側の耕地区画が最も高く、T.P.+10.45～10.30mほど、022段差～023段差間がT.P.+10.07～10.05m、023段差～043畦畔間がT.P.+10.01～9.95m、043畦畔より南西側がT.P.+9.84～9.77mである。2 tr. の第1層残存部分では南西端付近でT.P.+10.48 m程度である。

第1面は第0層耕土時の床面でもあるが、第0層に伴う鋤溝はほとんど検出されなかった。023段差～043畦畔間で検出している鋤溝群は、023段差が、第0層の下面で、第1層同士が切りあった段差であったのを、切り合い的に上位である南西側の第1層を除去したために検出された、第1層床面である第2面の鋤溝群である。したがって、043畦畔も第1層耕土時の畦畔で、北東側が耕土を除去し、南西側は耕土を残した状態で検出している。その事からもこの畦畔が段差を伴う畦畔である事が分かる。

第0層耕土時の鋤溝は1・2 tr. 境付近にのみ検出されている。この付近には土坑・ピットも多いが、その多くは第0層の埋土で、その床面遺構と思われる。平面形の大きいものは深さ10 cmを越えるものはない。柱痕などを確認できたものはなく、規則的に並ぶものもない。

段差・畦畔・鋤溝などから推測できる耕地区画には正方方位を向くものはない。023段差の直線部分と1 tr. 北東側の011溝が022段差とほぼ直交するような規則性が認められる程度である。1・2 tr. 境を通る道は江戸時代に存在していたが、耕地区画はそれとも直交せず、耕地開発以前の自然地形に由来

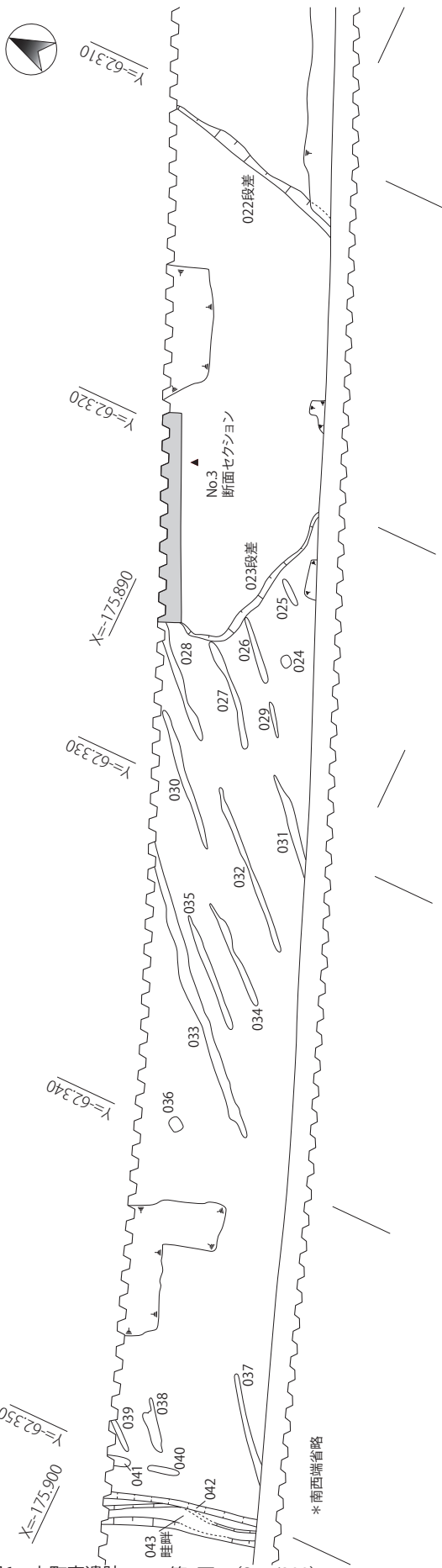
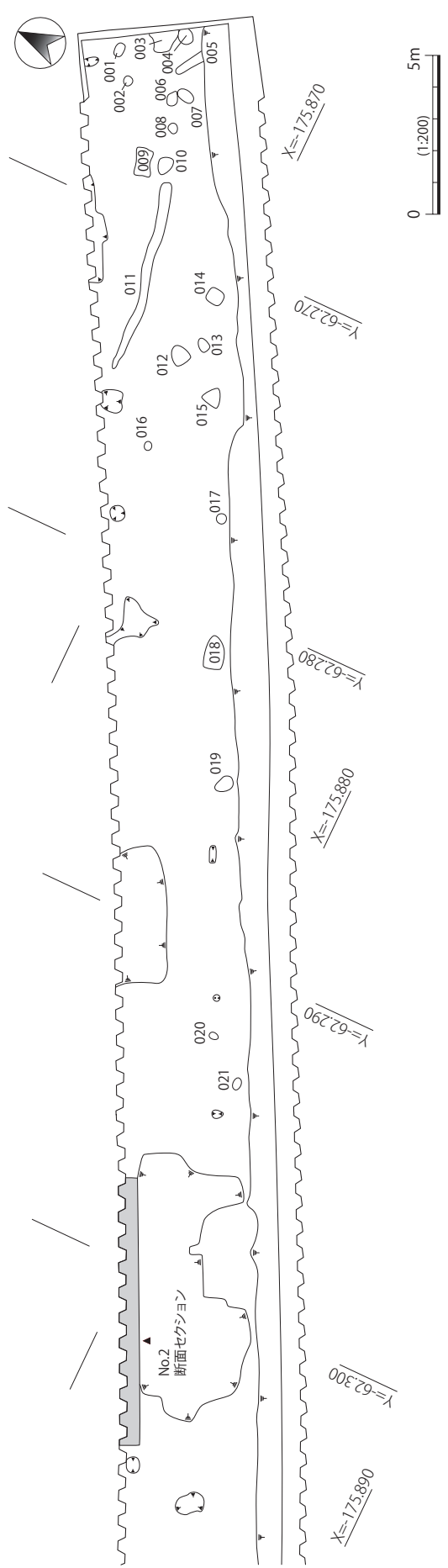


図6 上町東遺跡 1tr. 第1面 (S=1/200)



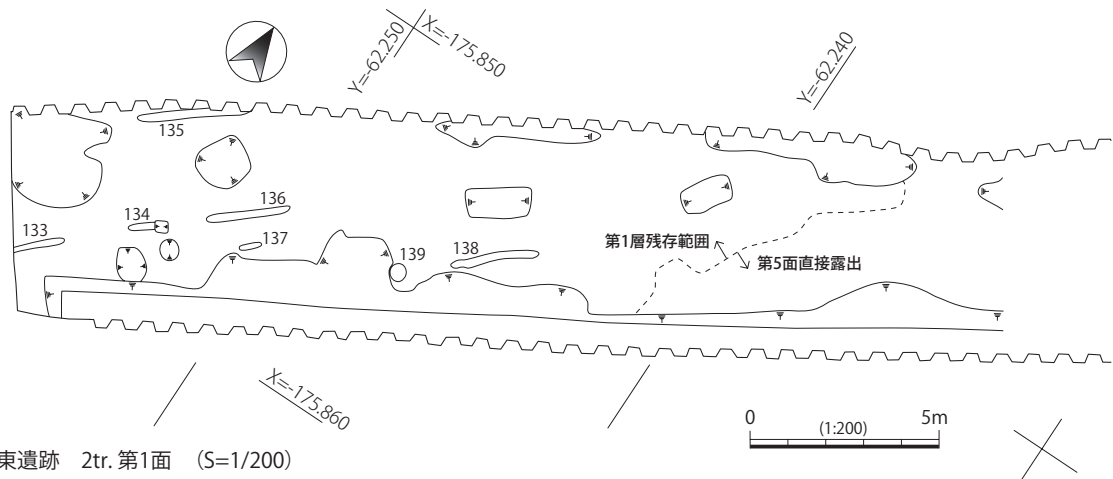


図7 上町東遺跡 2tr. 第1面 (S=1/200)

する不規則な耕地区画であったのであろう。

1 tr. の第0層上面では、断面 No. 3 の中央付近に段差があるのみであった。第1面の022・023段差の間に位置し、より大きな耕地区画を造成して、平坦化を進めている状況が見て取れる。

第2面では、043畦畔より南西側の区画で第2層同士が切り合う段差がトレンチ断面 No. 4 で確認されたが、第2層自体が022段差から南西側にしか遺存せず、層厚も薄いため、第2層耕土時の耕地区画の様相は第3面で確認できると考え、第2面の平面的調査は省略した。

2、中位段丘崖の状況

4 tr. で検出した中位段丘崖は、上部が削平され、第1面は遺存しないが、第1層相当段丘崖斜面堆積層を設定できたことから、段丘崖に関してもここで述べておく必要がある。

現地形の中位段丘崖は調査区の海側では、北西方向からほぼまっすぐ、調査区に直交するように伸びてきているが、4 tr. で検出した段丘崖は調査区に入った途端ほぼ直角に南西に向きを変え、トレンチ長辺に平行するように30mほど進む。そして再び急に南東に向きを変え、調査区外へ出て行く(図8)。

調査区の山側、南海本線の線路敷地の南東側には、矢畑池から伸びる谷と、ここにあった小規模な枝谷にはさまれて、北西へ伸びる小さな尾根状に削り残された中位段丘の痕跡が残る。

今回検出した段丘崖の形態は、枝谷が本谷に開口する部分の左肩部である事が理解できる。

段丘崖上面の残高は南西側でT.P.+8.00mほど。段丘崖下湊遺跡の第1面の高さがT.P.+4.5mなので、第1面の比高差は3.5m以上あった事になる。北西隣接地の現地形での比高差は約4mである。

削平された段丘崖上面では、南西側で段丘崖ラインが南東に曲がる位置に、北西から、幅約3m、深さ約50cmの溝が取り付けられているのが遺構らしい唯一のものである。4 tr. で削平の弱い部分なので、遺構の可能性もあるが、埋土のブロック土が大きく、機械による埋土の可能性もある(図8左)。

盛土の中には、大量の瓦と陶磁器類が含まれていた。南海本線敷設時に近辺の集落から埋土を採取したと思われ、江戸時代のものも多く、「第0層以上」として、若干の遺物を採取した。

盛土を除去して斜面に現れたのが、生えていた草もまだ表面に残っている黒褐色系の層である。第0層に相当するものであるのはほぼ間違いない。意外と遺物は少なかった。

その下にはやや明度の高いオリーブ黒色砂質土層が2層あり、層位的にも質の共通性からも「第1層相当段丘崖斜面堆積層」とした。さらにその下には一部で灰色砂質土層が段丘構成層を覆っていた。包含する遺物はわずかで中世の土器片のみである。

その第1層相当層内、灰色砂質土層直上で、湊焼きの甕の底部の破片が転落の途中のような状態で出

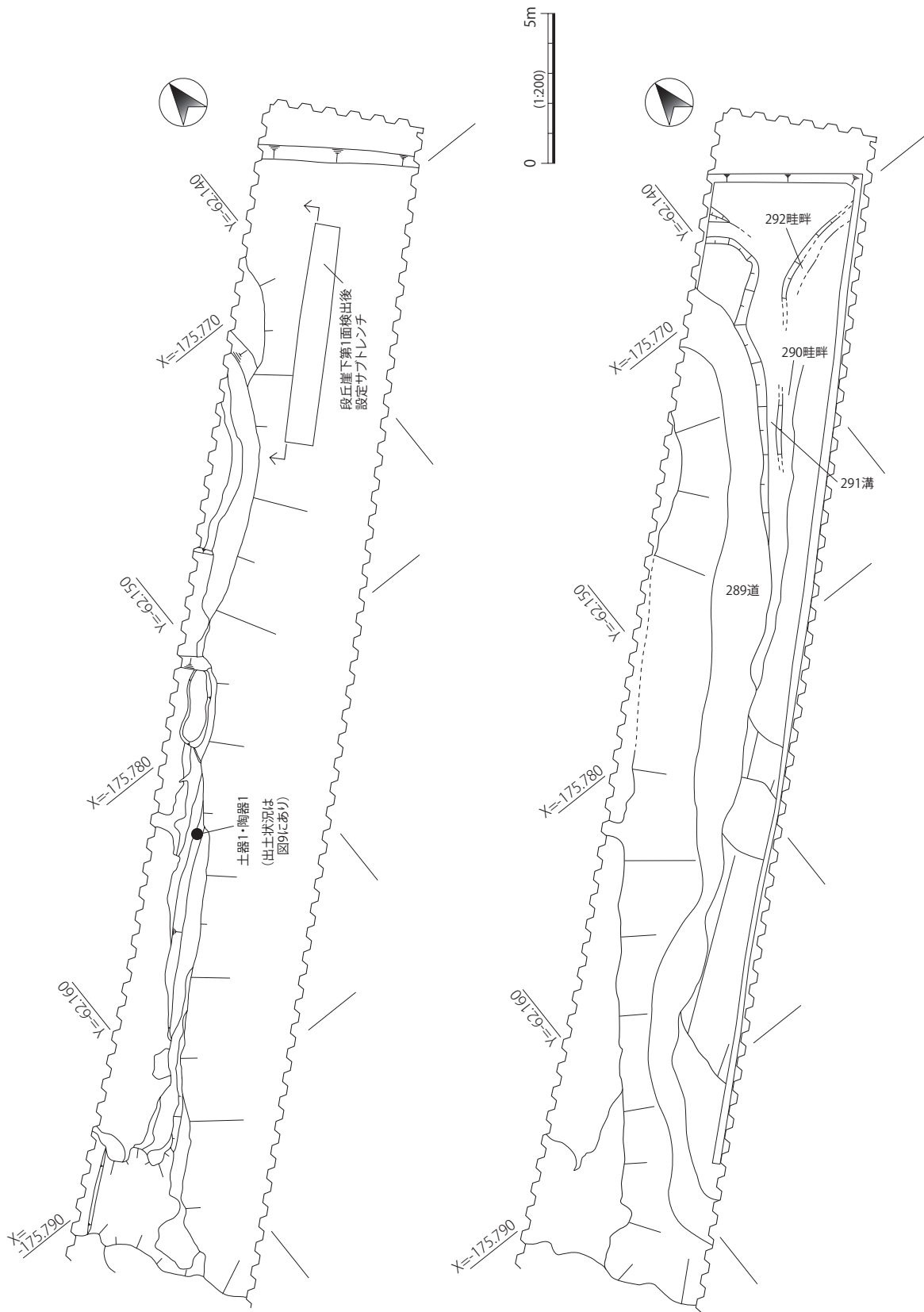


図8 上町東遺跡 4tr. 第0層相当段丘崖肩部検出状況(左)・段丘崖斜面堆積完掘状況および段丘崖下第1面検出状況図(右)
(S=1/200)

土した(図9)ので、そのみは出土状況を記録した。この状況を見ると、第1層相当層の下半は人為的に斜面に盛られたものである可能性が考えられる。

段丘崖下の状況は、北東部と南西部で状況が異なる。南西部は第0層相当層を除去した時点で段丘構

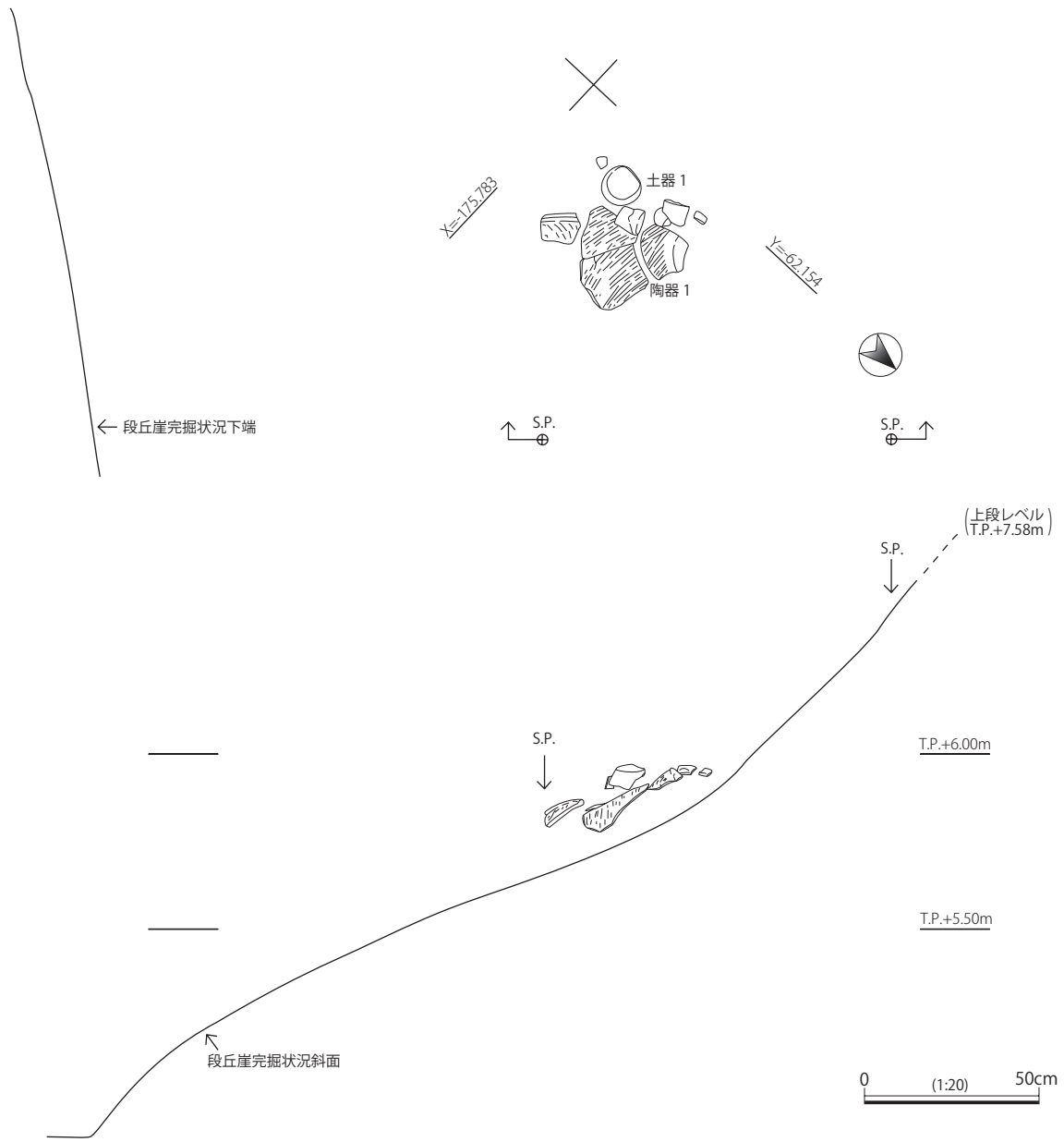


図9 上町東遺跡 4tr. 第1層相当段丘崖斜面堆積層内土器1・陶器1出土状況図(出土位置は図8にあり) (S=1/20)

成層が露出し、その形状を見ると、南西へ上がっていく段が2段削りだされていたようである。おそらく小枝谷底部は、水路以外の部分が耕地化されていたのであろう(図8右)。

北東部は湊遺跡の第0層と第1層が残存しているのを確認した。上町東遺跡の第0層・第1層と時期も質もそう変わりはない。ただし、盛土掘削後、激しい湧水のため、側溝を掘りポンプを設置するまでに水没し、第0層はヘドロ化したため、面的な調査は行えなかった。かろうじて第1面は平面的調査を行えた。しかし、その高さで、支保工を入れた鋼矢板の安全基準の限界に達したので、第1面以下は、トレンチ内に小さなサブトレンチ(図8左)を設置して断面調査を行うに留めた。

段丘崖下北東部第1面(図8右)は湧水により遺構が一部判然としない部分はあるが、崖裾に沿って、幅80cmほどの道と思われる平坦地がある(289道)。トレンチ北西壁沿いではそれが北東に向かって1.8mほど張り出す。それらの平坦地沿いに、290畦畔を伴う幅70cm、深さ10~18cmほどの291溝が走る。溝に伴う畦畔から枝分かれし、やや弯曲しながら東へ伸びる292畦畔も確認された。

それ以下の面はサブトレンチで断面調査を行ったのみであり、基本層序の部分で既に述べた。

段丘崖上面が削平されていたが、盛土や段丘崖斜面堆積層から意外な量の近世遺物が得られ、また、開析谷内の三つの流路のうち、一つの小枝谷の形態が若干でも知られた事は大きな成果であった。

なお、豊富な近世遺物を元々所持していた場所は、元禄2年（1689年）作成の「佐野村・湊村立会絵図」などの絵地図に見える「田出村」が候補として上げられる。この村は、佐野村と湊村（当時中庄村に含まれる）の境界にまたがった分村で、両村境の道は今でも一部残る。それと絵地図からすれば、田出村は、中位段丘崖に臨む段丘上で、調査区のすぐ北西側近辺に立地していた事が知られる。

3、出土遺物

1) 第1面遺構出土の遺物

第1面遺構出土の遺物は小片ばかりがわずかに出土したのみで、土師皿やいぶし瓦の小片が多い。

図10-10は138号掘溝出土の小型管状土錘。土錘個体番号119-1。全長4.51cm、最大径1.28cm、孔最大径0.36cm、質量6.17g。胎土は明赤褐〜にぶい黄橙色5YR5/6~10YR7/4、石英・長石・クサリ礫の微細粒を若干含む。本書分類では胎土タイプはb型、小型管状Ⅲ類。小型管状土錘の中では大きい方である。完形とは言え、掘溝からの出土であり、元は第1層に包含されていたものと思われる。

2) 第1面以上出土の遺物

1 tr. 第0層の包含遺物は全て取り上げた（表1）他、機械掘削時の表採や、4 tr. で盛土に包含されていた遺物の一部なども取り上げた。（表2）全体の破片数では、土器は中世以前のもも混じり小片になり最多だが、次に多い磁器と陶器の比率は磁器が多く1.3倍ほどである。

土師器では炮烙が最も多く、火鉢がその1/3程度で次に多い。蛸壺も若干見られる。瓦質で近世のものと思われるのは火鉢程度で他は中世の羽釜・甕・捏ね鉢などの破片が少数ある。

施釉陶器では碗が圧倒的に多く、鉢が若干あり、無釉陶器では播鉢が最多、甕がそれに次ぐ。植木鉢もある。雪平鍋はわずかしかない。

磁器は染付けがほとんどで碗が圧倒的、皿・鉢は碗5に対し1ぐらいである。青磁はわずかだが碗・皿・鉢があり、白磁では碗・紅猪口が見られる。

他には土人形・硯・石碁などが見られ、もちろん土錘も出土している。

瓦はほとんどがいぶし瓦である。ただ、盛土内にも電気窯焼成と思われるものはなかった。

図11は機械掘削後の表採や攪乱内出土の遺物のうち、幾つか注目したものを図化したものである。

表1 上町東遺跡1 tr. 第0層 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別	破片数		大器種	破片数	
			破片数	%		破片数	%
土器	86	土師器	61	70.9	皿	3	4.9
					羽釜	2	3.3
					焙烙	7	11.5
		須恵器	1	1.2	蓋	1	100.0
		瓦質	2	2.3	甕	1	50.0
		瓦器	22	25.6	羽釜	1	50.0
陶器	74	施釉	61	82.4	椀	7	31.8
		無釉	13	17.6	すり鉢	3	23.1
					雪平	1	7.7
	115	青磁	11	9.6			
		白磁	49	42.6			
		染付	55	47.8	皿	2	3.6
					鉢	4	7.3
猪口	2				3.6		
					枕	1	1.8
瓦	3	土師質	1	33.3	平	1	100.0
		いぶし	19	633.3	丸	6	31.6
					平	13	68.4
土製品	25	土錘	24	96.0			
		土人形	1	4.0			
石製品	1	打製	1	100.0	石核	1	100.0
金属製品	1	銅製品	1	100.0	銭	1	100.0
桃核	1						
貝	1						

7～9が2 tr. 出土で、他は4 tr. 出土。以下、個々について述べる。

1は鉄釉と透明釉でほぼ半々に塗り分けられた陶器の湯呑碗片である。残存率は70%ほどだが口縁の残りは悪い。鉄釉部分の発色はにぶい赤褐色5YR4/3、透明釉の部分は灰白色5Y5/2を呈し、胎土は灰白色2.5Y7/1を呈する。外面は上半直立部分が回転コビナデ、下半が回転ケズリ。高台内まで釉の塗り分けが見られるが、高台端部は釉ハギ。同法量・同意匠の別個体破片が近辺で幾つか出土しているので、元々揃えのものが廃棄されたと思われる。

2は染付け湯呑碗片。残存率60%。内面見込みに幅1.7cmの蛇の目釉ハギが一周し、そこに高台痕が見られる。外面は高台端部のみ釉ハギ、そこに若干ハナレ砂の付着あり。

3は磁器の肥前系色絵皿片。残存率は30%、高台は周の40%ほど残る。高台外側面に2条の赤絵圏線が磨滅しながら残る。口縁端部のみ釉ハギ。内面見込みは蛇の目釉ハギに青色釉を塗り、その上に黒色釉を重ねる。青色釉は明青緑色。その内側には赤絵がとんでしまったような痕跡が残る。文様は判然とはしないが草木のようで、柿右衛門様式か。17世紀後半頃のものか。

4は陶器備前小壺片。残存率は25%ほど。全体的に回転ナデ。色調は外面にぶい赤褐色5YR4/3、内面明赤褐色5YR5/6、断面明赤褐色2.5YR5/6。胎土に5～1mmの石英を若干含む。

5は施釉土師器の片口有蓋容器片。残存率は20%ほど。内外面とも回転ナデ後施釉。口縁内面に蓋受けがある。注口は肩部に半円形の孔を開け、上辺に粘土紐、両端に円形附文、下部は板状粘土をU字状に曲げた注口を貼り付けたものと思われる。色調は釉部分は橙色7.5YR6/8、胎土は橙色7.5YR7/6。胎土肌理は細かく、微細な石英・長石をわずかに含む。

6は陶器、高取焼浅鉢片。灰白色を中心とした藁灰釉がかかるが、外面下部は無釉。全体的にナデか。胎土色調は無釉部分表面は褐色7.5YR4/3、断面は灰色5Y6/1。17世紀後半頃のものか。

7は瓦質捏ね鉢底部片。残存率は10%ほどか、底部周は30%残存。底部外側面には不定方向のケズ

表2 上町東遺跡4tr.表採 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別		大器種								
		破片数	%	破片数	%							
土器	473	土師器	207	43.8	皿	3	1.4					
					羽釜	8	3.9					
					壺類	8	3.9					
					甕	5	2.4					
					蛸壺	9	4.3					
					焙烙	69	33.3					
					火鉢	27	13.0					
					須恵器	2	0.4	壺	1	50.0		
								甕	1	50.0		
					瓦質	10		甕	3	30.0		
			すり鉢	1	10.0							
			羽釜	6	60.0							
			瓦器	3	0.6	椀	3	100.0				
陶器	269	施釉	251	93.3	碗	97	38.6					
					甕	2	0.8					
					鉢	15	6.0					
					壺類	4	1.6					
					無釉	18	6.7	すり鉢	8	44.4		
								甕	6	33.3		
								植木鉢	4	22.2		
					磁器	355	青磁	20	5.6	碗	1	5.0
										皿	5	25.0
										鉢	1	5.0
白磁	14	3.9	碗	2			14.3					
			紅猪口	1			7.1					
染付	321	90.4	碗	68			21.2					
			皿	13			4.0					
			鉢	13			4.0					
			壺類	3			0.9					
			華瓶	2			0.6					
			紅猪口	1	0.3							
瓦	97	土師質	8	8.2	丸	3	37.5					
					平	5	62.5					
		須恵質	2	2.1	平	2	100.0					
			いぶし	87	89.7	丸	18	20.7				
						平	69	79.3				
土製品	4	土錘	3	75.0								
		土人形	1	25.0								
石製品	2	石鍋	1	50.0								
		硯	1	50.0								
石	4											
貝	1											

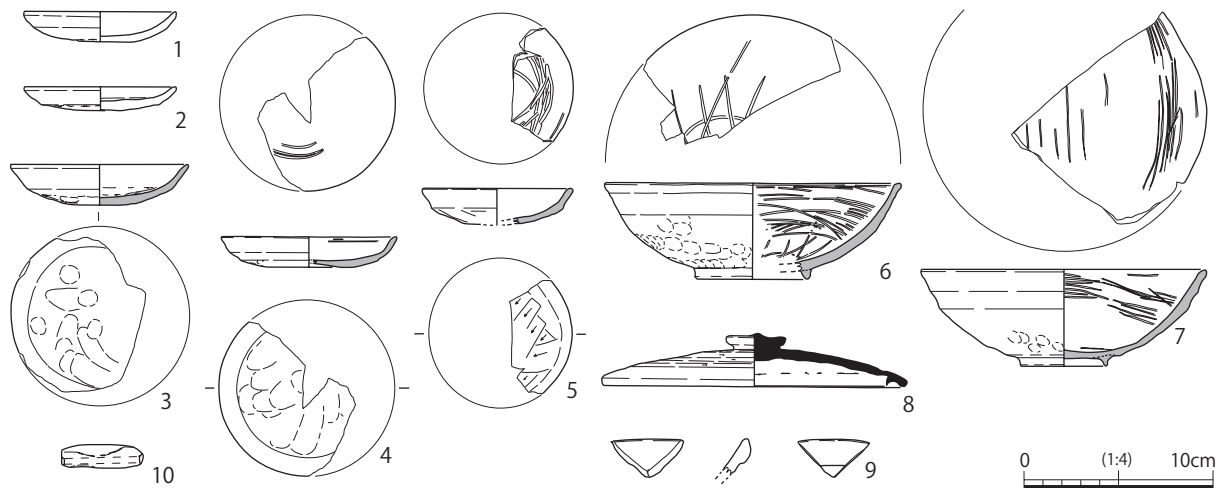


図10 各遺構出土遺物
 {1:079土坑、2:098鋤溝、3:108溝、4:131溝、5・6:096落込、7:190土坑、8:123溝、9:090落込み、10:138鋤溝} (S=1/4)

り。外底面と内面は使用痕らしき強い磨滅。色調は外面灰色 5Y5/1、内面と断面は灰白色 5Y7/1。胎土に 3～1 mm の石英若干、1 mm 弱の黒色砂粒をわずかに含む。

8 は瓦質甕肩部片。残存率は 10% 以下。内面は磨滅で調整不明。外面は胴部にタタキ、頸部にヨコナデ。色調は外面灰色 N4/0、内・断面灰白色 7.5Y7/1。胎土に 1 mm 前後の石英・長石若干あり。

9 は瓦質火鉢片。脚部一つと胴部側面が残る。脚部は貼り付け、胴部も底部の粘土板の上に接合。胴部は内外面ともヨコナデ、脚部は外面に胴部と一体のナデが入るが、側面・内面にはユビナデ残る。色調は内外面灰色 5Y6/1、断面灰白色 5Y7/1。胎土には 1 mm 前後の石英若干、チャートわずかにあり。

10 は、いぶしの軒平瓦片。瓦当文様は左右対称の唐草文か。凹面はタテミガキが入るが、瓦当上縁のみヨコナデが入る。凸面は磨滅するがナデか。瓦当裏面移行部にはヨコナデ。色調は表面灰色 N4/0、断面灰白色 10Y7/1。胎土には 1 mm 弱の長石・3～1 mm の黒色粒あり、1 mm 前後の石英・5～1 mm のチャートわずかにあり。18 世紀頃のものか。古くても 17 世紀末であろう。

11 もいぶし軒平瓦片である。瓦当文様は唐草、瓦当部側面はヘラキリ、凹面は瓦当部上までミガキ、凸面は瓦当部下端までナデである。色調は表面灰色 N4/0、断面灰白色 5Y7/1。胎土に 1 mm 前後の黒色粒あり、1 mm 弱の石英・長石あり。18 世紀代のものか。

12 はいぶし軒丸瓦片。珠文は一部欠けるが、23 個あったと思われる。上面はミガキ、下面はケズリ、瓦当裏面は中央を一定方向にナデた後、周縁をユビナデが巡る。移行部もヨコナデ。色調は表面灰色 N5/0、断面灰白色 5Y7/2。胎土には 4～1 mm の長石・3～1 mm の黒色粒あり、3～1 mm の石英・1 mm 弱のチャートわずかにあり。外縁高が高く、文様の突出も高く断面が台形を成す事、巴文の頭が尖り、尾は非常に長く、珠文帯の圏線と分離していない事、珠文が数多く、間隔が密である事などから考えると意外と古く、13 世紀後半頃の可能性がある。新しくても 14 世紀代であろう。その時期であると寺院に使用されたものの可能性も考えられる。

13 もいぶし軒平瓦片。瓦当裏面は磨滅し、調整不明。外縁高はかなり低い。珠文は 12 個。表面の色調は磨滅と鉄分の付着があり淡黄色 2.5Y8/2、断面は灰白色 2.5Y8/2。胎土には 1 mm 弱の石英・チャート若干あり、0.5 mm 強の長石わずかにあり。18 世紀以降のものか。

14 は石鍋片。滑石製。鑿によるケズリは見られず、内外面とも平滑。胴部の破片で、下部がやや薄くなっていく。外面には刃物による傷のようなものが一ヶ所に集中して見られる。傷の方向は直交する 2 方向。

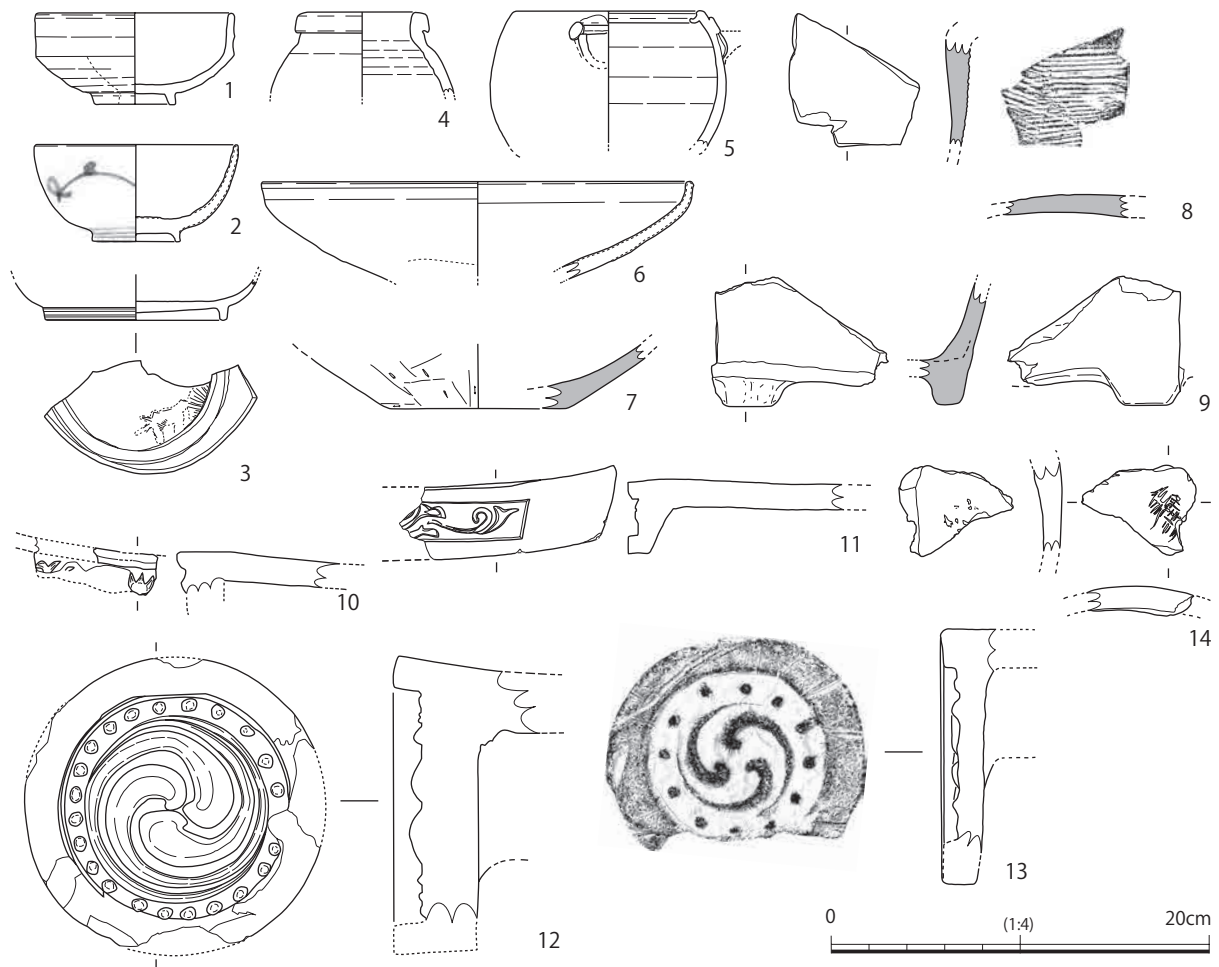


図11 表採・攪乱内出土遺物 (S=1/4)

器壁が漸移的に下部に向かって薄くなる傾向が顕著なのは、鏝が退化した、後半期の特徴と思われるので、15世紀頃のものか。

図12は第0層出土の遺物から選択し図化したものである。22・25・26が1 tr. の他は4 tr. 出土。

1は染付け小皿片。残存率は25%ほど、見込み中央は菊花か。高台端部のみ釉ハギ。

2は染付け湯呑碗。残存率80%ほど。内面見込みに幅1.4cmの蛇の目釉ハギがあり、高台痕残る。高台端部も釉ハギで、ハナレ砂付着。

3も染付け湯呑碗片。残存率は40%ほど。高台端部に明確な釉ハギなく、わずかにハナレ砂付着。

4は陶器碗片。残存率40%ほど。胴部外面は上半回転ユビナデ、下半回転ケズリか。内面は灰白色7.5Y7/1の灰釉、外面は暗緑灰色7.5GY4/1の銅緑釉がかかる。銅緑釉は高台内面まで及ぶが、高台側面付近で部分的に釉なく露胎するところがある。胎土は灰白色5Y8/1。高台内面側に砂付着。

5は染付け皿片。残存率20%ほど。高台端部のみ釉ハギ。底部外面中央に一つだけトチン痕が見られる。内面の文様は手描き。

6は陶器皿片。残存率40%ほど。志野風の長石釉と鉄釉がかけ分けられている。高台にも点々と釉が残り、ハギトリではなく、拭き取ったような感じである。高台内面は鉄釉と長石釉がまだらにかかるが、露胎の部分も残る。高台端部はやや磨滅。色調は、長石釉が灰色10Y6/1、鉄釉が暗褐色7.5YR3/3、露胎部分はにぶい橙色7.5YR7/4。瀬戸美濃産か。

7は三島唐津の陶器皿片。残存率は10%ほどか。内面は灰オリーブ色5Y5/2の灰釉がかかり、陰刻

模様は白泥の象嵌。一番内側の圈線の内側に接して、2.5 × 1.7 cmほどの楕円形のトチン痕がこの残存範囲で2カ所見られる。外面は暗褐色 10YR3/3の褐色釉がかかるが、胴部の幅2.2 cmの部分は塗り残し、高台は釉ハギ。露胎部分の色調はにぶい黄色 2.5Y6/4 を呈する。

8は備前焼の陶器建水片。残存率は30%ほど。外面全面から内面は口縁から1 cm下まで施釉。釉色は灰黄褐色 10YR4/2、無釉の器表はにぶい赤褐色 5YR4/3、断面は褐灰色 5YR5/1 と明褐灰色 5YR7/2の縞状をなす。内面は回転ユビナデ、外面底部側面は回転ヘラケズリか。

9は陶器蓋。残存率80%ほど。全体ににぶい褐色 7.5YR5/3の薄い褐色釉がかかるが、上下面とも一部露胎。胎土は淡黄色 2.5Y8/3 を呈す。ほとんどの部分は回転ナデ、底部には静止糸切り痕。上面中央に粘土玉を貼り付けるが、つまみにならないほど扁平である。

10も陶器蓋片。土瓶のものか。上面はつまみを中心に飛鉋が巡る。その上から白泥釉を「いっちながけ」し、その広がった先端に丸く緑釉を置く。松を現すか。その他は露胎で灰赤色 2.5Y4/2。下面は施釉で暗灰黄色 2.5Y4/2 を呈する。施釉部分から見れば唐津か。

11は白磁紅猪口片。残存率30%。内面施釉、外面は一部釉垂れ。口縁は水平に切られた面を持つ。

12は土師器火鉢片。残存率30%ほど、円形で中央に底部まで貫く孔がある脚一つと、もう一つの脚の接合痕が残り、それからすると3脚か。外面は全面ヨコナデだが、胴部下半にはナデ前のケズリの痕跡と見られる工具痕が残る。脚部とその周辺は脚を中心としたナデが回る。脚下面は磨滅。内面も全面ヨコナデだが、底部から胴部下半にナデ前のヨコハケが残る。上半にはユビオサエが1列残り、それを下端とした、断続的に静止するヨコナデが1列見られる。色調は器表橙色 5YR6/6、断面橙色 2.5Y7/8。胎土には1 mm弱のチャートあり、1 mm弱の石英・赤色粒若干あり。

13も土師器火鉢片。残存率30%。脚は3脚か。外面上部はヨコナデだが、ナデ範囲の下端近くに粘土接合痕が残り、ユビオサエも数個残る。底部側面には2条のケズリ、底面は無調整、脚部には底面に撫で付けるナデ。内面は、口縁端面磨滅、底面器表剥離で調整不明。その他はヨコナデだが、胴部中央にナデ前のユビオサエが1列。最上部のナデは左上にナデアゲ。器表はにぶい黄橙色 10YR7/4、断面もにぶい黄橙色 10YR7/3。胎土に4～1 mmの石英あり、1 mm弱の長石・3～1 mmのチャート若干あり。

14は土師器羽釜片。残存率は10%以下。外面調整は、口縁部の段は棒状工具で沈線を入れたものか、口縁から罎下端まではヨコナデ。罎下端にシャープな段があり、胴部は器表剥離して調整不明だがケズリか。罎下端の段直下に粘土接合痕残る。内面はヨコハケがあるが、外面の罎接合部分から上はナデに消される。外面の胴部から罎下面にかけて煤付着。器表はにぶい黄橙色 10YR7/4、断面は淡赤橙色 2.5YR7/3 を呈す。胎土に5～1 mmのチャート多し、1 mm前後の石英若干あり、1 mm弱の長石わずかにあり。

15は土師器炮烙片。口縁周は10%ほどしか残存せず復元径には不安あり。外面は上半ユビヨコナデ、屈曲部には粗いヨコナデ、粘土接合痕を残す。それ以下は無調整。全面煤付着。内面は口縁内側にハケ目を残し、その上に全面ヨコナデ。底部には炭化物付着。煤のない器表は橙色 7.5YR6/6 を呈し、断面も同色。胎土には0.5 mm強の石英・赤色粒・長石あり、1 mm弱のチャート・黒色砂粒わずかにあり。

16も土師器炮烙片。残存率10%ほど。口縁周も15%残存で復元径に不安あり。外面は口縁から屈曲部までヨコナデ、それ以下は無調整、全面煤付着。内面もヨコナデ、底部に薄く炭化物付着。器表・断面ともににぶい黄橙色 10YR6/3。胎土に1 mm弱の石英・黒色砂粒、0.5 mm強の長石若干あり、1 mm弱の赤色粒・チャートわずかにあり。

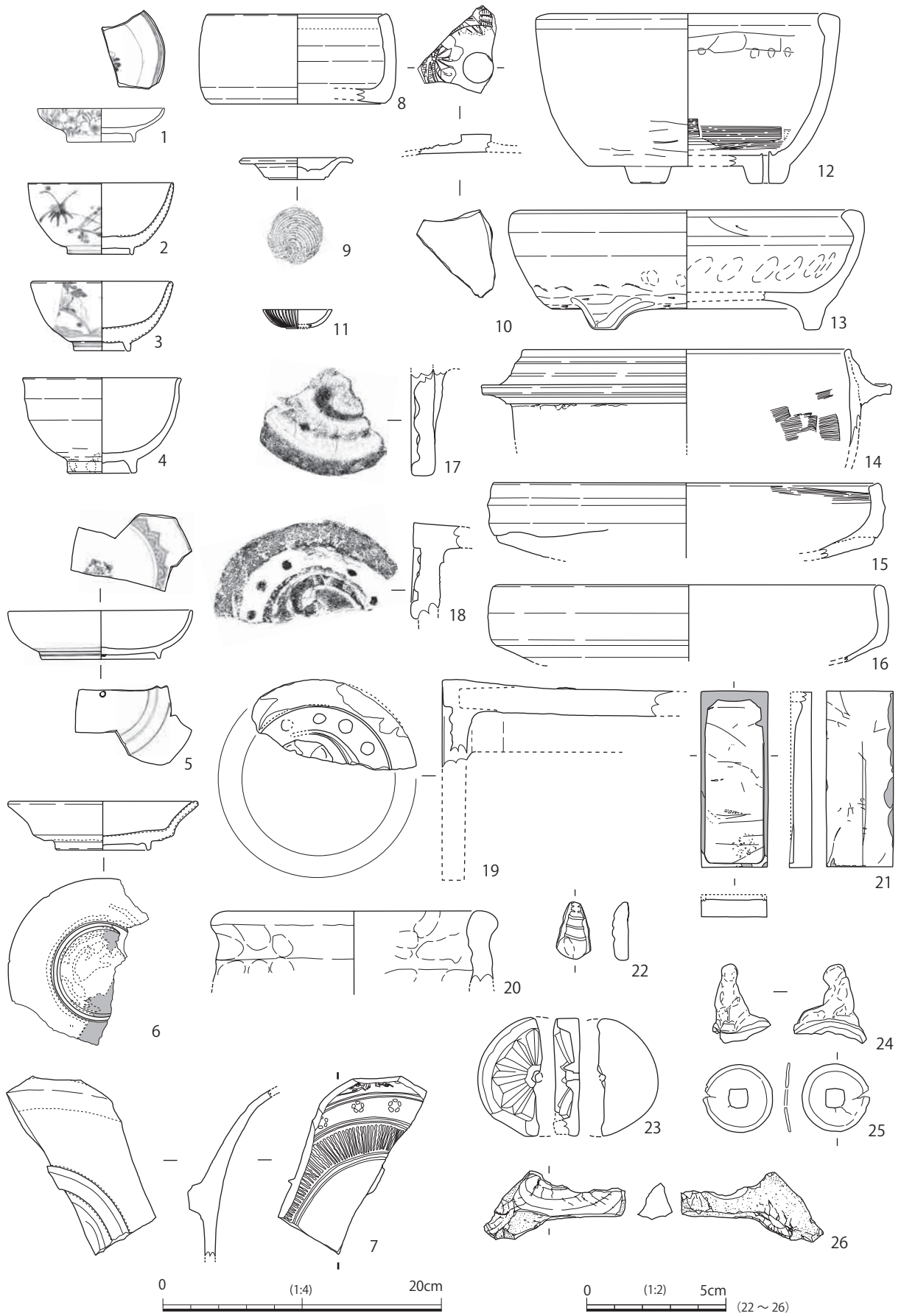


图12 第0層出土遺物 {22・25・26:1tr.、他4tr.} (土錘除く) (S=1/4、22~26はS=1/2)

17 はいぶし軒丸瓦片。瓦当裏面はナデ。珠文は復元で 12 個ほどになるか。巴の尾も短そうである。外縁は低く、内側の肩部も丸い。器表は灰色 5Y6/1、断面は灰オリーブ色 5Y6/2。胎土に 1 mm 弱の長石・石英あり、1 mm 前後のチャート・3～2 mm の黒色砂粒若干あり。18 世紀以降のものか。

18 もいぶし軒丸瓦片。凸面はタテナデ、凹面では瓦当裏面移行部に強いヨコナデ入る。瓦当裏面はケズリ。珠文は復元すれば 10～11 個か。外縁高と巴文の頭の高さが同じである。巴文の尾は長そうである。器表は灰白色 5Y7/1、断面も灰白色 7.5Y7/1。胎土に 1 mm 強の石英・長石・1 mm 弱の黒色砂粒あり。瓦当裏面移行部の強いヨコナデや、巴文の尾の長さから見れば近世前半 16 世紀前後か。

19 もいぶし軒丸瓦片。凸面はタテミガキ、瓦当上面だけヨコナデ。凹面は布目圧痕後ケズリ。瓦当裏面移行部はヨコナデ、瓦当裏面は不定方向のナデ。珠文は復元すれば 12 個か。巴文の尾は長い。器表は黒色 5Y2/1、断面は灰黄色 2.5Y7/2。胎土に 2～1 mm の黒色砂粒あり、2～1 mm の石英・チャート・1 mm 前後の長石若干あり。外面に煤付着。巴文の尾が長く、布目圧痕残る事から 16 世紀頃のものか。

20 は土師器蛸壺口縁片。残存率は 10% 以下か。口縁周も 20% ほどの残存で、復元径には不安が残る。外面ユビオサエ、内面ユビナデ、口縁部直下を絞り、縄掛け用の凹みを作る。器表はにぶい黄橙色 10YR7/3、断面は明黄褐色 10YR7/6。胎土に 3～1 mm のチャートを多く含む。

21 は石製硯。縁の大部分を欠く。表裏に針のような金属製刃物で付けられたような細かい傷がある。浜部分の長軸中心ラインがやや凹むのは使用痕か。黒粘板岩製と思われる。

22 は巻貝をかたどった土人形である。片面のみの型押しで作られている。裏面は平坦で剥離した痕跡もなく、これで単独の土製品のようなものである。器表は明赤褐色 5YR5/6 を呈し、剥離材の痕跡はないが風化・磨滅もほとんどない。胎土に 1 mm 前後の石英わずかにあり。

23 は車輪形の土人形片である。車軸を通す孔も開いている。片面の型押し作り。型に接した部分には白銀色の粒子状の剥離剤が残る。タチウオの鱗か。色調は浅黄橙色 10YR8/4。胎土に中砂以上の砂粒はなく、微細粒ではわずかに赤色粒・黒色砂粒が見える程度の精良な胎土。

24 は白磁の人形装飾部分である。容器部分の破片は器壁薄く、弯曲も強いので小型の壺のようなものか。内面は釉なし。正座する人のようにも見えるが、頭部の前面下部が突出するので猿にも見える。

25 は銅製品で、重さ 1.86g、厚さ 0.65 mm、直径 2.4 cm。方形の孔が開き、縁部はわずかに段を成して厚くなる。無文銭か。薄く、鏝銭の可能性が高い。

26 はサヌカイト製石核。重さ 10.72g。ポジ面はなく、相当する右図は原礫面である。ネガ面の左右の折れや剥離は風化・磨滅が進んでおり、人為的なものではないと考えられる。ネガ面上辺・下辺とネガ面の大部分を占める上辺に打点のある剥離面が人為的なものである。下辺は折れ状だが、板状剥片として剥離した際の、打点より遠い部分と考えれば矛盾はない。上辺はネガ面に残る剥離の打点以外にも細かな剥離面があり、この辺を打撃面として連続して剥片を剥離していったと思われる。ネガ面左下の短辺も磨滅の激しい原礫面なので、元の板状剥片の厚さも、この石核の上下幅 2.6 cm をあまり越えるものではなかったと思われる。

第 1 面以上より出土したのものも、意外と近現代のものは少ない。特に第 0 層の包含遺物は、遺物からは 18 世紀以降の近世中・後期のものとしか言えない状況である。南海本線敷設時の盛土と思われる、4 tr. で取り上げた第 0 層より上の遺物も同様な状況であった。組成は集落的と言える。また、17 世紀頃の、近世前期の遺物も一定量あり、中世遺物が少数の小片のみであることと対比的である。

3) 第1・2層包含遺物

第1面の時期の上限を示し、近世遺物が主なのでここに述べる。出土遺物は1 tr.の第1・2層を分けずに取り上げたものと(表3)、4 tr.の第1層相当段丘崖斜面堆積層のものである(表4)。

破片数では、土器が一番多いが、磁器より陶器の方が多く、大体1対2の割合になっている。

土師器は炮烙が突出し、蛸壺がそれに次ぐ。他は少ない。瓦質土器は羽釜・甕・捏ね鉢・火鉢が揃うが少なく、中世が混在。瓦器碗も少数。陶器では碗・甕・播鉢・鉢の順に多く、わずかに雪平鍋や壺類。磁器は染付けが多く、それも碗が大部分。皿は少数である。青磁・白磁はほとんどないに等しい。

土製品として土人形や土鍾があるが、段丘崖のある4 tr.より、段丘平坦面の奥まった位置にある1 tr.の方が土鍾の出土が多いのが特徴的である。土鍾に関しては総括においてまとめて報告する。

図13は第1・2層出土遺物のうち、実測可能だったものである。4 tr.段丘崖下第1層は厳密に言えば湊遺跡の第1層になるが、実際に包含遺物の示す時期が異なるため、ここに報告する。

1は土師器小皿片。残存率50%。磨滅が激しいが、口縁外面にヨコナデ、底部外面もナデ。口縁が立ち上がる部分に粘土接合痕が残り、円盤状粘土の上に粘土紐を1帯付加して成形しているのが分かる。器表は橙色5YR6/6、断面は明赤褐色2.5YR5/6を呈する。胎土には2~1mmの結晶片岩あり、2~1mmの石英若干あり、1mm弱の長石・赤色粒わずかにあり。紀伊産か。時期は判然としないが中世のものか。

2も土師器小皿片。口縁部は内外面ともヨコナデ1条。内面底部はそれに切られる数方向の直線ナデ。外面底部も口縁のナデに切られる数方向のナデが見られるが、一部その前のユビオサエも残る。色調は器表・断面ともにぶい黄褐色10YR5/4。胎土に1mm弱の石英・赤色粒わずかにあり。外反する口縁や、ナデの調整から見れば、中世のものであろう。

3は陶器呉器手碗片。残存率40%ほど。全体に釉かかり細かい貫入が見られる。高台端部にも釉ハギはなく、トチン片の付着や欠け、磨滅が見られる。釉は浅黄色2.5Y7/4、胎土は灰白色2.5Y8/2を呈す。

4は須恵器転用の円板である。器壁にほとんど弯曲はなく、元の器種は判然としないが、調整・胎土からすれば東播系の捏ね鉢か。図化の方向で言うと、左面は縦方向のナデがあり、1条だけ横方向のナデがそれらを切る。右面は横方向のナデである。11回の打ち欠きにより円板状に仕上げているが、初めに大きな割りで五角形ぐらいの形にしてから角に小さな割りを入れ、円形に近くしているようである。器表は灰色N5/0、断面は灰白色N7/0を呈す。胎土に1mm弱の石英多し、1mm弱の長石・6~1mmの黒色粒若干あり。円板としての用途は不明と言うしかない。

5は土師器羽釜片である。残存率は10%ほどだが、鏝部の周は25%強残る。内面は初めにヨコハケを全面に入れた後、下半部は左上がりのナデで消す。中位部分はタテナデが散在しハケを消す。口縁側

表3 上町東遺跡1 tr. 第1・2層 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別	破片数	%	大器種	破片数	%
土器	172	土師器	126	73.3	皿	8	6.3
					羽釜	2	1.6
					甕	3	2.4
					蛸壺	28	22.2
					焙烙	1	0.8
		すり鉢	1	0.8			
		須恵器	10	5.8	こね鉢	1	10.0
瓦質	11	6.4	甕	5	45.5		
			すり鉢	1	9.1		
瓦器	25	14.5	碗	22	88.0		
			碗	4			
陶器	44	施釉	29	65.9	雪平	5	
					無釉	15	34.1
磁器	41	青磁	10	5.8	碗	1	10.0
		白磁	6	14.6			
		染付	25	61.0			
瓦	13	いぶし	13	100.0	平	13	
土製品	15	土鍾	11	73.3			
		土人形	2	13.3			
		粘土塊	2	13.3			
炭	1						

表4 上町東遺跡4tr. 第1層相当 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別	破片数	%	大器種	破片数	%
土器	195	土師器	152	77.9	皿	7	4.6
					羽釜	3	2.0
					甕	3	2.0
					蛸壺	20	13.2
					焙烙	79	52.0
					すり鉢	8	5.3
		火鉢	2	1.3			
		瓦質	37	19.0	甕	4	10.8
					すり鉢	10	27.0
					羽釜	14	37.8
					火鉢	2	5.4
		瓦器	6	3.1	椀	6	100.0
陶器	176	施釉	119	67.6	碗	77	64.7
					甕	13	10.9
					蓋	1	0.8
					鉢	12	10.1
					壺類	9	7.6
					すり鉢	22	38.6
		無釉	57	32.4	すり鉢	22	38.6
					甕	29	50.9
					碗	5	45.5
					皿	3	27.3
磁器	60	青磁	11	18.3	鉢	2	18.2
					碗	21	42.9
					皿	8	16.3
	染付	49	81.7	碗	8	16.3	
				皿	1	2.0	
				猪口	1	2.0	
瓦	9	土師質	1	11.1	平	1	100.0
		須恵質	1	11.1	平	1	100.0
		いぶし	7	77.8	丸	7	100.0
土製品	3	土錘	2	66.7			
		土人形	1	33.3			
石製品	2	硯	1	50.0			
		打製石器	1	50.0	チップ	1	100.0

面も一部ヨコナデがハケを消す。口縁端面はヨコナデ。外面は口縁から罅部下面までヨコナデ、胴部はヨコケズリだが単位は見えない、やや左上がりか。罅部下面から胴部には全面煤付着、口縁部も一部煤付着。器表はにぶい黄橙色 10YR6/4、断面はにぶい黄橙色 10YR7/2 を呈す。胎土に 3～1 mm の石英あり、2～1 mm の長石若干あり。1 mm 前後のチャートわずかにあり。16 世紀代のものか。

6 は土師器蛸壺である。残存率は 70% ほど。内面は無調整で布目圧痕とシボリ痕が混在。底部は袋状に閉じた布地がよじれたような圧痕を残す。外面はやや磨滅するが、最終調整はナデか。底部にのみユビオサエが残る。口縁より 4 cm ほど下に 1 条のユビナデで縄掛け用のくぼみを作る。器表は浅黄橙色 10YR8/4、断面はにぶい黄橙色 10YR7/3 を呈す。胎土に 2～1 mm の石英・1 mm 弱の長石あり、2～1 mm の赤色粒若干あり、2～1 mm の黒色砂粒わずかにあり。このような型作りの蛸壺は近隣の泉佐野市山出遺跡でも出土例があり、近世になって登場するものらしい。

7 は土師質の土製品、泥面子というには小さく、おはじきのようなサイズである。型押し面には中央のくぼみに葉っぱ状の造形がある。蜜柑を表しているのだろうか。裏面にはユビオサエ。器表は橙色 2.5YR6/6 を呈す。胎土には微細な石英・長石が認められるのみ。

8 は短冊状の銅製板である。4 周は滑らかで、切断後やすりがけをしたようである。片面に湯冷えのような皺が認められる。用途不明。質量 4.36g。

9 は土師質の土人形。衣冠束帯姿の坐像で、天神像かと推測される。前後の合わせ型作り。底部中央に串で刺突したような穴。胎土は精良で、微細粒にチャート・石英・長石・クサリ礫が認められる。

図 14・15 は 4 tr. の第 1 層相当段丘崖斜面堆積層出土遺物のうち、実測可能だったものである。まず図 14 の遺物について述べる。

1 は土師器小皿片。口縁端部を欠くが、おそらく直径 8 cm ほどのものであろう。内外面とも口縁は 2 条のユビナデが入る。内面底部に 2 個のユビオサエが見られ、外底面には 1 条のヘラ沈線。器表は橙色 5YR7/6 を呈し、断面は浅黄色 10YR8/4。胎土には 1 mm 前後の赤色粒あり、2～1 mm のチャートわずかにあり、微細粒に石英・長石わずかにあるが、精良な胎土。おそらくは中世のものであろう。

2 も土師器小皿。残存率は 30% ほど。内外面とも口縁ヨコナデ、底部一定方向ナデ。外面は橙色 5YR6/6、断面はにぶい黄橙色 10YR7/3。胎土には 2～1 mm の赤色粒あり、1 mm 弱の石英わずかにあり。

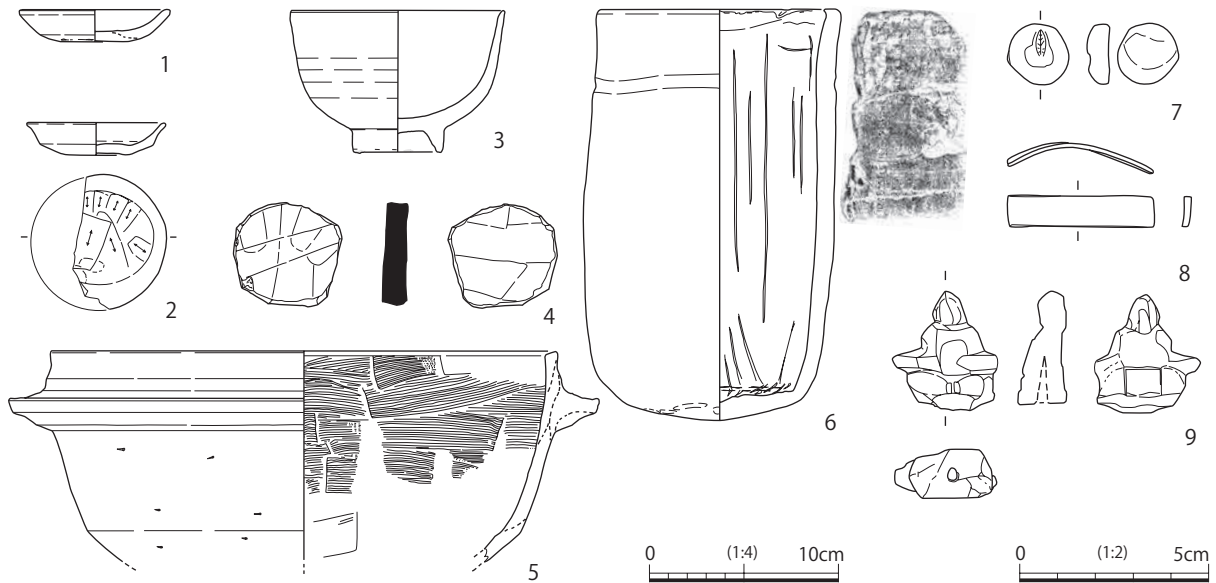


図13 第1・2層出土遺物 {1tr. 第1層:8、1tr. 第1・2層:1・2・4・7・9、4tr. 段丘崖下第1層以下(サブトレンチ):3・5・6}
(S=1/4、7~9はS=1/2)

精良な胎土。立ち上がりの弱さと調整から見れば近世のものか。

3は染付け小皿。高台端部のみ釉ハギ。見込みに宝珠を描き、外面は圏線で4分割した中に牡丹か。

4は染付け碗。残存率は70%ほど。外面の釉は高台より上で止まるが、一部高台まで釉だれ。釉の下は上半が回転ナデ、下半が回転ケズリか。高台にもケズリ。外面に網目文。

5は陶器、瀬戸美濃の天目茶碗片。残存率は50%ほど。釉は暗褐色 10YR3/3 を呈する鉄釉であり、外面の胴部中ほどで止まる。内面は回転ナデか。外面は口縁回転ナデ、胴部下半から高台・底部にかけて回転ケズリ。露胎部分は淡黄色 2.5Y8/3。

6は瓦質火鉢片。残存率は10%ほど、口縁は20%ほど残る。内面はヨコハケ後ヨコナデ。外面はヨコナデ後、粗く、短い単位のミガキが入る。器表は灰色 7.5Y5/1 を呈し、断面は灰黄色 2.5Y7/2。胎土に1mm弱の石英・0.5mm強の長石あり。あまり見ない器形だが、ミガキがある事から、奈良火鉢成立以前の瓦器盤の伝統を引くものか。中世のものであろう。

7は土師器羽釜片。罫は貼り付けの接合痕を残す。外面は罫下側の接合痕より下はヨコケズリ、それより上はヨコナデ。口縁部側面の段は幅4mmほどの緩い沈線によって作られる。罫端部にも棒状工具によるナデ。内面はヨコハケ、罫接合部の裏面に最後のハケが入る。罫下面以下に煤付着。器表は灰黄褐色 10YR5/2 を呈し、断面は橙色 7.5YR6/6。内傾度合いの低い口縁の形態から見て16世紀頃のものか。

8も土師器羽釜片。残存率は10%以下か。内面は全面ヨコナデ、口縁部付近に煤付着。外面は口縁から罫下面までヨコナデ、胴部はヨコケズリ、全体に煤付着。口縁に意図的な打ち欠きらしきものがある。その破断面にも煤が付着し、内面寄りの部分に擦痕が見られる。器表は灰色 7.5Y5/1、断面は灰オリーブ色 5Y6/2。胎土に1mm前後の石英・0.5mm強の長石あり、1mm弱のチャート若干あり。16世紀頃か。

9は瓦質土器羽釜片。残存率は10%ほどだが、口縁周は20%ほど残る。内面はヨコナデ。外面は口縁から罫下面までヨコナデ、胴部はヨコケズリ。罫下面と胴部が接するところでケズリとナデが重なるが、ナデが後から入る。胴部には粘土接合痕が一つ見える。外面の口縁と罫の接合部分から下方斜めに径5mm、深さ1.1cmの孔が1個、刺突により付けられている。しかし、内面は粘土の押し出しの隆起が見られるが貫通していない。器表は黒色 5Y2/1、断面はにぶい黄褐色 10YR7/3 を呈する。胎土には1

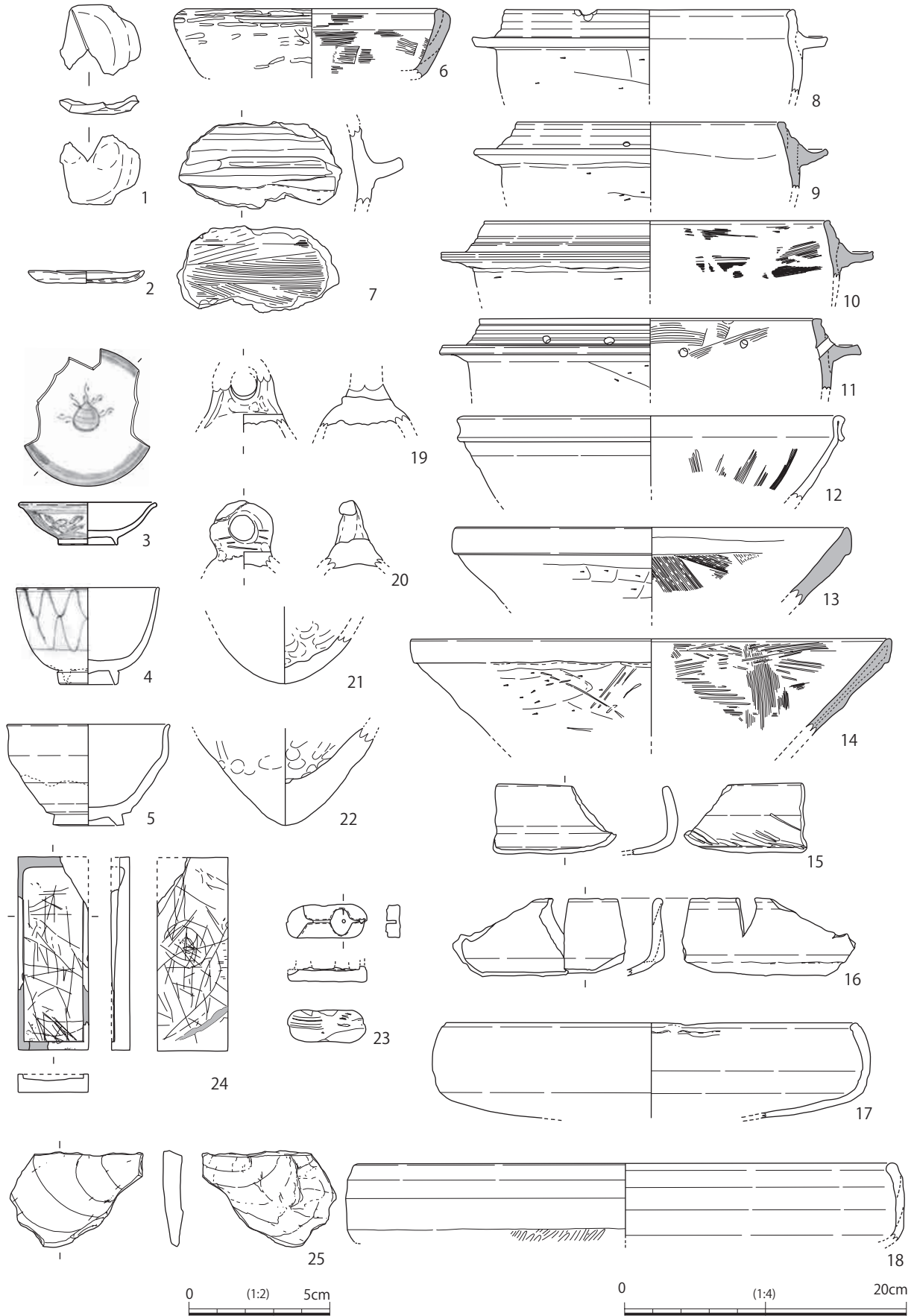


図14 上町東遺跡4tr. 第1層相当段丘崖斜面堆積層出土遺物(その1) (S=1/4、石器のみS=1/2)

mm前後の石英・1mm弱の長石が多く、1mm弱の黒色砂粒わずかにあり。口縁部が内傾するが、その外面の段は明確ではなく、胴部は球状である形態からすれば、14世紀頃のものか。

10も瓦質土器羽釜片。残存率は10%以下か。鏝部周は25%ほど残る。内面はヨコハケ、1単位だけ、他より目の粗いハケが見られる。外面は、口縁部は板状工具による強いヨコナデ、工具端が沈線状に入り、段状の形態を成す。鏝部は上下面ユビヨコナデ、鏝端部は棒状工具による沈線状ナデ。鏝の下側の接合部は接合痕を残す。胴部はヨコケズリ。器表は暗灰色 N3/0、断面はにぶい黄橙色 10YR7/3 を呈す。胎土には1mm弱の石英・長石多し、1mm弱のクサリ礫あり、2～1mmのチャートわずかにあり。口縁部外面の段が明確で、胴部は寸胴気味なので、15世紀頃のものか。

11も瓦質土器羽釜片。残存率は10%ほどだが、鏝部周は30%ほど残る。内面はやや磨滅するがヨコハケ後ナデか。外面は口縁から鏝下面にかけてヨコナデ、口縁部には板状工具の角を使った沈線状の段が3段見られる。鏝部の上下面のナデはユビナデか。鏝端部もわずかに凹面気味の面を持つ。胴部はヨコケズリ。外面の口縁部と鏝部の接合部分から内面下方に斜めに貫通する孔が2個認められる。孔同士の距離は中心同士で4.4cm。外面から棒状工具の刺突により開けられたものと思われる。器表はやや鉄分が沈着するが黒褐色 2.5Y3/1、断面はにぶい黄橙色 10YR7/3 を呈する。胎土には1mm前後の石英・長石多く、1mm前後の赤色粒・灰色砂粒若干あり。これも15世紀頃のものか。

12は鉄釉陶器の播鉢片。残存率10%、口縁周15%残存。全体に回転ナデ。内面はその後スリ目。口縁は外側折り返し。鉄釉は内外面とも、褐色 7.5YR4/4、断面は黄灰色 2.5Y5/1 を呈す。唐津系か。

13は瓦質捏ね鉢片。残存率10%ほど、口縁周は20%ほど残存。内面は左上がりのハケ後、口縁に2条のヨコナデ。ハケ目はカキ目のような深く入るものではない。外面胴部は短い単位のヨコケズリ。口縁部ヨコナデ。ヨコナデは口縁部のやや下まで及び、ケズリを切る。器表は灰色 N4/0、断面は灰白色 2.5Y7/1 を呈す。胎土に2～1mmの石英・1mm弱の長石・黒色砂粒あり。14世紀後半頃のものか。

14は瓦質播鉢片。残存率10%ほど、口縁周は20%ほど残存。内面はミガキ後カキ目。ただし、口縁付近で、ミガキが深く入り、カキ目の当たりが弱いため、ミガキ部分でカキ目がとんでいる部分もある。外面は口縁折り返しの粘土帯あり。その接合部分のやや下までヨコナデが及び、胴部のヨコケズリを切る。胴部はケズリの上に、いくつかの工具の当たりらしき沈線が散在する。器表は暗灰色 N3/0、断面は灰色 5Y4/1 を呈す。胎土に1mm前後の石英多し、5～1mmのチャートわずかにあり。外面のケズリが不規則になってきている事からすれば、14世紀末から15世紀前半頃のものか。

15は土師器炮烙片。内面はヨコナデ、底部に炭化物付着。外面は口縁ヨコナデ、屈曲部には棒状工具による左上がりのナデが密に入る。底部は無調整。器表はにぶい黄橙色 10YR6/3、断面もにぶい黄橙色 10YR6/4 を呈す。胎土には0.5mm強の長石あり、5～1mmの白色粘土塊あり。

16も土師器炮烙片。内面はヨコナデ、底部に煤付着。外面は口縁ヨコナデ、底部無調整、屈曲部付近から下に煤付着。器表はにぶい褐色 7.5Y5/4、断面は橙色 5YR7/6 を呈す。胎土に1mm弱の長石あり、1mm弱の石英若干あり、1mm弱の赤色粒・黒色砂粒わずかにあり。

17も土師器炮烙片。残存率10%、屈曲部付近が周20%ほど残存だが復元径は不安あり。内面はヨコナデ、屈曲部は強いヨコユビナデ、口縁端部内側面に細い棒状工具による沈線。同位置に粘土接合痕残る。外面は口縁部から屈曲部までヨコナデ、底部は無調整。口縁端部外側面は強めのナデで凹面を成す。胴部下半にはヨコナデ前のヨコユビナデの痕跡が一部残る。全面に煤付着。器表は灰黄褐色 10YR4/2、断面は褐灰色 10YR5/1 を呈す。胎土に1mm前後の石英・長石あり、3～1mmの赤色粒若干あり。

18 も土師器炮烙片。残存率は 10%ほどで復元径には不安がある。内外面とも口縁から胴部にかけて強いヨコナデ 3 条。内面は胴部中ほどに炭化物付着。外面下端のヨコナデ 1 条部分はケズリ後ナデか、屈曲部にはタタキが見られ、全面に煤付着。器表はにぶい黄橙色 10YR5/3、断面は明褐色 7.5YR5/6 を呈す。胎土に 1 mm 弱の石英多し、0.5 mm 強の長石あり、1 mm 弱の黒色砂粒わずかにあり。

19 は土師器釣鐘形飯蛸壺吊り手部片。壺部内面は螺旋状のユビナデ。外面はユビオサエとユビナデで吊り手部を接合する。紐孔は両側から指を入れてユビナデ。器表は橙色 2.5Y6/6、断面はにぶい黄橙色 10YR7/3 を呈す。胎土に 1 mm 前後の石英多し、1 mm 弱の黒色砂粒あり、1 mm 弱の長石若干あり、1 mm 前後の赤色粒わずかにあり。

20 も土師器釣鐘形飯蛸壺吊り手部片。吊り手部と壺部の接合部分は粘土接合痕を残しながらユビオサエあり。吊り手部下半には工具の当たりらしき水平方向の沈線散在。上半には紐状の圧痕が一つ見られる。器表はにぶい橙色 5YR7/4、断面は灰白色 2.5Y7/1 を呈する。胎土に 1 mm 前後の石英・1 mm 弱の長石あり、1 mm 前後のチャート若干あり、1 mm 前後の赤色粒わずかにあり。

21 は土師器蛸壺底部片。外面は磨滅、調整不明。内面は、ユビオサエは左上がりの列を成し、ユビナデはほぼ垂直にナデアゲ。器表はにぶい橙色 7.5YR7/3、断面はにぶい黄橙色 10YR7/3 を呈す。胎土に 2～1 mm の石英多し、1 mm 弱の長石あり、1 mm 前後のチャート・黒色砂粒若干あり。

22 も土師器蛸壺底部片。21 より底部が尖り分厚い。内面は底部にランダムにユビオサエ、やや上にそれを切ってナデ上げるタテユビナデ。外面は磨滅するが、横に並ぶユビオサエが 1 列認められ、その上に縦方向のナデの痕跡残る。器表は橙色 7.5YR7/6、断面は浅黄橙色 10YR8/3 を呈す。胎土に 1 mm 前後の石英・1 mm 弱の長石あり、2～1 mm の赤色粒・1 mm 弱のチャート若干あり。

23 は土師質の型作り土人形の台部片である。両長辺から型を合わせた痕が上面長軸方向中心に残るが、外形でわずかな型のずれが認められる。上面には楕円形に近いもの二つと小さな円形の折れ痕があり、楕円の一つには軸を入れたらしき孔が残る。下面はハケとナデ残り、下面以外には剥離剤のキラ粉が残る。色調はにぶい橙色 10YR6/4。胎土に 1 mm 弱の石英若干あり、0.5 mm 強の長石・黒色砂粒わずかにあり。折れ痕は両足と杖のようで、杖を持った人物か仏の立像の台か。

24 は石製硯。縁部に欠け多い。上下面に傷多く、特に下面は何かを描いた線刻がある可能性も考えられたが、図柄・字などは確認できなかった。四周の端面には製作時のものと思われる一定方向の擦痕が認められる。黒粘板岩製か。

25 はサヌカイト剥片。ネガ面には打面を同じくする二つの剥離面が認められ、ポジ面では打点を 90 度転換している。やや磨滅強い。

図 15 は図 9 の出土状況図にある陶器 1 の湊焼甕片である。底部付近の破片が集中して出土した他、同一個体の口縁と思われる破片も 1 片出土した。残存率は 30%ほどか。平底の底部だが、復元径は判然としない。内面はほぼ全面ヨコハケだが、底部付近はその下に内当て具痕と思われる凹凸がある。口縁は肥厚し、端部に水平な面を持ち、内外面ヨコナデ。外面は粗い平行タタキが入り、底部は激しく磨滅して調整不明。色調は器表も断面もにぶい黄橙色 10YR7/4。胎土は 1 mm 弱の石英・チャート・長石多し。5～2 mm のチャート・3～2 mm の石英も若干あり。

以上の遺物を見ていくと、14・15 世紀の遺物を含みながら、染付けなどの陶磁器も含む。ただ、染付けに印判のものはなく、奈良火鉢以前の伝統を引く瓦質火鉢が存在する事などを考えると、第 1 面以上の包含遺物より古色を示す。陶器の方が磁器より多い状況も古色か。第 1・2 層、第 1 層相当層で示

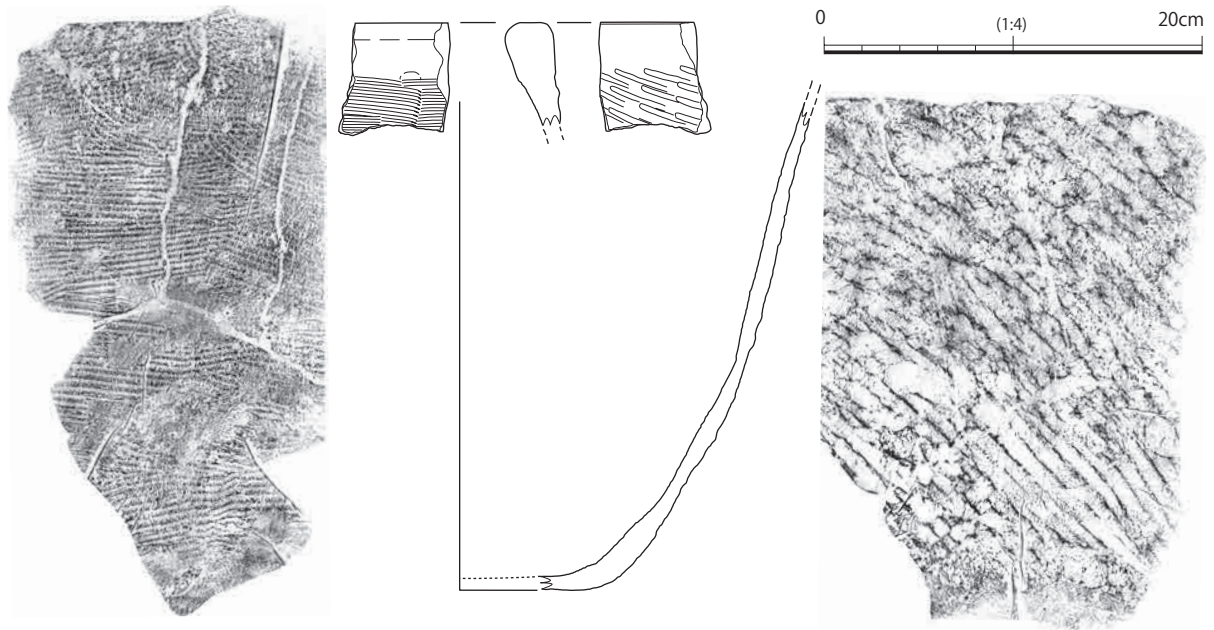


図15 上町東遺跡 4tr. 第1層相当段丘崖斜面堆積層出土遺物(その2) 陶器1(湊焼) (S=1/4)

される時期は16・17世紀頃と言え、第2層からも染付けが出土しているのは確認しているので、第2層が耕土として機能していた時期が近世前期頃、第1層が耕土であったのがやや後ろに余裕を持たせれば近世前期～中期頃。第0層が近世後期から近代初頭となろうか。

4、近世面切り込みと考えられる遺構(201井戸・185溜井)

1) 201井戸(図16)

この井戸は、2tr.の北東端近くで検出されたが、その付近では後世の削平が非常に強く、この井戸以外の遺構は一切残存していなかった。どの面からの切込みかも不明だが、出土遺物から見ると、明らかに近世に埋められた井戸であり、第1層耕土時の井戸である可能性が高いと思われた。調査記録したのは2tr.の最終面である第5面の調査時(図24)であるが、その所属時期からここで述べておく。

平面形は南北に長径を持つ楕円形で、長径1.15m、短径0.97m、壁は直立する。埋土は北西方向から入れられたらしく、層境は南東へ激しく傾斜している。裏込め土のような層は認められなかった。遺物のほとんどは多くの自然礫と共に断面図の②の層内に包含されていた。

遺物取り上げが③の層に至ると出土量が減ったので、それより下は機械による断ち割りを入れた。しまりの悪い砂層に達した時、湧水があり、崩壊の危険性が出たので、断面図の追加や遺物取り上げはできなかった。ただ、底部は確認でき、略測で検出面から2.4mほどの深さがある事が判明した。

出土遺物は、礫も大量にあったが、加工痕や被火痕はなし。破片数(表5)で最多は瓦で、全ていぶし。井戸椀瓦はなく、平瓦と丸瓦の比率が2対1。供膳器は染付け碗が最多、陶器碗・土師皿がそれに続く。他に多いものはないが、中世に遡る遺物が非常に少ない。また、鞆の羽口片が出土している。

図17が出土遺物。瓦は特徴的のあるもののみ掲載、それ以外は図化可能なものは掲載した。

1は陶器碗。残存率40%ほど。全面施釉で高台端部のみ釉ハギ、ハナレ砂付着。外面胴部下半は回転ケズリ、高台もケズリ出し。釉は灰褐色7.5Y4/2の褐色釉の上に灰白色10YR8/2の白泥釉をロクロ回転で斑に施す「刷毛目唐津」である。断面の色調はにぶい赤褐色2.5YR5/4。

2は肥前内野山窯産陶器碗片。残存率10%で復元径に不安あり。内外面とも灰釉、内面は薄く灰オリーブ色7.5Y6/2を呈するが、外面は厚く暗緑色でその上に青灰色釉を太い筆描きで施す。青灰色釉は釉

表5 201 井戸 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別			大器種		
			破片数	%		破片数	%
土器	23	土師器	22	95.7	皿	15	68.2
					羽釜	2	9.1
					焙烙	1	4.5
					脚	4	18.2
		瓦器	1	4.3			
陶器	28	施釉	23	82.1	椀	17	73.9
					蓋	5	21.7
					把手	1	4.3
					すり鉢	2	40.0
		甕	2	40.0			
		無釉	5	17.9			
磁器	36	白磁	1	2.8			
		染付	34	94.4	椀	33	97.1
瓦	154	いぶし	154	100.0	丸	54	35.1
					平	100	64.9
埴	1	土師質	1	100.0			
土製品	8	鞆羽口	4	50.0			
石製品	1						
石	1						

当裏面は中央にコビナデ・コビオサエが散在し、縁にそれらを切るナデが巡る。珠文は11個、巴文は小さく尾の長いタイプ。器表は灰色N4/0、断面は灰白色N7/0を呈する。胎土に2～1mmの石英多し、1mm前後のチャート・長石あり。

8もいぶし軒丸瓦片。珠文11個で、7と同型式だが範は違う。瓦当裏面に数方向のナデ、縁を巡るナデがそれらを切る。本体との接合部剥離面に串状工具による刺突痕。器表は灰色5Y5/1、断面は灰黄色2.5Y7/2を呈す。胎土には1mm前後の石英多し、2～1mmのチャート・1mm弱の長石あり。

9は丸瓦片、凹面は布目残し横位の粗い工具ナデ。玉縁面端に1条の削り。玉縁端面～凸面端はココナデ。凸面のタテナデはそれに切られる。器表は黒色N2/0、断面は灰白色N7/0を呈す。胎土に2～1mmの石英あり、1mm前後のチャート若干あり、1mm弱の長石わずかにあり。

10も丸瓦片。凹面は玉縁面を中心に布目・紐痕が残るが、断面弧状の縦方向の深いケズリがそれを消す。凸面は玉縁面から接合部縁までココナデだが、本体部分にはタテナデ。器表は暗灰色N3/0、断面は灰白色N7/0を呈す。胎土には1mm前後の石英多し、長石あり、チャートわずかにあり。

11は軒平瓦片。凹面はタテケズリ、砂付着。凸面はココケズリ、瓦当移行部にはナデ、瓦当裏面はケズリ後ナデか。器表は黒色N2/0、断面は灰色N6/0を呈す。胎土に4～1mmの石英あり、1mm弱のチャート若干あり。文様からすると17世紀初頭前後のものか。

12は平瓦片。凹面は縁部はナデ、他はミガキか。凸面は不定方向のナデ。端面は調整不明。器表はやや還元を受けたか青黒色5B2/1、断面は明青灰色5B7/1を呈す。胎土は1mm前後の石英あり、1mm弱の長石若干あり、1mm前後のチャート・クサリ礫わずかにあり。

13も平瓦片。凹面タテナデ。凸面ナデ上に棒状工具のナデ散在。側面ナデ。端面はコビキか。器表暗灰色N3/0、断面灰白色N7/0を呈す。胎土に2～1mmの石英多し、2～1mmの長石・チャートあり。

以上の遺物から時期はあまり限定できないが、17世紀頃、近世前期の集落的様相である。漆塗りへ

垂れもあり。内面は釉の下に沈線状の工具痕が1条残る。外面は上半回転ナデ、下半回転ケズリか。

3は青磁碗片。残存率10%ほど、高台はほぼ残る。内面には幅1.4cmの蛇の目釉ハギ。外面は高台端部のみ釉ハギ。釉の発色は明緑灰色10GY8/1。

4は鉄釉陶器片。胴部最大径付近の破片か。外面は工具のロクロ目が残るが、下の方はなく、回転ヨコナデ。内面は格子目タタキ。釉の発色は暗赤褐色10R3/2、断面も暗赤褐色5YR3/3を呈する。

5はへら状木製品である。幅1.4cm、厚さ4mm。両端は欠失し、途中で折れ曲がっている。側面図で下面に当たる面のほぼ左半分と、上面の所々に黒漆が付着する。漆塗り用の工具か。

6は大型管状土錘片である。残存率は40%ほど。外面は磨滅するが、孔内に粘土接合痕とナデが残る。長さ5.9cm、復元最大径4.8cm。

7はいぶし軒丸瓦片。ほぼ瓦当部分のみ残る。瓦

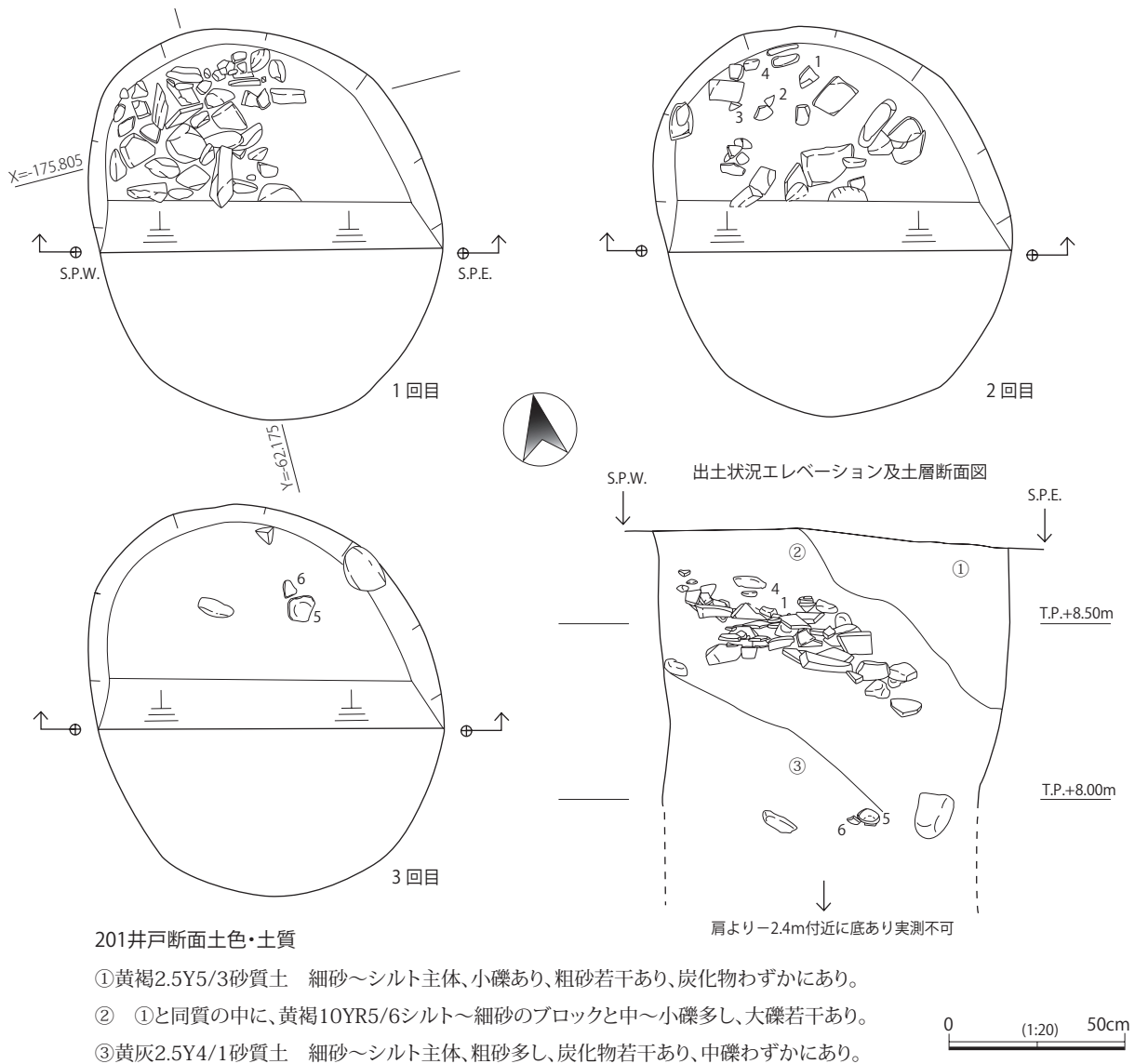


図16 上町東遺跡 2tr. 201井戸出土状況図・断面図(S=1/20)

ラや、鞆の羽口は工房的だが、量的に少なく小片でもあるので過大に評価はできないものと思われる。

隣接部分の調査でも屋敷地的な遺構は認められず、この井戸の機能時に周辺は耕作地であったようだ。ただ、北西に田出村が近く、そこから埋土を持ってきた可能性は否定できないだろう。

2) 185溜井 (図18・19)

185溜井は2tr. 南西半の南東壁寄りに位置するが、その付近は第5面まで削平されていた(図24)。

ただし、遺構埋土上半の砂質土が、第3・4層より明度が高く砂質。第1層より明度低く粘質で、第2層に近い質であり、風化礫の入る割合も近い事と、出土した遺物の時期が第2層の想定される時期と共通する事から、第2層が耕土として機能している時に存在した遺構と判断し、ここで述べる。

南東から186溝が取り付け、切り合いはない。平面形は楕円に近い不整形で北東～南西に長軸。長軸方向4.16m、直交短軸2.55mを測る。上半は緩やかに落ちるが下半は壁が立つ。底部は平坦だがやや南西側に傾く。埋土下半は周縁の砂層と中央のシルト層がフィンガーイーザし、滞水状態の中、数度の土砂の流入で徐々に埋没したようである。上半埋土の砂質土は人為的埋土であろう。しかし上半の緩い傾斜部分は細砂～シルトで覆われる。自然に埋まり凹地化した後で人為的に埋められたのであろう。

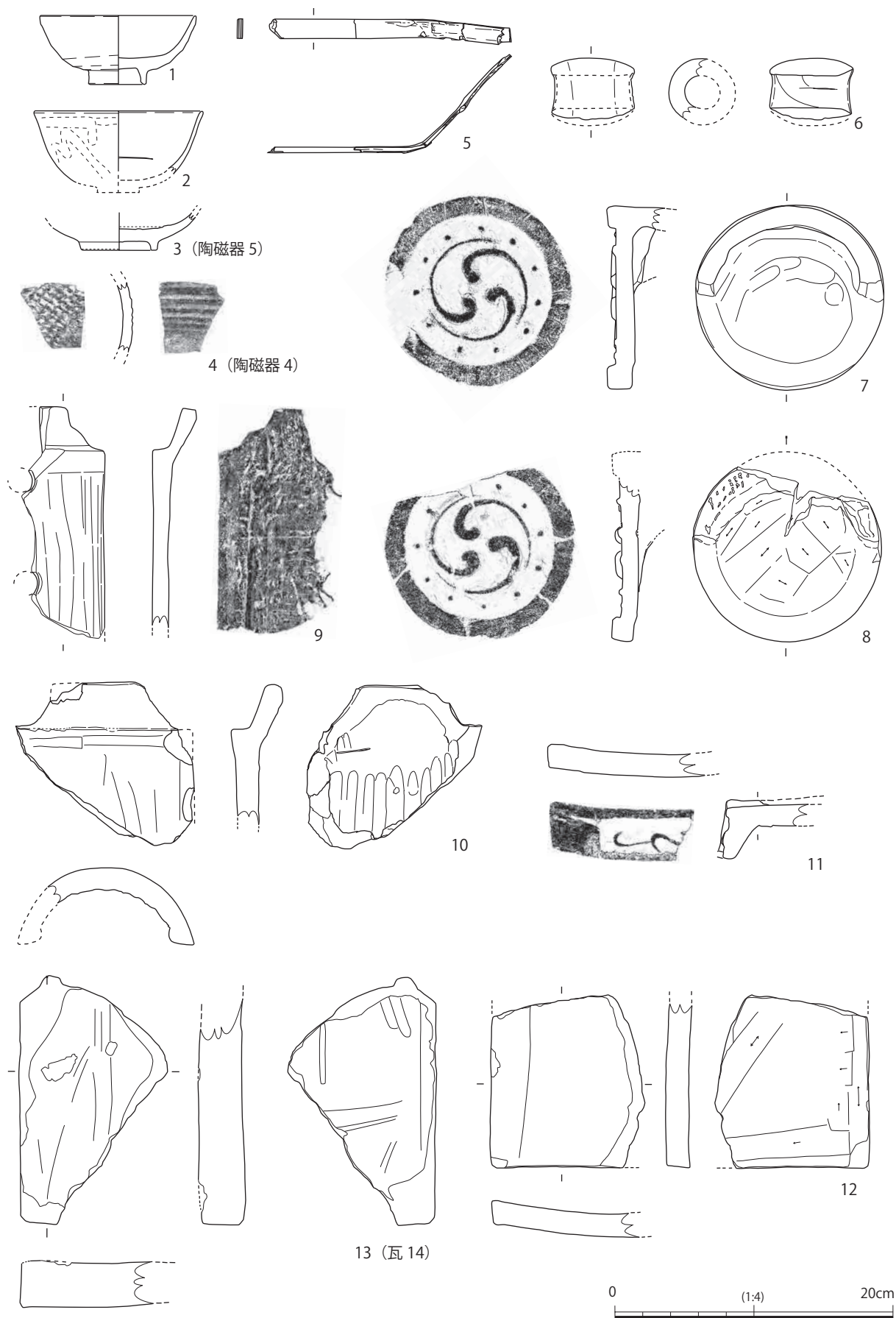


图17 201井戸出土遺物 (S=1/4)

埋土に大量の礫が含まれ、土器類はその間に散在していた。礫は上半では 10 cm前後で、緩傾斜部分に張り付くが、下半では底部から浮き、下方に大きな礫が多く、最大では長軸 40 cm近い礫もあった。

中位段丘構成層上部でその大きさの礫を含む層はない事から、これらの礫は付近の河川から採取され運ばれたものと考えられる。礫自体に人為的な痕跡のあるものはない。

礫と遺物は全て埋土下層内で、大きい礫が下に多く、しかもそれが底部に達していない状況から、埋土下層が滞水状態で堆積している時に投棄され、シルト層内を自重により沈み込んだものと考えられる。

平面的には北側の斜面に集中し、埋め立て直前に北から投棄された可能性が高いと思われる。おそらくは段丘上の調査区近辺にこれらの礫によるなんらかの構造物があり、それは土器が含まれるような、人の生活圏の中にあつたのであろう。それを破壊してここに投棄した可能性が高いと考える。

遺構自体の性格は、地勢や水利体系で上流側に当たる南東山側から幅約 80 cm、深さ 50 cmほどのしっかりした規模の溝が取り付き、土坑自体はさらに深く平面規模もある事から溜井と考えた。

遺物破片数(表6)は土師器が多く、その中でも小皿が多いが小片。炮烙がわずかにある。羽釜は土師器も瓦質土器も内傾口縁外面に段の付くもののみ。瓦質土器は他に甕と播鉢。瓦器碗も小片ながら一定量出土しており、外面にミガキのあるものも見られる。しかし、陶磁器類もあり、染付けは確認できないが、染付けでもおかしくない白磁小片は存在する。瓦は少ないが全ていぶし焼きである。

図 20 は出土遺物のうち、実測可能なものを全てを掲載した。

1 は土師器羽釜片。残存率 10%、口縁部周 20% 強残存。内面～外面鏝部ヨコナデ。内傾する口縁の外面には棒状工具のナデにより三つの段。胴部はケズリだが単位・方向は不明。ケズリは鏝部下面半分まで及ぶ。磨滅のせいか煤の付着は見られない。器表・断面とも橙色 5YR6/6。胎土に 2～1 mmの石英多し、5～1 mmのチャート・1 mm弱の長石・1 mm前後のクサリ礫あり。

2 も土師器羽釜片。残存率 10%ほど、口縁部周は 25%ほど残存。内面はヨコハケ後ヨコナデ、口縁部は強めに 1 条ヨコナデ。口縁端部もヨコナデ。外面は口縁部から鏝部下面までヨコナデだが、鏝部下面の 2 条のナデの内側のものはケズリ後ナデのようである。胴部はケズリ、単位も見えるが、方向は磨滅のため判然としない。鏝部下面以下煤付着。器表はにぶい橙色 5YR7/4、断面は灰黄色 2.5Y7/2 を呈する。胎土に 2～1 mmの石英あり、1 mm弱の長石若干あり、3～1 mmのチャートわずかにあり。

3 は瓦質羽釜片。残存率 10%で復元径に不安残る。内面は鏝部付近以下が磨滅のため調整不明。それ以上はヨコナデ。口縁端部ヨコナデ。外面は口縁から鏝部下面の途中までヨコナデ。鏝部下面内側か

表6 185 溜井 遺物破片数集計表

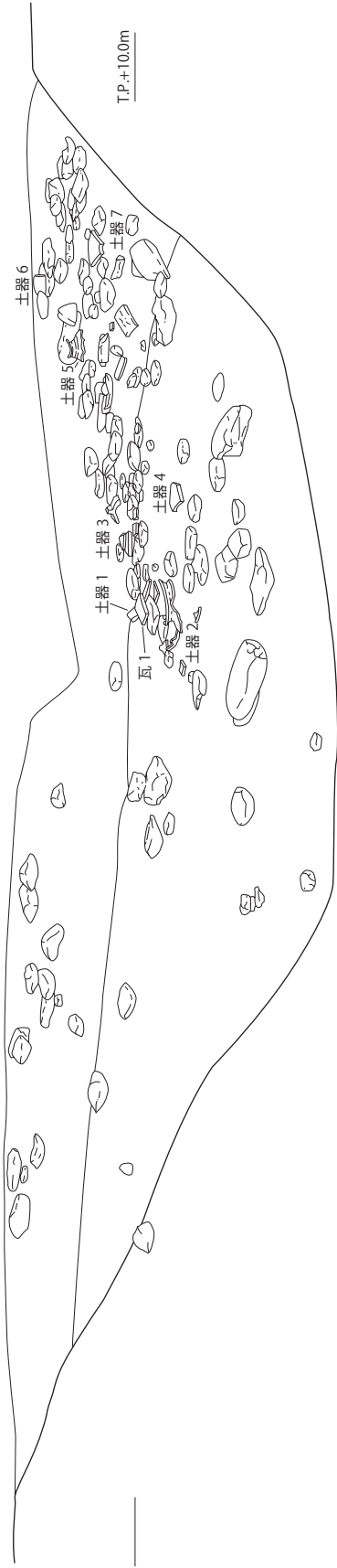
大種別	総数	小種別	破片数		大器種	破片数	
			破片数	%		破片数	%
土器	118	土師器	58	49.1	皿	30	51.7
					羽釜	7	12.1
					甕	16	27.6
					焙烙	5	8.6
		須恵器	6	5.1	坏	2	33.3
					こね鉢	3	50.0
		瓦質	33	28.0	すり鉢	11	33.3
					甕	3	9.1
					羽釜	19	57.6
		瓦器	21	17.8	碗	17	81.0
皿	2				9.5		
陶器	4	施釉	4	100.0			
磁器	28						
瓦	5	いぶし	5	100.0	軒	5	100.0
木製品	1	棒	1	100.0			
石製品	1						
木片	1						
桃核	3						



図18 上町東遺跡 2tr. 185溜井出土状況図 (S=1/20)

エレベーション起点

遺物出土状況エレベーション図 (礫は省略あり)

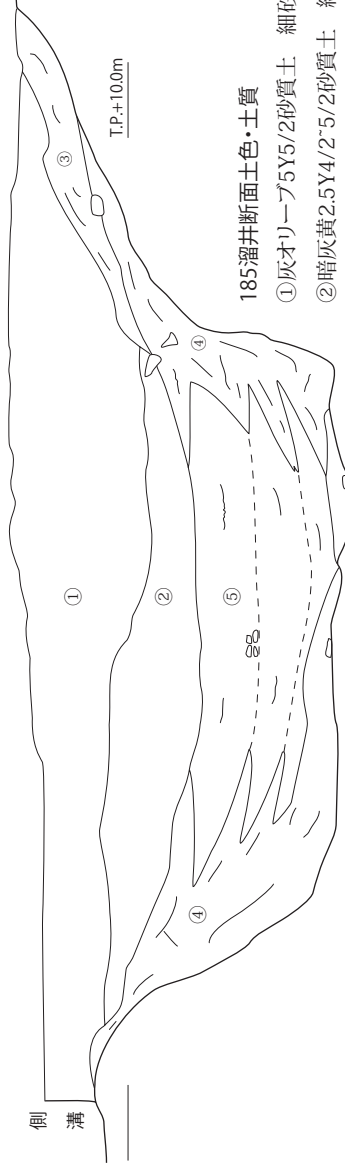


S.P.

S.P.

側溝

土層断面図 (北東から)



185溜井断面土色・土質

- ① 灰オリーブ5Y5/2砂質土 細砂～シルト主体、中砂～粗砂あり、小礫若干あり、Mn粒多し。
- ② 暗灰黄2.5Y4/2・5/2砂質土 細砂～シルト主体、粗砂～小礫若干あり、Mn粒あり。
- ③ 暗灰黄2.5Y5/2砂質土 細砂～シルト主体、黄褐2.5Y5/6シルトの小ブロック・小礫～粗砂多し。
- ④ 黄灰～オリーブ褐2.5Y4/1～4/3細砂～粗砂 シルト・黄褐2.5Y5/4シルト～細砂のブロック・小礫若干あり、ラミナあり。
- ⑤ 灰N5/0シルト 細砂～粗砂わずかにラミナ状に入る、部分的に斑状Feあり。

図19 上町東遺跡 2tr. 185溜井出土状況エレベーション図・土層断面図(S=1/20)

ら胴部はヨコケズリ。胴部のケズリは単位不明。器表は剥落部分多いが黄灰色 2.5Y4/1、断面灰黄色 2.5Y7/2 を呈す。胎土に 3～1 mm の石英多し、1 mm 弱の長石・2～1 mm のチャートあり。

4 も瓦質羽釜片。残存率 10% ほど、口縁部周 20% ほど残存。内面は磨滅し調整が判然としないが、口縁部付近はヨコナデ。口縁端部もヨコナデ。外面は口縁から鏝部下面までヨコナデ。胴部は右下がりのケズリ。器表は灰色 5Y5/1、断面にぶい黄橙色 10YR6/4 を呈す。胎土に 4～1 mm の石英多し、1 mm 弱の長石・チャート若干あり、1 mm 弱のクサリ礫わずかにあり。炭素吸着は残るが胎土は土師器に似る。

5 も瓦質羽釜片。残存率 10% ほど、復元径に不安残る。内面ヨコナデ。外面口縁から鏝部下面までヨコナデ、胴部ヨコケズリ。口縁外面の段は細い棒状工具で沈線状にナデて作る。器表は黒褐色 10YR3/1、断面褐灰色 10YR4/1 を呈す。胎土に 2～1 mm の石英多し、1 mm 前後のチャート・1 mm 弱の長石若干あり。

6 は土師器播鉢片。残存率 10% ほど、口縁部周 20% ほど残存。内面は磨滅激しく、カキ目一部残るのみ。外面は口縁ヨコナデ、胴部ケズリか。器表は黒褐色 10YR3/2、断面は褐灰色 10YR5/1 を呈す。胎土に 2～1 mm の石英、1 mm 弱の長石あり、2～1 mm のチャートわずかにあり。

7 は瓦質播鉢片。残存率 10% ほど、口縁部周 20% ほど残存。内面はヨコナデ後カキ目、やや磨滅。外面は下方が調整不明だが口縁部からヨコナデ、胴部上端付近にその後部分的にハケ。器表は灰色 5Y5/1、断面浅黄色 2.5Y7/3 を呈す。胎土に 1 mm 前後の石英あり、1 mm 弱の長石・3～1 mm のチャート若干あり。

8 は瓦質羽釜片。内面短い単位のヨコナデ。外面口縁部から鏝部下面までヨコナデ、胴部ヨコケズリ。器表灰色 N5/0、断面灰白色 N7/0 を呈す。胎土に 1 mm 弱の石英あり、1 mm 弱の長石・クサリ礫若干あり、2～4 mm のチャートわずかにあり。

9 は瓦質甕胴部片。内面タテナデ。外面平行タタキ、一部ヨコナデで消される。器表は黄灰色 2.5Y6/1、断面灰白色 5Y7/1 を呈す。胎土に 1 mm 弱の石英・長石若干あり。

10 はいぶし平瓦片。凹面は横方向のケズリ、凸面は縦方向のケズリ。器表は灰色 N4/0、断面灰白色 7.5Y7/1 を呈す。胎土に 1 mm 前後の石英・1 mm 弱の長石あり、2～1 mm のチャートわずかにあり。

11 は瓦質土器甕口縁部片。残存率は 10% 以下、復元径に不安あり。内面はヨコナデ。外面は口縁ヨコナデ、頸部ヨコケズリ後ヨコナデ、胴部それに切られるタタキ。器表は灰色 N4/0、断面は灰色 5Y6/1 を呈す。胎土に 1 mm 弱の長石あり、1 mm 前後の石英若干あり。

12 も瓦質土器甕口縁部片。残存率 10% 以下、復元径に不安あり。内面は頸部以下ヨコハケ後口縁までヨコナデ。外面は口縁ヨコナデ、頸部やや粗いヨコナデ、胴部それに切られるタタキ。器表は灰色 7.5Y6/1、断面は灰白色 5Y8/1 を呈す。胎土に 1 mm 前後の石英・1 mm 弱の長石若干あり、1 mm 弱のチャート・砂岩・クサリ礫わずかにあり。

13 は陶器常滑甕口縁部片。残存率 10%、復元径に不安あり。内面は三つのユビオサエ列、上の二つに粘土接合痕あり、その上から回転ナデ。外面は口縁回転ナデ、頸部以下ヨコナデで降灰痕あり。器表は暗赤褐色 5YR3/2、断面は褐灰色 10YR4/1 を呈する。胎土に 2～1 mm の石英・1 mm 弱の長石あり。

14 は緑色片岩である。加工痕ないが石棒状の形態を成す。紀ノ川流域産か。重さ 160.88g。

15 は棒状木製品。断面長方形に加工され、図上端は端部。下端は折れる。用途不明。出土遺物のほとんどは 14・15 世紀のものか。ただ、わずかながら磁器・施釉陶器片が出土し、これらを全て中世の輸入陶磁とするのは無理があり、近世の国産品が含まれると見た方が自然であろう。埋め

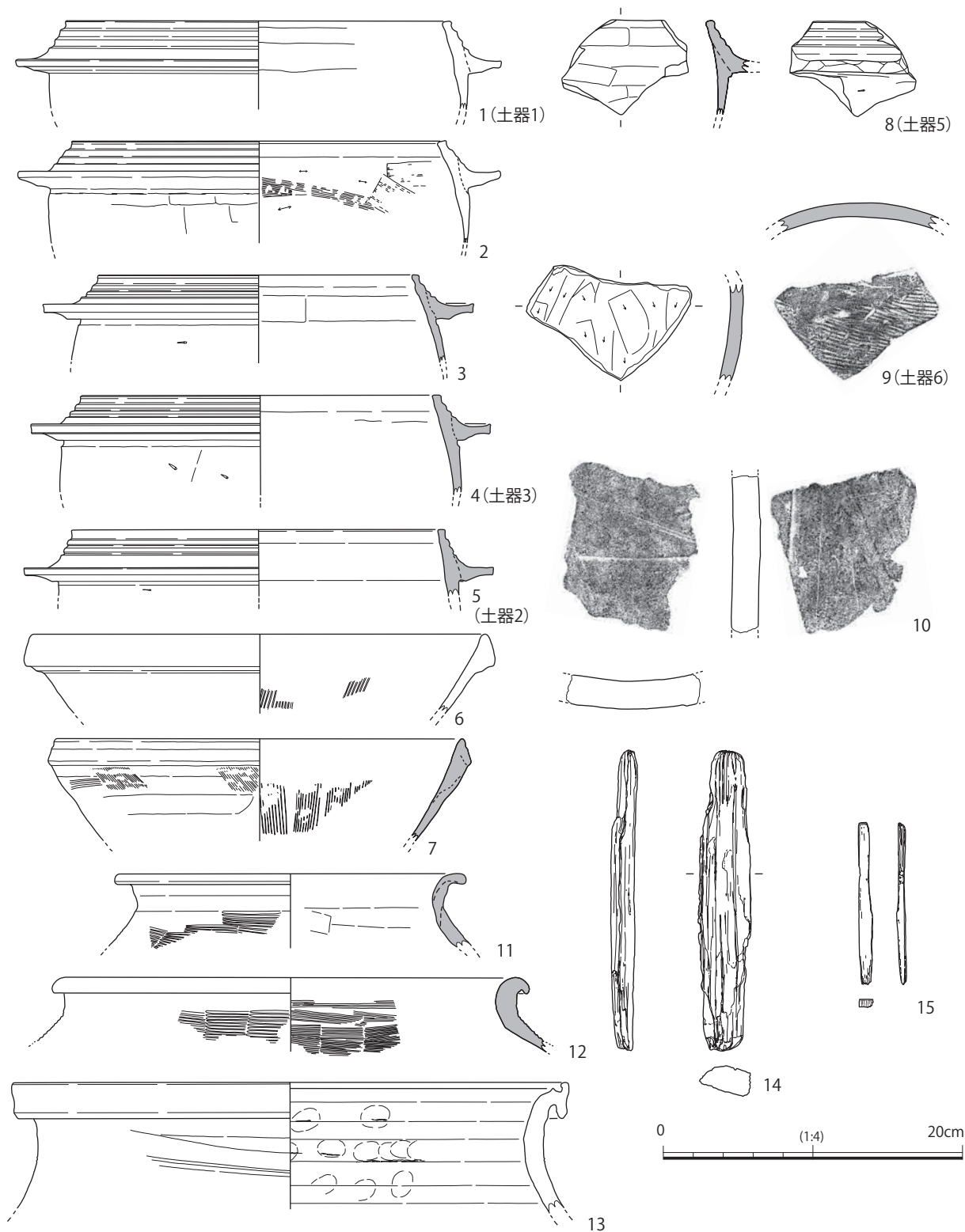


図20 185溜井出土遺物 (S=1/4)

られたのは近世で、その中でも早い時期とするのが妥当かと思われる。するとやはり、この遺構の切り込みは第2面であった可能性が強い。ただ、遺物の中に中世後半のまとまりがあるのは重要で、第2層が耕土として機能している時期の上限が、中世に若干入る可能性を示唆するものかも知れない。

5、小結

第0層から第2層は、第0層が近代にかかる他は近世の耕作土であり、第1面・第2面もその床面で

ある事が理解できた。削平された部分が多かったが、近世の調査区周辺は基本的に耕作地であり、時代と共に段差を解消し、一枚の耕地区画を大きくしていく、平坦化が進行している事も見て取れた。

しかし、段丘崖の斜面堆積に瓦・陶磁器類を中心とした豊富な遺物が含まれていた事は、近辺に集落が存在していた事を示し、その候補として、佐野村と中庄村の境の分村である田出村があげられる。

小規模な分村であっても瓦を使用し、豊富な陶磁器を所持している状況は、佐野村を中心とした泉南地域の近世村落の特徴と言えるかもしれない。

また、当時の海岸線から1 kmほど離れているのに、蛸壺や土錘が出土した事も特徴的である。特に土錘は河川に近い段丘崖付近より、奥まった段丘平坦面の方で出土数が多く、かつ、集落内でなく耕作地での出土は、農閑期の耕作地で生産された可能性があるのではないと思われる。

また、今回の調査では土錘は中世の包含層からは1点も出土せず、ほとんどが近世のものと考えられる。これも中世と近世の何らかの社会状況の変化を示している可能性がある。

第3節 第3面

1、面の状況（図21）

第3面は1 tr.でのみ検出。ただし、1 tr.でも北東端から059段差の南西側の点線ラインまでは、第1層直下が、中位段丘構成層上面である第5面で、第2～5面が一つの面に重複する。059段差付近から北東側は遺構がなく、南西側に第5層由来の盛土が続く事から、第2層が耕土となる耕地造成時点で元々高かったこの部分を削平、059段差より南西側に客土し第2層の床面となったと考えられる。

その第5層由来の黄褐色粘質土系の盛土は286段差の西側の点線ラインまで至り、そこから3～4 mほどの幅は砂質土系の第3層が見え、もう一つ西の点線から南西端までは粘質土系のブロック土による盛土系第3層が見える。つまり、第3面は第2層が耕土として成立する際に造成された床面で、この面の遺構は059段差上段の遺構が第1層耕土時のものが重複している可能性がある以外は、第2層が耕土であった期間にその床面に形成されたものと限定できる。なお、286段差より西側の盛土系第3層の下には耕土系3層が中世の耕土として残存している。

059段差は第1面に連続しない段差である。段差の比高は15 cmほど。061ピットは形態がピット状だが、位置的に段差畦畔を割った水口の痕跡の可能性はある。060ピットは段差で途切れるように検出されたため、第1層耕土時点の遺構の可能性が強い。062・063鋤溝は段差と平行や直角の方向性があるが、段差に近すぎ、畦畔があったはずの位置でもあるので、第1層耕土時点の遺構の可能性が高い。

段差の下の058溝はトレンチを横断しているが、5 cm弱の深さしかなく、057鋤溝に一部切られている事からしても、段差下の水路ではなく、鋤溝の類と思われる。

286段差は北東側の第5層を削平した土を盛った部分に作られた段差である。059段差とは直交せず、60度の角度を持つ。この段差は第1面022段差と同じ位置である。ただ、この面では段差斜面に杭・杭痕が多数検出された。木質の残る杭はこの面から突出するため、第2面・第1面から打たれた可能性が高い。土留めの杭であろう。段差の比高は約15 cm。

その西側で、第3面を成す砂質土系の土は、東の第5層由来の盛土と西の盛土系第3層の両者のたわんだような部分の上に皿状に堆積する。層境は不明確である。おそらくは東西の盛土の境目が沈下し、そこに第2層の耕土が入り込み、繰り返される耕作で第2層から切り離され、床土化したものであろう。

そこから南西側は052溝などの遺構もあるが、遺構密度は低く、南西端近くの287段差周辺に至る。

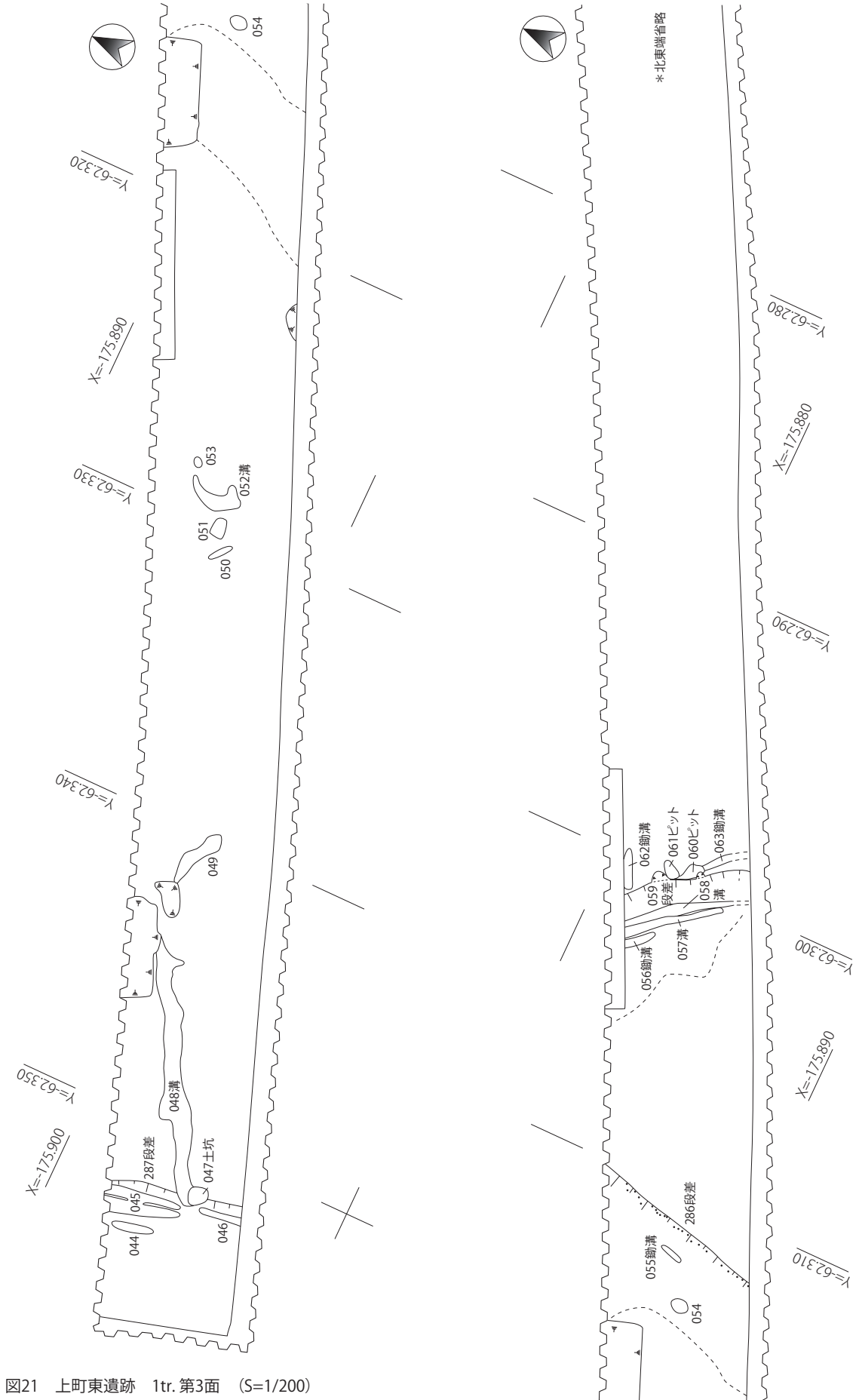


図21 上町東遺跡 1tr. 第3面 (S=1/200)

287 段差は第 1 面の段差を伴う 043 畦畔の西側下段裾よりさらに 50 cm ほど西に位置している。第 1・2 層の段差法面の分ずれていると考えれば、位置は動いていないとも言える。段差 5 cm ほど。

段差上では北東から不整形な 048 溝が約 70 度の角度で接近し、287 段差を切る 047 土坑と切り合いなしにつながる。047 土坑は水口の痕跡である可能性があるが、048 溝は形が不整形な事もあり、耕地区画などに伴う水路とは考えにくい。段差下側には平行する鋤溝が見られ、耕作方向が知られる。

2、遺構出土の遺物

この面も、遺構出土の遺物は細片のみである。ただ、陶磁器類は中世の玉縁白磁碗以外では 056 鋤溝に染付け鉢 1 片がある。またこれも 1 片のみだが 048 溝から土師器炮烙片が出土している。乏しい遺物だが、これらから第 3 面の遺構出土遺物は第 2 層包含遺物と同じ時期を示していると考えられる。瓦器や瓦質土器は第 5 面の遺構出土の椀・皿と同じ時期のものも見られるが、若干時期の下るものも含まれる。また、時期は限定しにくいだが、古代頃であろう土師器・須恵器も少数ある。また、わずかに弥生土器ではないかという小片もある。第 3 層や第 5 面の遺構由来の遺物であろう。

3、第 3 層包含遺物 (表 7)

その基盤の第 3 層に包含される遺物には染付けが 1 片もない。陶磁器類もわずかで、灰釉陶器や無釉の甕片、青磁・白磁も中世のものとして把握できる。瓦器が突出して多く 331 片を数える。そのうち 323 片が椀で残りが小皿。ただし、第 5 面の遺構出土のものと同時期のものもあるが、さらに新しい、内面のミガキが疎になるものもあり、瓦質土器の羽釜・甕・播鉢もわずかにある。次に多いのは土師器だが、41 片と差がつき小皿と蛸壺が多い。須恵器がそれに次ぐが、捏ね鉢片のみ。瓦は第 1・2 層に比べかなり減り、いぶしもわずかにあるが、須恵質・土師質が多い。少数のもので注目できるのには須恵質の埴・石鍋・鉄滓がある。上層と大きく異なる点は、土錘が 1 片も出土していない事である。

図 22 は第 3 層包含遺物のうち、かろうじて実測できたものである。

1 は須恵質埴片。上面はやや凹面を成し布目・紐圧痕など残しながら縦方向の板ナデ。砂粒が付着する。残存する 2 側面はいずれも横方向のケズリ。下面は縄目タタキをそのまま残す。破断面には 2 枚の粘土板を重ねたような接合痕が見られる。器表は灰色 N5/0、断面はにぶい褐色 7.5YR6/3 を呈す。胎土に 1 mm 弱の石英若干あり。微細粒は石英・長石・黒色粒あり。表面に付着した砂には石英・長石あり、チャート若干あり。須恵質で厚みもある事からすれば古代のものか。

2 は土師器小皿。残存率 85% ほど。内面はやや磨滅し判然としないがナデか。外面ユビオサエ後ナデ。色調は器表・断面とも黄灰色 2.5Y4/1。胎土に 1 mm 弱のチャート若干あり。

3 は石鍋片。滑石製。外面はノミ痕が整然と並ぶ。内面は滑らかで、傷は多いが、使用痕か破片として埋没後のものかは不明。15 世紀以前のものか。

第 3 層下半の耕土系第 3 層が耕土として機能していた時期を示す包含遺物は、瓦器椀の中でも時期の新しい

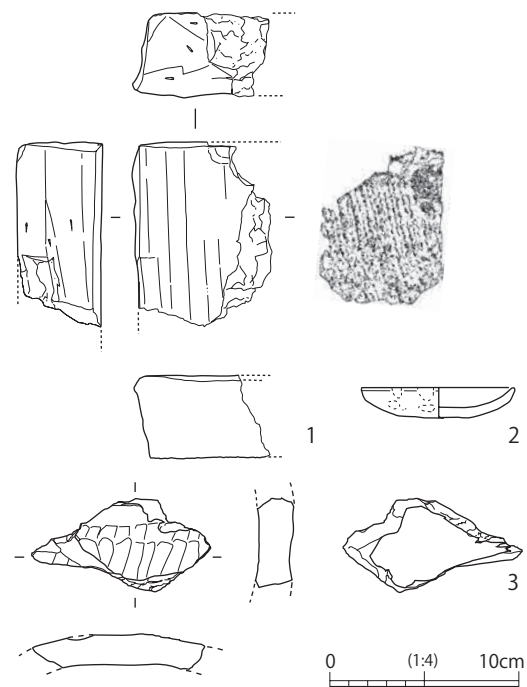


図22 第3層出土遺物 (S=1/4)

群と、瓦質土器の甕・羽釜・播鉢である。瓦器碗の新しい時期の群は、内面ミガキが疎になっているが、高台片も認められ、高台が消滅する時期まで下るとも思えない。和泉型瓦器碗で高台が消滅する時期を14世紀中葉頃とすれば、瓦器碗の新しい群は14世紀前半頃以前と考えられる。瓦質土器で播鉢が登場するのは14世紀後半であろうし、瓦器羽釜

表7 上町東遺跡 1tr. 第3層 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別	破片数		大器種	破片数		小器種	破片数		型式部位	破片数		
			破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%	
土器	426	弥生	3	0.7	甕	1	33.3							
		土師器	41	9.6	皿	16	39.0							
					羽釜	5	12.2							
					甕	1	2.4				高台	2	200.0	
					蛸壺	14	34.1							
		須恵器	32	7.5	こね鉢	9	28.1							
		瓦質	19	4.5	甕	4	21.1							
					すり鉢	6	31.6							
					羽釜	1	5.3							
		瓦器	331	77.7	碗	323	97.6					高台	33	10.2
皿	8				2.4				外面ミガキ	6				
陶器	5	施釉	2	40.0	灰釉	1								
		無釉	3	60.0	甕	6								
磁器	12	青磁	6	1.4										
		白磁	6	50.0	碗	1					玉縁口縁	1		
瓦	9	土師質	3	33.3	平	3								
		須恵質	4	44.4	平	4								
		いぶし	2	22.2	平	2								
埴	1	須恵質	1	100.0										
石製品	1	石鍋	1	100.0										
金属製品	1	鉄製品	1	100.0	鉄滓	1	100.0							

は口縁が内傾するもののみのものであり、瓦質甕の形態からおそらくは15世紀末まで下るものはないようである。

以上の事から耕土系第3層が耕土として機能していたのは14・15世紀頃で、15世紀末頃に盛土系第3層による耕地区画の再整備がなされ、第2層を耕土とした耕地が成立したと考えられる。

第5面で検出された集落の遺構が下面に埋没しているので、その時期の遺物の量が多いが、それ以降の時期の遺物量は耕作地としておかしくない程度の量である。耕土系第3層は下面で第5面の集落関係の遺構を切る耕作痕があり、集落廃絶後、14世紀までには耕地となっていた事は間違いない。

第4節 第5面

1、面の状況 (図23・24)

第5面は1tr.と2tr.南西半で検出された。第4層は古土壌で、本来は中位段丘上を覆っていたようで、本来その上面で掘削されたと考えられる耕地開発以前の遺構には黒褐色粘質土系の埋土が見られる。

しかし第4層は、その地味をいかし、中世の耕地開発の時点で耕土にすぎこまれたと思われ、ほとんどが消滅した。現在では、1 tr. の南西部で、元々の自然地形の名残である落込み内などにわずかに面的な広がりを保つにすぎない。またその上面では土壌化のためか、遺構の切込みが確認できない。第4層を利用して成立した耕土が耕土系第3層である。

そのため、第5面で、耕土系第3層成立以前の、本来は第4面切り込みであったろう遺構と、耕土系第3層の床面の遺構が混在する状態で検出される。さらに、近世の耕地区画の改変で削平された部分では第2面相当の遺構も同じ面で検出される。しかし、埋土から見るとその分別は比較的容易である。

1 tr. の288段差より南西側は耕地開発以前の遺構の残りが最も良い。主な遺構は中世集落の屋敷地区画溝や井戸、自然地形の名残である落込などで、それらを切る北西～南東方向の溝は第3層系の埋土を持ち、耕土系第3層耕土時の耕作痕である。

第3面で検出された059段差は耕土系第3層の耕地開発時に既に成形されたようで、この面から存続している。288段差は不整形に屈曲し、自然地形に合わせた耕地区画であったようだが、059段差より北東側を削平した土で埋め、第3面の直線的な286段差に改変されたのであろう。

すると、1 tr. 北東側の遺構は第3層系埋土のもののみかと思われたが、奈良時代須恵器坏蓋が完形で出土した123溝のように、古い遺構も残存する。その付近では他に122土坑・124柱穴・125柱穴・126ピットなどが埋土からも古い時期の遺構と考えられる。

遺構の新古の時期を先に言うと、第5面検出の遺構は基本的に、第4層系の埋土で、遺物から奈良時代～13世紀中葉と考えられるものが古い時期の遺構としてまとめられ、第3層系の埋土を持つものは第3層包含遺物の示す13世紀後葉～15世紀に形成された新しい時期のものとしてまとめる事ができる。

2 tr. では後世の削平の問題がある。第2節で前述した185溜井や201井戸も第5面検出時に調査したが、第1層が遺存していた185溜井より南西側は第2面造成時点で削平されたようで、第1層直下に第5面が直接あり、そこで検出された遺構は第1層系の埋土を持つものばかりであった。

第4層系の埋土を持つ遺構があるのは185溜井から北東側～建物1付近で、この部分には第1・2層系埋土を持つ遺構は残存しておらず、第3層系の埋土を持つ遺構もわずかな鋤溝程度であった。

由来層不明の明色シルト系の埋土を持つ153土坑・175土坑もあったが、175土坑埋土を切る176ピットが第4層系埋土を持つので、この埋土のものは古い時期のものに含まれると考えられる。

その部分の最北端の141ピットは第4層系の埋土を持つが削平のためわずかに遺存するのみで、ここから北東側は201井戸以外の遺構は削平で失われたと考えられる。そのため、今回の調査では中世集落の北東端は確認できていない。

ここで分別して考えやすいように、第3層系埋土を持ち、耕土系第3層の床面の耕作痕である遺構とそれより新しい遺構をまとめて羅列しておく。

1 tr. 南西部では幅30～50cmの幅広の、畝溝のような溝が多い。064・068・085・086・140・098・099・100・111・113・114・116溝などである。1 tr. 北東部ではピットと鋤溝で120・121・128～130ピット・127鋤溝。2 tr. では近世遺構もあり先述の201井戸・185溜井の他、南西部188～200の溝・ピットが第1層系埋土。第3層系埋土は168・180・183・184鋤溝。それら以外は13世紀中葉以前の遺構と見てよい状況である。

第3層系埋土を持つ遺構から耕土系第3層耕土時の耕地区画に関する手がかりを見ておくと、1

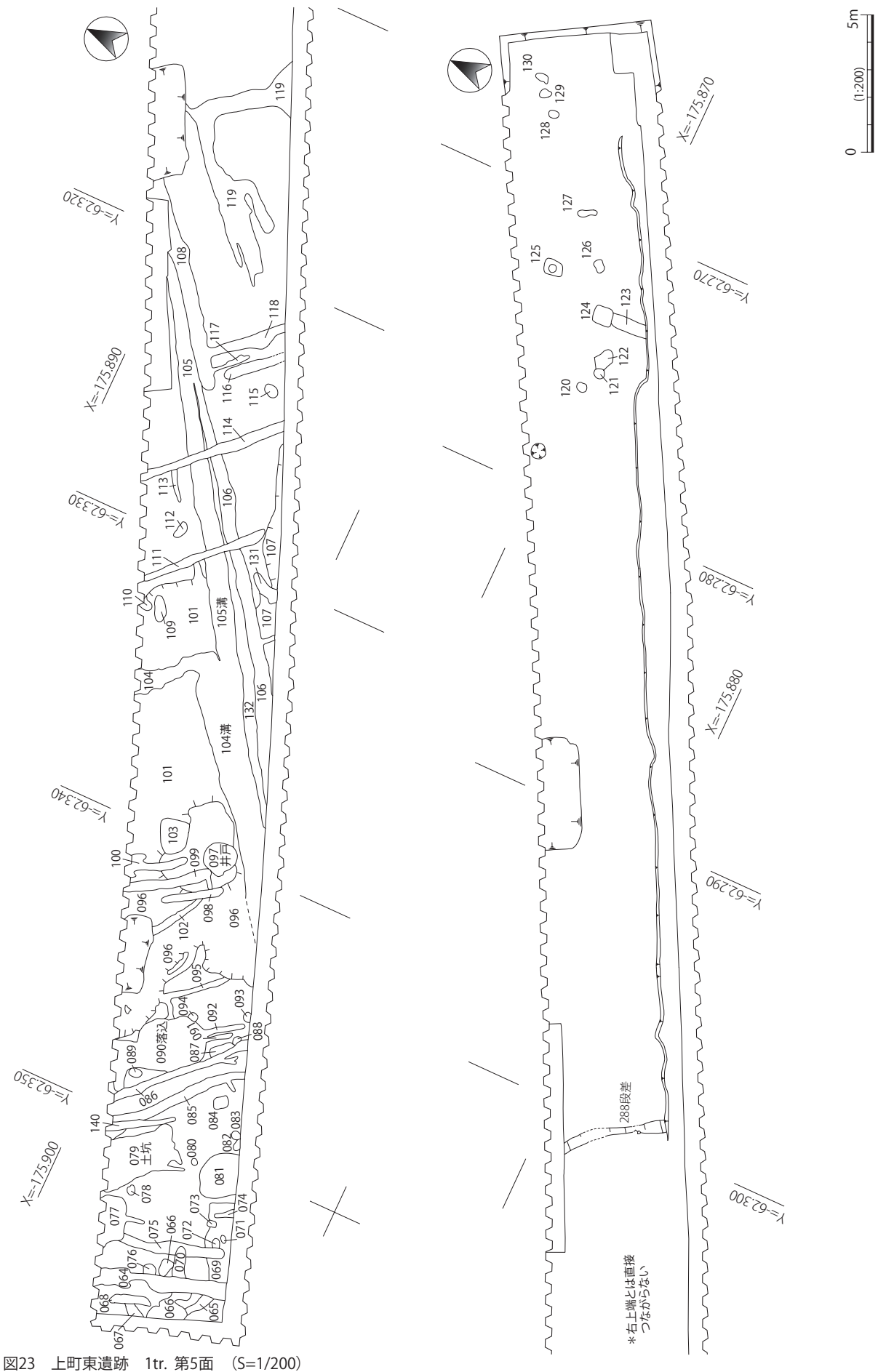


図23 上町東遺跡 1tr. 第5面 (S=1/200)

tr. 南西部の溝群は位置と方位によって 064・065 溝と 085・086・140 溝、098～100 溝、111・113・114・116 溝の 4 群に分けられる。このうち 085・086 溝と 111・114・116 溝は離れていても正確に同じ方位を向く。また、111・114・116 溝は中世集落の屋敷地区画溝のうち、106 溝と正確に直交する。また、064 溝は 066 溝を介して第 4 層系埋土の 070 溝を切る関係にあるが、それと平行する。

これらの溝の検出面はほとんど高低差がなく、288 段差から南西側に段差があったとは思えない。だが、微妙な方位の差は耕地区画の違いを示すのであろう。おそらくこの部分には幅 5 m 前後のやや不整形な長地型地割りが並んでいたと考えられる。064・065 が大きく他と方向を変えるのは、調査区南西外の近い部分に自然地形を踏襲したこれらの溝に近い方位の段差が存在していたからと想像できる。

また、それらの溝の中に、集落の区画溝と直交・平行するものがある事は、耕地区画がそれ以前の屋敷地区画と無関係ではない事を示す。だが、直接屋敷地区画溝を切るものもあるため、完全に踏襲したのではなく、幾つかの屋敷地区画を合わせて細長い耕地区画を作ったのではないかと想像できる。

2 tr. 部分では、短い鋤溝のみで不明確だが、場所により方位が異なる事から、耕地開発当初から不整形な区画であったと思われる。それらが、近くの建物と同じ向きなのは、この部分でも以前の集落の方位性のある程度踏襲している事を示すと思われる。

2、主な遺構

1) 079 土坑

1 tr. の南西端近くで、北西壁に接する。平面形は北西～南東に長いやや不整形な長方形。幅 1.5m、長さは西角が矢板際であり、3.1m ほど。深さ 10 cm、底部は平坦。104・105 溝などの屋敷地区画溝と直交し、屋敷地内の遺構である可能性が高いが性格は不明。第 4 層系埋土である。

遺物は瓦器碗 17 片、瓦器小皿 6 片、土師器は羽釜 6 片、甕 10 片、炮烙 5 片、小皿 1 片が出土しているがいずれも小片で、図化できたのは図 10 - 1 の土師器小皿片のみである。

残存率は 30% ほど、口縁部周は 25% 残存。内面は口縁部ヨコナデ、底部一定方向ナデ。外面は磨滅するが口縁部ヨコナデ、底部は粗いナデか。外面底部に径 2.6 cm ほどで粘土接合痕回る。器表は灰黄褐色 10YR5/2、断面は明赤褐色 5YR5/6 を呈す。胎土に 1 mm 弱の石英・長石若干あり。

2) 090 落込

079 土坑から北東 2 m ほどにある不定形な落込。長径 2.5m 短径 1.7m ほどの楕円形状部分からさらに不定形に北西壁外へ伸びる。南東側は切り合いなく 091・092 溝が取り付く。深さは最深部で 10 cm 程度、底は肩部から丸味を帯びて下がる。埋土は第 4 層系だが一部分第 5 層のブロックが見られる。自然地形の凹部で第 4 層が残存し、さらに第 4 層と第 5 層のブロック土で埋められ整地されたものである。

遺物は少なく土師器小皿 1 片、瓦器小皿 1 片、白磁玉縁碗 1 片である。集落成立時の整地に伴い入った遺物とすれば少なさも納得できる。

図 10 - 9 が白磁玉縁碗片である。玉縁は折り返しだが、あまり大きくない。玉縁下端部は釉が溜まるが明確、しかし沈線状ではない。釉色は灰黄色 2.5Y7/2、胎土は灰白 2.5Y8/2 を呈し、どちらもややくすむ。北宋後半期の華南地域地方窯のものか。097 井戸出土の白磁玉縁碗片よりやや古いと思われる。12 世紀頃の遺構からの出土が多いものか。集落存続期の上限を示す遺物となりえる。

3) 096 落込

090 落込の北東に隣接する不定形な落込である。北東の 101 落込につながる。095 溝等が切り合い

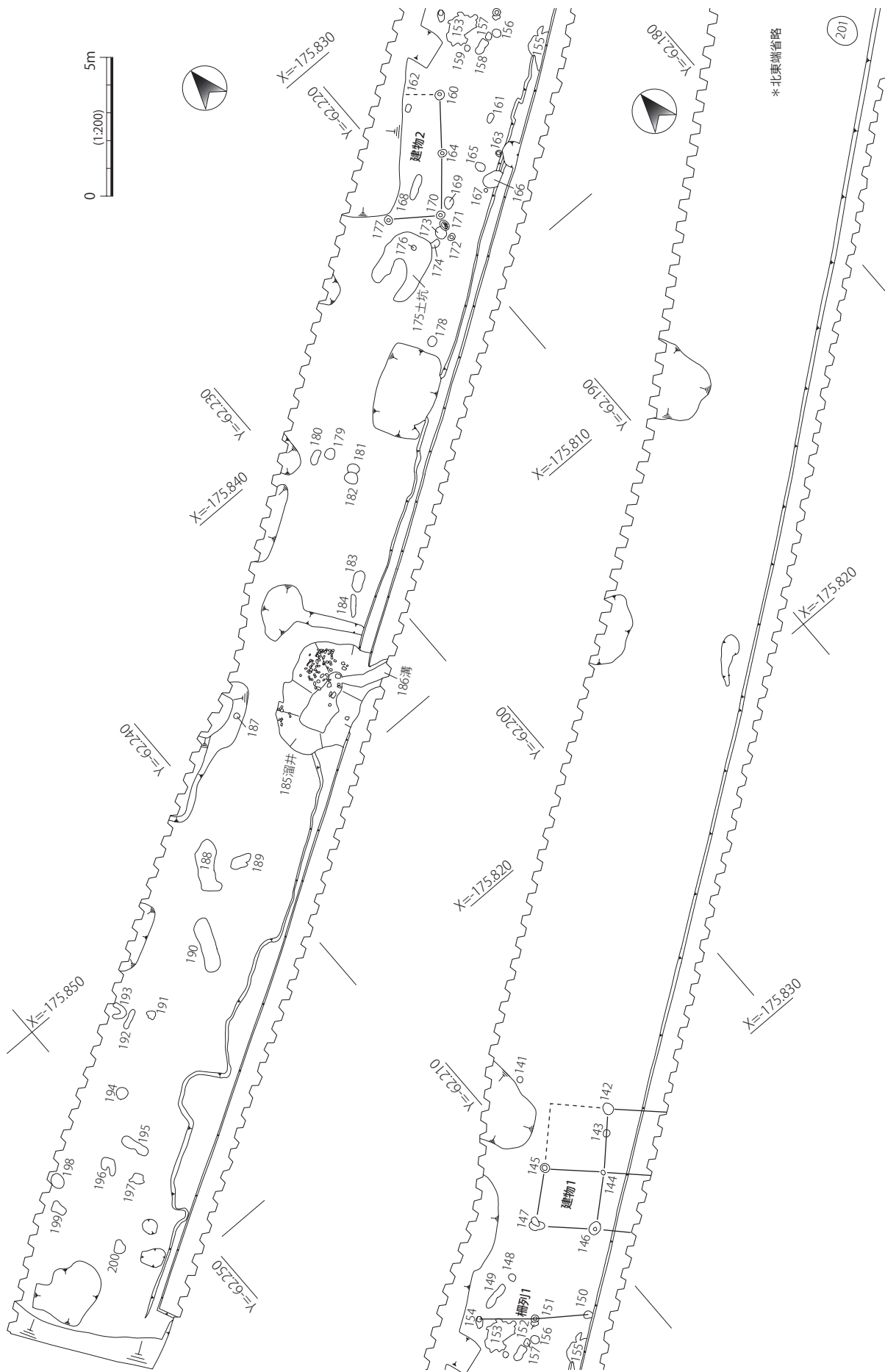


图24 上町東遺跡 2tr. 第5面 (S=1/200)

なくつながり、底面にも 102 溝が走る。南東壁付近で 104 溝と接する部分で一段と深くなり深さ 20 cm ほど。104 溝との切り合いは確認できず。埋土は第 4 層系だが第 5 層のブロックがある部分が多い。元々は自然地形の凹部と思われるが、整地後に掘削されたであろう 104 溝との切り合いが確認できないのは、整地が幾度か繰り返されたためか、整地後も土壌化が進行していたためかと思われる。

そのためか出土土器片も 56 片ある。瓦器椀 45 片、瓦器小皿 9 片、器種不明瓦質土器片 2 片である。図化可能だった遺物は図 10 - 5・6 の 2 点のみである。

5 は瓦器小皿片。内面口縁ヨコナデ、底部一定方向ナデ後ミガキ、ミガキは屈曲部に集中。外面は口縁ヨコナデ、底部はイタナデ、ほぼ一定方向に並ぶが一つだけ方向の違うものがある。中心を通るナデが最後。器表は灰色 N4/0、断面は灰白色 N7/0 を呈す。胎土に 1 mm 弱のチャートわずかにあり、微細粒には石英・長石・黒色砂粒が認められる。13 世紀前半頃のもののか。

6 は瓦器椀片。内面はヨコナデ後ミガキ、やや磨滅。見込みのミガキは斜格子。外面は、口縁のヨコナデは 2 条重なり下が上を切る。ヨコナデは下のユビオサエを切る。体部のユビオサエは水平方向に列を成すものが 2 列ある。下の列のユビオサエ下端は貼り付け高台の下に隠れる。高台とその周辺はヨコナデ。器表は灰色 N5/0、断面は灰白色 N8/0 を呈す。胎土に 2～1 mm のチャート・1 mm 弱の石英わずかにあり。外面にミガキはないが、尾上編年の和泉型Ⅲ-2 期頃、12 世紀末～13 世紀初頭頃のもののか。

これらの遺物の示す時期は集落存続期の遺構と異ならない。

4) 097 井戸 (図 25)

096 落込と 101 落込の間にある、第 4 層が遺存していない高まりに位置する。南東側には 104 溝が隣接する。位置関係から 104 溝によって区画された屋敷地内の井戸と考えられる。

平面形は、長径方向が 104 溝と直交する楕円形の、南西側一部が突出した形状と言える。楕円形は長径 1.26m、短径 0.97m ほど、短径に突出部を足すと 1.26m と長径と等しくなる。深さは 1.3m ほど。底は隅丸方形に近い不整円形で最大径 0.74m。南東側の壁は上部の傾斜がやや緩く、下に行くに従い直立に近づく、突出部の上部はそれより傾斜が緩い。北西側には壁の中ほどに崩落したかのようなえぐれがある。

埋土を見ると(図 25 断面図)、確実に大型のブロックが確認でき、人為的埋土と分かるのは④だけだが、②・③・⑤も人為的埋土と思われる。井戸として機能している時期に堆積したと思われる層はない。

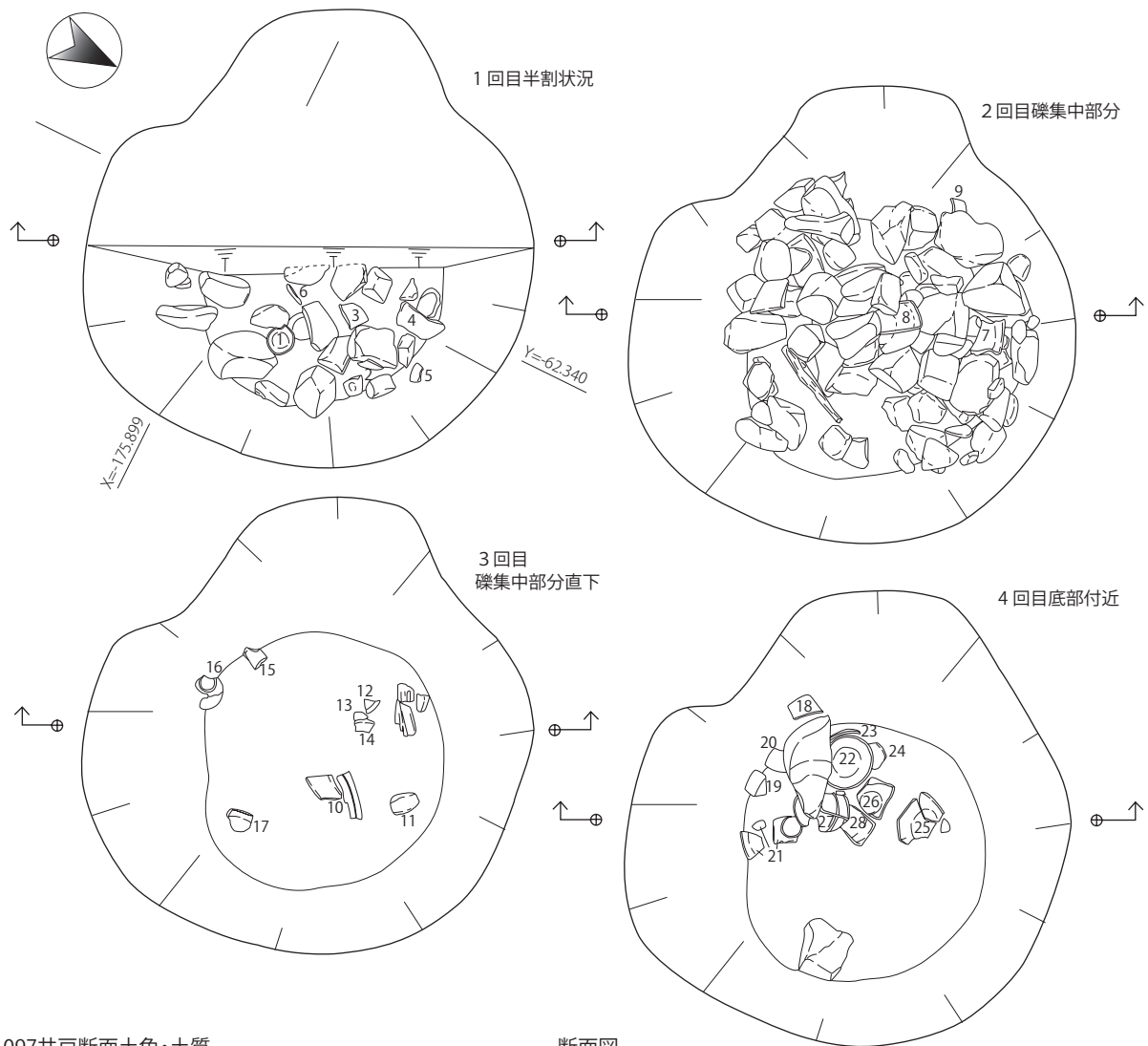
⑤は小ブロック土の輪郭がぼやけ、滞水状態の井戸に入れられた埋土であろう。底部付近の礫や遺物もやや底面から浮くので、若干埋め戻し始めた後で投棄か。完形の遺物もあり、井戸埋め戻し時の祭祀に伴う可能性もある。⑤上半の礫・遺物は④と同時に入れられたのが沈下した可能性が高い。比較的小さな破片のものが多いたのがそれを裏づける。

④内は礫・遺物が集中。遺物は破片が多い。礫の集中は滞水状態を埋めた⑤が軟弱なため、ここで沈下を防ぐ地固めをしたと思われる。遺物もそのため礫に混ぜられたのであろう。ただし、層的には③内で、④上面に位置した土器 1 の完形に近い瓦器小皿は、意図的に置かれた可能性も考えられる。

③は第 4 層系の土に第 5 層系の小ブロックが混じる人為的埋土。これより上はほとんど遺物なし。②も流入土としては淘汰が悪く、小ブロック・小礫・炭化物が混在し、人為的埋土と考えられる。

①は土質も類似しているので、井戸埋め戻し後沈下した部分に入った耕土系第 3 層であろう。

図 25 の出土状況平面図では、「1 回目」が④上面の土器 1 と④上部の礫が検出された状態。「2 回目」が④内。「3 回目」が④から沈下した⑤内上半遺物の出土状況。「4 回目」が⑤内下半底部付近となる。



097井戸断面土色・土質

- ①黄灰2.5Y5/1粘質土 シルト～細砂主体、粗砂～小礫わずかにあり、黄褐2.5Y5/4シルトの小ブロックあり、斑状Feあり、Mn粒わずかにあり、3層系？
- ②オリーブ褐～褐灰2.5Y4/3～10YR4/1粘質土 シルト～細砂主体、中砂～粗砂若干あり、明黄褐2.5Y6/6シルトの小ブロック若干あり、小礫・炭化物わずかにあり、Fe・Mn粒若干あり、4層系埋土。
- ③黒褐10YR3/1シルト 明黄褐2.5Y6/6シルト・灰5Y6/1細砂～シルトの小ブロックあり、粗砂～小礫若干あり(風化礫あり)、人為的埋土？
- ④オリーブ黒5Y3/1シルト 黄褐2.5Y5/4シルトのブロック部分的にあり、下部に大～中礫多し、炭化物わずかにあり、遺物あり。
- ⑤暗灰N3/0シルト～細砂 オリーブ5Y5/4細砂～シルト(風化礫起源か)のぼやけた小ブロック含む、大～中礫・木材あり。

断面図

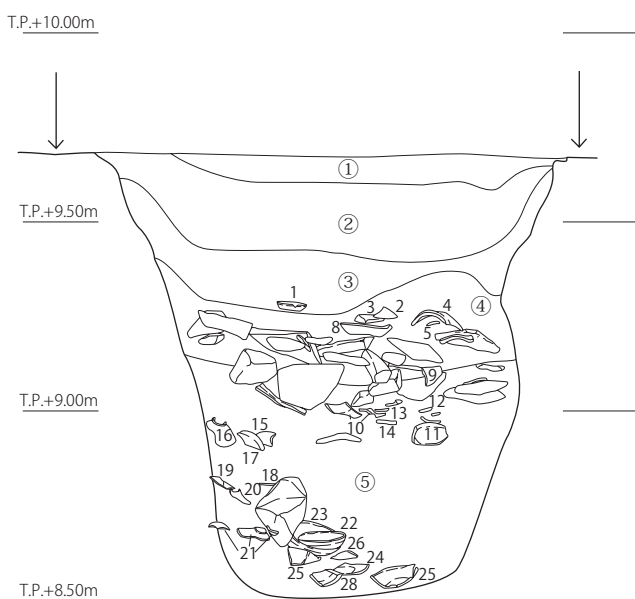


図25 上町東遺跡 1tr. 第5面 097井戸出土状況図・断面図(S=1/20)

井戸の元の構造は不明な点が多い。一部が炭化した木材も出土したが少量で、樹皮を剥いた以外加工痕はなく、裏込め土のような埋土もない事から、井戸枠などが存在した事を示すものは何もない。

また、使用時の堆積のような止水堆積層もなく、北西壁のえぐれからのブロック土もない。埋め立てる前に徹底的に内部を浚えた可能性が高いと考えられ、出土遺物も全て埋め立て時に入ったと言える。だが、えぐれも含め、上部が自然に肩崩れしたように広がる断面形などを見れば、素掘りの可能性が高いと言える。壁面の土質も、礫は多いが間にシルトの入るしまりの良い層で、かつ、調査時も壁面の崩壊は見られなかったので、充分素掘りで長期の使用に耐える状態だったと言える。

出土遺物を破片数で見ると（表8）、瓦器椀が多い。瓦器小皿との比率は10対1ほどだが、図を掲載した個体識別できる個体数で見れば4対1ほどである。瓦器椀で外面ミガキのある個体に属する破片は4分の1ほど。口縁付近が50%以上残る7個体中では4個体に外面ミガキがある。土師器は少ないが器種は多い。羽釜・焙烙の破片がやや多いのは個体の大きさ・形状のためであろう。完形率はかなり悪い。

少数の注目される遺物には、白磁玉縁碗片、土師器蛸壺片、鞆羽口・粘土塊、櫛形木製品などがある。

図化可能であった遺物を図26・27に掲載した。図26にまとめた瓦器椀から述べる。

表8 097井戸 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別	破片数	%	大器種	型式部位		破片数	%	
						破片数	%			
土器	202	土師器	39	19.3	皿	5	12.8			
					羽釜	12	30.8			
					甕	7	17.9			
					蛸壺	4	10.3			
					焙烙	10	25.6			
					把手	1	2.6			
		須恵器	2	1.0	こね鉢	2	100.0			
		瓦質	19	9.4						
		瓦器	142	70.3	椀	129	90.8	外面ミガキ	34	26.4
								高台	29	22.5
			皿	13	9.2					
磁器	2	白磁	2	100.0			玉縁	1	50.0	
土製品	7	鞆羽口	1	14.3						
		粘土塊	6	85.7						
木製品	1	櫛形	1	100.0						
炭	1									
桃核	1									

1は残存率10%、口縁部周の残存も10%ほどで復元径に不安あり。内面磨滅し不明瞭だがわずかにミガキが確認できる。見込みは連結輪状か。外面も磨滅するが体部ユビオサエ、口縁部はそれを切りヨコナデ。器表は灰色N4/0、断面は灰白色7.5Y7/1を呈す。胎土に3~1mmのチャート1個あり。

2は残存率20%、高台部周50%残存。内面磨滅で調整不明。外面も磨滅するが貼り付け高台付近ヨコナデ、体部ユビオサエ。器表は灰色5Y5/1、断面灰白色N8/0。胎土に1mm弱の石英若干あり。

3は残存率10%ほど、口縁部周も同じ、破片の歪みでやや口径大きく浅めの図になった。内面は体部上半ヨコナデ、底部の一定方向ナデがそれを切る。後ミガキ。外面は体部に水平なユビオサエ列が2列認められるが、その部分も後ナデ。破片下端にはヨコナデ、口縁部にもヨコナデ。ナデ後ミガキ全体に散在。器表は暗灰色N3/0、断面は灰白色N8/0を呈す。胎土に1mm弱の長石・石英わずかにあり。

4は土器9。残存率全体10%、口縁部周20%ほど。破片に歪みあり、復元径・傾きに不安あり。内面やや磨滅しナデは見えない。ミガキ散在し、見込みのものは横位のものよりかなり幅が細い。見込

みは斜格子か。外面は体部にユビオサエ散在、それを切って口縁部にヨコナデ。器表はオリーブ黒色 5Y3/1、断面灰白色 5Y7/1 を呈す。胎土に 1 mm 弱の石英・チャートわずかにあり。

5 は残存率 10%、口縁部周も同じ、復元径にやや不安あり。内面はヨコナデ後ミガキ、見込みと口縁部のミガキは体部のものより細い。見込みのミガキは斜格子か。外面は体部にユビオサエ、下半部では左上がりの放射状指頭圧痕となるが、上半は散在、口縁部はそれを切り 3 条のヨコナデが上から順に入る。器表は灰色 N4/0、断面は灰白色 N7/0 を呈す。胎土には 1 mm 弱の黒色砂粒・石英わずかにあり。

6 は土器 16。残存率 20%、高台部 90% 残存。内面ナデ後ミガキ、見込みは斜格子。外面体部ユビオサエ後ゆるいナデ、貼り付け高台付近と口縁部のヨコナデがそれを切る。器表は灰色 N4/0、断面は灰白色 N8/0 を呈す。胎土に 1 mm 弱のクサリ礫若干あり。

7 は土器 17。残存率 10%、口縁部周 15% 残存、歪みの強い部分の破片で、口径・傾きは不安あり。内面ミガキ、見込みは斜格子。外面体部ユビオサエ後ゆるいナデ、口縁部 2 条のヨコナデがそれを切る。上半にミガキ、内面のものより細い。器表は灰色 N4/0、断面は灰白色 N7/0 を呈す。胎土に 3 mm のチャート・1 mm の石英、各 1 個あり。

8 は土器 18。残存率 10% ほど、口縁部周 20% 残存。内面はヨコナデ後ミガキ。ミガキの幅は太い。外面は体部にユビオサエ、口縁部 3 条のヨコナデがそれを切る。器表は灰色 N4/0、断面灰白色 5Y7/1 を呈す。胎土に 1 mm 弱の石英わずかにあり。微細粒には石英・長石の他、チャートも認められる。

9 は土器 19。残存率 10%、高台部周は 60% 残存。内面はナデ後ミガキ。外面はユビオサエ後ゆるいナデ、高台のヨコナデがそれを切る。ユビオサエは左上がりの列が 1 列のみ認められる。器表は灰色 N5/0、断面灰白色 N8/0 を呈す。胎土に粗粒の砂粒なく、微細粒に石英・長石・チャートあり。

10 は土器 20。歪んだ破片のため、口径大きく、身浅い図になった。内面上半ヨコナデ、下半一定方向ナデ、後ミガキ、見込みは斜格子か。体部水平方向のユビオサエ列後ゆるいナデ、口縁部の 2 条のヨコナデがそれを切るが、下段のヨコナデはユビオサエの列をなぞる。破片下端にもナデ。最後にミガキ散在。器表は灰色 N4/0、断面灰白色 N8/0 を呈す。胎土に粗砂なく、微細粒に石英・長石あり。

11 は土器 21。残存率 60%、口縁部周も同じ。接合部分がわずかなため、見込みの図は底部片のみで示す。内面はナデ後ミガキ。見込みは不規則な直線ミガキ入る。外面は、体部に左下がりのユビオサエの列、口縁部 2 条と貼り付け高台のヨコナデがそれを切る。高台のナデに囲まれた底部は無調整。器表は暗灰色 N3/0、断面灰白色 N8/0 を呈す。胎土に 2～1 mm のチャートわずかにあり。

12 は土器 22。ほぼ完形、磨滅もなし。口縁端部に小さい欠けが 2 ヲ所ある。上方からの打撃により、人為的打ち欠きかは不明。内面はヨコナデ後ミガキ、見込みは斜格子。外面は体部に左上がりのユビオサエの列、口縁部のヨコナデとの間にミガキ。高台周辺はヨコナデ、その内側は無調整。体部に高台のヨコナデ近くから右上がりの粘土接合痕が残る（図右側が下から見た図）。幅広の板状粘土を合わせた痕か。器表は暗灰色 N3/0 を呈す。胎土に 8 mm の石英 1 個あり、1 mm 弱のチャート・石英わずかにあり。

13 は土器 23。ほぼ完形、磨滅なし。口縁部の欠けは打ち欠きか。内面ナデ後ミガキ、見込みの斜格子ミガキは体部のものより細い。外面体部左上がりのユビオサエ列、口縁部 2 条ヨコナデと高台部ヨコナデがそれを切るが、高台裾のヨコナデはユビオサエを完全には消さない。高台のナデの内側は無調整。器表は暗灰色 N3/0、断面灰白色 N8/0 を呈す。胎土に 1 mm 弱の石英・長石わずかにあり。

14 は土器 24。残存率 20%、口縁部周は 10%。内面はミガキ、見込みは斜格子。外面は、体部ユビオサエ散在、口縁部 2 条と高台周辺のヨコナデが切る。最後に上半にミガキ散在、短いものや蛇行する

ものがある。器表は灰色 N5/0、断面灰白色 N8/0 を呈す。胎土に粗砂粒なく、微細粒に石英・長石あり。

15 は土器 25。残存率 90%、口縁部周 80% 残存。内面ナデ後ミガキ、見込みは粗い斜格子。見込みに高台を重ねた痕跡残るが、ミガキに切られる。成形後、ミガキ前に重ねたか。外面体部ユビオサエ散在、後左上がりナデを散在。それを口縁部 3 条と高台部のヨコナデが切る。高台部の内側は無調整。器表は暗灰色 N3/0、断面灰白色 N8/0 を呈す。胎土に 2～1 mm のチャート・1 mm 弱の石英わずかにあり。

16 は土器 26。残存率 70%、口縁部周 50% 残存。内面ナデ後ミガキ、見込みは連結輪状。外面体部にユビオサエ列あるが方向は一定せず。口縁部 2 条と高台のヨコナデがそれを切るが、高台のナデはユビオサエを完全には消さない。口縁部ナデ下端にわずかにミガキ入る。器表は暗灰色 N3/0、断面灰白色 7.5Y8/1 を呈す。胎土に 2～1 mm のチャートわずかにあり。

17 は土器 27 - 1。1 個体と見て取り上げた破片が 2 個体分あった内の 1 個体。残存率 50%、口縁部周 40% 残存。内面ナデ後ミガキ、見込みは斜格子。外面体部ユビオサエ散在、口縁部のヨコナデは 3 条か。その部分に散在的にミガキ入る。高台部周辺もヨコナデ、その内側底部は無調整。器表は灰色 N4/0、断面は灰白色 N8/0 を呈す。胎土に粗砂粒なく、微細粒に石英・長石・チャートあり。

18 は土器 27 - 2。残存率 25%、口縁部周も同じ。内面はナデ後ミガキ、見込みは連結輪状。外面は体部に左上がりユビオサエ列。口縁部ヨコナデは 2 条。その部分にミガキ散在。高台周辺もヨコナデ。器表は暗灰色 N3/0、断面は灰白色 N8/0 を呈す。胎土に粗砂粒なく、微細粒に長石・石英・チャートあり。

19 は土器 28。残存率 25% ほど、口縁部周も同じ。内面はナデ後ミガキ、見込みは斜格子。外面は体部にユビオサエ。口縁部のヨコナデは 3 条だが、下端の 1 条は水平なユビオサエ列の上に入る。その範囲からやや下までにミガキ散在。高台周辺もヨコナデ、その内側底部は無調整。器表は暗灰色 N3/0、断面は灰白色 N8/0 を呈す。胎土に 1 mm 弱の長石わずかにあり、微細粒に長石・石英・クサリ礫あり。

これらの瓦器碗は外面にミガキ残るものが多い。また、高台は断面形三角形で、底部が高台より下がるものはない。体部ユビオサエは列を成すもの多い。口縁部ヨコナデが 2～3 条のものが多いのは新色。内面ミガキはある程度の密度を持ち、見込みでは斜格子ミガキは形の崩れたものもあり、連結輪状も出現している。それらの要素から、新しめでも尾上編年の和泉型Ⅲ - 2 期、Ⅲ - 1 期を含めても良いかもしれない。12 世紀後葉から 13 世紀初頭の時期の瓦器碗の様相としても良からう。

ここで 097 井戸出土の瓦器碗群に特徴的な点を記述しておきたい。

外面体部ユビオサエが切り合い列を成す調整は放射状指頭圧痕として知られるが、ここでは水平方向のものなど、下から見て放射状にならない例がある。また、水平方向のユビオサエ列に重ねて口縁部ヨコナデが入る例も特徴的と言える（図 26 - 10・19）。それ以外に磨滅のないものから、体部ユビオサエの上にさらにゆるいナデが重なっている例も確認できた。

内面見込みに高台が接触したような痕跡が残る例（図 26 - 15）は今回、ミガキに切られている事も確認でき、焼成以前の製作過程の痕跡と分かった。

見込みのミガキは全て圏線ミガキに切られる。両者の幅が異なり、原体が異なる例も確認できた。ただ、同じ原体でも、施される強さや部分により、太さが変わる例もあるようである。

胎土に含まれる砂粒には、わずかながら青色～灰色系のチャートが見られるのが特徴的で、和泉地域産の目安になる可能性がある。また、多くはないが、磨滅した黒色砂粒が見られるものもあった。

図 27 も 097 井戸出土遺物である。

1 は瓦器小皿片。残存率 30%、口縁部周 10% 残存。復元径・傾きに不安あり。内面磨滅で調整不明。

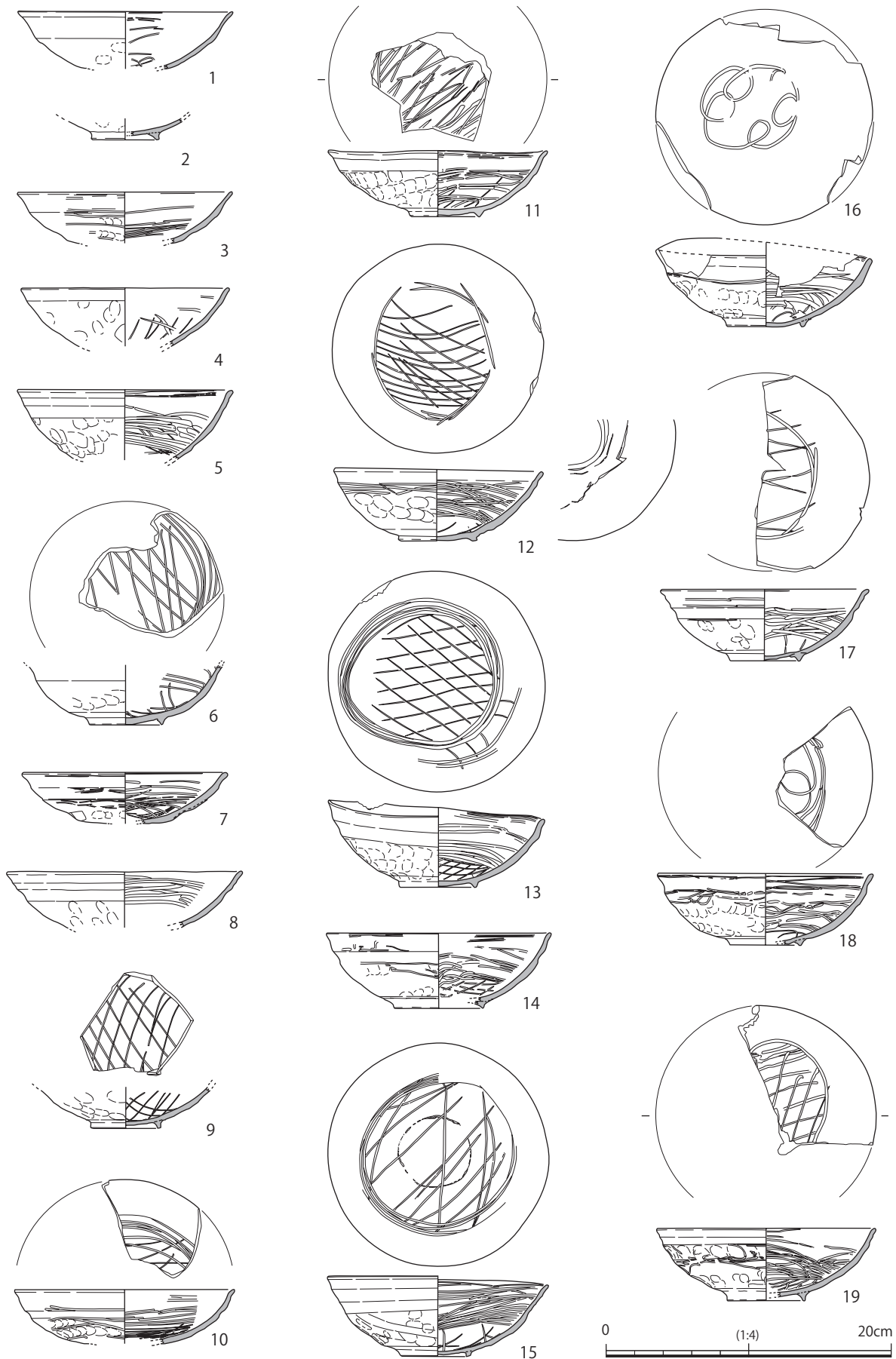


図26 097井戸出土遺物(その1)瓦器椀 {1・2:断面図①~③層、3・4:④層、5~7:⑤層上部、8~10:⑤層下部、11~19:底部} (S=1/4)

外面下半コビオサエ散在、口縁部ヨコナデ。器表は暗灰色 N3/0、断面灰白色 5Y7/1 を呈す。胎土に 1mm弱の石英・長石・クサリ礫若干あり。

2も瓦器小皿片。内面はヨコナデ後底部にミガキ、見込みは平行線か。外面は底部不定方向の粗いナデ、口縁部ヨコナデ。器表は暗灰色 N3/0、断面灰白色 N8/0 を呈す。胎土に粗砂粒なし。

3も瓦器小皿片。内面底部ミガキ、見込みは連結輪状か。外面底部不定方向ナデ、口縁部ヨコナデ。器表磨滅し鉄分付着で黄灰色 2.5Y6/1、断面浅黄色 2.5Y7/3。胎土に 1mm弱の石英わずかにあり。

4も瓦器小皿、土器 1。図 25 断面④層上面にあったものである。口縁部の欠けは外側からの打撃。内面ヨコナデ後ミガキ、見込みはジグザグに入る。圏線ミガキと口縁部ミガキの間はやや空く。一部磨滅激しい。外面底部周縁に断続的な短いナデ、個々の単位の間には乱れがある。口縁部 2 条のヨコナデ。器表は鉄分付着し黄灰色 2.5Y5/1、断面灰白色 2.5Y7/1 を呈す。胎土に 1mmのチャート 1 個あり。

5も瓦器小皿。内面口縁部ヨコナデ、底部一定方向ナデ、後ミガキ、見込みは不整円を三つ重ね、線は連続しない。外面底部コビオサエ散在の上に粗いナデ、口縁部ヨコナデ。器表は暗灰色 N3/0、断面灰白色 N8/0 を呈す。胎土に 1mm前後の黒色粒あり。

6は土師器小皿片。残存率 10%ほど、口縁部周は 20%ほど残存。やや磨滅するが内外面ともヨコナデ。器表・断面ともにぶい黄橙色 10YR7/3 を呈す。胎土に 1mm前後のクサリ礫・赤色粒わずかにあり。

7も土師器小皿片、土器 14。残存率 25%、口縁部周 10%。内面ヨコナデ。外面底部コビオサエ、口縁部ヨコナデ。器表・断面とも灰黄色 2.5Y7/2。胎土に 1mm弱の石英・長石・チャート若干あり。

8は土器 12、白磁玉縁碗片。玉縁は断面カマボコ状、下半に釉の下ハケ目状のナデ調整。玉縁下端部は明確で沈線状。破片外面下端に釉の下限、それ以下は露胎か。釉は灰白色 2.5Y8/2、胎土は灰白色 10YR8/1 を呈す。南宋前半期のものか。12 世紀後半から 13 世紀前半頃の遺構からの出土が多いか。

9は白磁碗片。内面は釉の下に回転ナデ見える。外面は露胎で回転ナデ。釉は灰白色 2.5Y8/2、露胎部分の色は黄灰色 2.5Y6/1、断面胎土は灰白色 10YR8/1 を呈す。8 と同一個体の可能性高い。

10は土師器片、なんらかの脚部か。外面は全体的にナデ、タテナデか。図上下半には棒状工具によるナデが残る。上端は断面近くには煤付着。孔内には端部付近に工具痕残る。器表は淡黄色 2.5Y8/3、断面は黄灰色 2.5Y6/1 を呈す。胎土に 1mm前後の石英・チャートあり。

11は土師器甕口縁片。内面口縁部ヨコハケ、肩部コビオサエ後棒状工具のヨコナデ。外面口縁部 2 条のヨコナデ、肩部右下がりコビナデ。外面煤付着、内面の頸部以下薄く炭化物付着。器表は灰黄褐色 10YR5/2、断面灰黄色 2.5Y6/2 を呈す。胎土に 3～1mmの石英あり、1mm前後の長石わずかにあり。

12は土器 10、土師器羽釜片。内面頸部以下コビオサエ後断続的なナデ、口縁部内面～外面ヨコナデ。鏝部下面煤付着。器表・断面共にぶい橙色 7.5YR7/3。胎土に 2～1mmの赤色粒あり、1mm弱の石英・長石若干あり。口縁部が外反し長いことから 13 世紀前葉を下らない時期のものと思われる。

13は瓦質土器甕片。残存率 10%以下、口縁部周 20%残存。内面断続的ヨコナデ、口縁部は 2 条の回転ナデ。外面口縁部端面とその下に 1 条回転ナデ、その下に 1 条ヨコナデ、以下は方向不明ナデ。器表は灰色 N5/0、断面灰白色 N8/0。胎土に 1mm前後の石英あり、1mm弱の長石若干あり、1mm弱のチャートわずかにあり。口縁部が長く、口縁端面の稜も鋭く、14 世紀に下らないと思われるが、類例を見ない。器形的には須恵器の影響があるか。13 世紀初頭まで遡る瓦質甕があるか問題な遺物である。

14は土師器蛸壺片、土器 4・7 が接合。残存率 30%、口縁部周も同じ。内面は胴部コビオサエ後幅広の布ナデ、上部ヨココビナデ、絞り込んだ頸部は右上がり斜めコビナデ後から入る。外面かなり磨滅

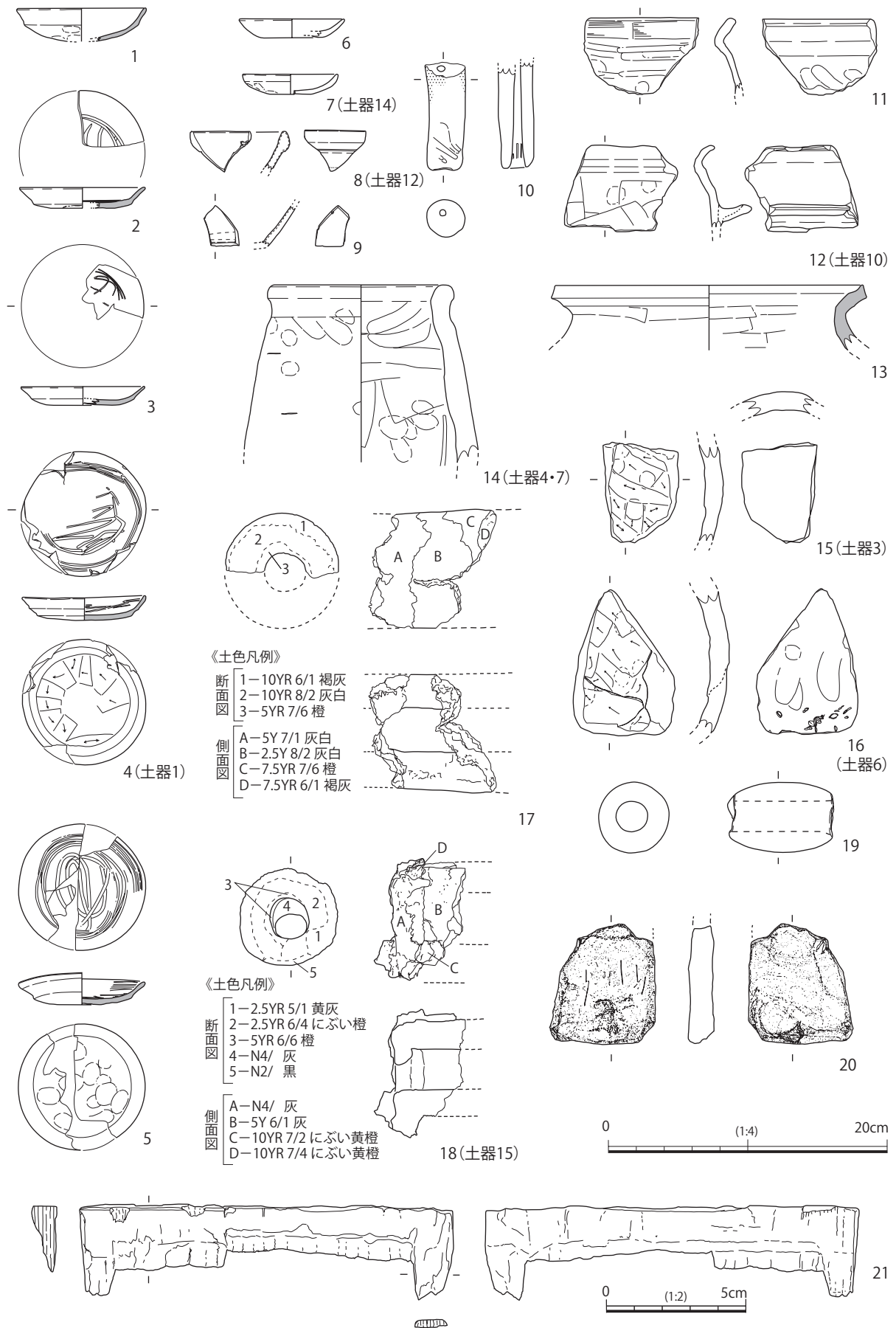


図27 097井戸出土遺物(その2) {1・4:断面図①~③層、2・3・6・9~11・13~17・20・21:④層、5・7・8・12・18・19:⑤層上部}(S=1/4、21のみS=1/2)

するがユビオサエが散在、後ナデ。粘土接合痕2カ所。頸部は強いヨコユビナデで縄掛けの凹みを作る。口縁部ヨコナデ。器表はにぶい黄橙色 10YR7/2、断面は灰白色 10YR7/1 を呈す。胎土に1mm弱の石英・長石あり。1mm弱のチャートわずかにあり。

15も土師器蛸壺片、土器3。胴部最大径付近か。内面ユビオサエ後、ナナメ基調のナデ。外面磨滅激し。器表・断面とも灰黄褐色 10YR6/2 を呈す。胎土に2～1mmの石英、1mm前後の赤色粒わずかにあり。

16も土師器蛸壺片。底部に近い部分か。内面ユビオサエ後左上がり基調のナデ。煤付着。外面ユビオサエ・ユビナデ後ナデ、底部近くに靱殻圧痕。製作場所の環境を示す。靱殻表面・内面の圧痕あり、靱殻圧痕ではなく、靱殻圧痕である。器表・断面ともにぶい黄橙色 10YR6/4 を呈す。胎土に3～1mmのチャートあり、1mm前後の石英若干あり、1mm弱の長石・赤色粒わずかにあり。

17は鞆の羽口片。外面溶融はなく、炉壁内の部分か。側面図A部分が還元的气氛、Bがやや酸化、Cが強い酸化状態で、図左側が炉内に近い部分と考えられる。孔内面も強く酸化。復元径は8.3cm、孔は3.1cm。残存長は8.8cmあるので埋め込まれた炉壁はそれより厚い事になる。胎土にはスサ・靱痕あり、2～1mmの石英あり、7～1mmのチャート若干あり、3～1mmの長石わずかにあり。

18も鞆の羽口片、土器15。炉内に突出する先端部分。復元径8.3cm、孔径2.9cmで、17と同一個体の可能性あるが、接合はしない。側面図のA部分が炉内に突出し、黒くガラス質に溶融し、発泡もあり。溶融した一部が下に垂れる。Bは炉壁内部分。その境は直線で、羽口は水平に取り付けか。C・Dの部分には炉壁が溶着。胎土にはスサ痕あり、3～1mmの石英・チャート多し、長石あり。

19は大型管状土錘。孔は指が入るサイズで内面ヨコナデ。外面もナデか。全長7.56cm、最大径5.08cm、孔最小径2.16cm、質量154.05g。器表は灰黄色 2.5Y7/2 を呈す。胎土に1mm前後のチャート・長石わずかにあり。今回の土錘の中では最大の部類に入り、中世のものとしては唯一のものである。

20は砂岩である。図右の面には人為的な痕跡は皆無。図左の面は全体的に磨耗し、直線的な傷が五つほど見られる。また図下半中央には磨耗前の打痕のような痕跡も見える。かなり粒子の粗い砂岩で、磨耗面もそれほど平滑ではない。砥石としても荒砥として使用できるかどうかというところであろう。

21は櫛形木製品とした。上辺と左右短辺は面取りされるが、下辺はどの部分も両刃状に尖る。両端幅1.3cmほどは長く伸び、先端は両短辺からゆるやかに幅を減じる。中も幅7.2cm部分と3.7cm部分で上下幅が違い、どちらも明確に両面から下方に削られている。櫛未成品とすればここからは櫛歯を削りだす余裕はない。むしろ櫛から歯を削り取ったかのような状態である。ただ、上町東遺跡の過去の調査で櫛未成品の出土が報告されている事から、これも櫛に関係する遺物と推測するのみである。

以上の出土遺物は、瓦器碗以外の遺物も瓦器碗で示される時期と矛盾ないものと言える。しかし、図27-13の瓦質甕片のみは検討すべき問題を残すと見えよう。

また、鞆の羽口片・焼けた粘土塊・砥石の可能性のある砂岩・櫛形木製品などは、過去の調査と合わせれば、この中世集落に多様な工人が存在していた事を示すものとして積極的に評価できると考える。

鞆の羽口は、炉壁が10cm以上の厚さがあり、このサイズの羽口を水平に取り付ける炉の存在を示し、そこから生産物を推測する手掛かりになるかもしれない。

もう一つの特徴は、蛸壺・土錘という漁具の出土。海岸線から1kmほど離れた地点で、工人と漁民の雑居する集落なのか、その二つを兼ねる住民が存在したのかなど、提起される問題は大きい。

5) 098 鋤溝

先述の第3層系埋土を持つ遺構の一つである。099・100 鋤溝と方向を合わせ、一群を成す。096 落

込の埋土上面を切り、隣の099 鋤溝は097 井戸埋土上面を一部切る。幅約30 cm、深さ8 cm、検出長2.3m。鋤溝としたが太めで、等間隔に並ぶ事から畝溝かと推測される。本来はもっと伸びていたが、第4層系埋土を持つ遺構をはっきり検出するために第5面を強めに削る調査過程でこの長さになり検出された。

出土遺物は瓦器碗10片、器種不明瓦質土器1片、土師器小皿片1。土師器小皿のみ図化可能。図10-2である。残存率25%、口縁部周20%残存。内面底部一定方向直線ナデ後、口縁部ヨコナデ。外面底部不定方向粗いナデ後、口縁部ヨコナデ、屈曲部に粘土継ぎ目残る。器表は黄灰色2.5Y5/1、断面灰白色5Y7/1を呈す。胎土に1mm弱の角閃石若干あり。中世のものであろう。胎土から河内産と考えられる。

6) 101 落込とその周辺遺構の切り合い

096 落込とつながり、その北東に隣接、幅約8mで111 溝の南西側にまで広がる落込。深さは20 cmほど。南東端は114～116 溝が走るが、それらの溝間の132 畦畔が端となり、調査区南東壁沿いの107 落込と隣接する。その形は直線的な輪郭を持ち、調査区北西壁外にも広がる。底面もかなり平坦。埋土は第4層系である。

出土遺物はわずかで、瓦器碗8片、器種不明瓦質土器1片である。瓦器碗片には外面ミガキが見られるので、中世集落遺構より新しい要素はないと言える。

104・105 溝とは、図28 下の断面図での④層上面でも、⑤層上面でも切り合いは見えず、断面的には⑤層内で切りあっているはずだがそれも見えなかった。理由としては層自体が薄い古土壌でもあるが、掘削・攪拌が細かく繰り返され、遺構存続期から廃絶後も土壌化が進行したためかと思われる。

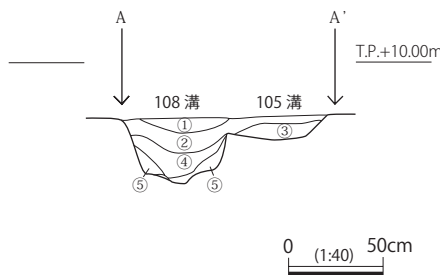
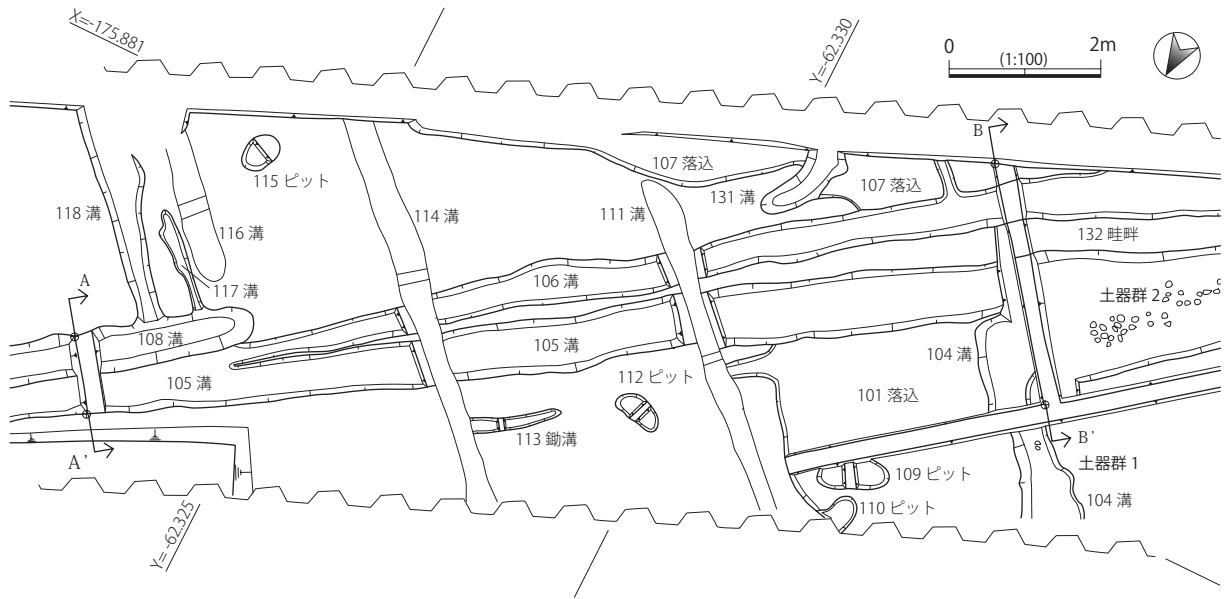
切り合いを推測するには出土遺物が多い104 溝が鍵となる。104 溝存続時期に101 落込の埋積が進行していなければ、101 落込内にもっと遺物が包含されるはずである。つまり、104 溝存続時には101 落込は埋積していたと考えられる。また、105 溝が104 溝より後に掘られたならば、その重複部分の104 溝包含遺物は失われるか細片化するはずだが、そのような状況はない。つまり、101 落込が埋積した後、105 溝が掘られ、次に104 溝が掘られた事になる。ただし、104 溝掘削時に105 溝が埋没していたかは不明で、合流する形で同時期併存していた可能性は残る。細かく観察すれば、より深い104 溝が重複した部分の105 溝底部の形には、104 溝に向かう浸蝕痕はなく、104 溝に切られた形を保っていた。

もう一つ132 畦畔の問題がある。この部分にはブロック土の盛土があり、明確に101 落込の南東側を画すが、畦畔状の形を成すのは105・106 溝にはさまれているからで、両溝には時期差が存在する可能性が高い。なぜなら、106 溝は第3層系の埋土を持つ111・114 溝と正確に直交する方位性から、第4層系埋土を持つ遺構の中でも後続する第3層成立時点に近い時期の遺構と推測されるからである。

すると、105 溝が存続し、106 溝はまだない時点で132 畦畔の盛土範囲はもっと広がったと考えられる。その時の101 落込内の地表面は断面図⑤層上面で、132 畦畔より一段低い。その形を考えると、132 畦畔は、106 溝で一部を破壊されたが、105 溝を側溝として盛土を盛った道路状遺構の可能性が高い。

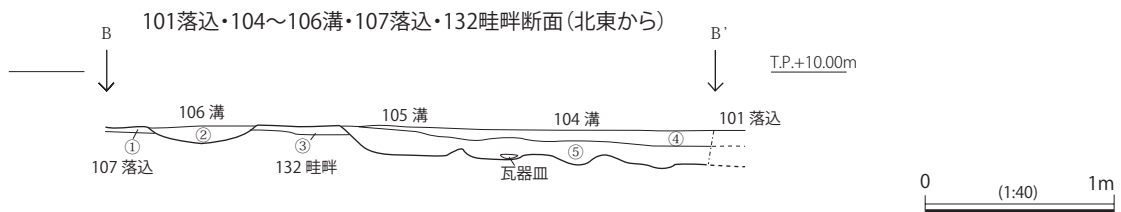
ここで、落込に付随する小型の溝の問題にも触れておく。101 落込も北東側に一つ溝状に突出する部分があり、090・096 落込にも肩部から突出する溝や、底部で検出される溝がある。これらの溝は幅と深さが中近世に一般的に見られる鋤溝に似る。つまり、集落廃絶後の耕地開発以前に、耕作地が存在した可能性がある。もし、これらの小溝が鋤溝で、ここが耕作地であれば、それは凹凸をもった地形で、

断面位置図



105・108 溝断面土色・土質

- ① 灰10Y1/4～暗オリーブ灰2.5GY4/1シルト 極細砂～細砂若干あり、Feわずかにあり。
- ② ①に粗砂・炭化物わずかにあり、暗オリーブ褐2.5Y3/3シルト(4層系)のブロックあり、105・108溝埋土(人為的)。
- ③ 暗オリーブ褐2.5Y3/3シルト 粗砂若干あり、「明黄褐2.5Y6/8シルト、Feあり、Mn粒わずかにあり(5層)」のブロックあり、105溝埋土。
- ④ 黒褐10YR3/1シルト 細砂・炭化物わずかにあり、遺物あり、108溝埋土(止水堆積?)。
- ⑤ ④内に5層(③の「」内)のブロック。



101落込・104～106溝・107落込・132畦畔断面土色・土質

- ① 「明黄褐～にぶい黄2.5Y6/6～6/4シルト」と「暗灰黄2.5Y4/2シルト」の小ブロックあり、その間に「黄灰2.5Y5/1シルト」、107落込埋土、4層。
- ② 黒褐～オリーブ褐2.5Y3/2～4/3シルト 細砂わずかにあり、Feあり、Mn粒若干あり、106溝埋土、4層再堆積。
- ③ 暗灰黄2.5Y4/2シルト内に、明黄褐2.5Y6/6シルトのブロック多し、132畦畔盛土。
- ④ 暗オリーブ褐2.5Y3/3シルト 粗砂わずかにあり、黄褐～オリーブ褐2.5Y5/4～4/4シルトのぼやけた小ブロック若干あり、下面に土器片あり、(耕土的?)4層、101落込・104・105溝埋土。
- ⑤ 黒褐2.5Y3/2シルト 粗砂～小礫わずかにあり、炭化物わずかにあり、黄褐2.5Y5/6シルトの小ブロック下半に若干あり、遺物あり、(耕土的?)4層、101落込み・104・105溝埋土

図28 上町東遺跡 1tr. 第5面105・108溝断面、101落込・104～106溝・107落込・132畦畔断面図

水田とは考えにくい。ただし、畑であれば問題はない。つまり、段丘上が広範囲に耕地開発される第3層成立以前に、部分的にであろうが畑地が開発されていた可能性が考えられる。

しかし、その集落との関係が問題になる。集落成立以前に畑地が存在したとも考えられるが、屋敷地内に畑を作る事は珍しくもない事で、集落と畑地が同時期存在していた可能性も否定できない。ならば、096 落込内にある程度遺物が包含されていた事も納得できる。今回は確定できる資料をえられなかったが、一つの可能性として、今後の調査に託したい。

7) 104 溝 (図 29～31)

101 落込内で、調査区北西壁から南東に伸び、直角に南西に曲がる溝。101 落込の南東端を通り、調査区南東壁近くで 096 落込に達し、両落込との切り合いは見えないが、南西調査区外にさらに伸びる。平均的なところで幅約 1.2m、深さ 20 cm ほど。底のレベルに傾斜なく、T.P.+9.44～9.5m の中で安定している。105 溝と重複するが、先述したように、こちらが新しいと考えられる。105 溝は道路の側溝として集落内を区画するが、104 溝は 097 井戸を取り込むように一つの屋敷地区画を囲む溝と言える。

排水の役割を果たしたかは疑問で、遺物出土状況からはごみ捨て場ようになっていたと考えられる。

検出長 10m ほどだが、その範囲で大量の遺物が出土した。特に遺物の集中する部分が 3ヶ所あり、土器群 1～3 とした。取り上げの土器番号は三つの土器群を通して付けた。

土器群 1 (図 29) は溝が調査区北西壁から伸び、曲がるまでの間に広がる。密度はやや散漫。他に比べ、土師器の甕・皿などの破片が目立つ。須恵器甕小片も 1 片出土 (土器 5)。瓦器碗は 4 個体ほど認識できるが完形率は悪い。土器 1 も瓦器碗片の集まりだったが接合せず図化できなかった。完形瓦器小皿 1 個体 (土器 7) 出土。一括投棄というより、累積した土器片の集合という印象を受ける。

土器群 2 (図 30) は南東辺の北東側。底部からわずかに浮く出土状況で揃い、一括投棄と思われる。それを裏付けるように、土器 11 の破片は土器群内に散乱していた。瓦器碗は 10 個体認識でき、概して完形率は低いが、土器 19・21 など、完形に近いものもある。瓦器小皿は 2 個体以上か。他に土師器甕が 2 片出土 (図 33-22) する程度で器種構成は単純。白磁玉縁碗 (白磁 1) の小片が出土している。

土器群 3 (図 31) は土器群 2 から 90 cm ほど間を空け、南東辺南西側に集中する。土器群 2 と同じく、底部付近でやや浮く状態で破片が揃う。一括投棄か。ほぼ瓦器碗と瓦器小皿のみの土器群である。瓦器碗 12 個体以上、土器群 2 よりやや完形率良いか。瓦器小皿は 3 個体以上。

全体で接合後個体認識できたものは、瓦器碗 29 個体、その内、外面にミガキあるもの 3 個体。瓦器小皿 11 個体、須恵器捏ね鉢 1 個体。土師器甕は少量だが、口縁形態から 2 個体は確認できる。

破片数では (表 9)、90%以上が瓦器。土師器は甕以外に炮烙らしき破片があるが、調理具は非常に少ない。焼土塊や炭・桃核も出土。土器群 1 以外は一括投棄と見て問題なく、ほとんど瓦器の供膳器のみのような土器群を投棄している。接合状況を見れば、投棄前に破損したものがほとんどであろう。

図化できた遺物は図 32・33 である。図 32 は瓦器碗のみを掲載した。1～4 は土器群 1。

1 は土器 2。内面ナデ後ミガキ、体部のミガキは比較的密に入る、見込みは斜格子。外面は、体部ユビオサエ、ユビオサエはやや左上がりの列を成す。その上に水平なユビオサエ列が入るが、口縁部 2 条のヨコナデの内、下段のものがそれをなぞる。高台付近もヨコナデ。ミガキが上半部に散在する。器表は暗灰色 N3/0、断面は灰白色 N8/0 を呈す。胎土に 1 mm 前後の石英わずかにあり。

2 は土器 3。残存率 15% ほど、口縁部周は 20% 残存。内面はヨコナデ後ミガキ、他に切られる縦方

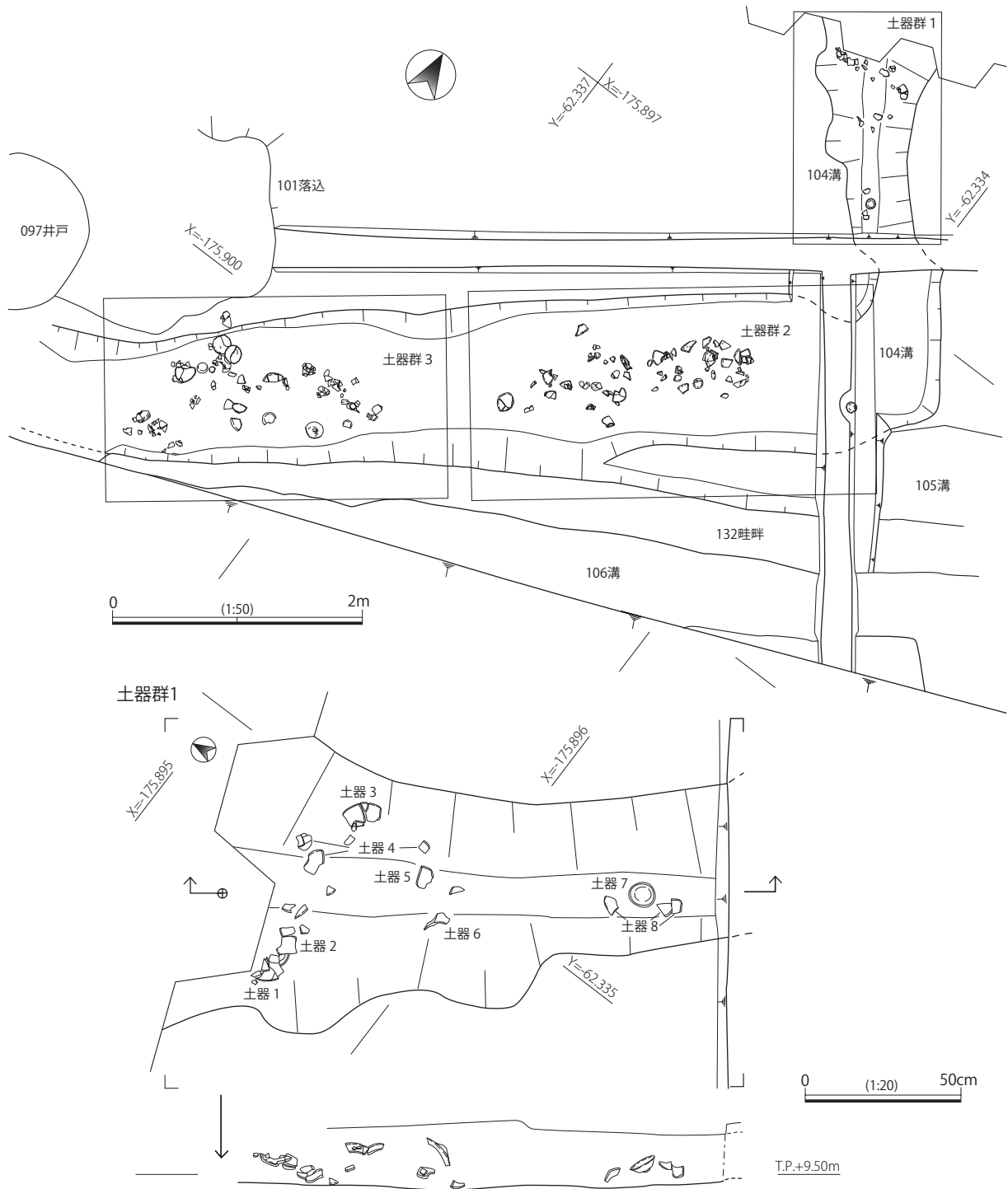


図29 上町東遺跡 1tr. 第5面 104溝全体図(S=1/50)及び104溝土器群1出土状況図(S=1/20)

向のミガキが見えるが、見込みは不明。外面は体部に水平方向に列を成すユビオサエ後、口縁に2条のヨコナデ。器表は灰色 N4/0、断面は灰白色 N8/0 を呈す。胎土に1mm弱の石英わずかにあり。

3は土器4。残存率20%、口縁部周25%残存。内面は、ナデは磨滅のため判然とせず、ミガキあり。外面は体部ユビオサエ後軽くナデか。後、口縁部1条のヨコナデ。器表は暗灰色 N3/0、断面は灰白色 N8/0 を呈す。胎土に1mm弱のチャートわずかにあり、微細粒は石英・クサリ礫が認められる。

4は土器8。内面、底部一定方向ナデ後体部～口縁部ヨコナデ、最後にミガキ、見込みは斜格子。外面は、体部に水平方向のユビオサエ列上下に2列、どちらも途中でユビオサエの左右の切り合いが変わ

る。口縁部1条のヨコナデと高台周辺のヨコナデがそれを切る。高台内側無調整。磨滅ないが器表は灰色N5/0、断面はN8/0を呈す。胎土に1mm前後の黒色粒若干あり、1mm前後の石英わずかにあり。

5は土器10。ここから土器群2。内面磨滅ナデ不明、ミガキ残る、見込みは斜格子か。外面体部左上がりユビオサエ列。口縁部2条と高台部のヨコナデがそれを切る。口縁部ヨコナデの範囲にミガキ散在。器表は灰色N5/0、断面は灰白色N8/0を呈す。胎土に粗砂粒なく、微細粒に石英・長石・チャートあり。

6は土器13。内面磨滅激しくわずかにミガキ残る程度、見込み

は平行線か。外面も磨滅。体部ユビオサエも不明瞭だが、水平に並ぶか。口縁部1条のヨコナデ、高台部周辺もヨコナデ。器表は灰色N5/0、断面灰白色N8/0を呈す。1mm前後の黒色粒あり、1mm前後の石英わずかにあり。

7は土器14。内面磨滅し、わずかにミガキ残る、見込みは平行線か。外面も磨滅、体部ユビオサエか。口縁部1条と、高台周辺にヨコナデ。器表は灰色N4/0、断面は灰白色N8/0を呈す。胎土に1mm前後の黒色粒あり、1mm弱の石英わずかにあり。

8は土器15。内面ナデ後ミガキ、見込みは斜格子。外面体部左上がりユビオサエ列が基本だが上部に水平方向の列、口縁部ヨコナデ2条の内、下段のものがそれをなぞる。口縁部ヨコナデ内に粘土接合痕残る。粘土輪積み。高台部周辺も体部ユビオサエを切るヨコナデ。高台内側はユビオサエ散在。器表は灰色N4/0、断面灰白色N7/0を呈す。胎土に粗砂粒なく、微細粒に石英・黒色砂粒わずかにあり。

9は土器16。残存率20%、高台部は80%残存。内面は磨滅激しくミガキわずかに残る。外面も磨滅。体部ユビオサエ、口縁部2条のヨコナデ、高台部周辺もヨコナデ、高台部内側は無調整。器表は磨滅で灰白色2.5Y7/1、断面灰白色2.5Y8/1を呈す。胎土に1mm弱のクサリ礫・チャートわずかにあり。

10は土器17。残存率10%、高台部周50%残存。高台貼り付けのヨコナデ以外、磨滅で調整不明。器表・断面とも磨滅で灰白色N8/0を呈す。胎土に2~1mmのチャートわずかにあり。高台が半分以上残存していたので土器番号を付けたが、接合する破片がなかったものである。

11は土器18。残存率20%、口縁部周25%残存。内面は磨滅しわずかにミガキ残る。外面体部ユビオサエ。口縁部2条と高台部のヨコナデがそれを切る。高台部内側は無調整。器表は鉄分付着にぶい黄色2.5Y6/4、断面は灰白色2.5Y8/1。胎土に1mm前後のクサリ礫・1mm弱の石英・チャートわずかにあり。

12は土器19。内面ヨコナデ後ミガキ、部分的に磨滅激し、見込みは斜格子ミガキ。外面磨滅なし。

表9 104溝 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別	破片数		大器種	破片数		型式部位	破片数	
			破片数	%		破片数	%		破片数	%
土器	752	土師器	18	2.4	皿	8	44.4			
					甕	8	44.4			
					焙烙	2	11.1			
		須恵器	9	1.2	こね鉢	8	88.9			
					甕	1	11.1			
		瓦質	35	4.7						
		瓦器	690	91.8	椀	598	86.7	外面ミガキ	32	5.3
皿	89				12.9	高台	22	3.7		
磁器	2	白磁	2	100.0	碗	2	100.0	玉縁	2	100.0
土製品	1	焼土塊	1	100.0						
炭	2									
石	2									
桃核	17									

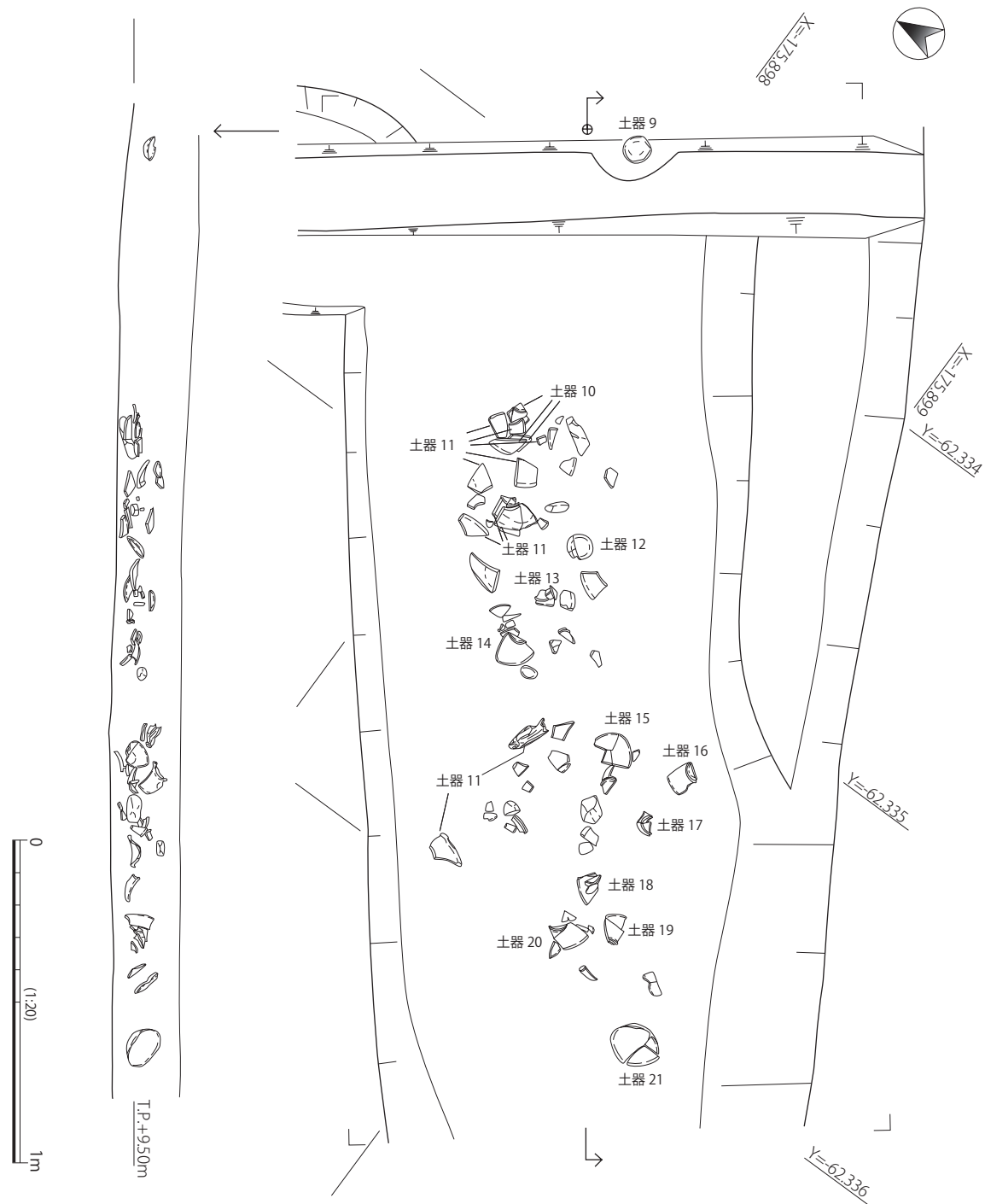


図30 上町東遺跡 1tr. 第5面 104溝土器群2出土状況図(S=1/20)

体部ユビオサエ後ゆるいナデ、口縁部ヨコナデ2条、下段のナデは断続的。高台部ヨコナデ。器表は鉄分付着で灰黄褐色 10YR6/2、断面は灰白色 10YR7/1 を呈す。胎土に 1mm弱のチャートあり。

13は土器20。歪み強い破片でこのような図になった。本来の口径はもっと広い。内面磨滅、ミガキ若干残る。外面も磨滅、体部ユビオサエわずかに残る。高台部周辺はヨコナデか。器表は灰色 N4/0、断面は灰白色 N7/0 を呈す。胎土に 1mm弱のクサリ礫わずかにあり。

14は土器21。土器群2の南西端。口縁部の一部を欠くのみ。内面下部一定方向ナデ、上部ヨコナデ後ミガキ、見込みは斜格子。外面体部ユビオサエ、水平な列あり、口縁部2条のヨコナデ、下段のナデは水平ユビオサエ列をなぞる。高台部ヨコナデ、高台部内側無調整。体部～口縁部ミガキ散在。器表は

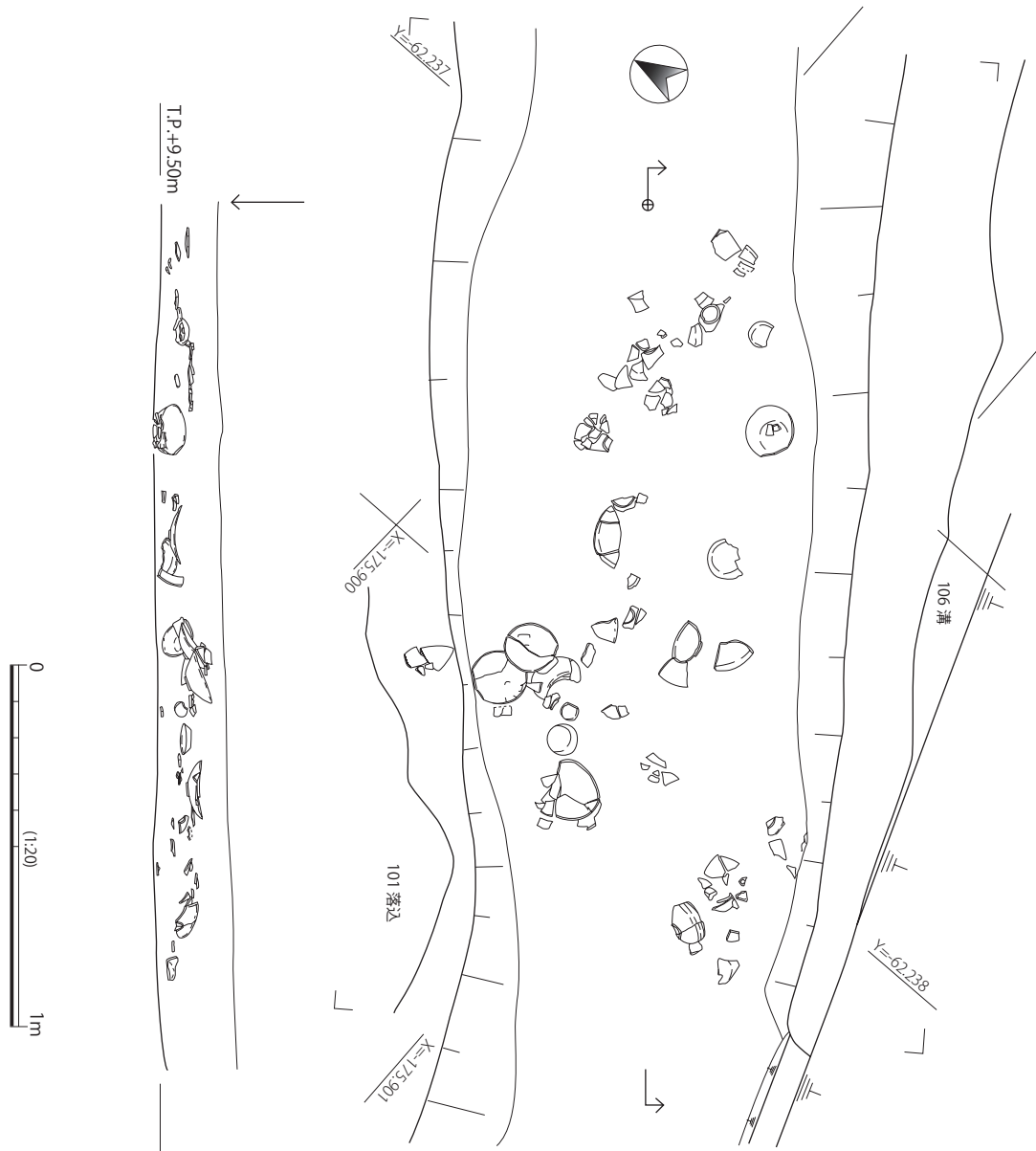


図31 上町東遺跡 1tr. 第5面 104溝土器群3出土状況図(S=1/20)

灰色 N4/0、断面灰オリープ色 5Y6/2。胎土に 1mm 前後の石英若干あり、微細粒にチャートもあり。

15 は土器 22。これ以下土器群 3。内面ヨコナデ後ミガキ、見込みは斜格子。外面体部に水平上下 2 列のユビオサエ列あり、その左右の切り合い途中で逆転。口縁部ヨコナデ 2 条。高台部ヨコナデ、内側は無調整。器表は暗灰色 N3/0、断面灰白色 5Y7/1 を呈す。胎土に 1mm 弱の長石・石英わずかにあり。

16 は土器 23。内面磨滅し調整不明瞭。口縁端部はヨコナデ残り、全体にミガキか。見込みはやや乱れた斜格子ミガキ。外面磨滅わずか、体部は水平方向ユビオサエ列が重なり、後軽くヨコナデ。口縁部 1 条のヨコナデ、高台部周辺もヨコナデだが断続的である。高台部内側は無調整。器表は灰色 N4/0、断面灰白色 N8/0 を呈す。胎土に 1mm 前後の石英・チャートわずかにあり、黒色粒若干あり。

17 は歪み強い破片でこのような図になった。本来の口径はもっと狭い。内面は磨滅するが、口縁部付近にヨコナデ、全体に若干ミガキ残る、見込みは斜格子か。外面も磨滅。体部は散在するユビオサエの上に左上がりのユビオサエ列。口縁部 2 条のヨコナデがそれを切るが、下段のナデは粗い。高台部周辺もヨコナデ。器表は磨滅と鉄分付着でにぶい黄色 2.5Y6/3、断面は灰白色 7.5Y7/1 を呈す。胎土に

1mm弱の石英・赤色粒わずかにあり。赤色粒見えるので、焼成もやや失敗し酸化的雰囲気か。

18は土器26。口縁部を若干欠くのみ。内面やや磨滅、ヨコナデ後ミガキ、見込みは斜格子。外面もやや磨滅、体部にユビオサエ、水平に列を成すものもある。口縁部にはそれを切るヨコナデ2条、かなり下まで入る。高台部周辺もヨコナデ、高台部内側は無調整。器表は灰色N4/0、断面灰白色N8/0を呈す。胎土に1mm前後のクサリ礫若干あり、1mm前後の石英・1mm弱のチャートわずかにあり。

19は土器31。残存率15%ほど、口縁部周は25%残存。内面はナデ後ミガキ。外面は体部にユビオサエ、口縁部ヨコナデに切られるものは水平な列を成す。口縁部ヨコナデは2条。器表は灰色N4/0、断面は灰白色N7/0を呈す。胎土に1mm弱の石英若干あり。

20は土器29。口縁部をわずかに欠く。やや磨滅するが内面ナデ後ミガキ、見込みは斜格子。外面体部水平ユビオサエ列並ぶ。口縁部1条のヨコナデ。高台部周辺もヨコナデ、高台部内側は無調整。器表は灰色N5/0、断面灰白色N8/0を呈す。胎土に1mm弱のチャート・赤色粒・石英わずかにあり。

21は土器30。内面磨滅、口縁部のヨコナデと若干のミガキ残る。外面も磨滅、体部に水平に並ぶユビオサエ残り、口縁部は1条のヨコナデ、高台部周辺もヨコナデ、高台部内側は無調整か。器表は灰色N4/0、断面灰白色7.5Y8/1を呈す。胎土に2～1mmの石英わずかにあり、2mmのチャート1粒あり。

22は土器22。磨滅激しい。内面ヨコナデ後ミガキ、見込みは平行線か。外面体部ユビオサエ残り、口縁部の2条と高台部のヨコナデがそれを切る。器表は磨滅で黄灰色2.5Y6/1、断面灰白色N8/0を呈す。胎土に1mm弱のチャートわずかにあり。

23は土器33。磨滅なし。内面ヨコナデ後ミガキ、見込みは平行線、その端部付近に原体の強いアタリ残る。外面体部ユビオサエ散在、一部ユビナデ。口縁部ヨコナデ2条。高台部ヨコナデ、内側無調整。器表は暗灰色N3/0、断面灰白色N7/1。胎土に1mm前後の石英若干あり、1mm弱のチャートあり。

図33-1～3は引き続き土器群3の瓦器碗。

1は土器35。磨滅なし。内面ナデ後ミガキ、見込みは斜格子だが、施文動作が断続的に止まる。外面体部ユビオサエ、規則性なし。口縁部2条のヨコナデ、下段ナデ内にユビオサエ残る。高台部ヨコナデ、内側無調整。器表は灰色N5/0、断面灰白色N8/0。胎土に1mm弱の長石・チャートわずかにあり。

2も磨滅なし、土器37。内面は底部に一定方向ナデ後、口縁部ヨコナデ、最後にミガキ。見込みのミガキには端に工具の強いアタリが残る。外面は、体部左上がりユビオサエ列後ゆるいナデ。口縁部は3条のヨコナデ、最下段のナデ内にはユビオサエ残る。高台部周辺粗いヨコナデ。高台部内側は無調整。器表は灰色N4/0、断面は灰白色N8/0を呈す。胎土に2～1mmの石英・チャート若干あり。

3は土器群3内で無番号取り上げ接合。磨滅なし。内面ヨコナデ後ミガキ、見込みは斜格子。外面体部左上がりユビオサエ列。口縁部2条のヨコナデだが下段のナデ粗い。高台周辺もヨコナデ、高台部内側は無調整、その中心付近から高台端部に工具痕のような直線的沈線あり。器表は灰色N4/0、断面灰色N6/0を呈す。胎土に2～1mmの石英・黒色粒わずかにあり。

4～6は土器群2・3一括で取り上げた破片から接合した瓦器碗。

4は残存率20%、口縁部周も同じ。若干磨滅。内面はヨコナデ後ミガキ、見込みは3方向の直線、籠目か。外面は、体部に水平ユビオサエ列。口縁部は幅広1条のヨコナデ、アタリ弱く外反せず。器表磨滅で灰色N6/0、断面灰白色N7/0を呈す。胎土に粗砂粒なく、微細粒に石英・長石・黒色砂粒あり。

5は残存率20%、高台は50%残存。磨滅する。内面はヨコナデ後ミガキか、見込みは斜格子か。外面は体部にユビオサエ残る。口縁部ヨコナデ3条。高台部周辺ヨコナデ、その内側は無調整。器表は暗

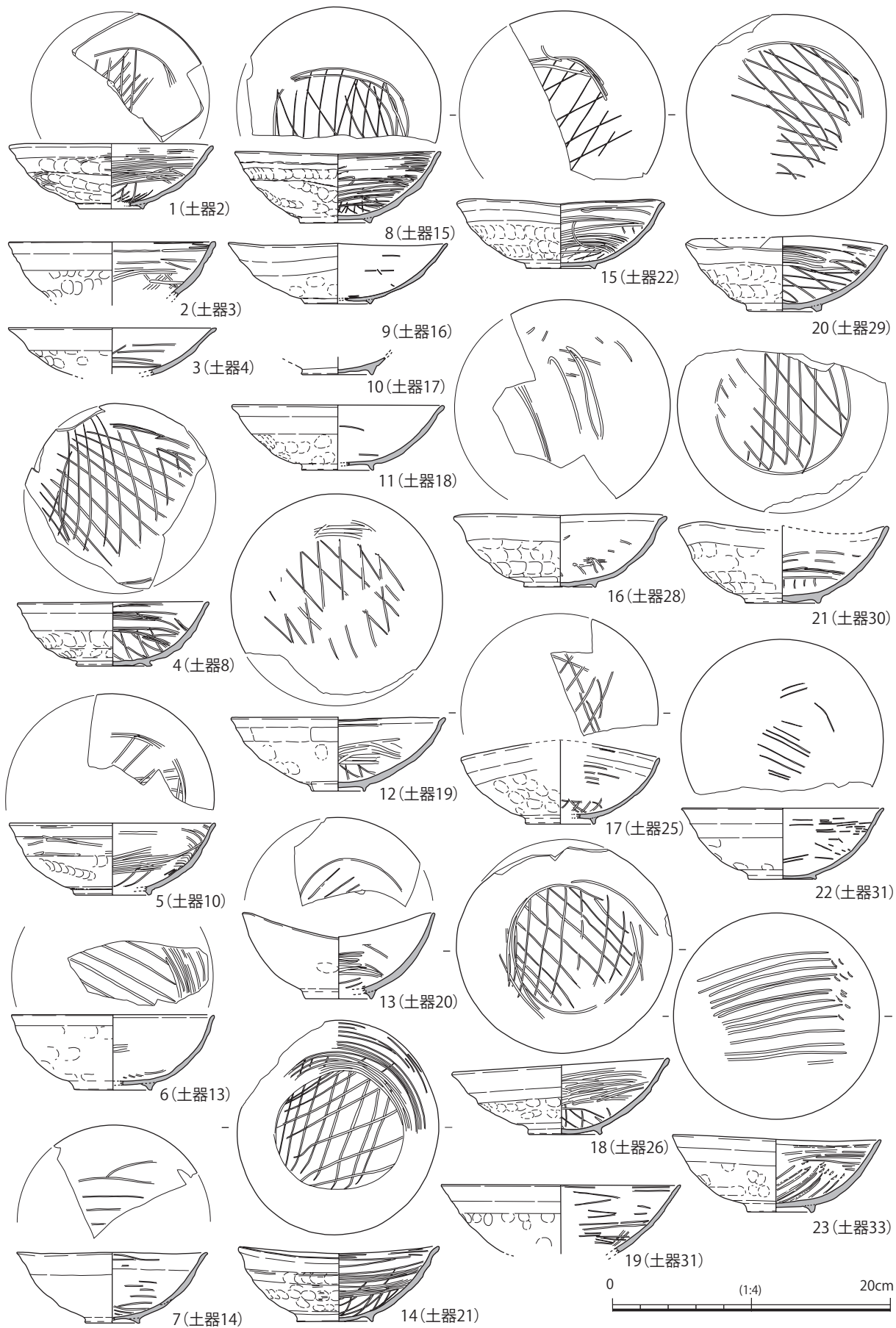


図32 104溝出土遺物(その1) {1~4:土器群1、5~14:土器群2、15~23:土器群3} (S=1/4)

灰色 N3/0、断面灰白色 5Y7/1 を呈す。胎土に 3～2mm のチャートわずかにあり。

6 は残存率 10%、口縁部周は 25% 残る。若干磨滅。内面はヨコナデ後ミガキ、ミガキは密、見込みは渦巻き状か。器表は灰色 N4/0、断面灰白色 N8/0 を呈す。胎土に 1mm 弱の石英わずかにあり。

7～17 は瓦器小皿、7 は土器群 1、8・9 は土器群 2、10～12 は土器群 3 に属し、13～17 は土器群 2・3 から一括して取り上げ接合したものである。

7 は土器 7。土器群 1 の南東端付近。完形品、わずかに磨滅。内面はナデ後ミガキ、見込みのミガキと圏線ミガキは太さが異なる。外面は、底部ユビオサエ、周縁部のユビオサエは左回りに列を成す。口縁部はヨコナデ。器表は暗灰色 N3/0 を呈す。胎土に 1mm ほどのチャート 1 個見える。

8 は土器 9。土器群 2 北東端から離れ、104 溝屈曲部から単独で出土。口縁わずかに欠ける。内面磨滅、口縁部ヨコナデ、後ミガキ。見込みのミガキは「の」の字形を幾つか入れる。外面底部ユビナデ・ユビオサエ、口縁部ヨコナデ。器表は灰色 N4/0、断面は灰白色 N8/0。胎土に 1mm 弱の石英若干あり。

9 は土器 12。口縁がわずかに欠ける。内面底部一定方向ナデ後、口縁部ヨコナデ、最後にミガキ。見込みのミガキは圏線と区別なく渦巻き状に入り、最後に中心に直線ミガキを一筆で往復。外面底部ユビオサエ後、周縁部に左回りに断続的な板ナデ、縦方向の板ナデもあり。それらを切り口縁部ヨコナデ。器表は灰色 N5/0、断面灰白色 5Y7/1。胎土に粗砂粒なく、微細粒に石英・長石・黒色砂粒あり。

10 は土器 24。磨滅なし。内面は底部一定方向ナデ後口縁部ヨコナデ、その後ミガキ、見込みのミガキに規則性はない。外面は、底部ユビオサエ後周縁部に板ナデ、ユビオサエも列を成すものもあり、板ナデは完周せず規則性に欠ける。中心付近に皺状の痕跡あるが、接合痕としては説明がつきにくい。最後に口縁部ヨコナデ。器表は灰色 N4/0、断面灰白色 N8/0 を呈す。胎土に 5mm のチャート 1 個あり。

11 は土器 27。あまり磨滅なし。内面ナデ後ミガキ。見込みは「U」字状の短いもの散在。外面底部ユビオサエ、右回りに連続、後周縁部軽くヨコナデ、一部に粘土接合痕残る。板状粘土使用か。最後に口縁部ヨコナデ。器表は灰色 N5/0、断面は灰白色 N8/0 を呈す。胎土に粗砂粒なし。

12 は土器 34。完形品で、若干磨滅。内面は底部一定方向ナデ後、口縁部ヨコナデ。その後ミガキ、口縁部のミガキは磨滅、見込みは「V」字状の短いミガキを重ねるか。外面は底部ユビオサエ散在、接合痕らしきものあり、後軽くナデ、最後に口縁部ヨコナデ。口縁部のナデは強くなく、口縁は外反しない。器表は暗灰色 N3/0 を呈す。胎土に 1mm 弱の石英・クサリ礫わずかにあり。

13 は磨滅なし。内面底部一定方向ナデ後、口縁部ヨコナデ。最後にミガキ。外面は、底部ユビオサエ、周縁部で列を成すものがあるが、3分の1周程度しかない。その後口縁部ヨコナデ。器表は灰色 N4/0、断面灰白色 7.5Y7/1 を呈す。胎土に粗砂粒なく、微細粒に石英・長石・黒色砂粒あり。

14 も磨滅なし、内面底部一定方向ナデ後、口縁部ヨコナデ。最後にミガキ、見込みは平行線。外面底部中心にユビオサエ 1 個残り、不定方向のナデ、後周縁部に左回り断続的板ナデ一周。最後に口縁部ヨコナデ。器表は灰色 N4/0、断面灰白色 N8/0 を呈す。胎土に 2mm のチャート 1 個あり。

15 は磨滅。内面はミガキが若干残る。外面は、底部ユビオサエ・ユビナデ後、口縁部ヨコナデ。器表は灰色 N4/0、断面灰白色 N7/0 を呈す。胎土に 1mm 弱の石英わずかにあり。

16 は磨滅激しい。内面ミガキの有無も不明。外面、底部、右回り基調の断続的板ナデ後、口縁部ヨコナデ。器表は暗灰色 N3/0、断面灰白色 N8/0 を呈す。胎土に 1mm 弱の石英わずかにあり。

17 も磨滅激しく、内面調整不明。外面は、底部ユビオサエ、口縁部ヨコナデ。器表は灰色 N4/0、断面にぶい黄色 2.5Y6/3 を呈す。胎土に 1mm 弱の石英わずかにあり。

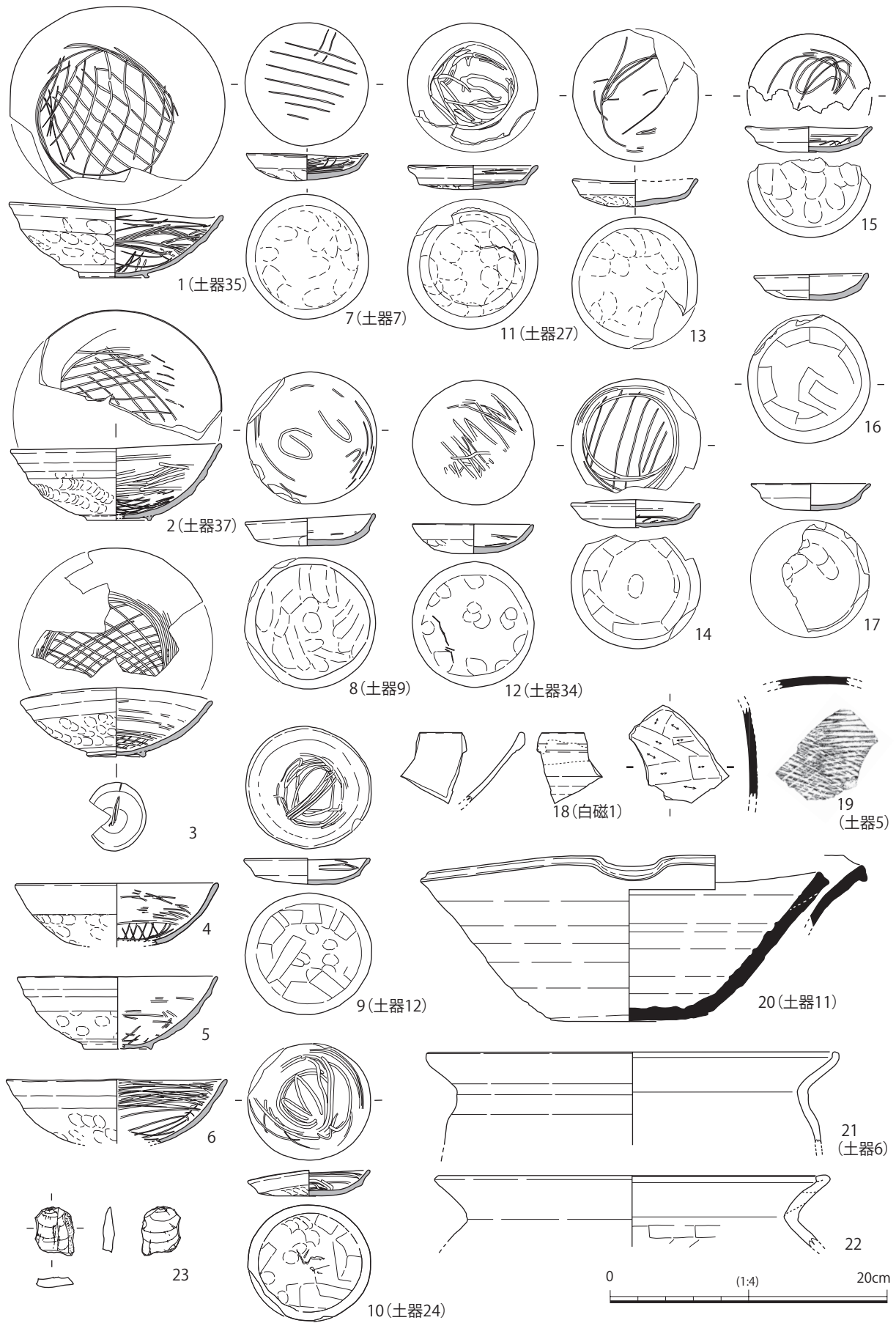


図33 104溝出土遺物(その2)
 {7・9・21:土器群1、8・9・19・20・22:土器群2、1~3・10~12・18:土器群3、4~6・13~17・23:土器群2・3} (S=1/4)

18は白磁玉縁碗片。内面施釉。外面は玉縁の下1cmほどで釉止まる。さらに玉縁上半の釉が厚い。玉縁は薄いカマボコ状断面で下端は沈線状。外面露胎部分には回転ケズリ。釉は灰黄色 2.5Y7/2、露胎部分は浅黄色 2.5Y7/3、断面はにぶい黄橙色 10YR7/2 を呈す。玉縁下端沈線状は北宋後半以降の特徴だが、器壁薄いのは古色か。北宋後半頃、090 落込の白磁片と同じ頃か。097 井戸の白磁片より古い。

19は土器5。須恵器甕胴部片。外面は平行タタキが数方向、内面は数方向のナデ。やや瓦質っぽく器表灰色 N5/0、断面灰色 N6/0 を呈す。胎土に1mm前後の石英あり、チャートあり、長石わずかにあり。

20は土器11。土器群2内北東半に破片が広がっていた。須恵器東播系捏ね鉢。残存率50%、口縁部周40%、底部完存。内面回転ユビナデ、底部磨滅、使用痕か。口縁端面は凹面を成し、片口部は幅5cmほど。外面回転ナデ、底部周縁部が磨滅するが、静止糸切り痕残る。外面口縁付近のみ降灰痕・黒変部あり。器表は青灰色 5B5/1、断面灰色 N6/1 を呈す。胎土に5mm前後の花崗岩小礫若干あり、3～1mmの黒色粒あり、2～1mmの石英・長石・チャート若干あり。割れて破片が足りない状態で投棄されたと思われる。口縁部の形態から見れば、12世紀末～13世紀中葉の範囲におさまるものであろう。

21は土器6。土師器甕片。口縁部周残存10%、復元径に不安あり。内面磨滅し調整不明。外面全面ヨコナデ。器表はにぶい褐色 7.5YR5/3、断面灰色 N6/0 を呈す。胎土に12mmと6mmの結晶片岩2粒あり、1mm前後の石英多し、1mm弱のチャートあり、1mm弱の長石わずかにあり。紀州産か。

22も土師器甕口縁部片、土器群2出土。口縁部周10%残存で、復元口径に不安あり。内面は口縁部ヨコナデ、頸部以下は断続的板ヨコナデ。外面はヨコナデ。外面口縁煤付着。器表・断面はにぶい黄褐色 10YR5/3 を呈す。胎土に2～1mmのチャート多し、3～1mmの石英・1mm前後の長石若干あり。

23はサヌカイト製剥片。重さ11.68g。やや風化。小型の剥片で、ネガ面右は原礫面で左も薄く、原材もかなり小型か。ネガ面の2面の剥離面と、ポジ面の打点はほとんど同じ位置で、下辺が折れ。縦長の剥片を取ろうとして折れたものか。原礫面の気孔がかなり磨滅し、原材は河原の転石か。

以上の遺物を見れば、瓦器碗は尾上編年の和泉型Ⅲ-2期頃、12世紀末～13世紀初頭頃で、097井戸と同時期。ただ、外面ミガキの個体の比率が低く、内面見込みのミガキで平行線のものの比率が高く、それが斜格子より退化と見れば、097井戸より若干新色を示すと思える。

外面体部のユビオサエ列が水平なものが多いのも、放射状指頭圧痕より新色か。ただし、圏線ミガキは密なものもあり、高台も断面台形で外に踏ん張る形のものもある。点数が多い中での多様性としての古色か。もしくは井戸を埋める際に使用した土器群と日常の廃棄物としての土器群の差であろうか。

097井戸では板状粘土接合痕のある瓦器碗があったが、こちらでは粘土紐輪積みの接合痕が見られた。これも新旧の差を示すかは検討が必要である。また、瓦器碗の水平ユビオサエ列で、途中で左右の切り合いが変る例が確認でき、その時点で回転調整は行われていないという資料として重要だと考える。

瓦器小皿はこの時期に瓦器碗と共伴する例として良い資料になっている。口縁の外反するのが特徴であろう。しかし、外面底部の調整が多様で、板状工具によるナデが一定数見られる事が注目できる。

また、東播系捏ね鉢も瓦器碗と矛盾のない時期のもので、良い資料と言える。土器群1が土器群2・3と違い一括投棄とは思えない事は先述したが、土器群2・3間でも、土器群2の方が磨滅するものが多いという違いがあり、同時期の投棄でない可能性が高い。また、瓦器碗の内面底部など部分的に磨滅が激しいものは使用痕と思われ、その例が比較的多く見られる特徴がある。これらの土器は基本的に日常の使用の後、割れて廃棄されたものと考えて良いであろう。

つまり、屋敷地区画溝が、数度の土器の投棄が繰り返される環境にあったという事である。それが

097 井戸の廃絶の後であるとする、104 溝の区画する屋敷地の存続期間を、097 井戸の廃絶あたりで二分でき、後半期には溝がゴミ捨て場のような状況になったと想像する事も出来る。

しかし、組成的には極端な供膳器への偏りがある。捏ね鉢があるが、甕は完形率の低い破片程度で、貯蔵器は皆無に近い。瓦器碗は土器群 2 が 10 個体、土器群 3 が 11 個体ほどで、使用痕的な磨滅の事を考えても、都城の土師器大量廃棄のような一度きりの集中的使用と廃棄でもなさそうである。

いずれにしても、集落内の一括資料としては、12 世紀末～13 世紀初頭の時期で、097 井戸の遺物よりわずかながら新しい時期が考えられる点が重要であろう。

8) 105・106・108 溝 (図 28)

105 溝は 101 落込南東辺で 104 溝と重複する溝で、状況的に 104 溝に切られているより古い時期のものである事は先述した。105 溝はその部分よりさらに北東側に直線的に伸び、調査区北西壁外へと続く。幅 70～80 cm ほど、深さ約 15 cm、底のレベルはわずかに南西側に下がる傾向がある。

106 溝はその南東隣に平行するが、やや方位が異なり、北東側で 105 溝と合流する。その部分では切り合いは確認できなかった。第 3 層系埋土を持つ溝と正確に直交する事から、第 4 層系埋土の遺構の中では新しい時期と考えられる事は先述した。つまり 105 溝を切って掘られていると考えられる。幅 40～60 cm、深さ約 10 cm、底部のレベルに特に変化はなく、105 溝の南西部の底部高と同じくらいである。

108 溝は 105・106 溝が合流する付近で、106 溝の南東肩部に重複するように始まり、105 溝と平行しつつ、調査区北西壁外に伸びる。他の二つの溝より深いのが特徴で、幅 50～60 cm、深さ約 35 cm、底部レベルは北東側に傾斜する。図 28 の断面図では 105 溝より新しく、1 回掘り直された可能性があり、最後に人為的に埋められているのが分かる。トレンチ断面 No. 3 では 105 溝との切り合いが反対になるが、おそらく切り込みがもう一つ上の面まで上がるのを見落としたのであろう。方位的に 106 溝と合致し、105 溝とはわずかに斜行するのもそれを裏づける。ただ、106 溝との切り合いは明らかでない。

108 溝には南西端近くで 117・118 溝が南東から直角に取り付く。この二つの溝は深さ 10 cm ほどで、108 溝に比べ浅いが、108 溝と共に方形区画の角を成す可能性が高い。北東の 288 段差までの区画とすれば、北西辺長さ 10m ほどの区画となる。これも一つの屋敷地区画の可能性が高い。

そう考えると、106 溝も南西側の 107 落込内で、南東側に直角に派生する枝溝があるが、それと 178 溝との距離も約 10m で、その枝溝の位置は 104 溝が直角に曲がる位置でもある。104 溝もその角から南西端の 096 落込の肩部までが 11m で、おおまかに一区画幅 10m 前後の基準があった可能性もある。

105 溝は出土遺物は皆無で、106 溝は土師器小皿が 2 片出土しているのみ、108 溝は器種不明の瓦質土器小片 2 片と瓦器碗 4 片、瓦器小皿 1 点が出土している。図化できたのは瓦器小皿のみである。

図 10 - 3 はその瓦器小皿。磨滅あり。内面は底部一定方向ナデ後、口縁部ヨコナデ。屈曲部とそのやや下の 2 ヲ所に粘土接合痕残る。ミガキは元からなかった可能性が高い。外面は底部にユビオサエ・ユビナデ、規則性は見られない。口縁部のヨコナデがそれらを切る。屈曲部よりやや下に粘土接合痕。器表は暗灰色 N3/0、断面灰白色 N7/0 を呈す。胎土に 1 mm 前後の石英わずかにあり。

この 3 本の溝を 104 溝とあわせて考えると、ここの中世集落は先ず 105 溝のような道に伴う側溝で区画割りがなされ、その後各屋敷地を区画する方形区画溝が掘られていくようである。また、106 溝

の段階で、わずかな方位性の変化が見られるのも特徴であろう。

9) 131 溝

106 溝の南東側で、107 落込の肩から掘り込まれ、調査区南東壁に伸びていく溝である。106 溝に平行する方向性から始まって、南東壁までにほぼ 90 度曲がるようにも見える。深さは 10 cm ほど。南東壁に向かって底が下がる。106 溝とその枝溝によって区画された中の角付近に位置するとも言える。確証はないが、排水溝的感じを受ける。埋土は第 4 層系。

遺物は土師器小皿 1 片、器種不明瓦質土器小片 3 片、瓦器小皿 1 片である。瓦器小皿のみ図化でき、図 10 - 4 がそれである。

内面は磨滅するが、圏線ミガキが若干残存。外面は、底部にユビナデ、底部の偏った 1 点に集中していくような方向性を見せる。その後口縁部にヨコナデ 2 条。器表は灰色 N5/0、断面灰白色 7.5Y8/1 を呈す。胎土に 1 mm 弱の石英・チャート・クサリ礫わずかにあり。104 溝の瓦器小皿類とそう時期が変わるとは思えないが、瓦器碗の基準を適用すれば、口縁部ヨコナデ 2 条になるのはやや新色か。

10) 123 溝 (図 34)

1 tr. の北東端付近で、北端は 124 柱穴に切られ、まっすぐ南に伸びて調査区南東壁に至る溝である。幅約 50 cm、深さ 10 cm 弱。埋土は第 4 層系。小さな溝だが、奈良時代の須恵器坏蓋が完形で出土した。溝の底に密着したような状態であった。方位は北から 5 度弱西に傾くようにも見えるが、ほぼ正方位と言っても良いだろう。付近の 124・125 柱穴も同じ方位性を持ち、近い時期の遺構の可能性が高い。

今回の調査では唯一の奈良時代の遺構である。奈良時代に中位段丘上になんらかの開発が行われ、正方位の遺構が残された証拠である。柱穴が存在する事から集落が成立していた可能性が考えられる。

図 10 - 8 が 123 溝出土の須恵器坏蓋である。内面は回転ナデ、受け部がある。その内側に粘土接合痕残る。外面は口縁部回転ナデ、天井部の大部分は回転ヘラケズリ、扁平宝珠つまみとその周辺は回転ナデ。外面口縁付近に 3 ヶ所、別の個体を重ねて焼成して明色になった重ね焼痕が円弧状に残る。器表・断面とも灰白色 N7/0 を呈す。胎土に 6 ~ 1 mm の石英・4 ~ 1 mm のチャート・1 mm 前後の長石あり、2 ~ 1 mm の黒色粒わずかにあり。内面に受け部が残るが、器形はかなり扁平で、法量から見ても飛鳥 V 期、平城宮 I 期頃、8 世紀初頭前後のもの。胎土にチャートが入る点で陶邑産ではない可能性がある。

11) 建物 1 (図 35)

2 tr. のほぼ中央付近で、144 ~ 147 柱穴がほぼ正方形に並ぶのを確認した。南東に隣接する既往の調査で続きの柱穴が検出されており、それらを含めると 142 ピットも柱穴に含まれ、2 間×2 間総柱の建物になる。その場合、北隅の柱穴を欠くが、他の柱穴も深さが 10 cm ほどしか残存しておらず、北隅に当たる部分は特に削平が深い部分なので、削平により柱穴が失われた可能性が高

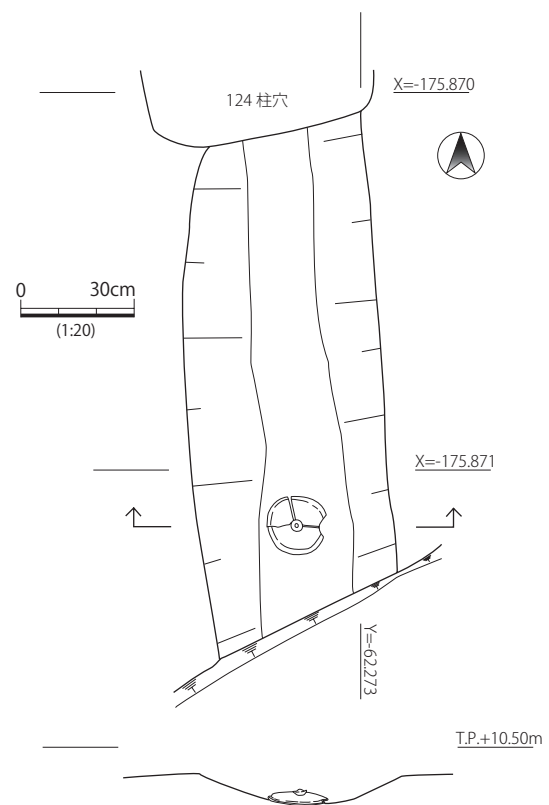


図34 上町東遺跡 1tr. 第5面123溝土器1 出土状況図 (S=1/20)

い。

また、既往の調査区では、142ピットとその調査区のピットD-26を結ぶ延長上に柱穴であるピットD-28が存在し、方向性や柱間などが合い、攪乱で不明な部分もあるが、さらに南東に伸びる建物であった可能性が高い。ピットD-26・28からは土師器小皿と瓦器碗の小片が出土している。

144柱穴は長径20cmほどと小さいが、他は長径35～50cmの不整円形である。残存する深さが少なく、十分な断面観察は出来ないが、145・147柱穴は柱抜き取りである。ほとんどの柱穴は柱下端の高さがT.P.+9.85m付近に揃うが、147柱穴のみはT.P.+9.77mまで下がる。北隅の柱穴がもし、T.P.+9.85mに揃えた深さであったなら、その部分の削平はT.P.+9.8m以下に達しており、削平で柱穴が失われた可能性を強める。柱芯距離は2.1～2.2mほどに揃う。柱痕や抜き取り痕から見れば柱径は10cmほどか。

方位は北から44度西で、1tr. 南西部の中世集落の遺構と比べると105溝より10度ほど、106溝より5度ほど西に傾くが、お互いの距離も含めて考えれば大体同じ方位性を持つと言えよう。142ピット・144・146柱穴のライン上に143ピットがあり、これもこの建物に付随する遺構の可能性が高い。

今回の調査の柱穴から遺物は1点も出土していないが、既往調査分の柱穴と、以上の事から1tr. 南西部の中世集落遺構と同じ時期のものとする。

12) 建物2 (図36)

建物1の南西側に、後述する柵列1をはさんで位置する。160・164・170・177柱穴で「L」字を形作るので建物と判断した。柱穴は長径35cmほどのやや不整な円形。四角味を帯びているとも言えない形である。柱は全て抜き取り。柱下端の高さは177柱穴がT.P.+10.0m、160柱穴はT.P.+10.04m、164柱穴はT.P.+10.6メートル、170柱穴はT.P.+10.11mで隅柱の170柱穴が浅い。160柱穴は柱位置の下に礫があったが、人為的に入れたものか、中位段丘構成層の礫かは不明。

柱芯距離は、160・164・170間は2.1～2.2mで建物1とも揃うが、170・177間は1.8mとやや狭い。160～170のラインを北東に2.1～2.2m延長すると、攪乱からはぎりぎり外れるので、そこに柱穴がない事から、建物はこれ以上北東には伸びない事になる。170・177間が狭いので建物1のような正方形の建物になるとは思えない。側柱の柱芯距離が短くなる傾向が多いように思うので、160～170の辺が妻となるのだろうか。方位は東から51度北で、建物1より西に傾いている事になる。1tr. 南西部の中世集落遺構と方向を合わせるとは言いがたい。

170・177柱穴からは土師器小皿の小片が各々1片ずつ出土している。そして160柱穴からは瓦器碗が1片出土している。時期は特定できないが、第4層系埋土であるので、中世のもので建物1と併存するとしておきたい。

13) 柵列1 (図37)

建物1・2間にあり、150・151・154柱穴が一直線に並ぶ。隣接する既往の調査区にもそのラインに乗るピットがあるので、さらに南東に伸びそうである。柱穴は形も深さも様々で共通性はない。柱はおそらく全て抜き取りのようである。柱芯距離はどちらも2mちょうど。方位は北から54度西。

154柱穴が建物2の160～170柱穴の辺を延長したライン上にのり、方位性もわずかしか変らない事から、この柵列は建物2と同時期併存と考えられる。建物同士の間を塀で区切ると考えれば建物1とも併存していた可能性が高い。柱穴から遺物は出土していない。

14) 建物1・2周辺のその他の遺構 (図24)

153土坑は柵列1の南西に隣接する、由来不明の明色シルトを埋土にする浅い土坑だが、輪郭や底

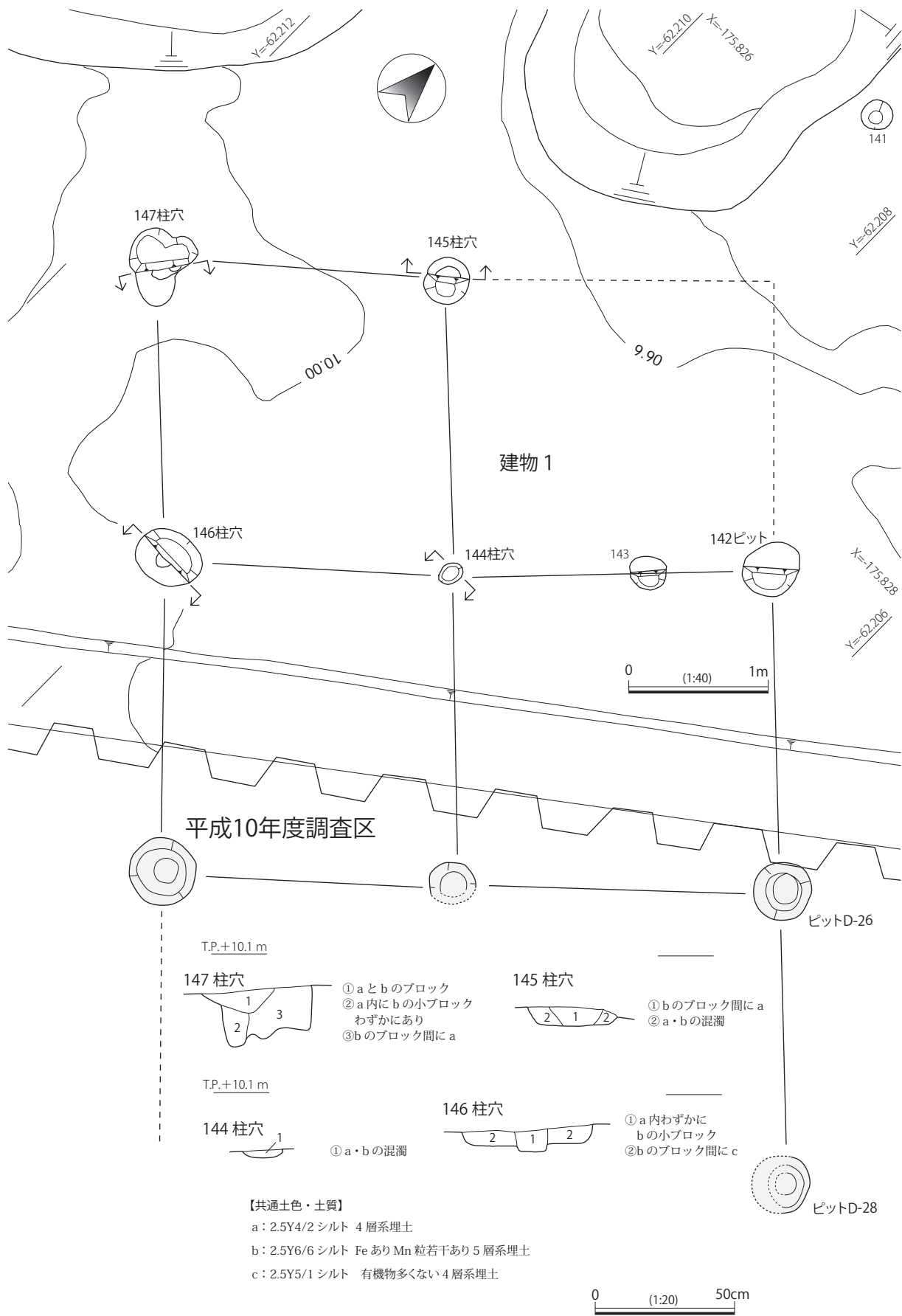


図35 上町東遺跡 2tr. 第5面建物1平面図(S=1/40)・柱穴断面図(S=1/20)

部に細かい凹凸があった。良く観察するとそれは手鋤の掘削痕である事が分かった。しかし、単なる掘削痕ではなく、埋土に明色シルトが入っている理由は分からない。

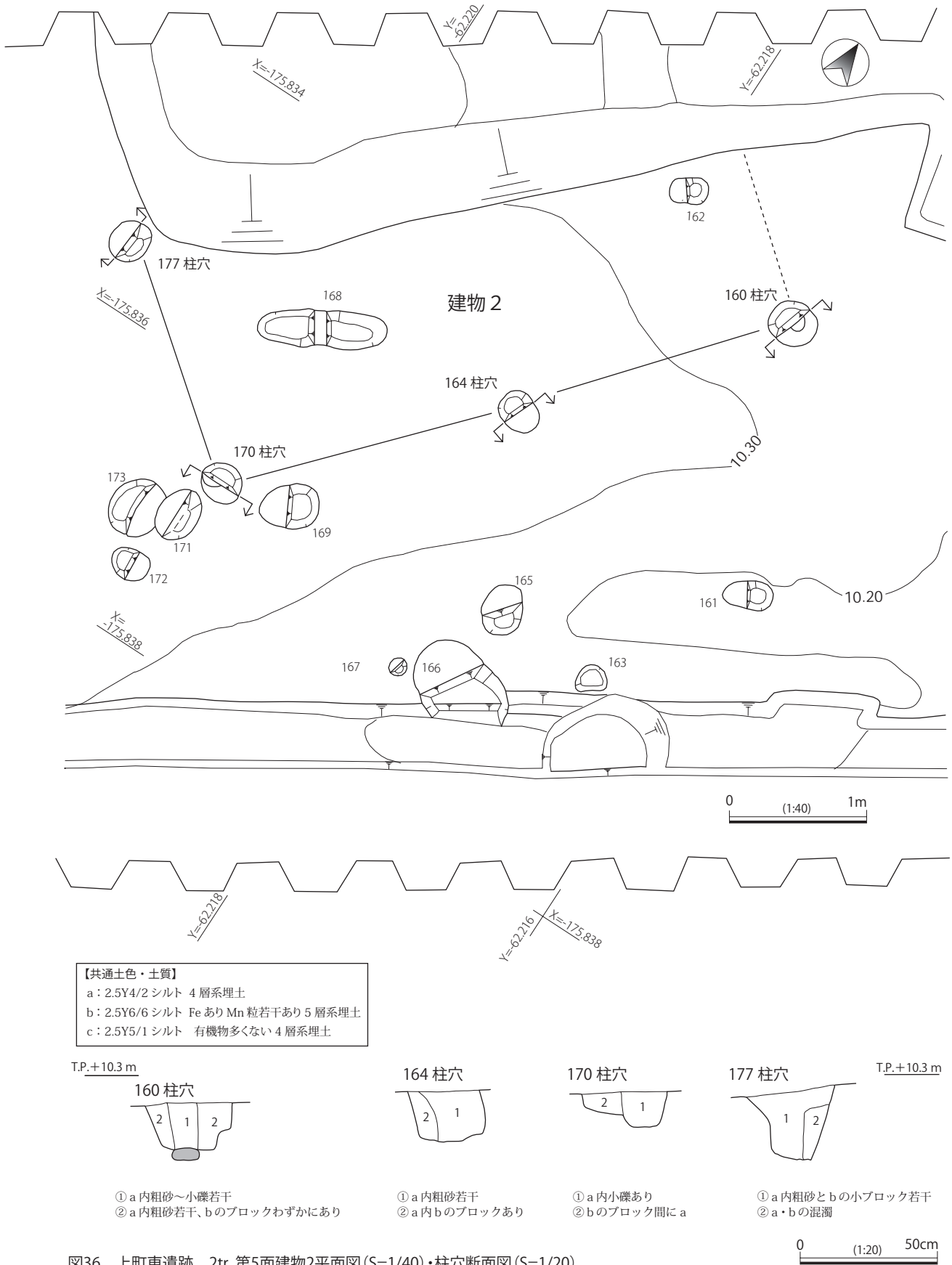


図36 上町東遺跡 2tr. 第5面建物2平面図(S=1/40)・柱穴断面図(S=1/20)

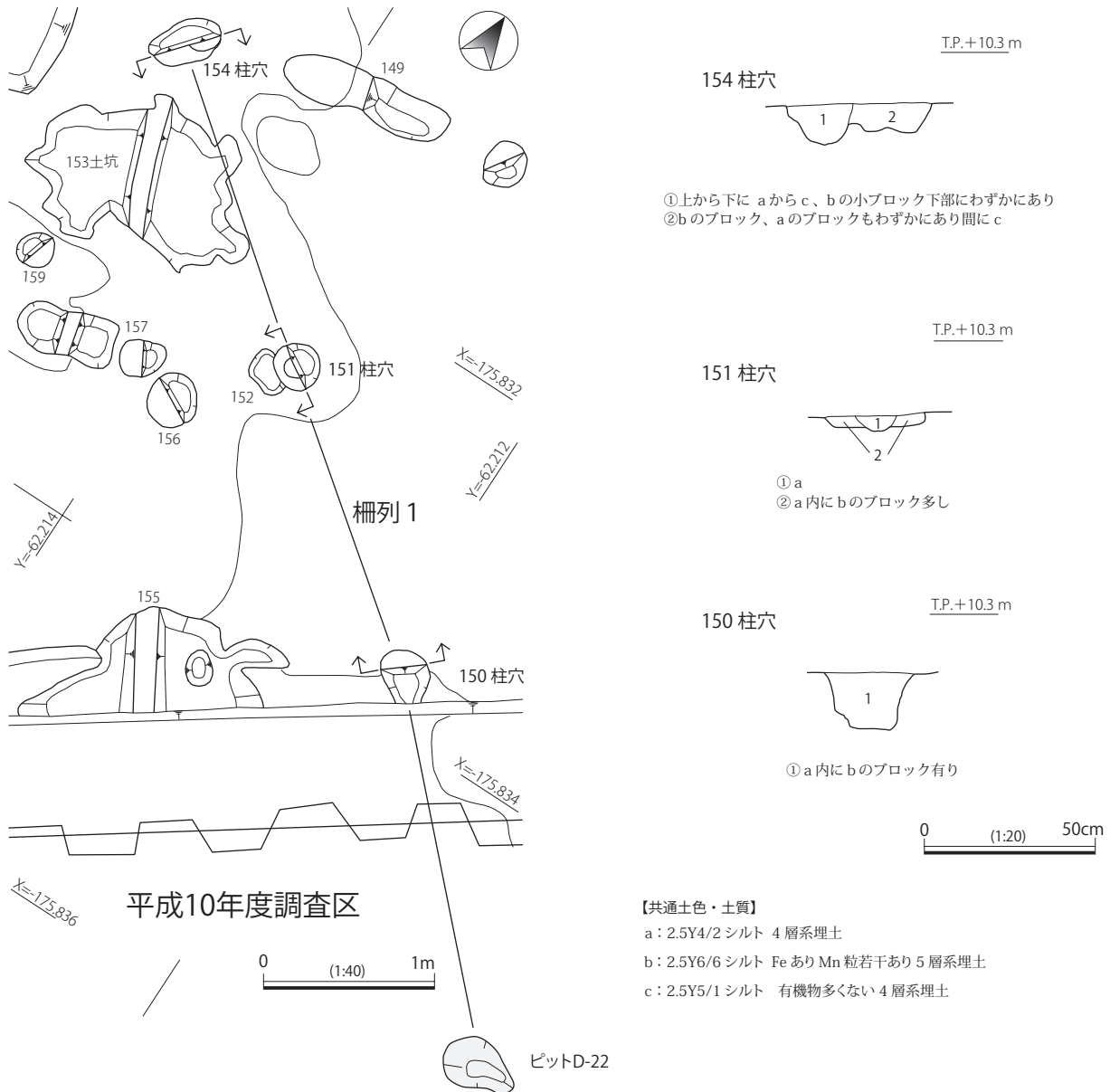


図37 上町東遺跡 2tr. 第5面柵列1平面図(S=1/40)・柱穴断面図(S=1/20)

175 土坑も明色シルトを埋土とするが、建物 2 の南西隣に位置し、馬蹄形の平面を成すのが意味ありげである。深さは 5 cm 程度しかないが、何かの施設の基礎部分のような印象を受ける。明色シルトもわざわざ埋土として選択されたものかも知れない。

190 土坑は 2 tr. 南西部でやや建物から離れ、第 1 層系の埋土を持つ土坑であるが、瓦器碗 9 片、瓦器小皿 3 片が出土した。中世の遺構を破壊して掘られたのであろうか。

出土遺物のうち瓦器碗 1 点が図化できた。図 10 - 7 である。磨滅するが、内面はミガキが残る、見込みは平行線、圏線ミガキは残り悪いが、割と密に入る。外面は体部ユビオサエ、左上がりの列を成すか。口縁部は 2 条のヨコナデ、高台部もヨコナデ。器表も磨滅のため断面と色変らず、灰白色 N7/0 を呈す。胎土に 1 mm 弱の石英・長石・チャートわずかにあり、1 mm 前後の黒色粒若干あり。

1 点だけでは不確定だが、104 溝の瓦器碗群と時期が異なるとも言えない。このような瓦器碗がある事からもこの周辺の建物 1・2、柵列 1 などとも 1 tr. 南西部の中世集落遺構と同時期のものと考えたい。

第5節 総括

上町東遺跡は既往の調査から中世集落遺跡として有名である。しかも鞆の羽口・金属滓・櫛の未成品の出土から工人が集住した集落ではないとも言われている。今回の調査もその実態の解明に新たな資料を追加する事となった。しかしまた、新たな問題を指摘できる結果も得られたので、今回の調査の成果を、時代を追って簡単にまとめておきたい。

1、中世集落成立以前

古土壌である第4層が中位段丘上に広範囲に広がっていたと考えられる時期である。

弥生土器と思われる小片、サヌカイト製の剥片、古墳時代頃の須恵器などは、包含層を見ても5片を越えず、皆無と言ってよい状態である。隣接する湊遺跡とは異なる状況があったと思われる。

数は少ないながら遺構が見られるようになるのは奈良時代初頭、実質的には藤原京の時期、7世紀末～8世紀初頭である。1 tr. 北東側の123溝に代表される遺構群である。

柱穴が存在する事から集落があったと思われるが、特徴は隅丸方形の柱穴と、遺構の正方位指向である。この時期から13世紀代の遺構まで、実質は同じ面で検出され、埋土の性格も変らないものが多い事から、上述の二つの特徴を持つ遺構には今後も留意しないといけないだろう。

湊遺跡の北東半を占める低位段丘上にも奈良時代の集落が存在するが、123溝出土の須恵器坏蓋の示す時期よりは若干新しい時期のもので、建物などにも正方位指向は見られない。それと比較すると、今回の遺構は先駆的で、公的性格の強さが暗示されているかもしれず、注意が必要である。

次に中世集落成立以前のものとして1時期を設定できる可能性を持つ遺構は、1 tr. の南西部で、第4層の残る落込の肩部や底部で検出された鋤溝らしき小溝群である。

これらが鋤溝だとすれば、中位段丘上で自然地形の凹凸が残るまま耕作されていたという事になり、状況的に畑であったと推測できる。集落成立後の屋敷地内の畑とも考えられるが、屋敷地内を平坦に整地しない事も考えにくく、やはり集落成立以前のものである可能性の方が強いと言えよう。

中世集落以前の灌漑体系を示す溝などの検出が皆無である事からすれば、中位段丘上ではこの時点で、耕地への水の供給は天水に頼るか、段丘崖下の開析谷から人力で汲み上げるしかない。つまりは中世集落以降の広域的な耕地開発とは規模も違い、雑木林や草が広がる中位段丘上の所々に畑が点在するような状況ではなかったかと推測される。

2、中世集落存続期

1) 存続期間

中世集落の成立時期は097井戸の出土遺物より遡る時期であろう事は想像に難くない。090落込出土の白磁玉縁碗片が097井戸出土のものより古いと見られる事は注目できるが、097井戸より他の遺物では新色を示す104溝出土の白磁玉縁碗片も古く見られる事から、白磁で時期を云々する事はできない。

今回の出土遺物から考えようと思えば、097井戸と104溝の出土遺物に古いものが残っていると見て、古色を持つ遺物がどこまで遡られるかであろう。点数の多い瓦器碗が基準になるが、その視点で見ても尾上編年和泉型Ⅱ-3期までしか遡りえず、またそれ以降で遺物群の時期がまとまるとも言える。

そこから、集落の成立は12世紀後葉頃と考えるのが妥当であろう。

また逆に集落の廃絶時期を考えるには104溝より新しい可能性の高い108・131溝出土の瓦器小皿

程度しかない。それらの小皿は 104 溝のものと比較しても外面 2 条のヨコナデや、口縁外反の弱さなどが新色として理解できる。104 溝出土瓦器碗の最新傾向が和泉型Ⅲ-2 期とすれば、その 1 型式期後、Ⅲ-3 期、13 世紀前葉頃のものとしても大過あるまい。

その後の状況はつかみにくいが、上部包含層の遺物を見ると、13 世紀後半代に激減し、再び遺物が増加するのは 14 世紀代のものである。そこから集落は 13 世紀前葉を以って廃絶すると考えられる。最長で 80 年間、短ければ 50 年間ほどの存続期間と言える。

従來說への疑問提起 しかし、既往の調査から提示されている説では、この集落の存続期間を 13 世紀～15 世紀とするものが多い。その理由としては、主に 14～15 世紀の遺物の出土している溝を集落の区画溝と判断しているからのようである。

だが、今回の調査で、集落廃絶後にある程度その屋敷地割りを踏襲して大規模な耕地開発が行われた事、その際に成立した耕土系第 3 層が中世単純の包含層として確認でき、その床面遺構としての耕作痕や溝が中世集落の遺構と同じ第 5 面に残されている事、その耕土成立以前は集落存続期まで、段丘上の土壌として黒褐色粘質土系の第 4 層が存在しており、集落存続期の遺構にはその層由来の埋土が見られる事、遺物量が 13 世紀後半代のははるかに少ない事などが判明した。

そこから考えると、従来の説は、集落存続期の地割りの一部を踏襲した、13 世紀後半以降の耕地区画の溝を集落の屋敷地区画溝と認識したのではないかと考えられる。

そこで、今後の調査における指標にできるように、今回の調査で確かめられた、中世集落の遺構とその後の耕地区画の遺構を分別する手がかりになる要素を 2 点挙げる。

埋土 第 4 層は黒褐色 10YR3/1 が基本的な土色で、明度のある部分でも灰黄褐色 10YR4/2 程度である。シルト質で有機分を多量に含みながら酸化マンガン・鉄分が沈着した、酸化も進行している典型的な古土壌と言える。そのため、その上面から掘り込まれた遺構には 10YR3/1・5Y3/1・2.5Y3/3 など、黒褐色～オリーブ灰色の、いわゆる黒褐色系粘質土の埋土が見られる。基本的に明度が 3 を越えないと言えよう。その中に段丘構成層最上部の第 5 層由来の黄褐色系の小ブロックが見られる場合もある。

それに対し、耕土系第 3 層は黄褐色 2.5Y5/4 を土色の基本とし、5 ほどの明度で、部分的に鉄分などが濃くて明度が落ちて 4 ほどである。また、粘質土ではあるが、主体粒子もシルト～細砂とやや粗く、第 4 層と比べかなり砂質である。第 4 層を主要な母材としても、有機分が耕作を繰り返す事で溶脱し、作物によって消費もされることにより明色化したのであろう。砂粒が多いのは、風化礫起源の砂粒を含む第 5 層も一部母材としたからと思われる。

耕地開発以降の遺構には基本的にこれに由来する埋土が入ることが多い。彩度はやや落ちて 2 か 1 のものが多く、明度は変らない。暗灰黄～黄灰色 2.5Y5/2～5/1 が多い。

また、同じ溝でも集落の区画溝は底面に傾斜のないものもあり、常時水が流れていたのではないようで、ラミナの見える流水堆積層がまったくないか未発達である。耕地区画に伴う溝の中には基本的に水路が含まれ、ラミナのある層が発達している溝は耕地開発以降のものである可能性が強い。

器種構成 今回の調査での中世集落の遺構では、供膳器が大量に出土した。104 溝の土器群 2・3 は極端にしても、集落内の遺構であるならば、104 溝土器群 1 程度の器種構成はあろう。つまり、比率的に供膳器が最多となり、煮沸器・貯蔵器が揃うのが自然である。また、使用痕以外の磨滅・風化も少ない。

だが、既往の調査で集落の区画溝とされているものには、椀皿類がほとんどなく、あっても少数の小片のみで、完形率の悪い羽釜等の口縁部～鏝部の破片や甕の口縁部片が若干まとまって出土しているというものがある。これは、今回調査の第2面で、耕作地内の遺構とした185溜井の出土遺物の構成に近い。磨滅し、それ以上は割れにくい厚さのある破片のみが入っているのである。

そのような状態は集落内の遺構とは考えにくいであろう。14～15世紀の溝に多い状況である。上町東遺跡の集落とは異なる集落から耕作地に持ち込まれたか、水路を流れてきたものであろう。

2) 集落の構造と変遷

集落は方形基調の屋敷地が密集する集村形態である。この時期には珍しい形と言えよう。1 tr. 南西部ではまず105溝を側溝とする道が作られ、それが屋敷地割りの基本線になったと考えられる。その基本ラインでは105→104→106→108溝という変遷が考えられる。道は次第に侵食されていくようだが、104・106溝が同時期併存していても、105溝が埋め立てられていたならば、人一人ぐらいは調査区を横断できるほどの幅は確保できたはずである。路地のような雰囲気であろうか。各々の溝が並存する時期があった可能性はあるが、105溝と106溝の併存は考えにくいと言える。

106溝が105溝と比べてやや方位を変え、そこから南東側は105溝の方位に基づく遺構がほとんどないのは、このラインより南東側に屋敷地が広がるのがやや遅かった事を示す可能性もある。

また、105溝は出土遺物が皆無であるのに対し、104溝の大量の遺物はもちろん、106・108溝からも遺物が出土している事は、溝の管理状態の変化を示している可能性もある。097井戸が埋められ、105溝も埋められる前は、当初の集落の計画基本線としての道の幅も保たれ、溝の管理もされていたのが、その後、道は私的領域に侵食され、敷地を囲む方形区画溝が基本となり、それもゴミ捨て場のような状況になっていく、という変化があったようである。また、落込や溝類の第4層系埋土内での切り合いが判然としなかったのは、こういった変化で掘削や整地が繰り返されただけでなく、さらに集落存続期間でも土壌化が進行したからではないかと推測したが、そう考えると屋敷地が密集する中で、屋敷地境の溝周辺には草などが生い茂っていたような景観が想像できる。

1 tr. 南西部では柱穴らしきものがほとんど検出されなかったが、隣接する既往の調査区ではある程度検出され、南西隣の調査では掘立柱建物も数棟検出されている。そこでは掘立柱でも3間×4間総柱の建物もあり、同じ時期にこちら側だけ礎石建物で、その礎石が失われたとは考えにくい。

おそらくは今回の調査である程度の面積が調査されている105溝より北西側の屋敷地が、調査区内はちょうど裏庭のような、建物が建てられない空閑地であったのではないだろうか。それならばさらに北西側に屋敷地の正面があり、それが面する道が通っている可能性がある。

そう考えると2 tr. 中央部で検出された2棟の建物と一つの柵列も不自然ではなくなる。しかし、こちらの部分は既往の調査でも柵列が多く検出されているが、区画溝となるような溝が見られないという特徴がある。柵列での区画の単位も今のところ把握できるものはない。1.2～1.4m幅で平行する柵列などがあり道の存在を感じさせるが、集落南西部とは若干景観が違うとは言えるだろう。近世初頭に削平された最高所を挟んだ集落内の両所の違いが何に由来するかは今後の課題である。

3) 集落範囲

集落範囲に関しては、今回の調査では削平により失われた部分も多く、新たな成果は提示できない。しかし既往の調査から見れば、北東の湊川の開析谷と南西の円田川の開析谷には含まれた範囲にまとまる事は確実で、各々段丘崖付近数十mは遺構密度が少ない部分がある事から、段丘崖からある程度の

空閑地をおいていたと考えられる。海側と山側への広がりは確認できていないが、海側では調査区よりやや北西で開析谷の蛇行により中位段丘平坦面がくびれる部分があり、一つの目安となろう。

4) 集落の性格

集落の性格としては今回も鞆の羽口や櫛形木製品の出土から工人居住説を補強したと言える。ただもう一つ、蛸壺や土鍾の出土から漁民の存在も考えられる。特に 097 井戸で鞆の羽口・櫛形木製品・蛸壺・土鍾が共伴しているのは注目できる。井戸埋め立て時に大量の礫と共に入れられた遺物であり、一つの屋敷地にのみあった遺物ではないと思われるが、漁民と工人の居住地が離れておらず、雑居状態であった事を示すようにも思える。ただ、海から 1 km 離れた集落に漁民が居住していたのかという疑問は残る。

土鍾は大型管状土鍾であり、大型の網漁に使用するもので、多人数で行う漁と関係する。蛸壺漁は少人数で行える漁である。理解はしにくいですが、例えば同じ地域共同体に属する浜側の漁民集落で、大型の網を引く際や、蛸壺漁の繁忙期などに、内陸の集落の住人も動員される体制なども考えられるであろうか。

この集落の廃絶後、間を置かずに、円田川の開析谷を渡った南西側の上町遺跡に集落が成立し、方形区画溝による屋敷地が密集した形、工人の存在を示すような出土遺物など、そのまま同じ性格を引き継ぐ事となる。集落の移動と考えて差し支えあるまい。移動の理由は明らかでないが、湊川～円田川間の中位段丘平坦面を耕作地にできる灌漑体系が作られたからではあるまいか。また、近世の佐野町場につながる集落が発展し、そことの一体化を強めるために円田川の南西部に移動した可能性も考えられる。

中世の佐野村は、文献からは海に面した「佐野浦」と熊野街道沿いに立つ市から発展していく「佐野市場」の二極構造を持つように理解されているが、考古学的にはその中間に、上町東遺跡から上町遺跡に引き継がれる、工人を抱えた集落が第三極としてある構造になる。

3、中世耕地開発

第 5 面で第 4 層系埋土を持つ遺構を切る、第 3 層系埋土を持つ耕作痕の存在から、中世集落廃絶後、調査区内、おそらくは遺跡内全体が耕地となったと考えられる。

中世耕土である耕土系第 3 層が、近世耕土より粘質・暗色なのは第 4 層を削平・攪拌して耕土にしたためと思われ、中位段丘構成層由来の風化礫も若干含まれる。平坦地の造成は削平と盛土によって為されるのが通常であるが、耕土の創出も伴ったため、第 5 面では削平による段差の造成だけが確認される。

1 tr. 南西部で検出された畝溝状の耕作痕は 106 溝と正確に直交するものもあり、集落の区画と全く無関係に作られたのではなく、ある程度踏襲している事が知られる。また、幾つかの群が若干、方向性が異なる事や、不整形な段差から、正確な方形区画ではなく、元々の自然地形を若干反映した、方形基調のやや不整形な耕地区画が造成されたと考えられ、この時点で、条里制地割りの存在は感じられない。

区画を踏襲する事から、耕地開発は集落廃絶直後に行われたと考えられる。それはこの中位段丘面の灌漑体系の整備を伴っていたであろう。おそらく湊川と円田川にはさまれた中位段丘平坦面の大部分が灌漑可能となったはずで、そういった広範囲な耕地開発であったと考えられる。

この地域の灌漑の要は近世では現在の市役所の裏手にある布池であった。布池は発掘調査が行われ、細かい時期までは限定できないが、13 世紀前半頃の築造ではないかと推測されている。つまり、布池の築造によりこの部分の中位段丘平坦面に水田開発が可能になり、集落の移動と広範囲の耕地開発が為されたと考えられる。遺構・遺物に関しては地味になるが、農業の生産性の面では大きな画期と言える。その耕地開発は集落の廃絶期と同じ 13 世紀前半か、遅くとも 13 世紀中葉頃と考えられる。

第 3 層に含まれる遺物には、集落の遺構から巻き上げたと思われる古い時期の遺物と 14 世紀前半～

15世紀後葉頃のもの間に、わずかながら内面ミガキのまばらな瓦器椀片が見られる。それが耕地開発の時期の下限を示す遺物であろう。耕地開発以降、盛土系第3層によって耕地区画の改変が為され、第2層が耕土として成立するまでの間、15世紀末葉頃までは耕地区画がほぼ維持されていたと考えられる。14世紀頃にやや包含遺物が増加するのは、近くに集落が成立したからかもしれない。

また、この時期には土錘が1点もなく、最も漁業関係の遺物の少ない時期と言える。しかし、わずかながら蛸壺の破片は見られ、むしろ近世以降の耕土内出土の土錘の増加の方が大きな変化だと言える。

4、耕地区画の変遷

盛土系第3層が耕土系第3層の上に積まれ、第3面を床面として第2層が成立する時点で耕地区画が変化する。基本的には1・2 tr. 境南西側の、元々一番高い部分を削平し、それで旧来の段差を埋め立て、他にも土砂を入れる。それにより一つの耕地区画が大きくなり平坦化が進行している事が分かる。

しかし、その耕地区画改変の原因や、耕土として成立する第2層がなぜ第3層より砂質になるのかなどには謎が多い。時期は15世紀末葉～17世紀初頭頃ぐらまでしか絞り込めず、その時期と言えば応仁の乱から大坂夏の陣まで、和泉地域は頻繁に争乱があり、強固な権力は存在しなかった。耕地改変はそういった中で、惣村的結合を強め、自治組織を育てていった地元勢力が、個々の耕地の維持より、全体の生産性の向上を優先させるまでの力を発揮して行ったものであろう。

しかし、第2層に江戸時代前期の遺物まで含まれるという事は、その耕地区画が、江戸時代まで引き継がれたという事である。そしておそらく江戸前期のうちに第1層が成立し、さらに平坦化が進む。

調査区北東端の中位段丘崖では第1層相当斜面堆積層から包含遺物が急増するが、これはこの頃に調査区北西外に近い位置の段丘崖上に田出村が成立したためと考えられる。田出村は近世に湊村を含む中庄村と佐野村の境にまたがって成立した両村の分村である事は先述した。絵図に現れるようになるのは元禄年間で、1645年（正保2年）に町人請けで始まった俵屋新田の開発で佐野周辺に分村が急増する事から、田出村もその時期に成立した可能性が高い。

段丘崖斜面の遺物の特徴は、小さな分村のものを背景にしているといっても瓦の出土が多く、輸入陶磁器も見られ、茶道具も見られるなど、生活水準の高さを感じさせる（第6章参照）。

第0層は近世後期から近代初頭の層であるが、その成立時期は判然としない。第2層が第1層の床土化して、有機分の溶脱と鉄分の沈着が激しい事から、第1層が耕土として機能していた期間の方が長かったと推測される。ただ、南海本線敷設時の段丘崖の盛土からも豊富な遺物が出土している事は田出村が近くで継続し、発展していた事を示すと考えられる。また、1 tr. で残った第0面遺構からは、第1面よりさらに段差が少なくなり、平坦化が進行している事を示す。

南海本線開通後は徐々に市街地化が進み、現在は遺跡の立地する中位段丘上に残る耕作地は少ない。

5、近世包含層出土土錘の分析（表10）

今回の調査で、第1・2層、段丘崖第1層相当斜面堆積層などから大量の土錘が出土した。中世包含層である第3層からの出土は皆無であるので、これはほとんどが近世の土錘と考えて良いものである。

細片を省いても155点の点数を数え、4 tr. の段丘崖付近より1 tr. の方が出土数と土量の関係から見ても濃密に出土したと言える。棒状土錘が2点あり所属時期に疑問がある以外は、全て管状土錘である。

それらの分析をここで行いたい。

まずは、分析の手順を述べる。法量は全長・最大径・孔の最小径をノギスで計測し、完形の場合は質量を電子秤で計測した。完形でないものも計測可能な項目は計測した。完形のみで、各法量の分布図、各々

表 10 出土土錘計測可能品

個体番号	全長 (cm)	最大径 (cm)	孔最小径 (cm)	重量 (g)	型式	色調	胎土	備考	図 38 中番号
1-1	4.2	0.87	0.26	2.59	小型Ⅱ	10YR3/7	a		
1-2	3.15	1.21	0.31	3.89	小型Ⅱ	5YR5/6	b		
2-1	4.35	1.19	0.34	4.78	小型Ⅲ	10YR3/7 ~ 2.5YR5/4	a		
3-1	3.89	1.07	0.21	4.19	小型Ⅲ	2.5YR6/4 ~ 10YR7/3	a	接合痕あり	図-13、孔径最小
3-2	3.25	1.04	0.44	2.66	小型Ⅱ	2.5YR5/6 ~ 7.5YR7/4	a	縞状粘土	
4-1	4.71	1.1	0.38	5.08	小型Ⅲ	10YR7/4 ~ 5YR6/6	a	黒斑あり	
4-2	4.55	1.21	0.36	5.47	小型Ⅲ	5YR6/6 ~ 4/3	b	黒斑あり	
4-3	3.63	1.07	0.32	3.15	小型Ⅱ	2.5YR5/4 ~ 7/3	b	縞状粘土	
4-4	3.15	0.95	0.3	2.25	小型Ⅰ	7.5YR6/6 ~ 6/3	b		
4-5	3.84	1.23	0.32	5.61	小型Ⅲ	5YR5/6 ~ 7.5YR7/3	c		
5-1	4.19	1.09	0.35	4.16	小型Ⅲ	10YR7/3 ~ 2.5YR6/6	b		
5-2	4.13	1.05	0.33	4.49	小型Ⅲ	7.5YR6/4 ~ 5YR6/4	a	ナデ丁寧	図- 8、小型中重量ピーク 2 代表
5-3	3.84	0.95	0.31	3.71	小型Ⅱ	2.5YR6/6 ~ 7.5YR6/3	c		
5-4	3.64	0.86	0.27	2.31	小型Ⅱ	2.5YR6/2 ~ 6/4	c	接合痕あり	
5-5	3.15	0.78	0.24	1.31	小型Ⅰ	2.5YR5/4 ~ 5/3	b		図- 2、軽さ第 3 位、精美
15-1	4.68	1.29	0.35	7.29	小型Ⅲ	10YR7/2 ~ 7.5YR7/4	b		図-10、小型中最重量
15-2	3.43	0.99	0.33	2.48	小型Ⅱ	7.5YR7/3	b		図- 4、小型中重量ピーク 1 代表
15-3	3.58	2.64	1.24	14.17	中型Ⅰ	2.5YR6/6 ~ 6/4	g	若干欠失あり、黒斑あり	図-17
16-1	4.24	1.1	0.34	4.72	小型Ⅲ	7.5YR7/4 ~ 2.5YR6/4	c	黒斑あり	
25-1	3.79	1.22	0.33	5.73	小型Ⅲ	2.5Y7/3 ~ 6/2	d		
25-2	3.74	1.09	0.33	3.26	小型Ⅱ	5YR6/6 ~ 5/3	b	縞状粘土、接合痕あり	
25-3	3.41	0.99	0.35	2.79	小型Ⅱ	5YR6/4 ~ 2.5YR5/4	b		
25-4	3.62	0.97	0.34	2.29	小型Ⅱ	10YR7/4 ~ 5YR6/3	b	接合痕あり	
54-1	4.45	1.14	0.32	4.59	小型Ⅲ	5YR6/6 ~ 5/4	a	外面皺多し	図- 7、小型中重量ピーク 2 代表
119-1	4.51	1.28	0.36	6.17	小型Ⅲ	5YR5/6 ~ 10YR7/4	b	黒斑あり	2 トレ第 1 面 138 鋤溝
123-1	4.58	1.51	0.31	6.62	小型Ⅲ	2.5YR4/4 ~ 3/1	a	一部溶解発泡	図-12、小型中最大径
123-2	4.59	1.05	0.38	4.9	小型Ⅲ	5YR6/8 ~ 2.5YR5/6	b	黒斑あり	
123-3	4.73	1.04	0.28	4.96	小型Ⅲ	5YR7/3 ~ 2.5YR6/3	a	黒斑あり	図-11、小型中全長最大
123-4	3.94	1.12	0.25	4.53	小型Ⅲ	7.5YR8/4 ~ 5YR6/4	a		
123-5	3.76	1.08	0.35	4.11	小型Ⅲ	2.5YR6/4 ~ 5/3	b	黒斑あり	
123-6	3.42	0.98	0.24	2.93	小型Ⅱ	7.5YR6/6 ~ 6/3	b	黒斑あり	
124-1	7.56	5.08	2.16	154.05	大型Ⅱ	2.5Y7/2	f	黒斑あり	1 トレ第 5 面 097 井戸土器 11
137-1	4.45	1.14	0.35	4.93	小型Ⅲ	7.5YR6/6 ~ 2.5YR5/4	b	黒斑あり	
137-2	4.24	1.21	0.34	5.51	小型Ⅲ	2.5YR5/6 ~ 6/3	c	黒斑あり、接合痕あり	
137-3	4.07	1.16	0.36	5.57	小型Ⅲ	7.5YR6/4 ~ 5/6	c		
137-4	3.93	1.25	0.33	5.34	小型Ⅲ	2.5YR5/6 ~ 5YR7/2	c		
185-1	6.1	4.74	2.25	51.87	大型Ⅰ	5YR6/6	e	半分欠失、1/2 弱残存、縞状粘土	2 トレ 201 井戸
198-1	4.5	1.11	0.35	4.29	小型Ⅲ	7.5YR7/3 ~ 5YR5/6	a		
198-2	4.23	0.94	0.36	2.93	小型Ⅱ	2.5YR5/4 ~ 5YR7/3	a	外面に布目	
198-3	4.22	1.3	0.38	5.66	小型Ⅲ	7.5YR6/4 ~ 5YR6/4	b		
198-4	3.94	1.06	0.34	3.71	小型Ⅱ	7.5YR7/4 ~ 2.5YR6/3	c	黒斑あり、接合痕あり	
198-5	3.88	1.26	0.33	3.33	小型Ⅱ	2.5YR7/4 ~ 5/2	b	若干欠失あり、接合痕あり	
198-6	3.48	1.12	0.36	3.43	小型Ⅱ	7.5YR6/4 ~ 7/3	c	接合痕あり	
198-7	2.74	1.03	0.38	2.06	小型Ⅰ	2.5YR6/4	a		
198-8	2.53	0.96	0.47	1.48	小型Ⅰ	2.5YR6/4 ~ 7/3	a		図-14、小型中孔径最大
198-9	2.27	0.82	0.27	1.19	小型Ⅰ	10YR8/2 ~ 2.5YR6/4	d		
198-10	2.15	0.77	0.32	0.86	小型Ⅰ	2.5YR7/3 ~ 6/2	a		図- 1、最軽量、最大径最小、全長最小
201-1	4.02	1.08	0.35	4.17	小型Ⅲ	7.5YR8/2 ~ 2.5YR7/6	c	黒斑あり	
206-1	3.97	1.17	0.35	4.29	小型Ⅲ	5YR6/6	c	黒斑あり、接合痕あり	
207-1	3.64	1.01	0.43	2.9	小型Ⅱ	10YR8/3	a		
207-1	3.59	1.07	0.34	3.62	小型Ⅱ	7.5YR7/3 ~ 2.5YR5/4	b	わずかに欠失あり	

表 10 出土土錘計測可能品

個体番号	全長 (cm)	最大径 (cm)	孔最小径 (cm)	重量 (g)	型式	色調	胎土	備考	図 38 中番号
202-1	4.51	1.14	0.38	5.3	小型Ⅲ	10YR7/2～2.5YR5/6	a	若干欠失あり	
202-2	4.45	1.16	0.34	5.25	小型Ⅲ	10YR7/2～7.5YR7/2	a	若干欠失あり	
202-3	4.48	1.04	0.36	4.91	小型Ⅲ	2.5YR6/2～7.5YR7/4	a	黒斑あり	
202-4	4.08	1.14	0.34	4.76	小型Ⅲ	7.5YR7/4～2.5YR5/6	a		
202-5	3.9	1.15	0.31	4.92	小型Ⅲ	5YR6/4	a	接合痕あり	
202-6	3.31	0.94	0.36	2.92	小型Ⅱ	2.5YR6/6	a		
202-7	4.4	1.28	0.32	5.77	小型Ⅲ	2.5YR4/6～5/4	b	一部溶解発泡	
202-8	4.23	1.17	0.28	5.11	小型Ⅲ	2.5YR6/4	b	一部溶解発泡	
202-9	4.54	1.12	0.28	5.49	小型Ⅲ	7.5YR7/4～2.5YR6/3	b	黒斑あり	
202-10	4.28	1.28	0.36	6.02	小型Ⅲ	2.5YR5/6～5YR8/4	b	黒斑あり	
202-11	4.41	1.05	0.32	4.32	小型Ⅲ	2.5YR5/4～7.5YR7/4	b	黒斑あり	
202-12	4.24	1.14	0.27	4.59	小型Ⅲ	7.5YR8/2～2.5YR6/4	b		図-6、小型中重量ピーク2代表
202-13	4.11	1.13	0.37	4.57	小型Ⅲ	2.5YR5/4～7/3	b	黒斑あり	
202-14	4.15	1.14	0.28	4.54	小型Ⅲ	7.5YR6/6	b	接合痕あり	
202-15	4.07	1.21	0.4	5.19	小型Ⅲ	2.5YR5/4～7.5YR7/3	b	若干欠失あり	
202-16	3.86	1.15	0.38	4.27	小型Ⅲ	5YR6/4～7.5YR7/3	b		
202-17	3.63	0.95	0.29	2.79	小型Ⅱ	7.5YR6/6～2.5YR6/4	b		
202-18	3.1	1.03	0.25	2.63	小型Ⅱ	2.5YR6/2	b		
202-19	3.84	1.09	0.28	2.69	小型Ⅱ	2.5YR6/3～5/3	c	黒斑あり、接合痕あり	
202-20	3.82	1.06	0.24	3.41	小型Ⅱ	5YR6/3～7.5YR7/4	c	黒斑あり	
202-21	3.86	1.12	0.25	4.41	小型Ⅲ	2.5YR5/4～5/3	c	黒斑あり	
202-22	3.61	0.98	0.31	3.14	小型Ⅱ	2.5YR7/3～5/4	c	縞状粘土、黒斑・接合痕あり	
202-23	3.4	1.03	0.37	2.76	小型Ⅱ	7.5YR7/3～2.5YR5/4	c	黒斑あり、接合痕あり	図-3、小型中重量ピーク1代表
202-24	3.55	1.02	0.34	2.72	小型Ⅱ	7.5YR8/3～2.5YR7/3	c		図-5、小型中重量ピーク1代表
202-25	3.23	0.91	0.32	1.67	小型Ⅰ	2.5YR6/4～7/4	c		
202-26	3.14	0.85	0.33	2.05	小型Ⅰ	2.5YR6/6～5/4	c		
202-27	2.95	1.04	0.34	2.23	小型Ⅰ	7.5YR8/4～8/2	c		
202-28	4.41	1.1	0.37	5.66	小型Ⅲ	2.5Y7/3～6/2	d		
202-29	4.08	1.29	0.38	5.62	小型Ⅲ	2.5Y7/3～8/2	d	黒斑あり	
202-31	2.75	3.08	1.44	15.07	中型Ⅱ	5YR6/4～2.5YR6/3	g	接合痕あり	図-15
213-1	2.65	0.97	0.29	1.81	小型Ⅰ	2.5YR5/3～6/4	b	黒斑あり、接合痕あり	3トシ第2面273溝
255-1	4.22	1.42	0.37	6.87	小型Ⅲ	10YR7/2～2.5YR5/3	b	黒斑あり	図-9、小型中重量2位
255-2	3.6	2.64	0.87	16.9	中型Ⅰ	2.5YR5/6～4/1	g	黒斑あり、接合痕あり	図-16
255-3	4.39	4.62	1.41	71.01	中型Ⅱ	10YR7/2～6/2	f	深い工具痕あり、接合痕あり	図-18
257-1	7.22	5.42	2.46	169.43	大型Ⅱ	5YR7/6	e	若干欠失あり	図-23
257-2	5.81	5.51	2.34	151.78	大型Ⅱ	2.5Y7/3～10YR7/4	f	黒斑あり	図-22
258-1	6.12	4.8	2.08	97.64	大型Ⅰ	7.5YR7/3	e?		図-20

2項目による分布図を作成し、法量分類の可能性を考えた。別に胎土のタイプによる分類も試みた。

結果としては、全長と質量の相関分布図と、質量分布図が有効であった。分類は質量を中心としたものとなったが、大型・中型・小型内の細分では、他の法量的要素や形態が実質的に有効な場合はそれも使用している。また、管状土錘では、大型・中型・小型の区別はそのような分析を待つまでもなく見た目の大きさでも明確で、代表的な例で示せば、図38-1～14が小型、15～17が中型、18のみがやや分類に躊躇する所があるが、19～23が大型である。

胎土は砂粒の入り方と色でタイプa～gに分けられた。中型・大型では色の違いが土質の違いを反映しているようだが、小型では色はほとんど焼成環境の違いのようである。

タイプaは粗砂がほとんど入らず、粘土粒子自体も細かい「精良な胎土」と言えるほどのものである。

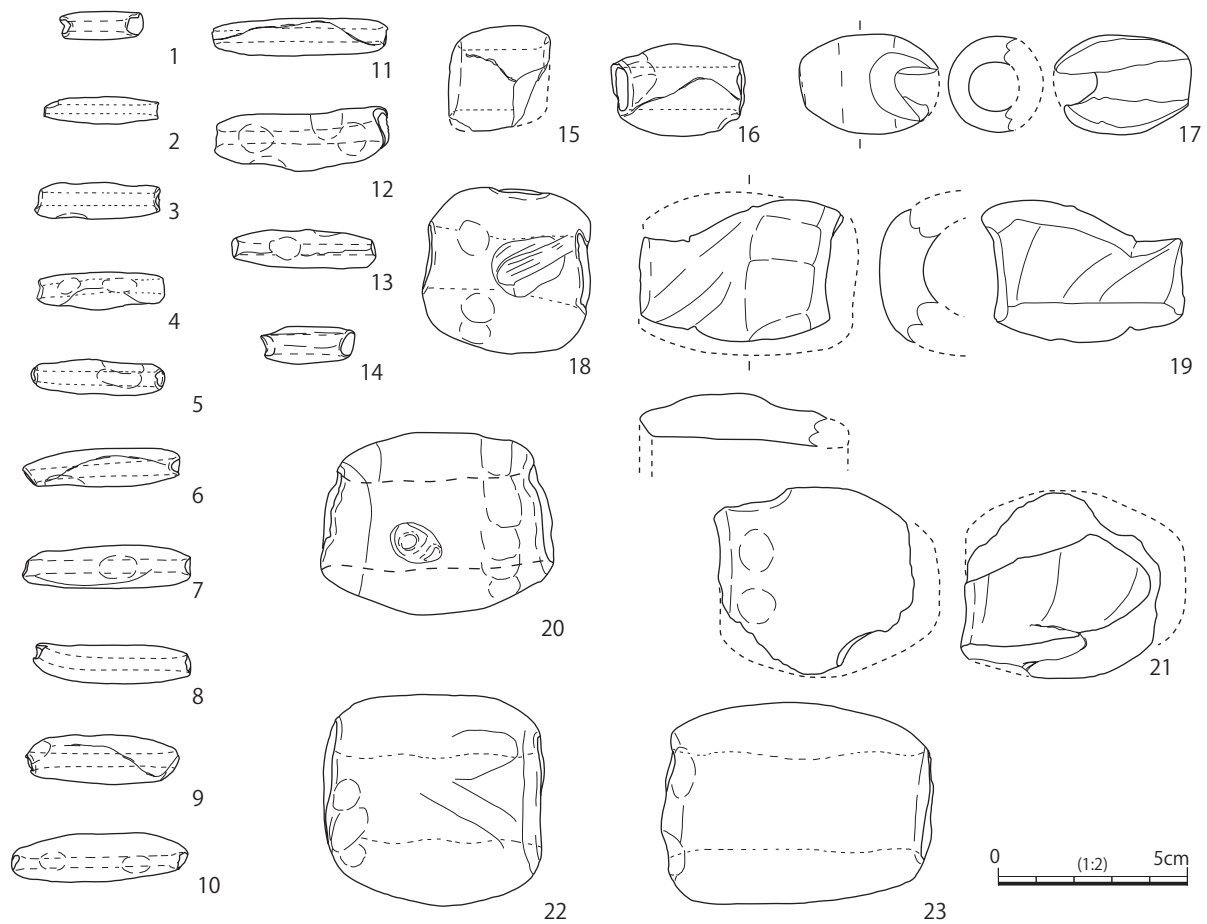


図38 包含層(第2層以上)出土土錘 (S=1/2)

タイプbは粗砂粒はほとんどないが、粘土の粒子が粗く、ざらつくもの。タイプcは粗砂粒を多く含むもの。以上の3タイプは小型に属し、焼成により、黄橙～灰赤色 10YR7/4~2.5YR4/2 と変化多く、中には器表が溶融して発泡しているものもある。タイプdも小型に見られる胎土だが、他とは一線を画す胎土で、砂粒は目立たないがざらつき、灰黄色 2.5Y7/2 ほどの色で一群をなす。

後は中型・大型に見られる胎土で、主に色で違いがでる。タイプeは橙色 7.5YR7/6~5YR6/6 で大粒の赤色粒が目立つ。タイプfはにぶい黄橙色～浅黄色 10YR7/4~2.5Y7/2 で、タイプdに似る。タイプgは橙～明赤褐色 2.5YR6/6~5/6 と赤味が目立ちざらつくものである。

1) 小型管状土錘

小型は質量 0.86 ~ 7.29g、全長 2.15 ~ 4.68 cm、最大径 0.77 ~ 1.51 cmの範囲に分布する。孔最小径は 5 ~ 2 mmの範囲内で 3 mm前後のものが多く、円板に近い形状の粘土を串のような細い棒に巻きつけて成形する。そのため外面に舌状の接合痕を残すものがある。両端はしばむがその形は両手で同時に成形しているようである。両端は片方がやや鋭く伸びる傾向を持つものが多いが、これは棒状の芯を引き抜く際に粘土を引きずるためようだ。引き抜く時の圧力で孔が楕円になるものが多いが、内面は滑らかに丸い。外面に残るユビオサエのほとんどは引き抜く際についたものようである。

質量分布を 0.4g 刻みの棒グラフにすると、二つの山形が現れる (図 39)。これは二つのピーク、2.4 ~ 2.8g と 4.4 ~ 4.8g を典型として、それに近い重さのものが多いという事である。軽い方をピーク1、重い方をピーク2とする。ピークを中心にした群に分けるには二つの山形の間空白域がないが、質量を横軸、全長を縦軸にした相関分布図(図 40)を見れば、4 グラム付近に空白があり、この二つの山はピー

クが左に偏ったものが二つ並んでいると理解できる。つまりピークの典型例から軽い方にはぶれが少なく、重い方にはぶれが大きい事も分かる。

この二つの群は全長では重複する所が大きいので、機能差とは考えにくい。むしろ一つの粘土塊をちぎってから土錘を作るまでの手の癖のようなもの、もしくは手の大きさの違いによるものと推測できる。手の大きさだとすれば、男性と女性、大人と子供の違いなどの可能性が考えられるだろうか。

それら二つの山形に集まる群と比べ、図 40 で見ると、最も軽いもの 10 点が、全長 3.23 cm 以下の長さにとまり、ピーク 1 を典型とする群と離れる。実際に見ても (図 38 - 1・14)、これらは他の小型管状土錘より格段に小さい印象を受け、それが全長に関係するという事は、網の種類の違いなどの機能差に由来する可能性がある。これも少数ながら一つの群として認識できると考える。実際、ピーク 1・2 を典型とするものより、人の手で作るにはやや難しいサイズであろう。ただ、全長 3 cm を越える 4 点は、実際に見れば図 38 - 2 のようにピーク 1 の例と長さは大差なく、質量のみ軽いので、この一群に含めるか疑問な点もある。

かたや最も重い方の 6 g 以上の 5 点は、全長ではピーク 2 を典型とする群の中に完全に重複しており、典型より重い方にばらつきが激しい傾向と合わせて考えれば、一つの群とするには無理があるようだ。

以上の事により、小型管状土錘は質量を主として以下の 3 類型に分類できる。

I 類は 0.8 ~ 2.25g、全長は 3.23 cm を限度とし、3 cm 以下が典型。II 類は 2.29 ~ 4.0g、2.4 ~ 2.8g が典型。III 類は 4.0 ~ 7.6g、4.2 ~ 4.4g が典型。

2) 中型管状土錘

点数的には少ない。明確に大型・小型と異なる点は孔の直径が 1 cm 以上はあるが、指が入らないサイズだという事である。これも一つの分類の目安となろう。外形の両端がすぼまり、ラグビーボール状を成すもの (図 38 - 16・17) と、それより孔径は大きく、外形は短く指輪形のものがある (図 38 - 15)。例数が少なく、質量など他の要素で細分できないので、今はこの形態的特徴で一応前者を I 類、後者を II 類としておこう。

接合痕から見れば小型と同じく、断面円形の棒に粘土を巻きつけて作られている。胎土はタイプ g が多い。質量は 14.17 ~ 16.90g がほとんど。全長は 2.75 ~ 3.60 cm と小型の方が長いものが多いくらいだが、最大径では 2.63 ~ 3.80 cm と小型・大型と分別できる。図 38 - 18 は質量的には大型の部類に属するが (71.01g)、孔の直径では中型に分類でき唯一例外品とするしかないものである。

3) 大型管状土錘

孔が径 2 cm 以上あり、指が入る。穴の内部にもナデが残る。粘土紐を 2 条使用して成形した例が知られる。両端孔周縁部にユビオサエが並ぶ例が多い。胎土はタイプ e・f のみ。質量で 51.87 ~ 97.64g のものと 151.78 ~ 154.05g の 2 類に分別できる。前者を I 類、後者を II 類とする。全長では I 類が 4.39 ~ 6.12 cm、II 類が 5.81 ~ 7.56 cm と重複部分があるが、最大径では、I 類 4.62 ~ 4.80 cm、II 類 5.08 ~ 5.51 cm と重複がない。全長を見て機能差がないとするか、質量の違いを機能差と見るかは難しいところである。

4) 管状土錘型式分化の背景

以上の事から、管状土錘は大きさとしては質量を中心的な基準として分類でき、それに機能差を背景とするであろう全長を加味して考える必要がある事が分かった。

小型土錘では特にだが、質量も軽い、小さな遺物であり、かつ、手捏ねで作り、形態的な精微さを必

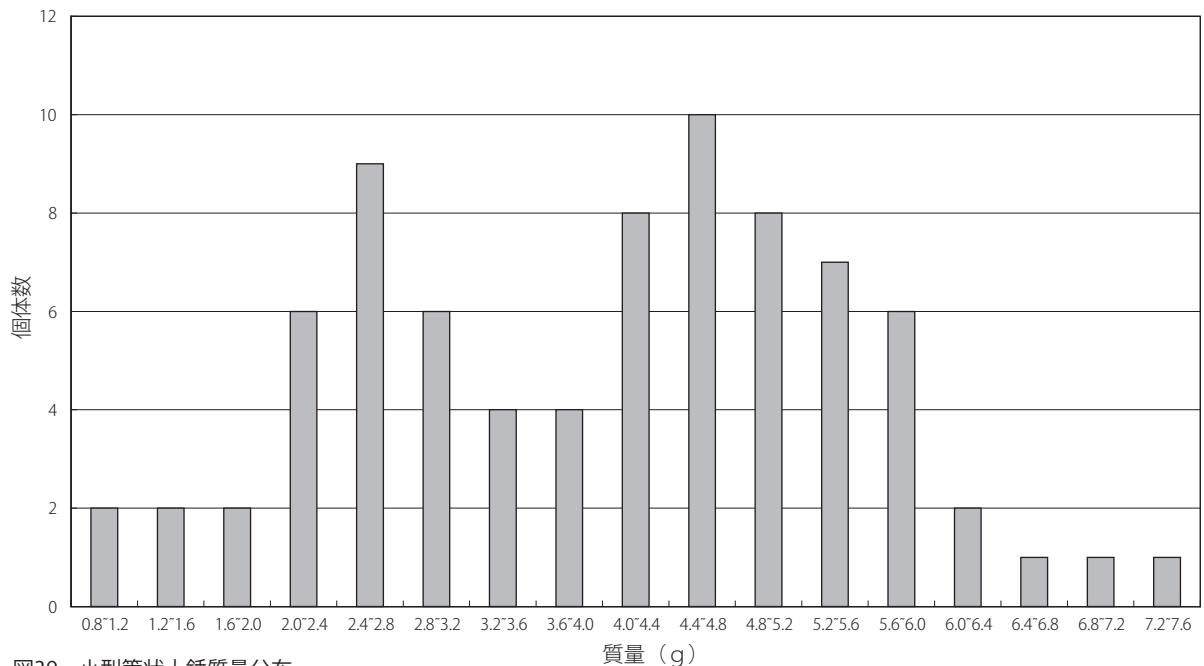


図39 小型管状土錘質量分布

要としないものでもあるので、個体差が大きい。そのため計測数値で分類可能と思える場合でも、実物の見た目や手に取った感覚で比較し実感できるか確認する必要を感じた。

それを踏まえ、大中小に大別でき、小型は3類、中型・大型はそれぞれ2類に分類できた。ただ、中型のみは形態による分類となっている。それでも今回の調査の近世管状土錘に関しては網羅できる分類と言えるだろう。では分類された各型式は何を意味しているのでしょうか。

一般に50g以上の大型管状土錘は曳網漁に、それより軽く平均30gほどのものは刺網に使用されると考えられている。また、小型土錘は投網に使用されると考える人が多い。

それに当てはめると今回分類した大型は曳網漁用に合致する。重さで二つに分類できるのは装着する網の規模に関係するのではないかと推測される。

中型は刺網用としてはやや軽すぎるようにも思われるが、例を探る事が出来る。

古墳時代の土錘の質量分布において、大型管状土錘が集中する一群より一つ下の集中群を成すものに棒状土錘があり、これが刺網用ではないかとの説がある。30～50gのものが多いが、14～16g程度のものもあり、今回分類の中型管状土錘と似た重さもあると言える。この事から中型管状土錘を刺網用と類推する事もできる。

小型管状土錘が全て投網用かは、全長が中型と重複する点では疑問だが、質量が中型と大きく違い、投網という漁法の性格からすれば妥当かもしれない。小型の中でⅡ類とⅢ類は質量による分類だが、上述したように製作上の問題であり、かつ、5g以下での事なので、機能差として使用する網の種類と関係しているとは思えない。ただ、Ⅰ類は投網の中でも特定の網の種類に使用するものであった可能性はある。また、民俗資料では小型管状土錘を刺網に使用する例はあり、投網専用とする事はできない。

胎土から見ると、小型のタイプdと大型のタイプfが同じ粘土を使用している可能性がある他は、小型と中型・大型とは胎土が異なるのが特徴的と言える。大型・中型の管状土錘は和泉地域などのレベルでは他地域産とも思えないが、点数が少ない事もあり、出土付近での生産ではないかもしれない。色の差は含まれる鉱物の構成の差のようであり、赤色粒の有無も含め、粘土採取地点の差と考えられる。

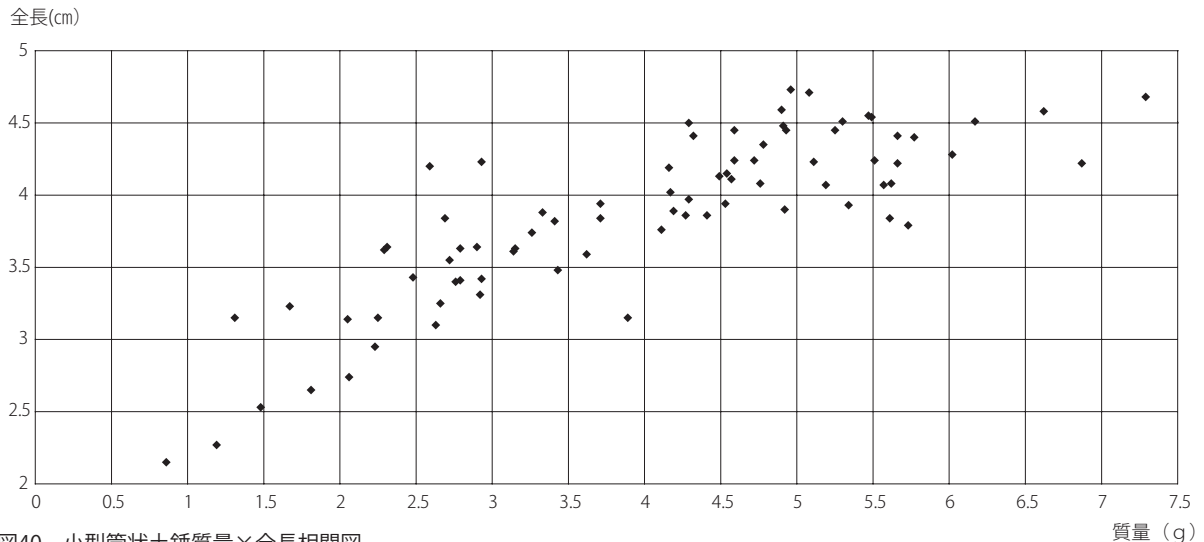


図40 小型管状土錘質量×全長相関図

対して小型の胎土タイプ a～c は粘土粒子の粗細と粗砂の多寡の差で、砂粒の構成に違いはなく、原材料の採取場所の違いがあるようには考えにくい。出土地点付近での生産の可能性があるのはこのグループであろう。

近世の佐野と言え、対馬での網漁の権利を持ち、大規模な曳網漁が主流のような印象を持つが、土錘から見る地場の漁はむしろ少人数や個人でも出来るような刺網・投網が盛んであった可能性もある。蛸壺漁も小規模で可能な漁であるし、和泉地域の近世沿岸漁業の実態を示すものかもしれない。

5) 土錘の耕土出土の意味

これらの土錘は近世の耕土から出土している。しかもそれは中位段丘上であり、河川に近く集落も近くにあった段丘崖付近より、奥まった平坦面上である 1 tr. での出土の方が多い。耕作地の耕土に遺物が入るという事は、下層に集落などの遺構がないかぎり、かなり少ないものはずである。海から離れた位置で、下層の遺構とも関係ない近世の土錘が一定量出土するという事は、感じる以上に奇異な事だとの認識を持つべきではないかと思う。これをいかに考えるべきであろうか。

投網などの小型の網だとしても、河川からも離れた中位段丘上にわざわざ持ち込んだとは考えにくい、水田や水路での漁にあまり網は使用しないであろう。また、完形品が多く、使用痕らしきものは確認できないので、錘として使用した後、何かに転用したとも考えられない。むしろ網に装着する前に耕土に埋没したかのような状況なのである。

そうなると、耕作地の中で土錘を生産したのではないかという疑いが持たれるのである。裏づけはないが、収穫後の水田で、稲藁を燃料として土錘を焼成したとは考えられないであろうか。農閑期の農家が家内手工業的に土錘を生産し、海岸の漁民に供給する体制が近世にできた事が、近世耕土に多数の土錘が含まれている事の背景にあると考えるのが、一番無理がないようにも思える。

もちろん焼成痕など生産を示す遺構・遺物は皆無だが、可能性の一つとして提示しておきたい。

第5章 湊遺跡の調査成果

第1節 基本層序

1、土層の形成過程

調査区は、遺跡の南西半を占める開析谷を横断するような形になっている。また、その開析谷は、上流側では3本の谷に分かれている。南から順に、05-1-3tr.の真南に位置し、現在では地形改変により判然としなくなっている小規模な枝谷と、上流に「矢畑池」という溜池が作られている谷、そして、上流に「七ノ池」という溜池が作られている最も大きな谷である。

時期により変遷しながら、基本的には、現在も各々の谷から伸びる水路化した流路が調査区を横切り、すぐ下流側で合流し、湊川となって海に注いでおり、調査区内には各時期に3本の流路が見られる。

開析谷の基底部は確認できていないが、T.P.+4m以下の深さの2ヶ所で、他とは全く違う良く締まった、水平に近い堆積構造を持つ突出した部分を確認している。3tr.の北西壁断面図の31～33と、05-1-3tr.北西壁断面図の41～45(図42)である。

これらが、開析作用に削り残された段丘構成層なのか、縄文海進時に海水が谷に進入して形成された海成層かは確認できなかったが、この2ヶ所の削り残された高まりによって、3本の谷筋が分けられていた時期があったと考えられ、それが今回の調査で確認された、開析谷内の最も古い形である。

開析谷の両側には段丘崖が存在するが、南西側は上町東遺跡が立地する中位段丘の段丘崖であり、それは上町東遺跡05-1-4tr.で確認された。現地形でも4mほどの比高差を持つ崖となっている。

北東側の段丘崖は1tr.の北東寄りの部分で確認された(図41、1tr.北西壁断面8・18・57左辺)。この遺跡北東半を占める佐野川左岸の微高地は、今までその性格が判然とせず、資料により評価が異なっていたが、構成層に含まれる礫が南西側の中位段丘のものより風化度が弱い事、平坦面が南西の中位段丘よりも低く、佐野川対岸に広がる低位段丘とほぼ同じである事、1tr.北西壁断面の8の層より、AT火山灰と思われる火山ガラスを検出した事などにより、低位段丘である事が確定できた。現地形では1m強の段差を成すにすぎない。低位段丘上の堆積は後節で開析谷内とは別の基本層序を述べる。

二つの段丘崖に挟まれた開析谷の中では、先述の、削り残された締りの良い層から層的に直上の層としては、土壌化の痕跡のない砂礫層の重なりが広がっているものと思われる。これを第6層とした(05-1-3tr.北西壁8～10・50～52など)。

その後、小規模なシュートバーが形成される段階になる。砂礫層を芯としてその両裾に細砂～シルト層を持つシュートバーを主とした層の集まりを第5層とした。1tr.から2tr.の北東半にかけての北東側と、05-1-3tr.にあたる南西側に見られる。シュートバーが小規模な微高地となり、その間に小規模な後背湿地がある、沖積平野のミニチュアのような地形環境が形成されたと思われる。

南西側の05-1-3tr.のシュートバーの方が粒子も粗く、また、形成過程も追いやすい。まず、3tr.との境にかかりながらシュートバー1(05-1-3tr.北西壁断面5・6・7、3tr.北西壁断面8)が形成される。シュートバー2(図43、05-1-3tr.北東壁断面6～8)としたものは本来は流路を埋積したもので、その流路はシュートバー2から後背湿地1にかけて蛇行して流れていたようである(05-1-3tr.北西壁断面25)。その蛇行部分から破堤してシュートバー3(05-1-3tr.北西壁断面34・

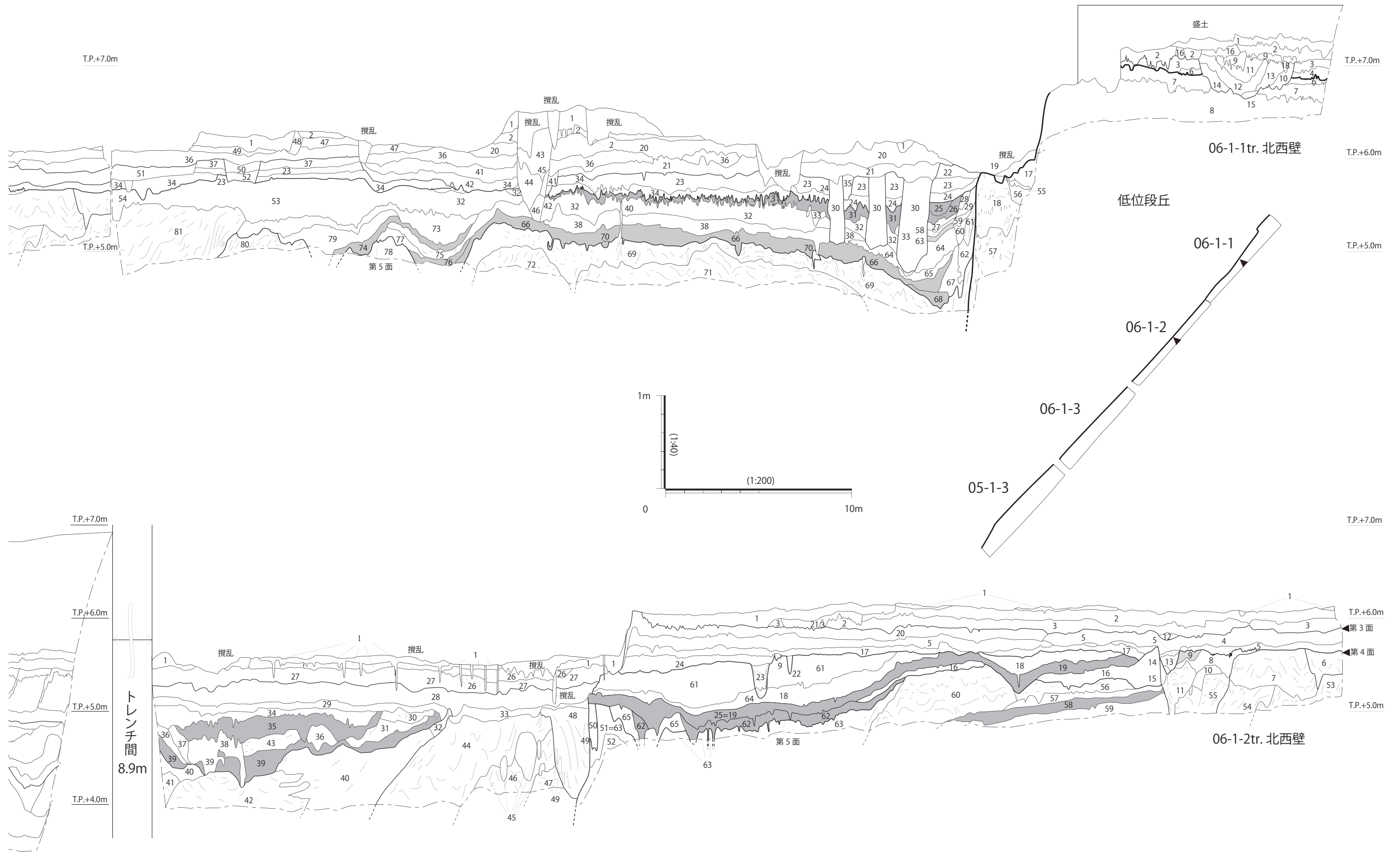


図41 湊遺跡 トレンチ北西壁断面(その1)

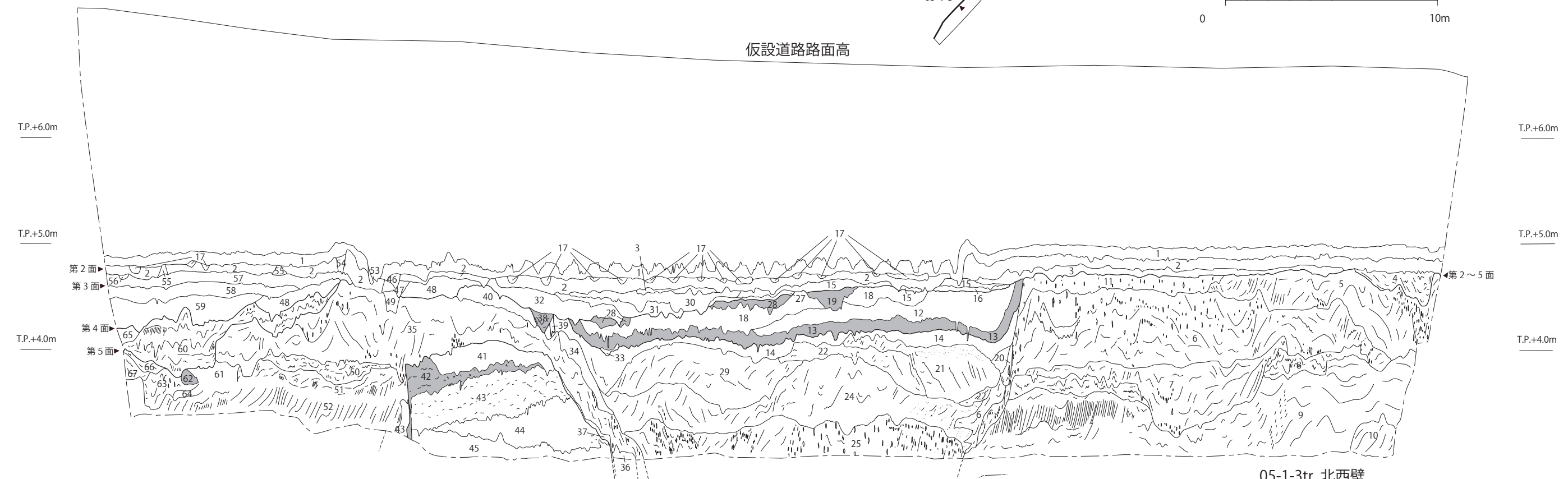
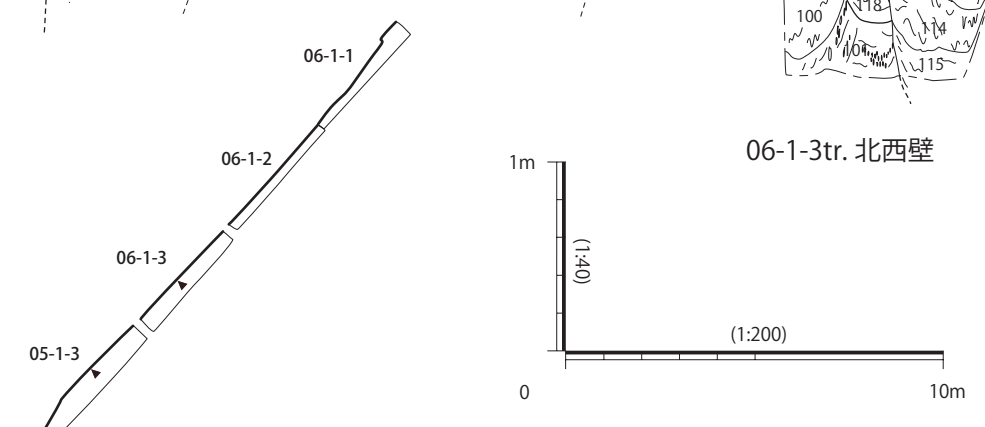
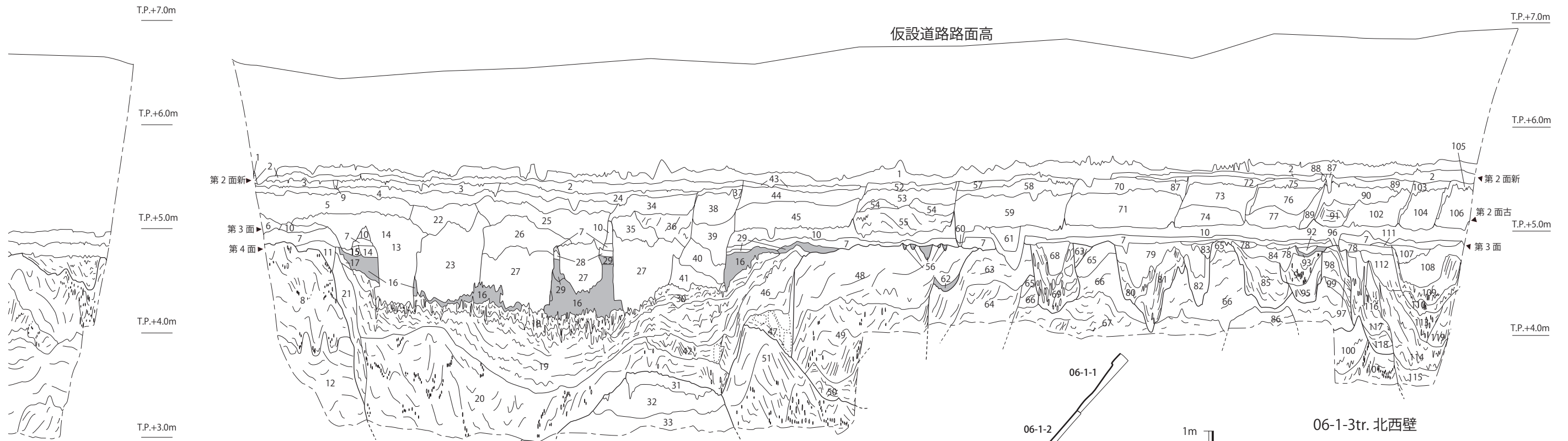


図42 湊遺跡 トレンチ北西壁断面(その2)

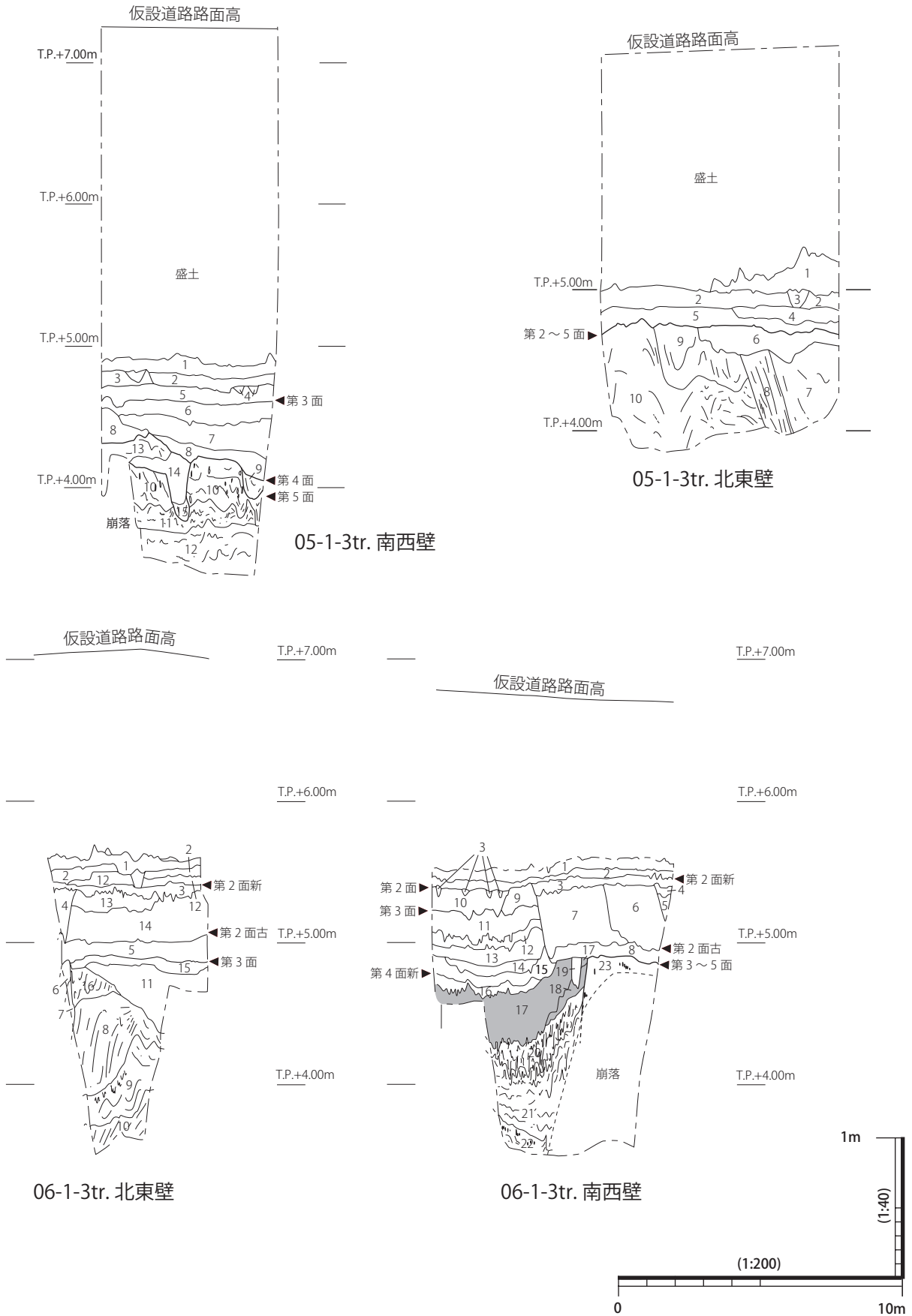


図43 湊遺跡 トレンチ断面図

湊遺跡トレンチ壁断面 (図41・42)土色・土質①

1 tr.北西壁	
1	黒褐色2.5Y3/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂あり、小礫若干あり。現代耕土。第0層
2	灰～灰オリーブ色7.5Y4/1・5/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫・3の小ブロック若干あり。第1層。
3	黄褐～明黄褐色2.5Y5/6・6/6粘質土、シルト～細砂主体、粗砂・Mn粒若干あり。低位段丘上第2層
4	黄灰～黄褐色2.5Y5/1・5/3細砂～粗砂、シルト若干あり、斑状Feあり、Mn斑状にわずかにあり、5を攪拌したもの、旧耕土か。低位段丘上第3層。
5	暗黄褐色2.5Y5/2細砂～小礫、ラミナあり、Mn斑あり、Fe若干あり。洪水砂。
6	明黄褐色2.5Y6/6・6/8シルト、上部細砂～粗砂の降下あり、Feあり、Mn粒わずかにあり。低位段丘構成層最上層。この層よりは非常にしまり良く多数のクラックが見られる。低位段丘上第4層。
7	灰色7.5Y4/1粘質土、シルト主体、細砂～中砂若干あり、Mn・管状Feあり。古土壌か。低位段丘上第5層。
8	黄褐色2.5Y5/3・5/4粘質土、シルト主体、細砂あり、中砂わずかにあり、Fe・Mn粒あり。この層中のクラックよりAT火山灰検出、7より降下したものが低位段丘上第6層。
9	オリーブ～灰色5Y5/4・5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫若干あり、斑状Fe・Mn粒あり。耕土か。
10	灰色5Y4/1粘質土、シルト～細砂主体、粗砂わずかにあり、部分的にFeあり、Mn粒多し。
11	灰色5Y5/1シルト内に12・13のブロック。人為的埋土か。
12	黄褐～暗黄褐色2.5Y5/3・4/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂わずかにあり、Mn粒あり。
13	暗黄灰～黄褐色2.5Y4/2・5/4砂質土、細砂主体、粗砂～極粗砂多し、シルトあり、Mnあり、Fe若干あり。
14	暗黄灰～にぶい黄色2.5Y4/2・6/3粘質土、シルト主体、粗砂部分的に多し、中砂～細砂・Mn粒若干あり。
15	黄灰色2.5Y6/1細砂～極細砂、粗砂若干あり、Mnあり、Fe若干あり、ラミナあり。溝内流水堆積。
16	灰オリーブ～暗オリーブ色5Y5/2・4/3砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂・Mnあり。第1層系畦畔。
17	明黄褐色10YR6/8シルト～極細砂、Mn斑・Feあり、クラックあり、非常に良くしまる。低位段丘構成層。
18	褐色10YR4/6・4/4粗砂～中礫、Mn・Feあり、しまりよし、ラミナあり。下位段丘構成層。
19	黄灰色2.5Y6/1細砂～中砂、ラミナあり。第1～2面相当溝埋土?
20	黄褐～暗黄褐色2.5Y5/4・5/2砂質土、細砂主体、中砂～粗砂・シルトあり、Feあり、Mn粒あり。第2層。
21	にぶい黄褐～灰黄褐色10YR5/3・5/2砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂・Mn粒あり。第2層。
22	灰黄褐色10YR5/2・4/2粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～小礫多し、黄褐色10YR5/6シルトのブロックあり、Fe・Mn粒あり。第3層。
23	にぶい黄褐色10YR5/3・5/4粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～小礫あり、灰黄褐色10YR4/2シルトのブロック若干あり、Feあり、Mn若干あり。第3層。
24	灰黄褐10YR4/2粘質土、シルト主体、粗砂～小礫あり、Mn多し。31を攪拌した耕土か。第3層。
25	黒褐色10YR3/1粘質土、シルト主体、粗砂あり、小礫～中礫わずかにあり、黄褐色2.5Y5/4シルトのブロックわずかにあり。第4層第1黒色層。
26	黒～暗灰色N2/0・3/0粘質土、シルト主体、粗砂あり、炭化物若干あり。第4層第1黒色層。
27	灰色5Y4/1シルト、細砂～中砂若干あり、炭化物若干あり、しまり悪し。第4層。
28	灰色5Y5/1粘質土、シルト主体、中砂～粗砂若干あり、斑状Feあり。段丘崖斜面堆積。
29	灰色5Y5/1粘質土、シルト～細砂主体、粗砂あり、管状Feあり。段丘崖斜面堆積。
30	「黄灰色2.5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり」内に23・24・31・32のブロックあり。ブロックは下方は下位の層の、上方は上位の層のものが多く、分層はできない。他と比べ32(精良な黄褐色シルト)のブロックが少ない。第3面切り込み粘土採掘土坑埋め戻し土か。
31	暗灰色N3/0シルト～極細シルト、粗砂の降下わずかにあり、斑状Feあり、コンポリュートラミナあり、下層をフレーム上に巻き上げ、上層も巻き込む。地震痕跡か。第4層第1黒色層。
32	黄褐～褐灰色10YR5/6・5/1シルト、Feあり。第4層。
33	灰色5Y5/1シルト、斑状Feあり。第4層。
34	31内に32のブロック。第3層形成時整地土か。
35	黄灰色2.5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、Mn粒あり。第3面遺構埋土。
36	黄褐～暗黄褐色2.5Y5/4・5/2砂質土、細砂主体、粗砂～中砂・シルトあり、小礫わずかにあり、Fe上部にあり、Mn若干あり。第2層。
37	黄褐色2.5Y5/4・5/3粘質土、シルト～細砂主体、中砂あり、粗砂わずかにあり、Fe・Mn若干あり。第3層。
38	オリーブ灰～灰色2.5GY5/1・N5/0シルト、炭化物若干あり、上部に斑状Feあり。第4層。
39	欠番
40	灰色N6/0粗砂～中砂、垂直に近いラミナあり。地震痕跡、噴砂。
41	黄褐色2.5Y5/4砂質土、細砂～シルト主体、中砂あり、粗砂わずかにあり、Mn若干あり。第2層系耕土か。
42	黄灰～暗黄褐色2.5Y5/1・5/2砂質土、細砂～シルト主体、中砂若干あり、粗砂わずかにあり、Mn斑若干あり。第3面落込み埋土、第2層系耕土か。
43	「黄灰色2.5Y5/1細砂～中砂」内に1・2・20・36のブロック(径20～2cm)・中礫あり。
44	「灰色5Y5/1中砂～粗砂、小礫～中礫あり」内にブロック(径10～3cm)若干あり。井戸埋土?(第0面)。
45	21・23・41・42のブロック。井戸埋土?
46	「灰色N4/0シルト～細砂」内に「オリーブ灰色2.5GY5/1シルト」のブロック多くあり。井戸埋土?
47	黄灰2.5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂あり、管状Fe多し、Mn粒あり。第1層。
48	黄褐～黄灰色2.5Y5/3・5/1砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂あり、Fe・Mn若干あり。第1層畦畔。
49	明黄褐～暗黄褐色2.5Y6/6・5/2粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂若干あり。第0層の鋤床か。
50	黄灰色2.5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、中砂あり、粗砂若干あり、Mn粒・斑状Fe若干あり。
51	暗青灰～オリーブ灰色10BG4/1・5GY5/1粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～中砂・斑状Feあり。第3層。
52	50内に黄褐色2.5Y5/4シルトの小ブロックあり。第3面遺構埋土。
53	黄褐～明黄褐色2.5Y5/6・6/6細砂～シルト、Fe多し、管状Fe・Mn粒あり、ラミナなし。第4層。
54	51・34のブロック。51耕土時床面遺構。
55	褐色10YR4/6・5/6中礫～細砂、風化礫・Fe多し。低位段丘構成層。
56	質・色とも17に同じ。
57	黄褐～褐灰色10YR5/6・5/1中礫～小礫(風化礫)間に、粗砂～シルトあり、しまりよし。低位段丘構成層。
58	灰色10Y6/1シルト、炭化物ラミナ状に入る。第4層。
59	灰オリーブ色7.5Y5/2シルト、Fe多い部分は黄褐色10YR5/6。崖錐堆積層。
60	灰色5Y4/1・5/1粘質土、シルト主体、粗砂あり、炭化物若干あり、管状Feあり。崖錐堆積層。
61	黄褐色2.5Y5/6粘質土、シルト主体、粗砂～小礫あり、Fe多し。崖錐堆積層。
62	「青灰色5BG6/1粘質土、粗砂あり」のブロック間に暗灰色N3/0シルトあり。第4層第3黒色層相当。
63	灰～暗灰色N5/0・3/0シルト、ラミナ状の炭化物あり。第4層第2黒色層。

湊遺跡トレンチ壁断面(図41・42)土色・土質②

64	灰色10Y6/1シルト、極細砂若干含む、炭化物わずかにあり、上部粘土の降下あり。第4層。
65	灰色7.5Y4/1シルト、植物遺体あり。
66	灰～暗灰色7.5Y4/1N3/0シルト、植物遺体多し、下部細砂～中砂含む、上部粘土降下。第4層第3黒色層。
67	灰色N4/0粘質土、シルト～極細砂主体、粗砂～極粗砂多し、炭化物若干あり。第4層第3黒色層相当。
68	灰色N5/0粘質土、シルト主体、粗砂～細砂あり、炭化物わずかにあり。第4層第3黒色層。
69	青灰色5B6/1(Feある部分は黄褐色10YR5/8)中砂、粗砂～極粗砂・細砂あり、ラミナあり。第5層。
70	木根痕、木質残りやや攪乱気味、66が土壌の時の植生か。
71	灰色10Y6/1(Feある部分は黄褐色10YR5/8)粗砂～中礫、ラミナあり、右側粗粒、左側細粒、第5層シュートバーの芯。
72	青灰色5B5/1粗砂～小礫、ラミナあり。第5層シュートバーの芯。
73	黄褐色2.5Y5/6 ⁵ /4シルト～細砂、Feあり、ラミナ無し。第4層。
74	黄灰～オリブ褐色2.5Y4/1 ⁴ /3シルト、極細砂・斑状Fe・Mnあり、炭化物わずか、第4層第2黒色層。
75	黄褐色～灰色2.5Y5/4 ¹ 10Y5/1シルト～極細砂、上部Feあり、ラミナ部分的にあり、第4層。
76	灰色N5/0シルト～極細砂。66の二次堆積。
77	明黄褐～黄灰色2.5Y6/6 ⁶ /1細砂～シルト、斑状Feあり、ラミナなし。第4層。
78	青灰色5B5/1細砂～中砂。第5層。
79	オリブ黄～灰色7.5Y6/3 ⁶ /1細砂～粗砂、斑状Fe若干あり、ラミナ無し。第4層。
80	灰オリブ色5Y5/3中礫～中砂、互層状のラミナあり、Fe・Mnわずかにあり。第5層シュートバーの芯。
81	黄褐～にぶい黄色2.5Y5/3 ⁶ /3小礫～粗砂、Fe・Mn若干あり、ラミナあり。第4層相当の新しいシュートバーの芯。第2黒色層形成以後の破堤堆積。
2tr. 北西壁	
1	灰色5Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂若干あり。第1層。
2	灰オリブ色5Y5/3砂質土、細砂～シルト主体、粗砂・オリブ色5Y5/4シルトの小ブロックあり。第2層。
3	灰オリブ色5Y5/2砂質土、細砂～シルト主体、極粗砂～中砂あり、Mn粒若干あり。第2層。
4	灰～黄褐色5Y5/1 ² 2.5Y5/4砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂若干あり、斑状Feあり。第3層。
5	「灰色5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり」内に「黄褐色2.5Y5/4シルト～細砂、Feあり」のブロックあり。第3層。
6	灰色5Y6/1(上部にぶい黄色2.5Y6/4)細砂、中砂～粗砂あり、Mn粒あり、ラミナあり。第4層。
7	灰色5Y5/1中礫～粗砂、ラミナあり。第4層シュートバー芯部。
8	オリブ褐色2.5Y4/6シルト～粘土、Fe多し、Mn粒若干あり、下部砂の巻き上げあり。第4層。
9	上部黄褐色2.5Y5/4、下部黄灰色2.5Y4/1シルト～細砂、上部Feあり、Mn粒あり。第4層第2黒色層相当。
10	黄褐色2.5Y5/6 ⁵ /3中礫～シルト、部分的にFe多し、Mn粒若干あり。第4層シュートバー裾部。
11	灰色5Y5/1粗砂～中砂、ラミナあり、7の二次堆積か。第4層。
12	3と4の攪拌。
13	黄灰色2.5Y6/1シルト～細砂、Mn粒若干あり。第4面遺構埋土。
14	灰色5Y5/1粗砂～中砂。第4面遺構埋土。
15	黄灰色2.5Y5/1シルト、Mn粒あり。
16	灰～灰黄色5Y6/1 ² 2.5Y6/2細砂～中砂、管状Fe若干あり、Mn粒わずかにあり、ラミナ無し。第4層。
17	「黄灰2.5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂若干あり」の径5～10cmのブロック間に砂。第3層。
18	上部にぶい黄色2.5Y6/4、下部灰黄色2.5Y6/2シルト～細砂、上部Fe多し、Mn粒わずかにあり。第4層。
19	暗灰黄～黄灰色2.5Y5/2 ⁴ /1シルト～細砂、Mn粒あり、有機分多し。第4層第2黒色層。
20	黄灰～暗灰黄色2.5Y5/2 ⁵ /1砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂若干あり、斑状Feあり。第3層。
21	1に2・3のブロックと大～中礫。第2面溝埋土。
22	灰黄色2.5Y6/2細砂～シルト、上部Feあり、Mn粒あり。第4面遺構埋土。
23	灰オリブ色5Y6/2粗砂～細砂、ラミナあり。第4面遺構埋土。
24	灰～灰オリブ色5Y5/1 ⁶ /2細砂～シルト、上面黄褐色2.5Y5/4を呈す、Mn粒あり。段差整形盛土か。
25	灰色N4/0シルト、炭化物若干あり、第4層第2黒色層。
26	灰色10Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂あり、小礫若干あり。第2層。
27	灰～黄灰色10Y4/1 ² 2.5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂若干あり、小礫わずかにあり。第2層。
28	灰色10Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫多し、管状Feあり。第3層。
29	灰色10Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫多し。第3層。
30	灰オリブ色7.5Y6/2シルト～極細砂、炭化物のラミナあり。147流路上層。
31	上部灰色5Y6/1、下部灰色N6/0シルト、炭化物あり、灰白色5Y7/2細砂の小ブロックあり。147流路上層。
32	灰色N6/0細砂～シルト、粗砂若干あり、植物遺体あり、ラミナあり。147流路下層。
33	灰色5Y4/1砂質土、44と28の攪拌。147流路上耕地開発時の耕土か。
34	オリブ褐色2.5Y4/4粘質土、シルト主体、細砂～中砂あり、Fe多し、有機分多し。147流路上層。
35	黒褐色10YR3/1シルト～極細砂、上部に管状Fe、有機分多し、炭化物あり、粗砂若干降下。147流路上層。
36	青灰色10BG5/1極細砂。147流路上層。
37	緑灰色5GY6/1 ⁵ /1シルト～細砂、147流路上層。
38	黒～黄灰色2.5Y2/1 ⁴ /1シルト、炭化物非常に多し、植物遺体あり。焼けた立ち木の痕か。
39	灰色7.5Y4/1シルト～中砂、40の小ブロック下半にあり、炭化物わずかにあり。147流路上層。低湿地堆積。
40	灰色N6/0細砂～中砂、ラミナ見えず。147流路下層。
41	青灰色10BG6/1中砂～粗砂、ラミナあり。147流路下層。
42	灰色N6/0粗砂～小礫、ラミナあり。147流路下層。
43	灰オリブ色5Y6/2粗砂、Fe若干あり、ラミナあり。147流路上層。
44	オリブ黄～灰色5Y6/3 ⁵ /1粗砂～中礫、ラミナあり147流路下層。40より前の流路埋積層。
45	黄褐～青灰色2.5Y5/6 ⁵ BG6/1シルト。土礫。46堆積の洪水時に岸辺から崩壊したものか。
46	灰色N5/0粗砂～中礫、45の土礫含む、ラミナあり。147流路下層。洪水的堆積か。
47	緑灰色7.5GY6/1粗砂、ラミナあり。147流路下層。流路平常時の堆積の可能性あり。
48	にぶい赤褐～黄灰色5YR4/4 ² 2.5Y5/1大礫～極粗砂、部分的にFe多し、49の土礫あり。

湊遺跡トレンチ壁断面(図41・42)土色・土質③

49	灰色 5Y4/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂若干あり、植物遺体わずかにあり、土礫、28 に似る。
50	25 と 51 のブロック。立ち木痕か。51 青灰色 5BG6/1 細砂～中砂、ラミナなし。第 5 層。
51	青灰色 5BG6/1 細砂～中砂、ラミナなし。第 5 層。
52	灰色 5Y6/1 粗砂～中礫、ラミナあり。第 5 層。
53	にぶい黄～灰白色 2.5Y6/4・5Y7/1 細砂～粗砂、上部 Fe あり、ラミナあり。第 4 層シュートバーか。
54	黄灰色 2.5Y6/1 粗砂～小礫、ラミナあり。第 4 層シュートバー芯部、7 と一体。
55	黄灰色 2.5Y5/1 中砂～小礫、細砂若干あり、ラミナあり。浸蝕痕。
56	黄灰色 2.5Y6/1 粗砂～細砂、小礫若干あり、ラミナわずかに見える。第 5 層。シュートバー二次堆積か。
57	黄褐～灰白色 2.5Y5/6・7/1 シルト～細砂、Fe・Mn 粒あり、第 5 層。60 のシュートバー以前の堆積。
58	灰色 N5/0 粘質土、シルト主体、粗砂～細砂若干あり、部分的に Fe あり。第 5 層内の暗色帯。古土壤。
59	青灰色 10BG6/1 シルト～細砂、粗砂の降下若干あり。第 5 層。
60	灰色 5Y6/1 小礫～粗砂、部分的に Fe あり、ラミナあり。第 5 層シュートバー芯部。
61	灰黄 2.5Y6/2 (上部黄褐色 2.5Y5/4) 細砂、粗砂の降下あり、上部 Fe あり、Mn 粒あり。第 4 層。
62	灰色 7.5Y5/1 シルト～細砂、粒状構造あり、有機分あり。第 4 層第 3 黒色層。
63	灰色 N6/0 中砂、ラミナあり。第 5 層。60 のシュートバーの裾部。
64	「灰オリーブ色 5Y6/2 粗砂～細砂」と「灰オリーブ色 5Y5/2 シルト」の互層状ラミナ、オリーブ黒色 5Y3/1 シルトのブロックあり。第 4 面遺構埋土。
65	「灰色 10Y5/1 シルト、粗砂含む」の間に「青灰色 5BG6/1 シルト～細砂」のブロックあり。第 4 層?
3tr. 北西壁	
1	灰色 7.5Y4/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、小礫若干あり。第 1 層。
2	灰色 7.5Y5/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり。第 1 層。
3	明層褐色 10YR6/8 粘土～シルト・明褐色 7.5YR5/8 シルト・灰白色 2.5Y7/1 シルト～細砂のブロック。第 2 層新、貼り床 (326 流路上層起源、洪水復旧)。
4	「灰色 5Y5/1 砂質土、細砂～シルト主体、中砂あり。(耕土か)・灰オリーブ色 5Y5/2 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり (第 3 層系耕土か)、オリーブ褐色 2.5Y4/3 シルト・明黄褐色 10YR6/8 シルト。」のブロック。第 2 層新、耕土系盛土 (洪水復旧)。
5	灰黄色 2.5Y6/2 中砂～粗砂内に、褐灰～黄褐色 10YR4/1・2.5Y5/4 シルトのブロックあり、ブロックの中にラミナあり。第 2 層新、洪水砂系盛土 (洪水復旧)。
6	灰～灰黄色 5Y5/1・2.5Y6/2 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり・褐灰～明黄褐色 10YR4/1・2.5Y6/6 シルト・黄灰～案灰黄色 2.5Y4/1・4/2 シルト、のブロックと粗砂～小礫。第 2 層新盛土 (洪水復旧)。
7	黄褐色 2.5Y5/3 砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂あり、Fe 若干あり。第 3 層。
8	灰オリーブ色 5Y5/2 (上部黄褐色 2.5Y5/6) 粗砂～中礫、ラミナあり。第 5 層 05-1-3tr. シュートバー 1。
9	2 に 3 のブロック。第 2 面新遺構埋土。
10	灰色 5Y5/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂若干あり、斑状 Fe あり。第 2 層古、耕土。
11	灰オリーブ色 5Y5/2 粗砂～小礫内に、黄褐色 2.5Y5/4 シルト～細砂・オリーブ褐色 2.5Y4/4 シルト、のブロックあり。8 上面の整地土か。
12	青灰色 10BG6/1 細砂～中砂内に、粗砂～中礫の互層状ラミナ、上部はシルト～細砂の互層状ラミナ。
13	明黄褐～青灰色 10YR6/8・5B6/1 中砂～細砂内に、灰黄褐色 10YR5/2 シルト・緑灰色 7.5GY6/1 シルト～細砂・灰色 10Y4/1 シルトのブロックあり。第 2 層新、洪水砂系大型土坑埋土。
14	15 のブロック土と粗砂。第 4 面新の遺構埋土か。
15	黄褐色 2.5Y5/6・5/4 粘質土、シルト主体、細砂～粗砂あり、Fe 多し。326 流路上層 (上面第 4 面新)。
16	オリーブ黒色 10Y3/1 (上部灰色 10Y4/1) 粘土～シルト、粗砂あり、下部下層巻き上げ。326 流路上層。
17	にぶい黄～黄褐色 2.5Y6/4・5/3 シルト～細砂、Fe あり、斜面堆積。8 の上部から二次堆積か。
18	にぶい黄褐色 10YR5/3 シルト～極細シルトと植物遺体、上面巻き上がり、下面沈み込む、層内コンポリュートラミナ、地震痕跡か、加圧痕か。326 流路中層。
19	暗褐色 10YR5/4 シルト～極細シルトと植物遺体内に、灰白色 2.5Y7/1 細砂ラミナ状に入る、ラミナあり、上部のラミナ 20 に近いほど凹凸激しい。326 流路中層。
20	灰色 5Y5/1 中礫～粗砂、ラミナあり。326 流路下層。
21	オリーブ黒色 5Y3/1 シルト内に青灰色 10BG6/1 細砂のラミナと植物遺体。326 流路下層。
22	オリーブ黄色 5Y6/3 中砂～細砂内に、灰色 5Y6/1 細砂・暗灰黄色 2.5Y4/2 シルトのブロックあり。第 2 層新、洪水砂系盛土 (洪水復旧)。
23	緑灰色 5G5/1 細砂～シルト・青灰色 10BG6/1 シルト・灰色 N4/0 シルト～細砂、ラミナあり、のブロック。第 2 層新、洪水砂系大型土坑埋土。
24	3 内のブロックに 16 のブロック加わる。第 2 層新、貼り床 (326 流路上層起源、洪水復旧)。
25	「にぶい黄～黄灰色 2.5Y6/3・5/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、網目状 Fe あり」のブロックと粗砂～中礫。第 2 層新、洪水復旧盛土。
26	青灰～緑灰色 10BG6/1・5G6/1 細砂～シルト・浅黄色 7.5Y7/3 シルト・灰色 5Y5/1 細砂のブロック。第 2 層新、洪水砂系大型土坑埋土。
27	26 内のブロックにわずかに 16 のブロック加わる、しまり悪し。第 2 層新、洪水砂系大型土坑埋土。
28	黄褐色 2.5Y5/6 粘質土、シルト主体、細砂～粗砂若干あり、Fe 多し。326 流路上層。
29	上部灰オリーブ色 7.5Y4/2、下部灰色 7.5Y4/1 粘質土、シルト主体、粗砂～細砂あり。326 流路上層。
30	灰黄褐色 10YR4/2 シルト・暗灰黄色 2.5Y5/2 シルト～細砂・灰白色 5Y7/1 細砂～中砂、の互層状ラミナ。326 流路中層。
31	青灰～緑灰色 5PB5/1・7.5GY5/1 粘土～シルト、粗砂あり、しまり良し。縄文海進時? 段丘構成層?
32	緑灰色 10G5/1 砂質土、細砂～粗砂主体、シルトあり、褐灰色 10YR6/1 粘土のブロックあり、しまり良し。縄文海進時? 段丘構成層?
33	青灰色 10BG5/1 中礫～粗砂、風化礫あり、しまり良し。縄文海進時? 段丘構成層?
34	4 に 28・29・16 のブロック若干加わる。第 2 層新、耕土系盛土 (洪水復旧)。
35	「明黄褐色 2.5Y6/6 中砂～粗砂、Fe あり」内に、「灰色 5Y5/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり (第 2 層古か)・暗青灰色 5B4/1 シルト～細砂、炭化物あり・16」のブロックあり。第 2 層新、洪水復旧盛土。
36	「黄褐色 10YR5/6 粗砂～小礫、Fe あり」内に「浅黄色 5Y7/4 細砂～シルト・灰色 5Y6/1 砂質土 (第 2 層古か)」のブロック若干あり、ラミナあり。第 2 層新、洪水砂系盛土。
37	16・29・30 のブロック。第 2 層新、洪水復旧貼り床 (326 流路上層起源)。
38	34 とほぼ同じブロック土、29 のブロックやや多し。第 2 層新、洪水復旧耕土系盛土。
39	「にぶい黄色 2.5Y6/3 粗砂～中礫」内に、40 と同じブロックあり、しまり悪し。第 2 層新、大型土坑埋土。

湊遺跡トレンチ壁断面(図41・42)土色・土質④

40	黄色 5Y7/6 細砂～シルト・7・10・29 (第3層～326 流路上層起源) のブロック。第2層新、大型土坑埋土。
41	灰オリーブ色 5Y6/2 粗砂～小礫、ラミナ無し、下部に 16・30 のブロックあり。第2層新、大型土坑埋土。
42	にぶい黄褐色 10YR5/4 シルト・オリーブ灰色 2.5GY6/1 細砂・植物遺体の互層状ラミナ。326 流路中層。
43	16・29・30 のブロック。第2層新、洪水復旧貼り床 (326 流路上層起源)。
44	「灰色 5Y5/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり (第2層古?)」内に「オリーブ色 5Y5/6 粘質土、シルト主体、粗砂あり (第3層?)」灰色 10Y5/1 シルト (洪水終息時) のブロック。第2層新、洪水復旧耕土系盛土。
45	浅黄色 5Y7/4 細砂～中砂内に、「灰白色 5Y7/2 細砂～シルト・灰色 10Y5/1 シルト」のブロックあり、ブロック内にラミナあり。第2層新、洪水砂系盛土。46 灰白色 7.5Y7/2 細砂と、「青灰色 5BG6/1 シルト～極細砂、植物遺体あり」の互層状ラミナ。326 流路中層。
46	灰白色 7.5Y7/2 細砂と、「青灰色 5BG6/1 シルト～極細砂、植物遺体あり」の互層状ラミナ。326 流路中層。
47	48 の大ブロック (点線部) と、その下に植物遺体と灰白色 10Y7/1 細砂のラミナ。326 流路肩部崩落土。
48	灰白～明緑灰色 7.5Y7/5・10GY7/1 細砂～中砂内に、灰色 10Y5/1 粗砂のラミナあり、上部は粘土降下し、灰色 5Y6/1 を呈する。第4面切り込みだが、326 流路より古い流路の堆積物。
49	青灰色 5B6/1 粗砂～中礫、ラミナあり。48 と同じく、326 流路より古い流路を埋積した堆積。
50	灰色 N6/0 細砂～中砂と植物遺体の互層状ラミナ。48・49 で埋積した流路の通常時の流水堆積か。
51	灰色 N6/0 粗砂～大礫、ラミナあり。第5層以下、330 流路埋積層、101 と同一層か。
52	明黄褐～浅黄褐色 10YR7/6・8/3 シルトと、「灰色 5Y5/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり」のブロック。第2層新、洪水復旧貼り床。
53	44 に似るが、ややブロック少ない。第2層新、洪水復旧耕土系盛土。
54	明黄褐～浅黄色 2.5Y6/4・7/4 細砂～シルト・緑灰色 10GY6/1 シルト・オリーブ黄色 5Y6/4 細砂のブロック。第2層新、洪水復旧洪水砂系盛土。
55	「明黄褐色 2.5Y7/6・6/6 極細砂～中砂、Fe あり」内に、緑灰色 10GY5/1・10 のブロック若干あり、ラミナあり。第2層、洪水復旧洪水砂系盛土、ラミナあるのは流し込んだか。
56	灰色 N4/0 シルト～細砂と 48 のブロック。第4面遺構埋土。
57	明黄褐～浅黄褐色 10YR7/6・8/3 シルトのブロック。第2層新、洪水復旧貼り床。
58	53 に、「にぶい黄色 2.5Y6/4 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂あり」のブロック。第2層新、耕土系盛土。
59	「オリーブ黄色 5Y6/4 細砂～粗砂、Fe あり」内に、「緑灰色 10G5/1・6/1 シルト～細砂・青灰色 5B5/1 シルト・灰色 5Y5/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり」のブロックあり。第2層新、洪水復旧洪水砂系盛土。
60	10 の二次堆積とオリーブ黄色 5Y6/3 細砂～中砂の互層状ラミナ。第2面古畦畔沿い溝埋土。
61	10 とその下半に暗青灰色 10BG4/1 シルトのブロック。第2面古遺構埋土。
62	暗灰色 N3/0 シルト～細砂、炭化物わずかにあり、粒状構造あり、古土壌。
63	灰オリーブ色 7.5Y6/2 粗砂～中砂と、「青灰色 10BG5/1 細砂、炭化物わずかに含む」の互層状ラミナ、上部やや土壌化。第4面切り込みだが 326・329 流路より古い流路 (48～50) の、ポイントバー的堆積か。
64	灰白～灰色 7.5Y7/2・N6/0 中砂～極粗砂、ラミナあり、部分的に植物遺体含む。
65	「青灰色 5BG6/1 細砂～シルト・暗灰色 N3/0 シルト・灰色 10Y5/1 細砂」の小ブロック (直径 5～20 mm)、古土壌か。66 が第4層なら、その上面に形成された土壌の可能性あり。
66	青灰色 10BG6/1 細砂～中砂に、暗灰色 N3/0 細砂～シルト、わずかにラミナ状に入る、ポイントバー的堆積層。これが、3tr で唯一第4層の可能性のある層である。
67	灰色 N5/0 中砂～小礫と、「青灰色 5B5/1 細砂・灰色 10Y5/1 細砂、有機分あり」の互層状ラミナ。
68	暗灰色 N3/0 シルト・青灰色 5BG6/1 細砂・灰色 N5/0 細砂のブロック。第4面古浸蝕痕内人為的埋土。
69	灰オリーブ 5Y4/2 粗砂～小礫内に、「灰色～青灰色 N5/0・10BG6/1 細砂～シルト・暗灰色 N3/0 シルト～粘土」のブロック (土礫か、径 10～20 cm) 多くあり、ラミナあり。第4面古浸蝕痕内土砂流的混濁層か。
70	ほぼ 58 と同質。第2層新、洪水復旧耕土系盛土。
71	明黄褐～にぶい黄色 2.5Y7/6・6/4 細砂～中砂内に、「青灰色 10BG6/1 シルト～細砂・灰色 5Y4/1 シルト・灰白色 5Y7/2 細砂～シルト・10」のブロックあり。第2層新、洪水復旧洪水砂系盛土。
72	明黄褐～浅黄色 2.5Y6/6・7/4 シルトと、黄灰色 2.5Y4/1 シルトのブロック。第2層新、洪水復旧貼り床。
73	70 に似るが、黄灰色 2.5Y4/1 のブロック若干加わる。洪水復旧耕土系盛土。
74	71 と同質。洪水復旧洪水砂系盛土。
75	72 より、黄灰色 2.5Y4/1 のブロック少ない。第2層新、洪水復旧貼り床。
76	73 と同質。洪水復旧耕土系盛土。
77	74 と似るが、部分的に黄褐色 10YR5/6 粗砂～小礫入る。洪水復旧洪水砂系盛土。
78	「黄褐色 2.5Y5/4 シルト・暗灰黄色 2.5Y5/2 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂あり」のブロック。耕地開発時整地土か、上面第4面新。
79	「オリーブ黒色 5Y3/1 シルト・オリーブ黒 5Y3/2 シルト～細砂・灰色 5Y5/1 細砂～中砂」のブロックと小礫～極粗砂多し、全体的には黒色層的。第4面古浸蝕痕内人為的埋土か。
80	オリーブ黒色 5Y3/1 シルトと、灰色 5Y5/1 細砂～中砂の互層状ラミナ。第4面古浸蝕痕内流水堆積。
81	灰オリーブ色 5Y6/2 粗砂～小礫、ラミナあり。第4面古侵蝕痕内流水堆積。
82	オリーブ黄色 5Y6/3 中砂～粗砂内に、オリーブ黒色 5Y3/1 シルトと 66 のブロック。浸蝕痕内人為的埋土。
83	79 と 65 のブロック。整地土か。
84	黄褐～にぶい黄色 2.5Y5/6・6/3 砂質土、粗砂～小礫主体、シルトあり、Fe あり。
85	「灰白色 7.5Y7/2 細砂～中砂・灰白 5Y7/1 粗砂～小礫・灰色 5Y4/1・5/1 細砂～シルト、有機分含む」の互層状ラミナ。第4面古浸蝕痕内流水堆積。
86	浅黄色 5Y7/3 中砂～中礫、ラミナあり。330 流路より上層か。
87	2 内に 75 のブロック若干あり。
88	2 に斑状 Fe。
89	75 と同質。第2層新、洪水復旧貼り床。
90	76 と同質。第2層新、洪水復旧耕土系盛土。
91	黄灰～にぶい褐色 2.5Y6/1・10YR5/4 粗砂～小礫、ラミナ状に細砂あり。第2層新、洪水砂系盛土。
92	にぶい黄色 2.5Y6/4 極粗砂～細砂、Fe あり。第4面古浸蝕痕埋土、土器群 5 包含層。
93	暗灰色 N3/0 粘土。第4面古浸蝕痕埋土。
94	灰オリーブ色 7.5Y6/2 粗砂～中礫。第4面古浸蝕痕埋土。
95	オリーブ黄色 5Y6/3 粗砂～小礫、ラミナあり。第4面古浸蝕痕埋土。

湊遺跡トレンチ壁断面(図41・42)土色・土質⑤

96	オリープ色5Y5/4細砂～シルト、粗砂・小礫多し、Feあり、かなり土壌化。324流路以前、147流路肩部斜面堆積か。
97	浅黄色7.5Y7/3(上部灰色5Y5/1)細砂、上部シルトの降下あり。324流路以前、147流路肩部斜面堆積か。
98	オリープ黄色5Y6/3細砂、Fe若干あり。324流路以前、147流路肩部斜面堆積か。
99	灰オリープ色5Y6/2細砂、Fe若干あり。324流路以前、147流路肩部斜面堆積か。
100	オリープ灰～灰色2.5GY6/1・7.5Y4/1細砂、植物遺体あり、粗砂若干あり。330流路埋土か。
101	灰色5Y6/1中礫～粗砂、ラミナあり。330流路埋積層、51と同一層か。
102	オリープ色5Y5/6シルト・オリープ黒色5Y3/1シルト・緑灰色10GY5/1シルトのブロック。第2層新、洪水復旧洪水砂系盛土。
103	89に比べ、黒色土のブロック多し。第2層新、洪水復旧貼り床。
104	「灰色5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり(第2層古起源か)・黄褐色～灰黄褐色2.5Y5/4・10Y5/2シルト(第3層起源か)」のブロック。第2層新、洪水復旧耕土系盛土。
105	89と同質。第2層新、洪水復旧貼り床。
106	灰色5Y5/1砂質土(第2層古起源か)・オリープ色5Y6/6シルトのブロック。第2層新、洪水復旧盛土。
107	「灰色5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり」のブロックと粗砂～小礫。324流路上面整地土。
108	灰色5Y6/1細砂～小礫内に、「灰オリープ色5Y6/2細砂・灰色5Y5/1細砂～シルト・青灰色5B5/1シルト」のブロックあり。324流路人為的埋土か。
109	「オリープ灰色5GY5/1シルト～細砂・褐灰色10YR4/1シルト、植物遺体あり」の互層状ラミナ。324流路上層、中世に水路化した時の通常時の流水堆積か。
110	灰色5Y6/1細砂～中砂内に、褐灰色10YR4/1シルトがラミナ状に入る。109に同じ。
111	7と78のブロック。324流路が中世段階、水路として機能していた時の肩部(畦畔の痕跡か)。
112	灰オリープ色5Y5/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫あり、下部にラミナ。324流路上層、人為的埋土か(中世段階に水路化する時の)。
113	「褐灰色10YR4/1シルト・オリープ灰色2.5GY5/1細砂～シルト」のブロックと植物遺体あり、ラミナ状の細砂あり、土砂流的堆積か。324流路上層、古代。
114	オリープ灰色2.5GY6/1細砂～粗砂と植物遺体の互層状ラミナ。324流路上層、古代。
115	灰色N6/0粗砂～中礫、ラミナあり。324流路上層、古代。
116	灰色5Y6/1粗砂～中礫。324流路が上層の段階で、肩部に生えた木の根の痕跡か。
117	「オリープ黄色5Y6/3中砂～細砂・青灰色5BG6/1細砂・灰色7.5Y4/1シルト・植物遺体」のラミナ、上部のラミナはコンポリュート。324流路下層、庄内期。
118	小礫～極粗砂、ラミナあり。324流路下層、庄内期。
119	灰オリープ色5Y6/2粗砂、ラミナあり。324流路上層、古代。

05-1-3tr. 北西壁

1	暗灰黄色2.5Y4/2粘質土、シルト～極細砂主体、粗砂あり、炭化物あり。第0層。
2	灰色5Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～極粗砂あり、小礫若干あり、管状Feあり。第1層。
3	灰色5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、小礫(風化礫)若干あり、管状Feあり。第1層。
4	灰白色7.5Y7/1中砂～細砂、ラミナあり、ラミナ状に粗砂～極粗砂あり、上部に小礫若干あり。浸蝕痕か。
5	黄褐色10YR5/6粗砂～小礫、部分的に中礫多し、大礫若干あり、上半Feあり。第5層、シュートバー1。
6	灰色5Y6/1(上部黄褐色10YR5/6)中礫～粗砂、大礫若干あり、ラミナあり。第5層、シュートバー1。
7	灰白色10Y7/2小礫～粗砂内に、ラミナ状に細砂、ラミナあり。第5層、シュートバー1(下方浸蝕部分)。
8	青灰色5B6/1シルト～粘土と、青灰色10BG6/1中砂～細砂の互層状ラミナ。第6層。
9	青灰色10BG6/1中砂～細砂、ラミナ状に粗砂、灰色N4/0シルトの細かいラミナ部分的にあり。第6層
10	青灰色5B5/1細砂と、青灰色10BG6/1粗砂と、細かい植物遺体の互層状ラミナ。第6層。
11	にぶい黄褐色10YR5/4粗砂～中礫、シルト若干あり。第5層シュートバー1削り後の上部土壌化部分。
12	灰黄色2.5Y7/2(上部明黄褐色2.5Y6/6)細砂～極細砂、下部は13を巻き上げたのかやや暗色、管状Feあり、上端Fe多くMn粒あり。第4層、第5面後背湿地1の第2・第3黒色層の間層、止水堆積。
13	オリープ黒～灰色7.5Y3/1・N4/0シルト、炭化物(径1～5mm)あり、粗砂わずかにあり、管状Feあり、Caの結核あり。第4層、第5面後背湿地1内第3黒色層、止水堆積。
14	緑灰色10CG6/1シルト～粘土、直下の砂礫層由来の粗砂～極粗砂あり、炭化物わずかにあり、管状Feあり。第5層、シュートバー6堆積終息時の形成。
15	16のブロック(径3～1cm)の間に、灰色5Y5/1細砂～シルトと粗砂～小礫。第2層、整地土か。
16	黄褐色2.5Y5/6シルト、Feあり、管状Feあり、第2層の元となる止水堆積か。
17	灰色5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、管状Feあり、部分的に明黄褐色2.5Y6/6シルトのブロックあり。第0層耕土時(第1面)鋤溝埋土。
18	灰白色～灰オリープ5Y7/2・6/2(上部明黄褐色2.5Y6/6)細砂～シルト、管状Feあり、ラミナなし。第4層、第5面後背湿地1内、第1・第2黒色層の間層、止水堆積。
19	暗灰色N3/0極細砂～シルト、管状Feあり、上部Fe多し。第4層、第5面後背湿地1内第1黒色層。
20	青灰色10BG6/1シルト～細砂、級化構造あり、6由来の極粗砂～中礫上部に若干あり、下部にラミナあり。第5層、シュートバー6裾部。
21	黄褐色2.5Y5/6極粗砂～粗砂、上部に小礫あり、Feあり、ラミナあり。第5層、シュートバー6芯部。
22	青灰色5B6/1中砂～細砂、粗砂若干あり、ラミナあり。第5層、シュートバー6芯部。
23	明オリープ灰色、2.5GY7/1細砂～中砂、ラミナあり、24と同時期堆積。第5層、シュートバー6。
24	にぶい黄色2.5Y6/4小礫～粗砂、ラミナあり、Feあり、小礫右寄りに多し。第5層、シュートバー6芯部。
25	灰色7.5Y6/1中礫～粗砂、ラミナあり。第5層、シュートバー6と一連のものか、それ以前の河川埋積層か。
26	暗緑灰色5GY4/1シルト～粘土、炭化物含む。数ヶ所で部分的に確認、水平な止水堆積か、第6層以下。
27	明黄褐色2.5Y6/8粘質土、シルト主体、粗砂～細砂若干あり、Feあり。第2層。
28	黄灰色2.5Y5/1(上部にぶい黄色2.5Y6/4)細砂～シルト、粗砂わずかにあり、管状Fe上半に多し。第4層、第5面後背湿地1内第1黒色層。
29	黄灰色2.5Y6/1粗砂～極粗砂、小礫あり、Fe・Mn若干あり、ラミナあり。第5層、シュートバー6芯部。
30	「黄褐色2.5Y5/6シルト、Feあり」のブロック(径2～4cm)の間に、「灰オリープ色5Y5/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり」、小礫若干あり。第2層、整地土か。
31	30と構成はほぼ同じだが、黄褐色のブロックは少なく、灰オリープ色砂質土は多い。
32	「オリープ色5Y5/4粘質土、シルト～細砂主体、粗砂あり」のブロック(径1～3cm)の間に、「灰オリープ5Y5/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり小礫(風化礫)」多し。第2層、整地土か。
33	灰色10Y4/1シルト～細砂、13と14の混濁。
34	青灰色10BG6/1シルト～極細砂。第5層、シュートバー3裾部。
35	灰～灰オリープ色5Y5/1・5/2極細砂～中礫、シルト若干あり、ラミナあり。第5層、シュートバー3芯部。

湊遺跡トレンチ壁断面(図41・42)土色・土質⑥

36	緑灰色10GY5/1中砂～細砂。第5層、シュートバー3以前流路内堆積か。
37	オリブ灰色2.5GY6/1シルト、部分的に粗砂～細砂・植物遺体などあり、ラミナあり。36と同じか。
38	暗灰色N3/0シルトと、オリブ黄色5Y6/3中砂～粗砂の互層状ラミナ。
39	38の2種がブロックで入る(木根痕か)。40、オリブ5Y5/4極粗砂～中礫、シルトあり、Feあり。第5層、シュートバー3上部土壌化部分。
40	オリブ5Y5/4極粗砂～中礫、シルトあり、Feあり。第5層、シュートバー3上部土壌化部分。
41	緑灰色10G6/1極細シルト～粘土、わずかに炭化物あり、これから45にかけて非常にしまり固く、30～50度の右下がりの直線的ひび割れが多く見られる(地震痕跡か)。41～45、段丘構成層か、縄文海進時堆積か。
42	灰～褐灰色N4/0・7.5YR4/1極細シルト～粘土、径3cm以下の植物遺体多く、それがラミナ状にある。
43	灰色N5/0シルト、最下部は漸移的に極細砂増える、ラミナあり、微細な植物遺体がまんべんなく散在。
44	緑灰色10GY5/1シルト～粘土、粗砂若干あり、ラミナは判然としない。
45	暗緑灰色10G4/1極細シルト～粘土、わずかに微細な植物遺体あり。
46	灰オリブ色5Y4/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、下部にシルト多し。第1面溝埋土。
47	灰色5Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫多し。第1面石詰め暗渠埋め戻し土。
48	灰色5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫多し。第3層相当整地土か。
49	中礫多く、その間に48や暗青灰色5B3/1シルトのブロック。第1面石詰め暗渠。
50	オリブ灰色5GY5/1シルトと、緑灰色10G5/1細砂～粗砂の互層状ラミナ、植物遺体あり。第6層。
51	灰色N6/0中砂～細砂、ラミナあり、微細な植物遺体部分的にラミナ状に入る。第6層。
52	灰色N6/0中砂～粗砂、ラミナあり。第6層。
53	2内に1のブロック(径2～3cm)。第0面溝埋土。
54	灰オリブ～灰色5Y5/2・5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、Fe若干あり。第1面溝埋土。
55	オリブ色5Y5/4・5/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、Fe若干あり。第1層耕土時畦畔。
56	灰オリブ色5Y5/2砂質土、2と57の混濁。第1層耕土時床面鋤溝埋土。
57	「オリブ色5Y5/6粘質土、シルト主体、粗砂あり、Feあり」と「灰色10Y5/1シルト」のブロック(径1cm前後)。第2層、整地土か。
58	「灰オリブ色5Y5/3粘質土、細砂～シルト主体、粗砂あり」と「暗緑灰色10G4/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり」のブロック(径1～3cm)に小礫～極粗砂若干あり。第3層、耕土系か。
59	オリブ灰色5GY5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～極粗砂多し、小礫若干あり、灰色7.5Y4/1シルト～細砂のブロックわずかにあり。第3層耕土系?整地土?
60	「暗緑灰～緑灰色7.5GY3/1・5/1シルト～細砂、植物遺体あり」と「灰色5Y5/1・6/1粗砂～極粗砂、小礫～中礫あり」の互層状ラミナ。第4層、第5面後背湿地3内西側浸蝕埋土。
61	「灰色N6/0粗砂・オリブ灰色5GY6/1中砂～細砂・灰色5Y4/1・5/1粘質土、シルト主体、粗砂あり」のブロックと中～小礫あり。第6層、崩落土か。
62	42の土礫。
63	緑灰色～灰色10GY5/1・7.5Y5/1極粗砂～中礫、粗砂～中砂若干あり、有機分含む、ラミナあり。第6層。
64	緑灰色7.5GY6/1シルトと、灰色N6/0中砂の互層状ラミナ。
65	オリブ黒色7.5Y3/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂多し、小礫若干あり、同色シルトのブロック(径1～4cm)あり。耕土か、第3層か。
66	灰色7.5Y4/1・10Y6/1細砂～シルト、植物遺体若干、粗砂～小礫巻き上げ。第5層、シュートバー5裾部。
67	オリブ灰色5GY6/1・5/1小礫～粗砂、風化中礫若干あり、ラミナあり。第5層、シュートバー5芯部。

05-1-3tr. 南西壁

1	北西壁断面の1と同じ。第0層。
2	北西壁断面の2と同じ。第1層。
3	北西壁断面の55と同じ。第2層。
4	北西壁断面の56と同じ。第1層耕土時鋤溝埋土。
5	北西壁断面の57と同じ。第2層、整地土か。
6	北西壁断面の58と同じ。第3層、耕土系か。
7	北西壁断面の59と同じ。第3層、耕土系か、整地土かも。
8	北西壁断面の65と同じ。第3層か、耕土か。
9	北西壁断面の60と同じ。第4層、第5面後背湿地3西側浸蝕埋土。
10	北西壁断面の67と同じ。第5層、シュートバー5芯部。
11	北西壁断面の51と同じ。第6層。
12	北西壁断面の52と同じ。第6層。
13	灰色10Y4/1砂質土、細砂主体、シルト若干あり、粗砂わずかにあり、ラミナあり。第4層か。
14	黄灰色2.5Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫わずかにあり、植物遺体あり。第4層か。
15	灰～灰オリブ色5Y5/1・5/2粗砂～小礫、ラミナあり。シュートバー5を浸蝕した流水による堆積。

05-1-3tr. 北東壁

1	2と「灰色N4/0粘質土、シルト～細砂主体、粗砂あり」と「明黄褐～にぶい黄色2.5Y6/6・6/4粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、Feあり」のブロック(径5～15cm)。近代盛土か(明治34年?)。
2	北西壁断面の1と同じ。第0層。
3	2と「灰色N4/0粘質土、シルト～細砂主体、粗砂あり」のブロックに粗砂～小礫わずかにあり。溝埋土。
4	灰オリブ色5Y4/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、風化礫の小礫～極粗砂若干あり。第1層。
5	北西壁断面の2と同じ。第1層。
6	灰黄色2.5Y6/2粗砂～小礫、細砂～シルト若干あり、Feあり、小礫はほとんど風化礫、ラミナなし、中礫わずかにあり。耕地開発時にシュートバー1上部を削平し、シュートバー2上に盛ったものか。
7	灰色10Y6/1粗砂～小礫、中礫～大礫若干あり、ラミナあり。第5層、シュートバー2、これと8はシュートバー2としたが、シュートバーではなく、流路を埋積した層である可能性が高い。
8	灰色7.5Y6/1粗砂～中砂、小礫～中礫わずかにあり、ラミナあり。第5層、シュートバー2。
9	灰色7.5Y6/1中砂～粗砂、図右側に中礫～小礫多し、ラミナあり。第5層、シュートバー1の二次堆積か。
10	北西壁断面の5と同じ、図左側に中礫～小礫多し。第5層、シュートバー1。

湊遺跡トレンチ壁断面(図41・42)土色・土質⑦

3 tr. 北東壁	
1	北西壁断面の1に同じ。第1層。
2	北西壁断面の2に同じ。第1層。
3	北西壁断面の105に同じ。第2層新、洪水復旧貼り床。
4	北西壁断面の106に同じ。第2層新、洪水復旧粘土系盛土。
5	北西壁断面の10に同じ。第2層古、粘土。
6	北西壁断面の108に同じ。324流路人為的埋土か。
7	北西壁断面の110に同じ。324流路上層、中世に水路化した時点での通常時の流水堆積か。
8	北西壁断面の119に同じ。324流路上層、古代。
9	北西壁断面の114に同じ。324流路上層、古代。
10	北西壁断面の115に同じ。324流路上層、古代。
11	北西壁断面の107に同じ。324流路上面整地土。
12	灰オリーブ5Y5/3砂質土、細砂～シルト主体、取差～粗砂若干あり、Feあり。第1層か。
13	「灰色5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり」内に、「黄褐色2.5Y5/4粘質土、シルト主体、粗砂あり、Feあり(第3層系?)」のブロックあり。第2層新、洪水復旧粘土系盛土。
14	「灰色5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり」内に、「青灰色10BG5/1シルト・にぶい黄色2.5Y6/4シルト～細砂・灰色10Y4/1シルト(洪水砂系か)」のブロックあり。第2層新、洪水復旧盛土。
15	北西壁断面の7に同じ。第3層。
16	灰色7.5Y4/1シルトと緑灰色10GY6/1細砂の互層状ラミナ。324流路上層、中世段階か。
3 tr. 南西壁	
1	北西壁断面の1に同じ。第1層。
2	北西壁断面の2に同じ。第1層。
3	北西壁断面の3に同じ。第2層新、洪水復旧貼り床(326流路上層起源)。
4	北西壁断面の4に同じ。第2層新、洪水復旧粘土系盛土。
5	北西壁断面の5に同じ。第2層新、洪水復旧洪水砂系盛土。
6	北西壁断面の6に同じ。第2層新、洪水復旧盛土。
7	6に9～13のブロックもあり。第2層新、洪水復旧盛土。
8	北西壁断面の7に同じ。第3層、粘土か。
9	黄褐～暗灰黄色2.5Y5/3・5/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫あり。第2層古粘土時畦畔盛土。
10	灰オリーブ色5Y5/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫あり。第2層古、南東側耕地地区画内。
11	「オリーブ色5Y5/4シルト・灰オリーブ色5Y5/2シルト、粗砂あり」のブロック。第3層、盛土。
12	暗青灰～灰色5B4/1・7.5Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり。第3層、粘土。
13	オリーブ灰～緑灰色10Y5/2・10GY5/1粘質土、シルト主体、粗砂あり。第3層、粘土か、盛土か。
14	灰～緑灰色N5/0・7.5GY5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～極粗砂あり。第3層、粘土。
15	灰色N5/0・10Y5/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～極粗砂あり。第3層、粘土。
16	「オリーブ灰色10Y5/2粘質土、シルト主体、粗砂あり・黄褐色2.5Y5/4シルト・灰色N5/0粘質土、シルト～細砂主体、中砂あり」のブロック。326流路上層上部起源か、上面が第4面新。
17	オリーブ黒色10Y3/1(上部灰色10Y4/1)粘土～シルト、粗砂あり、下層巻き上げ。326流路上層。
18	黒～暗灰色N2/0・3/0シルト～粘土。326流路上層。
19	8内に17・18のブロック。8の第3層粘土時の床面遺構埋土。
20	にぶい黄褐色10YR5/3シルト～極細シルト、植物遺体多し、上面巻き上がり、下面沈み込むコンポリュートラミナ。326流路中層。
21	「にぶい黄褐色10YR5/4シルト～極細シルト、植物遺体多し」内に、灰白色2.5Y7/1細砂ラミナ状に入る、ラミナあり、上部のラミナ凹凸激しい。326流路中層。
22	灰色5Y5/1中礫～粗砂、ラミナあり。326流路下層。
23	北西壁断面の8に同じ。第5層、05-1-3tr.のシュートバー1の続き。

35・40) が形成され、流路はシュートバー2の部分で埋積し、その下流側が後背湿地1として残される。後背湿地1の下でやや盛り上がり、堆積していたシュートバー6(05-1-3tr.北西壁断面21～24・29)とした層は、切り合い上シュートバー1・3より新しく、シュートバー2から上面の高さを下げて続いていた堆積であろう。その後、より小規模なシュートバー4・5(05-1-3tr.南西壁断面10)が南西側に形成されるのは一番南の小規模な枝谷から来る流路の作用によるものと思われる。それらにより後背湿地2・3が形成される。トレンチ内で一連のシュートバーにより他の流路と隔離された流路は次第に南西中段丘崖に寄っていき、現在の05-1-3tr.の南西側を流れる水路に固定されたものと考えられる。

北東側のシュートバー群は、調査深度が不足しているため、形成順序が分かりにくい、北東の低位段丘崖から流路が次第に離れていくに従い、北東から南西への順で形成された可能性が高い。

2tr.の南西半から3tr.の南西端のシュートバー1の端までの間は、二つの流路が変遷を重ねる地帯としてその両岸とは様相が異なる。この部分を仮に「流路帯」と呼ぶことにする。

その原型はこの第5面において、第4面の324流路と326流路の間に存在した330流路である可能性が高い(3 tr. 北西壁断面 50・51・100・101)。この時点では二つの流路は調査区地点では既に合流して330流路となっていた可能性がある。北東側のシュートバーによる微高地と後背湿地は、後に147流路の攻撃面になって削られた自然堤防により330流路と隔てられていたのであろう。330流路の上面から弥生中期の土器片が出土しているため、それ以前の時期の状況と考えられる。

第4層は、第5面で形成された後背湿地を次第に埋積していく層の総称である。北東側でも南西側でも、有機分をほとんど含まないシルト～細砂層をはさんで、上下3層の暗色帯が認められ、上から順に第1～3黒色層と名づけた。

しかし、北東側と南西側ではそれらの層に包含される遺物の時期が微妙に異なる。北東側では、第2黒色層(1 tr. 北西壁断面 63・74、2 tr. 北西壁断面 19・25)が弥生時代後期前半で、第4層上面の第4面が庄内式併行期から飛鳥時代であるのに対し、南西側では第2黒色層(05-1-3 tr. 北西壁断面 12と18の層境相当、図81の断面⑤～⑦)が庄内式併行期で第1黒色層(05-1-3 tr. 北西壁断面 19・28)が古墳時代後期以降である。

しかし、後背湿地を埋めていく堆積物を供給する流路が異なる事を考えれば不自然な事ではないと言える。ちなみに、どちらも第4層最下に位置する第3黒色層(1 tr. 北西壁断面 66・76、2 tr. 北西壁断面 62、05-1-3 tr. 北西壁断面 13)は無遺物で、形成時期が確定できない。

三つの黒色層は後背湿地として有機分が堆積して形成されたと考えられ、その間に何度か溢流的な洪水で流入した細砂などの堆積物で次第に埋没していった事が分かる。

中央の流路帯では、確実に第4層と言える層はない。ただし、流路帯の中でも、北東側では147流路から324流路への変遷が追え、南西側では、3 tr. 北西壁に見る63・64・48～50の流路から326流路への変遷が追え、330流路の埋没後、二つの流路の流域が分かれ、その間に地表化した部分が出てくる。その堆積層を見れば、3 tr. 北西壁断面の66・65が第4層としても良いものである可能性はある。

流路帯の北東側の147流路は、調査区内では北東側を攻撃面として浸蝕していくが、第4面で下刻も進み、2 tr. 中央付近に河岸段丘崖を形成する(2 tr. 北西壁断面 61・50の左辺)。1 tr. と2 tr. の境付近に第4層内第2黒色層から第4面にかけて浸蝕痕が重なる部分があるが(1 tr. 北西壁断面 81、2 tr. 北西壁断面 6～11・53～55)、第4面の浸蝕痕一つを最後としてしばらく堆積物の供給も減少するのは、この河岸段丘の形成により、それより北東側が安定したためと考えられる。河岸段丘崖の痕跡は現地形でも比高差50 cmほどの耕地区画の段差として残る。

河岸段丘形成後、流路変更があり、北東側を攻撃面として蛇行を強めていた147流路は後背湿地化(2 tr. 北西壁断面 35～39)し、規模を縮小して3 tr. の324流路に引き継がれる。2 tr. と3 tr. の間の、現在、七ノ池からの水路が通る8.9 m間に自然堤防が形成されたと考えられる。出土遺物から見ると北東側の第4層第2黒色層の形成からここまでの、弥生時代後期の時期内に推移した事になる。

326流路は、その底面で直線的な形態を確認し329流路としたのが当初の形と思われる。先述の前身の流路から、破堤的な洪水で直線化した形態が329流路とした形で、その時、326流路下層(3 tr. 北西壁断面 20)も堆積したのであろう。その後、緩やかな流れで蛇行を強めたのが326流路として第4面で検出した形態で、326流路中層(3 tr. 北西壁断面 18・19・30)がその時点での堆積層であろう。

324流路も326流路も蛇行する形態になっていった時点が、遺物からすれば古墳時代初頭、庄内式

併行期の事で、1 tr. ～ 3 tr. では第4面古の前半の時期となる。ただし、南西側の05-1-3tr. は後背湿地の埋没がまだ完全には進まず、第4層第2黒色層の形成時期に当たる。

3 tr. の324流路と326流路の間は、第4面として良い面が形成されるが、洪水による浸蝕痕が多く見られ、不安定な状況である。しかし、324流路の左岸肩部に製塩土器の土器群4が見られ、326流路の右岸寄りの底部に土器群6が存在した事は、この部分が人の活動範囲となっていたという事である。南東、山側の、七ノ池からの谷と矢畑池からの谷に挟まれた段丘上は、先の活動範囲に人が進入しやすい経路である。そこに当時人的活動の中心があった可能性が高い。

第4面古の後半の時期では、326流路が古墳時代後期には低湿地化していた事が知られる。その時期の堆積層が326流路上層(3 tr. 北西壁断面16・29)である。ただし、それを引き継ぐ流路が見当たらない。3 tr. と05-1-3tr. の間の、現在の矢畑池からの水路が流れる部分に既にシュートバー1を浸蝕して流れていたのか、それを示す層は確認できない。

324流路は、庄内式併行期には蛇行していたが(3 tr. 北西壁断面116～118)、飛鳥時代には調査区内では直線的になっていた。それ以降の流路内の堆積層を324流路上層(3 tr. 北西壁断面108～115)としている。その底部は庄内式併行期より下刻が進んでいるので、あるいは一時期326流路の後身もこちらに合流していた可能性は残る。

両流路間の浸蝕痕も飛鳥時代にはある程度埋没が進み、平坦化が進行していたようである。326流路より南西側も後背湿地の埋没が進み、遅くとも第4層第1黒色層の形成までは達していたと思われる。

第4面の最後は、中世の耕地開発の段階である。多くの第5層のシュートバーの高い部分は削平され、浸蝕痕・後背湿地・流路跡などの残された凹部はブロック土で埋められる。そこには第3層の最下層が耕土であった時点の耕作痕などが残される。流路帯部分は整地土が入る部分が多いため、3 tr. ではその上下で第4面新と第4面古に分けられる。

05-1-3tr. ではシュートバー3の最高所は頂部が平坦な高台として残り、高まり1となる。その尾の部分とシュートバー4は間の後背湿地2の名残の凹部を埋められて高まり2として耕地区画になる。

324流路は第3層が耕土として機能している時期の中でも早い時期には、規模を縮小しながらも3 tr. 内に存続していたようである。3 tr. 北西壁断面の107～110がそれに当たるとと思われる。その肩部に畦畔の痕跡らしきものがあるのも、それを肯定する要素である。おそらくは耕地化に伴い水路として整備されたのであろう。324流路上層出土の遺物のうち、瓦器碗などがその時期のものと考えられる。しかし、第3層が耕土である時期の内廃絶し、現在の水路の位置に移動したと考えられる。おそらくは324流路の自然堤防が存在していたやや高い位置に水路を移し、水廻りを良くしたのであろう。そして、その後、調査区を横切る水路はすべて現在までその位置を変えていない。

開析谷内の最初の耕地開発は自然地形の細かい高低差を解消しきれていなかったためか、第3層の時点で部分的な削平や盛土が繰り返されたようで、第3層はいくつかの盛土と耕土の重なりとなっており、その順序も場所によって異なる。ただ、包含遺物は中世のものに留まり、土質的には古土壌を耕起した事に由来するのか、近世の耕土よりはるかに粘質である。

これより後は、基本的には耕土の重なりが中心となるが、流路が固定され水路化したと言っても、時には洪水が起こっていた事を示すのが3 tr. の第2面古から第2面新への変化である。

第2層が耕土として成立した最初の段階では、3 tr. の北西側から調査区外にかけては、南東より一段下がった耕地区画が存在していた。元々は324流路と326流路の合流点の低地に由来する、より低

い区画であった。その区画で第2層古(3tr.北西壁断面10)が耕土であった時期である。ある時期、洪水が起こり、近辺が砂粒を中心とした洪水堆積物で覆われる事態になったと考えられる。近世前中期頃の事か。その洪水被害を復旧し、洪水堆積物を処理するのに使われたのがこの区画である。

まず、区画の西半分に大型の土坑を幾つも掘り、326流路上層の粘質土を採取し、そこに洪水砂を埋め込む。次に、周辺の洪水砂もこの区画に集めて盛り上げる。砂層の中にラミナのあるシルトのブロックがある事が、この砂層が二次的に移動された事を裏付ける。一作業単位毎に耕土系の盛土がその上に乗る。そして、高くなった区画に、大型土坑で採取した粘質土を床土として貼り、耕地として使用できるようにする。その新たな床面が第2面新である。

南東隣の区画の第2層は一つしかないが、その上面にもわずかに貼り床の土が及び(3tr.南西壁断面3)、高低差が逆転するので、第2面新の上に新たに第2層系の耕土が乗る事はなく、この面は基本的に第1層の床面になる事が分かる。

近世に入って、第2層以降の耕土が第3層に比べて砂質化しているのは、これほどにないにしろ洪水によりしばしば砂などの堆積物が供給されていたからだと考えられる。近世には上流に溜池を持っていたであろう湊川水系の洪水は考えにくく、上流部の開発が進み、川筋が固定された佐野川の洪水が考えられる。低位段丘上でもわずかに確認された洪水砂らしき砂層がそれを示唆する。

その後、細かい段差が解消される事が部分的にあっても、調査区内の耕地区画はあまり変化がないまま、第1層、第0層と耕土が重なっていく。第0層は明治30年に泉佐野まで開通した南海本線の線路がこの開析谷を渡るための盛土で直接覆われた耕土である。

2、各層の様相(図98)

基本層序名は上から順につけ、第1層の上面が第1面というように層の上面が同じ数字をふった面としている。面の名称があっても必ずしも遺構が存在し、平面的調査を行ったわけではない。

谷内で部分的変化も激しいため、基本層序名は単層毎に付けてはいない。結果的に堆積の画期毎に時期と構造の近い複数の層を一つの基本層序にまとめた形になる。低位段丘上は別に基本層序を立てる。

土質の記載では、主体的な粒子、それに混ざる粒子、酸化鉄や酸化マンガンのありかた等を基本的に記載する。ただ、耕土等の土壌や土砂流などの混濁した堆積層では粘質土・砂質土の表現を使う。ただし、例としては「砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり」は「粗砂混じりシルト質細砂」という地質学的な記載に読み替えられる。また、「中粒砂」を「中砂」、酸化第二鉄を「Fe」、「量管状」を「管状」などの略語も使用している。

1tr.でかなり広範な攪乱があったが、トレンチ断面図は記録可能であった。2tr・3tr.は第0層の残りが悪く、第1面も攪乱を受けていた。だが、05-1-3tr.は南海本線開通当時の人力による盛土が調査区内にも残り、残存状態が極めて良く、原則的には実施しない第0面の調査も行なった。

第0層 先述のように明治30年近くまで耕土であった層である。砂質でまだ有機分をかなり含んでいる。層厚は平均して15cm弱程度か。

土色は乾燥度などによって違うが、黒褐～暗灰黄色2.5Y3/1~4/2、細砂～シルト主体、粗砂あり。低位段丘に近い1tr.では小礫を含み、低湿な05-1-3tr.ではやや粘質で炭化物を含む。

第1層 有機分がやや溶脱しているので、基本的に第0層より若干明色の耕土である。層厚は20cm前後だが、上下2層に分かれる部分が多い。その場合、下層の方が明度が高いが、何故か上層の方が粗い岩屑性粒子を含む割合が高い。包含遺物からは近世後半頃に耕土として機能していたと思われる。

灰色 7.5Y5/1~5Y4/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、小礫を若干含む部分あり。

第2層 3 tr. では新古に分かれ構造も複雑だが、多くの部分では第1層の下で鉄分に染まっているのが目立つ層である。本来的には耕土だが、第1層の下で床面を為す期間が長く、有機分が溶脱し、鉄分が沈着したものと思われる。層厚は5 cm前後と薄い部分が多いが、10 cmほどの部分もある。近世前半頃か。

灰黄褐～黄褐色 10YR2/5~2.5Y5/4 砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂あり、Fe・Mn 粒あり。

第2層新 3 tr. で一つの耕地区画に入れられた洪水復旧の盛土である。大型土坑群の埋土も含まれる。最下層は洪水砂の中にラミナのある暗色シルトのブロックが入ったもので「洪水砂系盛土」とした。大型土坑部分以外での層厚は25～45 cmほど。

その上にあるのが、耕土起源らしき砂質土・粘質土のブロックが多く含まれる層で、「耕土系盛土」とした。層厚は10～20 cmほど。

最上層は大型土坑群によって採取した326流路上層の粘質土など粘土～シルト系の土のブロックを敷き詰めた層で、層厚は5 cm前後。新たな耕作土の床面とするための「貼り床」である。

トレンチ断面から、この三つの層を積み重ねる作業を、何回かに分けて北東から南西に向かって繰り返した事が分かる。質・色とも部分によってかなり違い、統一した土質の記述はできない。

第2層古 第2層新形成以前の耕土である。他の部分の第2層も本来はこのような層であったと思われる。大型土坑群で破壊された部分以外は上面の残りがよく、畦畔や掘削した浅いピット、その掘削土を横に山盛りにした状態までが確認できた。層厚は10 cm前後。

灰色 5Y5/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂若干あり、斑状 Fe あり。

第3層 基本的には第2層より粘質で暗色であるが、下層の状態によって砂質になる部分もある。耕地開発以前の土壌を攪拌した耕土もしくは盛土である。最大3層に分かれる部分もある。層厚は40～10 cmと安定しない。攪拌され均質な粘質土の層とブロック土の見える層があるが、ブロック土層もブロックの大きさ等から耕土である事を否定できないものもある。最下に整地土らしいブロック土層がある場合もあるが、耕土系の第3層の上にブロック土系第3層が乗る部分もある。これは上述した通り、耕地開発当初に自然地形の凹凸を解消しきれなかったゆえに、小規模な部分的整地が行われたためと考えられる。

代表的な土質を記述するとすれば、灰黄褐～黄褐色 10YR4/2~2.5Y5/4 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～小礫あり、Fe あり、Mn 粒わずかにあり、ブロックある場合は黄褐色系シルトのブロック若干。

第4層 主に第5面で形成された後背湿地を埋積していく層で、第1～3黒色層とした三つの暗色帯と、その間にはさまるシルト～細砂を中心とした層からなる。流路帯をはさんで調査区北東側と南西側では埋没過程の時期に差があるのは先述のとおりである。

黒色層は大体厚さ10 cm以下で、途切れる部分も多い。土色も濃淡があり、鉄分の少ない部分でも暗灰～灰色 N3/0~6/0 程度の差はある。シルト～細砂が主体だが、粘土の部分もあり、シュートバーの斜面付近では粗砂～小礫が含まれる部分もある。全体に土壌化の痕跡は少なく、粒子の淘汰も良く、部分的にはラミナの見られる所もあるので、湿地内で有機分も含め水成堆積したものと考えられる。

黒色層間の層は細砂～シルトを中心として粘土～中砂までを主体とした、ほとんど有機分を含まない層で、堆積後酸化状態にあるものは黄褐色系に、地下水により還元状態にあるものは青灰色系になる。部分的にラミナが見られ、溢流的な洪水により後背湿地に流れ込んだ堆積層と考えられる。第4面に接

した部分以外は土壌化の痕跡はほとんどない。単層で最大厚のものは 40 cm ほどのものもある。

第5層 粗砂～中礫を主体としたシュートバー芯部とその両裾に堆積した細砂～シルトからなるシュートバー裾部を中心とした層の集合、一部には流路を埋積した砂礫層もある。

シュートバー芯部は下方浸蝕した例も確認でき、上面は盛り上がるが後世に削平された部分が多い。高所には土壌化が見られ、斜面には二次堆積が見られる。

無遺物で、弥生時代後期以前としか言えないが、一部は弥生時代中期以降にも堆積している。

第6層 部分的にしか確認できていないが、第5層より下層の、砂礫層を中心として切り合う層の集合である。土壌化面が確認できないのが特徴と言える。

堆積時期は弥生中期以前としか言えないが、粒子が粗く、海進時に谷が水没した状況での堆積とは考えられない事から、おそらくは縄文海進期以降であろう。ほとんど植生のない河原のような状態が考えられる。

第6層以下 第6層以下の開析谷内堆積物は不明だが、非常に締まりの良い水平堆積の層群が浸蝕され残った形で2カ所で確認されているのは先述したとおりである。縄文海進時の海成層か、段丘構成層かは不明だが、縄文海進時に海水の進入があったとしても、それらの層の最高部が T.P.+ 4 m に近く、当時も河口からはやや離れた位置であった事を考えれば、海進時にシルトなどの細粒が堆積する環境であったかは疑問である。段丘構成層である可能性の方が強いと考える。

地震痕跡 なお、地震痕跡と考えられるものも検出している。一つは 1 tr. で第4層の第1黒色層にコンボリュートラミナが見られ、上下の層境がフレア状に激しく凹凸し、下部の砂層から噴砂脈がそこまで達しているもので、弥生時代後期頃の地震痕跡かと思われる。

もう一つは第4面 326 流路の中層上半から上層下半にかけてコンボリュートラミナが見られるもので、後背湿地化した時期の、古墳時代後期頃の地震痕跡と考えられる。

3、小結

既往の調査では、調査深度が不足していた事もあり、遺跡南西半を占めるこの開析谷の堆積状況を把握する事が出来ていなかった。今回初めて谷全幅の状況を明らかに出来たとと言える。

今のところ遺物からは弥生時代中期が最古のものと言え、第5層以下は無遺物である。これは第5層のシュートバーによってようやく谷内に小規模ながらも微高地が形成されたと考えられる状況とも一致する。その時点で微高地と後背湿地が錯綜する、沖積平野のミニチュアのような地形環境が成立した。

後背湿地が埋没していく第4層の形成過程で遺物が増え、人の活動が活発化すると言えるが、それでも遺構が存在しないのは、まだ不安定な状況であった事を示すのであろう。

結局開析谷内が耕地化されるのは中世、13世紀頃と遅い。段丘平坦面の開発の方が先行するのはこの地域の特徴であろう。谷内が耕地を維持できるほど安定する画期としては、谷内の流路の上流側に溜池が作られ、流路が水路化したからと想像できる。

しかし近世に入っても洪水が発生しているのを確認できたのも貴重な成果である。そしてその洪水復旧の方法に、土地を熟知した知恵が感じられるのも感慨深い。

第2節 1 tr. 北東部低位段丘上の調査

1、基本層序

今回の調査の大部分は遺跡南西半の開析谷内の調査となったが、1 tr. 北東側で、低位段丘崖を検出し、

わずかな面積ではあるが低位段丘上にも調査が及んだ。

開析谷内とは堆積状況が全く異なり、ある程度時期的な対照はできるというものの、一体化して報告するには困難な点もあるので、低位段丘上の調査成果はこの節でまとめて述べる。

低位段丘上の堆積層は大きくは沖積層相当の完新世以降の堆積層と低位段丘構成層に分けられる。完新世以降といってもそのほとんどは中世以降の耕作土の重なりで、現代耕土も含めても厚さ 40 cmほどにすぎない。ただし、わずかに砂層が確認でき、洪水堆積物と推測される。

その下の低位段丘構成層は、段丘崖下部では層境が傾斜する砂礫層などが観察できたが、上部は全てシルト主体の粘質土で、水平堆積である。上層より格段に固く締まり、層境を越えて入るクラックが発達している。しかし、その中にも古土壌と思われる暗色帯もあった。

以下、上から順に基本層序を述べる。土色・土質は 1 tr. 北西壁断面図（図 41）を参照。ここでは名称を略すが、他で述べる時は「低位段丘上第〇層」として開析谷内の基本層序とは区別する。

第0層（断面1） 現代耕土である。開析谷内の第0層は南海本線の盛土下にあり、明治30年以前の耕土だが、ここではその当時の盛土はなく、工事用仮設道路が作られる前まで耕地であった場所の耕土である。

第1層（断面2・16） 第0層よりやや有機分が溶脱して明色化した旧耕土である。畦畔盛土ではないかと思われる16が断面に見えたが、平面では判然としなかった。時期を限定できる資料がないが、土質から見れば、その成立を古く考えても、開析谷内の第1層程度、江戸時代に遡るかどうかというところであろう。

第2層（断面3） 黄褐色系の粘質土であるが、人為的に攪拌された旧耕土である。わずかな包含遺物では中世以降の層としか言えず、開析谷内第2層に相当する近世耕土か、第3層に相当する中世耕土かのいずれかであろう。

第3層（断面4） 土壌化した砂と言ってよいほど砂質だが、有機分を含み攪拌されており旧耕土と思われる。これほど砂質なのは、直下のわずかな部分に遺存していた砂層（断面土質の5）を攪拌した耕土であるからだろう。その砂層は低位段丘上にも洪水堆積物が及んだ証拠でもある。

第4層（断面6） 低位段丘構成層の最上部になる層である。これより以下は締まりが良く、クラックが層境を越えて発達している。旧耕土床面でもあり砂粒の降下も激しいが、元は止水堆積層である。これ以下は一切遺物を包含していなかった。ただ、状況的に後期旧石器の遺物が出土する可能性はある層であろう。

第5層（断面7） 低位段丘構成層上部の暗色帯である。古土壌と思われる。下面で木の根状の痕跡が見られたのもそれを裏付ける。この層も後期旧石器の遺物が出土する可能性はある。

第6層（断面8） 古土壌の下層のせいやや土壌化の痕跡を残すが、元は黄褐色系シルト層である。重要なのはこの層内に走るクラック内から AT 火山灰が検出された事である。おそらくは第5層から降下してきたものか。この層自体はそれ以前の堆積であり、後期旧石器の遺物が出土する可能性は低いと思われる。低位段丘上ではこの層の下面を確認する事なく調査を終了したが、級化構造を見せながら、厚さ 50 cm以上はあるようである。

以上が低位段丘上の基本層序であるが、問題は第1層から第3層の時期である。包含遺物は少なく、いずれも小片で、しかも弥生土器・土師器・須恵器・瓦器を含み、染付など陶磁器類を含まない状態が同じである。また数少ない遺構からの出土遺物も時期を限定する説得力を持たない。

第3層が中世以降という事は動かないが、近世以降である可能性も否定できない。

2、第2面（図44上）

第1面は第0層の耕作痕のみ検出され、その中にはトラクターの痕跡らしきものもあったので、調査は行わなかった。第2面では7個のピットと2本の溝が検出された。

1) ピット

調査区低位段丘部分の南側に集まる。直径20cm前後のものが多く、深くても15cmほどである。埋土はいずれも第1層系。344・345ピットから土師器片が出土したが、小片で器種すら不明。

2) 342溝

調査区北東から入り、曲がって西側に抜ける。幅1.6～1.8mほど、深さは30～50cm。埋土は最下層に流水堆積の砂層（図41の15）が残り、両方を第2層由来かと思われる粘質土が埋め（図41の10・14）、その上に砂質土（図41の12）、最後にブロック土（図41の11）で埋められる。

遺物は最上層のブロック土からのみ出土し、弥生土器・飛鳥時代前半期の坏身・土師質釣鐘形飯蛸壺・棒状土錘などが認められるがいずれも細片で図化に耐えない。

現在、調査区の北側に隣接して、調査区西側で段丘崖肩部に至り、その肩部上を北西に伸びていく水路が存在するので、342溝はおそらくその溝の元の形であろう。包含遺物は飛鳥時代のものだが、数も少なく、人為的埋土の中からの出土である。おそらく溝を埋める際に付近の古代の遺構を破壊して埋土としたと考えられる。溝は近世以降のものか。

3) 343溝

南東から342溝に取り付く小溝である。幅20cmほどで深さは10cmに満たない。南西側は浅くなり、広がって終る。耕地区画から342溝に排水する水口かも知れない。遺物は出土していない。

3、第4面（図44中）

低位段丘構成層の上面である。面的には平坦で、削平されて耕地として造成されているようである。遺構としては溝が1本検出されたのみ。溝埋土の砂層が一部平面まで広がっていた。

1) 351溝

北北東方向から調査区に入り、やや東に曲がりながら南東に抜けていく。幅1.7～2.3m、深さ40～50cmほど。遺物は皆無。粗砂から細砂の砂層単層で埋まり、その砂層は一部溝の外にまで広がる。おそらくは低位段丘を越えてくるような佐野川の洪水により埋没したものと思われる。

第3層も元々はその洪水砂起源と思われ、洪水砂は平面的にも広く広がっていたと考えられる事と、溝の形状から、溝自体は洪水による浸蝕痕である可能性は低い。

低位段丘上の幹線水路から枝分かれし、開析谷内に下りていく水路と思われるが、調査区から南東に抜ける方向性にやや疑問がある。しかし、調査区南東外付近で、低位段丘崖が開析谷側にやや突出する部分があり、そこで開析谷に下りていくと考えると問題はないかもしれない。

低位段丘上の水路体系は、遺跡内開析谷上流の七ノ池と、佐野川上流左岸丘陵裾の長池という二つの溜池から発している。この水路体系の原型は、中世末期に既に成立していたとしか判明していないので、これもまた、時期を考える決め手に欠ける。

ただ、開析谷側の調査で、大規模な洪水の痕跡としては、3tr.の第2面の洪水復旧痕跡があげられ、近世のものであるが、そこで大量に集められ埋められた洪水砂が、この溝の埋土の砂層と同じ洪水によるものであるなら、この面も近世に属する事になる。

しかし、狭い範囲ではあるが、溝内埋土の洪水砂が平面的にも広がっていたのにも関わらず、その砂層の下に古土壌も旧耕土も遺存していなかった事は疑問である。

4、第6面（図44下）

低位段丘構成層上部の、古土壌と思われる暗色帯である第5層の下面である。不定形な溝状のものが検出され、その一部が放射状に広がるような形を取ることから木の根痕と判断した。底部も細かく凹凸し、埋土は木質の腐食に伴って置換されたと思われる明色のシルトである。

直下層のクラックから検出されたAT火山灰がこの面の時期を示すと考えられる。2万年以上前のヴェルム氷期最盛期頃にここは森林状態で土壌の形成があった事をうかがわせる。後期旧石器時代の環境を知る事のできる成果と言えよう。

5、小結

この低位段丘上は、調査区の北西近くに奈良時代の集落があり、平安時代以降も集落が立地し続けた事が既往の調査から知られている。ただ、耕地の開発については不明な点が多く、現行水利体系の要となる上流の溜池の成立時期も不確定で、中世以降としか推測できない。今回もその点を明確にする事はできず、最下の旧耕土である第3層が中世か近世かも確定できない状態であった。

しかし、今まで漠然と微高地として認識され、地質学的には沖積層分布地とされる事もあったこの部分が、今回の調査で低位段丘と確定できた事は大きな成果と言える。

第3節 第0面

1、面の状況（図45）

05-1-3tr.では、南海本線敷設時の盛土が最も厚く、調査区の全面を覆っていたため、盛土直前の耕地の様相が、畦畔や畝立ての様子ばかりでなく、水路の段差に敷いた稲藁まで残っていた。

この面以下の旧耕土は重なり合い上層の削平を受けており、ここまで良好に遺存していないと思われたので、第0面は調査しないとの原則を曲げて、このトレンチのみは調査する事にした。

第2面で形成され、踏襲されていった耕地区画である。この部分は非常に高低差のある耕地区画で、一番高い05-1-206高まり1と、その北西の、畝群が検出された一番低い耕地区画とでは90cmほどの高低差がある。05-1-206高まり1はT.P.+5.63m、05-1-208高まり2はT.P.+5.33m、05-1-202畦畔より北東側の区画はT.P.+4.96m、南西端の区画はT.P.+4.90m、05-1-205畝群のある区画はT.P.+4.78mほど。高まり以外の段差は20cm以下である。

この高低差は、第5面の自然地形に由来する。05-1-206高まり1と05-1-208高まり2はシュートバー3・4を元にして、その間の後背湿地2を埋めて作られている。一番低い耕地区画は、第5面の後背湿地1が埋没した跡に造成されている。

全ての耕地区画の境には段差を伴う畦畔が検出された。ただし、05-1-206高まり1肩部のみは畦畔を検出できなかった。検出面積が狭すぎたのか、やや削平を受けたのかは判然としない。

溝底部の傾斜から水まわりも把握できる。05-1-203溝から来た水は05-1-204溝を北西と南西に流れる。南西側は05-1-208高まり2上で05-1-206高まり1裾部を流れてきた05-1-207溝からも水が供給される。その流れ落ちる段差部分は底部を2段に作り、それが浸蝕されるのを防ぐため稲藁が敷いてあった。05-1-208高まり2はその北西角にも水口を開ける。

05-1-205畝群は北西～南東方向の畝群が南東側で畝溝を共有して頭を合わせるが、その南西に直

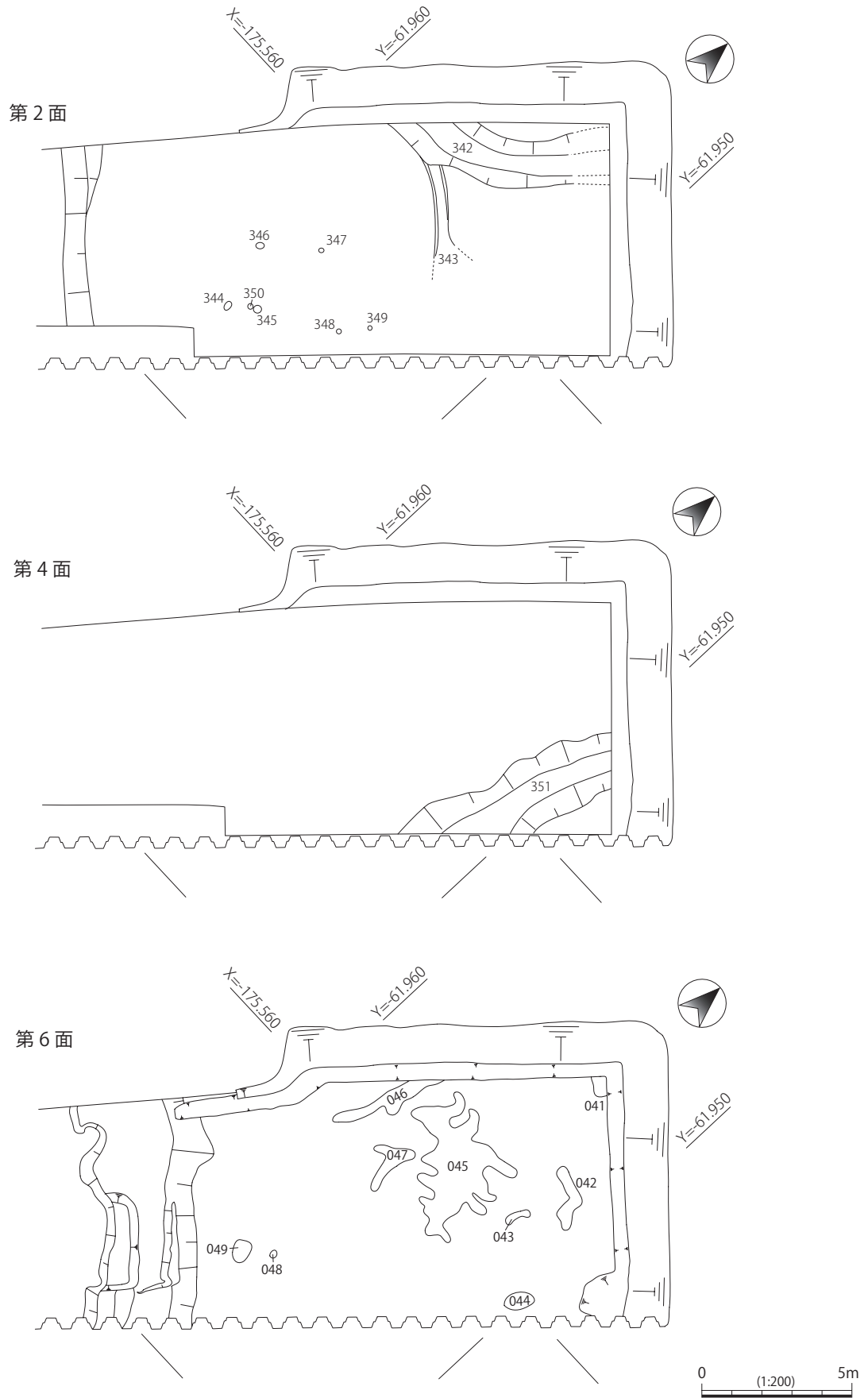


图44 湊遺跡 1tr.段丘上(上:第2面、中:第4面、下:第6面) (S=1/200)

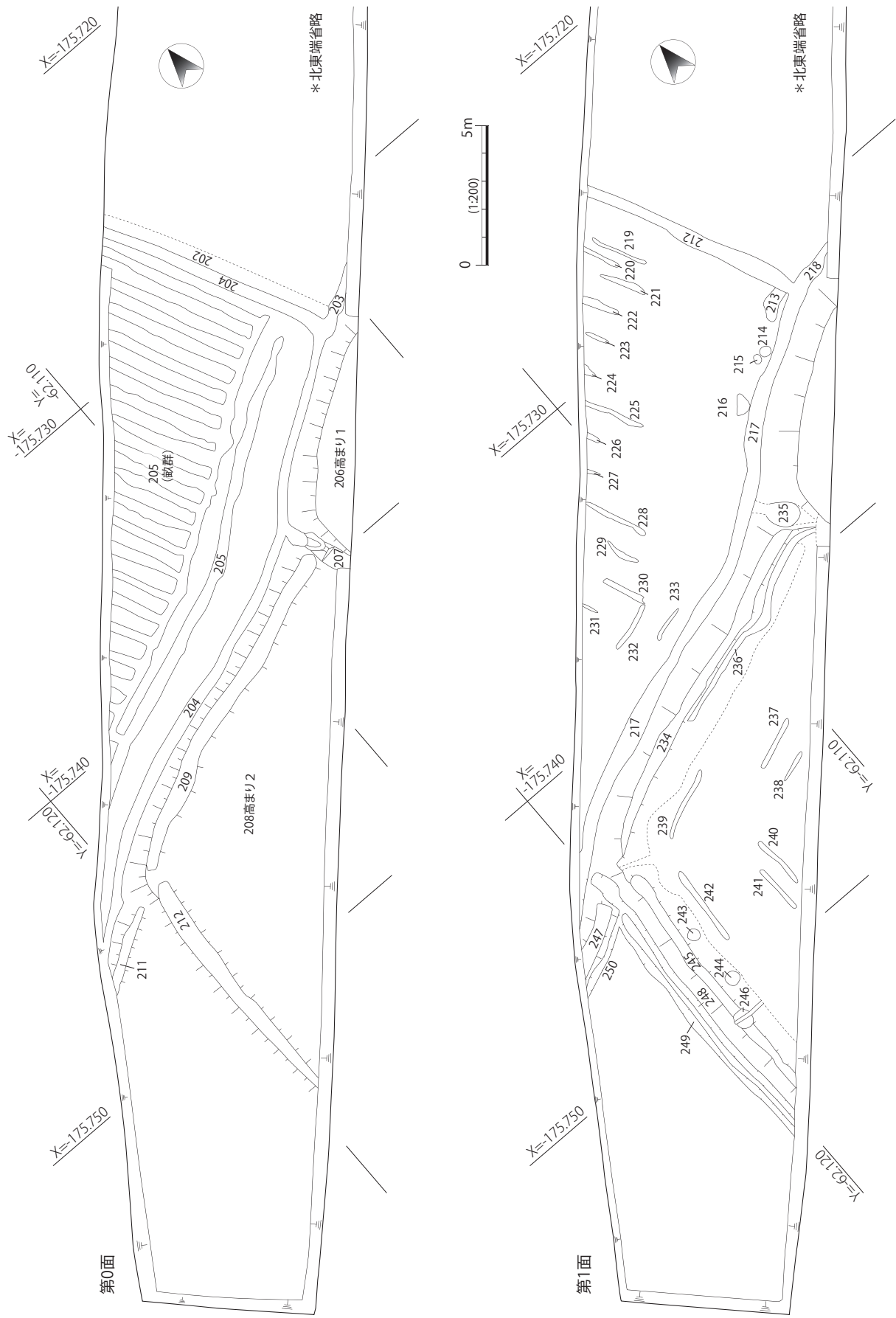


図45 湊遺跡 05-1-3tr.第0・1面 (S=1/200)

交方向の畝が1列だけ作られている。それと05-1-204溝との間は幅1.2mほどの空閑地があり、道であった可能性も考えられる。

この面で既に、05-1-205畝群のある耕地区画では常に全体から水が染み出すような状態であった。これはその南東にある05-1-206高まり1がシュートバーの砂層を基盤としているためそれが水脈となりこの区画に浸透するためである。地下水位も高く排水不良の耕地であったと想像がつく。

2、第0層包含遺物

第0層は05-1-3tr.以外にも1・3tr.で、攪乱と加圧を受け、第1層と混ざるような状態ながら残存していた。そのため、1・3tr.では第0・1層として遺物を取り上げた。

05-1-3tr.の第0層からは比較的多くの遺物が出土した(表11)。最も多いのは磁器の染付けで、陶器類より多いのは上町東遺跡の中位段丘崖盛土の状況と似る。中位段丘崖に隣接するトレンチで、その影響を受けているのであろう。瓦もいぶしがほとんどで、丸瓦と平瓦の比率は1対2に近い。

須恵器は少ないが、飛鳥時代の坏蓋と飯蛸壺が出土している。ここより50mほど北西、開析谷内下流側で、飛鳥時代の飯蛸壺が大量出土した調査区があり、それと関連する遺物かもしれない。

1・3tr.の第0・1層包含遺物も数は少ないがおおむねこと同じ傾向を示す。

図46の1～5・14～16が05-1-3tr.第0層、17～19が3tr.第0・1層出土遺物である。

1は染付け碗片。残存率40%ほど、口縁部周30%残存。見込みにわずかに降灰痕、桔梗文は手描き。外面はかなり釉厚く、口縁端部のみ釉ハギ。高台内に描かれた渦福はかなり崩れている。

2は陶器鉢片。残存率10%ほどか、高台部周60%残存。内面は見込みに重ね焼きの胎土目が残る。外面は高台よりやや上から露胎で、回転ナデ。高台内面は中ほどに1条回転ナデが残るが、その上下を回転ケズリ。釉は灰オリーブ～オリーブ色5Y5/3~5/4に発色、露胎は浅黄色2.5Y7/3を呈するが、高台端部付近のみ灰白色5Y7/1。

3は須恵器坏蓋片。残存率40%、口縁部周も同じ。内面は回転ナデ。外面は天井部に一定方向ナデ、その周縁部に回転ケズリ、屈曲部以下は回転ナデ。器表は灰色N5/0、断面は灰褐色5YR5/2を呈す。胎土に3～1mmの石英あり、1mm弱の長石若干あり。飛鳥Ⅱ期頃のものである。

4は須恵器飯蛸壺片。残存率15%ほどか。内面は回転ナデ。外面は、吊手部は孔周囲にナデ1周の他、棒状工具によるナデ、肩部以下はへら状工具によるタテナデ。孔内は片方からのみ指を入れてナデている。器表は灰白色7.5Y7/1、断面は灰白色5Y7/1を呈す。胎土に0.5mm強の長石あり、1mm弱のチャート1粒あり。胎土・焼成とも明らかに陶邑産ではない。

5は木製荷鞍輪。木の枝分かれ部分を利用して作られている。図左の丸味を帯びた面が正面か。頂点と左下に六角形の孔があり、右の欠失部にも左の穴と対称位置に孔の痕跡残る。その三つの孔の中間に左右対称に長方形の孔があり、片方には木質が詰まって残る、居木の柄か。

14は泥面子。型押しで、裏面にはユビオサエ・ユビナデが見られ、小さな粘土塊が一つ付けられている。表面の様子は人の顔で、おそらく力士か。器表はにぶい赤褐色5YR5/4を呈す。胎土に粗砂なく、微細粒に石英・黒色砂粒あり。

15は真鍮製煙管吸口。合わせ目が縦に残る。最大径9mm、最小径3mm、長さ5.35cm。

16は白磁紅猪口片。残存率40%ほど。釉は内面のみで、一部口縁から外面に垂れる。

17は一銭銅貨。表は「一銭」と縦に書く上に菊紋の左右に「以百枚換一圓」とあり、裏面には「大日本 1SEN」「明治十八年」とある。

表 11 湊遺跡 05-1-3tr. 第 0 層 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別	破片数	%	大器種		小器種		型式 部位	破片数	%		
					破片数	%	破片数	%					
土器	150	土師器	136	90.7	皿	3	2.2						
					蛸壺	6	4.4						
					焙烙	6	4.4						
					すり鉢	1	0.7						
					七輪	1	0.7						
		須恵器	14	9.3	坏	1	7.1	蓋	1	100.0			
					壺	3	21.4						
					甕	7	50.0						
					こね鉢	1	7.1						
					飯蛸壺	1	7.1						
		瓦質	8	5.3	すり鉢	1	12.5						
					羽釜	1	12.5						
瓦器	16	10.7	椀	1	6.3				高台	1	100.0		
			皿	1	6.3								
陶器	164	施釉	140	85.4	碗	7							
					壺類	1							
					雪平	9							
		無釉	24	14.6	すり鉢	1	4.2						
磁器	227	青磁	13	8.7	碗	3	23.1						
					白磁	47	20.7	碗	5	10.6			玉縁 口縁 玉縁 以外
		染付	163	71.8	紅猪口	2	4.3						
					碗	5	3.1						
					華瓶	1	0.6						
瓦	土師質	2	3.3	丸	1	50.0							
				平	1	50.0							
	いぶし	59	96.7	丸	16	27.1							
				平	43	72.9	軒	1	2.3				
土製品	70	土錘	69	98.6									
		泥面子	1	1.4									
木製品	5	板	2	40.0									
		鞍橋	1	20.0									
金属製品	1	煙管	1	100.0									
木片	2												
炭	1												
貝	1												

18は寛永通宝。「寛」と「通」の字は磨滅する。

19はサヌカイト製チップ。ネガ面の右辺が原礫面、上辺が打撃面。ネガの打点は本品より左にあり、ポジの打点は打撃面と原礫面の角である事から、剥離面調整のためのチップと思われる。全体にかなり磨滅する。重さ 3.28g。

第0層は明治30年に開通した南海本線の敷設まで耕土として機能していた事は確実だが、近世の遺物も豊富で、中には17世紀まで遡ると見て良いものも含まれる。しかし、それが耕土機能時の上限を示すものとはなるまい。あくまでも第1層包含遺物の下限がこの層の上限となるのであり、それからすれば第0層の成立時期は遡っても江戸時代後期に収まると思われる。

第4節 第1面

1、面の状況

先述したように、1～3tr.では、工事前仮設道路敷設時の攪乱・加圧が第1面にまで及んでおり、遺構面は残存していなかった。第1面の面的調査を行えたのは05-1-3tr.のみである(図45)。

鋤溝は第0層床面としての遺構であり、その他に05-1-208高まり2上の面では、第0層の畦畔基底部の痕跡も確認できた(平面図に点線で表示)。

しかし、畦畔・溝類は第0面とは全て若干位置を変え、連続した遺構ではない。05-1-212溝は第0面の05-1-202畦畔より北東に位置し、溝の両肩で若干の段差を成す。北東肩側には畦畔があるはずだが、確認できなかった。高まりから北西の段差はより裾部が張り出し、その直下に05-1-207溝が走る。平面的には05-1-204・205溝の間に位置する。

その北西の区画の鋤溝は一部しか第0面の畝に対応しない。この区画は05-1-233鋤溝や05-1-213水口の位置を見れば、水路とは小畦畔で画され、道はこの時点ではないと思われる。

05-1-208高まり2やその南西隣の耕地区画で、畦畔の裏に沿って水口に伸びる溝が見られる。また、05-1-245畦畔は高く残存していた位置で05-1-246水口が切られている。排水のためのものと思われ、水田から水を抜く時期に埋没した可能性を感じさせる。

遺構出土の遺物は非常に少なく、05-1-215ピット・05-1-218溝・05-1-235溝等から染付け・陶器・いぶし瓦の破片が出土しているが、少数の細片で、図化に耐えない。

2、第1層包含遺物

第1層単独で遺物の取り上げができたのも05-1-3tr.のみである。量的には第0層包含遺物が682片であったのと比較すると119片と6分の1近くに激減している(表12)。むしろ耕作地内としてはこちらの方が普通であろう。ただし、染付けが最多であるなど、構成はあまり変化がない。

図46の6・7・20・21がその中で図化できたものである。

6は土師器高環脚柱部片。上部側面には腕部と脚部の接合部外周に付加した粘土の剥離痕が認められる。内面にはシボリ痕。器表は淡黄色2.5Y8/3、断面は灰白色2.5Y7/1を呈す。胎土に1mm前後の石英あり、2～1mmのチャート若干あり。庄内式土器の脚柱部の短い腕形高環である。

7は鉄釉陶器徳利片。内外面回転ナデ。外面に白泥で字を書く。「和」か。釉は灰黄褐色10YR4/2、断面は褐灰色7.5YR5/1を呈す。胎土に1mm弱の石英わずかにあり。

20は鉄製刀装飾金具。錆びて判然としないが、表に桐文が三つ並ぶようである。裏には折れた突起が一つ残存する。幅3.7cm。

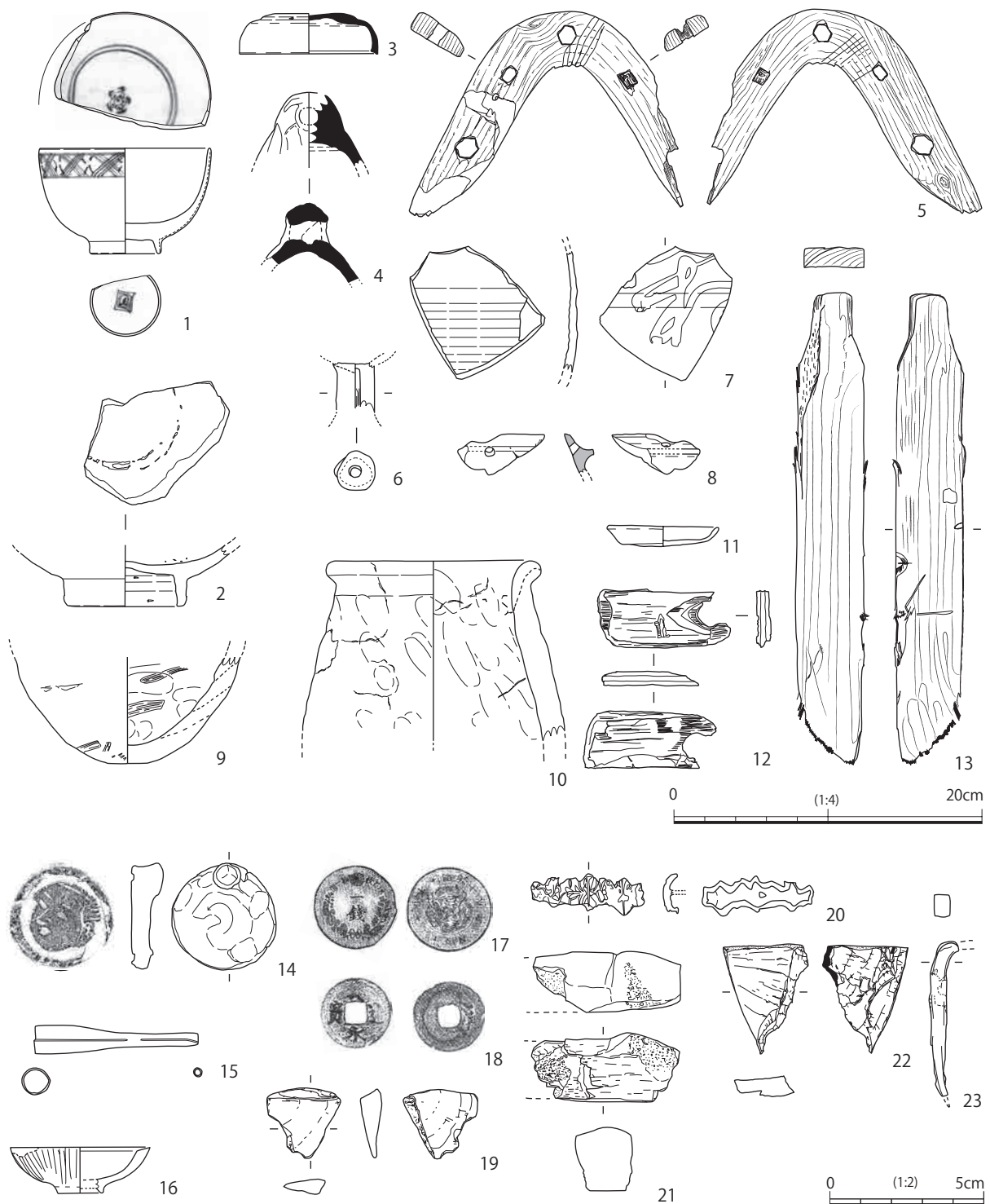


図46 第0～2層出土遺物(土錘除く)

{第0層:1～5・14～16、第0・1層:17～19、第1層:6・7・20・21、第2層:8・22・23、3tr. 第2層相当ブロック土:9～13}

(1～13:S=1/4、14～23:S=1/2)

21 は不明土製品。断面の下辺は平滑な無調整、両側辺はヘラキリ、上辺は丸味を帯びる。おそらく、板状の粘土塊を板の上におき、ヘラで切って棒状の形にしたものか。土師質だが、一部還元的雰囲気で見泡している。器表はにぶい黄橙色 10YR6/3、一部青灰～黒色 10BG6/1～5Y2/1。胎土に粗砂は含まず、微細粒に石英わずかにあり。窯道具の一種か。

遺物からは近世という他、時期を限定できる要素はあまりないが、近世初頭までは遡らないと思われる。

第5節 第2面

1、面の状況

北東側の低位段丘崖から見ていくと、段丘崖は段丘構成層が削り込まれ二段状に成形されているが、段丘崖下に大きな攪乱があり、下段の一部にもそれが及んでいる。下段平坦面から攪乱内に径40～50cmほどの礫が多くあったが、コンクリートが付着したのものが、現代のものである。

段丘崖下には鋤溝・溝・若干のピットが見られる（図47）。いずれも第1層系の埋土で、第1層床面遺構である。1tr. 南西端近くの014溝は北東肩部が南西肩部のより10cm弱ほど高く、ここに段差と溝を伴った耕地区画があったようである。

それより南西側の区画は、018・103溝がゆるく弧を描き、周辺の鋤溝などもそれに沿った方向性を示すので、区画自体も弯曲した形状であった可能性が高い（図48）。

河岸段丘由来の段差 その区画の南西端は2tr. 中央付近の128畦畔で、ここで南西側に40cm強の比高差をもって落ちる。この段差は、遺構の所で後述するが、この段差南西側の下層にある147流路によって形成された河岸段丘を踏襲したもので、現代の耕地区画の中でも明確な段差として残る。

2tr. 南西端付近の124落込は埋土が第0層系で、第1面からの切り込みと思われる。127落込は第1層系埋土。どちらも2・3tr. 境の現行水路に近いので、水路からの溢流による浸蝕やその補修などに関係するものと思われる。

第2面古・新 3tr. は北西と南東の耕地区画に二分されるが（図49）、北西側の耕地区画が大きく変化する。元々はその区画は水路をはさんで2tr. 南西側の耕地区画よりさらに45cmほど低い区画であったが、大量の洪水砂によって盛土され、その上に耕地区画の一面に集中して掘られた大型土坑群から採取された粘質土で床土を貼り、ほぼ同じ高さになった。3tr. 内の南東の区画とは段差が逆転し、北西区画がわずかに高くなる。この過程の詳細は遺構の項で後述する。

その造成された床土上面は第1層の床面になり、これを第2面新、貼り床や盛土を第2層新、その下の元々の旧耕土第2層上面を第2面古とした。3tr. 南西の耕地区画は単独の第2面のみである。

南西側区画の第2面は第1層系埋土の耕作痕・水路のみがあるが、畝溝状のものが多い。また、段差際に走る218溝とそれに直交する234・235溝は水路と思われ、北西区画と段差が逆転した第1層耕土時の水まわりを示すと共に、その時点でこの区画がさらに二分されていた可能性を示す。

第2面新も似たような状況だが、230水口なども見られる。北西から南東の区画に向かう溝もあり、調査区北西外に現行水路が存在するので、第2面新成立後は、水路からこの区画を通じて南東の区画へ

表12 湊遺跡 05-1-3tr. 第1層 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別		大器種				
		破片数	%	破片数	%			
土器	72	弥生	1	1.4	高坏	1	100.0	
		土師器	62	86.1	蛸壺	16	25.8	
			須恵器	6	8.3	すり鉢	1	1.6
						甕	3	50.0
		瓦器	3	4.2	こね鉢	1	16.7	
陶器	12	施釉	8	66.7	碗	2	25.0	
		無釉	4	33.3	すり鉢	3	75.0	
磁器	28	青磁	3	10.7	碗	1	33.3	
		白磁	4	14.3	碗	2	50.0	
		染付	21	75.0	碗	6	28.6	
瓦	6	いぶし	6	100.0	華瓶	1	33.3	
					丸	3	50.0	
金属製品	1	鉄製品	1	1.4	平	3	14.3	

配水する水回しが可能になったと思われる。

この面で特徴的なのは貼り床のブロック土がはっきり見え、その構成比率が途中で変わっていく事で、それにより床貼り作業の単位が確認できる（図 49 点線）。

第 2 面古（図 50）では 3 tr. 南西側に大型土坑が集中する（266・267・271～276 土坑）。貼り床に使う粘質土を採取するために掘られたもので、その後に洪水砂が入れている。

大型土坑で破壊された部分以外は洪水砂盛土直下で畦畔などが良好に遺存していた。浅い掘削痕（260・265）やその掘削土を横に置いた土盛り（259・264）までが遺存している。

畦畔は 5 m ほどの幅を基本として平行に並ぶものが多いが、北東側では間隔や方向に乱れがあり、自然地形に基づいた耕地区画に近い事を示す。南東区画との段差もこの部分ではやや曲がるように調査区外に抜けるので北西区画自体が鍵形に曲がるのかもしれない。

これらの畦畔は画される各区画に高低差がなく、256 溝をまたぐ形で 257 畦畔が作られている事などから、非恒常的な小畦畔と考えられる。

南東区画との段差斜面には杭及び杭痕が並んでいた。大型土坑に縦に削られて残った杭もあるので、第 2 面古の時点で段差土留めのために打たれた杭と思われる。

第 2 面古の耕地区画は 3 tr. 南西端手前、276 土坑の南西側で終わり、そこから南西は段差をもって上がり、南東区画と同じ高さになる。これは、05 - 1 - 3tr. の第 5 面シュートバー 1 の高まりがそこまで伸びてきているからで、その高さで 05 - 1 - 3tr. の第 2 面（図 51）に続く。

05 - 1 - 3tr. の 05 - 1 - 262 石詰暗渠以北では、第 2 層は薄くしか残存しておらず、直下層が第 5 層の砂層であるため、第 1 層掘削時に第 2 層もはがれ、実質は第 2 層の床面で削平され平坦になった第 5 面が露出した。その部分で検出された 05 - 1 - 254～265 の各遺構は第 2 層耕土時の遺構である。

05 - 1 - 260 溝の南西隣に高低差 10 cm 弱の直線的な段差が見られるが、05 - 1 - 254・256 溝の形状を見れば、さらに古い段階では第 5 面後背湿地 1 が埋没した輪郭（図 51 で 05 - 1 - 256 溝の西側の点線）が段差であった可能性が考えられる。それらの溝に取り付く 05 - 1 - 253・255 溜井は、一応溜井としたが、検出時の深さは 15 cm 程度で、さほど深いものではない。

この北半部分の西端で東西に長い長方形をなすような区画を検出した。上面には第 2 層はかぶらず、埋土はブロック土。底面は凹凸が激しく、掘ってすぐに埋めたようである。埋土のブロック土に第 2 層系の土が混じり、方向性が北東の段差と合うので、第 2 層耕土時の新しい時期に掘られたものようである。単独の遺構として把握できるか分からず、遺構番号は付けていない。

高まりの北西裾には 05 - 1 - 262 石詰暗渠が検出された。第 2 面検出時点で、高まりの斜面を強めに掘削し、第 5 層の砂礫層を露出させたので、第 2 面成立時の暗渠は斜面堆積の下にあった可能性が強い。高まり北西斜面北東半には杭が多く検出された。暗渠の石に当たって止まっている杭もあり、暗渠より後に、数次に分けて打たれたものと思われる。

05 - 1 - 206 高まり 1 ではこの面で初めて遺構が検出された。05 - 1 - 264 溝がそれだが、肩部に掘られた形状といい、遺構の性格は判然としない。05 - 1 - 208 高まり 2 やその西側の区画に見られる鋤溝などは第 1 層の床面遺構である。西端の区画の北東側は第 2 層直下に第 5 面シュートバー 3 の砂礫層があるため、第 2 層自体もかなり砂質になっていた（点線の北東側）。

以上、第 2 面を概観すると、2 tr. 中央の河岸段丘由来の段差より北東側は、一つの耕地区画も大きく、かなり安定した耕地である印象を受ける。

それに対し南西側は耕地の高低差も激しく、耕地区画は不定形で小さい傾向があると言える。その由来は下層のシュートバーや後背湿地であり、3 tr.に見られる洪水復旧の跡で分かるように、この面の時点でも洪水を受けており、耕地化されたと言っても氾濫原的な環境であったと言える。

しかしまた、この面では幹線的な水路が検出されていない。それは2 tr.・3 tr.・05 - 1 - 3 tr. 境にある現行水路の位置に、この面で既に幹線水路が位置している事を示す。基本的には現代に引き継がれてきた耕地区画の基本が出来上がっていると言えよう。

2、主な遺構

1) 012 柱穴 (図 47)

1 tr. 中央付近南西壁寄りで何故か単独で検出された柱穴である。平面形は約 35 cm 四方の隅丸方形を呈し、深さは 20 cm 強。埋土は第 1 層系で抜き取り穴を確認している。しかし他に周囲に柱穴はなく、判断しにくい遺構である。埋土から管状土錘が 1 点出土している。

図 52 - 7 がそれである。全長 3.96 cm、最大径 0.95 cm、孔最小径 0.32 cm、重さ 3.38g、上町東遺跡での分類の小型Ⅱ類にあたる。器表は明赤褐色 2.5YR5/6 を呈し、胎土に石英・長石わずかに含む。胎土分類では上町東遺跡のタイプ b に当たる。

2) 河岸段丘崖由来の段差 (128 畦畔・113 溝・114 畦畔痕跡) (図 48)

2 tr. 中央の段差である。先述したように下層第 4 面の 147 流路によって形成された河岸段丘に由来し、現在の耕地区画にも継続している段差である。

128 畦畔は幅 60 cm～1 m、北東側からの高さは 15 cm ほど、南西側には 60 cm ほど下る。北東側の第 2 層は第 1 層に削平され、この畦畔際までは遺存していない (図 41)。この畦畔自体は第 3 層から第 1 層耕土時まで継続して使用されている。その南西側斜面裾部には杭が多く打ち込まれていたが、第 2 面では上に突出しているものがほとんどで、この畦畔を芯として、第 1 面以降に新たに土を盛った時点での土留めの杭と思われる。

裾部には 113 溝が接している。幅 50 cm 前後、深さ 10 cm 前後。底部のレベルに特に傾斜は見られないが、おそらく水が北西に流れる水路であろう。

その南西側には削平されているが 114 畦畔痕跡を確認した。南西側の第 2 層耕土との層境が見えるので、第 2 層耕土時の畦畔である。耕土から 113 溝に向けて水口を開けた痕跡も確認できた。

遺物は 113 溝から須恵器甕の小片が 1 片出土しているのみだが、開析谷内の主要な耕地区画ラインの一つと言える。

3) 214 溝 (図 49)

3 tr. の北西耕地区画の第 2 面新北東側に位置する。調査区を北西から南東に抜ける溝である。幅約 30 cm、深さ 10～15 cm。底面のレベルはわずかに南東に傾斜する。

北西耕地区画は調査区外に現在もその続きの区画が見られるが、その北西辺に現行水路が走っている。第 2 面新が南東の区画より高くなった事で、水路から取った水をそのまま南東の区画にも配水できるようになったが、214 溝はそのための溝である可能性が考えられる。

遺物は土師器小片 2、瓦質土器小片 1 と完形の小型管状土錘が 1 個出土している。

図 52 - 8 がその土錘である。長さ 4.65 cm、最大径 1.16 cm、孔最小径 0.34 cm、重さ 5.47g。橙色 5YR6/6 を呈し、胎土に粗砂を含まない。今回の湊遺跡の調査では小型管状土錘の中で最も重い。第 4 章第 5 節の分類で小型Ⅲ類、胎土はタイプ a にあたる。

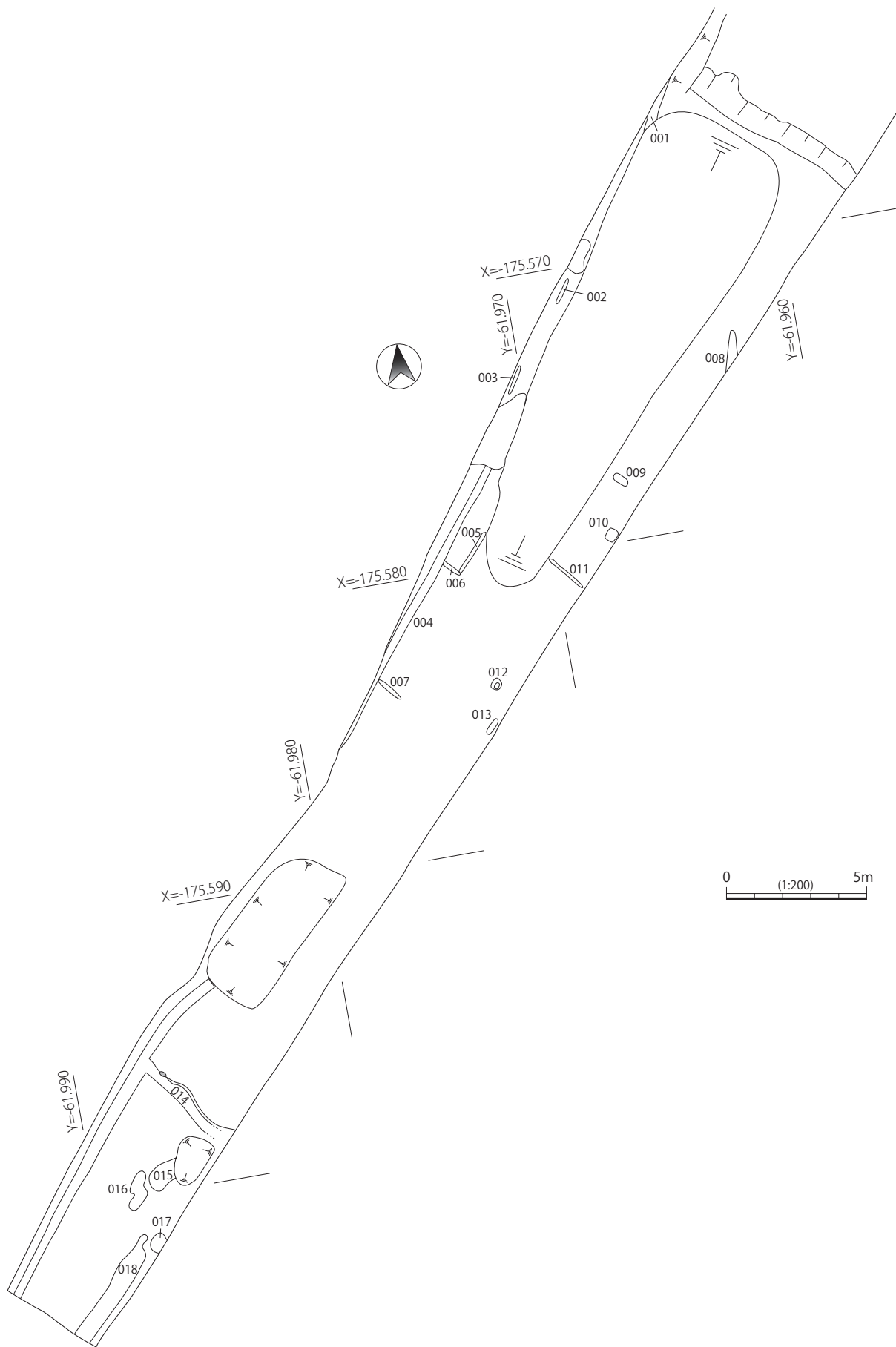


图47 湊遺跡 1tr. 第2面 (S=1/200)

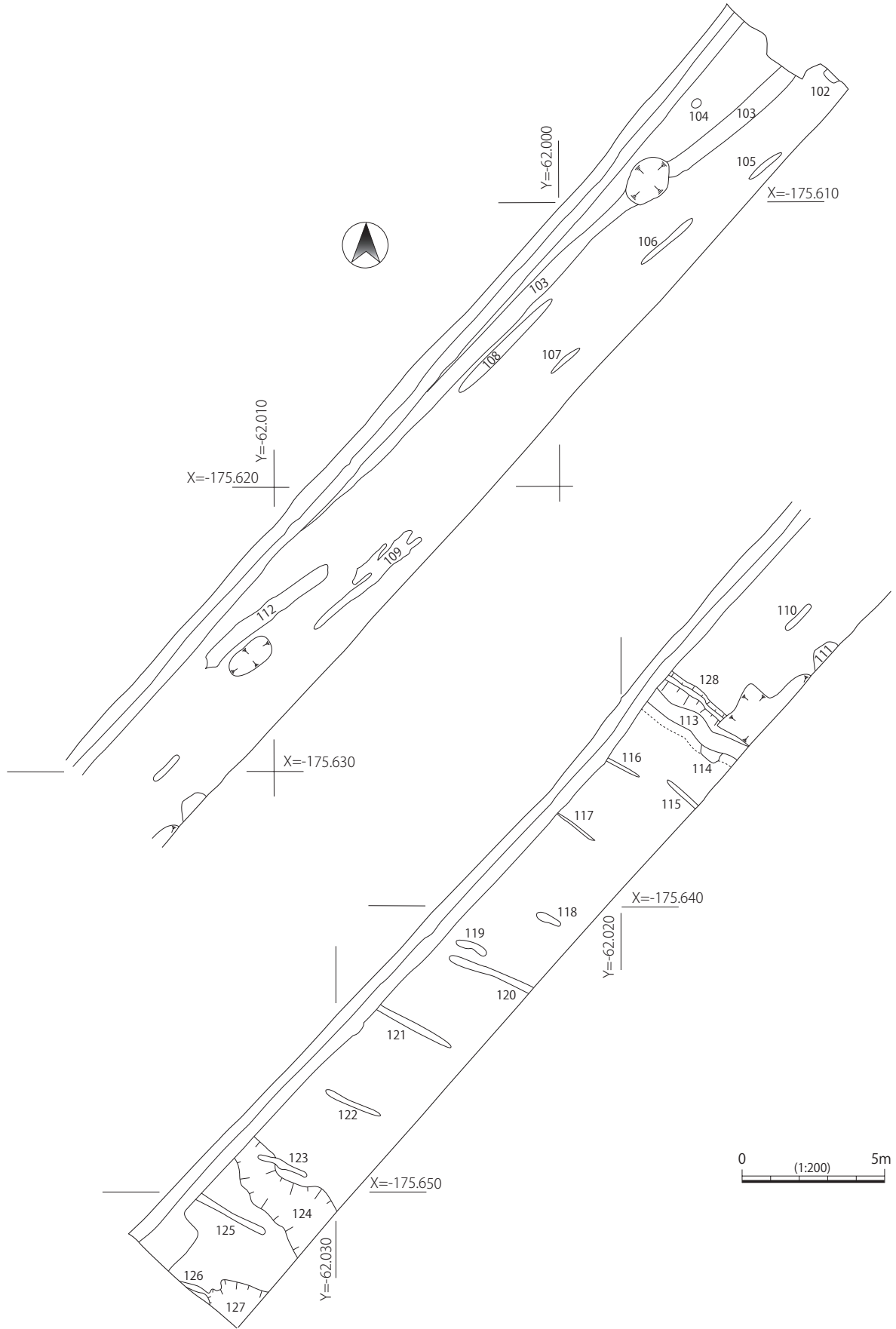


图48 湊遺跡 2tr. 第2面 (S=1/200)

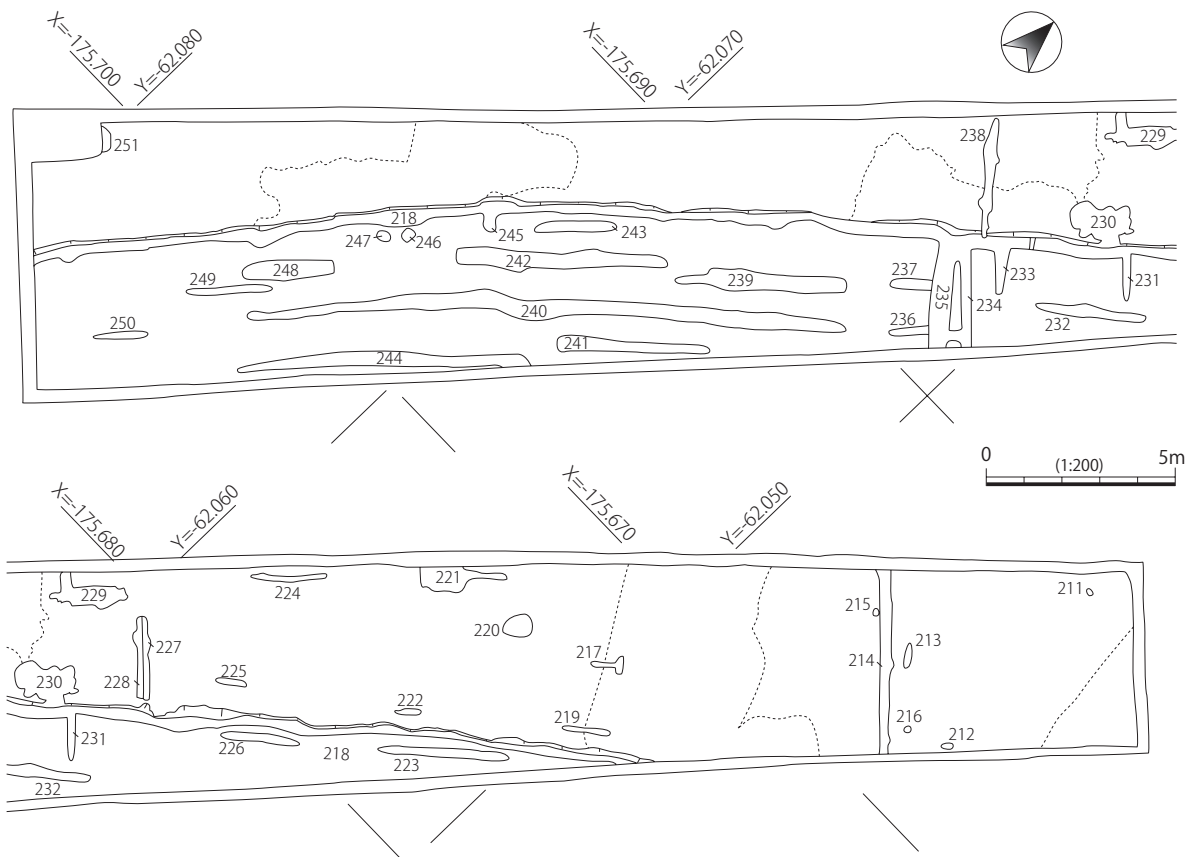


図49 湊遺跡 3tr.第2面 (S=1/200)

4) 218 溝 (図 49)

3 tr. 南東側区画の北西辺を走る溝である。第 2 面古相当の時には畦畔があるべき位置であり、北西区画の第 2 面新から水口が通じているので、第 2 面新相当の時期の遺構である事が分かる。幅約 20 cm、深さ 5 ~ 10 cm。底部のレベルを見るとおおかたは 234・235 溝が取り付けしている位置にわずかに傾斜するが、そこから南西側で、南西端までの半分は南西に傾斜している。南東辺には 3ヶ所水口が開くが、近接して平行する鋤溝も多く、恒常的な畦畔はなかったようである。耕地区画内の導水・配水時に水まわりを円滑にするために掘られた溝か。

遺物は、土師器 3 片、須恵器 1 片、陶器は 8 片で施釉も挿鉢もある。白磁 2 片、いぶし瓦 1 片と完形の小型管状土錘 1 個が出土。図化できたのは土錘のみである。

図 52-9 がそれで、長さ 3.93 cm、最大径 0.97 cm、孔最小径 0.35 cm、重さ 2.93 g。灰赤色 2.5YR6/2 を呈し、胎土に粗砂なし。第 4 章第 5 節管状土錘分類の小型Ⅱ類、胎土はタイプ a。

5) 234・235 溝 (図 49)

3 tr. 南東区画で 218 溝に直角に取り付く 2 本の溝である。234 溝は幅約 20 cm、深さ 10 ~ 14 cm。235 溝は幅約 55 cm、深さ 11 ~ 15 cm。平行して走る溝だが、底面のレベルは 234 溝は北西に傾斜し、235 溝は南東に傾斜する。2 本で給水も配水もできる仕組みか。そうなるとある程度恒常的な溝であった可能性もあり、北東隣にある 233 水口との間が 60cm ほど空くのは畦畔があった可能性を思わせる。だとすれば南東耕地区画を二分するような形になる。ただ、235 溝に切られる鋤溝もあり、第 1 層成立当初ではまだなかったと見てよい。

遺物は、234 溝は土師器小片 1 のみである。235 溝は土師器片 5、須恵器片 1、瓦器椀片 2、陶器片 1、

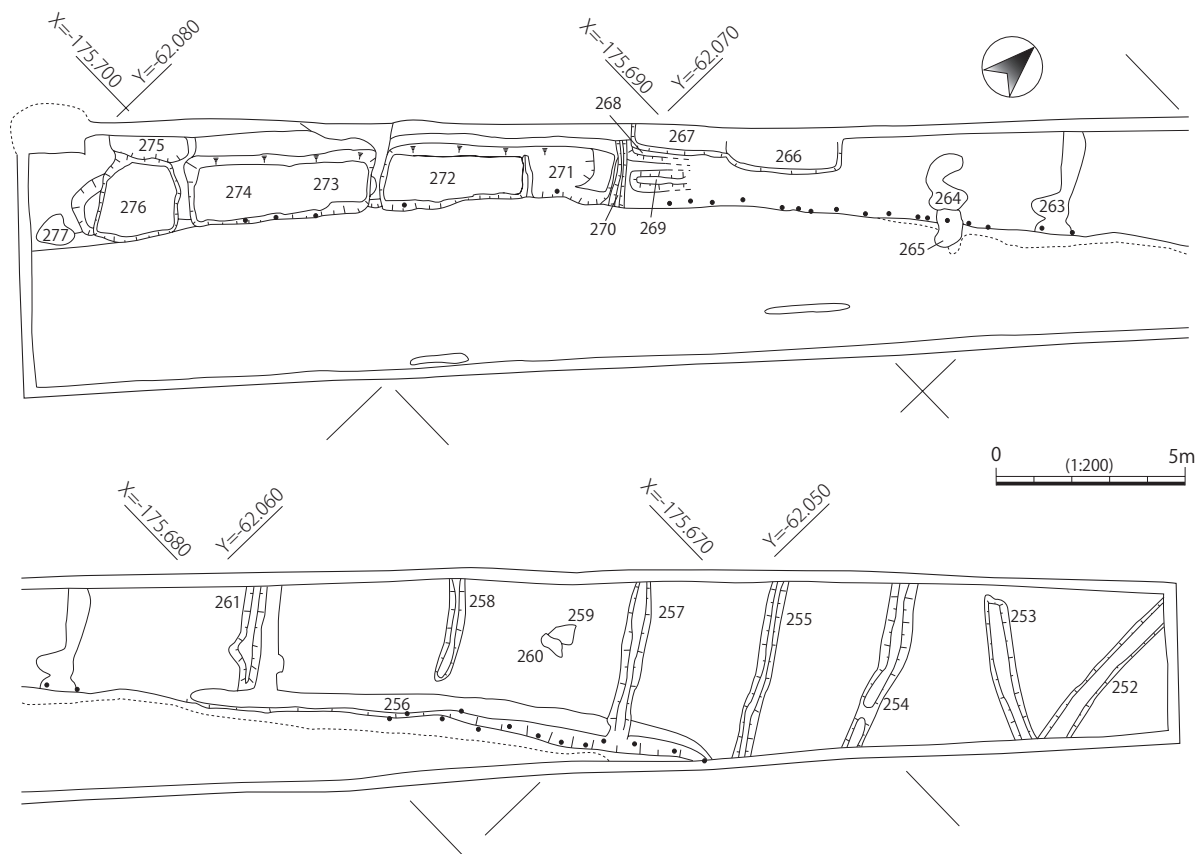


図50 湊遺跡 3tr. 第3・2面古 (S=1/200)

白磁片 1、いぶし瓦片 1、土錘片 1、砂岩製砥石片 1。土錘のみ図化できた。

図 52 - 10 がそれである。小型管状土錘の半分以下が残存か。最大径 0.97 cm、孔最小径 0.32 cm、にぶい橙色 2.5YR6/4 を呈し、胎土に石英・長石わずかにあり。胎土タイプ b。

6) 256 溝 (図 50)

3tr. 北西区画の第 2 面古で、南東区画からの段差の裾に走る溝である。最大幅 50 cm、深さ 10 cm 前後。底部のレベルは南西に傾斜する。261 溝が直角に取り付き、258・268 畦畔は溝の手前で途切れるが、257 畦畔は溝にかぶる。溝の深さが第 2 層古の厚さ内でもあり、畦畔もこの溝も、耕作毎に作り直す、非恒常的なものかもしれない。取り付いた 261 溝の底のレベルが北西方向に傾斜しているのと合わせて考えると、北西方向に排水するための溝と考えられる。この区画が第 2 面古と第 2 面新で、水回しの方向が変わっている証拠となる。

出土遺物は図 52 - 4 のみである。円形の木製板が割れたものか。復元径は 14.0 cm、厚さ 1.2 cm。端部は垂直だが、その下端の角を斜めに面取りしてある。柁目板。柄杓の底板にしては大きすぎ、曲げ物の底板としては厚すぎる感じがする。かといって樽の底板としては小さい。

7) 洪水復旧痕 (266・267・271～276 土坑、第 2 層新) (図 42・43・53・54)

3tr. で確認された洪水復旧の様相をここでまとめて述べる。最初に調査区の側溝で第 2 層新の砂層を確認し、洪水砂と考えた。次に粘質土のブロックを敷き詰めた第 2 面新を検出して人為的な床土と理解した。その後第 2 面古で大型土坑群を検出し、トレンチ断面で砂層が人為的に盛られた盛土である事と盛土の作業過程が確認され、洪水復旧の痕と理解できるようになった (図 53)。

第 2 面古には、洪水による浸蝕や、洪水そのものの堆積層は一切残っていない。冠水はしたかもしれ

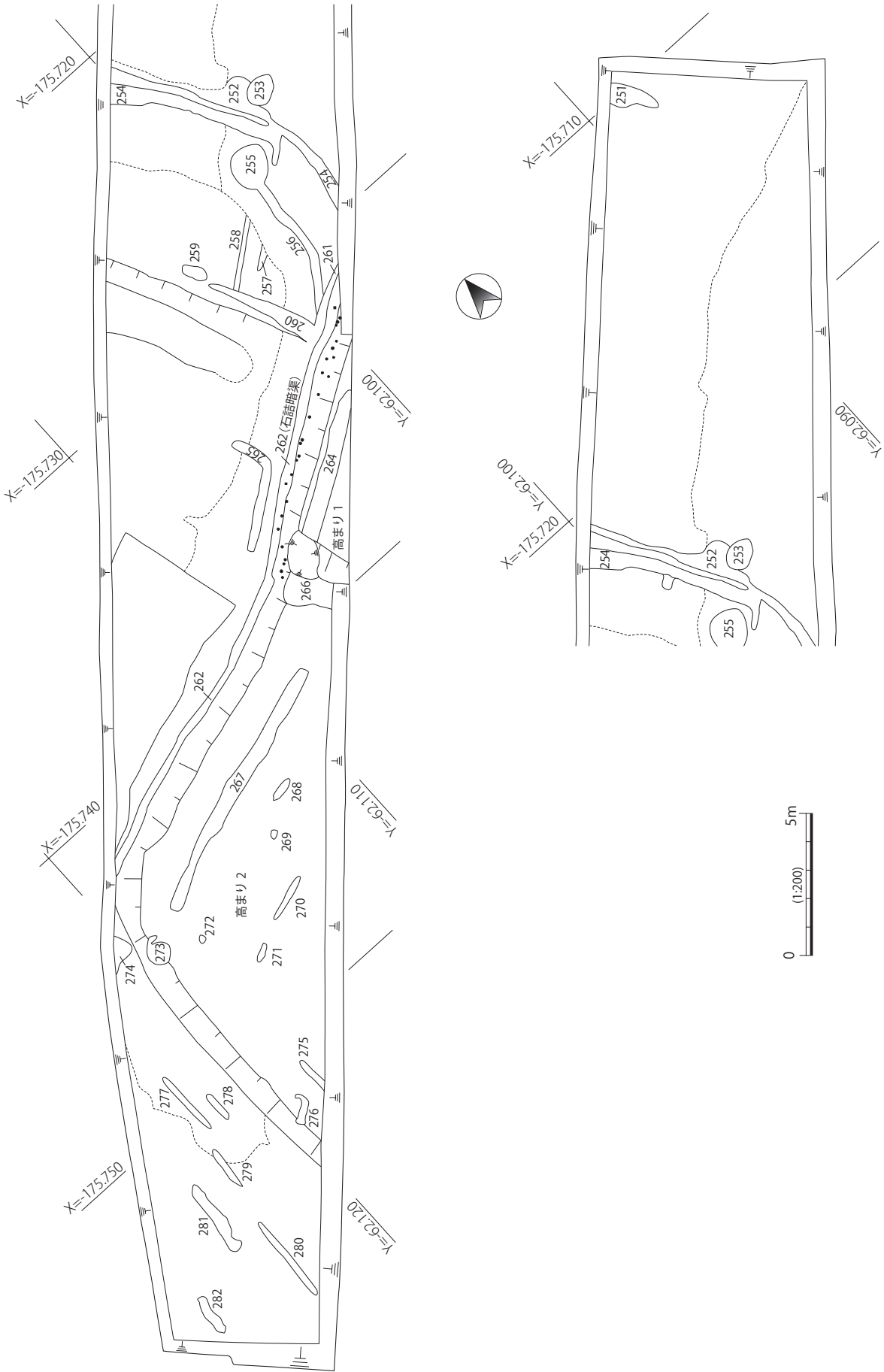


図51 湊遺跡 05-1-3tr. 第2面 (S=1/200)

ないが位置的に洪水堆積物が運ばれなかったのであろう。それも大型土坑群が掘られ、洪水砂を盛土する理由の一つとなったのかもしれない。

大型土坑群（図54）は北西耕地区画の南西側に集中しているが、その理由は明らかである。下が砂層であっても水田床土に使えるほどの粘質の土がこの付近で取れるのは、この位置、第4面326流路上層のみだからである。大型土坑はその層を確実に狙って掘られ、砂と植物遺体の互層となる326流路中層に至るところで掘削を終えている。

土坑は2基ずつが切り合い、かつ調査区北西壁にかかっているので一つの全体形が分かりにくい、273・276土坑を参考にすれば、幅2m前後で、長さは2～4mほどの長方形であるようだ。深さは60～90cm、壁はほぼ垂直に立ち、中には下のほうでえぐられている部分もある。底面は凹凸が激しくそのほとんどが鋤痕である。壁にも多くの鋤痕が残る。埋土は砂層で、土坑を埋めた後、さらに耕地区画全体に砂層が盛られるが、土坑内の砂層は上層と比べ非常に締りが悪い。

2基ずつの切り合いは、北東側が先に掘られ、それが砂層で埋められた後、南西の土坑が掘られる。275・276土坑だけは90度方向を変え、276土坑が先に掘られている。全てが連続して掘られたとすれば、266土坑が最初で南西に掘り進み、耕地区画の端で方向転換したように見える。

土坑の掘削土は一時どこかに仮置きしたのであろう。土坑群を洪水砂で埋めた後は、洪水砂系の盛土をし、その上に耕土系の盛土をし、最上部に大型土坑群の掘削土と思われる粘質のブロック土を薄く敷き詰め貼床とする、という作業を繰り返していく。トレンチ断面で見れば、その作業は北西壁では北東

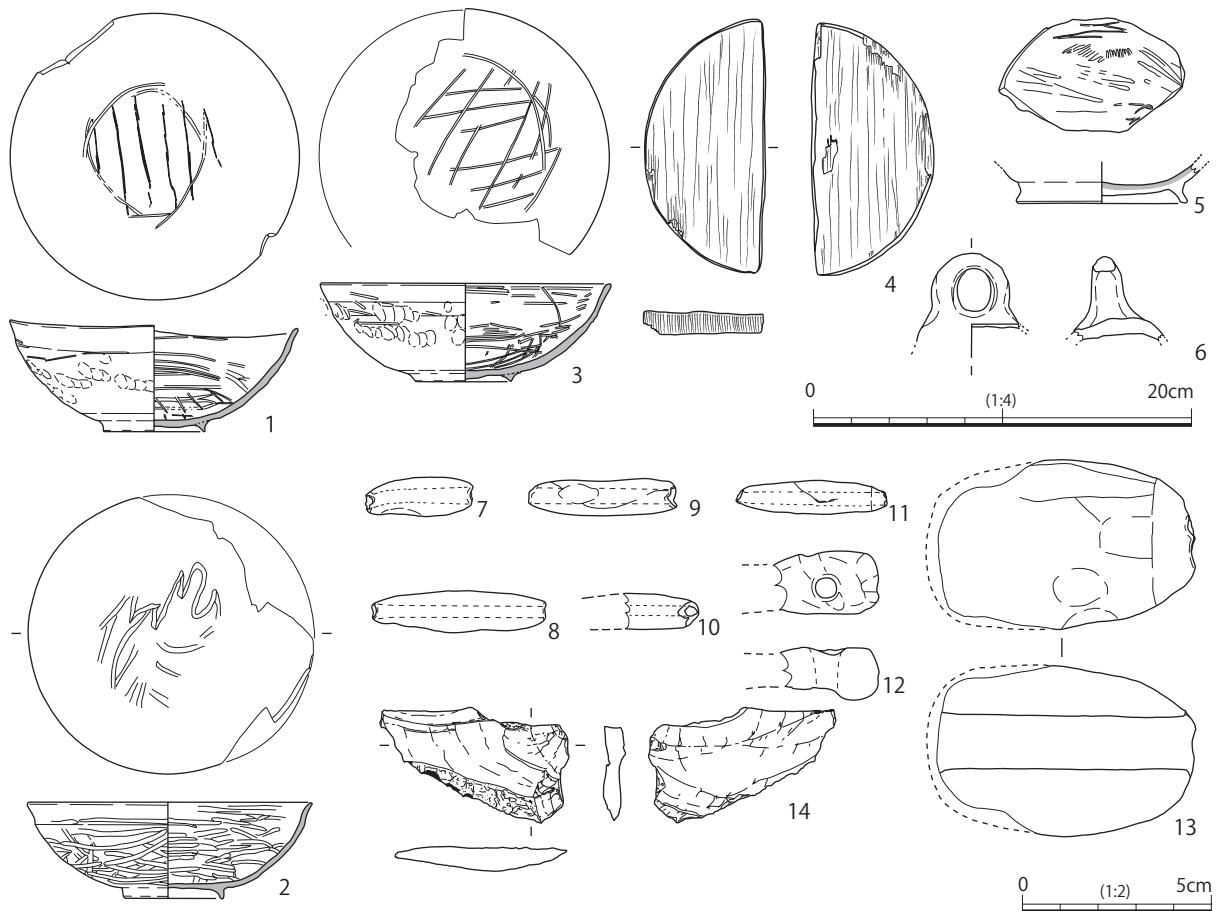


図52 中～近世遺構出土遺物 (1～6:S=1/4, 7～14:S=1/2)
 {第2面:7(012柱穴)・9(218溝)・10(235溝)、第2面新:8(214溝)、第2面古:4(256溝)・11(266・267土坑)・12(275・276土坑)
 第3面:1(071土坑)、2(067土坑)、第4面:5(158溝)・13(196土坑)、第4面新:6(302鋤溝)・14(287溝)、攪乱底部(第3面土坑群?):3}

から南西へ（図 42）、トレンチ両短辺では南東から北西へ繰り返していく（図 43）。作業単位の長さは 5m ほどのものが多いが短いものは 2m。

1 作業単位の端は 45 度ほどの傾斜面を成すが、その裾は正確に第 2 面古の畦畔に当たっている。第 2 面古の畦畔を 1 作業単位として、かつその土留めに利用していると思われる。

洪水砂系盛土は基本的にはラミナはない。そして、シルト～細砂のブロックが偏りなく散在する。そのブロックは中にラミナが見られ、洪水堆積物の中で、砂層の周辺に洪水終息時に堆積したものかと思われる。このブロックの存在から、砂層が人為的な盛土と分かった。

その上に積まれる耕土系盛土は、古土壌のような砂質・粘質のブロックが砂混じりに密集しているような状態だが、洪水砂を取り去った後、少し耕土の上面を削ったのか、巻き上げられて洪水砂と混ざったものを除去したのか、洪水砂が盛土に足りないためにどこかの耕土や土壌を追加したのか結論はできない。ただ、これにより上の床面の沈下や漏水を和らげる効果はあると思われる。実際、上の床面にひび割れや沈下の痕跡は認められなかった。

そして最後に 5～10 cm ほどの厚さで緻密なシルト主体の粘質土のブロックを敷き詰めている。その中の黒褐色系、黄褐色系のブロックは、大型土坑群が切り込んだ第 4 面 326 流路上層のものと同質である。この層は流路が後背湿地化して堆積していったもので、上面から砂粒の降下はあるものの、それ以外は緻密で淘汰が良い。有機分を含んだ黒褐色系シルトの堆積が先ず進み、最終段階で有機分が減り、鉄分が沈着した黄褐色系シルトが堆積する。

ただしブロック土の中にはこの調査区の中の 326 流路上層には見られなかった灰白色系シルトのブロックもある。流路の下流側にあるのか、また別の位置で掘削したのかは分からない。

これら一連の作業により、他の耕地区画の洪水堆積物は除去され、復旧したと考えられる。ただ、この耕地区画だけは復旧と言うより大きく改変された事になる。ならば何故、おそらく洪水の被害は少なかったであろうこの区画をわざわざ選んで改変したのであろうか。

洪水被害の中心に近かったのもあろうが、改変の一番大きな結果は耕地区画の嵩上げである。この耕地区画の調査区外北西辺に水路が走る事は先述したが、第 2 面古の段階では周囲に比べ格段に低い区画で、南西側も 05 - 1 - 3tr. 北東端のシュートバー 1 の高まりで閉ざされている。水路への排水も困難な区画であった事が推測される。05 - 1 - 3tr. 第 0 面の一番低い耕地区画で見られたように、地下水位も高く、根腐れをおこしやすいような状態であっただろう。

嵩上げすれば水路への排水も容易になり、下部は砂層なので、適度な通気性も期待できる。耕地としての質も上がるが、さらに北西辺の水路からここを通じて南東の区画へも配水可能になる。

この一連の作業は、耕作地の下層の状態を熟知し、洪水堆積物の総量を把握した上で、極めて計画的に行われたと考えられる。そして、洪水被害の復旧だけでなく、一つの耕地の質を高め、さらにその付近の給排水の体系も改善した事になる。その叡智には感嘆するばかりである。

遺物は大型土坑群からもわずかに出土したが、それらの埋土も基本的には第 2 層新の中の洪水砂系盛土に含まれる。第 2 層新の包含遺物を見ると（表 13）、土師器が最も多く、次に瓦器が多い。意外にも中世の遺物が多く、それに少数の近世遺物が混じる状態である。また、弥生土器・製塩土器、飛鳥・奈良時代の遺物も少数ながらあり、遺跡内の遺物を網羅したような出土状況である。中世のものが多いのは開析谷上流の檀波羅密寺跡に近い中世集落からのものであろう。洪水の水流が丘陵地帯を出た後、中世集落などが立地していた段丘を洗い、開析谷に流れ込んだような状況が想像できる。磨滅した小片が

表 13 湊遺跡 第 2 層新 遺物破片数集計表

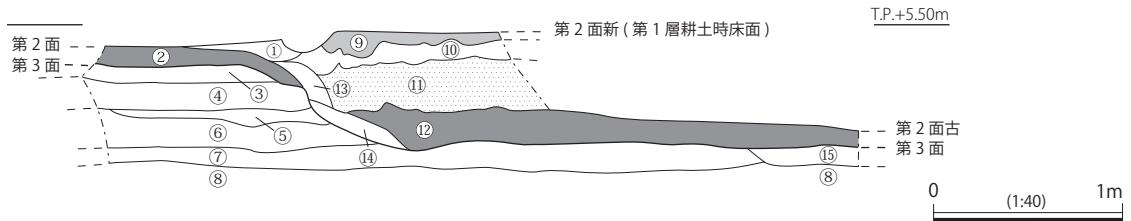
大種別	総数	小種別	破片数		大器種	破片数		小器種	破片数		型式 部位	破片数		細別	破片数				
			破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%			
土器	278	製塩	6	2.2		6	100.0		6	100.0	底部	6	100.0						
			弥生	5	1.8	甕	3	60.0		3	100.0	口縁	2	66.7					
							高坏	1	20.0		1	100.0	脚部	1	100.0	穿孔	1	100.0	
		土師器	199	71.6	小皿	23	11.6												
					蛸壺	16	8.0												
					甕	1	0.5												
		須恵器	10	3.6	蛸壺	3	30.0												
					こね鉢	1	10.0												
					坏	6	60.0	蓋	2	33.3		2	100.0	飛鳥	1	50.0			
陶器	28	施釉	21	75.0															
		無釉	7	25.0	すり鉢	3	42.9		3	100.0		3	100.0	備前	3	100.0			
磁器	16	白磁	4	25.0		2	50.0		2	100.0	玉縁 口縁	2	100.0						
		染付	11	68.8	椀	6	54.5												
					蓋	1	9.1												
青白磁	1	6.3																	
瓦	14	土師質	2	14.3															
		いぶし	12	85.7															
土製品	15	土錘	15	100.0															
石	3	巨礫	2	66.6															
		軽石	1	33.3															
発泡物	2																		
木製品	1	刀形	1																

ほとんどであるのもそれを裏付ける。

大型土坑群から出土した遺物のうち図 52 - 11・12 の土錘のみである。

11 は小型管状土錘。全長 3.99 cm、最大径 0.92 cm、孔最小径 0.35 cm、重さ 2.6g。灰赤色 2.5Y6/2 を呈し、胎土にわずかに石英あり。本書分類では小型Ⅱ類でピーク 1 に属し、胎土はタイプ c。

12 は棒状土錘片。最大径 1.75 cm、孔最小径 0.43 cm。橙色 7.5YR6/6 を呈し、粗砂は含まないが微細粒にチャート多し。胎土タイプ c。



3tr. 第2面古～新段差部分断面土色・土質

- ① 灰N4/0～10Y4/1砂質土 細砂～シルト主体、粗砂若干あり、第2面肩部盛土。
- ② 灰オリーブ5Y5/3～5/2粘質土 シルト～細砂主体、中砂～粗砂若干あり、小礫わずかにあり、Fe若干あり、第2層。
- ③ 灰N4/0砂質土 細砂～シルト主体、粗砂～極粗砂あり、斑状Fe若干あり、第3層。
- ④ 暗オリーブ5Y4/4～4/3粘質土 シルト～細砂主体、極粗砂～中砂あり、Feあり、第3層。
- ⑤ 灰7.5Y4/1細砂～中砂 シルト含む、(汚れた砂)、洪水堆積物か。
- ⑥ 暗オリーブ灰～オリーブ灰5GY4/1～2.5GY5/1シルト 極細砂若干含む、上部Feあり(暗オリーブ5Y4/3)、中砂の降下あり、第4層。
- ⑦ 灰N4/0～5/0細砂～中砂内にシルトのラミナや降下あり、第4層。
- ⑧ 灰N5/0細砂～中砂 ラミナあり、第4層。
- ⑨ 緑灰5G6/1(Feある部分は黄褐10YR5/6)シルトのブロック、第2層新盛土最上部貼り床。
- ⑩ 「灰N4/0～5Y4/1砂質土 細砂～シルト主体、粗砂あり」のブロック土、シルトの小ブロック・小礫含む、第2層新粘土転用盛土。
- ⑪ 「緑灰10G6/1細砂」内に「灰N4/0シルト～細砂」のブロック(径1～5cm)多くあり、第2層新洪水砂系盛土(シルト系ブロックも香水終息時の堆積か)。
- ⑫ オリーブ黒10Y3/1砂質土 シルト～細砂主体、粗砂～中砂あり、小礫若干あり、第2層古。
- ⑬ 灰N4/0砂質土 細砂～シルト主体、粗砂あり、段差斜面堆積か、第2面古時点。
- ⑭ 灰N5/0砂質土 細砂～シルト主体、粗砂若干あり、段差斜面堆積か、第3面時点。
- ⑮ 灰10Y4/1砂質土 細砂～シルト主体、粗砂若干あり、第3面遺構埋土。

図53 湊遺跡 3tr. 第2面古～新段差部分断面図(断面位置は図62にあり) (S=1/40)

大型土坑群内以外の第2層新から出土した遺物のうち、実測可能だったのは図46-9～13である。

9は土師器蛸壺底部片。内面は棒状工具による強いヨコナデ2条の後、ユビオサエ・ユビナデ。外面は磨滅が激しいが胴部に粘土継ぎ目残り、底部に蓆のような編み物の圧痕、底部側縁に棒状工具痕。破断面の粘土継ぎ目の間に、炭化した植物遺体が残る。器表・断面とも浅黄橙色10YR8/4を呈し、胎土に1mm弱の赤色粒・チャート若干あり、0.5mm強の石英・長石わずかにあり。

10は土師器蛸壺上部片。口縁部周は20%残存。内面は粘土継ぎ目残しながら、縦方向のユビナデ。外面も粘土継ぎ目残り、やや左傾の縦方向ユビナデやユビオサエ、頸部から口縁はヨコナデ。器表・断面とも浅黄橙色10YR8/4を呈し、胎土に1mm弱の長石あり、1mm前後の石英若干あり、1mm前後のチャートわずかにあり。

11は土師器小皿。残存度80%、口縁部周60%残存。内面は底部一定方向ナデ、口縁部ヨコナデ。外面は底部中央不定方向の粗いナデ、底部周縁ヨコユビナデ、口縁部ヨコナデ。器表・断面ともにぶい黄橙色10YR7/4を呈し、胎土に1mm弱の石英・チャート・赤色粒わずかにあり。

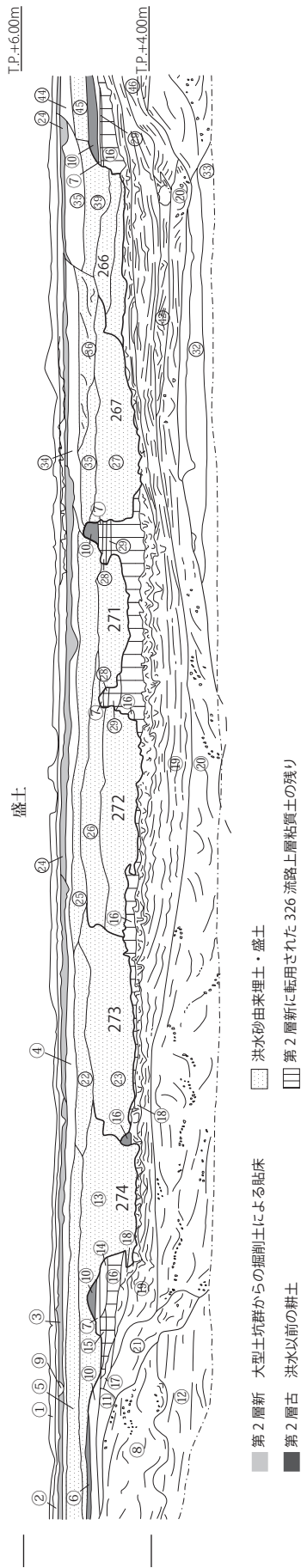
12は板状の木製品片だが、用途不明。上図の上下左の3辺は丸味を帯びる。右は半分欠失するが斜めに孔が開けられている。

13は刀形木製品か。元は杉樽材のようである。先端は粗く斜めに切断され刀の鋒部の形をつくるが、刃のように端部を鋭くする加工はない。茎部は両側から細く削る。

8) 05-1-262 石詰暗渠(図55)

05-1-3tr.で05-1-206高まり1・05-1-208高まり2の北西裾を走る。既往の調査では第

3tr. 北西壁断面に見る大型土坑群（法面は整形後、平面図の形状ではない）



大型土坑群平面図

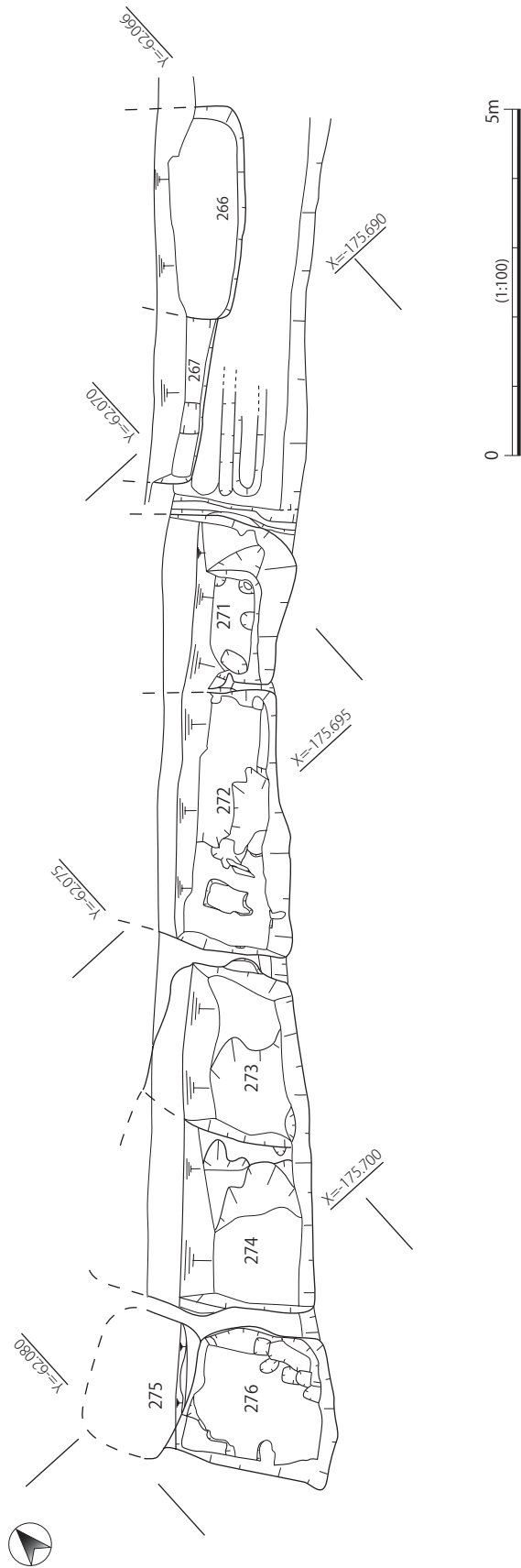


図54 湊遺跡 3tr. 第2面古大型土坑群 (S=1/100)

1面の05-1-217溝の続きと完全に重複していたためか、第1面相当面の底部に石を敷いた溝と理解されていたようである。

今回の調査では05-1-217溝とずれる部分が多く、実際にはこの第2面時点で高まり斜面に貼り付けた土の裾部で覆われていたようである。検出時の掘り方の規模は幅約30cm、深さ20cmほど。掘り方の底面は平坦で、壁は垂直に近く立つ。石はその壁面に立てるように入れられ、その間にまた石を入れる。上面は石の平たい面を上に合わせて、平坦な石敷きのような面を作ろうとしているが、丁寧に為されている部分と、雑な部分との差が顕著に見られる。

05-1-206高まり1の斜面には杭が打たれているが、径10cmほどの太いものと、3cmほどの細いもの、さらに竹製のものが見られ、並びに規則性はない。その幾つかは暗渠の上から打たれ、石に当たって先がつぶれて止まっているものもある。その事から杭は暗渠が作られた後に打たれた事が分かる。

高まりはシュートバーの砂層を基礎に作られており、その北西隣が調査区内で一番低い耕地区画でもあるので、高まり北西裾部は調査時も第0面の時点から湧水が激しかった。05-1-262石詰暗渠はおそらくその排水を目的に作られたのであろう。また、その上の杭は、湧水による高まり斜面崩壊を防ぐ土留めのために、特に湧水が激しく、段差の大きい05-1-206高まり1北西斜面に打たれたと考えられる。

3、第2層包含遺物

最も多いのは土師器。その次に須恵器・瓦器がなるような内容である。時期的には飛鳥～平安時代の古代のものが多く。黒色土器が若干見られるのが特徴的である。低位段丘上の集落の影響であろう。中世のものも次いで見られ、それに少数の近世陶磁器が混じるというのが大勢である。

下層に包含されている庄内式併行期、弥生土器や製塩土器はほとんど含まれない。一部第4層と接する部分もあるが、それらの遺物を含むところまでの掘削・削平が少なかったようである。

瓦も少なく、近世の集落の影響は少ないか。土錘や蛸壺は見られる。

時期を限定できる遺物はあまりないが、上下の層から勘察すれば近世前期頃の耕土と思われる。

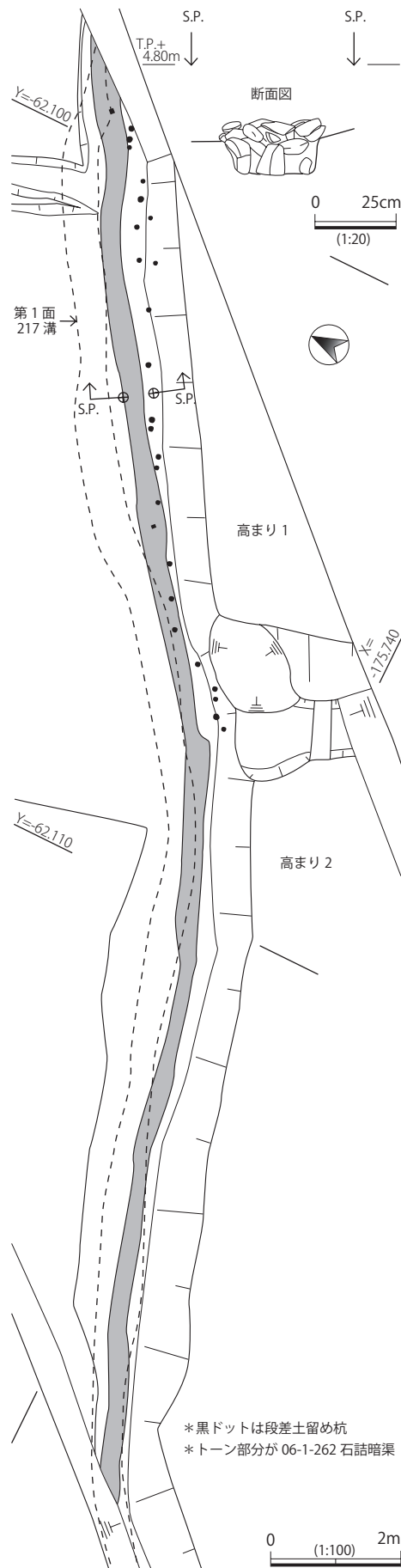


図55 湊遺跡 05-1-3tr. 第2面 05-1-262石詰暗渠 全体図(S=1/100)・断面図(S=1/20)

図化できたのは図 46 - 8・22・23 の 3 点である。

8 は瓦質羽釜片。口縁部も鏝部も短い。内面は右上がりのナデを切って口縁部にヨコナデ。外面はヨコナデ。口縁部は 2 条のヨコナデでゆるく段を成す。斜め下方に向けての穿孔が一つ見られる。器表は灰色 5Y5/1、断面は灰白色 5Y7/1 を呈し、胎土に粗砂は含まない。

22 はサヌカイト製、破損した剥片か。ポジ面左右辺は折れ、上辺は原礫面。重さ 7.20g。

23 は鉄製鏝片。上部の曲がり釘にしてはゆるく、その端部は折れである。下方先端部もゆるく同方向に弯曲する。断面形は 7 × 5 mm の長方形。

第 6 節 第 3 面

1、面の状況

1 tr. 北東側、低位段丘崖下の部分には大きな攪乱があったが、その攪乱の壁の部分で、第 3 面切り込みの土坑の断面が三つ観察できた（図 56）。それを目安に第 3 面を検出したが、攪乱の南東側は若干掘削が浅く止まり、本来そこにも第 3 面切り込みの土坑があるのを確認できなかった。その後、攪乱底部にも多くの土坑の底部が残存している事が判明したので、精査しなおし、他の部分では第 4 面を検出している状態でこの部分では第 3 面の土坑群を検出した（図 57）。

その南西側では、所々攪乱され判然としないが、長方形の落込になるらしい、027・037 落込が検出された。部分的に耕作深度を下げた痕跡であろうか。1 tr. の南西端では段差を伴う耕地区画と思われる 039 落込を検出した。これは埋土も 3 層系でその層が 2 tr. に続いていく。

2 tr. では北東半は耕作痕が散在、中央付近の河岸段丘由来の段差も変わらないが、その段差裾を除き南西半には遺構が認められなかった。耕土系第 3 層が 2 層重なっている部分だが、第 4 面で 147 流路が存在している事がなにか関係しているのであろうか。

3 tr. では北西側第 2 面古を検出した際に南東側で第 3 面を検出した（図 50）。少数の鋤溝と段差沿いに畦畔痕跡を確認したのみである。北西側では第 2 層古の下に薄く第 3 層が遺存した部分もあったが、直下が細砂層で、第 2 層古掘削時に一緒に崩れ、面としては検出できなかった。

05-1-3tr. では第 3 層は 05-1-208 高まり 2 部分とトレンチ南西端の一部にしか遺存していなかった。05-1-208 高まり 2 部分で平面を検出してみたが遺構が見られなかったので面的な調査は打ち切った。

2、主な遺構 粘土採掘土坑群（図 59）

1) 位置

第 3 面で主な遺構として取り上げるのは、1 tr. 北東部、低位段丘崖下に密集していた土坑群のみである。これらは、後述する理由から粘土採掘土坑と判断した。

この部分は、耕地化以降は平坦な地形になったが、それ以前は段丘崖下でやや窪んだ地形を成していた。段丘肩部のラインも調査区付近で枝谷とまではいかないがやや弯曲しており、丁度この部分は段丘上から雨水などで流されてきた細かい岩屑性粒子が溜まりやすい地形と言える。

調査区から南東側と北西側の段丘崖ラインはやや張り出すので、土坑群の広がり調査区外でもその範囲内ではないかと推測できる。

2) 形状

ここに調査区内で、39 個の土坑を確認した。平面形は不整形なものばかりであり、わずかずつ切り合うものが多い。大きく二つの種類に分けられる。一つは径 1 ~ 2 m、1.5m 前後を平均とする大型の

もので、壁は直立、もしくは内傾、部分的にさらにえぐれているものもある。底部は細かい凹凸が多い。攪乱で上部半分以上を破壊されたものが多いが、深さ 70 cm～1 m。

もう一つは、長径でも 1 m 以下で、深さも 30 cm 前後、攪乱の強いところでは遺存しないと思われる小型のものである。壁もゆるく傾斜し、底部も丸い。

3) 埋土

埋土は共通し、砂質土内にブロック土が詰まった状態である。ブロック土は土坑が掘りこまれた層の土と同じで、その上下位置関係も共通する。推測すれば、掘った土を積み上げたものを、足りなくなった分だけ周辺の砂質土を足しながら、埋め戻したと考えられる。

そこで、土坑埋土の中で、掘りこまれた土層の種類で一番減っているのを見ると、有機分の少ない良質な黄褐色系粘土（実際は極細シルト）であるのが分かった。上述のように段丘崖直下で窪んでいる所に第 4 層が堆積していく過程で、その第 2 黒色層と第 3 黒色層の間層として堆積した層である（図 59 の 029～031 土坑断面図の 32・38・64 の層）。また、大型の土坑は全て、第 4 層最下層の第 3 黒色層かその下の砂層に達した所で掘削を中止している。

以上の事からこれらの土坑群を粘土採掘土坑と判断した。

4) 本来の掘り込み面

少しずつ切り合うものが多いのは、掘り始めに以前掘った土坑が確認された時点で位置をずらしたのであろう。その事からある程度の期間、粘土採掘が続いたと考えられる。

土坑の肩崩れもなく、埋土上面の沈み込みもなく、第 2 層の耕作痕が埋土上面にも走るの、第 2 層で若干上部を削平されていると思われる。後述する出土遺物から、中世遺構と考えられる事からも、中世の耕土上面である第 3 面の遺構として間違いあるまい。

5) 遺物出土遺構

067・071 土坑から完形に近い瓦器椀が各 1 個体出土した（図 52 - 1・2）。067 土坑では底部から約 10 cm 上で正置状態で、071 土坑では底部に付き、土圧で割れたような倒置状態で出土した。

その他、小片では、029 土坑から土師器の椀 1・蛸壺 1、055 土坑から土師器 1・須恵器坏 1・長頸壺 1・鉄滓 1、060 土坑から土師器 1・瓦器 1、062 土坑から砂岩 1、068 土坑から土師器蛸壺 4、070 土坑から土師器羽釜 1、075 土坑から瓦器 1 が出土している。

また、調査開始当初、これらの土坑群を破壊していた攪乱内の埋土を除去している際、その底部の黒色粘土内から残存率の良い瓦器椀を採取した（図 52 - 3）。おそらくこれも本来どれかの土坑内の遺物であった可能性が高い。

図化できたのは図 52 - 1～3 の 3 点のみである。

1 は 071 土坑出土。口縁に 2 ヲ所欠けがあるが、大きい方は出土時に割れていた部分で、周囲に粉碎した微小な土器片があった。小さい方の欠けは人為的打ち欠きの可能性がある。内面は数方向の直線的なナデの後、口縁部ヨコナデ、最後にミガキ。見込みのミガキは平行線だが、1 本の直線も短い単位をつなげている。外面は体部に左上がりの放射状指頭圧痕、その後口縁部と高台部周辺にヨコナデ、高台内部中央は無調整、口縁部ヨコナデ下端部付近にわずかにミガキが認められる。器表は暗灰色 N3/0、断面は灰白色 7.5Y7/1 を呈し、胎土に 1 mm 弱のチャートわずかにあり。

2 は 067 土坑出土。内面はナデ後ミガキ、口縁部のナデはヨコナデ。見込みのミガキは不規則。外面は体部ユビオサエ後、口縁部と高台部周辺にヨコナデ、底部は粗いナデ。磨きが体部に比較的密に入る。

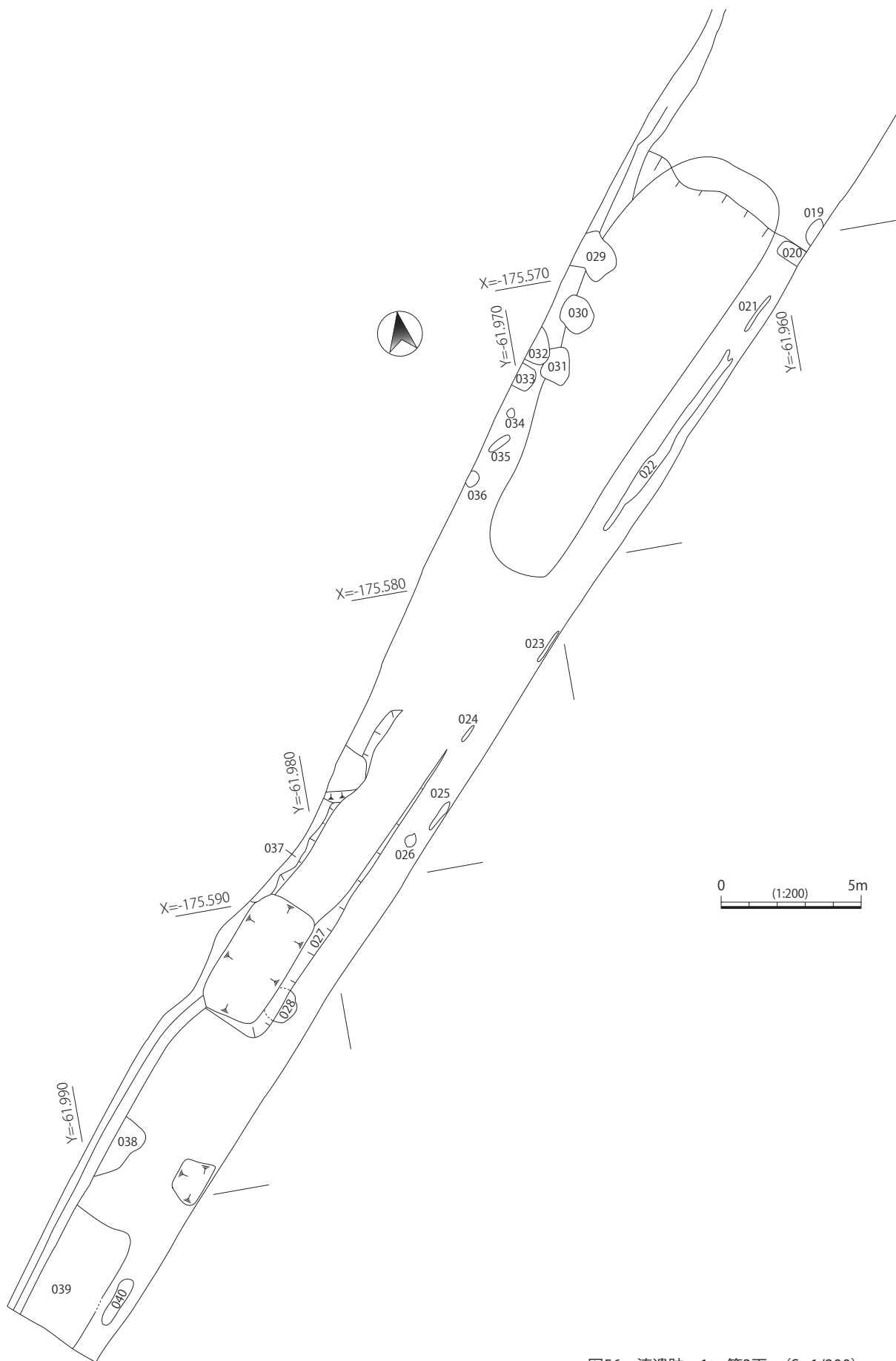


图56 湊遺跡 1tr. 第3面 (S=1/200)

内外面ともミガキの1単位は3mmほどと太い。器表は暗灰色 N3/0、断面は灰白色 N7/0 を呈し、胎土に1～2mmの石英・1mm弱のチャート・赤色粒わずかにあり。

3は攪乱の底で採取し、土坑群内遺物と推測されるものである。内面はナデ後ミガキ、口縁部はヨコナデ、見込みのミガキは斜格子。外面は、体部に水平方向のユビオサエ列、高台部周辺はヨコナデ、その内側は無調整。口縁部に2条のヨコナデ入るが、下段のヨコナデはユビオサエ列と重なり、それを消しきってない。またその周辺にまばらにミガキ入る。器表は暗灰色 N3/0、断面は灰黄色 2.5Y7/2 を呈し、胎土に粗砂なく、微細粒は長石・黒色砂粒・石英あり。

この3個体で見れば、尾上編年の和泉型Ⅲ - 2期、12世紀末～13世紀初頭の時期と言えよう。

6) 小結

遺物の示す時期は隣接する上町東遺跡で工人集落的な集落が存在する時期でもある。湊遺跡の低位段丘上でも、あまり明らかではないが、平安時代の二つの集落が中世まで存続していたはずである。おそらくこの土坑群はそれらの集落の住人が土器か土製品を作るため粘土を採取した痕跡であろう。製品の候補としては土鍾・蛸壺・瓦器・炉などが上げられる。

土鍾は今回の調査で中世単純の包含層にはほとんど含まれない事が判明したので除外できるだろう。瓦器は一国を超える流通範囲を持つ製品の粘土取り跡としては小規模すぎる感がある。上町東遺跡の同時期の集落で甕の羽口以外にも炉壁片も出土しているが、良質な粘土が必要であったか疑問が残る。湊遺跡内で平安時代の蛸壺焼成の窯ではないかと言われている土坑も存在する事からすれば、蛸壺生産が最も可能性が高いように思われる。自家消費的生産規模ではないだろうか。

3、第3層包含遺物

第2層と比較して顕著な変化は染付けの消滅である。陶器も出土せず、青磁・白磁はわずかにあるが、判別できる範囲では中世のものを見てよいものばかりである。瓦も激減。これを目安に第3層が耕土として機能していた時期を中世と考えても良いだろう。

土鍾も激減している。今回の湊遺跡の調査では破片も含め72点の土鍾が出土したが、第3層出土の土鍾は6点のみであり、他は庄内併行期の棒状土鍾1点を除き全て第2層以上から出土した。また、小型管状土鍾はなく、大型管状土鍾と棒状土鍾の破片のみが出土しているのが、近世の土鍾の状況と異なる。古い時期のものが耕土に巻き込まれたか。

それに対し、土師器蛸壺はまだかなり出土する。破片数では最多の遺物である。中世・古代の遺物も若干見られ、わずかながら弥生土器・製塩土器が見られるようになる。

1 tr. の南西側で、北西の粘土採掘土坑群が切り込んでいた第3層の上にもう一つ第3層に含まれる層が乗り、そこから瓦質播鉢片が1片出土している。その層につながる2 tr. の層からわずかにいぶし瓦片が出土している。粘土採掘土坑群の切り込む層は、下には薄い整地土を挟む、耕地開発当初に近い時期の第3層耕土のようなので、13世紀初頭頃開析谷内が耕地開発され、似た質を保ちながら中世の長い期間に累積し、15世紀頃まで至ったのではないかと推測される。

出土遺物のうち、05 - 3 - 1tr. の南西端付近で2層重なっていた第3層のうち下層から、第3 - 2層として遺物を取り上げたものが比較的破片が大きく図60に10点図化できた。それらを以下に述べる。

1は瓦質羽釜片。内外面ともヨコナデ。器表は暗灰色 N3/0、断面は灰白色 N8/0 を呈す。胎土に粗砂はなく、微細粒に石英・長石・黒色粒あり。

2は土師器小皿片。残存率25%ほど。内面磨滅で調整不明。外面は、口縁部ヨコナデ、底部ユビオ

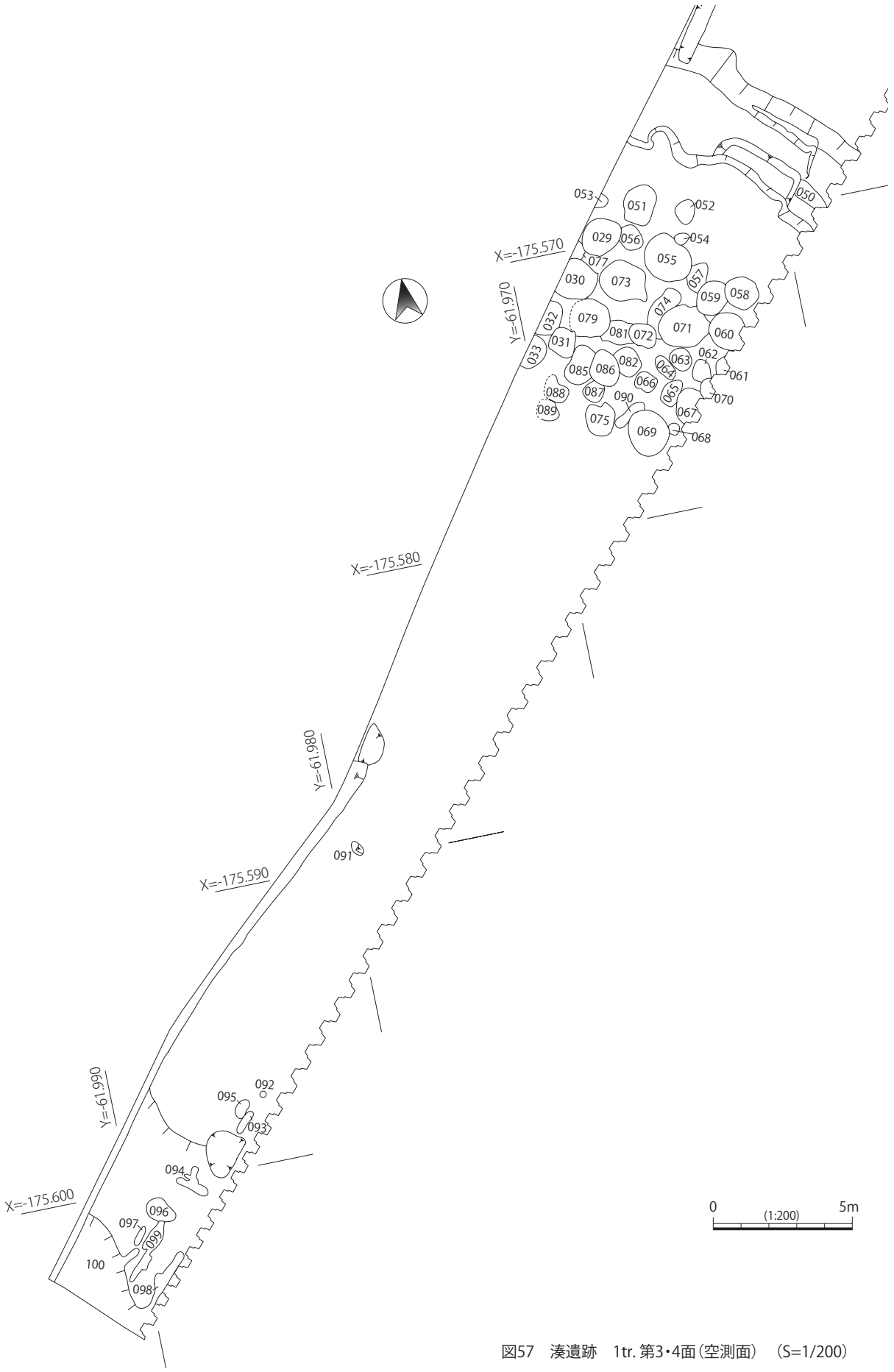


図57 湊遺跡 1tr. 第3・4面 (空測面) (S=1/200)

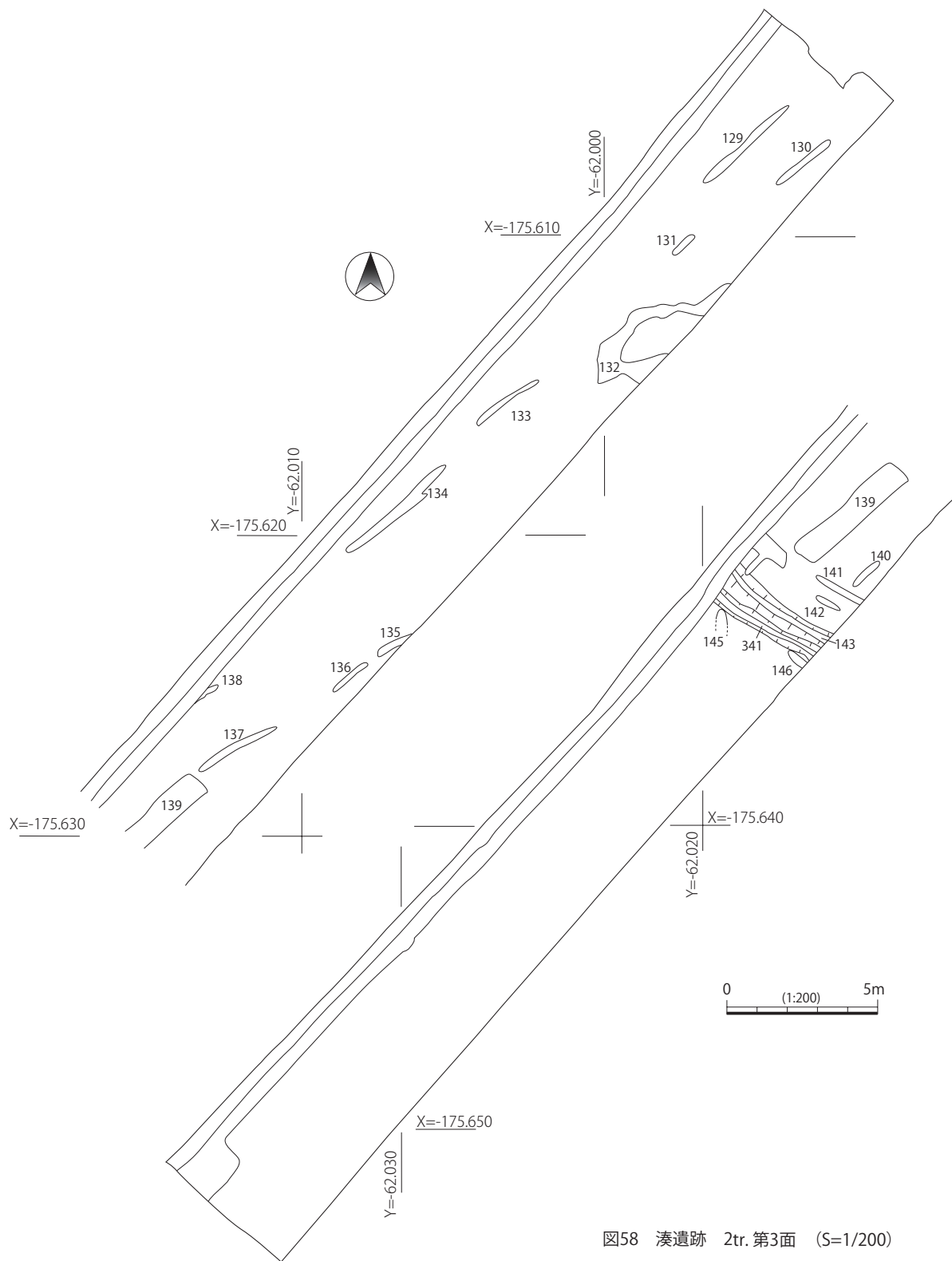
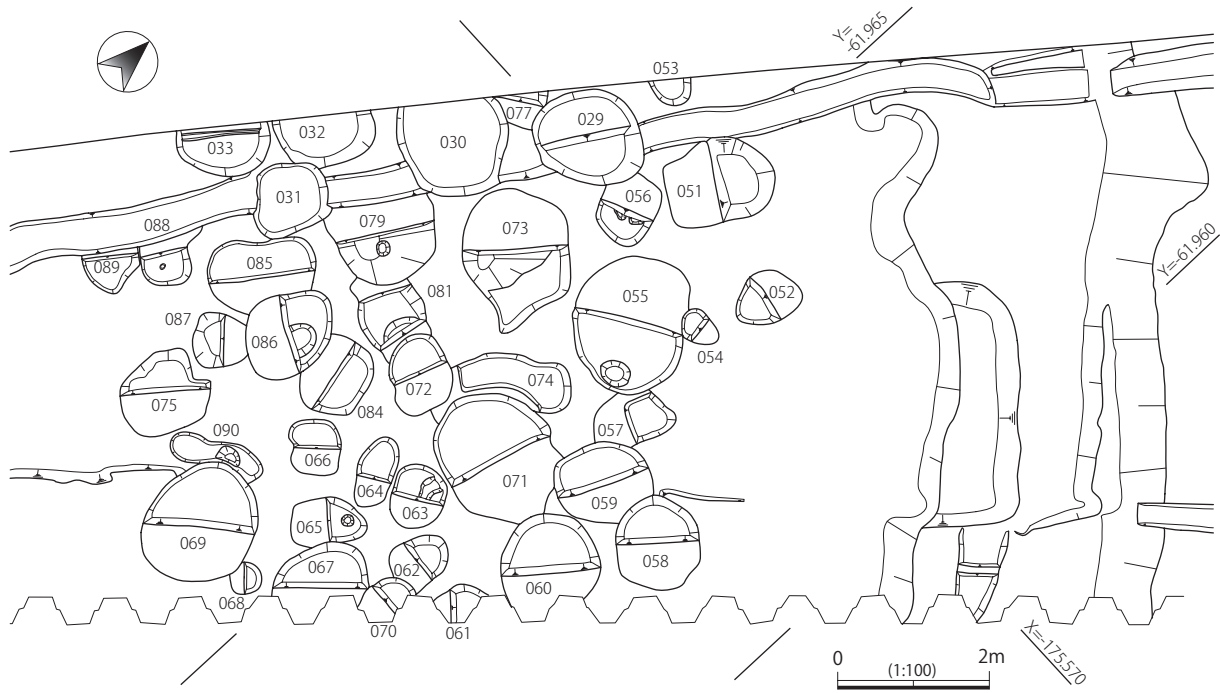


図58 湊遺跡 2tr. 第3面 (S=1/200)

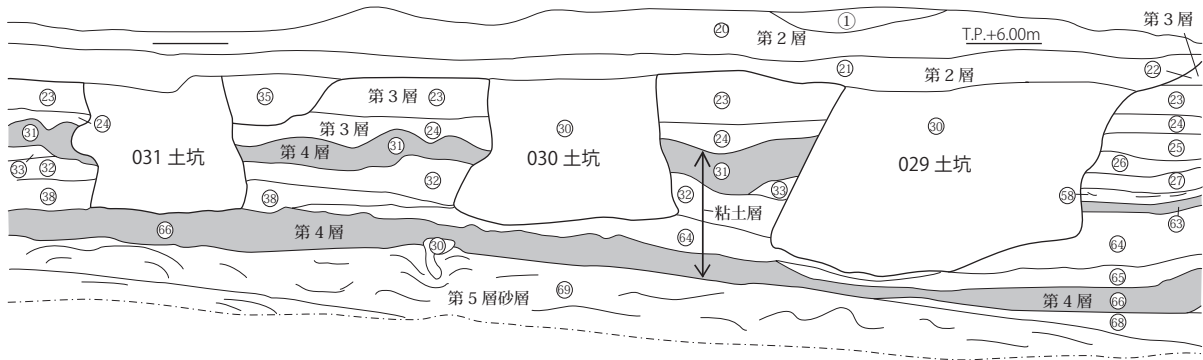
サエ後粗いナデ。器表は浅黄色 2.5Y7/3、断面は灰白色 10YR8/2 を呈す。胎土に 2～1 mm のクサリ礫わずかにあり。

3 も土師器小皿片。残存率 20%。内面は底部に直線的なナデ後、口縁部ヨコナデ。外面は底部ユビオサエ後粗くナデ、口縁部ヨコナデ。器表はにぶい橙色 5YR7/4、断面は黄橙色 10YR7/3 を呈し、胎土に 1 mm 前後の赤色粒若干あり。

4 は弥生土器甕底部。底部周は 30% 残存。内面磨滅で調整不明。外面はタタキ、底部は無調整。器



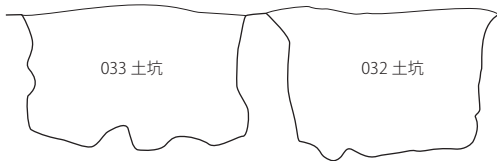
029～031 土坑断面 (南東から、○数字の土色・土質は図41の1tr.北東壁に同じ)



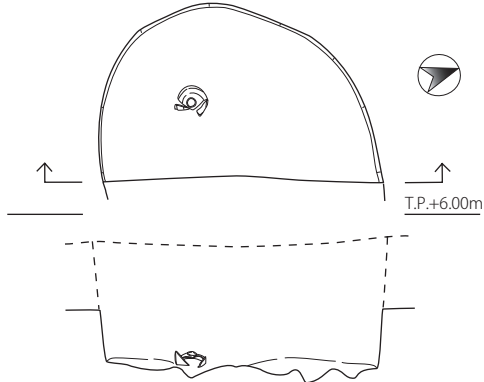
032・033 土坑断面図 (南東から)

T.P.+6.00m

0 1:40 1m



071 土坑土器出土状況



067 土坑土器出土状況

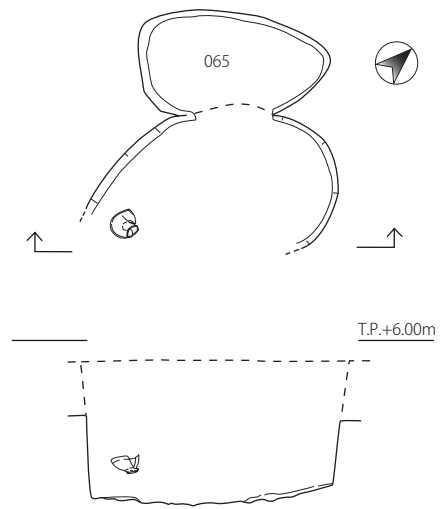


図59 湊遺跡 1tr. 第3面土坑群全体図(S=1/100)・断面図・出土状況図(S=1/40)

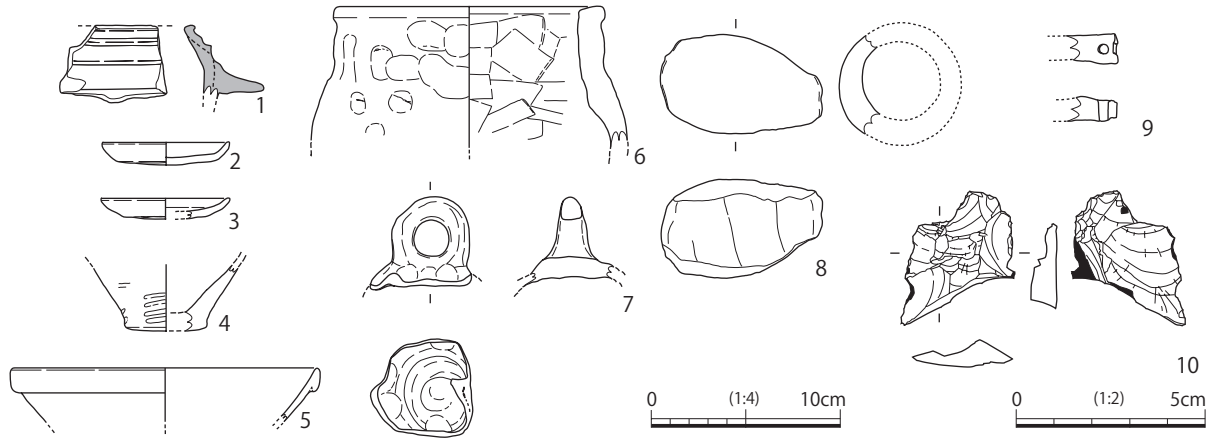


図60 湊遺跡 05-1-3tr. 第3-2層出土遺物 (S=1/4, 石器のみS=1/2)

表は灰白色 2.5YR8/2、断面は灰色 N4/0 を呈す。胎土に 2～1 mm の石英多し、1 mm 前後のチャート・長石・赤色粒あり。

5 は白磁碗片。残存率 10% ほどのため口径復元に不安あり。内面回転ナデ。外面は釉で分かりにくい。玉縁の直下から回転ケズリか。

6 は土師器蛸壺片。口縁部周残存 20% ほど。内面は板ナデ、方向はヨコカナナメ。外面はユビオサエ後粗くナデ。器表は灰黄色 2.5Y7/2、断面は灰色 N4/0 を呈す。胎土に 3～1 mm のチャート多し、2～1 mm の石英あり、1 mm 前後の長石若干あり。

7 は土師器釣鐘形飯蛸壺吊手部片。身部内面は螺旋状ユビナデ後ユビオサエ散在。吊手部はナデにより面取りが成され、身部との接合部にユビオサエ。器表は灰白色 10YR8/2、断面はにぶい褐色 7.5YR5/3 を呈す。胎土に 2～1 mm の石英若干あり、1 mm 弱の長石わずかにあり。

8 は土師質大型管状土錘片。全長 8.67 cm。にぶい黄橙色 10YR7/3 を呈し、胎土に赤色粒わずかにあり。本書分類の大型Ⅱ類に属し、胎土はタイプ f。

9 は土師質棒状土錘片。最大径 1.6 cm。端部はヘラ切り後、工具を押し付けた痕が残る。にぶい黄橙色 10YR7/2 を呈し、胎土に粗砂なし。胎土タイプ a。

10 はサヌカイト製剥片。ネガ面の下辺と左上は折れ。ポジ面との同時剥離も見られる。重さ 6.1g。

4、小結

1 tr. で開析谷内が整地され、第3層が耕土として成立してから掘りこまれたのが粘土採掘土坑群であるから、その土坑群出土の遺物をもって、開析谷内の耕地開発の時期と考えても良いと思われ、それは 13 世紀初頭頃と考えられる。

しかし、それは 2 tr. の 143 畦畔より北東側の部分にのみ限定すべきかもしれない。それより南西側は残存する第3層も流路や微高地で分断されており、その流路そのものを制御しなければ安定的な耕地を維持できない状況であるからである。

事実、最も低い 05 - 1 - 3tr. で、第3層系耕土でも層位的に下位の第3 - 2層の遺物には瓦質の羽釜が含まれる。開析谷内は段階的に耕地開発されたと考えるべきであろう。

そして部分的な小規模な盛土などの改変を経て、15 世紀以降に近世につながる第2層を耕土とした耕地区画に変化するものと思われる。

第7節 第4面

1、面の状況

第4面は基本的に第3層耕土時の床面の遺構と、それ以前の自然地形が混在している。削平を受けた部分と第3層系整地土の残る部分が入り混じり、整地土は部分により質が異なっていたため、全ての遺構を一挙に検出できなかつた所もあった。そのため、遺構はおおむね第4面新と第4面古に分けられる。

1 tr. の第3面粘土採掘土坑群のあった低位段丘崖直下の部分は第4層の堆積過程で常にやや低く低湿な状況であったようで、第4面でも若干窪んでいた(図41・57)。

そこから南西側は自然堤防状の微高地があったようであるが、耕地開発により削平され、平坦になって、遺構も遺存していない。その微高地裾の落ちが1 tr. 南西端付近で検出された。

1・2 tr. 境付近は第4層の堆積過程で何度も浸蝕流路が走っていたようで、調査区北西壁断面(図41)で見れば、その最新のものは第4面でも形成されていたようであるが、平面調査の時点では認識できず、その凹部を埋めた整地土を除去して、100・148 落込として検出したのみである。

二つの落込は埋土がブロック土で、それにより平坦面を造成しているようで、この付近は北東だけでなく南西側よりも低い耕地区画になったようである。100 落込より北東の段差から2tr.156 溝までの間か。156 溝をはさんで両側の耕作痕の方向性がやや異なる。

2 tr. は(図61)、北東半は比較的遺構が多い。耕作痕や耕地関連の遺構が多いが、ピット類には耕地開発以前の古い遺構が残っている可能性もある。ただ、埋土では明確な分別ができない。耕地開発以降、平坦地の造成のために削平されている事を考えると、かえって残存した深度の浅いピット類が古い遺構かもしれない。例えば170・171・173・178・181 ピットが耕地区画や耕作痕とは異なる方向性で一直線に並ぶ。深さはいずれも5 cm以下である。

2 tr. の南西半は147 流路によって占められている。河岸段丘を形成した流路で、弥生時代後期頃には後背湿地化している事が知られる。肩部は右岸の短い長さしか検出できていないが、若干弯曲しているようである。

3 tr. では、北東側に324 流路が、南西側に326 流路が位置し、その間には浸蝕痕が刻まれた部分があったが、第3層床面の時点では流路は整地土で覆われ、326 流路の右岸ラインが確認できたのみであった(図62の点線)。そのため明確に第4面新と第4面古が分別できる。

第4面新(図62)では下層の流路の間の浸蝕痕は耕作痕に切られる形で見えていた。第2面古まで続く南東区画から北西区画に落ちる段差ができています。ただ、326 流路の上面にくると不明確になる。北西区画には区画に沿った耕作痕が見られるが、鋤溝より太目の畝溝が多く、333 溝の形態を見ると、2群に分かれた畝立てがなされていたようである。他に時期不明のピットも散在する。

第4面古(図63)では、北東端に324 流路が位置する。庄内式併行期には存在し、飛鳥～奈良時代、中世としいだいに蛇行を弱め小規模化直線化していく流路である。平面図は庄内式併行期の形態で、それ以前は南東側が288 浸蝕痕付近まで蛇行する。下部に庄内式土器を包含する流路内堆積の上面で、完形の製塩土器で構成された337 土器群4が出土した。

その南西側は浸蝕痕が交錯している。底部の上下が激しく、埋土も砂層や土砂流的混濁層、泥土などが入り乱れる。325 浸蝕痕の中に飛鳥時代の338 土器群5が位置していた。

トレンチの南西半はほぼ326 流路が占める。この流路は南東壁にほぼ直角に入ってきて北側に強く

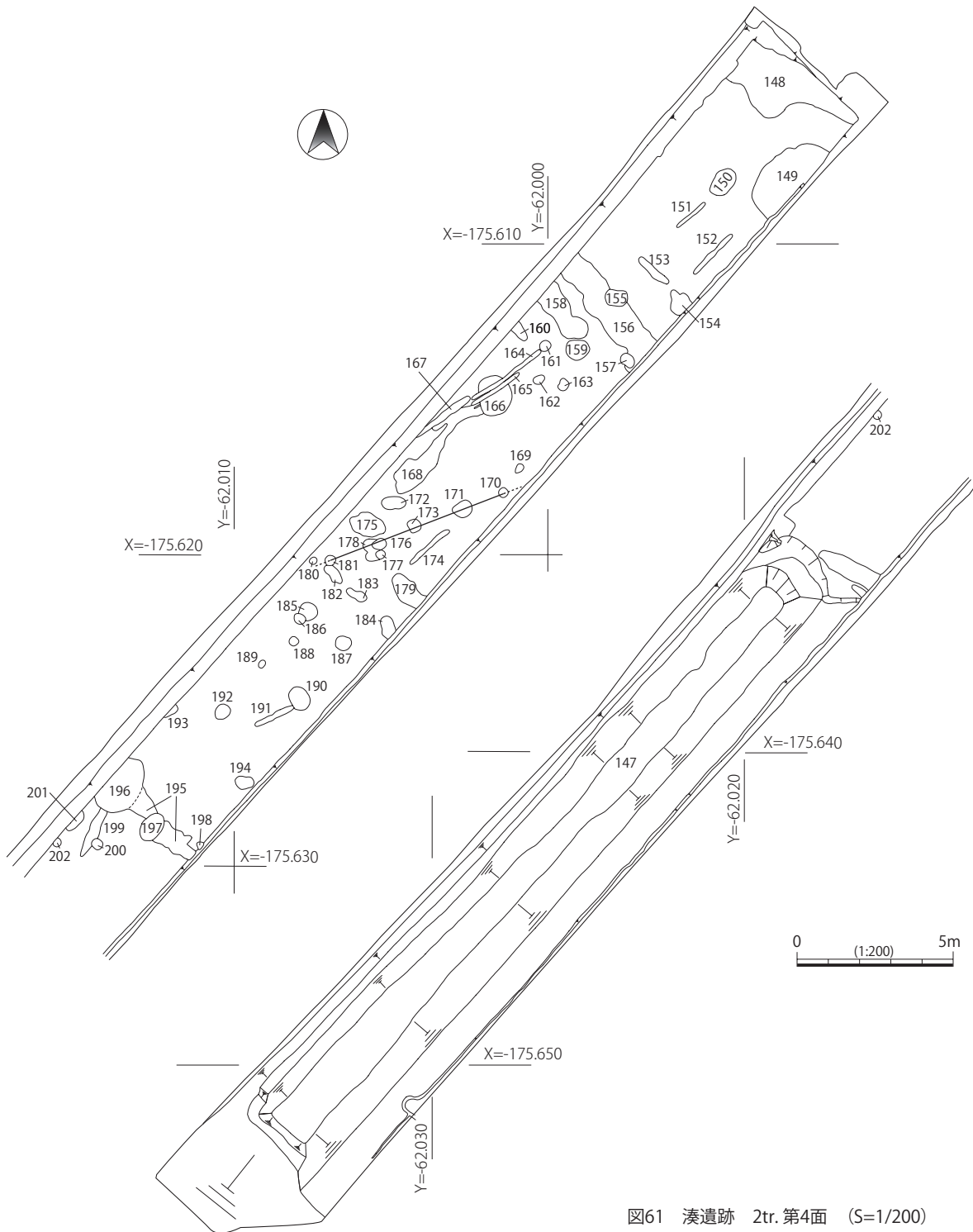


図61 湊遺跡 2tr. 第4面 (S=1/200)

蛇行し、再び北西に蛇行しながら調査区を抜けていく。トレンチ南西端の西隅には、調査時に排水用ポンプを設置するために上部を破壊してしまったが、05-1-3tr.のシュートバー1の続きが流路の左岸として残っていた。トレンチ北西壁際、右岸直下の流路内に339土器群1があった。

05-1-3tr.の第4面は、第5面(図79)の05-1-283~285後背湿地1~3を掘削する以前の状態である。それら三つの後背湿地の埋土として第4層が堆積していた。その上面はわずかに低くなる程度で、顕著な凹面にはなっていなかった。05-1-283後背湿地1の東角付近では既に湿地内の土器群1の一部が露出していた。シュートバー4の上に残る3本ほどの小さな溝は第3層の床面遺構にして

は埋土が黒褐色系粘質土で、さらに古い時期の遺構の可能性もある。

2、主な遺構

第4面は耕地開発以前の自然地形が次第に見えてくる面とも言え、流路や浸蝕痕などもあるが遺構に準じるものとして扱う。また、この面からは遺構を伴わない土器群が出てくるがそれも遺構扱いとする。

1) 147 流路

2 tr.の南西半を横切る流路である。右岸はトレンチのほぼ中央に見える。左岸は確認できていないが、おそらく3 tr.との間の現代水路部分にあると思われる。流路幅は30mほどか。上流最も大きい七ノ池からの谷の本流と推測される。トレンチ北西壁で断面を見ると(図41、2 tr.北西壁断面左半)、砂礫中心の下層と暗色帯の上層に埋土が大別できる。

下層の47・46の堆積時点では右岸が攻撃面になり、それで下刻も進み河岸段丘を形成したと思われる。46に岸辺が崩壊したと思われる大きな土礫が含まれている。それによりここから北東側の開析谷内は安定し、南西側は氾濫原的状况が続く事になった。

その後44が堆積し流路は次第に河岸段丘から離れていった。そして40～42で一挙に埋まる。その後後述する3 tr.北東端の324流路に流路変更したと考えられる。40の上面が南西に向かって上がっていくので、324流路との間には自然堤防が存在し、147流路は流路としての機能を停止し、ここから後背湿地化したのであろう。48は44堆積後に、増水時に河岸段丘際を浸蝕した流れの痕跡と思われる。

後背湿地として堆積が進行したのが39・35の暗色帯である。途中で43が洪水で流れ込んだ。38は木の根の痕跡のようで炭化物が多量に詰まっていた。後背湿地がやや乾燥した時期に木が生え、それ

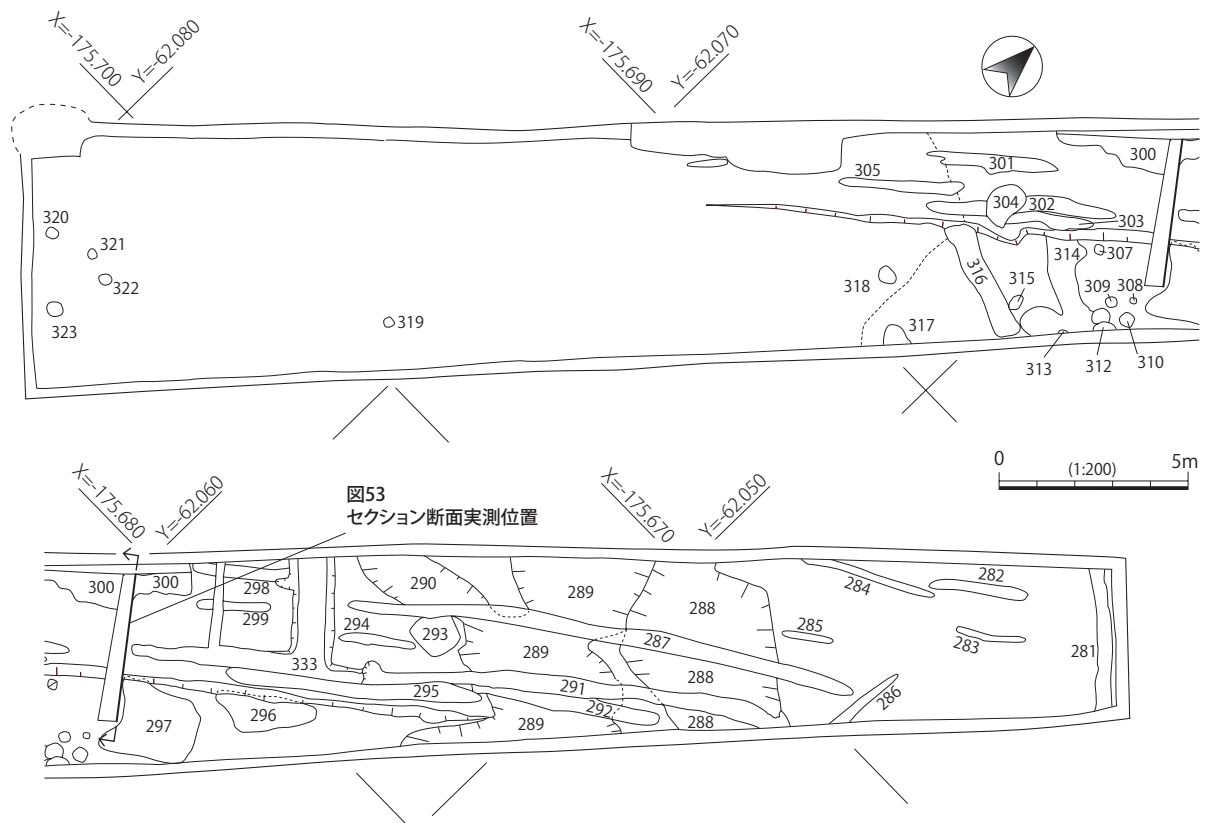


図62 湊遺跡 3tr.第4面新 (S=1/200)

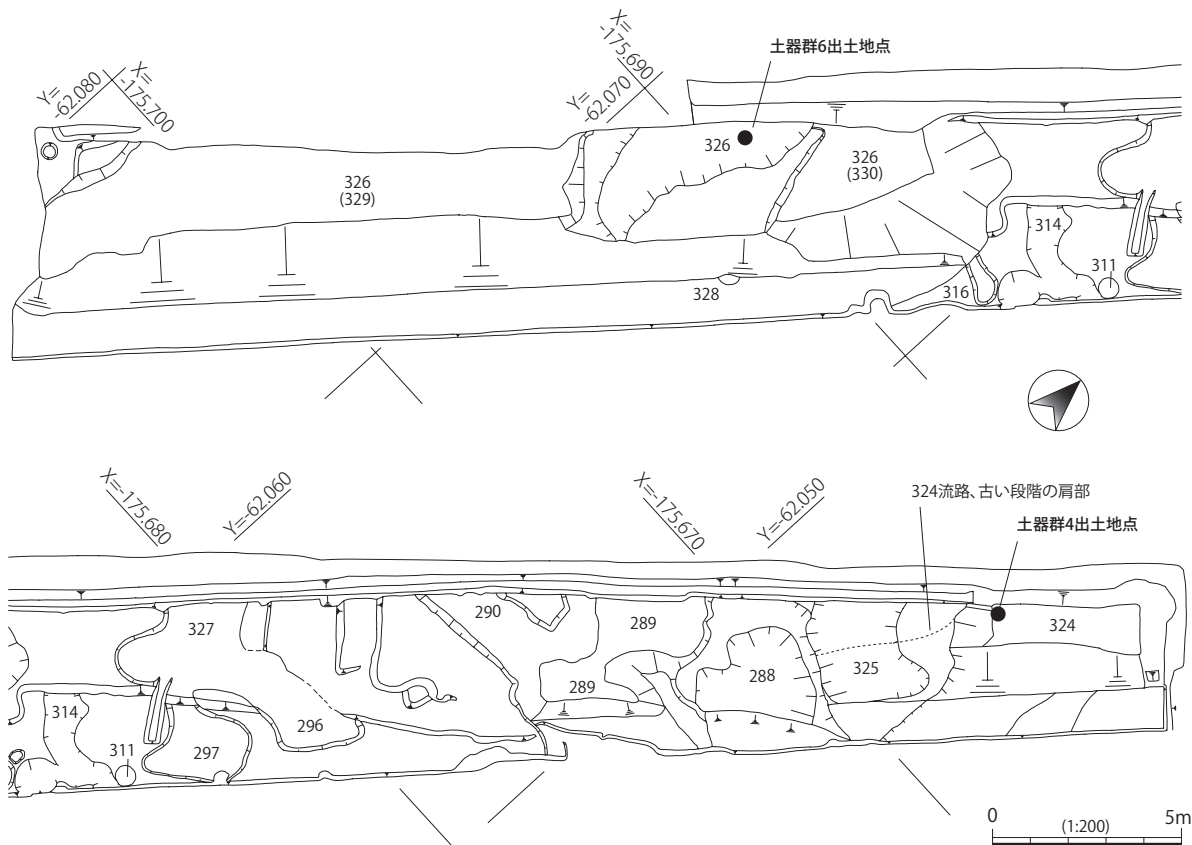


図63 湊遺跡 3tr. 第4面古(浸蝕痕完掘状況) (S=1/200)

が燃えたものと思われる。

下層の砂礫層は無遺物、上層もほとんど遺物がなかったが、唯一断面 43 から図 64 - 1 が出土した。また、埋土上面の一部に二次的な流入土が第 3 層との間にあったが、少数の製塩土器・土師器・須恵器・瓦器の小片と共に図 64 - 2 が出土した。

図 64 - 1 は弥生 V 様式の甕である。残存率 50%、口縁部周は 30% 残存。内面は左上がりナナメハケ後、口縁部にヨコナデ。外面は、胴部タタキ後、タタキの切り合いを消すように数条のタテナデ。口縁部ヨコナデ、底部側面ユビオサエ、底面粗いナデ。器表は浅黄色 2.5Y7/4、断面は灰白色 5Y7/2 を呈す。胎土に 1mm 前後の石英多し、2~1mm のチャートあり、1mm 弱の長石若干あり。小型だが、全体形といい、調整といい、庄内式併行期に下る要素はなく、弥生 V 様式期のもの。

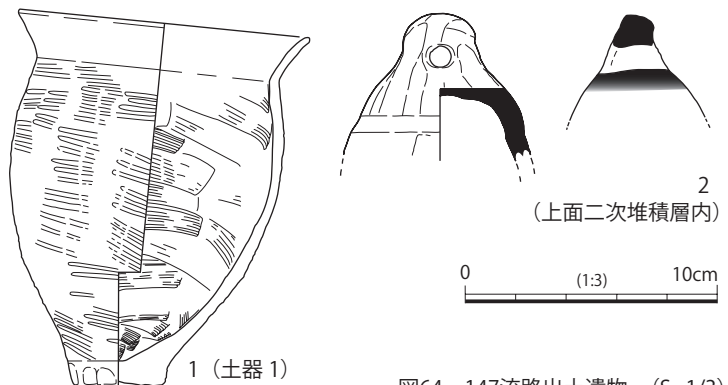


図64 147流路出土遺物 (S=1/3)

図 64 - 2 は須恵器釣鐘形飯蛸壺吊手部片。内面は回転ナデ。外面は、吊手部はタテユビナデ、肩部に凹面を成す強いヨコユビナデ 1 条、それ以下はヨコナデ。紐通し孔は径 1.15 cm で片側から刺突穿孔。反対側にはみ出した粘土を孔周辺にナデ付ける。磨滅はほとんどなく、器表・断面共灰白色 N7/0 を呈す。胎土に 2~1mm の黒色粒・1mm 弱の長石あり、1mm 弱の石英若干あり。陶邑の須恵器とは若干胎土

が異なる。

出土遺物から見ると、147 流路は弥生後期には後背湿地化しており、上面に耕地開発が及ぶのは中世であると分かる。1～2 tr. の第4層内の土器群1～3が弥生後期前半代なので、147 流路は第5面に既に存在していた事は確実である。断面で見て、右岸が第5面の自然堤防状の地形を半分ほど浸蝕した状況があり、第4層が若干流路に向けて傾斜した堆積を示すのもそれと符号する。

おそらく147 流路は下位段丘崖沿いから第5面のシュートバーを形成しながらしだいに流路を南西に移動し、2 tr. 南西半の位置に達した時に下刻が進行し、河岸段丘を形成したのであろう。そして、弥生時代後期前半代を中心とした時期に北東側の第4層の堆積にも関係し、弥生時代後期のうちに流路変更して324 流路に跡を譲り後背湿地化したと考えられる。

2) 156・158 溝

2 tr. の北東側にあり、これらの溝をはさんで、鋤溝の方位性が若干変化するので、耕地区画の溝と考えられるものである。156 溝は調査区を横断し、幅1 m前後、深さ約20 cm、底部レベルは南東に低くなっていく。出土遺物は小片のみだが土師器8、内蛸壺1、黒色土器椀A類1。

158 溝は156 溝の南西に20～40 cmの間をとって平行に走る溝だが、南東端は調査区内で土坑状の形で終る。幅80～50 cm、深さ10 cm前後、底部レベルは北西に下がる。土師器小片2片と図52-5が出土した。

図52-5は黒色土器椀A類底部片。高台部周30%残存。内面はやや磨滅するが、密にミガキ残る。ただ、太いミガキと細いミガキが混在し、方向も様々で暗文となるものは確認できない。外面は全面ヨコナデ。内面オリーブ黒色5Y3/1、外面橙色7.5YR7/6、断面明黄褐色10YR7/6を呈す。胎土には白色粘土が縞状に入り、1 mm前後の赤色粒・石英わずかにあり、微細粒に黒雲母あり。

3) 196 土坑 (図65)

147 流路右岸肩部から約6 m北東で、遺構の多い地帯の南西端付近に位置する。一部調査区北西外に出るが、長径1.94 m、深さ50 cmほどの土坑である。南東から195 溝が取り付くところを見ると小規模な溜井かもしれない。199 鋤溝を切っているので、耕作地内の施設であると考えられる。底部中央に長軸30 cmほどの板状の砂岩が一つあった。

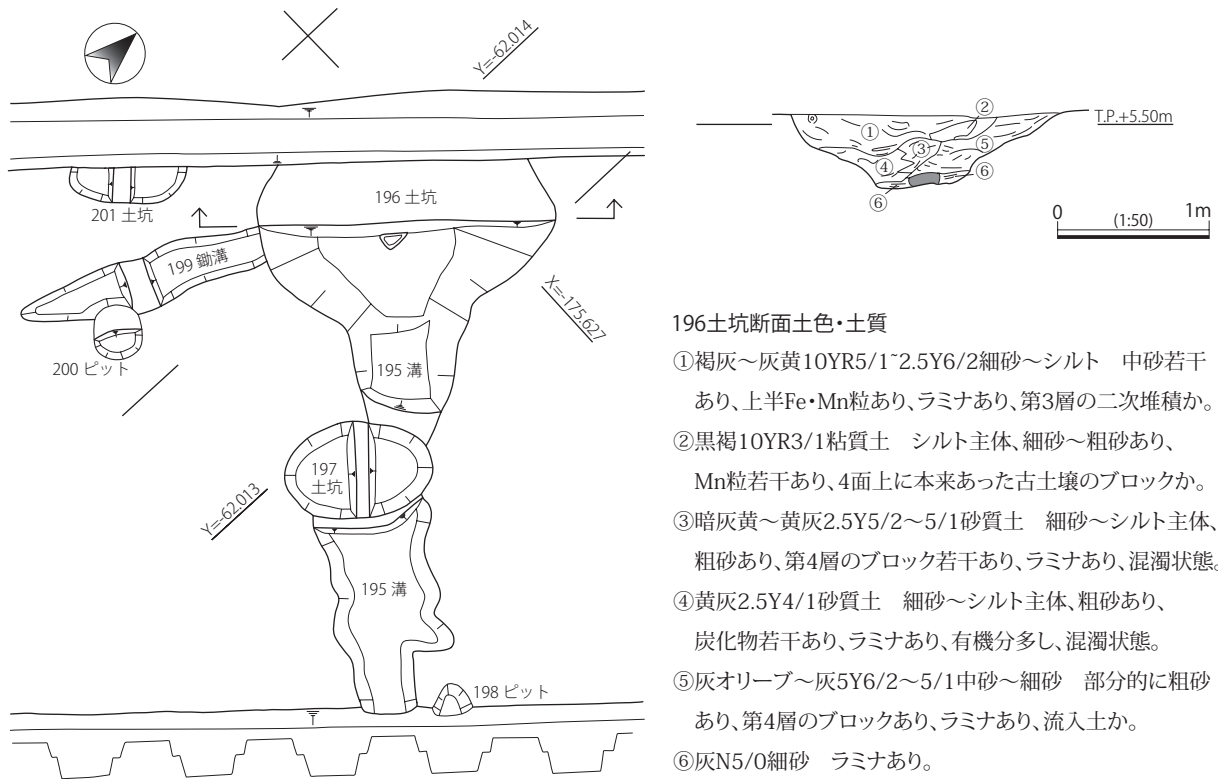
埋土は最上層の断面図④は第3層が流水により二次堆積したような層なので、第3層耕土時の遺構で洪水により埋没し、廃絶以降も第3層の耕作は継続したと考えられる。最下層の⑥はラミナが水平なので機能時の堆積かもしれない。それなら水が流入する土坑として溜井の可能性が強まる。

出土遺物は土師器蛸壺小片1、土錘片1のみである。195 溝からは須恵器小片が出土し、その溝を切る197 土坑からは黒色土器椀A類小片が出土している。瓦器などが見られないが、第3層耕土時でも古い時期の遺構と思われる。

図52-13が出土した土錘片である。残存率60%。ユビナデ・ユビオサエが見られるが、孔周辺にそれらを切るナデが巡る。孔内もヨコナデ。全長6.8 cm以上、最大径4.41 cm。灰白色10YR7/1を呈し、胎土に粗砂は含まない。本書の分類では大型管状土錘I類。胎土タイプはf。

4) 287・302 鋤溝

3 tr. 第4面新の鋤溝群は畝溝状に太く、333 溝によって二つに分かれる畝群が存在したと推測できる事は先述したが、出土遺物はわずかな土器小片のみである。281 溝と293 土坑から瓦器片が出土している事であらうじて中世のものと推測される。281 溝が現代水路に平行しているので、324 流路が



196土坑断面土色・土質

- ① 褐灰～灰黄10YR5/1～2.5Y6/2細砂～シルト 中砂若干あり、上半Fe・Mn粒あり、ラミナあり、第3層の二次堆積か。
- ② 黒褐10YR3/1粘質土 シルト主体、細砂～粗砂あり、Mn粒若干あり、4面上に本来あった古土壌のブロックか。
- ③ 暗灰黄～黄灰2.5Y5/2～5/1砂質土 細砂～シルト主体、粗砂あり、第4層のブロック若干あり、ラミナあり、混濁状態。
- ④ 黄灰2.5Y4/1砂質土 細砂～シルト主体、粗砂あり、炭化物若干あり、ラミナあり、有機分多し、混濁状態。
- ⑤ 灰オリーブ～灰5Y6/2～5/1中砂～細砂 部分的に粗砂あり、第4層のブロックあり、ラミナあり、流入土か。
- ⑥ 灰N5/0細砂 ラミナあり。

図65 湊遺跡 2tr. 第4面 196土坑全体図・土層断面図(S=1/50)

耕地開発により水路化した後、第3層耕土時の期間内で既に現代水路の位置に移動している事が分かる。これらの耕作痕のうち、図化可能な遺物の出土したのが 287・302 鋤溝である。

図 52 - 14 は 287 鋤溝出土のサヌカイト製剥片である。ネガ面の下部に原礫面が残り、ポジ面は打点付近と左側が折れている。ネガ面の右側の剥離もその折れと同時のものか。小さな原礫に打撃面だけを作り剥片を取り始めたところでの破損品か。若干風化。質量 8.75g。

図 52 - 6 は 302 鋤溝出土の土師器釣鐘形飯蛸壺吊手部片である。粘土紐によって吊り手を作るタイプである。やや磨滅するが全体にナゲ調整。器表は橙色 5YR7/6、断面は橙色 7.5YR7/6 を呈し、胎土に 3～1mm のチャートあり、1mm 前後の石英わずかにあり。

5) 324 流路

第4面古の段階で 3tr. の北東端に位置していた流路である。前述の通り 147 流路から流路変更して弥生時代後期の範囲内に成立した流路と考えられる。それ以降、次第に蛇行を弱め、小規模化しながら中世の耕地開発時まで存続していた。図 42 の 3tr. 北西壁断面で見ると、116～118 が庄内式併行期の遺物を含み古墳時代初頭に堆積した層である。324 流路下層とした。製塩土器片 25、弥生時代後期のタタキ甕から生駒西麓産胎土の庄内式甕の破片まで 22 片が出土している。その時の蛇行は強く、左岸のラインは南東壁から 288・325 浸蝕痕を横切って北西壁に達していた (図 63 点線)。

トレンチ断面図の 112～115 が飛鳥～奈良時代頃堆積したと思われる層である。庄内式併行期からその時期までの流路の形態が図 63 に記録したものである。以前より蛇行が弱まっているが深さは深い。増水時の下刻の進行と直線化と思われる。

107～110 が中世に堆積したものと思われる。107・108 は人為的埋土。これと 112～115 を同時に掘削し、遺物を 324 流路上層として取り上げたため、古代と中世の遺物が分別できていないし、中世段階の平面形も明らかにできなかった。断面形から中世段階には幅 5m 弱ほどと推測され、南東壁沿いに矢板の支えとして残した部分の上面で肩部らしいラインを二つ確認したのみである。中世段階の

表14 324 流路内上層 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別		大器種		小器種		型式部位		細別											
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%										
土器	66	製塩	5	7.6		5	100.0		5	100.0	底部	2	40.0								
		弥生	19	28.8	甕	7	36.8		7	100.0	底部	4	57.1								
											口縁	3	42.9								
		土師器	29	46.4		皿	14	43.8													
																	蛸壺	3	9.4		
																	甕	5	15.6		
																	坏	1	3.1		1
須恵器	2	2.9	甕	2	100.0																
瓦器	11	15.9																			
石	1												砂岩	1	100						

流路は断面で肩部に畦畔がある事も判明しており、耕地開発に伴い水路化したと考えられる。その後埋め立てられ現代水路の位置に移動したのであろう。

上層の出土遺物（表14）は、下層と同じ時期のもの、飛鳥～奈良時代のもの、瓦器碗とはっきり内容が分かれる。瓦器碗が、断面で観察された中世に水路化した時期を示すものであろう。下層出土遺物は製塩土器片25、弥生V様式系タタキ甕片15、鉢片2、生駒西麓産胎土庄内式甕片5である。図66に実測できたものを掲載した。1～14が上層、15～18が下層出土である。

1は土師器小皿片。残存率20%、口縁部周の残存も同じ。内面は底部は磨滅、口縁部ヨコナデ。外面は底部ユビオサエ散在、口縁部ヨコナデ。屈曲部に粘土接合痕残る。器表は灰黄色2.5Y7/2、断面は褐灰色10YR6/1を呈す。胎土に1mm弱の石英・長石わずかにあり。中世のものか。

2も土師器小皿。残存率70%、口縁部周40%残存。内面は底部一定方向ナデ後、口縁部ヨコナデで、左上にナデアゲ。外面は底部器表剥落するが粗い不定方向ナデか、口縁部ヨコナデ。器表は灰黄色2.5Y6/2、断面は灰黄色2.5Y7/2を呈す。胎土に1mm弱の石英あり、1mm弱の長石・チャートわずかにあり。時期は限定できない。

3は土師器蛸壺底部片。残存率10%ほどか。内面はユビオサエ後ナデ、ナデは左下からきて左上に折り返すものが多い。外面はユビオサエ、並びに規則性は認められない。器表は灰黄褐色10YR6/2、断面はにぶい黄橙色10YR7/2を呈し、胎土に1mm前後の石英・赤色粒わずかにあり。

4は瓦器碗底部片。内面はナデ後ミガキ、見込みは崩れた連結輪状文か。外面はユビオサエ散在、それを高台貼り付けのナデが切る。高台内側にもユビオサエあり。器表は灰色N4/0、断面は灰白色7.5Y7/1を呈す。胎土には粗砂粒なし。高台がかなり退化しているが、まだ、底部が高台より下がりはず、見込みのミガキは連結輪状の崩れたものだが、渦巻き状ではない事を評価すると、尾上編年のIV-1頃のものか、13世紀後半頃か。

5も瓦器碗底部片。内面ナデ後ミガキ。ミガキは太く、見込みは折り返す直線が入るか。外面体部は左上がりの放射状指頭圧痕。高台貼り付けのナデがそれを切る。器表は灰色N4/0、断面は灰白色5Y7/1を呈す。0.5mm強の石英・黒色砂粒わずかにあり。見込みのミガキ、高台の形態、体部のユビオ

サエが4より古色を示す。

6は瓦器椀口縁部片。内面はヨコナデ後ミガキ、ミガキは太い。外面は、板状粘土の接合痕残り、ユビオサエ散在、口縁の1条のヨコナデがそれを切る。

7は土師質棒状土錘片。孔は径6mm。孔の開口部の片方は周囲が平坦な面を成し、もう片方は凹面気味になる。板状の台の上に置き、刺突穿孔した際の変形か。器表・断面とも橙色5YR6/8を呈し、胎土に粗砂粒は4mmの石英1粒見えるのみ。

8は土師器坏底部片。内面は連結輪状と放射状暗文。外面は棒状工具圧痕2条と太目のミガキ。器表は浅黄色2.5Y7/3、断面明赤褐色5YR5/6を呈す。胎土にわずかに1mm前後の石英・長石・黒雲母あるが精良な胎土と言える。体部の立ち上がりがゆるい事とおおよその法量から飛鳥時代頃の坏Cと思われる。

9は須恵器甕胴部片。内面は同心円タタキでナデはなし。外面は木目の浮いた平行タタキ後カキ目で自然釉薄くかかる。器表・断面とも灰白色7.5Y7/1を呈す。胎土に0.5mm強の長石・黒色粒わずかにあり。陶邑産とは胎土が異なる。

10は土師器甕胴部片か、羽釜の可能性もある。内面は磨滅し調整不明、ナデか。外面はタテハケ、煤附着。器表は灰黄褐色10YR5/2、断面はにぶい橙色7.5YR7/4を呈す。胎土に0.5mm強の長石あり、石英若干あり、赤色粒わずかにあり。古代の長胴甕もしくは羽釜であろう。

11も土師器、甕か羽釜の胴部片。内面はハケ後タテケズリ。外面ハケ、ナナメやヨコのハケをタテハケが消す。ハケ目は細かく、浅い。器表はにぶい橙色5YR6/4、断面は灰白色2.5Y8/2を呈す。胎土に1mm弱の石英あり、長石・チャート若干あり。古代のものか。

12は弥生土器高坏脚部片。坏部内面は磨滅するがわずかにミガキ残る。外面は磨滅し調整不明。脚部内面は最上部ヨコユビナデ、その下からタテハケ入るが、下部は磨滅で調整不明。ただし、脚端部は凹面を成すのでヨコナデか。脚部外面はタテミガキ、坏部との接合部近くにヘラ状工具痕散在、脚部裾はヨコナデか。器表は浅黄色2.5Y7/3、断面は灰黄色2.5Y7/2を呈す。胎土に1mm前後の石英若干あり、1mm弱の長石わずかにあり。椀形坏部の高坏と思われるが、脚上部が中実で、低い脚部形態は、庄内式併行期の可能性もある。

13は弥生土器甕底部片。残存率10%、底部周は100%残存。内面は左上がりの板ナデ、一部に炭化物附着。外面はタタキ、煤附着、赤変あり。底部は円板充填の接合痕残り、輪台技法と考えられる。葉脈の圧痕も残る。器表は灰黄褐色10YR6/2、断面はにぶい褐色7.5YR6/3を呈す。胎土に3~1mmの石英あり、1mm弱の長石若干あり、2~1mmのチャートわずかにあり。輪台技法も含め、弥生土器の甕底部の製作法から逸脱しており、庄内式併行期のものの可能性が強い。

14は製塩土器底部片。残存率10%、脚台部周50%残存。内面はユビオサエ後左上がりハケ。外面タタキ。脚台部は内外面が対応するユビオサエ、内面親指、外面人差し指によるか。内面に二次的被火による赤変あり。器表は灰黄色~黄灰色2.5Y6/2~5/1、断面黄灰色2.5Y5/1を呈す。胎土に0.5mm強の石英・長石・赤色粒若干あり。脚台Ⅱ式。

15は弥生土器台付き鉢底部片。残存率20%、底部周50%残存。鉢部は内面ミガキ、外面ナデ。台部は、内面最上部はユビナデ、その下にユビオサエ2列、中央のユビオサエが上下に切られる。台部外面はタタキの痕跡残り、絞りこんだ部分はユビオサエ、最後にナデ。円板充填により底部を成形する。器表・断面ともにぶい黄橙色10YR7/2を呈す。胎土に1mm前後の赤色粒若干あり、1mm弱の石英・チャート

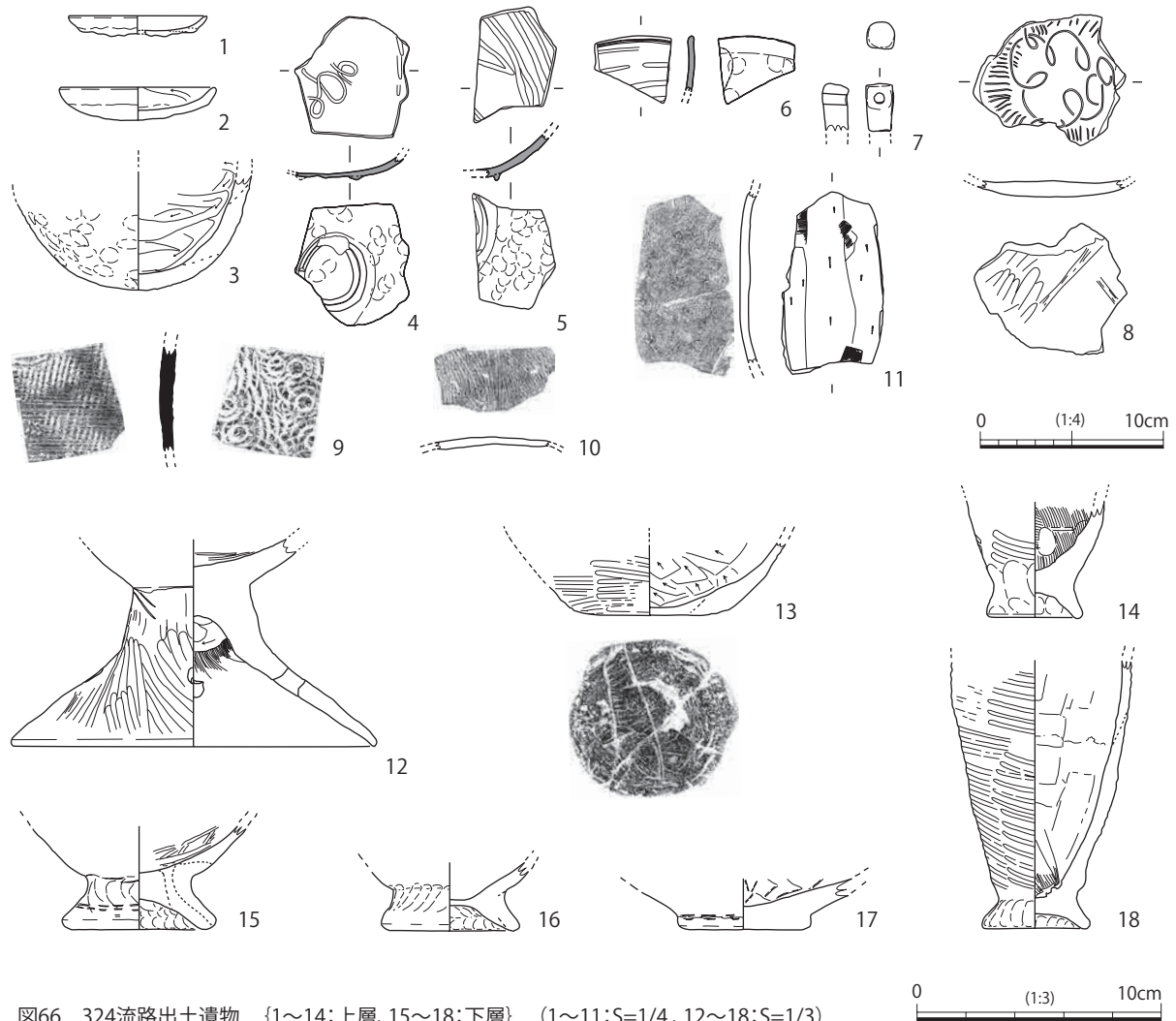


図66 324流路出土遺物 {1~14:上層、15~18:下層} (1~11:S=1/4、12~18:S=1/3)

わずかにあり。割りと精良な胎土である。

16も弥生土器台付き鉢底部片。残存率10%、底部周100%残存。鉢部は、内面磨滅で調整不明、外面ナデ。台部は内面ユビオサエ2列、外面ユビオサエ、端部はヨコナデ。台より内側の底部が極端に薄い。器表は灰黄褐色10YR6/2、断面にぶい橙色5YR6/4を呈す。胎土に1mm前後の石英・1mm弱の長石若干あり。

17は弥生土器片、形態は壺底部のようだが、タタキの痕跡など調整から甕と判断した。底部周90%残存。内面は左上がりの板ナデ。外面は底部側縁にタタキ残しながらナデ、底部は無調整。底部と胴部の境の屈曲部に粘土接合痕残り、板状粘土を貼って平底にした可能性がある。器表・断面とも灰黄褐色10YR6/2を呈す。胎土に2~1mmの石英多し、1mm前後のチャート・1mm弱の長石あり。これで甕の底部なら技法の逸脱具合から庄内式併行期の可能性が考えられる。

18は製塩土器下部片。残存率50%、底部周完存。内面は底部付近は左傾の強いタテハケ、上方のヨコ板ナデをそれが切る。粘土接合痕残る。外面はタタキ。脚台部は内外面が対応するユビオサエ。器表・断面とも灰黄褐色10YR6/2を呈し、赤変などは見られない。胎土に1mm前後の石英・長石・チャート若干あり。脚台Ⅱ式。

以上の遺物を通観すると、324流路下層は庄内式併行期にまると見て良く、製塩土器はこの層の上面に乗った形の土器群4のものと同型式として良いだろう。上層の遺物は、古代のものは時期を

限定できるのは8の坏C片しかないが、おおよそ飛鳥時代後半～奈良時代初頭として良いだろう。中世は瓦器碗で見れば13世紀前葉から後葉のものを含むと見て良い。おそらくそれより前に耕地開発とこの流路の水路化がなされ、その時期より後に現代水路の位置に移動したのであろう。

6) 337 土器群 4

324 流路の肩部よりまとまって出土した製塩土器である。製塩土器は、その中のひとつである流路(324 流路)の一部分の肩部が一旦洪水砂で埋没した後(図67の断面図117の層)、新たにできた肩部上面から、ほぼ原形を推定できる製塩土器5個体分の破片と、その下敷きになった破片が出土した(図42(06-1-3tr.北西壁)・図67)。これらを「土器群4」とし、器形を確認できた個体について番号を付した。器壁にあまり磨滅が見られないことや、接合状況から流失破片もほとんどなかったことから、一度に埋まり、出土位置は原位置をほぼ保っているものと考えられる。

出土したのは116層からであるが、第4面(新)で土器の一部が出土した時点から、土器群に伴う土坑等の存在を探ったが確認できなかった。製塩土器は長径110cm、短径40cmの範囲において5個体と破片を確認した(調査時は5個体しか識別できなかったため、図67の実測図は土器5までの番号となっている)。土器1・2は口縁の向きが互いに逆方向で並列していた。土器3は土器2の下に斜めに、土器4・5は2個体とも口縁が同じ方向で並列していた。また、これら5個体の下には破片が散乱しており、後に接合作業をすすめる中でもう1個体が復原できた(土器6)。さらに、他とは明らかに残存部の器壁厚が異なる破片が含まれていることも確認した(土器7)。

土器群4のうち、ほぼ完形に復原できたのは土器1・2・3・4・6である。これらはいずれもほぼ直線状に開き、細長いメガホン状の外見を呈している(図68)。

それぞれについて容量を計測した。計測方法は、砂の圧力による土器の損壊を防ぐため、ビニール袋を入れた上から均質な砂を口縁端部すり切りまで入れ、200mlと50mlのビーカーに移しかえて容量を算出した。各々について各3回計測し、最大値を採用した。土器1・2・3・6の4点の平均値は958.75mlであった。器高は残存部分の最大値を採用した。以下、各個体の詳細について述べる。

土器1は出土時に北端にあった個体で、高さ25.4cm、幅11.8cm、容量1,100ml。7個体のうちで最大容量を量る。内外面ともに器表面が非常に良好に残り、特にタタキは他個体に比べ非常に明瞭である。タタキは上が下を、左が右を切っている。口縁部付近に製作時のものと考えられる赤変と黒斑が確認できる。二次的焼成は見られない。口縁端部は棒状工具による面取りがなされており、凹面をなす。脚台部直上外面は凹凸が激しい。内面は板状工具によるナデ上げののち、布状工具による左上がり方向のナデが施されている。非常に平滑に仕上げられており、当て具痕跡はみられない。白色の付着物もみられない。内面には粘土紐継ぎ目が確認でき、底部は棒状工具による螺旋状の強いナデが残る。脚台部にはしっかりとしたユビオサエが内外面で対応しており、親指と人差指で挟んで整形したことが確認できる。上げ底状を呈す。底径5.0cm。

土器2はひび割れた状態での出土だったが、遺存状況がもっとも良好でほぼ完形に復原できた。高さ26.7cm、幅10.6cm、容量890ml。二次的焼成は見られない。タタキはナデで半ば擦り消しで、胴部中央にのみ明瞭である。口縁部は細かく不規則に波打ち、内面には粘土紐の単位が認められる。内面は当て具痕は見られず弱いタテナデが入るが、粘土紐の痕跡が非常に明瞭に残っている。底部は棒状工具によるナデ上げがみられる。白色の付着物はみられない。脚台部はユビオサエの切り合いが途中で左右が逆になることから、両手使用の成形とみられる。底部凹面は浅い。底径4.7cm。

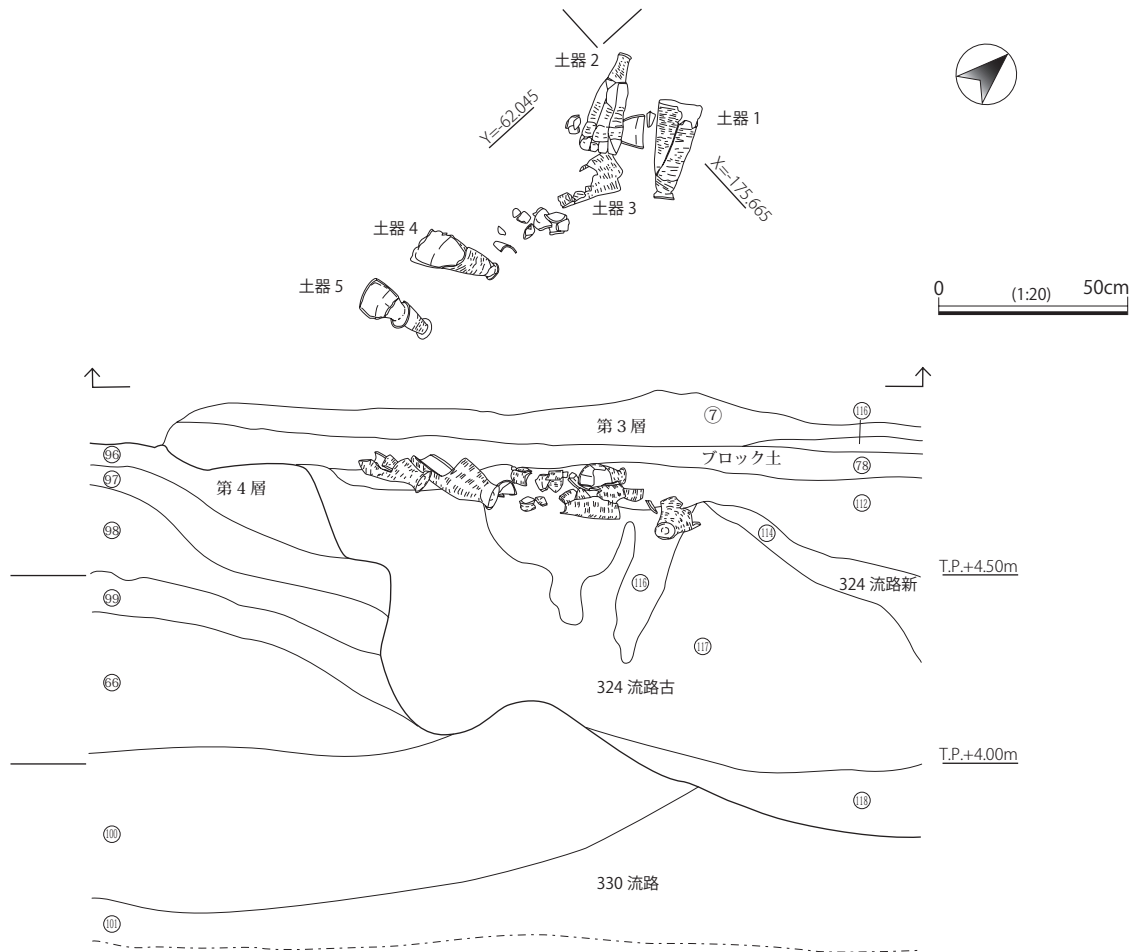


図67 湊遺跡 3tr. 第4面古土器群4出土状況図(土層断面は近接するトレンチ北西壁、○数字の土質は図42に同じ、S=1/20)

土器3は、出土時は下半部片がやや散乱していたものの、接合作業の結果ほぼ全容を確認できた。高さ23.9cm、幅12.0cm、容量900ml。外面には口縁端部から脚台部直上まで左が右を切るタタキが残る。二次的焼成は見られない。口縁端部の成形は明瞭な面はみられないものの土器7と似ており、凹部も確認できることから同じ手法によるものと思われる。外面には粘土紐の継ぎ目にひび割れがみられる。口縁端部より約7.5cm下の部分からやや開きが強くなる。ここから上部にかけての広がりや下部のタタキの方向が異なることから分割成形の可能性もある。内面は粘土紐の継ぎ目を残し、弱いタテナデが入る。底部内面は棒状工具による強いナデ上げが残るが、上からの別工具のタテナデがそれを切る。脚台部は土器1ほどのくびれはみられないが、ユビオサエがみられ、やや上げ底である。底径4.0cm。

土器4は高さ16.8cm、幅8.7cm、容量395ml。他の完形品のちょうど3分の2の大きさの小型品と考えられる個体である。口縁端部は、均一な厚みを保ったまま丸く収まっており、粘土を折り曲げた痕跡もあることから完形品と判断した。器表面には口縁から脚台部直上まで左が右を切るタタキが残っており、二次的焼成はみられない。内面はタテナデが施され、底部内面には棒状工具痕が残っている。脚台部にはしっかりしたユビオサエがみられ、土器5と同様に粘土塊をなでつけ、平衡をもたせている。底径4.3cm。なお、小型品はこの1個体のみである。

土器5は高さ18.4cm、幅8.6cm。上端は角を持った破断面で、他の完形品の器高から推測して、上部3分の1程度が欠損しているとみられる。幅広の工具でもって縦方向の調整が施されており、器体下部にタタキが辛うじて看取できる程度である。二次的焼成はみられない。内面は粘土継ぎ目がよく残り、

白色の付着物はみられない。底部内面には棒状工具による強いナデ上げが残っている。脚台部はユビオサエが確認できる。他個体と比べて上げ底である。脚台部内面の一部に、脚台部の厚みを均等にするべく別途粘土塊をなでつけている。底径 4.7cm。

土器 6 は高さ 27.1cm、幅 11.7cm、容積 945ml。7 個体のうちで最も器高が高い。出土状況時には 5 個体の下に破片が散乱し、個体として確認できなかった個体である。接合するとほぼ全容を確認できるまでに復原可能であった。内外面ともに器表面が全体的に非常に良好に残る。口縁から脚台部直上までタタキが確認でき、二次的焼成は見られない。上端より 3 cm ほどの部分に粘土継ぎ目が明瞭に残る。口縁端部には幅 5 mm ほどの面が確認でき、端部を成形した際の凹みが残っている。口縁部付近には赤変がみられるが製作時ものと思われる。内面には粘土紐の単位が確認できるが、タタキを受ける当て具の痕跡や、白色の付着物はみられず弱いタテナデが入る。底部内面には棒状工具による筋状のナデが残っている。底径は 4.4cm、底面は凹面を成さない平底である。脚台部にはユビオサエが見られ、くびれはなく寸胴である。

土器 7 は高さ 8.9cm、幅 5.7cm。器壁が非常に薄く、他の 6 個体とは異なる様相を示す。器表は磨滅を受けているものの、脚台部のユビオサエに切られるところまでタタキが施されていることがわかる。内面は板状工具による縦方向のナデが見られ、底部には板状工具の強い当たりが残っている。外面は褐色を呈し、内面は黒色である。この個体は使用された可能性を否定できない。底径 4.7cm。

黒斑の位置と赤変 土器 3 と土器 6 には、ともに器表面に同様の黒色箇所がみられる。黒斑よりはやや薄いため焼成時のものではなく、その後に付着した汚れと考えられ、さらに、土器 6 の黒色箇所は破片をまたがらないことから、損壊後の付着とみられる。

また、土器 6 の口縁部には、他個体の赤変（7.5YR7/4 にぶい橙色）とは異なる、非常に明るい橙色（2.5YR6/6）を呈する部分がある。非常に薄く部分的に軽い磨滅で色が剥がれている。塗布された赤色顔料がはがれたものか、赤変かは判別しがたい。

製塩土器の年代観 土器群 4 直下の洪水堆積層内から出土した、生駒西麓胎土の庄内式甕をはじめとする土器群、そして後述する同遺構面の 326 流路から出土した遺物（土器群 6）には、在地産胎土のものと考えられる甕や、煤が付着した生駒西麓産胎土の庄内甕、そして本土器群と同じ脚台Ⅱ式である製塩土器（脚台部）とが相伴している。完形品が出土した土器群 4 とは層位は異なるものの、形式的な時期差はみられない。この事実から、庄内式併行期の初頭を除く前半（古墳時代初頭、3 世紀中葉ごろ）の所産と考えられる。

7) 290・325 浸蝕痕及び 338 土器群 5

3 tr. 第 4 面古の 324 流路と 326 流路の間は多くの浸蝕痕が見られた（288～290・296・297・314・325・327）。整地層を挟まない部分では第 4 面新の段階でも一部その形を検出できた（図 62）が、全容が明らかになったのは第 4 面古の段階である（図 63）。

これらを浸蝕痕と判断した理由は、底部が大きく凹凸し、埋土は土砂流的な混濁層や粗砂中心の砂層である事、浸蝕痕同士やその内部で切り合いが多く見られる事から、常時安定した流水があるものではなく、洪水のような激しい水流が発生したときのみ、平坦地を浸蝕し、かつそれを埋積したものと考えたからである。324・326 流路の破堤的洪水によるものであろうが、それらの方向性からすれば、主に古代段階の 324 流路からの洪水によるものであろう。

288 浸蝕痕は北西壁付近に砂礫が高く堆積し（図 42、3 tr. 断面の 85）それが 325 浸蝕痕に切られ

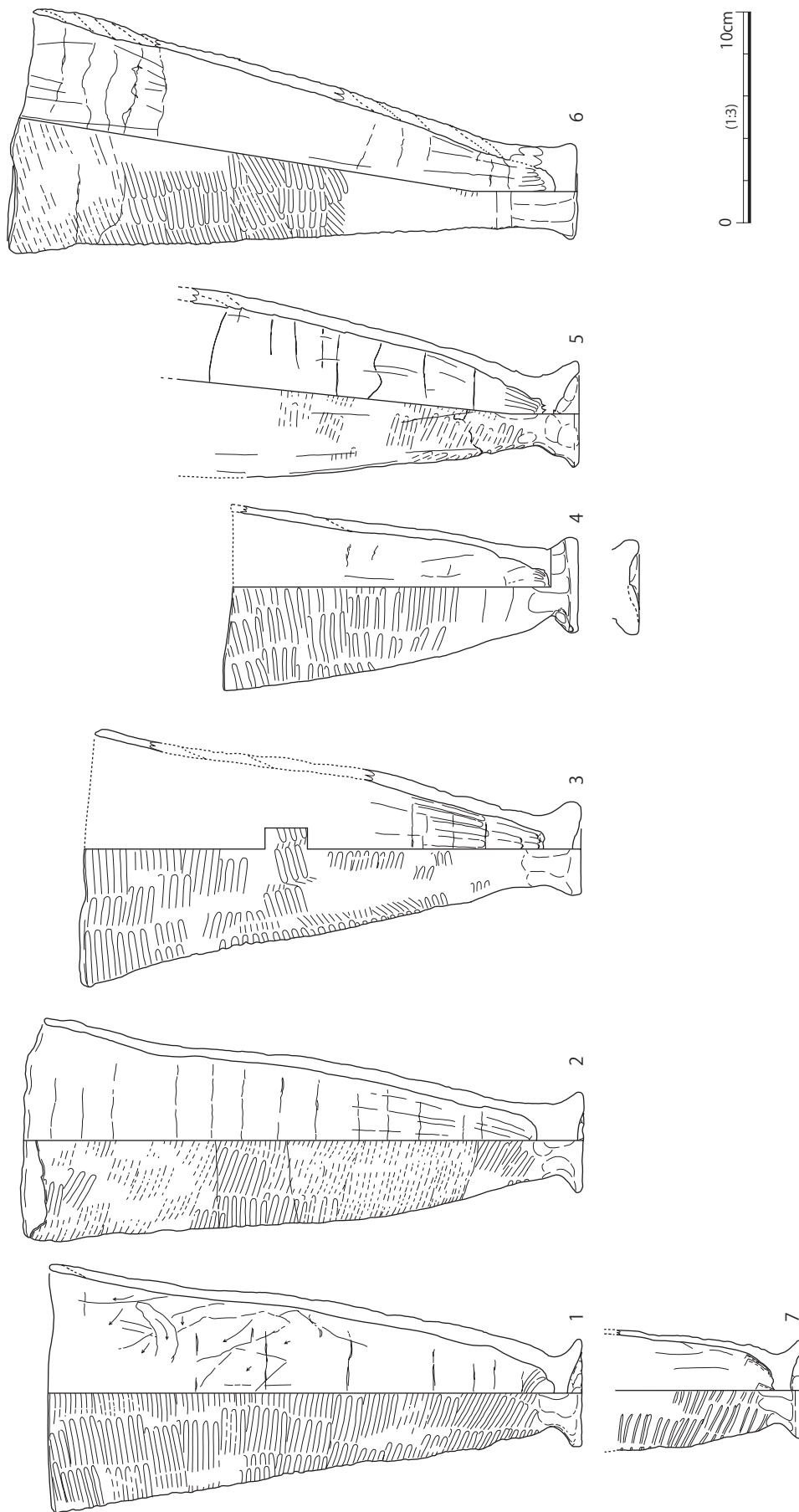


图68 324流路肩部土器群4出土遺物 {1~7:土器1~7} (S=1/3)

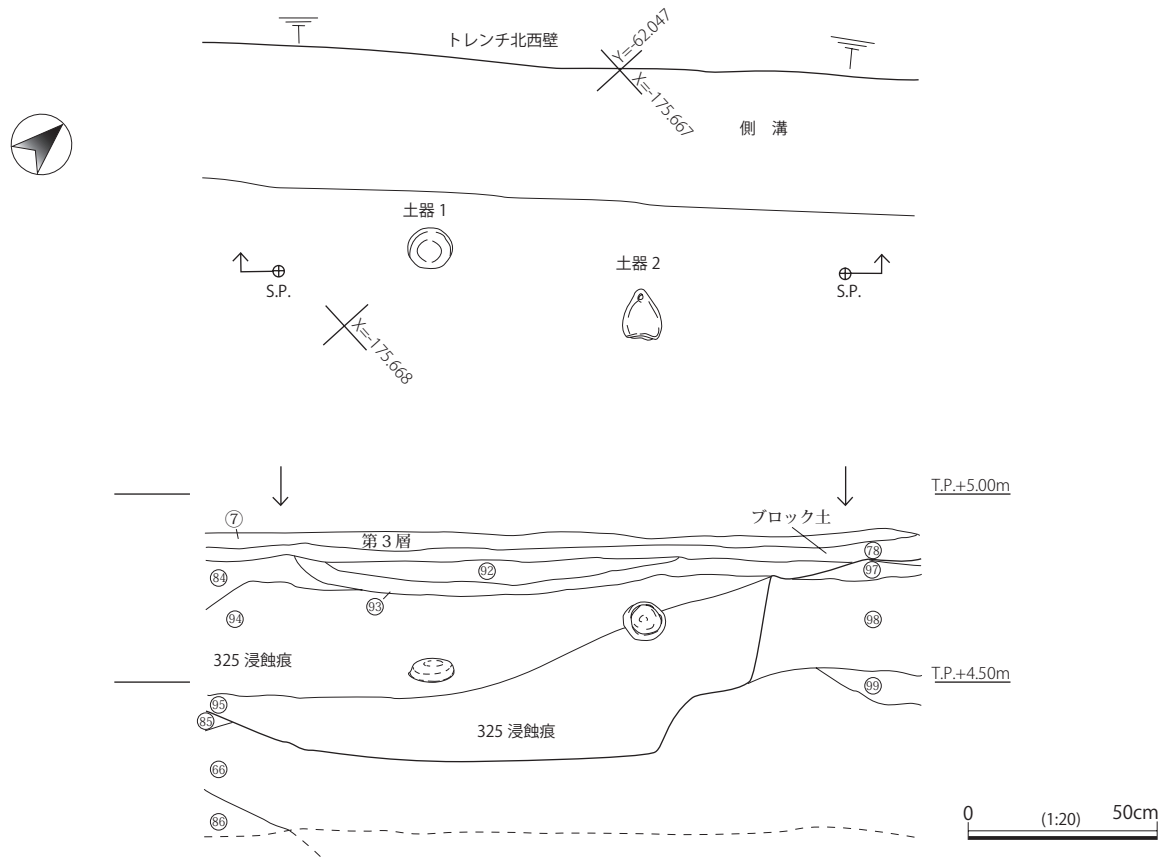


図69 湊遺跡 3tr. 第4面古325浸蝕痕内土器群5出土状況(土層断面は近接したトレンチ北西壁、○数字は図42に同じ)

(S=1/20)

ているが、南東側では黒泥土の堆積が見られた。289 浸蝕痕は南東壁から入り、一旦浅くなった後、290 浸蝕痕を枝として北西側では再び深くなる。土砂流的な混濁した埋土が多い。296・297・314・327 など、324 流路から離れた浸蝕痕は、深さも浅く、埋土も細砂程度である。全体に遺物は少ないが、325 浸蝕痕ではほぼ完形の飛鳥時代須恵器坏蓋と土師器飯蛸壺が出土したので、その2点をもって338 土器群5とした(図69)。2点はトレンチ北西壁断面の94の層内で95の上面に乗った状態で出土した。325 浸蝕痕は250 浸蝕痕の砂層を切り、94はその中でも新しい方の堆積物なので、浸蝕痕群の中では新しい時期を示していると思われる。

他の浸蝕痕も包含遺物は少なく、288では器種不明の土師器小片2、289では土師器小皿小片1・須恵器坏小片1、290で土師器甕片2が出土した程度である。

図70は325浸蝕痕内338土器群5の遺物である。1は完形の土師器釣鐘形飯蛸壺。内面は螺旋状のナデ。外面はやや磨滅するがナデか。吊手部は不定方向のナデが走るが、上辺を棒状工具による強いナデが走り凹面を成す。また、一部に編み物の圧痕らしきものがある。また、胴部にも螺旋状に棒状工具によるナデが3条散在している。口縁部は整えずに大きくうねる。器表は浅黄色2.5Y7/4、断面淡黄色2.5Y8/3を呈し、胎土に1mm前後のチャート・石英わずかにあり。

2は完形の須恵器坏蓋。内面は天井部に数方向のナデ後、口縁まで回転ナデ。外面は、口縁部回転ナデ、天井部は小さな段を成し、回転ヘラ切り後粗い不定方向ナデ、最後に植

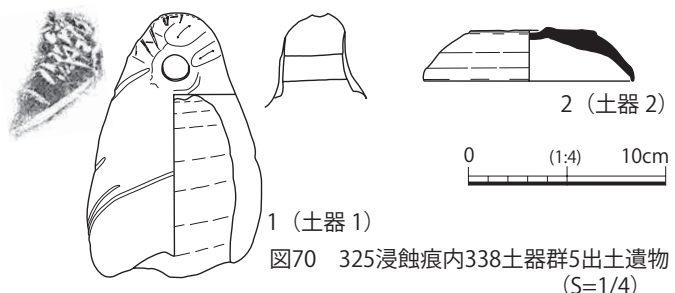


図70 325浸蝕痕内338土器群5出土遺物 (S=1/4)

物茎の圧痕数条。この圧痕は乾燥時の台への付着を防ぐためか。器表は灰色 N7/0。胎土に 1 mm 前後の長石あり、1 mm 前後の黒色粒若干あり、2～1 mm の石英・1 mm 弱のチャートわずかにあり。陶邑産とは胎土が異なる。飛鳥Ⅲ期頃のもの。これにより 1 の飯蛸壺が飛鳥時代のものと分かる。

図 71 は 290 浸蝕痕の黒泥土埋土内出土の土師器甕口縁部片である。残存率は不明。口縁の曲がりかゆるく、かなり大きめの個体のような感

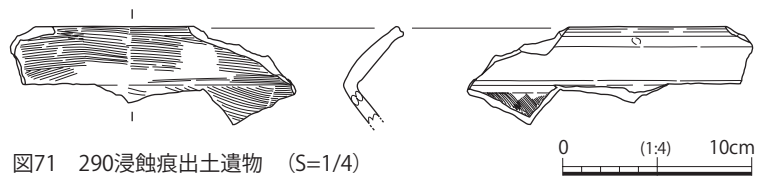


図71 290浸蝕痕出土遺物 (S=1/4)

じである。内面は、口縁部ヨコハケ、肩部左上がりナナメハケ。外面は口縁部ヨコナデ、肩部左傾ハケ。口縁端部は棒状工具により凹面を成す。器表・断面ともにぶい黄橙色 10YR7/2 を呈し、胎土に 1 mm 前後のチャート・石英あり。これだけで時期を云々は出来ないがおそらく飛鳥時代のものか。

以上の事から考えればこの部分の浸蝕痕は飛鳥時代頃に 324 流路からの洪水で活発に形成されたとされる。それは後述する 326 流路が古墳時代後期頃に後背湿地化し、その後継となる流路が調査区内で確認できない事と関係するかもしれない。調査区より上流側で 324 流路と合流する形になり、水流も増えたため、調査区内に洪水の浸蝕が及びやすくなった可能性が考えられる。

8) 326 流路

3 tr. のほぼ南西半を占める流路で、上流に矢畑池のある谷から流下しているものと思われる (図 63)。最終的な流路の形態は南から調査区に入り、調査区内で大きく蛇行して西に抜けていく。右岸の形態が良く残るが、左岸も、トレンチ西角付近に 05 - 1 - 3tr. 第 5 面シュートバー 1 の続きが削り残されている (図 42、3 tr. 北西壁断面の 8)。

この流路はトレンチ北西壁断面で確認できる 63・64、48・49 などの流路を前身として次第に南西に移動してきたと思われる。流路底部でトレンチと直交する直線に近い肩を検出し、329 流路としたが、それが最初の形態と考えられる。破堤的な洪水で、直線的に流路変更したようだ。その時の堆積層がトレンチ北西壁の 20 と考えられる。これを 326 流路下層とした。また、流路内北東側底部でさらに粗い砂礫層にあたり (トレンチ北西壁断面 51)、それを一部掘削したが、断面観察で、これは北東側にもぐりこんでいくさらに古い流路の堆積層 (330 流路) と判明し掘削を中止した。その南西側には非常に締まりの良い水平堆積層 (31～33) が削り残されていた。格段に古い層のようであり、33 には風化礫も含まれるので、開析谷形成以前の段丘構成層の可能性が高い。

その後流路内は 19 の層の堆積が進行する。これは植物遺体を多量に含むシルトと細砂が互層状に重なる層で、植物遺体には特に松ぼっくりが多い。おだやかな流れが、若干の緩急を繰り返し堆積させていった層と思われ、その過程で蛇行を強めていったのであろう。この層に 18・30・42 を加えたものを 326 流路中層とした。339 土器群 6 もこの層の中に位置する。

中層のもう一つの特徴はコンポリュートラミナで、上下の層境も激しく巻き上げられている事である。ただ、19 の中では上にいくほど激しく、下方では次第にゆるくなり、下層との層境までは及んでいない。これは、上層 16 の堆積が進行している時点での地震痕跡であろう。

その 16 は低湿地的堆積の黒泥土で、流路が後背湿地化した事を示す。その後 29・28 と次第に有機物の少ない層が堆積し、28 は耕地開発時に耕土として成立した第 3 層の下で鉄分に染まり、黄褐色系シルトとなる。これらを 326 流路上層とした。後にこの層の土が近世の洪水復旧の際、第 2 層新の貼り床の材として、第 2 面古の大型土坑群により採取される事になるのは上述した。

調査区内では流路が後背湿地化した時点で、この流路の後継となる流路がない事は先述した。開析谷内にある他の2本の流路のどちらかと調査区より上流側で合流する形になったと考えられる。現代流路の合流する順序から推測すれば、324流路と合流したのであろう。現在は05-1-3tr.との境に後継と言ってもよい水路が存在しているが、その水路が再び自然の作用でその位置に移動してきたのか、完全に人工的に付けられたものかを判断する資料は調査区内では得られなかった。

遺物は中層に豊富であった。上層は須恵器で完形の坏身1点と、高坏小片1のみ。下層は35片出土で、縄文晩期の突帯文土器1片、製塩土器4片。弥生土器では鉢1点の他、タタキ甕2片。庄内式土器では高坏1点の他、生駒西麓産胎土甕1片のみである。

中層出土遺物は339土器群6を除いても173片を数え(表15)、それでも製塩土器の微細な破片は採取しきれなかったと思われる。在地産と思われる弥生土器が最も多く、生駒西麓産胎土の庄内式甕の26片はほとんど1個体の分なので、個体数的な比率はもっと少ないと思われる。

表15 326流路中層 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別	破片数		大器種	破片数		細別	破片数	
			破片数	%		破片数	%		破片数	%
土器	173	製塩	38	22.0						
		弥生	106	61.2	壺	8	6.1			
					高坏	15	11.4			
					蛸壺	4	3.0			
土師器	26	15.0	甕	26	100.0	生駒西麓	26	100.0		
石製品	1	剥片	1	100.0		1	100.0	サヌカイト	1	100.0

図72は上層と下層の遺物の内実測可能であったものである。1が上層、それ以外は下層。

1は完形の須恵器坏身。内面は底部に同心円文タタキを残し、回転ナデ。外面は底部回転ヘラケズリ、上は回転ナデ。器表は灰色7.5Y5/1を呈し、胎土に1mm弱の石英・1mm前後の黒色粒、0.5mm強の長石をわずかに含む。陶邑産か。中村編年のⅡ-1~2にありえるもので、6世紀前葉~中葉。

2は縄文晩期の突帯文土器片。深鉢か。内面は突帯の裏にはユビオサエ、その上には縦方向のユビナデ。外面もユビナデ、突帯には刻み目。全体にかなり磨滅している。器表は暗灰黄色2.5Y5/2、断面は黄灰色2.5Y4/1を呈す。胎土に5~1mmの結晶片岩多し、1mm強の石英・1mm前後の長石若干あり、1mm前後のチャートわずかにあり。紀伊産の胎土である。

3は弥生土器鉢。残存率80%。内面は左上がりナナメハケ。外面はタタキ。底部は上げ底状で内外面対応するユビオサエがあり、その内側底部はナデ。口縁端部は細い棒状工具でナデで狭い凹面を成す。器表はにぶい黄褐色~灰黄褐色10YR5/3~6/2、断面は灰白色.5Y7/1を呈す。胎土に5~1mmの石英あり、1mm前後の長石あり。タタキ目がかなり太いのと、上げ底状底部が特徴で、V様式の中でも和泉V-4以降のものか。

4は庄内式土器高坏。残存率80%、口縁部周70%残存。坏部内面は底部一定方向直線、口縁部タテのミガキ、屈曲部にそれを切る1条のヨコナデ。外面は全体的にタテミガキ、坏部屈曲部に1条のヨコナデ。脚部内面は、脚柱部はシボリ痕、脚裾部はヨコナデ。四方透かし。器表はにぶい黄橙色10YR6/3、断面は浅黄橙色10YR8/4を呈す。胎土に4~1mmの石英あり、1mm前後の長石・2~1mmのチャート若干あり。横位のミガキはないが、器形は典型的な庄内式の有稜高坏である。胎土にはチャートの砂粒も含まれ、在地のもののような感じを受ける。在地産であるならば、高坏において泉南地域でも庄内式が成立している事になり、庄内式併行期ではなく、庄内式期が存在する事になるため、重要な問題をはらんだ土器である。坏部の稜より上の外反部分が長く伸び、横位のミガキがない事の2点だけ

で考えれば、庄内式期でも初頭段階のものになる。

図 73 は中層出土遺物のうち、実測可能だったものである。

1 は弥生土器高坏片。残存率は 40% ほど、脚部周 25% 残存。坏部は内面ナデ、方向不明。外面はミガキのようだが、単位確認できない。脚部は、内面の脚柱部はシボリ痕残り、脚裾部はヨコナデ、端部付近に 1ヶ所粘土塊付着。外面はタテミガキ、脚柱部と脚裾部の境に 2 条のみ横位のミガキ、脚裾部はヨコナデ。残存する 2 個の透かし孔は 45 度間隔ではないが、おそらく四方透かし。器表は灰白色 5Y7/1、断面は灰白色 2.5Y8/2 を呈し、胎土に 1 mm 前後の石英・長石あり、1 mm 弱の黒色砂粒若干あり、1 mm 前後のチャートわずかにあり。おそらく弥生時代後期後半頃のものと思われるが時期を限定できる要素がない。

2 も弥生土器高坏。残存率 50%、脚部周も同じ。坏部内面は磨滅し調整不明。脚部外面はタテミガキ、裾部内面は下端付近にヨコハケが残存。三方透かし。器表・断面ともにぶい黄橙色 10YR7/3 を呈す。胎土に 3～1 mm の石英あり、1 mm 前後の長石若干あり、6～1 mm のチャートわずかにあり。脚柱部中実の高坏は和泉 V - 4 以降出現するものである。

3 も弥生土器高坏片。残存率 20%、脚部周 40% 残存。坏部内面は磨滅し調整不明。外面は全体的にヨコナデか。脚部内面は、脚柱部上半にシボリ痕残り、下半はユビナデ。脚裾部はヨコナデ。器表は浅黄橙色 10YR8/3、断面は灰白色 10YR8/2 を呈す。胎土に 1 mm 前後の赤色粒・石英若干あり、1 mm 弱の長石わずかにあり。やや在地の胎土とは違う感じがする。小さく、透かし孔のない脚部というところでは弥生時代後期後半頃の可能性が高いか。

4 は弥生土器甕底部片。底部周 50% 残存。内面はユビオサエ。外面はタテハケ、底部は無調整。器表は黄褐色 2.5Y5/3、断面は灰黄褐色 10YR4/2 を呈す。胎土に 2～1 mm の角閃石多し、3～1 mm の長石あり、1 mm 前後の石英若干あり。生駒西麓産の弥生時代中期の甕である。磨滅も強く、おそらく下位の 330 流路と同位の包含層から入ったものであろう。

5 は弥生土器壺底部片。底部周完存。内面は磨滅するが、左上がりのナデかハケ。外面は磨滅し、調整不明。器表はにぶい黄橙色 10YR7/3、断面は浅黄橙色 10YR8/3 を呈し、胎土に 0.5 mm 強の石英・長石あり、1 mm 前後のチャート・赤色粒若干あり。形態から見て、弥生時代後期の長頸壺の底部であろう。

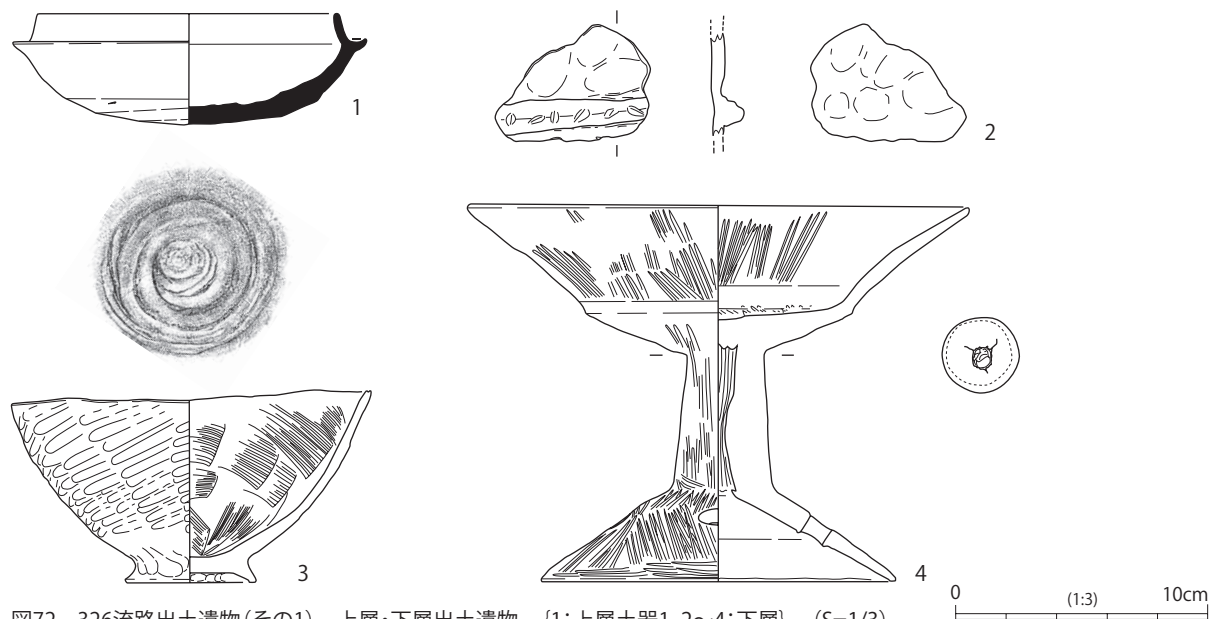


図72 326流路出土遺物(その1) 上層・下層出土遺物 {1:上層土器1,2~4:下層} (S=1/3)

6は弥生土器、おそらくコップ形の飯蛸壺片か。底部周60%残存。内面はヨコハケ。外面はタタキ、底部は板ナデのような工具痕残る。器表・断面とも浅黄橙色10YR8/3を呈し、胎土に1mm前後の赤色粒あり、1mm弱の石英・0.5mm強の長石若干あり、0.5mm強のチャートわずかにあり。

7は弥生土器甕底部片か。内面はナデ。外面タタキ、底部は無調整。器表はにぶい黄橙色10YR7/4、断面褐灰色7.5YR5/1を呈し、胎土に3～1mmの赤色粒あり、2～1mmの石英・1mm弱の長石若干あり。かなり球胴化した甕か。庄内式併行期のものの可能性高い。

8は弥生土器甕口縁部片。口縁部周30%残存内面、胴部ヨコナデ、口縁部ヨコハケ。外面胴部タタキ、口縁部ヨコナデ。器表は灰黄色2.5Y6/2、断面は橙色5YR7/6を呈す。胎土に1mm弱の長石・石英若干あり。

9も弥生土器甕口縁部片。口縁部周20%残存。内面は、胴部ヨコナデ、口縁部ヨコハケ、端部近くはその前にヨココビナデ1条か。外面は、胴部タタキ、口縁部ヨコナデ、口縁端部に刻み目。器表は黄褐色2.5Y5/3、断面はにぶい黄橙色10YR7/3を呈す。胎土に1mm前後の石英・長石あり。

8・9はV様式系の甕だが、胴部の膨らみ、屈曲の強い頸部、長く伸び外反する口縁部などに庄内式土器の影響が見られ、庄内式併行期のものと思われる。

10は庄内式甕。残存率80%。内面は、胴部左上がりナナメケズリ、口縁部ヨコハケ。胴部下部3分の1ほどに炭化物付着。外面は、胴部タタキ後半中心にタテハケ。頸部～口縁部はヨコナデ。口縁部に粘土継ぎ目残る。胴部中央に煤付着。底部に径3cmほどの焼成後穿孔あり。器表は褐灰色10YR4/1、断面は灰黄褐色10YR6/2を呈す。胎土に1mm前後の石英・黒雲母あり、1mm弱の角閃石・長石若干あり、微細粒に角閃石多し。生駒西麓産胎土。内面頸部直下のケズリはわずかに横位のもの残るが、全体にナナメのものが優勢である。外面のタタキはいわゆる「長いタタキ」、口縁端部のつまみ上げは顕著である。総合すると庄内式期の初頭を除く前半頃のもののか。

この個体は流路中層全体を掘削する前に、トレンチ北西壁沿い側溝を下げていた時に出土し、後に339土器群6を検出した位置と非常に近い。土器群6に含まれる可能性のあるものである。

11は土師器釣鐘形飯蛸壺。残存率は90%。内面は上半棒状工具による螺旋状ナデ、下半ヨココビナデ。外面は、吊り手部は孔周辺ユビオサエの後、吊手部の輪郭沿いにナデ。胴部はユビオサエ後右傾タテナデ。口縁部は1ヶ所厚さを減じて凹む。器表はにぶい黄橙色10YR7/3、断面灰黄色2.5Y7/2を呈し、胎土に1mm弱の長石あり、1mm弱の石英若干あり、0.5mm強の黒色砂粒わずかにあり。ほとんど磨滅がない事からもこの層の包含遺物が示す時期の飯蛸壺と確定できる。

12は製塩土器口縁部片。口縁部周20%残存。内面ナデ。外面タタキ後口縁端部にヨコナデ。二次的被火の痕跡なく、器表はにぶい褐色7.5YR6/3、断面は灰黄色10YR6/2を呈す。胎土に0.5mm強の長石若干あり、1mm前後の石英わずかにあり。

13も製塩土器胴部片。内面は粘土継ぎ目を残しながら、板状工具によるタテナデ後ヨコナデ。外面はタタキ。二次的被火の痕跡なく、器表は淡黄色2.5Y8/3、断面は灰黄色2.5Y7/2を呈す。胎土に2～1mmの赤色粒あり、1mm弱の長石若干あり、1mm前後のチャートわずかにあり。

14も製塩土器胴部片。内面ヨコナデ、外面タタキ。横位だけでなく、縦方向の粘土継ぎ目がある。器表は浅黄色7.5YR8/4、断面浅黄橙色10YR8/3を呈す。胎土に1mm弱の石英若干あり。

15は製塩土器脚台部片。脚台部周70%残存。胴底部内面にはヘラ状工具の痕跡あり。脚台部内面は上部シボリ痕、下半はそれを残しながらヨコナデ、下端部にユビオサエが1列並ぶ。外面はタタキ。脚

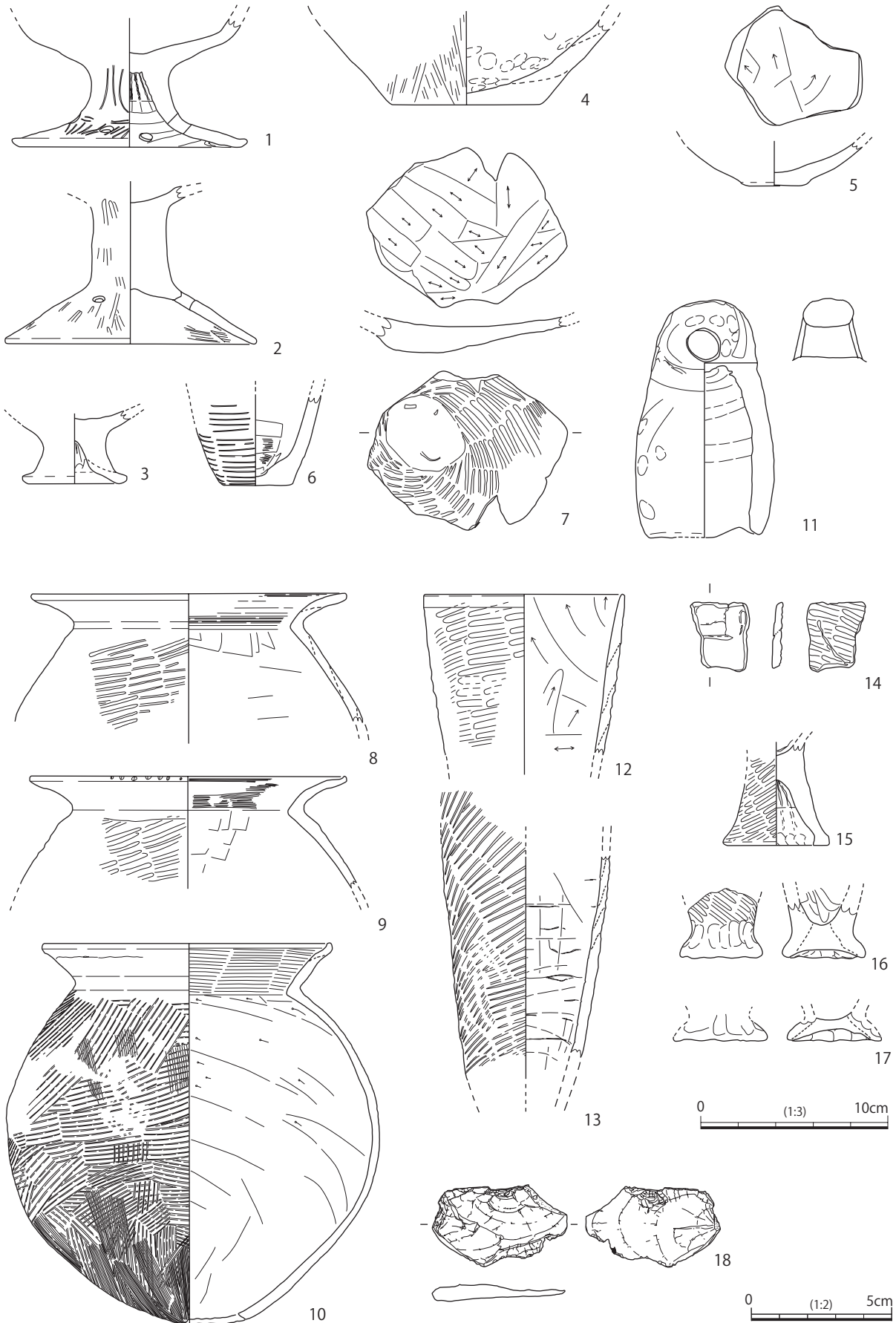


図73 326流路内出土遺物(その2) 中層出土遺物(土器群6を除く) (S=1/3、18のみS=1/2)

台端部は板状の台に置いたような平坦面を成す。器表は灰黄色 2.5Y6/2、断面はにぶい黄色 2.5Y6/3 を呈し、胎土に 1 mm 前後の石英多し、1 mm 弱の長石あり、1 mm 前後のチャートわずかにあり。今回の調査では数少ない脚台Ⅰ式のものである。

16 も製塩土器脚台部片。脚台部周 50% 残存。胴部内面は棒状工具による強いタテナデ。胴部外面はタタキ。脚台部は内外面が対応するユビオサエが並ぶが、その切り合いが途中から変る。両手使用の調整か。外面ユビオサエはタタキを切る。断面では底部に下方から粘土を詰めているのが分かる。器表はにぶい褐灰色 7.5Y7/2、断面は灰黄褐色 10YR6/2 で、表面が赤変していると言えなくもない。胎土に 1 mm 弱の石英・長石若干あり、1 mm 弱の赤色粒わずかにあり。脚台Ⅱ式。

17 も製塩土器脚台部片。脚台部周 50% 残存。磨滅する。胴底部内面はナデか。脚台部は内外面対応するユビオサエ。器表は灰色 5Y6/1、断面は灰黄色 2.5Y7/2 を呈す。胎土に 0.5 mm 強の長石わずかにあり。断面では底部に下から粘土を詰めているのが分かる。脚台Ⅱ式。

18 はサヌカイト製剥片。質量 7.45g。ネガ面とポジ面の打点方向が 90 度異なるが、ネガ面でのポジ面打点のある辺に打面らしきツブレがあり、ネガ面左下の剥離面もその辺に打点がありそうな事を見れば、ネガ面最大の剥離面は石核の剥離面調整か。事故的に薄く剥離して廃棄か。

以上、出土遺物を通観すると、中層の遺物は後述する 339 土器群 6 も含め、弥生時代中期の甕やサヌカイトを除けば、庄内式期の初頭を除く前半に併行する時期にまとまると見て良い。V 様式系の土器はその時期の在地の様相であろう。飯蛸壺がコップ形と釣鐘形があり、製塩土器は脚台Ⅰ式がわずかで、Ⅱ式が多い状況は重要であろう。

下層では庄内式初頭に遡る可能性のある高坏が存在するが調査区全体の層序的には矛盾はない。上層は 6 世紀前葉～中葉に流路が後背湿地化していた事を示すが、古墳時代中期～後期は湊遺跡全体で遺物の少ない時期である。その少し後、飛鳥時代に開析谷内に遺物が増えだすのと、この環境の変化は関係あるのだろうか。

9) 339 土器群 6 (図 74)

326 流路の右岸近くの中層下端付近、トレンチ北西壁沿いに位置していた土器群である。ほぼ完形のまま出土した土器 1 がほぼ中央で一番高い位置にあり、トレンチ北西壁断面の 19 の上面に近い高さである。それから 10～20 cm ほど下がったレベルで、周囲に大きな破片の状態、土器 2 が底部を上に向け、土器 4・5 は横位で、土器 3 などは口縁を上に向け散乱していた。

製塩土器片は、その東側に比較的大きな破片が多く、土器 7 が破片として一番大きく、一番高い位置にあった。西では出土レベルも下がり、土器 10・11 やその周辺の製塩土器片は土器 3・8・9 などの破片の下にもぐりこむようであった。

さらに細かい製塩土器の破片がそこから北西方向に帯状に分布し、出土レベルも下がっていく。トレンチ北西壁までそれは続き、断面では 42 の層内に入っている (図 42)。そこから考えれば、製塩土器は 42 の層に包含され、他の土器は 19 の層に包含されているようだ。東側の破片の高さが高いのは、層境もラミナも流路右岸肩部に向かって上がっていく位置にあるからであろう。

その出土状況から見ると、まず製塩土器の破片が大量に 326 流路右岸から投棄され、その中で軽く微細な破片は下流側に尾を引くように流されてから堆積したのであろう。その後、どの程度の時間差かは定かではないが、甕類が同じ位置に投棄されたと考えられる。土器 1・4 以外は完形に近い甕がなく、それも質量のある V 様式甕の底部の破片がないものが多いが、19 の層の状態からはそのような重い破

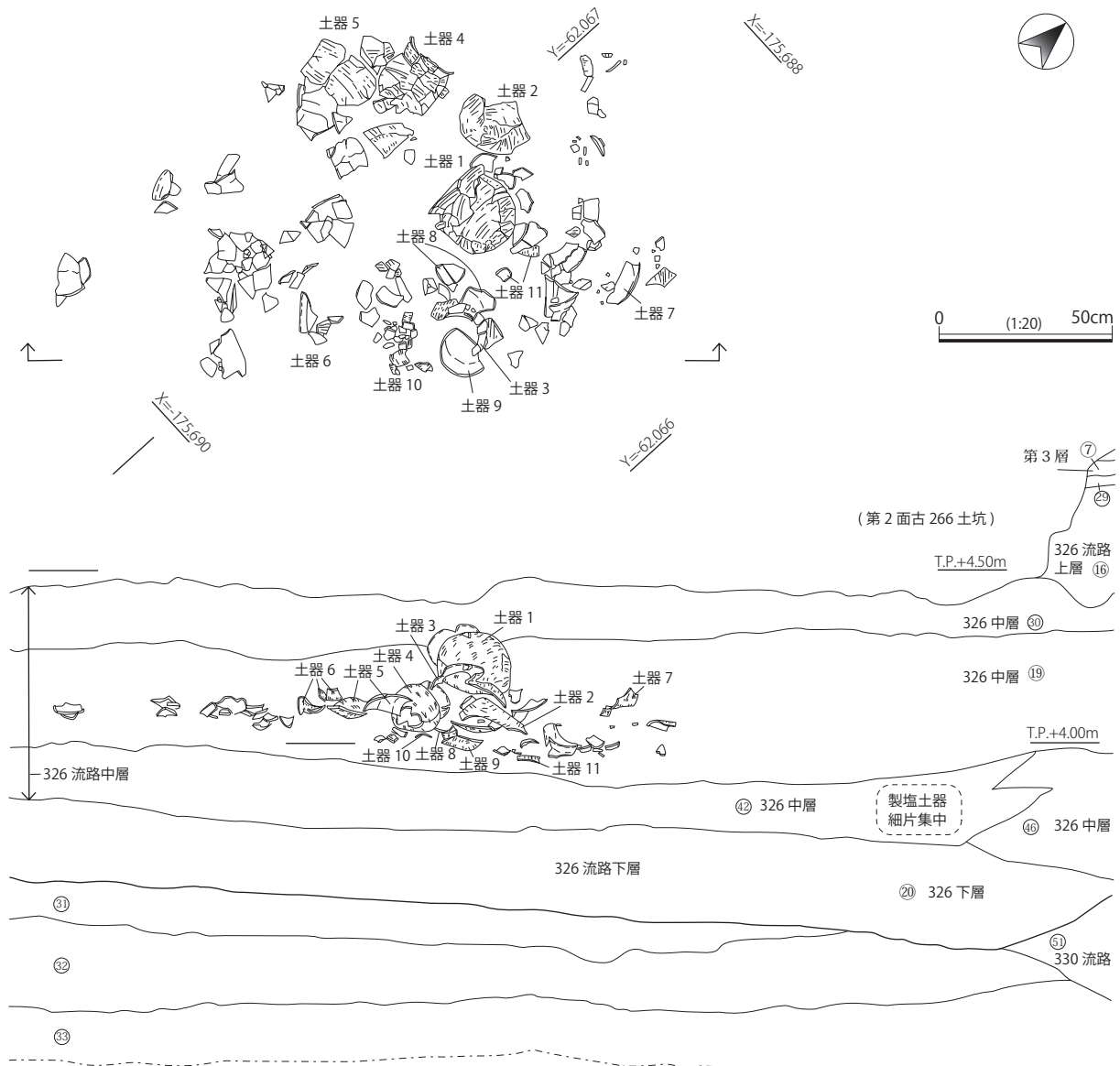


図74 湊遺跡 3tr. 第4面古326流路中層内339土器群6出土状況図
(土層断面は近接したトレンチ北西壁、○数字は図42に同じ) (S=1/20)

片を流下する水流があったとは考えにくく、さらに倒置状態で出土した土器2がその下に口縁部の破片が存在しなかった事も考えれば、甕類は土器1・4以外は破損し、破片が失われた状態で投棄されたと考えられる。製塩土器とまったく同じ位置に投棄されている事は、始めの投棄の記憶が鮮明なうちに2回目の投棄が為されたと考えられ、2回の投棄は一連の作業の中で行われた可能性が高い。製塩土器から塩を取り出す共同作業の後、引き続いて共同の飲食があったと推測するのは飛躍しすぎであろうか。完形の生駒西麓産庄内式甕の土器1が最後に投棄されている事もおそらくなんらかの意味がある。

出土遺物の内訳を見ると(表16)、構成としては製塩土器と弥生V様式系甕・庄内式甕にわずかに庄内式高坏と単純である。製塩土器片は2cm角以上の大きさの破片だけでも4988点を数え、コンテナ4箱分になった。もちろんさらに微細な破片もあり、取り上げ損ねたものもあろう。また、調査区北西壁外にも分布は続いていたので総量はさらにあった。脚台部片は100個体分以上あるが、全て脚台Ⅱ式のものであった。

弥生V様式系甕と庄内式甕の破片数の比率は7:2ほどであるが、これは確認できた個体数と全く

表16 339 土器群6 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別			大器種			型式部位			細別		
			破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%
土器	5341	製塩	4988	93.4									
		弥生	271	5.1	甕	264	97.4						
					高坏	7	2.6						
		土師器	82		甕	79	96.3	庄内	79		生駒西麓	79	
					高坏	2	3.7	庄内	2				

一致する。庄内式高坏片は同一個体のものである。

出土遺物のうち図化したものが図75～77である。製塩土

器以外は図化可能なものは図化した。製塩土器脚台部片は、磨滅少なく、かつ断面観察が可能な、周50%ほど残存しているものを中心に、製作技法に関する情報を得られる破片を加え掲載した。図76-22以下は同一脚台部片の全断面と全外面を左右に並べて掲載している。

まずは図75の遺物から述べる。

1は土器1、庄内式甕、ほぼ完形。内面は、胴部左傾ケズリ、底部から上に次第にヨコ方向に近くなり、頸部直下は完全に水平のケズリが巡る。角度の急な変わり目はない。口縁部はヨコハケ。外面は、胴部タタキ後タテハケ。底部は小さい平底を作る。口縁部は中央に1条粘土継ぎ目を残しながらヨコナデ。口縁端部はつまみ上げる。内面底部付近炭化物付着、外面全体的に煤付着。器表・断面とも黒褐色2.5Y3/1を呈し、胎土に1mm弱の石英・0.5mm強の長石あり、0.5mm強の角閃石・0.5mm強の黒雲母若干あり、生駒西麓産胎土。庄内式期前半頃甕定型化直前か。

2も庄内式甕、土器2。残存率60%。内面はケズリ、下部のタテケズリ、最大径付近の左傾タテケズリ、頸部直下のヨコケズリと方向を変える。外面はタタキ後タテハケ、ハケは下半密だが上半散在。器表・断面共黒褐色10YR3/1を呈す。胎土に1mm前後の石英あり、1mm弱の長石若干あり、1mm弱の角閃石・黒雲母わずかにあり。微細粒に角閃石多し。生駒西麓産胎土。1と同時期。

3は弥生V様式系甕片。残存率30%、口縁部周40%残存。内面は、頸部下にユビオサエ、特に粘土継ぎ目に列を成す。その後胴部左傾タテナデ。口縁部は断続的なヨコナデ。外面は、胴部タタキ、それを切り頸部～口縁部ヨコナデ、粘土継ぎ目あり。口縁端部は棒状工具のナデにより凹面を成す。器表・断面とも褐灰色10YR6/1を呈す。胎土に2～1mmの石英あり、1mm弱の長石若干あり、1mm前後のチャートわずかにあり。微細粒にガラスのような板状無色のものあり。胴部がかなり張る事や頸部のヨコナデが下まで及ぶ点が新色で、庄内式併行期のものか。

4も弥生V様式系甕。残存率80%。内面は、胴部は左上がりナメナデ、肩部に粘土継ぎ目残る。頸部にユビオサエ後、口縁部ヨコハケ。外面は胴部タタキ、底面は粗いナデで、中央がわずかに凹面を成す。口縁部ヨコナデ。胴部下半焼きハゼ多く不明瞭だが、一部タタキを消すヨコナデか。外面煤付着。器表は黄灰色2.5Y6/1、断面にぶい黄橙色10YR7/2を呈す。胎土に2～1mmのチャート・1mm強の石英多し、1mm弱の長石あり、2～1mmの黒色砂粒わずかにあり。胴部下半のナデが分割成形痕を残すものとするや弥生時代後期後半以降か。

5は土器6、弥生V様式系甕。残存率70%、口縁部50%残存。内面は粘土継ぎ目残るが、下部タテナデ、上半～口縁部ヨコナデ。下半黒ずむのは炭化物か。外面は胴部タタキ、最大径よりやや下に上下のタタキを切るタタキが2列並ぶ。それより上はタタキを半消しにするタテナデ散在、以下は強いタテナデ1条あり。口縁部粘土継ぎ目残り、ヨコナデ。一部焼きハゼあるが煤付着せず。器表・断面ともにぶい橙

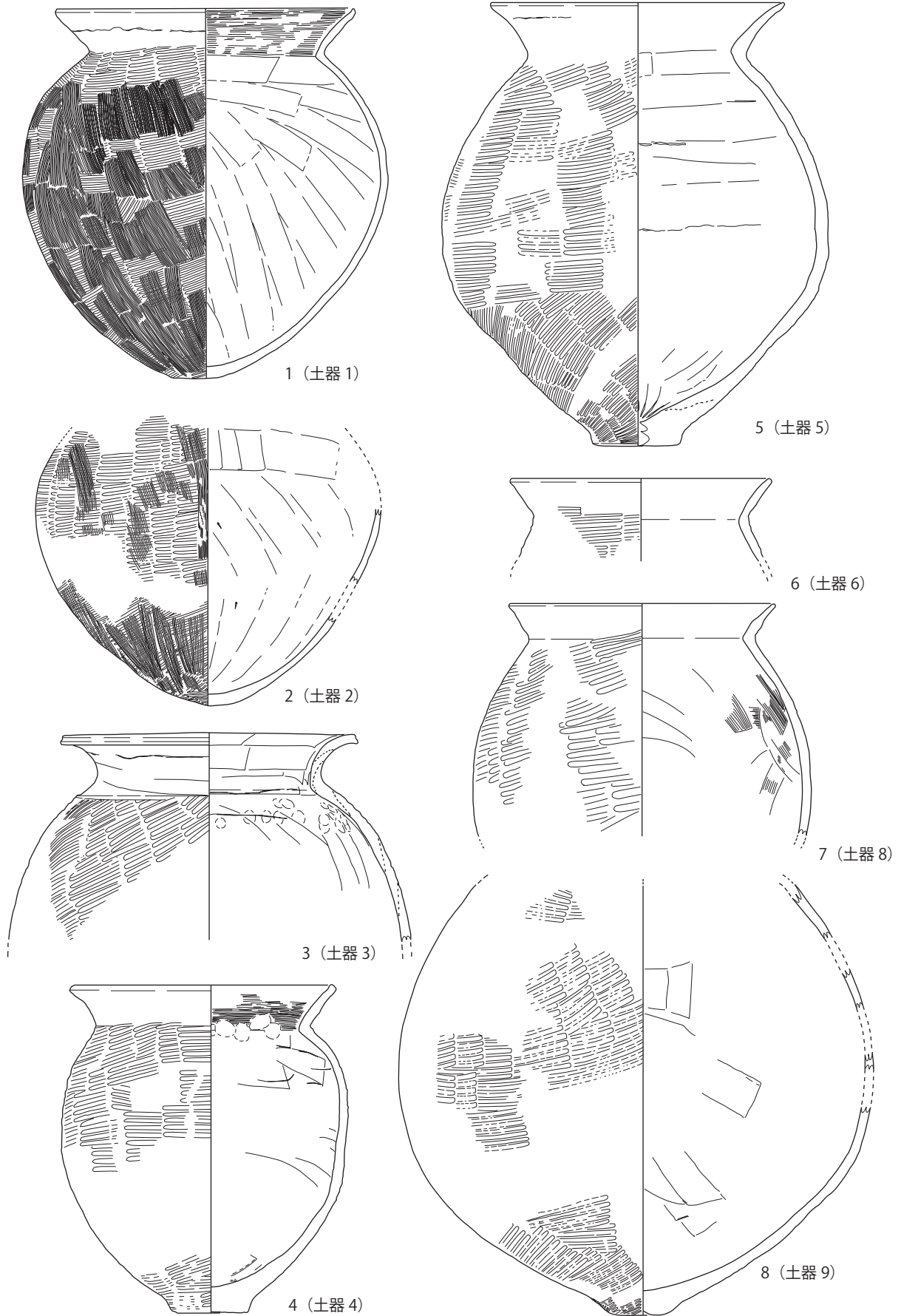


図75 326流路内中層土器群6出土遺物(その1) (S=1/3)

色 7.5YR7/4 を呈す。胎土に 1 mm 弱の石英あり、1 mm 弱の長石・1 mm 強の赤色粒若干あり、1 mm 弱のチャート・黒色砂粒わずかにあり。やや下膨れ気味の胴部や 2 分割成形の痕跡からすると庄内式併行期か。

6 も弥生 V 様式系甕片、土器 6。残存率 10%、口縁部周 30% 残存。内面は、胴部磨滅し不明瞭だがヨコナデか、口縁部ヨコナデ。外面胴部タタキ、口縁部ヨコナデ。部分的に煤付着。器表・断面とも黄灰色 2.5Y6/1 を呈し、胎土に 2～1 mm の石英・1 mm 前後の長石あり、1 mm 弱のチャート・赤色粒・砂岩わずかにあり。時期を限定できる要素はない。

7 も弥生 V 様式系甕片、土器 8。残存率 30%、口縁部周 50% 残存。内面は、胴部ほとんどが左傾のタテハケ後、方向不明のナデ。口縁部ヨコナデ。外面は、胴部タタキ後一部タテナデでナデ消し、口縁部ヨコナデ。器表は浅黄色 2.5Y7/3、断面は暗灰黄色 2.5Y4/2 を呈す。胎土に 3～1 mm の赤色粒あり、1 mm 前後のチャート・石英若干あり、1 mm 弱の長石わずかにあり。球胴化しているので V 様式後半以降、庄内式併行期か。

8 も弥生 V 様式系甕、土器 9。60% 残存、底部完存。内面は左上がりの板ナデか。外面も磨滅強いがタタキ、タタキは単位の頭や断面形が角ばる。金属製工具で削ったタタキ板使用か。下半部に 1 条タタキ後にも残る粘土継ぎ目あり。底部は小さく、中央に凹部あり、輪台技法か。器表は灰褐色 7.5YR6/2、断面褐灰色 7.5YR4/1 を呈し、胎土に 3～1 mm の石英あり、1 mm 弱の長石若干、2～1 mm のチャートわずかにあり。球胴化した胴部や輪台技法の小さい底部は庄内式併行期か。

図 76 も 1～4 は個々について述べる。

1 は弥生 V 様式系甕片。残存率 20%、口縁部周 40% 残存。内面は頸部ユビオサエ後胴部ヨコナデ、口縁部は下半ヨコハケ後全体にヨコナデ。外面は、胴部タタキ後、波状の線刻散在。口縁部はヨコナデ。器表・断面とも灰黄色 2.5Y7/2 を呈し、胎土に 2～1 mm の石英・1 mm 前後の長石あり、2～1 mm のチャート若干あり、3～1 mm の赤色粒わずかにあり。時期を限定できる要素はない。

2 は庄内式高坏片。残存率 10%、口縁部周 30% 残存。内面は上半ヨコミガキ、下半は磨滅するが、底部は放射状のミガキか。外面はヨコナデ後タテミガキ。屈曲部にはミガキ入らず、口縁部はミガキ後ヨコナデか。器表は浅黄色 2.5Y7/3、断面灰黄色 2.5Y7/2 を呈す。胎土に 1 mm の長石あり、2～1 mm の石英若干あり、2～1 mm のチャートわずかにあり。内面にヨコミガキがある定型化した庄内式の高坏で庄内期の初頭と末葉を除いた時期のものか。胎土にチャートを含み、在地産とすれば泉南地域に庄内式期が存在する事になる。

3 は製塩土器片、土器 7。残存率 30%、口縁部周 20% 残存。内面は粘土継ぎ目残しながら左上がりナナメの布ナデか。一部棒状工具が当たった痕が残る。外面はタタキ、口縁部ヨコナデ、口縁端部は一部に刻み目。器表・断面ともにぶい黄橙色 10YR7/3 を呈す。胎土に 1 mm 前後の赤色粒あり、2～1 mm の長石若干あり、3～1 mm のチャートわずかにあり。二次的被火の痕跡なし。

4 も製塩土器胴部片、土器 10。残存率 10%、胴部周 30% 残存。内面磨滅し調整不明。外面タタキ。器表・断面ともにぶい黄橙色 10YR7/3 を呈し、一部赤変、二次的被火か。胎土に 1 mm 前後の赤色粒あり、0.5 mm 強の長石あり。

図 76 の 5 以降と図 77 の製塩土器脚台部片は、これらから得られた製作技法などの情報をまとめて述べる。ここの脚台部は全て脚台 II 式である。

断面の粘土継ぎ目を観察すると、ほとんどが下から粘土を詰め込んで底部を成形している事が分かる。まず、底部の径を絞りを、そこに再び短く開く形に脚台部の外側を付ける（図 77 - 21・28）。絞りをこ

ているのは、胴部との接合部分の割れが、花卉状を呈するものが多い事から推測できる。

タタキは基本的に脚台部成形のユビオサエに消されるが、図 76 - 23・29、図 77 - 15・32・38・40などでユビオサエより下にタタキの痕跡が残る例が知られ、下端まで為されていたと分かる。

下から押し込む粘土塊は脚台部で念入りにユビオサエされるせいか、断面上、脚台内面器表付近が薄層状に分離して見える例もある（図 76 - 22 など）。

また、胴底部内面は押し込まれた粘土の端を潰して密着させるために、胴部上方のナデとは異なる棒状の工具で強く螺旋状やナナメにナデツブす。底部内面にその深いアタリがそのまま残るものも多い（図 76 - 11・16・23・30・37、図 77 - 4・10・14 など）。その棒状工具は先端が幅 5 mm ほどの板状になったものと滑らかに丸いものがある事が知られる。

脚台部のユビオサエ成形は、内面は親指で、外面は人差し指で挟んで行うため、内外面の単位が対応する。しかし内面はその前に粘土塊を押し込んだユビオサエや、その後に端部を整えたものなども残る。外面のユビオサエは人差し指がナナメに当たるために、図面上は細長くユビナデ状に見えるものが多いが、実際触ってみると押さえるだけで密着する。

それらのユビオサエの列は、脚台部の途中で左右の切り合いが変わるものがある（図 76 - 9・18・23・28・30・33・36、図 77 - 1・3・5・7・9 など）。これは土器を回さず、両手で半分ずつ一気にオサエていったものと思われる。

この底部から脚台にかけての製法は高環などにみる円板充填法とはやや異なるものと思われる。製塩土器独自の製法方法であろう。

また、極少数、閉じた底部に円盤状の粘土を貼り付け脚台部を製作するものもある（図 77 - 41）。図 77 - 37 の粘土円板も、そういったものがはがれたまま焼成されたのかもしれない。

この土器群の製塩土器脚台部片は、ほとんどに赤変、黒変、器表面の剥離などが見られ、これは二次的被火の痕跡と思われる。製塩に使用した後の破片であろう。その変化はほとんど底部内面に見られ、脚台部や胴部上方の破片などには少ない。器表面の薄い剥離は、底部内面の棒状工具による強いナデツブシの影響もあるかもしれないが、製塩時の塩分などの浸透や結晶化も影響していよう。しかし、底部内面のツブシによる凹凸の残存や、この剥離状態などは、製塩後、土器から塩を取り出す際に少なからず障害になったであろう。その作業は土器を割って行った可能性が考えられ、だからこそ使用後の製塩土器が細片化しているとも考えられる。

以上の事から 339 土器群 6 は、庄内式併行期前半頃、製塩土器から塩を取り出す作業と、それに続く共同の飲食の後の 2 回の廃棄の結果と推測できる。326 流路の右岸にそれを残した人々の生活する集落は、位置的に見て、324・326 流路に挟まれた部分の上流側の段丘上に想定するのが自然であろう。

3、小結

第 4 面は 147 流路により河岸段丘が形成され、開析谷内でも流路が変遷を重ねる範囲が限定された時期と言える。弥生時代後期から始まり、中世の開析谷内の耕地開発まで続く期間である。

その中でも最も遺物の多い時期は庄内式併行期であり、今回の調査ではその中でも初頭を除く前半頃に、製塩土器を含めた遺物のピークがあると言える。器種構成的には偏りがあるが、その量からは遺跡内での集落の存在はほぼ確実と言ってよかろう。しかし、この時期の遺構は既往の調査においても確実なものは皆無である。これは湊遺跡における大きな一つの謎と言える。

今回の調査では、324 流路の左岸に土器群 4 があり、326 流路の右岸寄りから土器群 6 が検出され

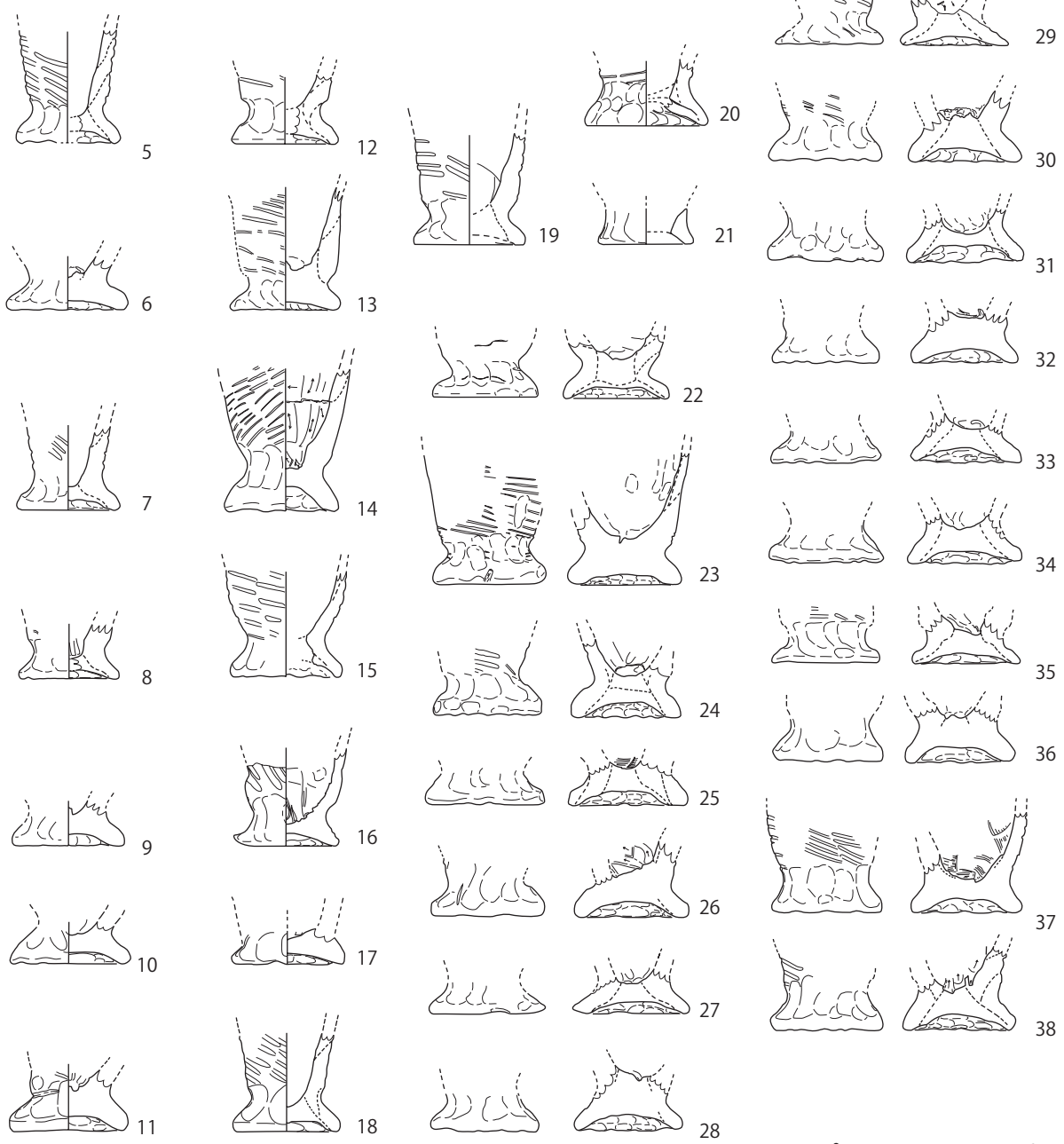
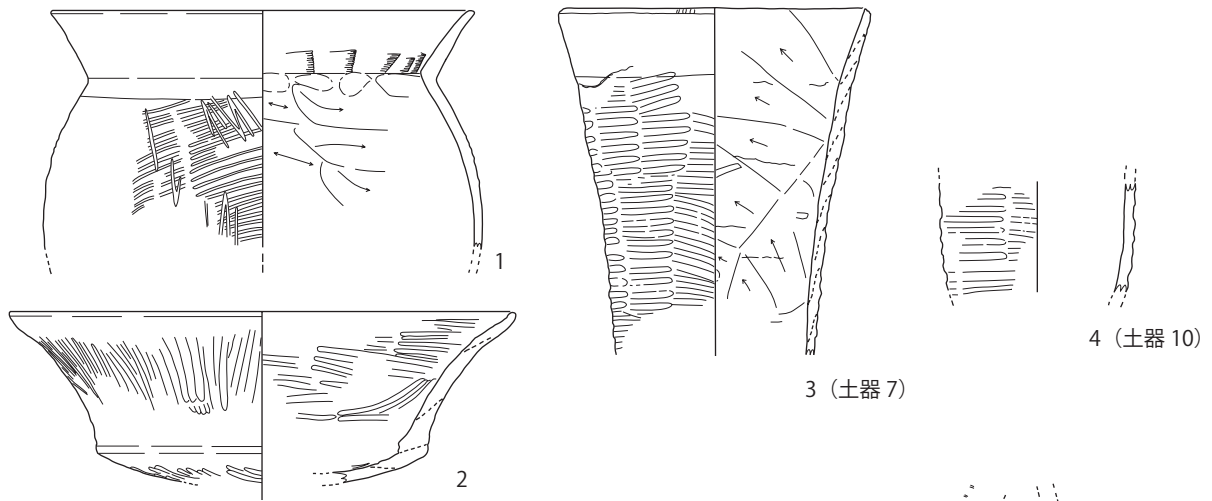


図76 326流路内中層土器群6出土遺物(その2) {5~38:製塩土器集中部出土} (S=1/3)

0 (1:3) 10cm

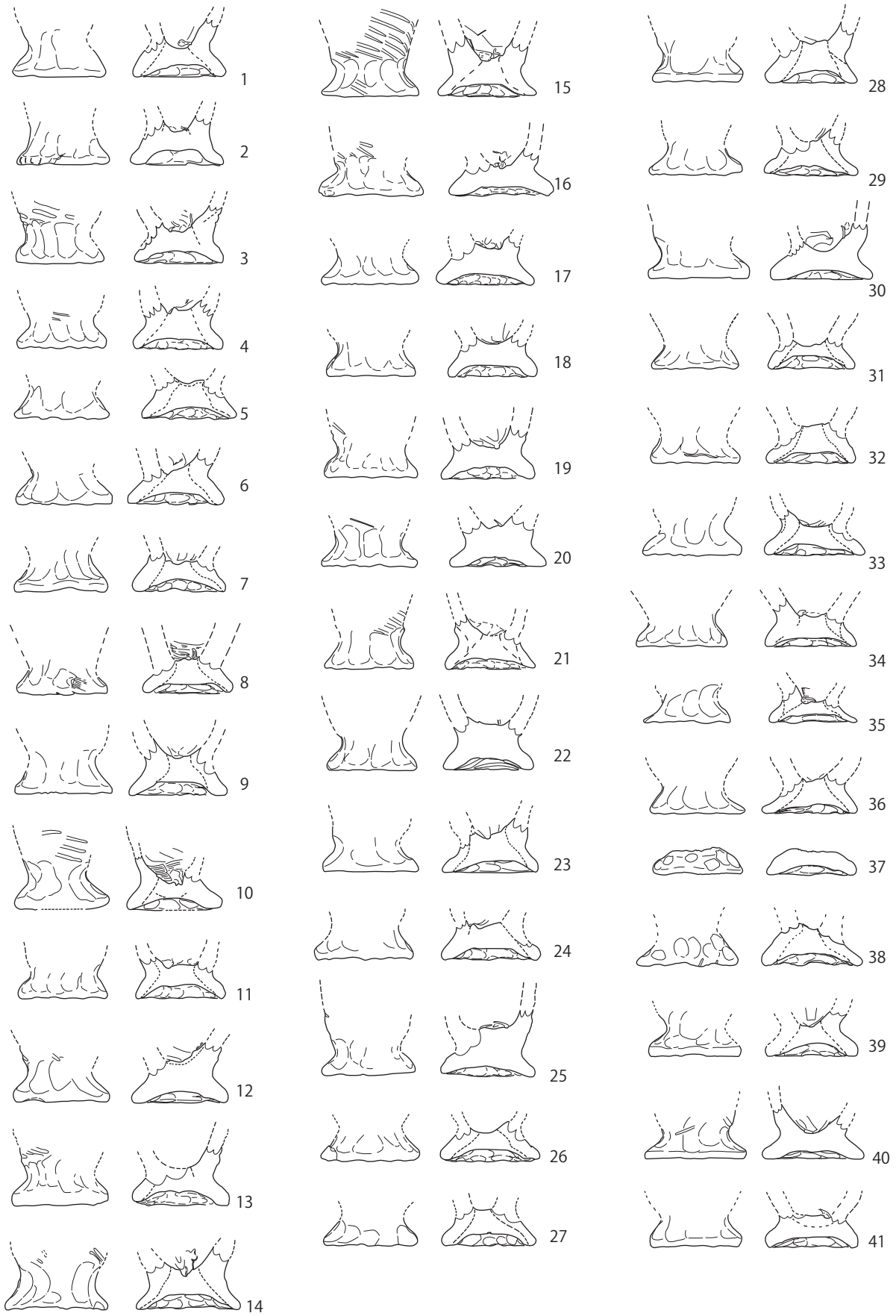
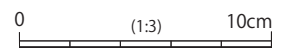


図77 326流路内中層土器群6出土遺物(その3) {製塩土器集中部出土} (S=1/3)



た事を考えると集落はその二つの流路の間、谷では七ノ池からの谷と矢畑池からの谷に挟まれた、調査区南東山側の中位段丘上に存在したと推測できる。その製塩土器のほとんどが脚台Ⅱ式で、既往の調査で東側、七ノ池からの谷の対岸部分で大量出土した製塩土器のほとんどが脚台Ⅰ式であった事は、各々の集落の位置と時期が異なる可能性を暗示しているものと思われる。

次に時期的に押さえられるのは古代である。飛鳥時代の遺物が確実にあるが、2 tr. のピット群は調査区北側近くで確認された奈良時代集落に属するものか、同じ低位段丘上に存在する平安時代の遺構か確実な事が言えないのは残念である。

そして、第3層床面遺構として残る遺構も、開析谷内耕地開発の実態を知る上で重要なものと言える。その開発は一時期で谷全域に及んだものではないようだが、古いものは13世紀初頭頃に耕地化した可能性があり、中位段丘上の上町東遺跡の耕地開発に先行する事が重要であろう。

また、開析谷内全体の堆積状況で留意しておかなければならない事もある。326流路より南西の05-1-3tr. では、包含遺物から見ると第5面に形成された後背湿地の第4層による埋積が遅れ、他では第4面の時期である。庄内式併行期から飛鳥時代の遺物が、第4層中に包含されている事である。また、3tr. の324流路と326流路の間の部分は、トレンチ北西壁断面から検討すると、流路の移動に伴う堆積物が多いため確実に第4・5層と比定できる層がなく、限定的に庄内式併行期～飛鳥時代の第4面と出来る面はあるものの、第4層としても矛盾が生じない層はトレンチ北西壁断面(図42)の66の層しかない。

第8節 第4層包含遺物および第5面

1、第5面の状況と第4層堆積状況

第5面は開析谷内にシュートバーにより微高地が形成され、それらの間が後背湿地になっていく面である。人為的な遺構はほとんどなく、後の土地利用に影響を与える自然地形の基本が形成された面と言える。第5面検出までに出土した土器群も第5面に属すると言うよりは、後背湿地の第4層堆積過程の層に含まれているものである。

第4層の堆積過程の時期にも場所により差があり、層序を遡って記述する形からは逸脱するが、ここでは先ず第5面の状況を概観する所から話を進めたい。

1 tr. では、第4面検出時に掘削限界に近づき、それ以下は筋掘りにより断面を確認したのみである。トレンチ北西壁断面(図41)を見れば、第5面は低位段丘崖直下では凹部をなし、その南西側に幅20m強の微高地が形成されている(トレンチ断面69の層)。その南西側は浸蝕痕が幾つか見られる状況である。第4層は1 tr. では微高地上も覆い、層内に三つの黒色層が見られる。断面図31を第1黒色層、63・74を第2黒色層、66を第3黒色層とする。

1・2 tr. 境付近は浸蝕痕が集中しているが、2 tr. 北西壁断面の53・7とシュートバーが形成され、7は図78の平面のシュートバー1で、その頂部は第4面に達している。その南西に接して207浸蝕痕があるが、これは第4面の時点でも浸蝕・埋積が継続していた可能性がある。

そこから10m弱南西側にシュートバー2がある(断面図60)。これは第2黒色層(断面19)に覆われ、その南西側には後背湿地の堆積として第3黒色層(断面図62)もある。さらに南西にシュートバー3があり、一部147流路に浸蝕されている。147流路は第5面から存在していた可能性が高いが、シュートバーを浸蝕し、下刻も進行するのは第4面の時点であろう。

シュートバー 2 の上に遺構の可能性のある 209 溝が検出された。自然には出来にくい形だが、無遺物であり、他に第 5 面に属する遺構も遺物もない状況ではなんとも言えない。

3 tr. では南西端の 05 - 1 - 3tr. のシュートバー 1 の続き以外は第 5 層と言えるものはない。第 4 層としてよい層もトレンチ北西壁断面の 66 しかない事は先述したが、黒色層を伴わず、ラミナの状態はポイントバー的堆積層である。また、その下には弥生時代中期頃に埋没した 330 流路が存在する。147 流路から 326 流路の間は、第 5 面から第 4 面の期間は、流路が変遷していく堆積層のみが遺存して、基本層序が存在しない、「流路帯」とも言うべき部分であると考えた方が理解しやすい。

05 - 1 - 3tr. では (図 79・80)、北東側でシュートバー 1・2 が切り合い、その南西でトレンチ北西壁にかかり 05 - 1 - 283 後背湿地 1 がある。05 - 1 - 283 後背湿地 1 の下には砂礫層が盛り上がるシュートバー 6 が埋没している。その南ではトレンチ南東壁中央付近が最も高く、そこを頭としてシュートバー 3 が南西に尾を引きながら位置し、その南に 05 - 1 - 284 後背湿地 2、シュートバー 4 と並ぶ。05 - 1 - 284 後背湿地 2 は細く南に伸び 05 - 1 - 285 後背湿地 3 につながる。05 - 1 - 285 後背湿地 3 は西側が深く浸蝕されている。その南、トレンチ南角付近にシュートバー 5 が盛り上がる。

シュートバーの形を明確にし、遺物が出土する可能性を考慮して、シュートバー裾部の細砂～シルト層を除去したのが図 80 である。シュートバー 2 の堆積層も一部除去したが、シュートバー 2 としたものの、本来はその位置から 05 - 1 - 283 後背湿地 1 に抜ける流路であったようだ。トレンチに北東から入り、蛇行して西に抜けた形。シュートバー 2 の砂礫層はそれを埋めた洪水堆積層で、それが低い尾を下流側に残したのが、05 - 1 - 283 後背湿地 1 下のシュートバー 6 かと思われる。

また、シュートバー 2 の砂礫層は、シュートバー 1 沿いではポイントバー的で、砂粒も細かいが、シュートバー 3 の頭付近は混濁し、礫も多かった。すなわち、流路が埋積される洪水の時、その蛇行外側の攻撃面から破堤して形成されたのがシュートバー 3 と考えられる。また、シュートバー 1 もそれ以前にその流路の調査区北東外の蛇行部から形成されたものである可能性が高い。

05 - 1 - 284・285 後背湿地 2・3 はその時シュートバー 3 の裏側に形成された浸蝕痕が元と考えられる。シュートバー 4・5 はそれにより北東側の流路から隔絶し、規模も小さい事から見れば、現在南西の中位段丘崖直下を走る流路の前身の活動によるものと思われる。

05 - 1 - 3tr. では後背湿地にのみ第 4 層が堆積するが、05 - 1 - 283 後背湿地 1 において三つの黒色層が確認され、上から第 1～3 黒色層とした (図 81)。ただし、調査区北東側、1 tr. から 2tr. 北東半にある黒色層とは堆積時期が異なる事は先述した通りである。05 - 1 - 284・285 後背湿地 2・3 にも各々黒色層があり、それは 05 - 1 - 283 後背湿地 1 の黒色層のいずれかと対応するものようである。

2、05 - 1 - 3tr. 後背湿地内の土器群

05 - 1 - 283 後背湿地 1 内では、三つの土器群が確認され (図 81)、他にも土器が散在していたが、それらが包含されていたのは第 4 層中の第 2 黒色層のみであった (図 81 断面図⑤～⑦)。他は無遺物である。黒色層の間にはさまるシルト～細砂の有機分のない層は溢流的な洪水堆積物である。

1) 05 - 1 - 283 後背湿地 1 内土器群 1

土器群 1 は 05 - 1 - 283 後背湿地 1 の東角付近で、第 2 黒色層が上がり第 4 面に露出する付近にあった。高坏 3 個体、甕 2 個体があったが、第 2 黒色層が上がりきる部分に近い土器 3・4 の残存率が低い事と、土器 2 の、横置状態で上部が第 4 層上面で失われた出土状態からすると (図 82)、後世の削平により若干失われた部分もあるようである。土器 2 と 5 以外はやや距離を置いて散らばり、密集度は低い。

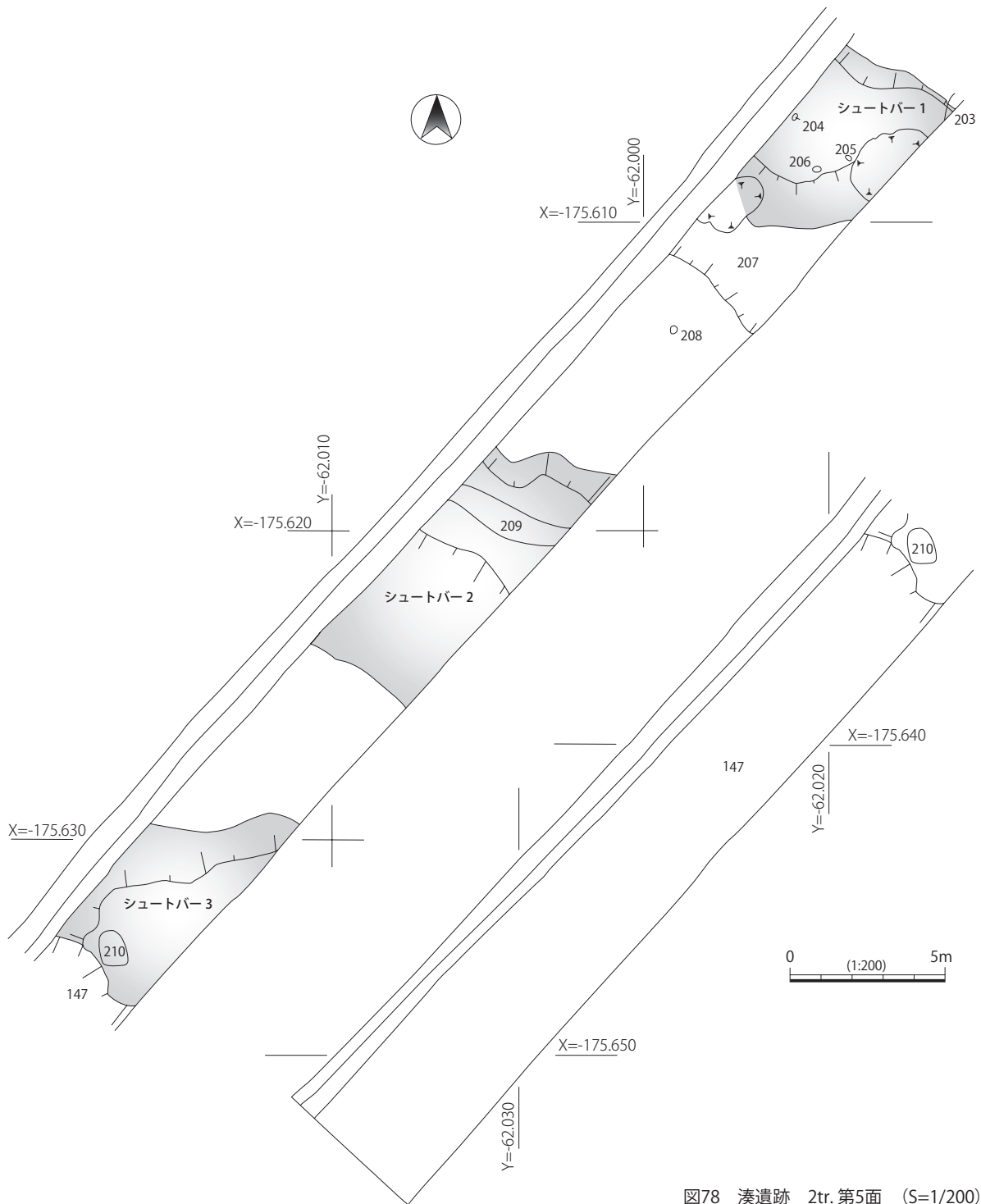


図78 湊遺跡 2tr. 第5面 (S=1/200)

一括投棄とは考えにくい状況である。土器 1・2 は完形で投棄された可能性があるが、土器 5 は土器 2 の横でやや下から出土しているのにも関わらず、脚裾部が失われており、土器 3・4 は投棄時に割れて削平で破片が失われたとしてもあまりに残存度が低いため、完形での投棄は考えにくい。従ってこの土器群が単なる廃棄か、祭祀的な行為によるものかは結論できない。

図 83 は土器群 1 の土器である。なお、土器 4 は弥生 V 様式系のタタキ甕とは分かったがほとんど接合せず、図化できなかった。

1 は土器 2、弥生土器 V 様式系甕。残存率 40%、底部周 100%、口縁部周 20% 残存。内面は胴部

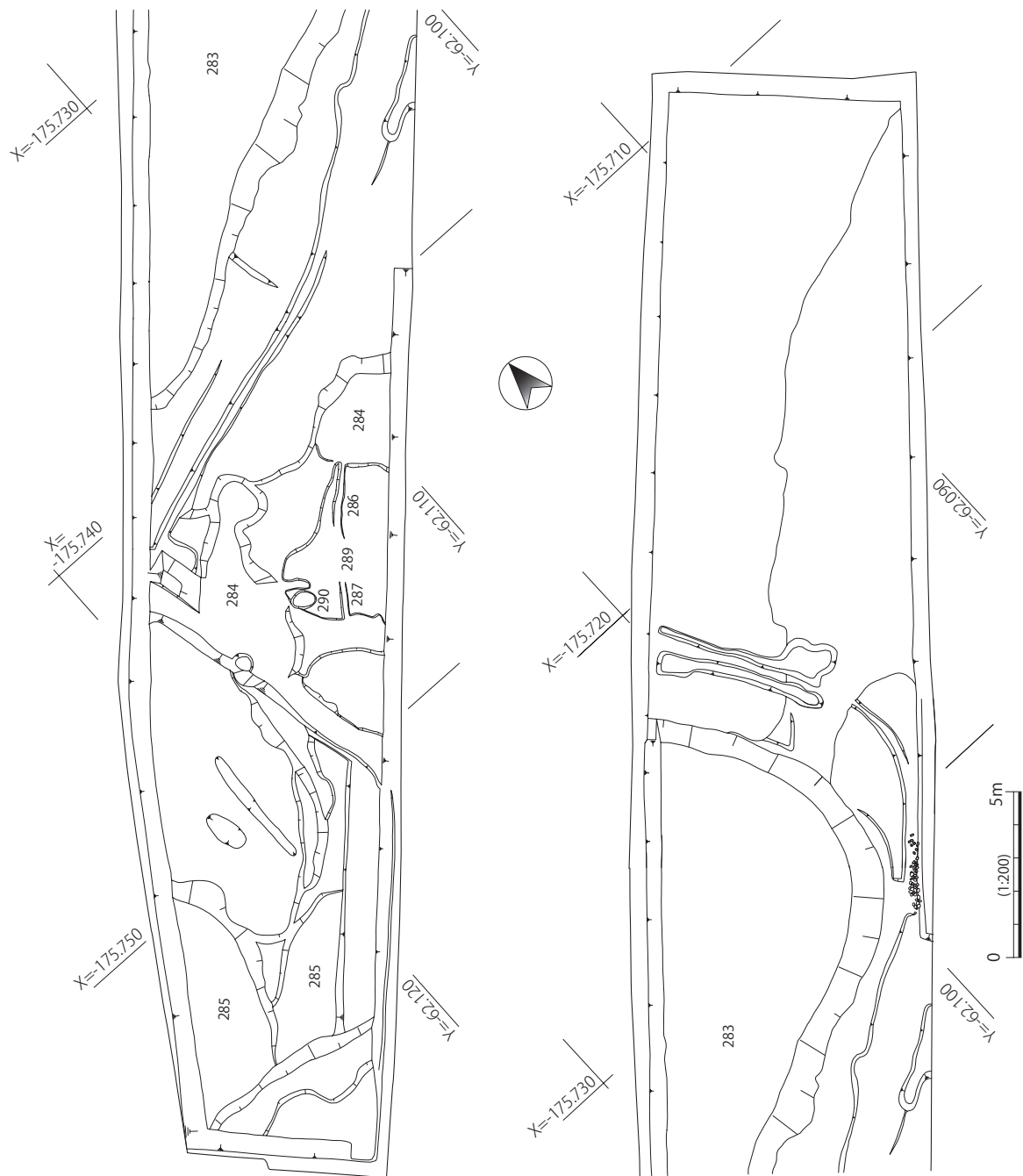


図79 湊遺跡 05-1-3tr. 第5面 (S=1/200)

下半左上がりナナメナデ、胴部上半左傾タテナデ、頸部直下にユビオサエ、口縁部ヨコナデ。外面は下半磨滅し調整不明、胴部上半タタキ、口縁部ヨコナデ。器表は灰黄色 2.5Y6/2、断面は浅黄色 2.5Y7/3 を呈す。胎土に 4～1mm の石英多し、2～1mm のクサリ礫・1mm 前後の赤色粒あり。典型的な弥生V様式系甕で、特に庄内式併行期に下げるべき要素はない。

2は土器1、弥生土器か庄内式土器かの高坏。残存率50%、口縁部周25%残存。坏部内面は口縁はヨコナデ、下部は不明だがナデか。外面は口縁部のヨコナデ以外、磨滅し不明。脚部内面は裾部までシボリ痕残り、裾端部ヨコナデ。器表・断面共浅黄色 2.5Y7/3。胎土に2～1mmの赤色粒多し、5～1mmの石英あり、1mm弱の長石若干あり、1mm前後のチャートわずかにあり。形態的には坏部上半の外反部分の長さが、弥生V様式と庄内式の間形態である。小型でミガキのないものである点からは庄内式併

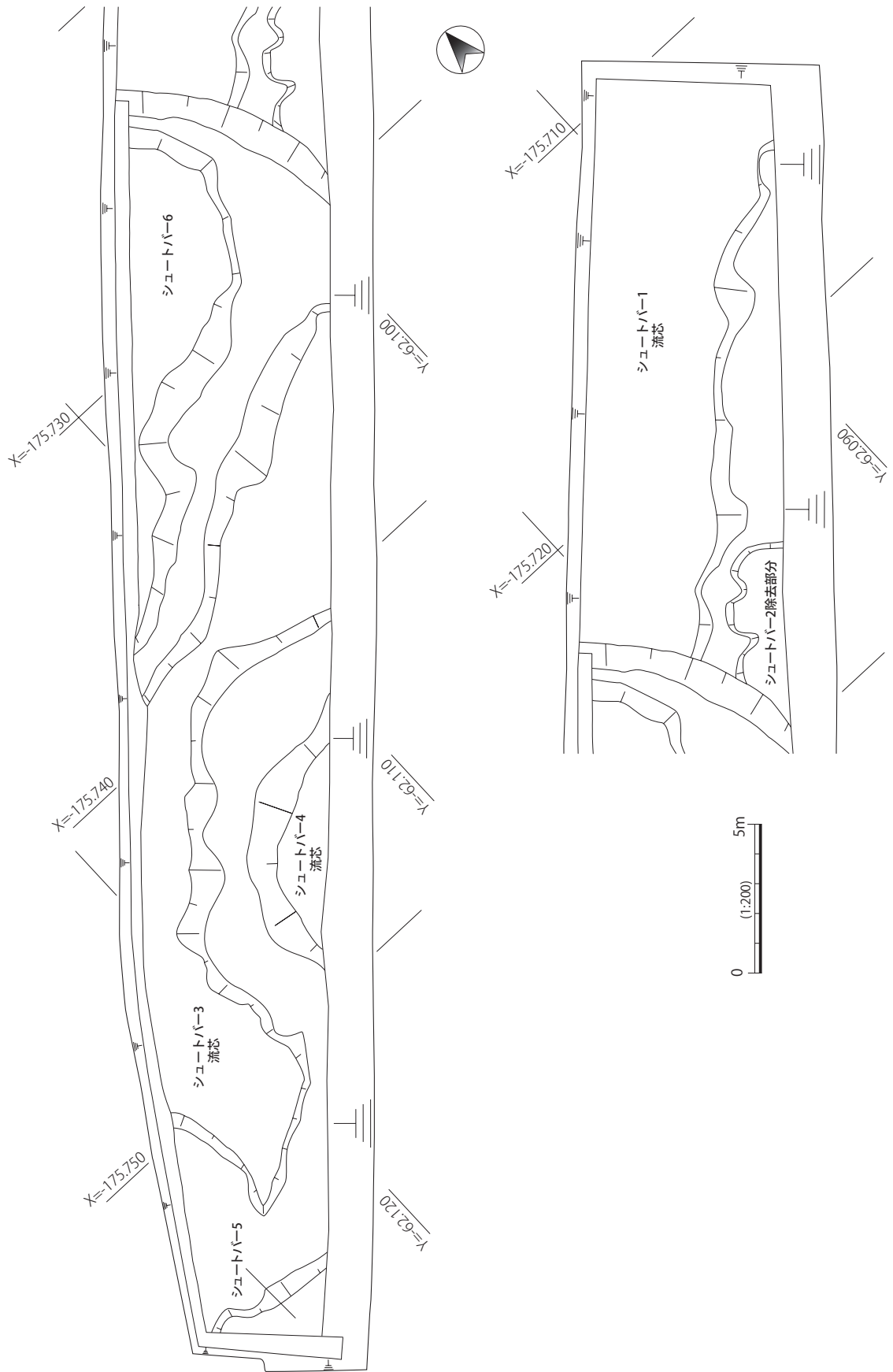
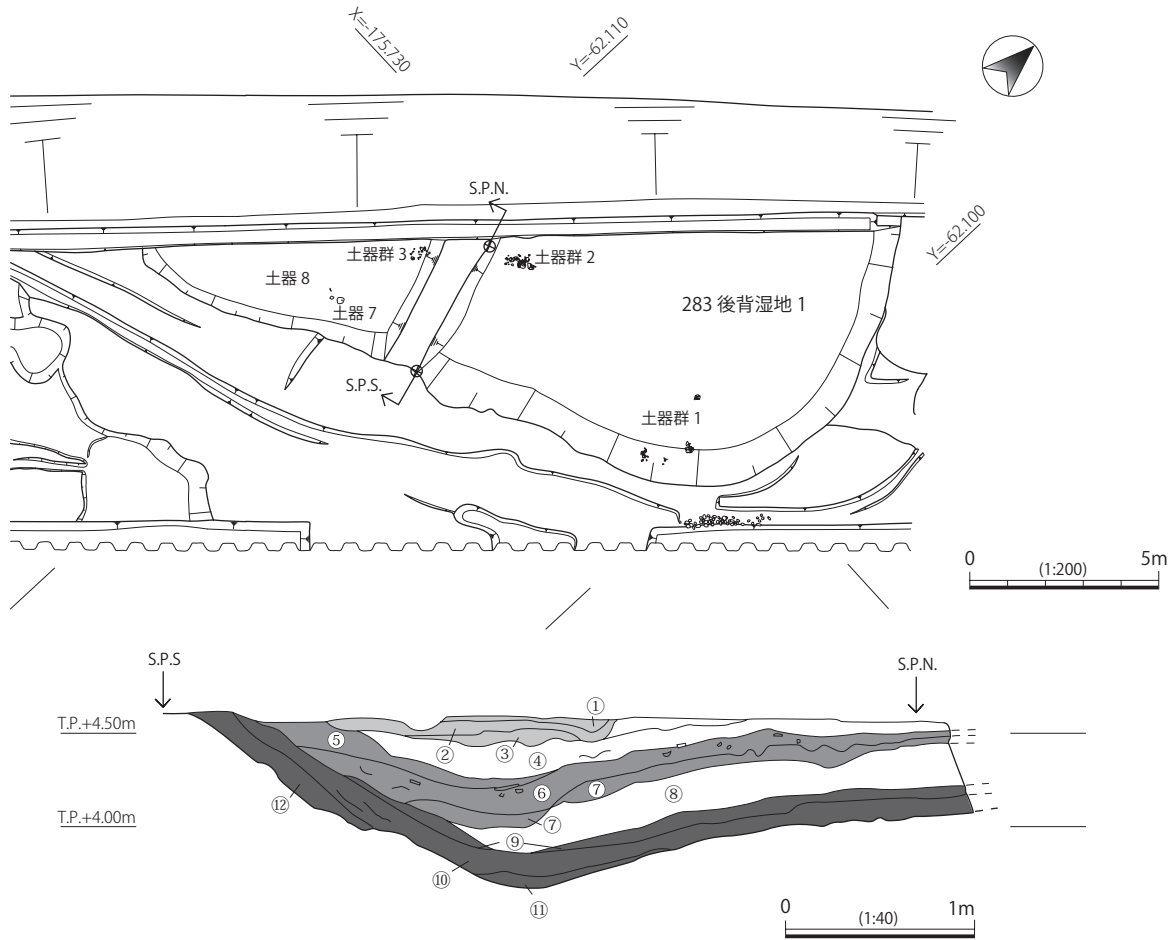


図80 湊遺跡 05-1-3tr. 第5面(シュートバー裾部除去面) (S=1/200)



283後背湿地 1 断面土色・土質

- ①黒褐2.5Y3/1粘質土 シルト～極細砂主体、粗砂若干あり、Mnあり、管状Feあり、第1黒色層。
- ②黒10YR2/1シルト 粗砂～中砂わずかにあり、斑状Feあり、第1黒色層。
- ③黒褐10YR3/1シルト～細砂 炭化物わずかにあり、斑状Feあり、第1黒色層。
- ④オリーブ黄5Y6/3シルト 粘土の降下あり、Fe若干あり、部分的にわずかにラミナ残る。
- ⑤灰オリーブ～灰5Y3/3～5/1シルト～細砂 Fe若干、管状Feあり、④堆積時の⑥巻き上げか、下面に土器片あり、第2黒色層。
- ⑥オリーブ黒～灰7.5Y3/1～5/1シルト～細砂 部分的にわずかにラミナ残る、炭化物若干あり、土器片あり、第2黒色層。
- ⑦灰7.5Y5/1～6/1細砂～シルト 低い部分は小ブロック状、⑥堆積時の⑧巻き上げか、第2黒色層。
- ⑧灰白10Y7/1細砂 ラミナ見えず。
- ⑨灰7.5Y5/1～6/1細砂 シルト若干含む、斑状Feあり、⑧堆積時の⑩巻き上げか、第3黒色層。
- ⑩暗灰N3/0シルト～極細砂 上部に斑状Fe若干あり、斜面に部分的にラミナ残る、炭化物わずかにあり、第3黒色層。
- ⑪暗灰N3/0シルト 炭化物あり、緑灰7.5GY5/1シルト(基盤層)の小ブロック若干あり、第3黒色層。
- ⑫灰7.5Y5/1細砂～シルト 緑灰7.5GY5/1シルト～細砂(基盤層)の小ブロックあり、第3黒色層。

図81 湊遺跡 05-1-3tr. 第5面 05-1-283後背湿地1全体図(S=1/200)・土層断面図(S=1/40)

行期の可能性の方が強い。

3も弥生土器か庄内式土器かの高坏、土器5。残存率70%、口縁部周30%残存。坏部は内面ヨコナデ、外面磨滅し調整不明。脚部は、内面上部にシボリ痕残り、その下ヨコハケ後ヨコナデ1段、その下ヨコハケ。ハケは断続的。外面は坏部との接合部に下からのタテナデ、脚柱部3段の断続的ヨコナデ、脚裾部はヨコナデ。器表・断面とも浅黄色2.5Y7/3を呈す。胎土に3～1mmの赤色粒若干あり、3～1mmのチャート・1mm前後の石英わずかにあり。脚部の形態と調整が特異で時期を限定しづらいが、試行錯

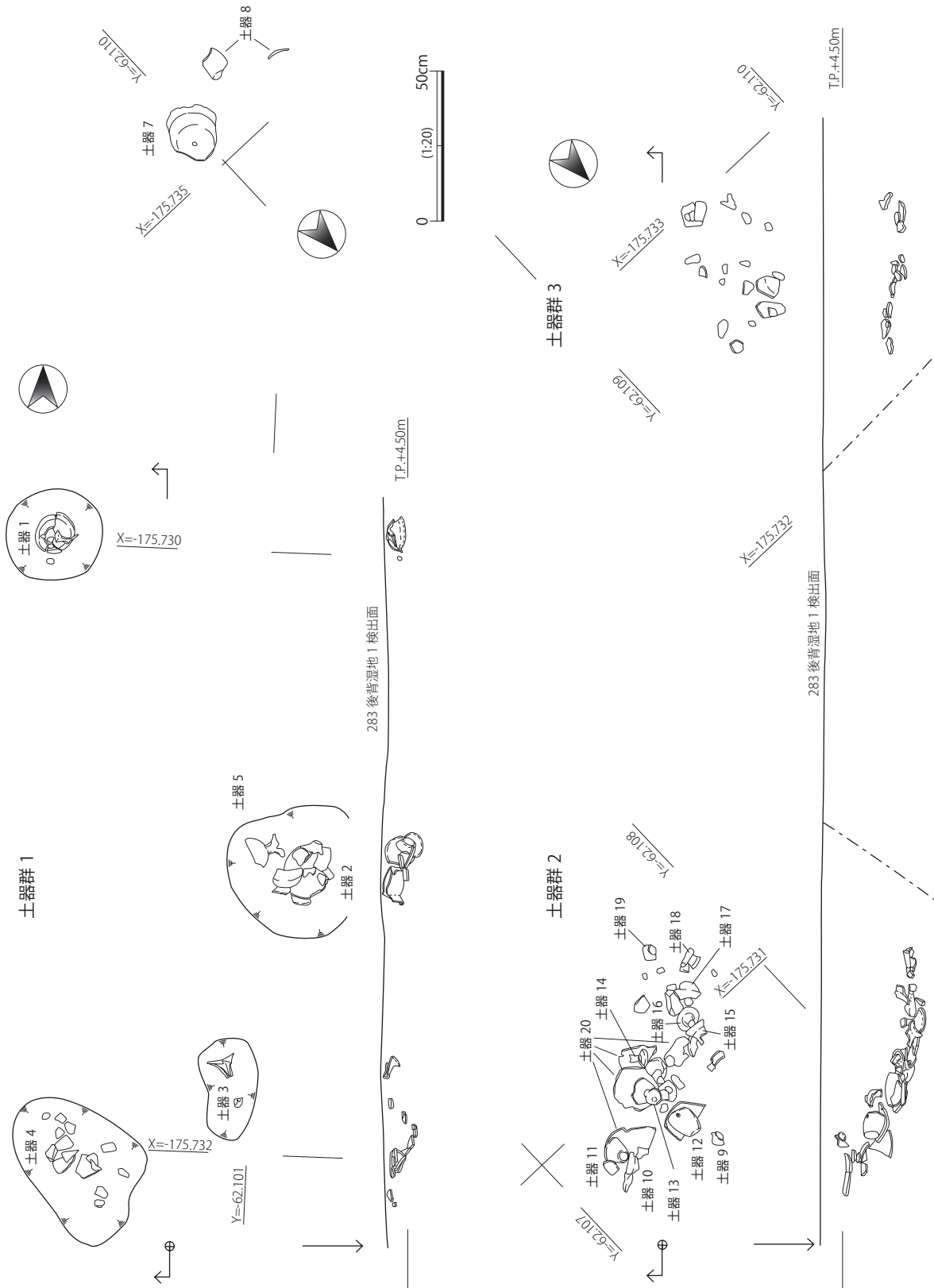


図82 湊遺跡 05-1-3tr. 第5面05-1- 283後背湿地1内土器出土状況 (S=1/20)

誤的な要素と見れば庄内式併行期の可能性が強いか。

4は弥生土器であろう高坏脚部片、土器3。脚柱部の半分ほどの破片。内面は脚柱部にシボリ痕残し、脚裾部はヨコナデ。外面は磨滅するがタテナデか。器表・断面とも灰白色 2.5Y8/2 を呈し、胎土に 1

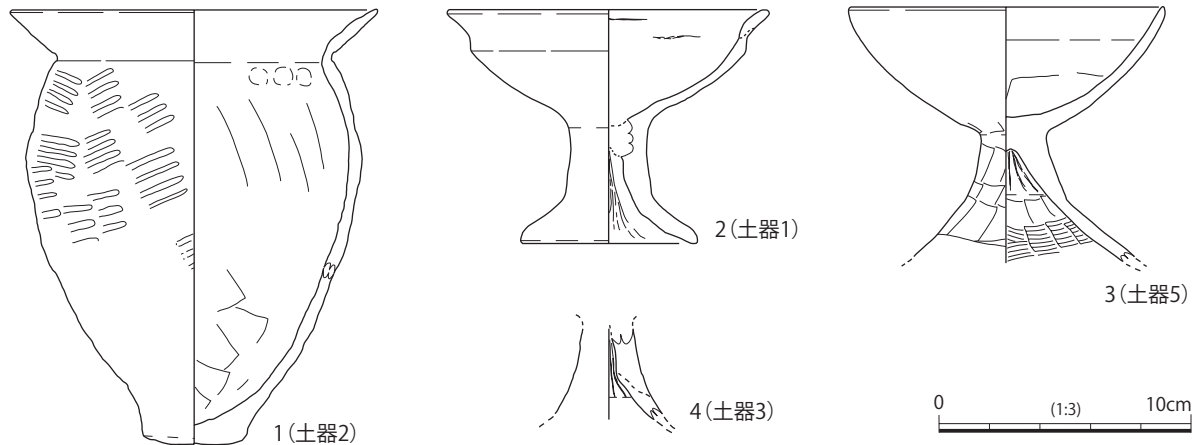


図83 05-1-283後背湿地1内出土遺物(その1) 第2黒色層内土器群1 (S=1/3)

mm前後の石英・長石あり、1mm前後のクサリ礫・赤色粒わずかにあり。

土器群1全体で時期を考えるなら、なんら破綻のない弥生V様式甕が残存している事から、庄内式併行期に入るとしてもその初頭前後であろう。

2)05-1-283 後背湿地1内土器群2

トレンチ北西壁に近い部分で、05-1-283 後背湿地1の断面セクションの東側で検出。これも第4層第2黒色層内。細片は図82の出土状況よりやや広範囲にあり、付近で第2黒色層のラミナが顕著な事からして、廃棄後やや破片が流されたと思われる。一番下に大型の壺胴部である土器20の破片が内面を上にして広がり、他の土器はその上に位置していた。全体に残存率は悪く、投棄時点で既に一部の破片を欠く状態であったようだが、土器12のコップ形飯蛸壺のみが完形であった。状況から推測すると、上部が失われた土器20の中に他の破片と土器12を入れ、投棄した際に土器20が割れたのかと思う。だが、一番近い後背湿地の岸边でも4m強離れており、どのようにこの地点に投棄したのか疑問である。土器番号は05-1-283 後背湿地1内で通して付け、土器群2では土器9～20である。

図84は土器群2で図化可能だったものである。土器番号を付けて取り上げながら図化できなかったものは壺胴部片のみの土器10と土器17-2の高坏脚柱部片がある。

1は弥生土器高坏坏部片、土器番号なし。口縁部周25%残存。内外面ともヨコナデ、口縁部外面のナデが強い。そのやや下に2条の沈線。器表は浅黄色2.5Y7/4、断面にぶい黄色2.5Y6/4を呈す。胎土に3～1mmの石英あり、1mm前後の長石若干あり、2～1mmのチャートわずかにあり。沈線と、口縁端部がやや外に向くのは庄内式併行期か。

2は高坏脚部か製塩土器脚台部片、土器16。脚部周完存。製塩土器にしては坏部内面が平坦過ぎ、ナデが見られる。脚部との間に円板充填。脚部内面は上半シボリ痕、下半は右下がりのユビナデ後、裾部をヨコナデ、端部にはわずかに平坦面あり。外面は磨滅するが全体にナデ。器表は黄褐色2.5Y5/3、断面は明赤褐色5YR5/6を呈す。胎土は3～1mmの石英・長石あり、1mm弱のチャート若干あり、1mm弱の黒色砂粒わずかにあり。脚裾が内弯するのは製塩土器の脚台I式的で、外面ナデ仕上げのものもあるが、坏部内面底部の形状・調整が高坏のようである。

3は弥生土器高坏脚部片、土器14。残存率40%脚部周80%残存。内面は脚柱部シボリ痕、脚裾部ヨコナデ。外面はヨコナデ。器表・断面共灰黄色2.5Y7/2を呈す。胎土に2～1mmの石英・1mm前後のクサリ礫あり。小型粗製の感じだが時期を限定する要素はない。

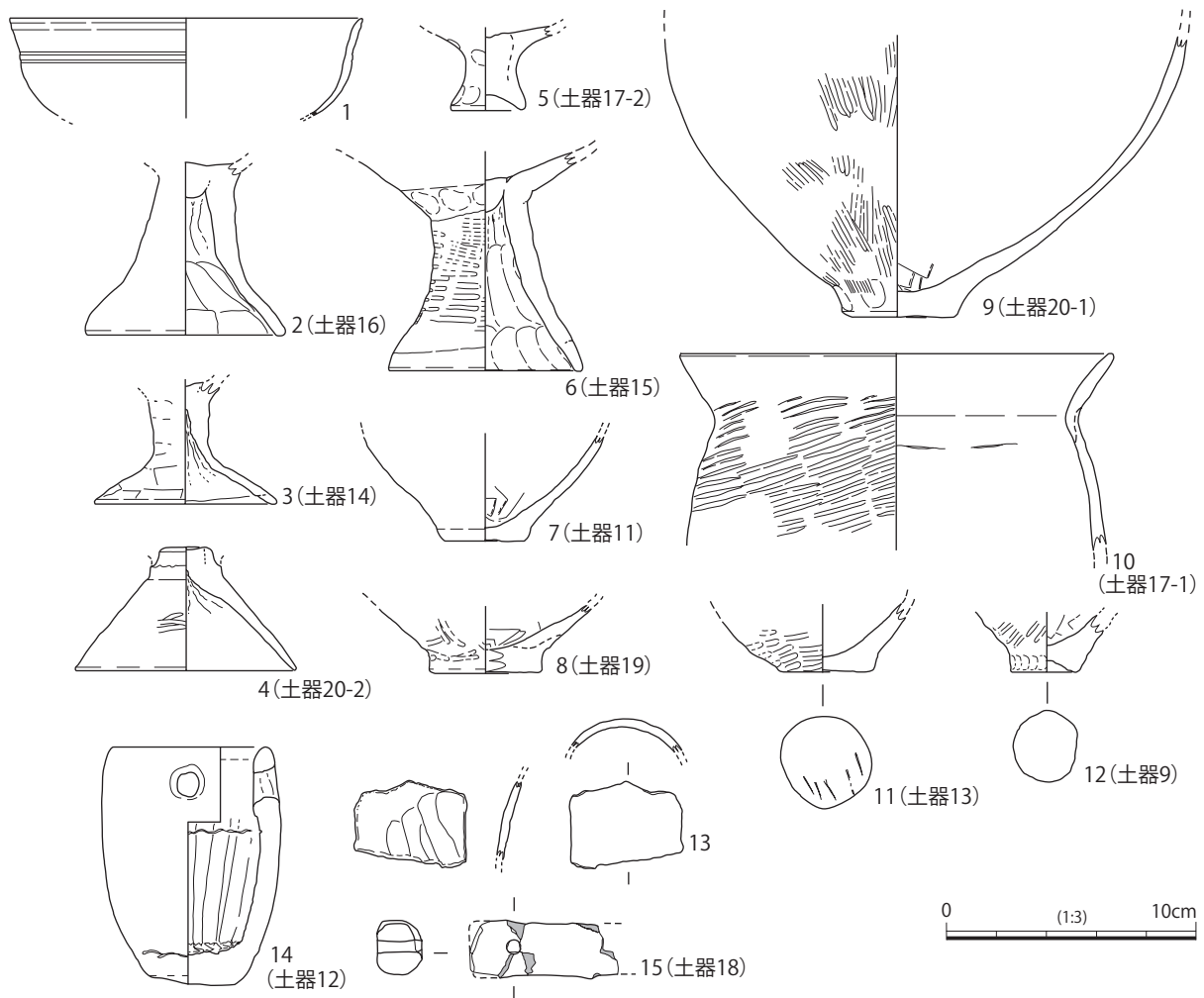


図84 05-1-283後背湿地1内出土遺物(その2) 第2黒色層内土器群2 (S=1/3)

4は庄内式土器小型高坏脚部片、土器20-2。残存率50%、脚部周45%残存。上端は坏部との接合面で剥離する。内面は上半にシボリ痕、下半磨滅し調整不明。外面は坏部との接合部にヨコナデ、磨滅するが一部にヨコミガキ残る。器表は浅黄色2.5Y7/4、断面は灰黄色2.5Y6/2を呈し、胎土に1mm弱の長石多し、2~1mmの石英あり、1mm前後のチャートわずかにあり。この形態でヨコミガキのある小型精製高坏は庄内式期中葉にならないと増加しないが、少数の例外はある。

5は、土器17-2、製塩土器脚台部片か。脚台部周完存。胴部内面ナデアゲ、脚台部底の凹面はユビナデか。外面はユビオサエ散在。器表・断面とも浅黄色2.5Y7/4を呈す。2~1mmの石英、1mm弱の長石・黒色砂粒あり、1mm弱のチャートわずかにあり。粘土継ぎ目で剥離が見られ、細いながら円筒状の脚台部に粘土を詰めている事が分かる。今回の調査で唯一出土した製塩土器脚台Ⅲ式の脚台部で、庄内式併行期で脚台Ⅰ式と共伴している事が重要な問題である。

6は土器15、製塩土器脚台部片。脚台部周完存。胴底部に充填の円板が、剥離した状態で遺存していた。胴部は大きく開くタイプ(積山分類のA1類)。胴部内面はナデ、一部赤変、外面もヨコナデ。脚台部内面は上方にシボリ痕残り、その下はやや左傾のユビナデが2段に入る。脚台部外面は、胴部との接合部に一列のユビオサエ、その下はタタキ、下端付近はヨコナデでタタキを消すが粘土継ぎ目残る。器表は灰黄色2.5Y7/2、断面は灰褐色5YR6/2を呈し、胎土に4~1mmの石英多し、1mm弱の長石あり、3~1mmのチャート・1mm弱のクサリ礫わずかにあり。脚台Ⅰ式。

7は土器 11、弥生土器鉢か。残存率 60%、底部完存。内面は磨滅するが、底部付近に左上がりのナナメナデ残る。外面も磨滅、ナデか。底面は無調整で中央に浅い凹部残る。器表・断面共浅黄色 2.5Y7/3 を呈す。胎土に 4～1mm の石英あり、1mm 前後のチャート・長石わずかにあり。

8は土器 19、弥生土器壺底部片。底部周 50% 残存。内面は左上がりナナメナデ。外面はタタキ後ヨコナデ、底面無調整。器表は浅黄色 2.5Y7/4、断面はにぶい黄色 2.5Y6/3 を呈し、胎土に 1mm 前後の石英若干あり、1mm 前後の長石・赤色粒わずかにあり。弥生 V 様式長頸壺の底部か。

9は土器 20 - 1 弥生土器壺胴部片。残存率 30%、底部完存。内面、底部に左上がりナナメナデ残る。他は磨滅し調整不明。外面は底部側面にユビオサエ残るが、その後胴部タテミガキ、底面は粗いナデ。器表・断面共にぶい黄橙色 10YR6/4 を呈し、胎土に 2～1mm の石英・長石多し、2～1mm のチャート・4～1mm の緑色片岩わずかにあり。紀伊産か。広口壺か。

10は土器 17 - 1、弥生土器 V 様式系甕片。残存率 20%、口縁部周も同じ。内面はナデ。外面は胴部タタキ、口縁部ヨコナデ。器表は浅黄色 2.5Y7/4 を呈す。胎土に 1mm 弱の石英あり、2～1mm の赤色粒・1mm 弱の長石若干あり、1mm 弱のチャートわずかにあり。特に新色を示す要素はない。

11は土器 13、弥生土器 V 様式系甕底部片。底部完存。内面は磨滅し調整不明。外面はタタキ、底部は磨滅するが沈線状の工具痕らしきものが平行して残る。器表はにぶい黄色 2.5Y6/3、断面は浅黄色 2.5Y7/3 を呈す。胎土に 2～1mm の石英多し、1mm 前後の長石・赤色粒若干あり、4～6mm の閃緑岩わずかにあり。かなり小型の甕のようなので胴部の形態で細かい事は言えない。

12は土器 9、弥生土器鉢底部片。底部完存。内面は右上がりのナナメナデ。外面タタキ、底部側面はユビオサエ 1 列、底部凹面はユビナデ。底部は円形ではなくかなり歪む。器表は浅黄色 2.5Y8/3、断面褐色 10YR4/6 を呈し、胎土に 1mm 強の石英・2～1mm の赤色粒あり、1mm 弱の長石若干あり。弥生 V 様式通有のタタキ調整の鉢である。

13は器種不明、かなり薄い。磨滅し、内面にタテユビナデを残すのみ。器表はにぶい黄橙色 10YR7/4、断面にぶい黄橙色 10YR6/3 を呈す。胎土に 1mm 弱の石英・長石・チャートあり。

14は土器 12、土師質のコップ形飯蛸壺。完形。内面は底部に工具のアタリが多くあり、そこから胴部タテナデ、上半に一つ残る粘土継ぎ目よりやや上でそれらをヨコナデが切る。外面は磨滅し調整不明、ナデか、底部は無調整か。底部側面の一部に皺のようなものがある。穿孔は外面から円柱状の工具を突き刺して開けたようである。その孔周辺ナデ。器表はにぶい黄色 2.5Y6/3 を呈す。胎土に 2～1mm の石英・長石・3～1mm の赤色粒あり。

15は土器 18、棒状土錘片。磨滅激しいが調整はナデか。孔径は 4mm。器表・断面共明黄褐色 2.5Y7/6 を呈する。胎土に 1mm 弱の石英・チャート・赤色粒わずかにあり。

土器群全体を見れば、甕・壺・鉢・高坏が揃い、製塩土器・飯蛸壺・土錘もあり、多彩である。湊遺跡の当該時期の性格を良く表していると言える。しかし、製塩土器で、脚台 I 式と III 式が共伴し、小型精製高坏があるなど、時期を考えるに難しい要素がある。また、3tr. 第 4 面の土器群 4・6 が脚台 II 式の製塩土器でまとまっていた状況との差は何故かも問題となろう。

3) 05 - 1 - 283 後背湿地 1 内土器群 3

断面セクションを挟んで、土器群 2 の南西側に位置していた (図 82)。これも第 4 層内第 2 黒色層内である。弥生土器と思われる破片ばかりが 26 片散乱していたが、全く接合しなかった。かろうじて弥生 V 様式系のタタキ甕と思われる破片が 8 片確認できるのみである。

土器群2とつながる可能性も考慮して、間の断面セクションを除去する際にも注意したが、若干の出土遺物はあるものの、土器群2・3間に集中は全く見られなかった。土器群2の土器と接合する破片もない。完全に別の土器群である。小片のみを集めて投棄したものか。投棄位置としては、破片のみである事から、4m強の距離から投げ捨ててこの範囲に納まるのは不自然であろう。

ここで土器群2・3間出土として、断面セクション内出土土器を紹介しておく(図85)。これらも全て第2黒色層出土である。

図85-1は製塩土器脚台部片である。脚台部周70%残存。胴部と脚台部の境は、外側にシボリ痕が残り、中に詰めた粘土塊の接

合面での剥離が見られる。脚台部内面は上面にユビオサエ、下方には外面のユビオサエと対応するユビオサエが巡る。外面はユビオサエ部分に粘土継ぎ目残る。器表は淡黄色2.5Y8/3、断面は灰色5Y4/1を呈し、胎土に1mm

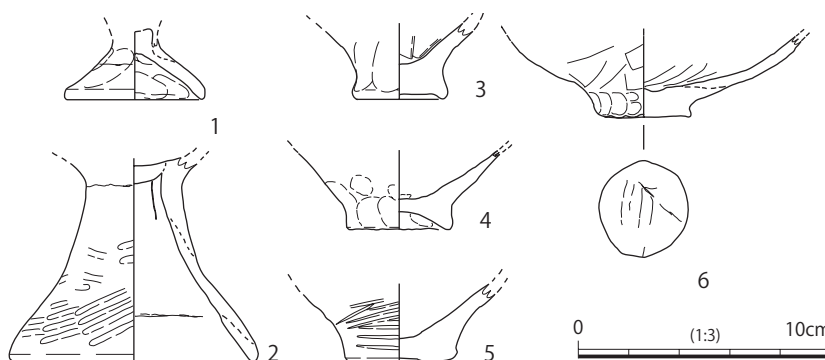


図85 05-1-283後背湿地1内出土遺物(その3) 断面セクション内第2黒色層(土器群2・3間)(S=1/3)

弱の石英・長石・チャートあり。脚台が広く長く伸びる形は脚台Ⅱ式だが、絞り込んだ部分がここまで細くなり、詰め込む粘土が円筒形状を成すのは脚台Ⅲ式と言ってよいだろう。胴部形態が不明なので、積山分類のC類かD類かは不明。脚台Ⅱ・Ⅲ式の間形態とすべきか。

2は製塩土器脚台部片。胴底部内面は磨滅し調整不明。底部は円板充填。脚台部内面も磨滅するが上方にシボリ痕、下方に粘土継ぎ目が残る、ナデか。外面は脚台部上端付近に粘土継ぎ目、全体にタタキ後ナデだが、ナデは上方で強くタタキを消す。器表は灰白色2.5Y8/2、断面は灰色7.5Y4/1を呈す。胎土に3~1mmの石英・1mm前後の長石多し、2~1mmのチャートあり。脚台Ⅰ式であり、胴部の形態は開き気味、積山分類のA類か。これと1の共伴は土器群2の状況に似る。

3は弥生土器鉢底部片。底部周完存。内面は左上がりナメナデ。外面底部側面に右上がりユビナデ。底面はユビナデが1周し、周縁部が下がり内面が浮く。器表は浅黄色2.5Y7/3、断面は灰色5Y4/1を呈し、胎土に1mm弱の石英・長石あり、1mm弱のチャート若干あり。時期は限定できない。

4も弥生土器鉢底部片。底部周90%残存。体部内面磨滅し、底部のユビオサエ1個以外調整不明。外面は底部側面にユビオサエ列、上方にもユビオサエ散在。底部はユビナデが1周する。器表・断面共浅黄色2.5Y7/3を呈す。胎土に3~1mmの赤色粒・1mm前後の石英あり、1mm弱の長石・チャートわずかにあり。底部が強い凹面を成すのは弥生V様式から庄内式併行期か。

5は弥生V様式系甕底部片。底部周90%残存。内面磨滅調整不明。外面タタキ。底部中央に凹面。器表はにぶい黄橙色10YR7/2、断面橙色5YR6/6。胎土に1mm前後の石英・1mm弱の長石あり。

6は弥生土器壺底部片。底部周完存。内面は左傾タテナデ。外面は右上がりナデ、底部側面はユビオサエ並び、底部に葉脈圧痕あり。器表・断面とも浅黄色2.5Y7/3を呈し、胎土に1mm弱の石英あり、1mm弱の長石・2~1mmの赤色粒若干あり。広口壺の底部か。

4) 05 - 1 - 283 後背湿地 1 内土器 7・8

土器群 3 より南南西に 2 m 強の位置で出土。土器 7 が正置で上半をやや欠き出土、土器 8 はその西側で出土した。これらも第 2 黒色層内。後背湿地の岸辺からは 70 cm ほどの距離である。

図 86 - 1・2 が土器 7・8 である。

1 は土器 7、弥生土器鉢。残存率 60%、口縁部周 30% 残存。内面は部分的に磨滅するが、底部は左上がりナナメナデ、体部はユビオサエをやや左上がりのヨコナデが切る、口縁部はユビオサエ 1 列後にヨコナデか。外面は、底部側面にユビオサエあり、体部はナデ、口縁部 2 条のヨコナデで一部にナナメハケが短く入る。器表・断面とも淡黄色 2.5Y8/4 を呈し、胎土に 2~1 mm の石英・長石あり、5~1 mm の赤色粒若干あり、1 mm 前後のチャートわずかにあり。口縁部が開く大型鉢は和泉 V - 4 期に出現するが、身の浅さは庄内式併行期であろう。底部がここまで小さいのは珍しく、丸底化直前とすれば、庄内式前半の初頭を除く時期に併行か。

2 は土器 8、弥生土器広口壺口縁部片。残存率 10%、口縁部周 20% 残存。内外面とも磨滅激しく、口縁端部付近がヨコナデと判明する以外は調整不明。器表は灰黄色 2.5Y7/2、断面はにぶい黄橙色 10YR7/3 を呈す。胎土に 1 mm 弱の赤色粒あり、2~1 mm の石英・1 mm 弱の長石若干あり、0.5 mm 強のチャート・黒色砂粒わずかにあり。和泉 V - 3 期から庄内式前半期までである器形だが、直口壺化の傾向が皆無な事から、下っても庄内式期初頭前後であろう。

図 86 - 3 以下は上述以外の 05 - 1 - 283 後背湿地 1 から出土した凶化可能遺物だが続いて述べる。

3 は弥生土器広口壺口縁部片。口縁部周 20% 残存。内外面磨滅し、口縁付近にヨコナデを確認するのみ、両面に粘土継ぎ目残る。器表は灰白色 2.5Y8/2、断面は黄灰色 2.5Y5/1 を呈し、胎土に 2~1 mm の石英あり、1 mm 前後の赤色粒多し、1 mm 弱の頁岩・チャートわずかにあり。2 より開きが大きく、頸部径も大きいのは古色。

4 は弥生土器片。直線的に立ち上がる小型の器形で、コップ形飯蛸壺の可能性が高い。底部周 80%

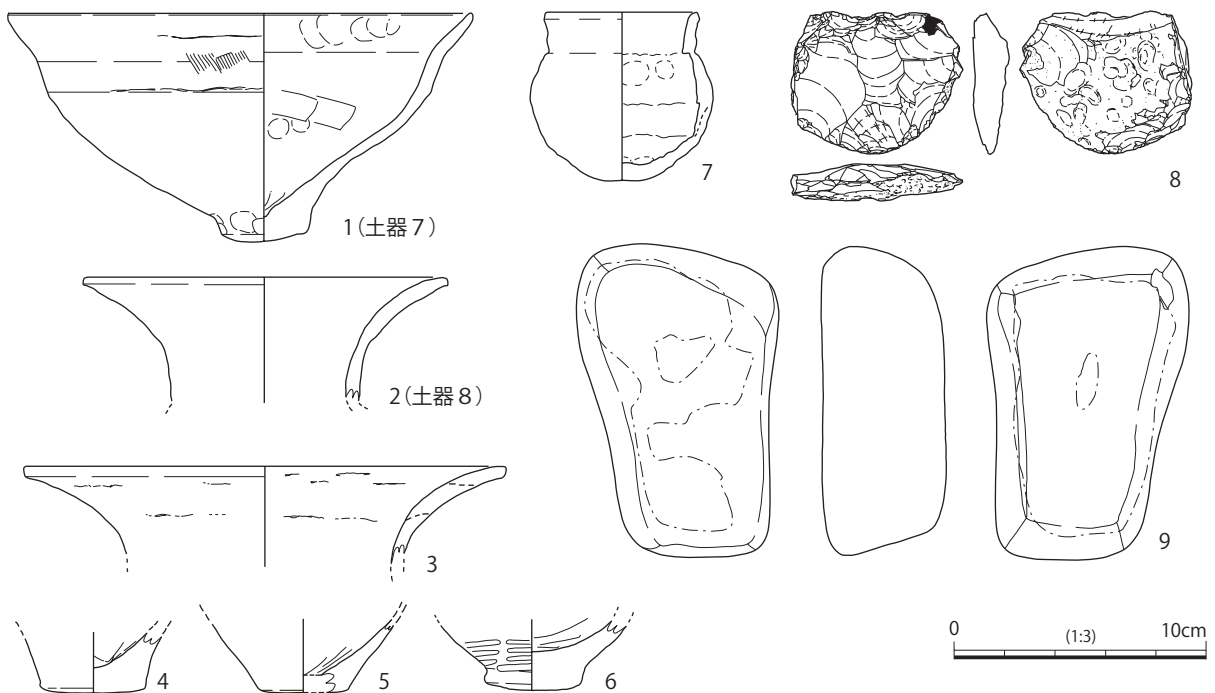


図86 05-1-283後背湿地1内出土遺物(その4) その他 (S=1/3)

残存。内面はナメナデ。外面は磨滅するが、底部も含めナデか。器表は灰黄色 2.5Y7/2、断面は明赤褐色 2.5Y5/6 を呈し、胎土に 2～1mm のチャート・石英多し、1mm 弱の長石あり。

5 は弥生土器壺底部片。底部周 40% 残存。内面のタテナデ以外調整不明。器表は灰黄褐色 10YR6/2、断面は黒褐色 2.5Y3/1 を呈す。胎土に 2～1mm の石英多し、1mm 前後の長石・チャート・赤色粒若干あり。弥生時代後期の小型の長頸壺か。

6 は弥生土器V様式系甕底部片。底部周完存。内面タテハケ。外面タタキ、底部側面ヨコナデ、底部は無調整で植物茎圧痕残る。器表は浅黄色 2.5Y7/3、断面灰色 N4/0 を呈し、胎土に 2～1mm の石英あり、1mm 弱の長石・チャート・赤色粒わずかにあり。時期限定の要素なし。

7 は庄内式土器小型丸底壺片。残存率 40%、口縁部周 15% 残存。内面磨滅するが、底部と肩部にユビオサエ残り、粘土継ぎ目もあり。外面磨滅調整不明。器表・断面共にぶい黄色 2.5Y6/3。胎土に 1mm 強の石英あり、1mm 弱の長石・2～1mm の赤色粒若干あり、1mm 弱のチャートわずかにあり。粗製小型丸底壺だが、尖底傾向はない。精製小型三種成立直前、庄内式期の前半でも後の方か。

8 はサヌカイト製石核転用スクレイパー。右図原礫面上の上辺が剥片採取の打撃面。ネガ面では多くの打点残る。ネガ面左でそれと 180 度打点方向が違ふ剥離はスクレイパーへの加工である。その部分は原礫面からも剥離し、刃部を形成する。重さ 64.0g。

9 は研磨面のある砂岩。表裏 2 面が研磨されている。但し、凹部には研磨が及ばず、側縁には若干研磨が回るので、板状に張られ、かつ若干柔らかなものをこの石で擦ったと考えられる。皮なめしなどか。側縁には小さな凹凸が若干あるが、敲打痕ではないようである。重さ 838.5g。

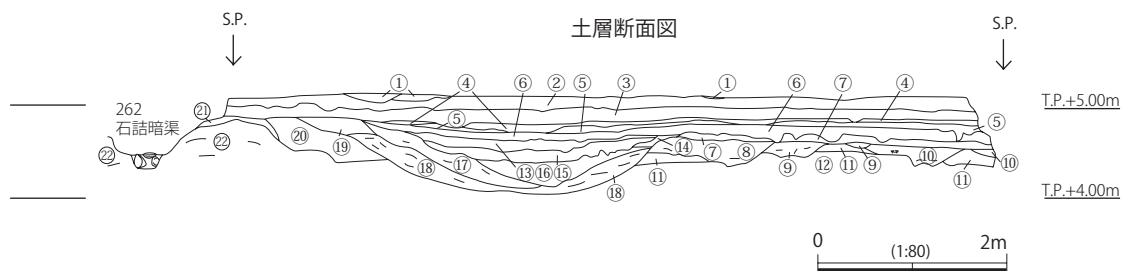
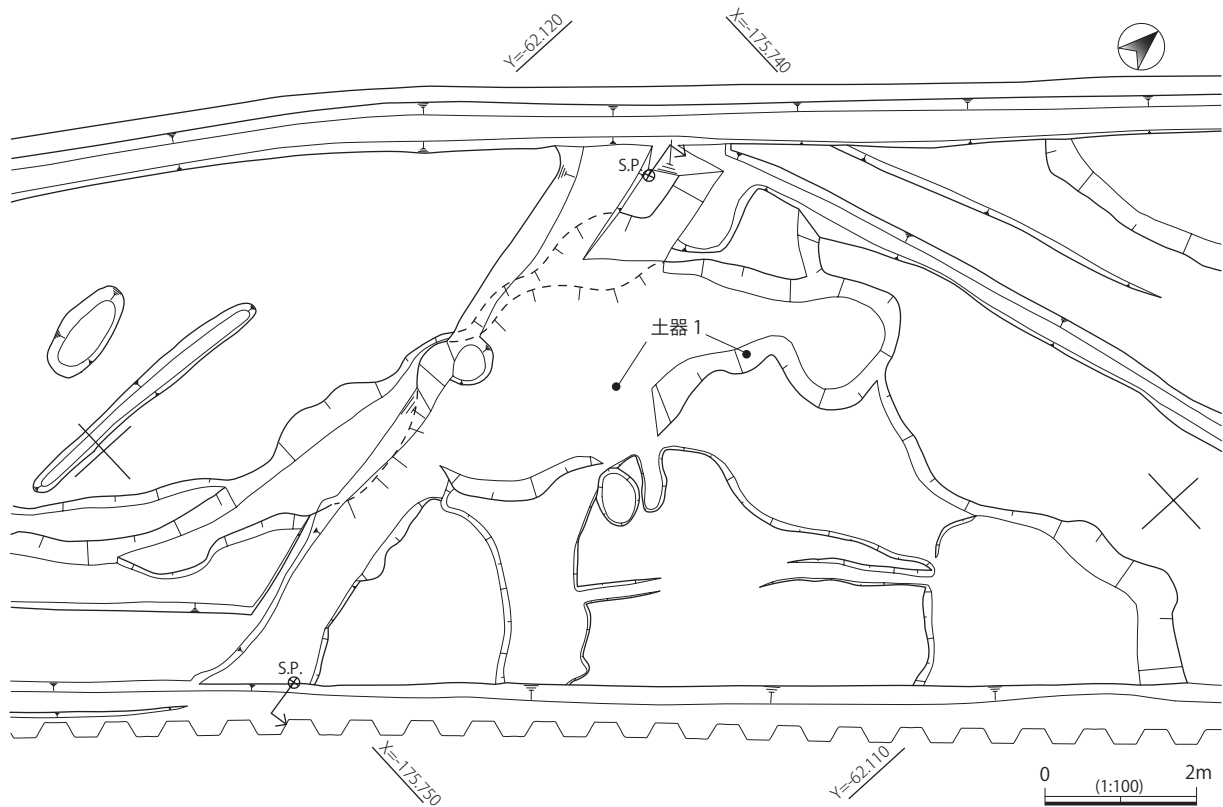
5) 05 - 1 - 283 後背湿地 1 内出土遺物まとめ

ここで 05 - 1 - 283 後背湿地 1 内の出土遺物をまとめておく (表 17)。弥生土器は壺が甕の 2 倍近い破片数があり、集落的な器種構成とはやや違う傾向を見せる。ただ、完形率が低いものが多い事はそれと矛盾する。それ以外は甕・鉢・高坏がバランスよく揃う。土錘と飯蛸壺はかなり少ないし、製塩土器も第 4 面土器群 6 と比較すれば、単なる使用後の廃棄としては少なすぎるであろう。

以上の状況から考えれば、器種と個体数が選択されており、かつ、それらの破損後の一部の破片のみがここに廃棄された可能性が強い。その選択において、集落的な器種構成の上に壺類が増加され、かつ、重要な生業である漁撈関係と製塩関係の遺物がわずかながら加えられているという事は、集落の生活を体現するような祭祀に使用され、後に廃棄されたのではないかと推測される。

表17 05-1-283 後背湿地 1 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別	破片数		大器種	破片数		型式部位	破片数		
			破片数	%		破片数	%		破片数	%	
土器	593	製塩	6	1.0							
		弥生	586	98.8	高坏	42	7.2				
					壺	145	24.7				
					甕	76	13.0	底部	76	100.0	
					鉢	47	8.0	底部	47	100.0	
					蛸壺	89	15.2				
土師器	1	0.2									
土製品	1	轆羽口	1	100.0							
石製品	2	打製石器	2	100.0	剥片	1	50.0				
					剥片	1	50.0				
石	1										
桃核	1										



土層断面土色・土質

①	灰オリーブ～オリーブ色5Y5/3~5/4砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～極粗砂あり、Fe若干あり。
②	黄褐色2.5Y5/6粘質土、シルト主体、細砂～粗砂あり、極粗砂～小礫わずかにあり、Feあり。第2層。
③	灰色N4/0粘質土、シルト～極細砂主体、粗砂～小礫やや下部に多し、炭化物わずかにあり。第3～1層。
④	黒褐～褐灰色10YR3/1~4/1粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～中砂若干あり、小礫わずかにあり、第3層。
⑤	オリーブ黄～灰オリーブ色5Y6/4~7.5Y6/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫若干あり、管状Feあり、粘土～シルトの降下あり、有機物は少なく、土壌化するが、耕土ではないかもしれない。第3～2層。
⑥	灰～オリーブ黒色7.5Y4/1~3/1粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～極粗砂若干あり、管状Feあり。第4層第1黒色層を攪拌した第3層より古い耕土のようである。
⑦	オリーブ黒色5Y3/1シルト～細砂、炭化物わずかにあり、細砂の降下わずかにあり。第4層第1黒色層。
⑧	オリーブ黒色5Y3/1シルト～極細砂、下部中心に灰色5Y6/1細砂ラミナ状に入る。第4層第2黒色層。
⑨	⑧の両方が互層状に入る。第4層第2黒色層？
⑩	灰色5Y4/1シルト～細砂、ラミナあり、炭化物わずかにあり、土器片わずかにあり。第4層第2黒色層。
⑪	灰色10Y6/1細砂に、灰色7.5Y4/1シルトがやや混濁、12上部の土壌化か。
⑫	明緑灰色10GY7/1細砂～極細砂、シルトの降下あり、第5層シュートバー4裾部。
⑬	灰～オリーブ黒色5Y4/1~3/1粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂若干あり。7の二次堆積。
⑭	オリーブ黒5Y3/1シルト～細砂、わずかにラミナあり、斜面堆積。7の二次堆積。
⑮	オリーブ黒色5Y3/1シルト内に、灰色5Y6/1細砂のブロック。人為的埋土、高まり2造成。
⑯	黒～オリーブ黒色5Y2/1~3/1シルト、植物遺体わずかにあり。低湿地堆積、第4層第1黒色層。
⑰	黒色5Y2/1シルト～細砂内に、灰色5Y5/1細砂のラミナ若干あり。第4層第2黒色層。
⑱	オリーブ黒色5Y3/1シルト～細砂と灰7.5Y6/1細砂～中砂の互層状ラミナ、左方に砂多く最下に粗砂。第4層第2黒色層？
⑲	オリーブ5Y5/6~5/4色細砂～中砂、シルト含む、管状Feあり。20の二次堆積。
⑳	上部オリーブ色5Y6/6に染まるが、細砂、12と同一層。第5層シュートバー4裾部。
㉑	オリーブ色5Y5/4シルト～粘土、中礫～粗砂多し。22の表面風化土壌化層か。
㉒	上部オリーブ色5Y6/6、下部オリーブ灰色2.5GY6/1中礫～粗砂、部分的にFeあり、ラミナあり。第5層シュートバー3芯部。

図87 湊遺跡 05-1-3tr. 第5面05-1-284後背湿地2全体図(S=1/100)・土層断面図(S=1/80)

6) 05 - 1 - 284 後背湿地
2 (図 87)

シュートバー 3・4 間に形成された後背湿地である。トレンチ南東壁から入り、西へ浅くなりながら伸び、一旦深くなって南西に曲がり、さらに南に曲がる所で再び浅くなり、トレンチ南東壁に切られながら南西に反転して 05 - 1 - 285 後背湿地 3 につながる、不整形に蛇行する溝状の形を成す。

後に造成された高まり 2 の第 2 面から断ち割った図 87 の断面図では、シュートバー 4 裾部の層 (12・20) がシュートバー 3 (22)

を覆い、形成の前後関係が分かり、第 4 層第 3 黒色層を欠く事、第 1・2 黒色層でシュートバー 4 の上まで覆う土壌的なものもある事 (7 と 8・9・10)、後背湿地部分の第 1 黒色層 (16) は人為的な埋め土で覆われる (15) 事などが知られる。

その 16 から土器 1 が出土した。1.7m ほど離れた 2 地点から出土したが同一個体である。

図 88 がその土器 1 である。須恵器甕の胴部下半。内面は底部から下半は同心円文タタキを時計回りに螺旋状にタタキ上げていく、上半は同じタタキを上から下へ叩いていく。外面の平行タタキも上半は垂直方向に揃え、まばらなカキ目と直交するが、内面と同じ位置で左右ナナメのタタキが重なるようになる。明らかな分割成形である。底部は明確な屈曲はないが平底に作る。下半内面には降灰痕があるが、底部の一部に直径 10 cm ほど降灰痕がない部分がある。器表は灰色 5Y5/1、断面は褐灰色 7.5Y6/1 を呈し、胎土に 5～1 mm の石英若干あり、2～1 mm の長石わずかにあり。古墳時代後期～奈良時代頃としか時期は限定できないが、平底や明らかな分割成形の痕などが、飛鳥時代か。05 - 1 - 3tr. で、第 4 層の堆積が終了する時期の目安となる遺物である。飛鳥時代とすれば、147 流路の北東側の第 4 層より、400 年ほど堆積が遅れた事になる。

後背湿地 2 では、これ以外は弥生土器らしき小片が 6 片出土しているのみである。

7) 05 - 1 - 285 後背湿地 3 (図 89)

05 - 1 - 3tr. 南西端付近のシュートバー 5 の北側に位置する。東側は比較的浅く、第 4 層第 2 黒色層が 05 - 1 - 284 後背湿地 2 から連続して堆積しているが、西側は深くなり、植物遺体を多く含んだ砂礫層で埋没している。西側は洪水時に浸蝕を受け埋積したか。

土器 1 をはじめ、ほとんどの遺物は東側のトレンチ南東壁近くで出土した。その構成は (表 18)、製

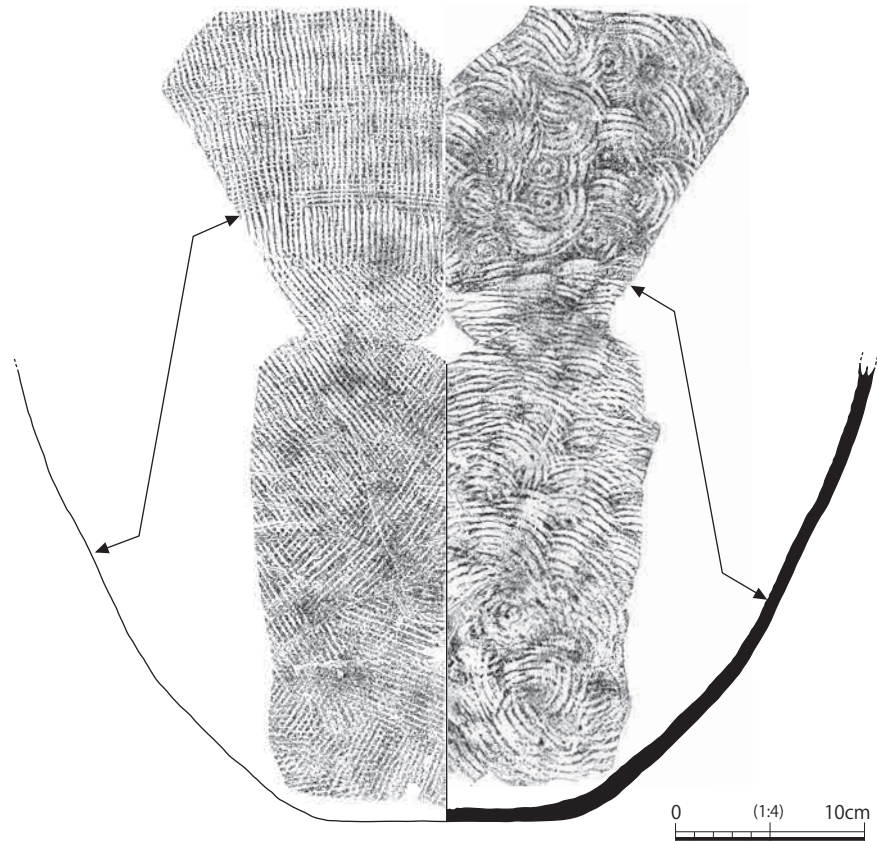


図88 湊遺跡 05-1-284後背湿地2出土 土器1 (S=1/4)

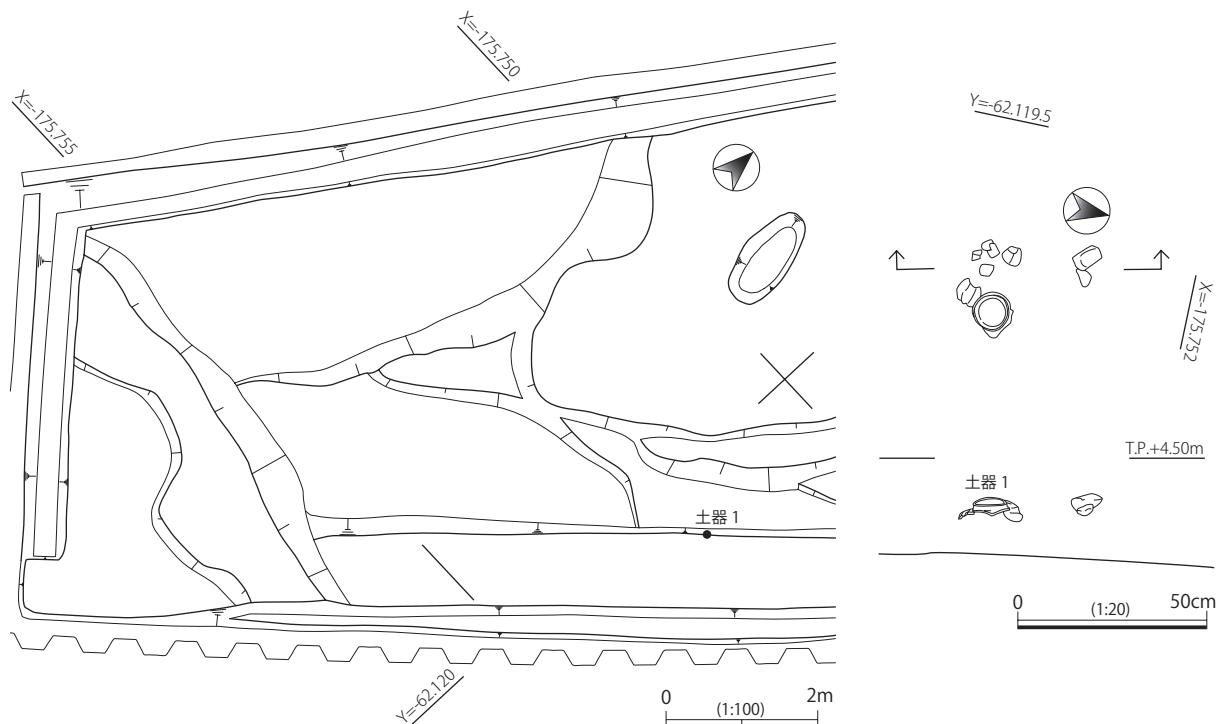


図89 湊遺跡 05-1-3tr. 第5面 05-1-285後背湿地3全体図(S=1/100)・土器1出土状況図(S=1/20)

塩土器の存在や、壺が多い点などが、05 - 1 - 283 後背湿地 1 と共通する。ただし、鉢はなく、製塩土器はやや多い。また、1片のみだが韓式系土器があるのは注目される。

実測可能だったものを図 90 に掲載した。

1 は土器 1、弥生土器広口壺口縁部片。口縁部周 30% 残存。口縁部は内外面ヨコナデ。口縁端部はゆるい凹面を成す。肩部以下は磨滅し調整不明。器表・断面とも灰白色 2.5Y8/2 を呈す。胎土に 5 ~ 1 mm の石英あり、1 mm 前後の長石わずかにあり、8 ~ 6 mm の石英と長石のかみ合う礫若干あり。口縁部下半が直立気味で、端部は面を持って厚くならないものは弥生後期後半に多いか。

2 も弥生土器広口壺口縁部片。口縁部周 25% 残存。内面は磨滅するが、口縁端部付近のみヨコナデ残る。外面は口縁部中位にタテハケ後、全体ヨコナデ。肩部は磨滅で調整不明。器表は灰黄褐色 10YR6/2、断面は暗灰色 N3/0 を呈す。胎土に 3 ~ 1 mm の石英あり、1 mm 弱の長石わずかにあり、微細粒にチャート・

クサリ礫あり。これも 1 と同じ時期か。

3 は弥生土器壺底部片。底部周 80% 残存。内面磨滅し調整不明。外面タテユビナデ、底面は中央無調整、

表18 05-1-285 後背湿地 3 遺物破片数集計表

大種別	総数	小種別		大器種		小器種		型式部位				
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%			
土器	111	製塩	30	27.0								
		弥生	80	72.1	高坏	15	18.8					
					壺	23	28.7	底部	2	8.7		
								長頸	4	17.4		
								広口	7	30.4		
					甕	19	23.8			底部	8	33.6
韓式系	1	0.9										

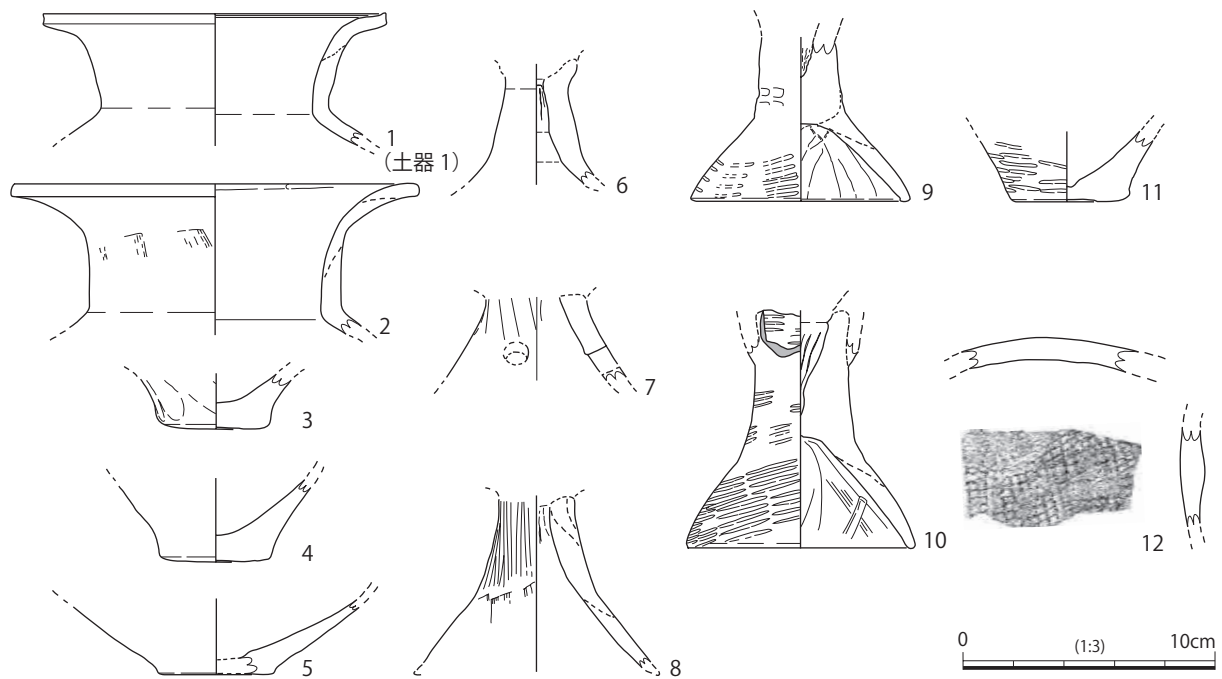


図90 湊遺跡 05-1-285後背湿地3出土遺物 (S=1/3)

周縁に不定方向ナデ。器表は灰黄褐色 10YR6/2、断面は灰色 N4/0 を呈す。胎土に 3～1 mm の石英多し、2～1 mm のチャート・1 mm 前後の長石若干あり、6 mm 程度の流紋岩 1 個あり。弥生 V 様式系長頸壺の底部か。

4 も弥生土器壺底部片。底部周 70% 残存。内外面とも磨滅し調整不明。器表は灰黄色 2.5Y7/2、断面灰色 5Y4/1 を呈す。胎土に 7～1 mm の石英あり、2～1 mm のチャート・1 mm 弱の長石若干あり。3 と同じ器種か。

5 も弥生土器壺底部片。底部周 30% 残存。内面磨滅調整不明。外面も磨滅するが、左上がりのナデか。底部粗いナデか。器表は灰黄色 2.5Y7/2、断面オリーブ黒色 5Y3/1 を呈し、胎土に 1 mm 強の長石あり、1 mm 前後の石英若干あり、3～1 mm の赤色粒わずかにあり。広口壺の底部か。

6 は弥生土器高坏脚部片。上部内面には円板充填の剥離痕、その外面はヨコナデ。内面は脚柱部上半にシボリ痕残し、それ以下は強いヨコナデ。外面は磨滅し調整不明。器表はにぶい黄色 2.5Y6/4、断面灰色 5Y5/1 を呈し、胎土に 2～1 mm の石英・1 mm 前後の長石あり、1 mm 弱のチャート若干あり。

7 も弥生土器高坏脚部片。上端は平坦な坏部剥離痕。内面磨滅調整不明。外面タテナデ。器表は灰黄褐色 10YR6/2、断面灰黄色 2.5Y7/2。胎土に 2～1 mm の石英わずかにあり。時期限定できず。

8 も弥生土器高坏脚部片。裾端部をわずかに欠く。内面磨滅で調整不明、上方にわずかにシボリ痕残る。上部端は坏部の剥離痕。外面は脚柱部タテミガキ、脚裾部タテハケ後ナデ。器表はにぶい黄橙色 10YR7/2、断面オリーブ黒色 7.5Y3/1 を呈す。胎土に 1 mm 前後の石英あり、1 mm 弱の長石・チャート若干あり。時期限定の要素なし。

9 は製塩土器脚台部片。脚台裾部周 70% 残存。身底部内面はシボリ痕。脚台部内面はタテナデ。外面は磨滅激しい部分があるが、全面タタキか。裾端部はヨコナデ。器表・断面ともにぶい黄色 2.5Y6/3 を呈す。胎土に 2～1 mm の石英若干あり、微細粒にチャートあり。脚台 I 式、積山分類 A2 類。

10 も製塩土器脚台部片。脚台裾部周 45% 残存。身底部内面はシボリ痕。その外面で、上に続く身部

の粘土継ぎ目剥離面にタタキ残存。円筒状の底部をタタキ調整で作成後、上部を作ったもの。脚台部内面はタテナデ、棒状工具による幅4mmの沈線1条。外面は全面タタキ後、脚台部上部から上にヨコナデ。器表・断面とも灰黄色2.5Y6/2を呈す。胎土に粗砂粒なし。9と同型式。

11は弥生V様式系甕底部片。底部周90%残存。内面磨滅調整不明。外面タタキ、底面は粗い不定方向ナデ、中央わずかに凹面。器表は灰黄褐色10YR6/2、断面灰色N4/0を呈す。胎土に3～1mmの石英多し、1mm前後の長石若干あり。時期限定の要素なし。

12は赤褐色軟質韓式系土器片。器種不明。内面は上半右傾タテハケ、下半左傾タテハケ後ヨコナデで、上下分割成形の境目か。外面格子目タタキ後、部分的にナデ。器表は黄褐色2.5Y5/3、断面灰黄色2.5Y6/2を呈す。胎土に1mm弱の石英・長石・チャート・角閃石あり。河内低地産か。明らかな韓式系土器で、弥生後期～庄内式併行期には珍しい。

以上の遺物を見ると、弥生V様式系のものばかりで、しいて庄内式併行期に下げる要素はない。また、製塩土器が後背湿地1と同じ脚台I式だが、底部の作りが円板充填とシボり込みとの違いがあり、上の身部形態も開くA1類と細いA2類の違いがあるようだ。点数的にやや少なく不確実な部分もあり、この違いが時期差か遺跡内の立地に由来する差かは不明であると言わざるをえない。

3、1・2 tr. 第4層内土器群

調査区の147流路より北東部分の第4層内から比較的残存率の良い土器が幾つか出土した。分布は散漫だが、何個体かが集中する部分もあった。それらを土器群として報告する。

1) 土器群1

1 tr. で、平面位置では図57の091ピットの西側ぐらいで出土した。調査深度が限界に近づき、筋掘りで掘り下げている途中で出土したので、トレンチ北西壁断面に近い位置である。その断面の73と79の層境にまたがって土器が3個体ある(図91)。

この層は第1・2黒色層間の洪水堆積層である。3個体の土器の欠失部分は73の層内で、この付近ではシルト～細砂の73が細砂～粗砂の79の上部をやや浸蝕してから堆積したと思われる(図41)ので、土器は79の堆積の上部に埋まり、73堆積時の水流で上部が洗い出され、若干の破片を失ったと思われる。土器外面にはほとんど磨滅がなく、長い距離を流されたものではない。

図92がその土器3個体である。

1は倒置状態出土の土器1、下半部欠失、弥生V様式系甕。内面胴部ユビオサエ後ヨコハケ、口縁部もヨコハケ。外面胴部タタキ後、頸部～口縁部ヨコナデ。口縁端部はわずかに上方に拡張した面で、刻み目あり。内外面煤付着。器表は明黄褐色10YR6/8、断面はにぶい黄橙色10YR6/4。胎土に1mm前後の石英多し、1mm弱の長石・赤色粒・1mm前後のチャートあり。タタキ目は強く入り、口縁端部が受け口状口縁の名残りとするれば、和泉V-3～4頃のものか。

2は口縁が下がり気味の横置で出土した土器2。胴部の一部欠失。内面底部からタテハケ、分割成形境目周辺ヨコナデ、胴部上半左上がりナメハケ、口縁部ナメハケ。外面胴部タタキ、分割成形の継ぎ目でタタキ方向が変わるが、タタキは上下どちらもそのラインで切れ、接合のための調整は見られない。タタキは頸部から口縁部下端にも残存し、口縁部中ほどに粘土継ぎ目、それらの上にヨコナデ。口縁端部に面あり。底面は小さく、凹面を成す、輪台技法か。全体的に薄く煤付着。器表はにぶい黄橙色10YR6/4、断面は灰黄褐色10YR6/2を呈し、胎土に2～1mmの石英あり、1mm前後の長石若干あり、4～1mmのチャートわずかにあり。1と同時期と思われる。

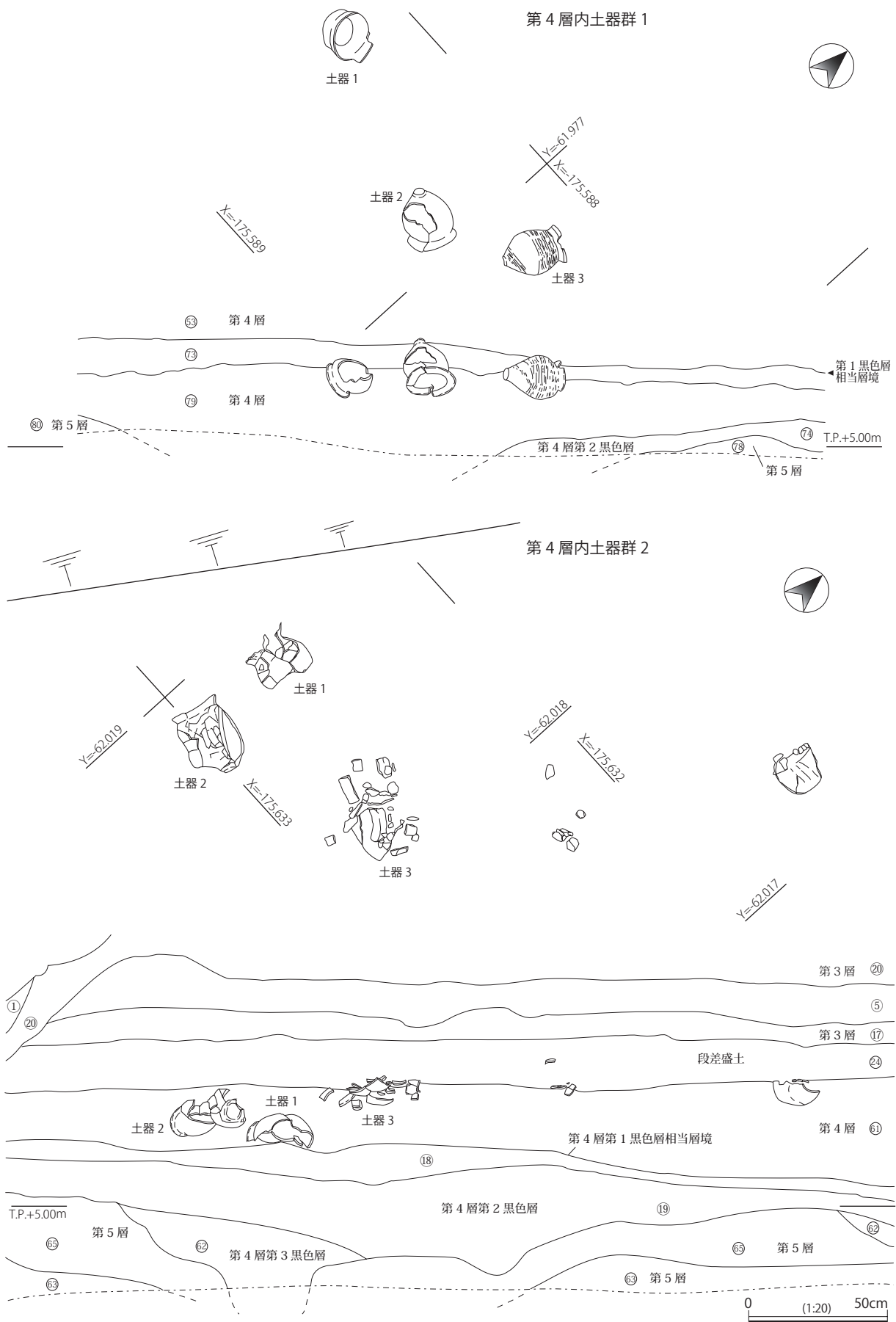


図91 湊遺跡 第4層内1tr. 土器群1、2tr. 土器群2出土状況図(断面図は近接したトレンチ北西壁、○数字は図41に同じ) (S=1/20)

3は横置状態出土の土器3。口縁部の一部欠失。内面磨滅するが、胴部最大径部分が最下の粘土継ぎ目残り、底部左上がりナナメナデ、胴部最大径付近よりやや下でタテナデがそれを切る、口縁部ハケ後ヨコナデ、頸部以下と口縁部の一部に炭化物付着。外面胴部タタキ。胴部最大径部分で上下のタタキを切るタタキが1単位1周する。口縁部は粘土継ぎ目残りヨコナデ。底面はゆるいナデか、植物茎の圧痕あり。肩部以下煤付着。器表・断面ともにぶい黄橙色 10YR6/4 を呈す。胎土に1mm前後の石英あり、1mm弱の長石・チャート若干あり、1mm弱の赤色粒わずかにあり。口縁の形状にわずかに受け口状の名残りが見られ、1・2と同じ時期と思われる。

3個体により時期を考えれば、和泉V - 3・4、弥生後期後半でも末葉を含まない時期と言える。

2) 土器群 2

2tr.の中央、147流路で形成された河岸段丘より3mほど北東側で、トレンチ北西壁沿いから出土した。包含された北西壁断面(図41)61の層は、第1黒色層より上位になる、細砂の洪水堆積層で、土器は層下面に付くものから上面に接するものまでである。上面に接する土器の一部の破片は河岸段丘由来の耕地段差を造成した盛土の一部にも入りこみ、この段差造成の際に若干削平を受けているようである。土器群1よりは層的に上になる。

一部器種不明の細片もあったが、図93に4個体が図化できた。

1は土器1、弥生V様式系甕。残存率70%、口縁部周75%残存。内面磨滅激しいが、底部付近は右上がりのナナメハケ、それより上の胴部は左上がりナナメハケと分かる。口縁部はヨコナデ。外面はタタキ、下半は磨滅し不明。肩部は軽いヨコナデがタタキを半消し。口縁部はタテナデ、端部はヨコナデ。口縁の一部と肩部に煤付着。器表・断面ともにぶい黄橙色 10YR6/3 を呈す。胎土に3~1mmのチャート・2~1mmの石英・1mm前後の赤色粒あり、1mm弱の長石若干あり、1mm前後の黒色砂粒わずかにあり。時期限定の要素を欠くが、土器群1の甕よりややタタキ弱い。

2は土器2、弥生V様式系甕。残存率40%、口縁部周30%残存。内面はやや磨滅するが、底部~胴部左上

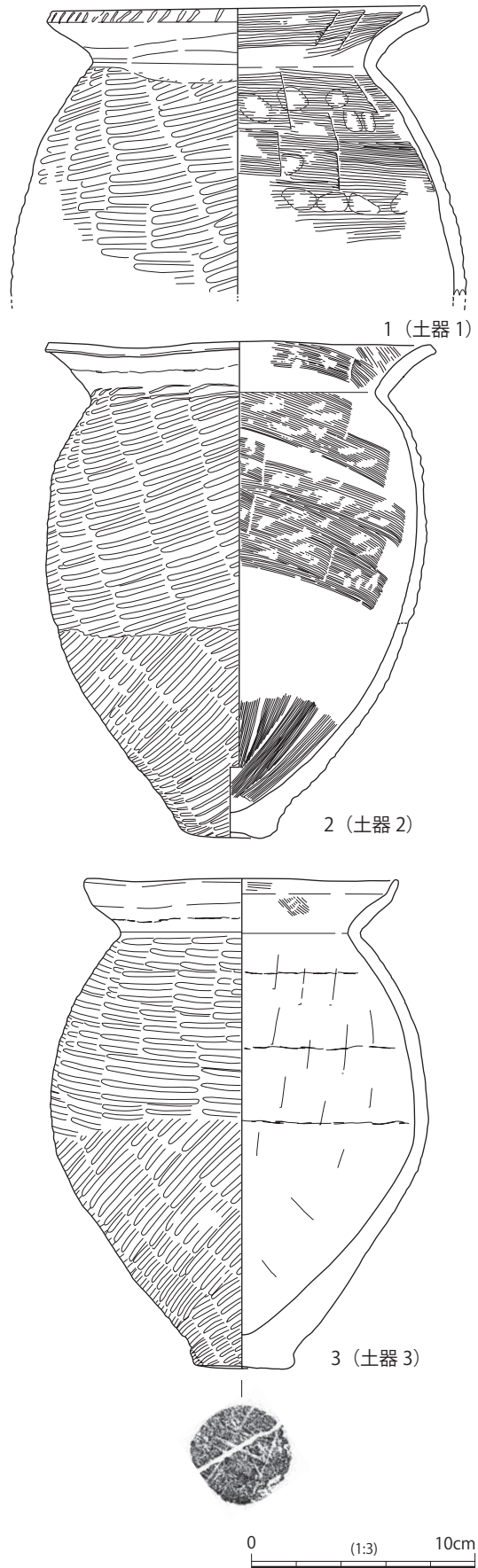


図92 101土器群1出土遺物 {1~3:土器1~3} (S=1/3)

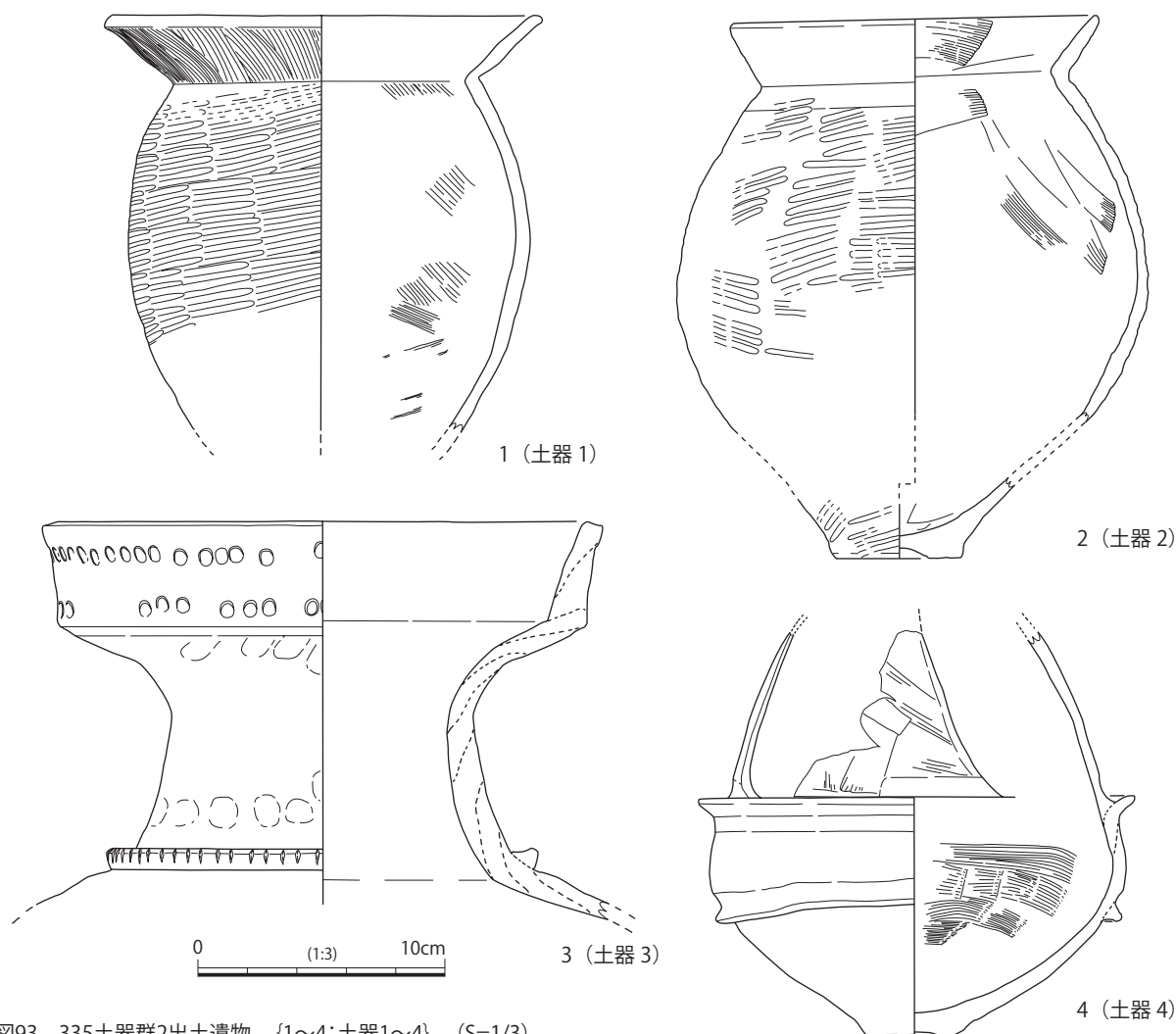


図93 335土器群2出土遺物 {1~4:土器1~4} (S=1/3)

がりナナメハケ、肩部～口縁部ヨコハケ。外面胴部タタキ後、頸部～口縁部ヨコナデ。底面は中央凹部にユビナデ、周縁は無調整で葉脈圧痕らしきものあり。煤・炭化物の付着なし。器表は浅黄色 2.5Y7/3、断面は灰白色 2.5Y8/2 を呈す。胎土に 1 mm 前後の石英あり、1 mm 弱の長石・チャート若干あり。若干球洞化し、弥生後期後半から庄内式併行期にかかる可能性もある。

3 は土器 3、庄内式二段口縁壺片。残存率 40%、口縁部周 70% 残存。内面磨滅するがヨコナデか。外面も磨滅するが、口縁屈曲部直下にタテユビナデ後ヨコナデ、頸部にユビオサエ残る。肩部の貼り付け突帯に刻み目、口縁屈曲部より上に 2 列の竹管文、下段は 3 個ずつで間を空ける。器表・断面ともにぶい橙色 7.5YR7/3 を呈す。胎土に 3～1 mm の赤色粒多し、2～1 mm の石英・1 mm 前後の長石若干あり、精良な胎土。形態は吉備系の影響を受け、肩部の刻み目突帯は庄内式期初頭ごろの加飾の二重口縁壺・直口壺などに例がある。二段口縁系の壺の口縁直立部の竹管文は庄内式期から布留式期まで少数ながら例がある。胎土は南河内に似る。庄内式期前葉頃か。

4 は手焙り形土器。残存度 50%、鉢部口縁部周 40% 残存。内面は磨滅激しく、鉢部胴部の一部にヨコハケ残るのみ。覆い部外面はハケ後、端部などにナデ。鉢部はヨコナデだが、胴部突帯以下はその前に左傾タテハケか。底面は凹部あり、輪台技法か。器表はにぶい黄褐色 10YR5/4、断面明赤褐色 5YR5/8 を呈す。胎土に 3～1 mm の石英・2～1 mm の長石あり、1 mm 弱の赤色粒・黒雲母わずかにあり。中河内低地産のようだ。加飾はないが、鉢部口縁が覆い部より外に外反し、胴部突帯も歪むが高く鋭く、

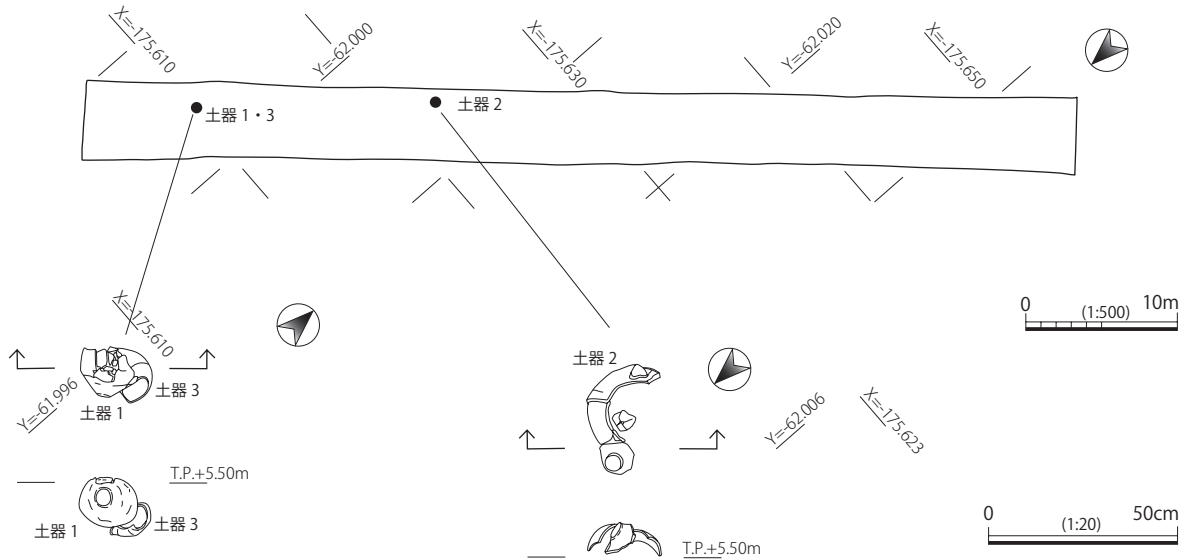


図94 湊遺跡 2tr. 第4層内土器群3出土状況図(S=1/500・1/20)

鉢部の形態が安定しているので庄内式前半でも早い時期のものと思われる。

以上の出土遺物を見れば、この土器群は中・南河内から搬入された庄内式期に属する土器を含み、庄内式併行期初頭頃のものと思われる。土器群1より新しく、第4面の土器群4・6よりは古いと言え、堆積層の上下関係と対応する。

3) 土器群3

2 tr. の北東側で実際の出土位置は土器1・3と土器2はかなり離れるが、便宜的に土器群3とした。第5面の地形では土器1・3は207浸蝕痕内、土器2はシュートバー2の南西斜面である。北西壁と離れた位置で層位は確認しにくい、207浸蝕痕は第4面からも切り込みのある砂礫層なので、土器1・3はほぼ第4面に近い層位、土器2は第2黒色層かその直上のようなものである。

図95-1が土器1、弥生V様式系甕。残存率50%、底部周完存。内面磨滅し不明瞭だが、左上がりのナデか。外面タタキだが、底部側面よりやや上で幅4cmほどヨコナデが消す。タタキ下にユビオサエも残る。底面は充填した円板の接合痕残り、輪台技法。器表は淡黄橙色10YR8/2、断面明黄褐色10YR6/6を呈す。胎土に1mm前後の石英多し、1mm弱の長石・チャート若干あり、1mm弱の黒色砂粒わずかにあり。寸胴気味の胴部、タタキのナデ消し、輪台技法から見ると庄内式併行期か。

2は土器2、弥生土器壺底部片。底部周完存。磨滅し調整不明。底面は中央がわずかに凹面を成す。器表・断面共にぶい黄橙色10YR7/4を呈す。胎土に3～1mmの石英あり、2～1mmのチャート・1mm前後の長石若干あり、1mm弱の赤色粒わずかにあり。広口壺の底部か。時期限定できず。

3は土器3、V様式系甕。残存率30%、底部周完存。内面は底部に左上がりナメハケのアタリのみ残る。全体にナデか。粘土接合痕残る。外面タタキ、胴部最大径部分よりやや下に上下のタタキを切るタタキが1単位1列並ぶ。底面には円板充填の接合痕残る。器表は淡黄色2.5Y8/3、断面灰白色2.5Y7/1を呈す。胎土に1mm弱の石英・長石・チャートあり。寸胴で底部は絞り込まず、輪台技法などを総合すると庄内式併行期か。

土器1・3は層位的にもほぼ第4面、庄内式併行期の初頭を除く前半と見て良い。

4) その他の第4層相当出土遺物

2 tr. では上述の位置を記録したもの以外にも若干の遺物が第4層から出土している(図97-1～7)。

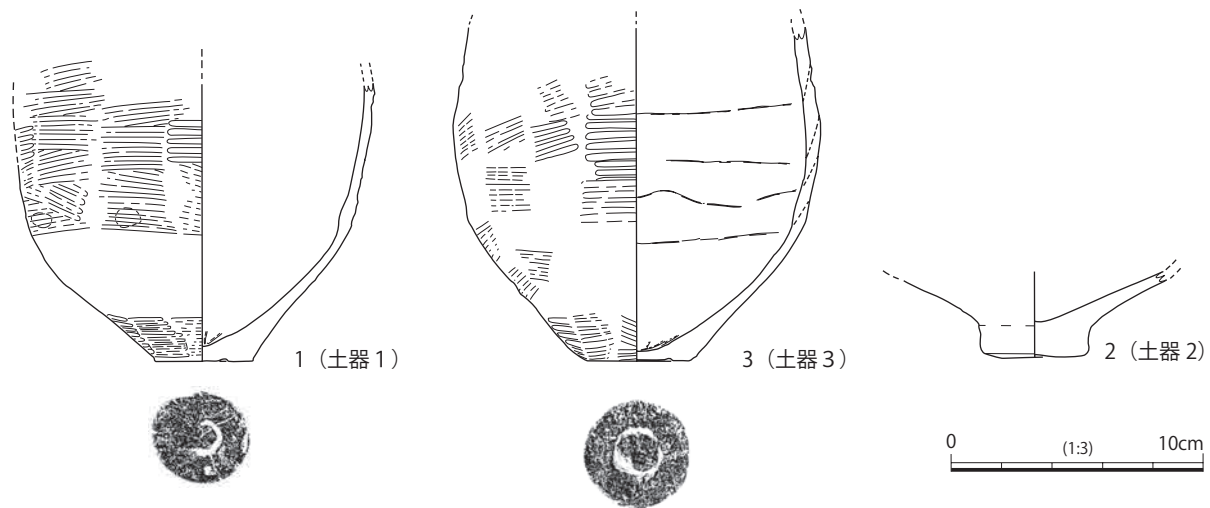


図95 336土器群3出土遺物 {1~3:土器1~3} (S=1/3)

ほとんどが土器群3土器1・3の近くから出土し、層位的には第4面に近いと言える。

また、3tr.では324流路と326流路の間の第4面直下の砂層から遺物が出土している(図97-8~14)。土器1(図97-13)は北西壁断面図(図42)の48の層から出土し、他も48・63のどちらかから出土。326流路の前身となる流路の堆積層である。

1はサヌカイト製打製石鏃。重さ1.41g。若干風化。

2は弥生土器壺底部片。底部周50%残存。磨滅により調整不明。器表・断面ともにぶい橙色7.5YR7/4を呈す。胎土に4~1mmの赤色粒多し、1mm弱の長石・石英若干あり、2~1mmのチャートわずかにあり。弥生後期長頸壺の底部か。

3は弥生V様式系甕底部片。底部周完存。内面磨滅し、底部にハケのアタリ残るのみ。外面は底部側面にユビオサエ、その上にハケ入るが磨滅、胴部はタタキ。底部薄いの輪台技法か。

4は弥生土器台坏鉢片。台部周完存。磨滅するが、台部内外面の接合部にユビオサエ残る。器表はにぶい黄橙色10YR7/2、断面橙色7.5YR7/6を呈し、胎土に2~1mmの石英多し、2~1mmの長石あり、1mm弱のチャート若干あり。

5は弥生土器と思われるが、甕にしては形態が変で、飯蛸壺にしてはやや大きすぎる。底部周30%残存。内面底部はナデ、胴部はヨコハケ。外面胴部は粗い目のタタキ、底部側面はヨコナデ、底面は軽いナデ。器表は灰白色10YR8/1、断面にぶい黄橙色10YR7/4。胎土に1mm前後の石英・長石あり、0.5mm強のチャート・赤色粒わずかにあり。底面から円板充填。

6は製塩土器片。胴底部内面はナデ、脚台部内面はシボリ痕。外面タタキ。器表は浅黄色2.5Y7/4、断面灰色5Y5/1を呈し、胎土に1mm前後の長石多し、3~1mmの石英あり、3~1mmのチャート若干あり。チャートが赤く、在地胎土とは異なる。脚台I式。

7も製塩土器片。脚台部周30%残存。胴底部内面棒状工具痕。外面くびれ部にユビオサエ、上にタタキ。脚台部内面磨滅し調整不明。器表・断面共橙色7.5Y7/6を呈す。胎土に1mm前後の赤色粒若干あり、1mm弱の石英わずかにあり。脚台II式。

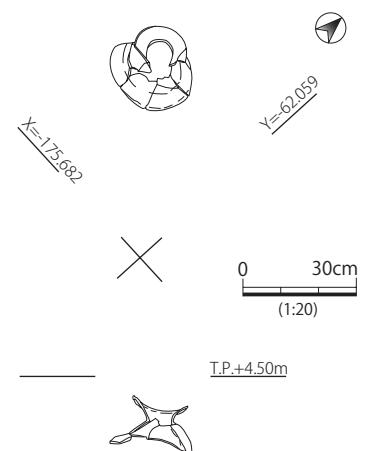


図96 湊遺跡 3tr.第4面古直下
青灰色砂層内土器1出土状況(S=1/20)

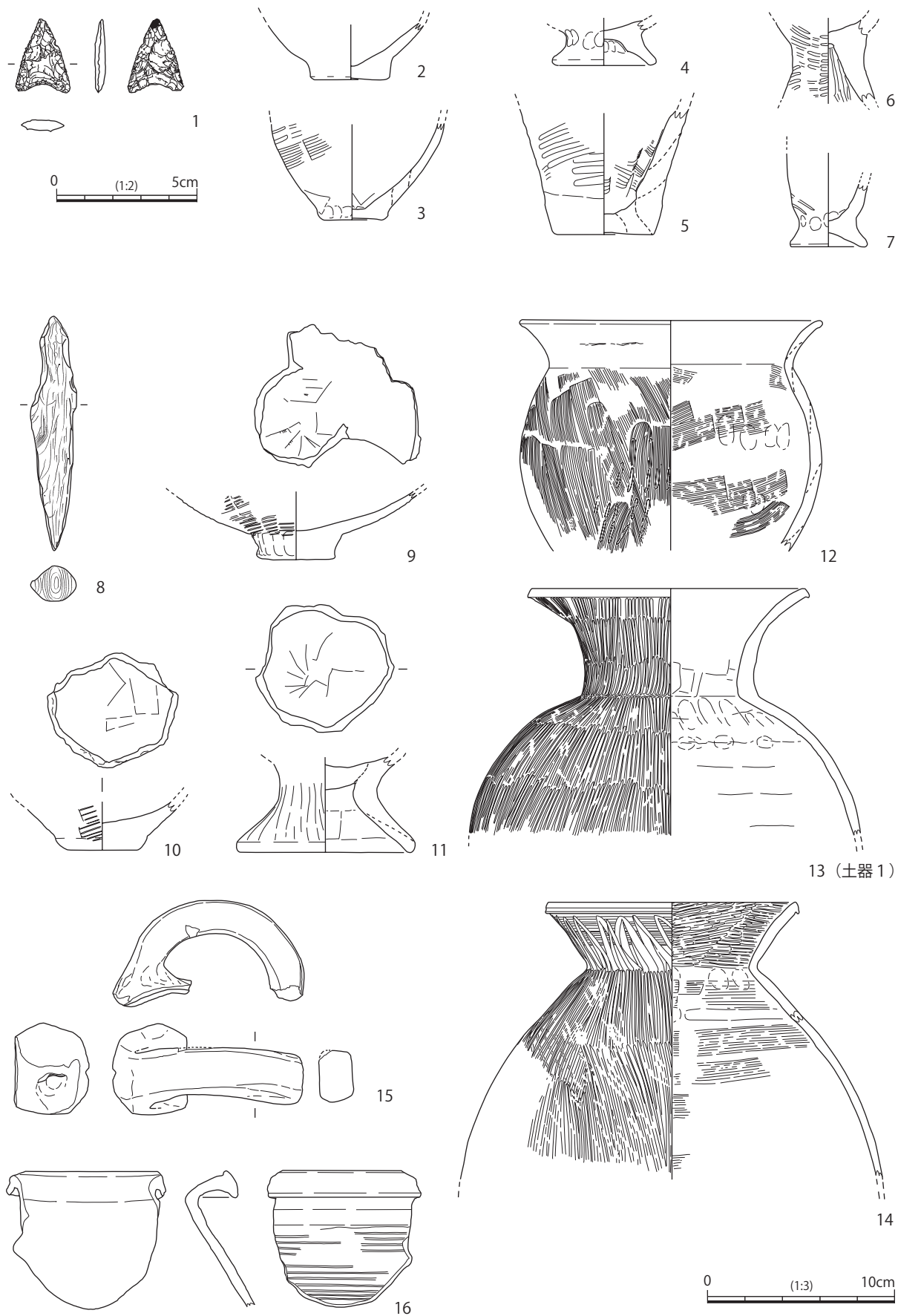


図97 湊遺跡 1~3tr. 第4面古以下出土遺物 {1~7:2tr. 第4層、8~14:3tr. 第4面古直下青灰色砂層内、15・16:330流路上層}
 (S=1/3、1のみS=1/2)

8は加工痕確認できないが楔形木製品かもしれない。下方端部が炭化する。

9は弥生V様式系甕底部片。底部周完存。内面は左上がりナナメハケ。外面は胴部タタキ、底部側面ユビオサエ、底面無調整。器表・断面共にぶい黄橙色 10YR7/4 を呈す。胎土に2～1mmの石英・1mm前後の長石あり、1mm前後のチャート・赤色粒わずかにあり。外面煤付着。胴部球胴化し、庄内式併行期の可能性高い。

10は弥生V様式系甕底部か。底部周完存。内面はハケ後ナデ。外面タタキ、底部側面ヨコナデ、底面無調整。器表は褐灰色 10YR6/1、断面灰黄褐色 10YR6/2 を呈す。胎土に1mm前後の長石・石英あり、2～1mmのチャートわずかにあり。庄内式併行期の可能性もある。

11は弥生土器台付き鉢片。台部裾周50%残存。身部内面底部左上がりナナメナデ。底部円板充填。台部内面ヨコナデ。外面タテミガキ、台端部ヨコナデ。器表・断面共灰黄褐色 10YR6/2 を呈す。胎土に1mm前後の石英多し、1mm弱の長石・チャートあり。弥生中期的で下っても後期初頭か。

12は弥生土器甕。残存率40%、口縁部周30%残存。内面は、胴部ユビオサエ後、やや左下がりのヨコハケ、口縁部ヨコナデ、外面、胴部タテタタキ後タテハケ、口縁部ヨコナデ。外面煤付着。器表・断面共にぶい黄橙色 10YR7/3 を呈す。胎土に1mm前後の長石あり、2～1mmの石英・1mm前後の赤色粒・2～1mmのチャート若干あり。在地ではない。畿内V様式には併行するか。

13は土器1、弥生広口壺。残存率30%、口縁部周50%残存。内面は粘土継ぎ目残し、肩部にユビオサエ、そこから頸部にタテユビナデ後、全面ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。外面はタテミガキ、口縁端部ヨコナデ。器表・断面共灰黄色 2.5Y6/2 を呈す。胎土に1mm前後の石英あり、2～1mmのチャート・1mm弱の長石わずかにあり。頸部がやや狭くなり、初め直立に立ち上がる口縁、球形胴部などから和泉V-3・4頃か。

14は弥生土器広口壺。残存率50%、口縁部周も同じ。内面は頸部～肩部にユビオサエ・ユビナデ後、胴部全体ヨコハケ、口縁部ヨコミガキ。外面胴部タテミガキ、口縁部ヨコハケ後、波状のタテミガキ。口縁端部ヨコナデ、下半は棒状工具で凹面を成す。器表・断面共にぶい褐色 7.5YR6/3 を呈し、胎土に0.5mm強の長石あり、4～1mmのチャート若干あり、1mm弱の石英わずかにあり。口縁かなり小さくなり、口縁部内面にヨコミガキがあるのは庄内式併行期の広口直口壺か。ただし、無花果形の胴部は古色である。ヨコミガキを無視するなら和泉V-1頃の可能性もある。

2tr.の製塩土器は第4面相当の可能性もあるので、弥生時代後期に遡るとは言えない。3tr.の326流路の前身と見なされる流路は14の土器を古いと見れば1tr.の土器群1と同じ時期にまで遡り、質は異なっても第4層としてよい事になるが、微妙なところである。

4、330流路

330流路とは、3tr.の、326流路底部で北東に落ちていく砂礫層を（図42、3tr.北西壁断面の51）、324流路底部で南西に落ちていく砂礫層を（トレンチ北西壁断面の100・101）確認し、その質が似ている事から、この間に古い流路が存在すると想定したものである。その上部の66などの層が第4層と認められるなら第4面より古い流路であり、場合によっては第5面より古い可能性もある。断面51の層の上面、50との境付近から若干の土器が出土した。それが図97-15・16である。

15は弥生土器水差し形土器の把手と思われる。把手断面は隅丸長方形を成すが、その各辺のナデは凹面を成す。胴部との接合面はユビナデ。把手の付く胴部内面には指による刺突のような1cmほどの深さの穴がある。器表・断面とも灰黄褐色 10YR6/2 を呈す。胎土に1mm弱の石英多し、0.5mm強の長石あり、

0.5 mm強のチャートわずかにあり。弥生中期のものであろう。

16は弥生土器甕口縁部片。全体にナデ調整の後、外面に粗い櫛描文。器表はにぶい黄色 2.5Y6/3、断面は黄灰色 2.5Y5/1 を呈す。胎土に 1 mm弱の石英多し、長石あり、チャート若干あり。上下に拡張した口縁端部の面が凹面ではなく凸面なのは新色か。和泉Ⅳ様式のものか。

この 2 点から 330 流路は弥生時代中期頃に埋没したと思われる。また、これが今回の調査で最古の遺物包含層である。

第 9 節 総括

1、弥生時代

今回の調査で最も古い時期の遺物は第 4 面 326 流路から出土した縄文晩期突帯文土器の小片であるが、包含層として最古のものは弥生時代中期後葉の 330 流路である。これは所属面不明だが、存在する高さ的には 05-1-3tr. で、シュートバー 2・6 とした部分を通っていたであろう流路と似ている (図 98)。05-1-3tr. のシュートバー 1 で隔てられてこの 2 本の流路が併存していた時期があったかもしれない。上流で最も大きな谷である七ノ池からの谷のものが 330 流路で、もう一つは矢畑池からのものである。

しかしその時期は開析谷内には安定した平坦面は存在せず、むしろ堆積が進行し谷が埋没傾向にあったと思われる。中期の遺物が極わずかなのもそのせいであろう。調査区より上流側に何らかの人の活動があったのであろうが、集落を想定するにはあまりに量が少ない。

堆積が進行する中、二つの流路は調査地点では合流して 147 流路になったものと思われる。それが調査区北東側の第 4 層の堆積を進行させたのであろう。それが 1・2 tr. 第 4 層土器群 1・2 の示す、弥生時代後期後半、和泉Ⅴ-3・4 から庄内式併行期初頭頃と考えられる。147 流路は最終段階で北東側を攻撃面として下刻が進行し、河岸段丘を形成した後、後背湿地化する。そこで北東側は第 4 面が成立する。147 流路上層、後背湿地的堆積層から出土した弥生Ⅴ様式甕も、庄内式併行期初頭なら問題ない。その期間、南西側では南西端小さな枝谷からの流路の活動で小規模なシュートバー 4・5 が形成された程度で、おそらく後背湿地内の第 4 層の堆積も第 3 黒色層までしか進行していなかったと思われる。この段階の土器は磨滅が少なく、147 流路より北東から出土するので、その時には遺跡北東半の下位段丘上に集落が存在した可能性が高い。

2、庄内式併行期 (古墳時代初頭)

そして二つの流路は調査区地点では再び分かれ、324 流路と 326 流路になる。そして庄内式併行期前半でも初頭を過ぎると遺物が増加する。両流路包含遺物や土器群 4・6 に代表されるもので、この時点から製塩土器が登場し、製塩を行う集落が成立していると考えられる。土器群 4・6 は 324・326 流路の間で人が活動し残したものと考えられ、その活動の拠点は両流路の間の上流にある中位段丘上と推測される。河岸段丘より北東側は安定した環境になる。

その時点で南西側、05-1-3tr. 部分では第 2 黒色層まで堆積が進行し、ここでも遺物が増加する。しかし、324・326 流路付近が、生駒西麓産の庄内式土器を含み、製塩土器が脚台Ⅱ式に統一されているのに対し、こちらは土器がほとんど在地のⅤ様式系で、製塩土器は量もなく脚台Ⅰ式とⅢ式が見られる。この違いはなんだろうか。

湊遺跡が、製塩土器が大量に出土する遺跡として有名になった泉佐野市の 81-6 区の調査は、今回

の調査区よりやや下流側の低位段丘南西段丘崖近くに刻まれた小開析谷内から製塩土器が出土しているが、それらは大量でかつ、ほとんどが脚台Ⅰ式である。他の土器は、庄内式土器はないが、庄内式併行期の可能性が高く、遡っても弥生後期末葉であろう。

つまりほぼ同じ時期に同一開析谷内の3地点で異なる様相が見られるという事である。81-6区はやや古い可能性があるが、集落の立地の可能性を推測すると、北東の低位段丘、南の枝分かれした谷に挟まれた中位段丘、南西の上町東遺跡のある中位段丘と3ヶ所に各々性格の違う集落が併存していた可能性も考えられる。

この時期の様相をまとめると以下のようになる。

- 集落的な構成の土器群があり、集落が存在していたと見て良いであろうが、遺構は存在しない。
- 使用済みの製塩土器の大量廃棄、完形の製塩土器などがあり、製塩を行っていたと考えて良い。製塩土器の生産も可能性がある。しかし、製塩炉は未発見で、海から1kmほど離れる。浜で製塩し、土器から塩を取る作業などを集落で行っていたと考えれば整合性があるように思う。
- 庄内式土器が搬入され、中河内と一定の交流があった。在地の土器は弥生Ⅴ様式系で、庄内式併行期というべきであろう。しかし、庄内式有稜高坏は在地産の可能性があり、確定はできない。
- 土錘・飯蛸壺の出土から、漁撈集落的性格もあったと見なされる。
- 湊川水系の開析谷を囲む周囲の段丘上に、各々やや性格の異なる集落が存在した可能性がある。

なお、2003年発行の当センターの「湊遺跡他」の報告書では、調査深度が確保できなかったこともあり、第4面付近の認識に失敗している部分がある。

2tr.の南東隣のA地区で「最終掘削面・第4面」としている面は147流路埋土上面を「地山」と誤認し、河岸段丘の段差も認識されていない。中央付近は第5面のシュートバー2の頂部が出ているようであり、北東側は第4面相当のようである。土器群はシュートバー2の北東裾部出土のようで、層位的には第4層第2黒色層付近と思われる。弥生Ⅴ様式後～末葉のようで、矛盾はない。

3tr.隣のB地区では、「第8・8-b面」としたのが、第4面に相当か。324流路の庄内式併行期の肩部形態と、その後の浸蝕痕を切り合いなしに検出している。326流路は認識されていない。土器群のほとんどは324流路肩部に位置しているようであるが、流路から離れた位置のものもある。土器群4以外にその南東側に、製塩土器や他の土器の土器群があった事が知られる。製塩土器はほとんどが脚台Ⅱ式だが、他の土器は、積極的に庄内式併行期に下げる要素がない事がやや異なる。

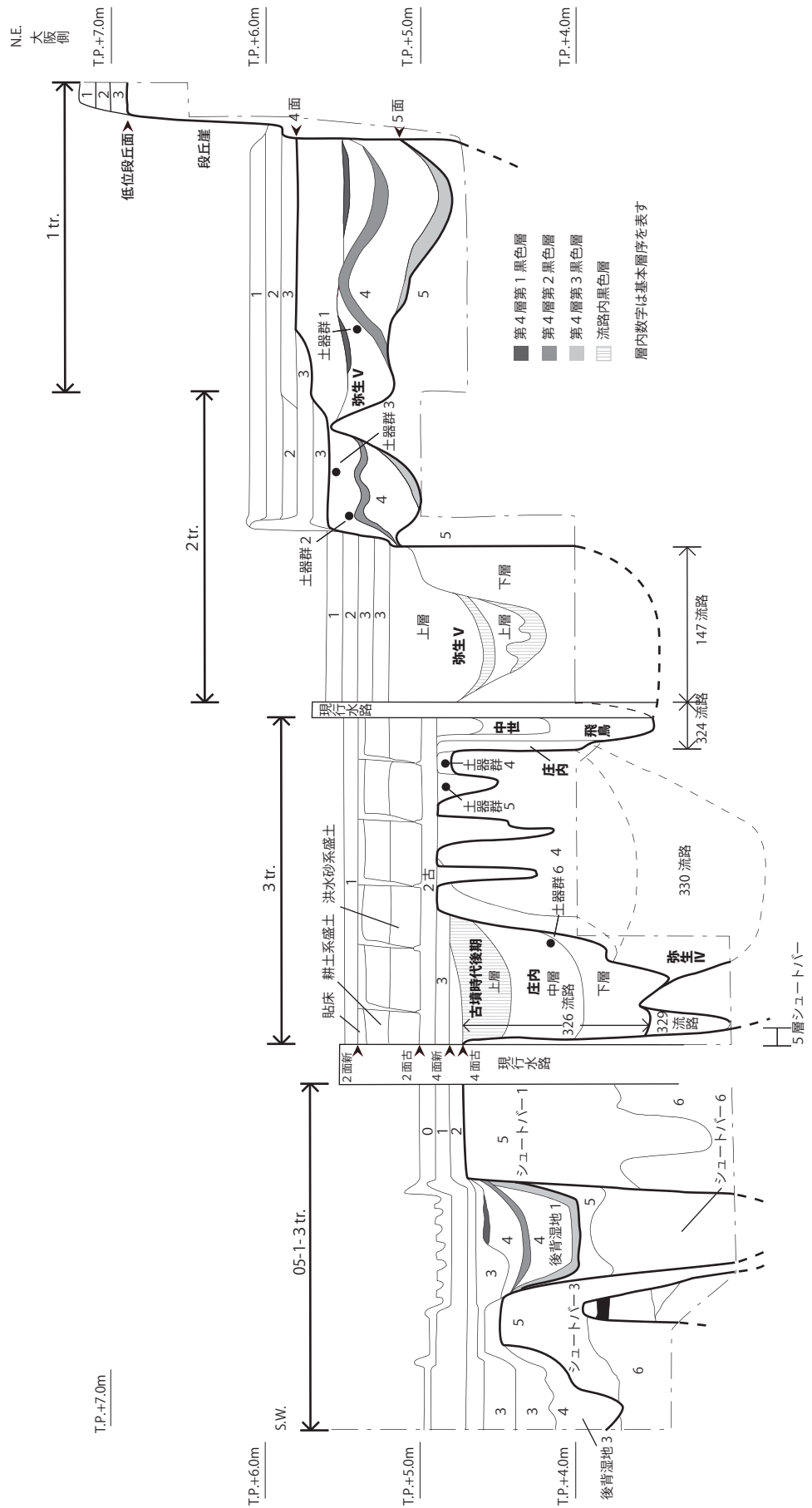
05-1-3tr.隣のC地区では、「第5面」が今回の第4面に近いと思われるが、砂層・砂礫層を全て流路と認識しているために良く分からない状態になっている。ただ、溝C-9としたものは、埋土から、第5面の後背湿地の一つと見られ、後背湿地2に続く可能性がある。

3、飛鳥時代

庄内式併行期以降、布留式期の古墳時代前期から後期まで、遺跡内で遺物が極端に少ない時期がある。再び遺物が増加し、遺構も見られるようになるのが飛鳥時代である。その間に、古墳時代後期に326流路は後背湿地化し、その流れは再び324流路と、調査区より上流側で合流する形になったと思われる。そして、南西側の後背湿地の埋積もほぼ完了する。

今回の調査では飛鳥時代の土器は土器群5のみであったが、泉佐野市87-4区では今回の調査区よりやや下流の河岸段丘沿いで飛鳥時代の蛸壺が大量出土し、91-2区では、佐野川に面した下位段丘崖上に飛鳥時代の土坑墓が検出され、製塩土器も出土している。漁撈と製塩が再び見られるようになる

図98 湊遺跡 基本層序模式図



が、この時代の遺構遺物は遺跡内で極めて限定された位置にしかない。それと、この時期以前の弥生時代・古墳時代の遺構がほぼ皆無である事とを合わせると大きな問題である。

遺跡北東半の低位段丘上では奈良時代の集落の存在が判明しているように、奈良時代以降、平安時代～中世の遺構は各所で発見され、飛鳥時代以前の状況と大きな差がある。しかし、遺跡南西半の開析谷内では、飛鳥時代以前でも充分集落の存在を推定するに足る遺物が出土している。それから考えられる事は、奈良時代の集落が成立する際に、低位段丘上で広範囲・大規模な整地が行われ、それ以前の遺構が削平され消滅したのではないかという可能性である。唯一、段丘上の91-2区が、緩傾斜している段丘縁辺部である事もそれを暗示しているように思える。

今後、低位段丘上で飛鳥時代以前の遺構が発見された場合、それが低位段丘平坦面で削平を免れるような自然地形の凹部に位置しているかを検討する価値はあろう。

4、中世耕地開発

今回の調査では奈良時代以降の遺構・遺物はほとんどなかったが、遺跡内では集落が存続発展し、平安時代の蛸壺窯も検出されている。2tr.北東半の第4面遺構の幾つかはその時期の遺構の可能性もある。しかし、それより南西側の調査区内では、その期間の堆積も浸蝕もほとんどない。遺物もほとんどなく、比較的安定していたのに放置されていたかのようなのである。後背湿地の埋没が進行したとは言え、水の回しにくい微高地と排水困難な後背湿地が混在していたからであろう。

中世単純の包含層で、耕土でもある第3層の成立をもって開析谷内が耕地開発されたと考え、そこには若干の時期に関する問題がある。

まず、河岸段丘上の北東側と、氾濫原的な南西側の耕地開発が同時期であるか、という問題である。さらに、05-1-3tr.では後背湿地2の跡地を埋め、シュートバー3・4をつなげて高まり2を造成した際、第3層より下に、より暗色で、第4層の黒色層に砂を加えて耕土にしたような層があり、同じような層が後背湿地3の一部にも見られ、第3層成立以前の耕土があるという事である。

画期の設定で時期を合わせると、北東側河岸段丘上が耕地開発された時点で南西側氾濫原の中の一部も耕地化され、全面的に耕地開発されるのはやや遅れるという図式がありえるだろう。

北東側は1tr.で第3層を切り込む粘土採掘土坑群が、瓦器椀群が12世紀末～13世紀初頭と考えられる事からそれ以前に耕地開発があり、南西側は05-1-3tr.で第3層でも下のほうの層である第3-2層に瓦質羽釜片が含まれている事実からは、ある程度上述の図式が肯定できる。

しかし、324流路上層の中世遺物が示すように、最初の段階で開析谷内の流路幅を人為的に狭くし、一部流路も付け替え水路化し、その水路体系をもって、その後も耕地開発が進行したと思われる。流路を水路として統制するようになったのが一番の画期と言える。

粘土採掘土坑群は耕地開発とは関係ないが、工人の関わる産業が存在していた可能性を暗示し、工人集落的様相も持った、低位段丘上でも山側の檀波羅密寺と隣接した中世集落が関わっていたかと推測される。

5、近世

第2層が耕土である時点から近世に入っていくと思われるが、第2層の成立は15世紀末葉頃まで遡る可能性もある。そしておそらく17世紀まで存続していたであろう。その時点で成立した耕地区画は、明治30年に南海本線が開通するまで、第1層、第0層と踏襲され、耕地区画整理を経た現代にもその名残を残す。ただ、その面で洪水復旧の痕跡を確認できたのも貴重な成果であった。その過程は上述

したが、そこに発揮された近世農民の知恵には感嘆すべきものがある。

6、近世包含層出土の土錘

今回の湊遺跡の調査では、近世のものと思われる土錘が細かい破片を除いても72点出土した。それらを、第4章上町東遺跡で行った手順で分析したが、ほぼ上町東遺跡での結果を肯定する事となった。ただ、完形品が45点と、統計的処理には少なすぎ、単独では妥当な結果はでない。

上町東遺跡の分析に即して述べれば、小型管状土錘でピーク1の典型例は図52-7・8、一番重いのは図52-11である。他の代表例を図99に挙げる。

1は小型管状土錘中最軽量のもので全長3.15cm、質量1.67g、胎土タイプa。小型管状Ⅰ類。

2は2番目に軽いもの。全長2.98cm、質量1.71g、胎土タイプa。小型管状Ⅰ類。

3はピーク2典型例。全長2.97cm、質量4.77g、胎土タイプb。小型管状Ⅲ類。

4は小型管状で2番目に重い。全長4.17cm、質量4.53g、胎土タイプa。小型管状Ⅲ類

5は唯一大型で完形だったもので、全長6.25cm、質量92.35g、胎土タイプf。大型管状Ⅰ類。

6は棒状土錘で古い時期のもの可能性もある。全長6.97cm、質量14.97g、胎土タイプf。

7は唯一の有溝土錘である。全長9.84cm、質量152.09g、胎土タイプf。やや欠失あるが大型管状のⅡ類の質量範囲に納まるようである。

やはり、調査面積や遺存していた包含層も加味して考えると、海に通じる河川のある、湊遺跡の開析谷内より、中位段丘上の上町東遺跡の方が圧倒的に土錘が多く出土する事になる。

7、まとめにかえて

今回の調査で最大の成果は地形と堆積に関するものであろう。遺跡北東半の微高地が低位段丘である事を特定でき、開析谷内の堆積過程と地形の形成が把握でき、それに人々がどう対応していったかの一端を知る事ができた。また、土器群4の製塩土器はこの遺跡内で最も遺存状態の良いもので、全国的にも貴重だと言っても良からう。土器群6の大量の脚台Ⅱ式の破片は製塩土器独自の製作法を明らかにした。

それだけでなく、地形と関わりながら、古墳時代初頭前後に、短い期間や遺跡内の部分毎で様々な変化や違いが見られる事も判明してきたと言えよう。漠然と弥生時代後期からの製塩遺跡とされてきた評価から、具体的かつ複雑な内容が現れてきたとも言える。

それ以外にも、飛鳥時代・中世・近世でもそれぞれに確かな成果が得られた。それにしても、弥生時代から現代に至るまで、連綿と蛸壺漁が行われてきた事を遺物で示せる遺跡はそうはあるまい。

現代、遺跡内も周辺も市街化が進み農地は減りつつあるが、それでも水路を維持し、土地を耕し、丁寧に作物を育てていく人は残り、我々はおいしい大根や茄子を食する事ができた。またいにしえからの茅渚の海の幸はまだまだ佐野漁港を賑わしている。それらは全てはるか昔からの人々の営みの上にある。

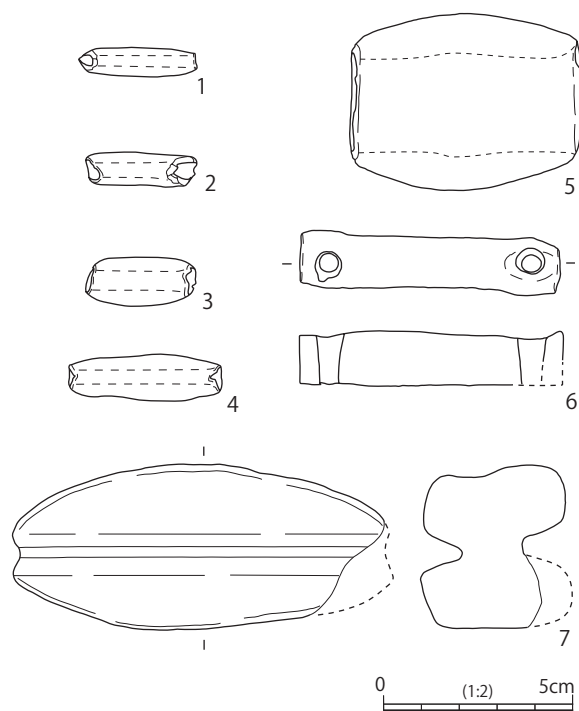


図99 包含層(第2層以上)出土土錘 (S=1/2)

第6章 上町東遺跡 05 - 1 出土茶道具について

今回の発掘調査において茶道具と考えられるものが多数出土した。これまで泉佐野市内からは、天目碗の出土例はあったが、その他の茶道具に関してはない。今回報告する資料は、いずれも遺構出土ではないため一次資料とはならないが、第4トレンチという限られた区域からの出土であり、一括廃棄の遺物である可能性が高い資料と考えられる（図100・図版33-3・4）。

まず、茶碗として、天目碗（1）、平碗（2）、丸碗（3）が出土している。1は、体部から口縁部にかけての個体で、高台部分を欠く瀬戸美濃焼である。2は、口縁部径が約13.8cmで、器高は4.3cmの唐津焼である。削り出し高台で、体部も削りにより器厚をうすく仕上げる。見込みには、浅い茶溜りを作り出す。全面に飴釉が施されるが焼成不良のため発色が悪い。3は、口縁部径9.8cm、器高6.8cm、底部径5.3cmで、高い高台が特徴である。全面に長石釉が施されており貫入が著しい瀬戸美濃焼である。図示していないが、見込みには茶筌痕と考えられる細かな同心円状の擦痕がみられる。なお、愛知県瀬戸市窯町C窯跡で同じ器形の碗が出土しており、この製品である可能性がある。すでに記述しているものにも、李朝白磁碗（図版31-7・7'）、瀬戸美濃焼天目碗（図版32-7）などの茶碗が同一地点から出土している。

向付には平向付（4・7・8）、筒向付（5・6）が見られる。4は、隅にあたる部分で、底部には糸切り痕、内面に布目痕が見られ、口縁部に向けて直線的に立ち上がる。ロクロ成形ののち型打ちされたものである。長石釉と銅緑釉と鉄釉が施された織部焼である。加藤真司氏による分類案では「平向付IVC類」に相当する（大平ほか2002）。5の平面形は、二面を凹ませることによって工字形を呈する。鉄絵を施したのちに、灰釉が全面に施釉され、口縁部付近に銅緑釉が掛けられる織部焼である。6は、5と同一個体になる可能性があるが、釉薬のかかり具合から別個体として判断した。7は、口縁部を屈曲させ輪花状に形成する。見込みには強くナデが施され、全面に長石釉が掛かる志野焼である。底部には足が貼付けられていたが欠損している。8は、外面底部に削りが施されており、側面を押さえ四方に整えている。鉄絵ののち灰釉がかけられた唐津焼である。口縁端部にも鉄釉が掛けられている。

茶入として、9が出土した。9は、底径4.8cm、器厚0.3cmの上野・高取系である。ロクロ成形で糸切り方向は右回りである。内面は平滑に整えられ、内外面に藁灰釉が施される。

10は、肩部に注口と耳を貼付した水注である。ロクロ成形で底部に右回りの糸切り痕が残る。底部は露胎で、内面にまで厚く鉄釉が施される瀬戸美濃焼である。体部と底部に釉着がある。この器形の水注は茶入として用いられることが多く、茶入として使用していた可能性がある。

11は、備前焼餌籠形鉢である。口縁部径は約12.2cm、器高8.6cmで、体部はゆるやかに内湾し、口縁部は直立する。口縁部付近で段を形成している。外面底部から体部下半にかけて削りが施される。口縁端部には重ね焼きの跡が残り、外面には自然釉がかかる。大きさと器形から考えて建水に使用されたものであろう。

他にも小片のため図化していないが備前焼水指もある。このように多様な茶道具が狭い範囲から出土することはめずらしい。大阪府下において茶道具がまとまった形で出土するのは、堺市にある堺環濠都市遺跡や大阪市の大坂城下町遺跡などの都市部に多い。出土した茶道具は、ほぼ17世紀～18世紀初頭に収まるものであり、共伴する肥前陶磁器もこの年代と大きく変わらない。出土地点は、「佐野領田

出村」にあたり、佐野村の分村として江戸前期には成立していることが絵地図から判明している。ただ、道を挟んだ西側に中庄村の分村として成立した「田出村」も存在することから、これらの茶道具はいずれかの「田出村」から廃棄されたものと考えられる。いずれの「田出村」の様相を表しているのかわからないが、今回の調査によってこのように多様な茶道具を持ち得る人物が「田出村」に居たという事実は、泉佐野市の近世史を考える上で大変重要である。 (奈良)

引用・参考文献

瀬戸市史編纂委員会 1999『瀬戸市史』陶磁史編 六 愛知県瀬戸市

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

大平修・磯山博文・加藤真司・中畠茂・高橋健太郎編著 2002『元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書』岐阜県土岐市教育委員会 (財)土岐市埋蔵文化財センター

石井啓 2006「生産⑦「備前」」『江戸時代のやきもの—生産と流通—』財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター

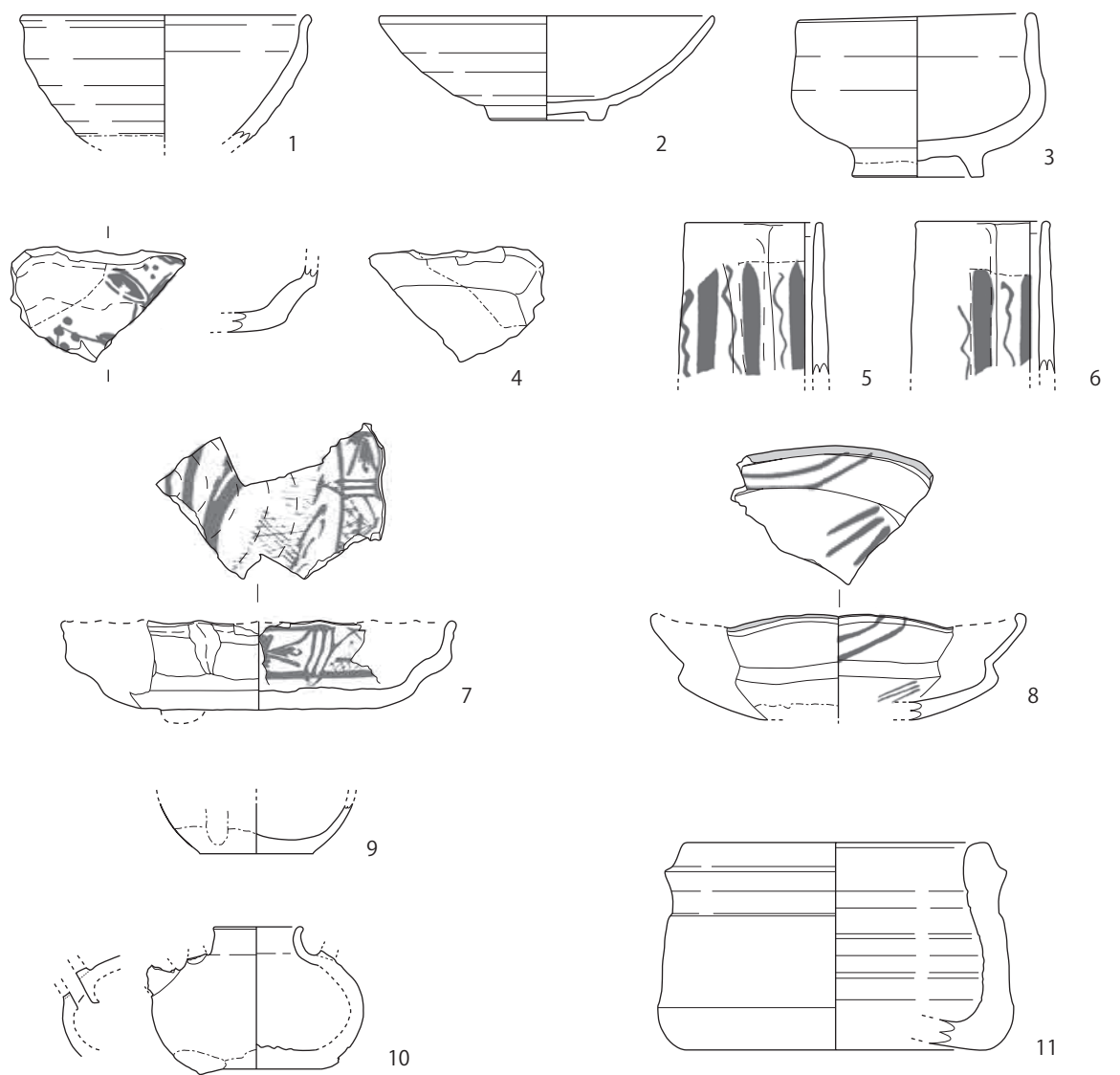


図 100 上町東遺跡 出土茶道具

0 (1:3) 10cm

写真図版



1. 1トレンチ第1面（南西から）



3. 2トレンチ第1面南西半（北東から）



2. 1トレンチ第1面（北東から）



4. 1トレンチ第5面（南西から）

図版 2



1. 1 トレンチ断面 No.3



3. 1 トレンチ第 5 面 105・108 溝断面 (北東から)



2. 1 トレンチ第 5 面 123 溝土器 1 出土状況 (南から)



4. 104 溝土器群 2 (手前)・3 (奥) 出土状況 (北東から)



5. 104 溝土器群 1 出土状況 (北東から)



1. 104 溝土器群 3 出土状況 (北西から)



2. 104 溝土器群 2 出土状況 (北西から)

図版 4



1. 097 井戸半截状況および遺物出土状況（1回目）（東から）



2. 097 井戸断面上半（東から）



1. 097 井戸 礫集中部分直下 (3回目) (東から)



2. 097 井戸 底部付近 (4回目) (東から)

図版 6



1. 2 トレンチ第 5 面 (南西から)



2. 201 井戸半截状況 (北東から)



3. 185 溜井 (北から)



1. 4トレンチ第0層相当段丘崖 肩部検出状況 (南西から)



4. 4トレンチ段丘崖 斜面堆積完掘状況 (北東から)



2. 4トレンチ第1層相当段丘崖 斜面堆積層内土器1・陶器1出土状況 (北東から)



5. 4トレンチ段丘崖 斜面裾部検出状況 (北東から)

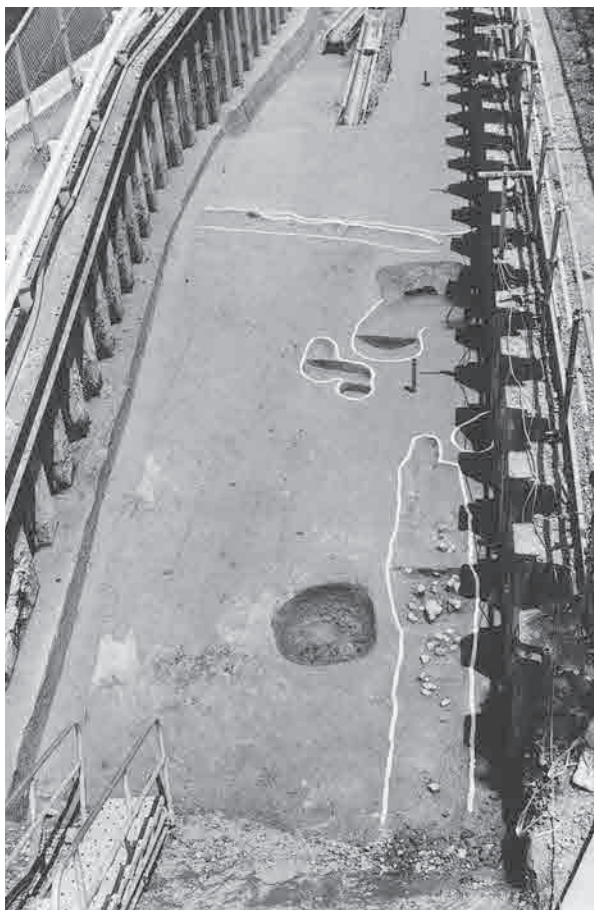


3. 4トレンチ段丘崖 斜面南西部完掘状況 (北東から)



6. サブトレンチ断面 (南東から)

湊遺跡 図版 8



1. 1 トレンチ第 2 面（南西から）



3. 2 トレンチ第 2 面全景（北東から）



2. 2 トレンチ第 2 面全景（南西から）



4. 128 畦畔検出状況および土留杭出土状況（西から）



5. 2 トレンチ 河岸段丘由来の段差（南東から）



1. 3トレンチ第2面検出状況（左が第2面新）
（南西から）



4. 3トレンチ第3・2面（古） 大型土坑群検出
状況（南西から）



2. 2トレンチ第2面新 貼り床検出状況
（西から）



3. 3トレンチ第2面 段差断面（北東から）



5. 3トレンチ第3・2面（古） 全景（北東から）

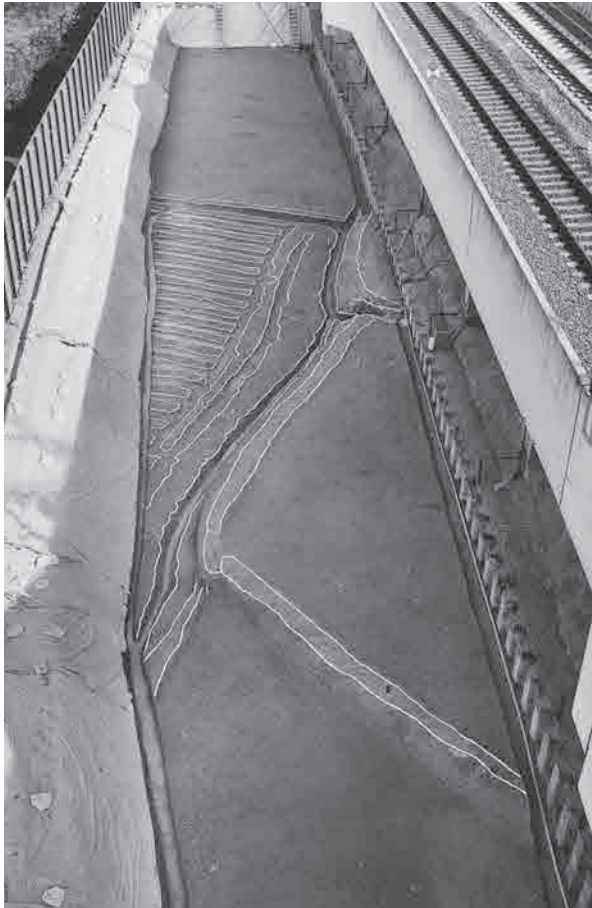
図版 10



1. 3 トレンチ第 2 面古 大型土坑群完掘状況（西から）



2. 3 トレンチ第 2 面古 大型土坑群完掘状況（西から）



1. 05-1-3 トレンチ第0面全景 (南西から)



2. 05-1-3 トレンチ第1面全景 (南西から)

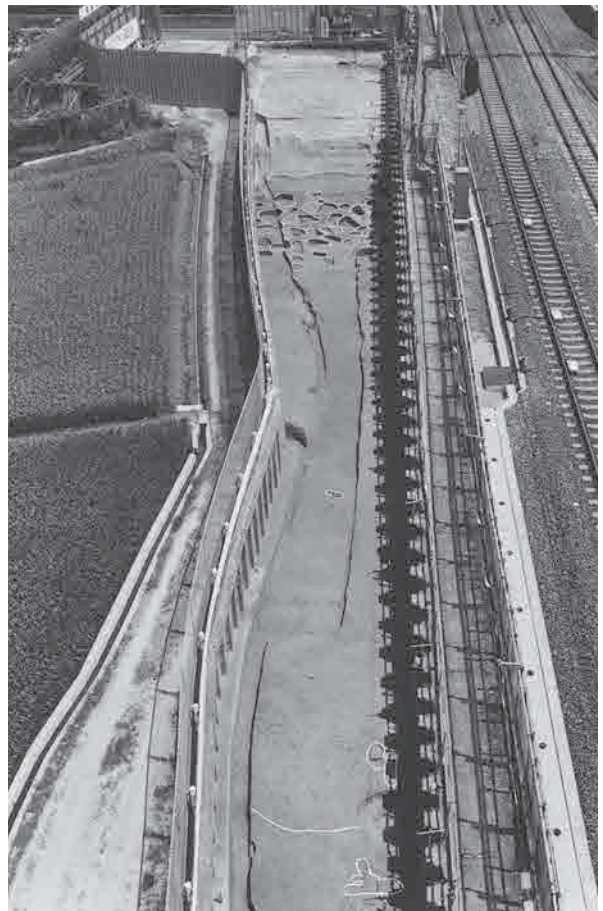


3. 05-1-3 トレンチ第2面 05-1-262 石詰暗渠および土留杭 (東から)

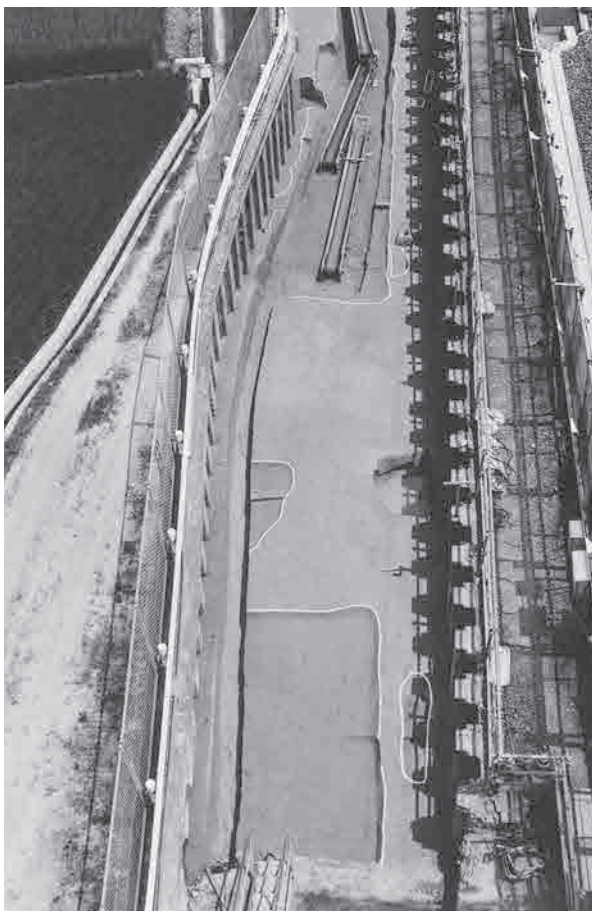
図版 12



1. 05-1-3 トレンチ第2面 (南西から)



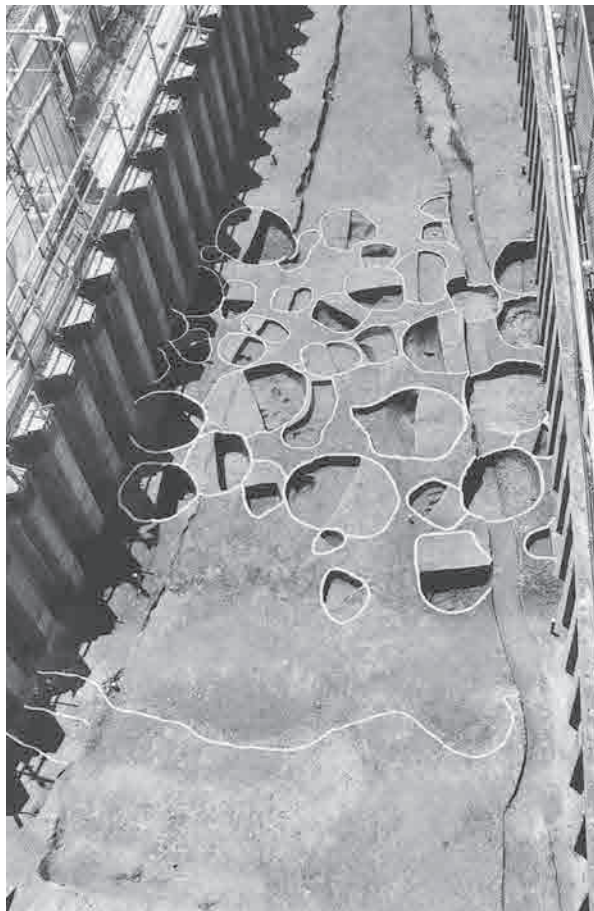
3. 1 トレンチ第3・4 (空測) 面 (南西から)



2. 1 トレンチ第3面 (南西から)



4. 2 トレンチ第2面 (北東から)



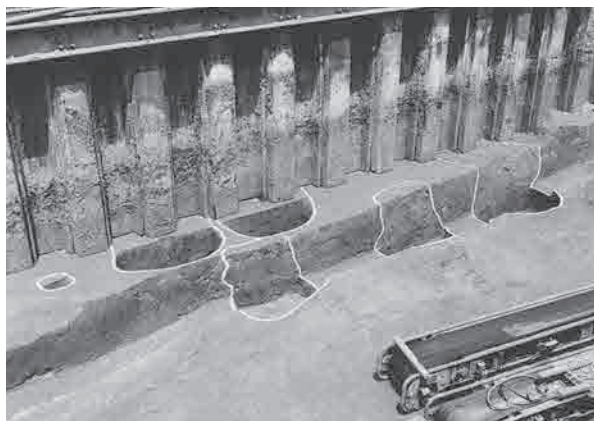
1. 1トレンチ第3面土坑群検出状況（北東から）



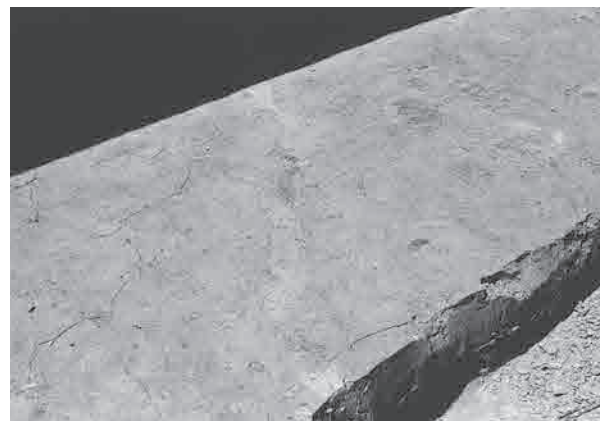
4. 071 土坑瓦器出土状況（西から）



5. 067 土坑瓦器出土状況（北から）



2. 029（奥）～031（手前）土坑断面（南から）



6. 1トレンチ第4面 噴砂脈検出状況（南から）

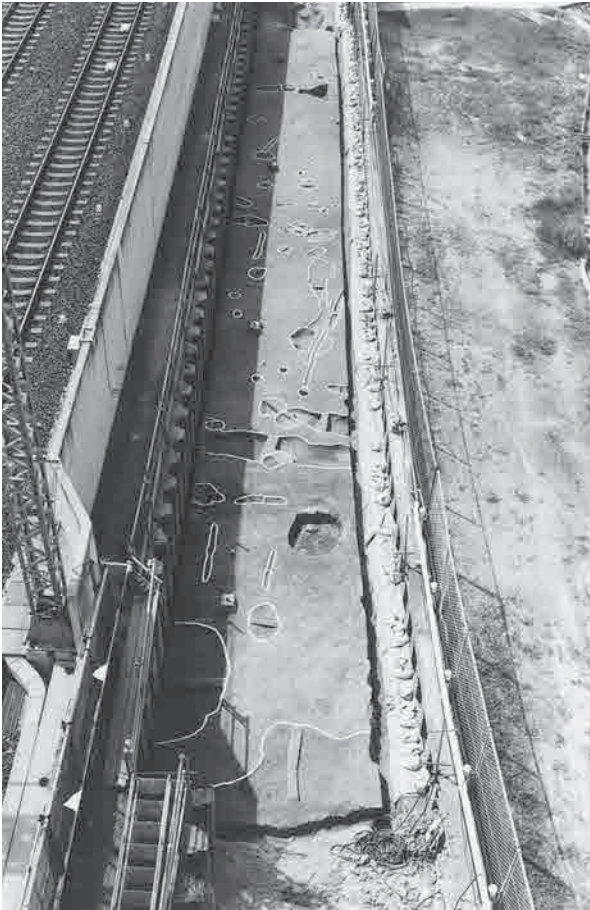


3. 1トレンチ北西壁断面（第3面土坑群断面）
（南東から）

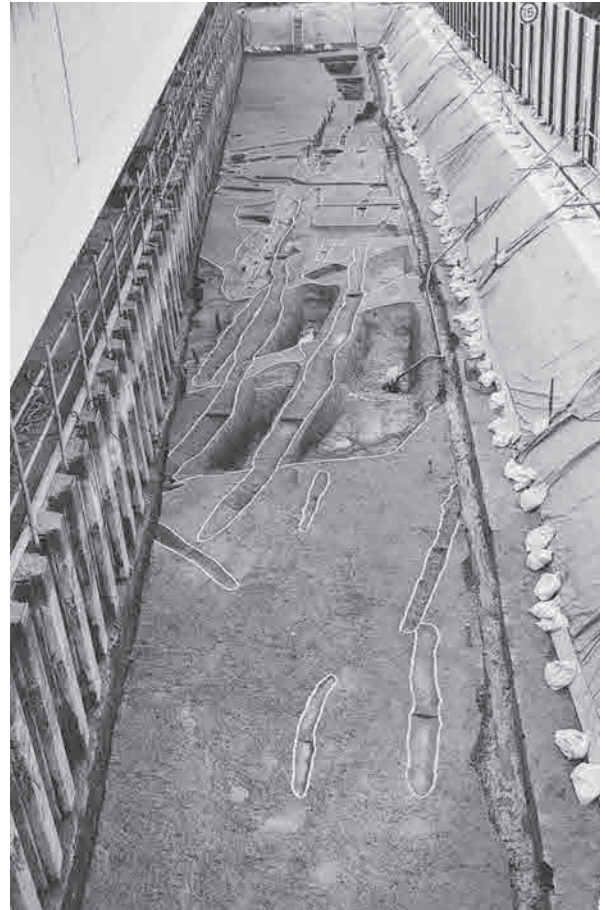


7. 1トレンチ 噴差脈断面（南東から）

図版 14



1. 2 トレンチ第 4 面北東半 (北東から)



3. 3 トレンチ第 4 面新 全景 (北東から)



2. 196 土坑断面 (南東から)



4. 3 トレンチ第 4 面古 浸蝕痕完掘状況 (北東から)



1. 338 土器群 5 出土状況 (左:土器 1、右:土器 2)
(北西から)



2. 326 流路上層遺物 (土器 1) 出土状況
(北から)



3. 3 トレンチ第 4 面古 326 流路完掘状況
(南西から)



4. 3 トレンチ北西壁断面 (南から)

図版 16



1. 337 土器群 4 出土状況 (東から)



2. 337 土器群 4 出土状況 (西から)

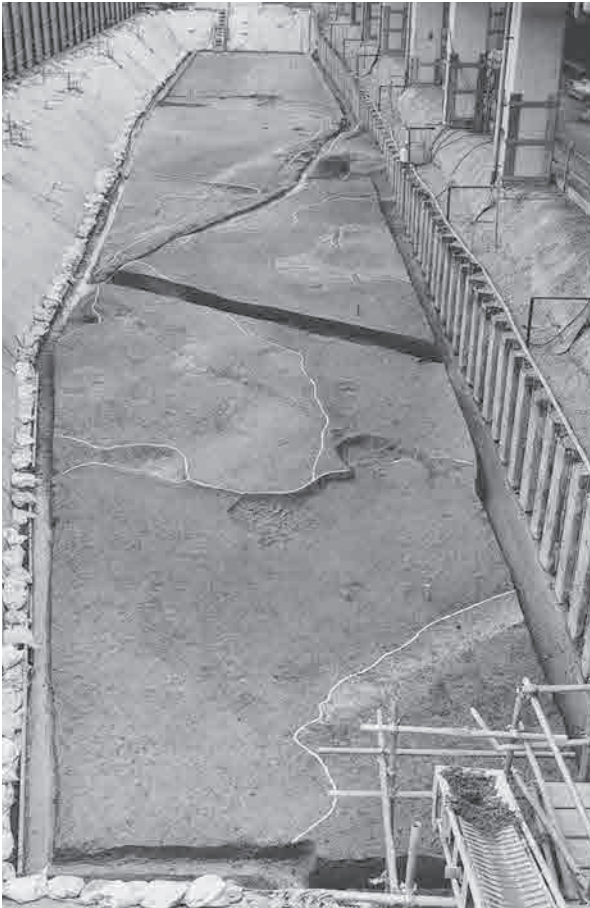


1. 339 土器群 6 出土状況 (南東から)

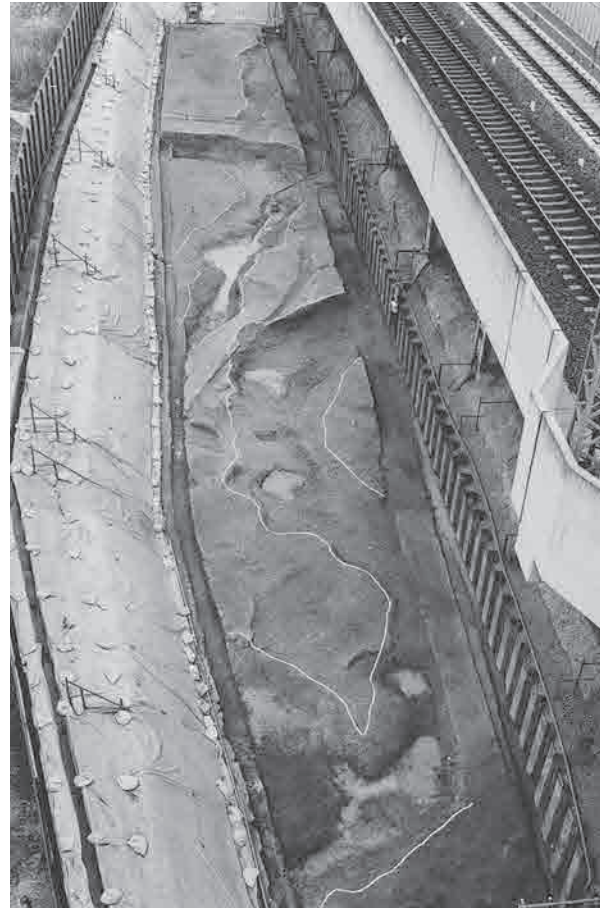


2. 339 土器群 6 出土状況 (北西から)

図版 18



1. 05-1-3 トレンチ第4面 後背湿地検出状況 (南西から)



3. 05-1-3 トレンチ第5面 シュートバー裾部除去後 (南西から)



2. 05-1-3 トレンチ第5面 (南西から)



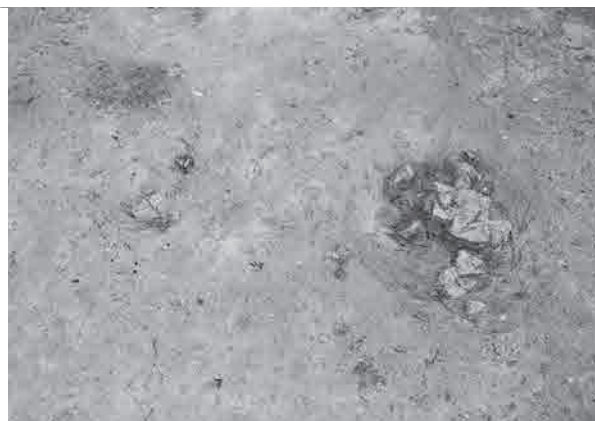
4. 05-1-284 後背湿地2断面 (西から)



5. 05-1-285 後背湿地3 土器1 出土状況 (北東から)



1. 土器1 出土状況（北西から）



3. 土器3（左）・土器4（右）出土状況（北西から）



2. 土器2・5 出土状況（北から）



4. 土器7（手前）・土器8（左上）出土状況（南東から）



5. セクション断面（東から）



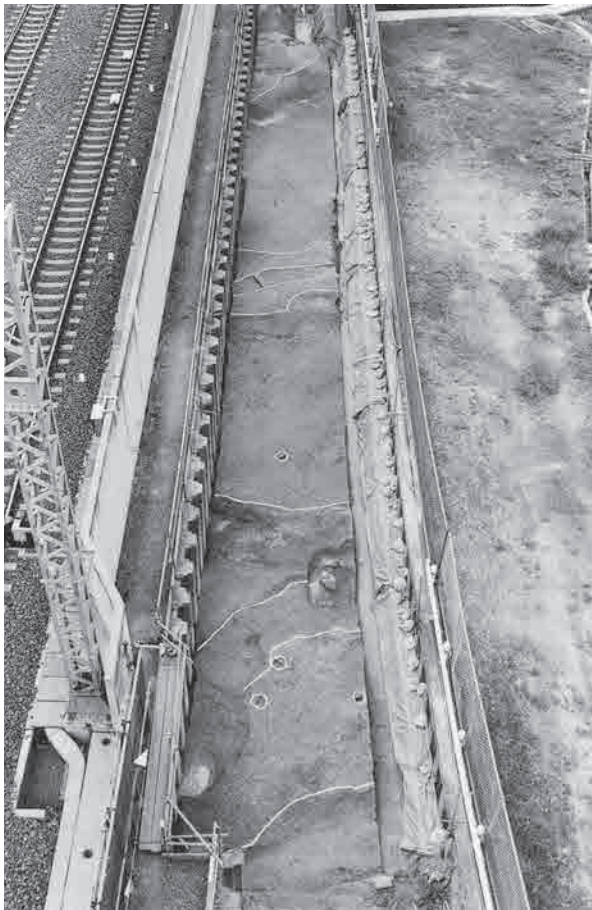
1. 土器群 2 出土状況 (北西から)



2. 土器群 3 出土状況 (南西から)



1. 05-1-3tr. 第5面 05-1-284 後背湿地2 土器1 出土状況 (北から)



2. 2 トレンチ第5面全景 (北東から)



3. 147 流路完掘状況 (南西から)

図版 22



1. 1 トレンチ 101 土器群 1 土器出土状況 (南から)



2. 1 トレンチ 336 土器群 3 土器 1 出土状況 (南から)



3. 1 トレンチ 336 土器群 3 土器 2 出土状況 (北から)



4. 3 トレンチ 第 4 面直下青灰色砂層内土器 1 出土状況 (南から)



1. 2トレンチ 335 土器群 2 土器 1・2 出土状況（南から）



2. 2トレンチ 335 土器群 2 土器 3 出土状況（北東から）

図版 24



1. 1 トレンチ段丘上第 6 面 (北東から)



4. 1 トレンチ北西壁 低位段丘崖 (南東から)



5. 1 トレンチ北西壁 第 4 層内黒色層堆積状況 (南東から)



2. 1 トレンチ北西壁 北東端 (南東から)
下判は低位段丘構成層



6. 1 トレンチ北西壁 第 4 層内黒色層堆積状況 (南東から)



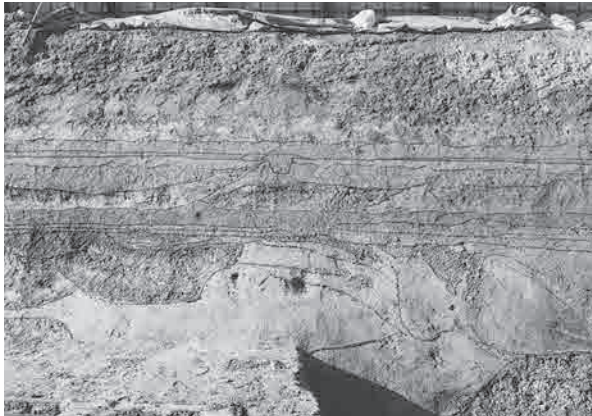
3. 1 トレンチ北西壁 低位段丘崖 (南東から)



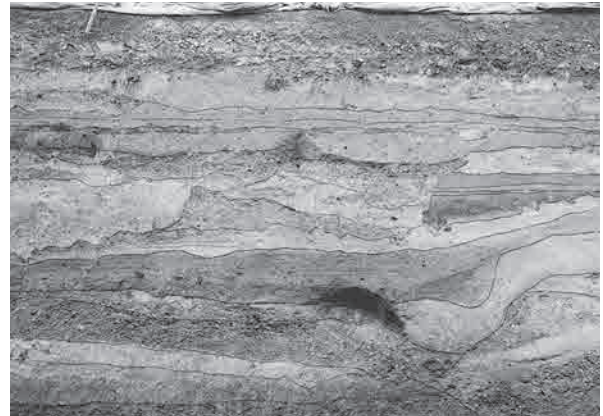
7. 1 トレンチ北西壁 147 流路肩部 (南東から)



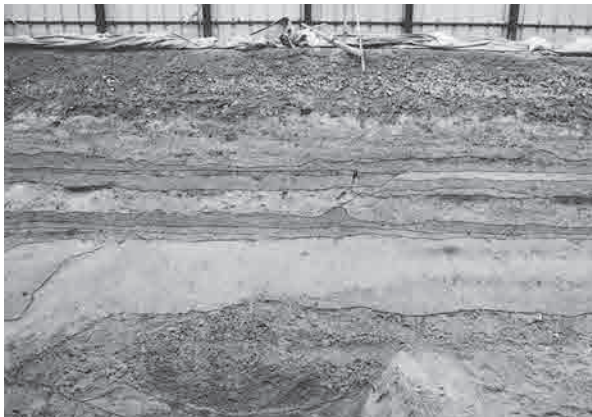
1. 全景 (南西から)



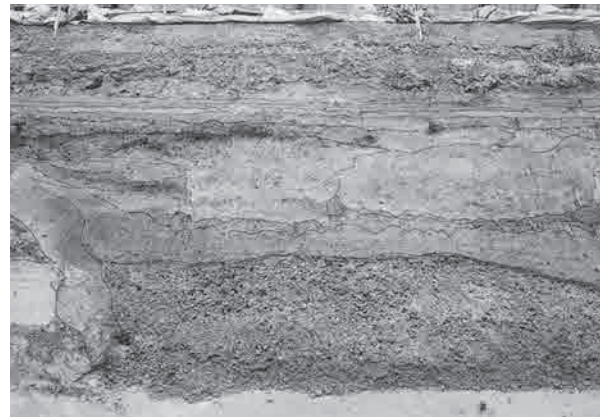
2. 246 流路肩部 (土器群 4・5 出土附近)
(南東から)



4. 326 流路肩部 (南東から)



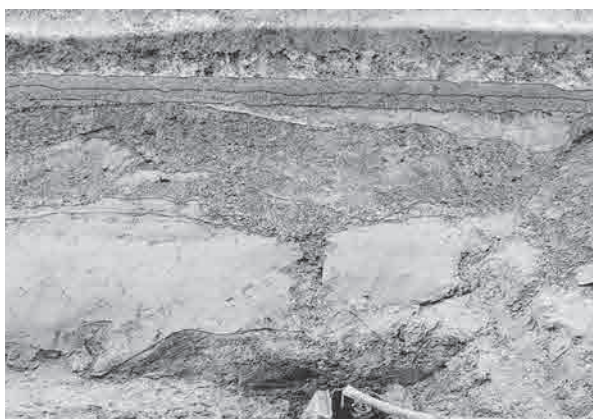
3. 330 流路 (最下の砂礫層) (南東から)



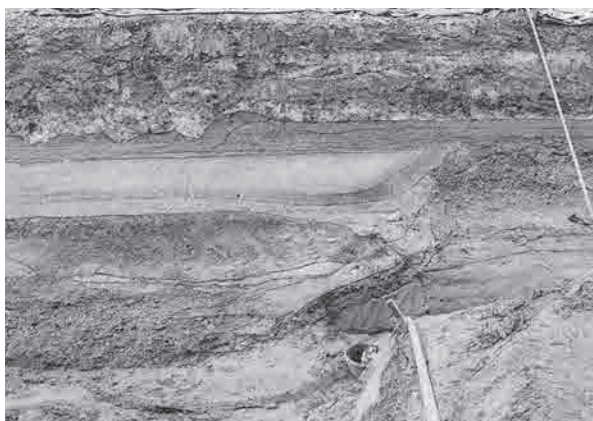
5. 326 流路肩部 (最下の砂礫層は流路下層)
(南東から)



1. 全景（南から）



2. シュートバー 1（中央の砂礫層）（南東から）



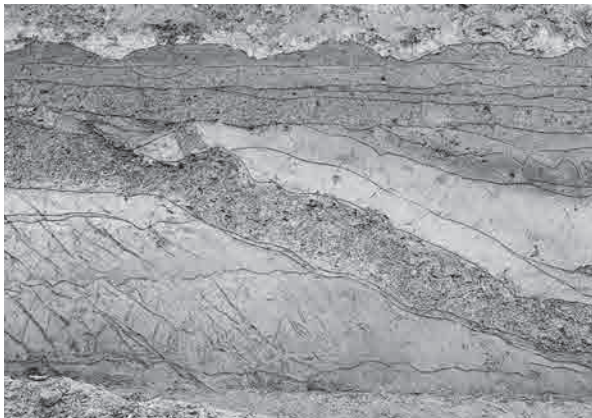
3. 05-1-283 後背湿地 1 肩部（南東から）



4. シュートバー 3（最下層の砂礫層）（南東から）



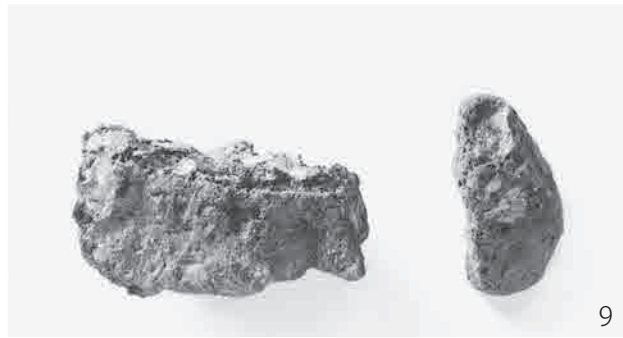
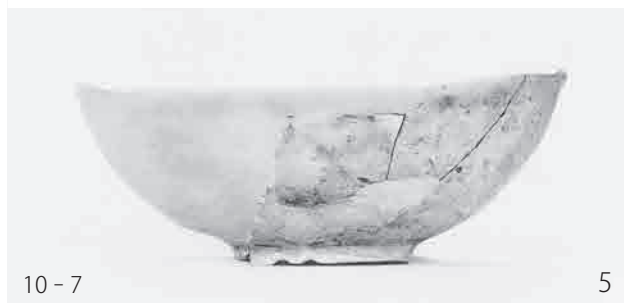
1. 全景 (東から)



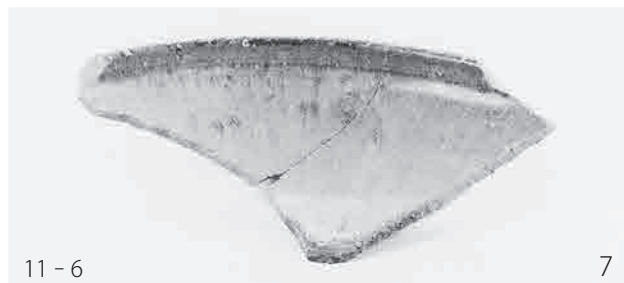
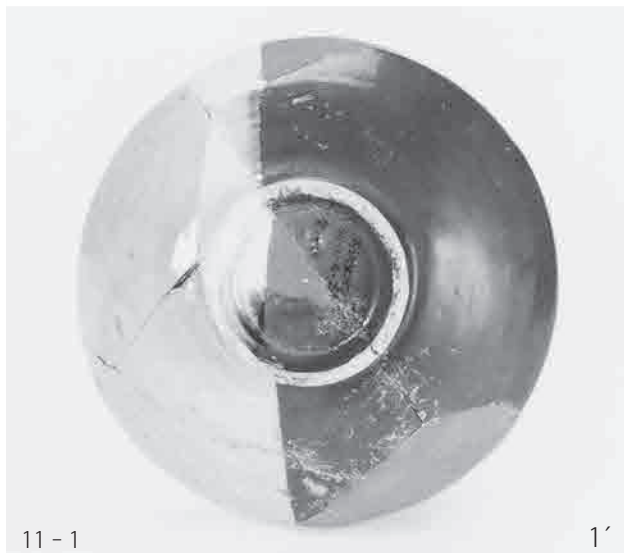
2. 地震痕跡? 斜めのクラック (南東から)



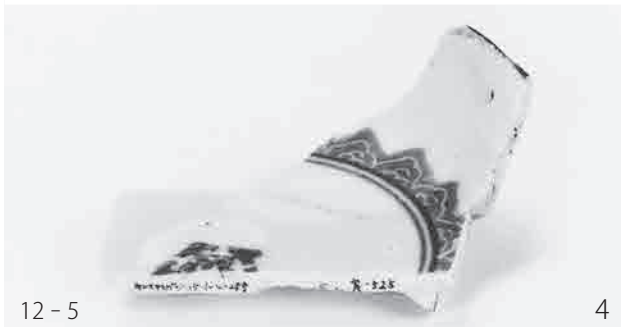
3. 地震痕跡? 断層? (南東から)



1 : 079 土坑、2・8・9 : 108 溝、3・4 : 096 落込、5 : 190 土坑、6 : 123 溝、7 : 090 落込



図版 30



1: 表採、2~8: 第0層



12-12

1



7



12-13

2



7'



12-22

3



12-25

4



13-8

8



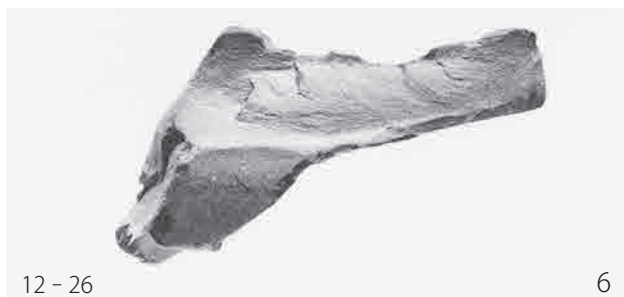
12-24

5



13-9

9



12-26

6



12-26

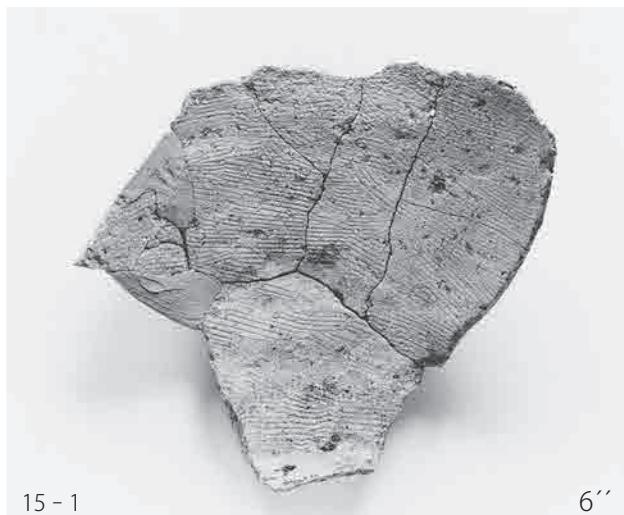
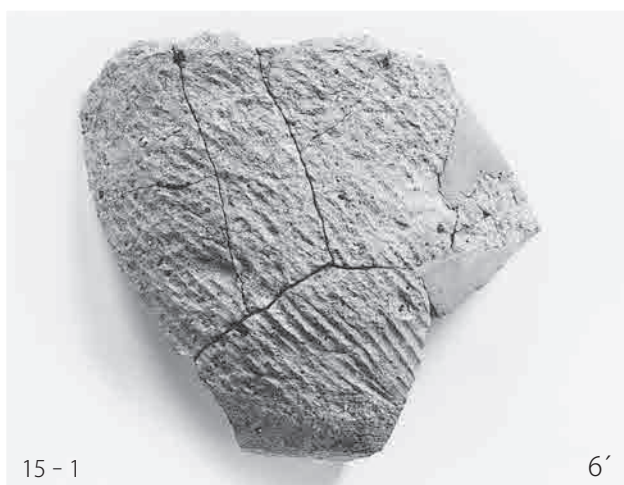
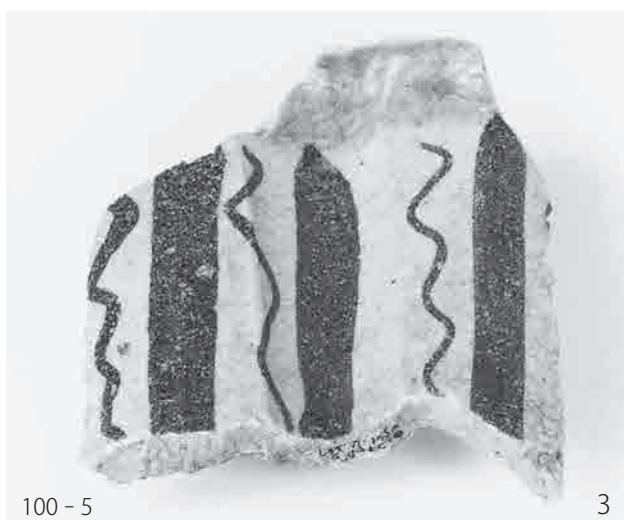
6'

1~6: 第0層、7~9: 第1層

図版 32

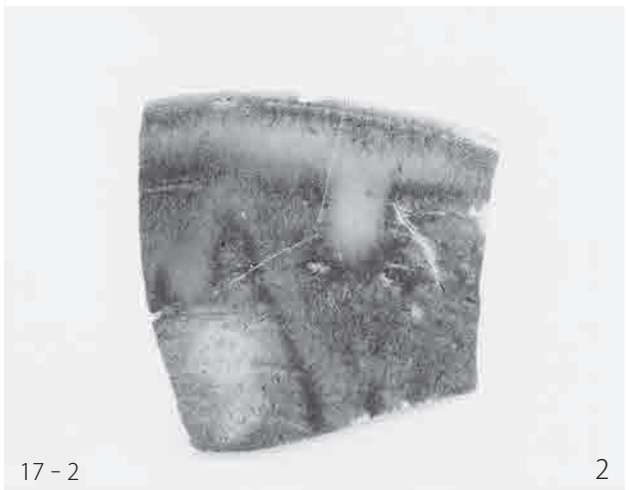


1～4：第1・2層、5～8：4トレンチ第1層相当段丘崖斜面堆積層



4 トレンチ第1層相当段丘崖斜面堆積層

図版 34





17-1 1



20-11

6



2

20-1



20-12

7



3

20-2



20-7

8



4

20-3



20-7

8'



20-13

5



20-14

9



10

1 : 201 井戸、2 ~ 10 : 185 溜井

図版 36



1～3：4 トレンチ段丘崖下第1層、4・5：第3層、6：097 井戸



26-12

1



26-15

4



26-12

1'



26-15

4'



26-13

2



26-16

5



26-13

2'



26-16

5'



27-4

3



27-8

6

図版 38

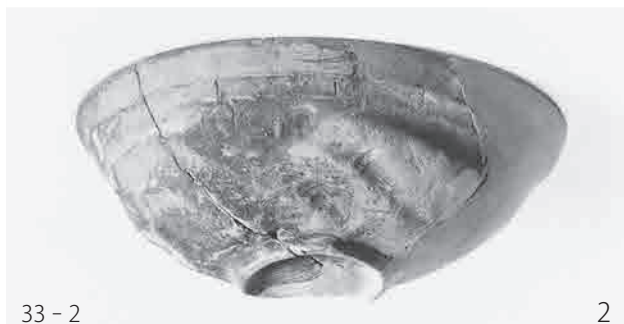




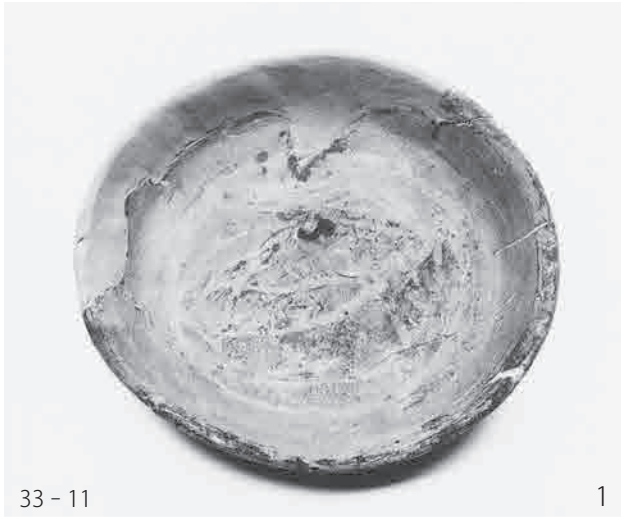
1 ~ 4 : 097 井戸、5 ~ 8 : 104 溝

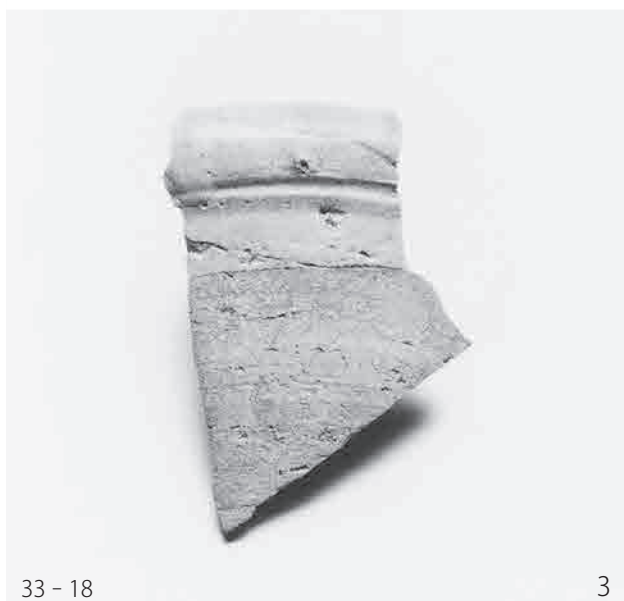
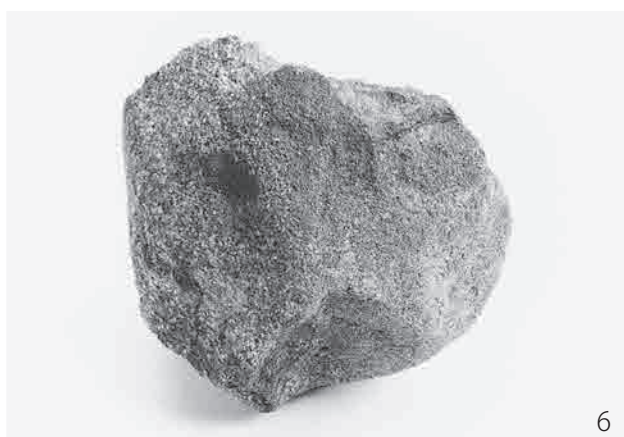
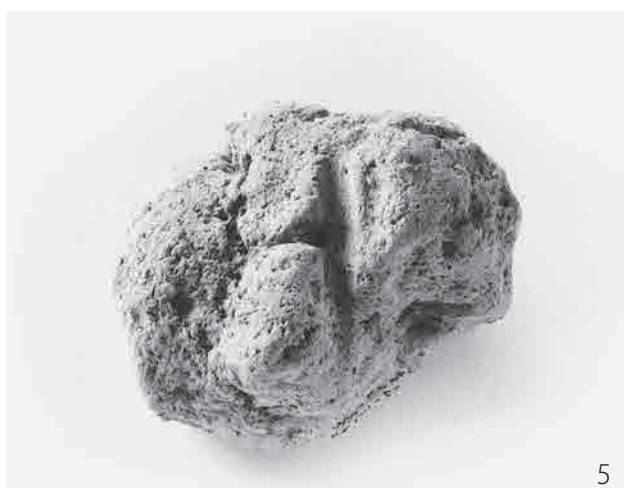
图版 40





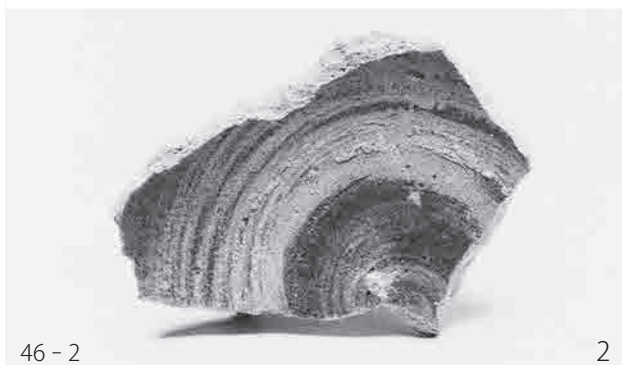
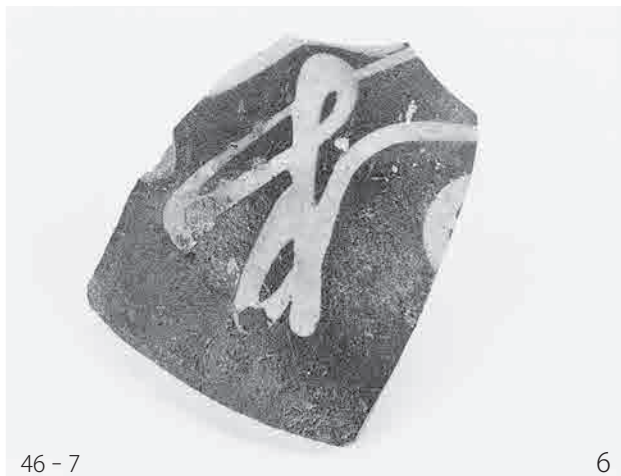
图版 42





1・3～6：104溝、2：098鋤溝、7：第3層

湊遺跡 図版 44



1~5・8: 第0層、6: 第1・2層、7: 第2層新



46-17

1



46-22

4



4'



1'



46-23

5



46-20

2



6



2'



46-21

3



7



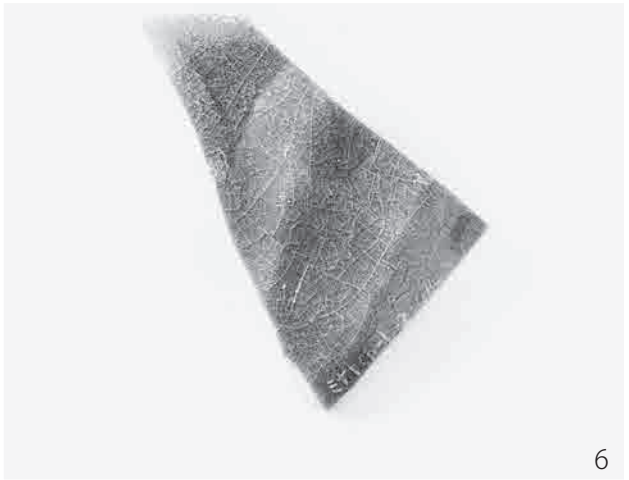
3'

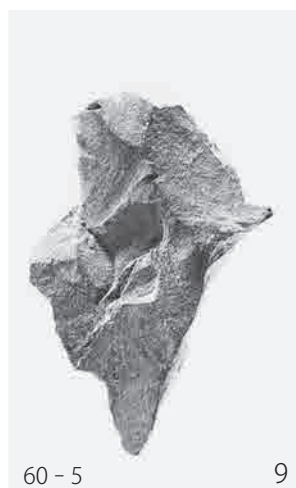
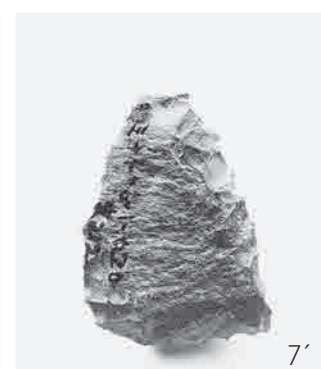


7'

1·4：第0·1層、2·3：第1層、5：第2層古、6·7：第2層新

图版 46





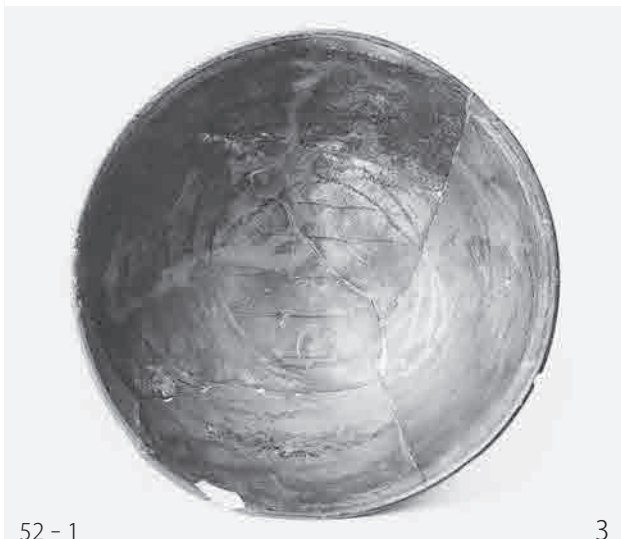
图版 48



1



2



52-1

3



3'



52-5

4



52-2

5



5'

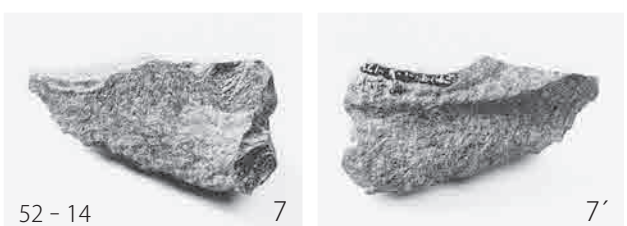


52-3

6



6'



52-14

7

7'

1: 第2層新、2: 271・272土坑、3: 071土坑、4: 158溝、5: 067土坑、6: 第3面土坑群?、7: 287溝



1・2：147 流路、3～9：324 流路上層

図版 50



1 ~ 3 : 324 流路上層、4 ~ 7 : 324 流路下層



68-1

1



68-2

2



1'



2'



1''



2''

土器群 4





1 ~ 5 : 土器群 4、6 : 209 浸蝕痕、7 : 土器群 5

図版 54

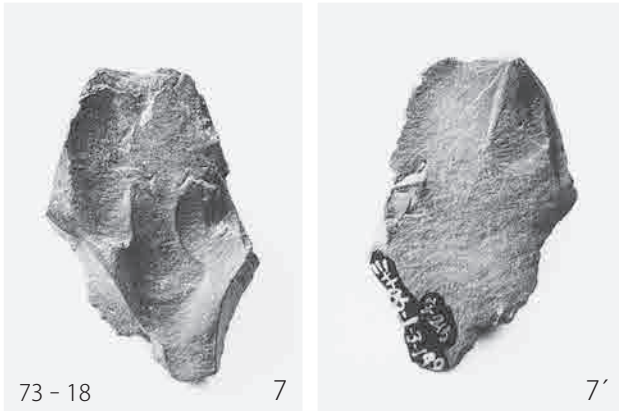
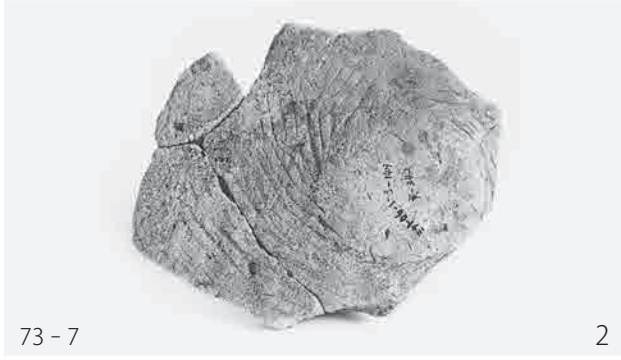
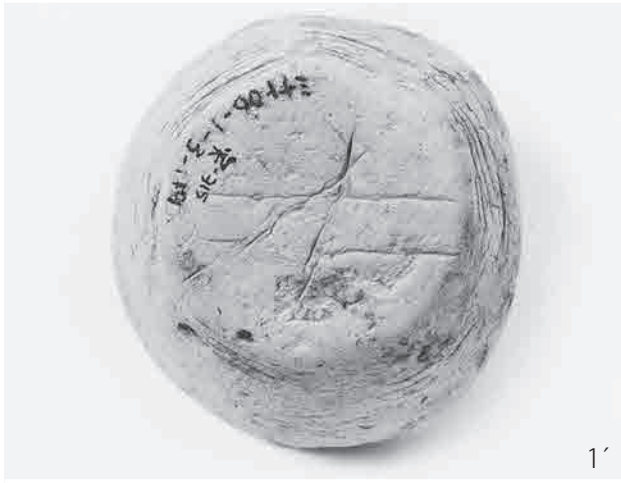


1・2：土器群 5、3～5：326 流路下層



1 : 326 流路上層、2 ~ 5 : 326 流路中層

図版 56





1 ~ 3 : 326 流路中層、4・5 : 土器群 6

图版 58



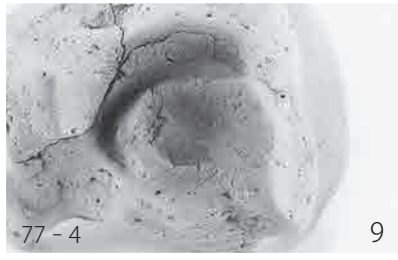
土器群 6

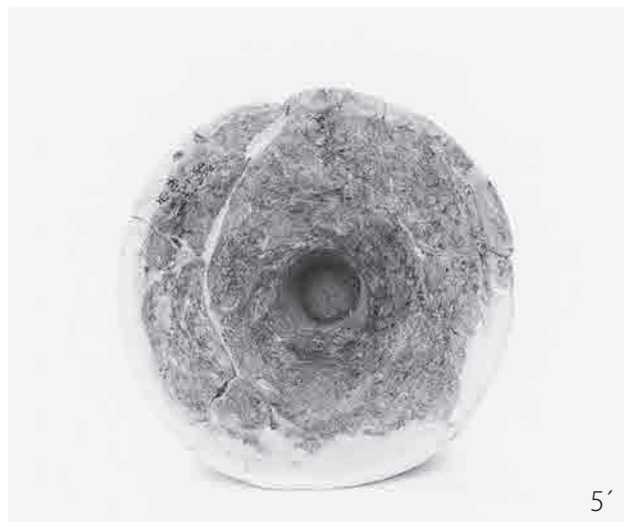


土器群 6



图版 60





05-1-283 後背湿地1内 (1~3:土器群1、4~6:土器群2)

図版 62





図版 64



88-1

1



90-7

5



90-8

6



90-1

2



90-2

3



90-9

7



90-5

4



90-10

8

1 : 05 - 1 - 284 後背湿地 2 内土器 1、2 ~ 8 : 05 - 1 - 285 後背湿地 3 内



92-1

1



93-1

4



92-2

2



93-2

5



92-3

3



93-3

6

1~3: 土器群 1、4~6: 土器群 2

図版 66

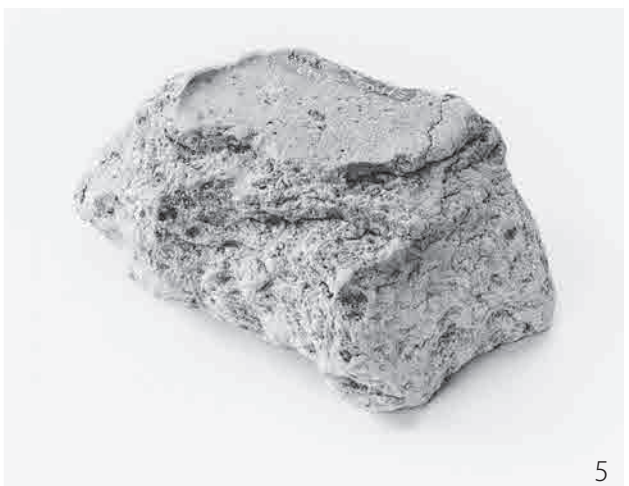


1: 土器群 2、2~4: 土器群 3、5~8: 第 4 層



1～3：第4層、4～8：06-1-3 トレンチ第4面直下青灰色砂層

図版 68



1 : 3 トレンチ第 4 面直下青灰色砂層、2・3 : 330 流路、4 : 326 流路中層、5 : 06 - 1 - 3 トレンチ側溝

報告書抄録

ふりがな	みなといせきほか さん							
書名	湊遺跡他Ⅲ							
副書名	南海本線（泉佐野市）連続立体化事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第170集							
編著者名	三宮昌弘・関本優美子・奈良拓弥							
編集機関	（財）大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号					TEL 072-299-8791	FAX 072-299-8905	
発行年月日	2008年2月29日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うえまちがし 上町東	大阪府 いづみさのし 泉佐野市 あさひまち 旭町	27213	85	34° 24′ 34″	135° 19′ 31″	20050901 ～20060315	1,300 m ²	南海本線 連続立体化 事業に伴う
みなと 湊	大阪府 いづみさのし 泉佐野市 みなと 湊	27213	38	34° 24′ 40″	135° 19′ 40″	20060519 ～20061222	1,477 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
上町東	集落・生産遺跡	中世前期～近世		溝・方形区画溝・井戸 掘立柱建物・耕地区画		瓦器・須恵器・土師器 陶磁器・土錘・蛸壺・鞆羽口		
湊	生産遺跡	弥生時代～近世		溝・段差・貼床 洪水復旧用大型土坑群 粘土採掘土坑群・流路 浸蝕痕・土器群・暗渠		陶磁器・杭・蛸壺・土錘 瓦器椀・須恵器・弥生土器 生駒西麓産庄内式土器 ・製塩土器		未使用 製塩土器 の出土
要 約	<p>上町東遺跡では、段丘上で中世前期の屋敷地に伴うものと考えられる区画溝・井戸を検出した。それらより大量の瓦器の出土がみられたことから、集落存続時期が従来説より短いことがわかった。建物のピットも検出したが、それらは既往の調査とも整合するものであり、中世の集落域の推定が可能となった。</p> <p>湊遺跡では、遺跡北東半を占める微高地が低位段丘であることを初めて確定できた。遺跡範囲内における谷底平野を流れる流路で、未使用と思われるほぼ完形の製塩土器が出土した。さらに別の流路では、使用後の製塩土器のおびただしい破片と生駒西麓産庄内式甕、在地系V様式の共伴資料も得られた。この成果は、古墳時代初頭における和泉地域の土器編年の定点になり得るものである。また、近世の洪水被害復旧、中世の粘土採掘等の大型土坑群も確認した。</p>							

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第170集

湊 遺 跡 他 III

南海本線（泉佐野市）連続立体化事業に伴う発掘調査報告書

発行年月日／ 2008年2月29日

編集・発行／ 財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目1番4号

印刷・製本／ 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番4号